

マイナス一誠とシト
リーさん

超人類DX

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

突然何の脈絡もなく兄と名乗る男が現れてから、少しでもグレた一誠くんと、グレたせいでリアスよりも先に絡む事になったシトリーさんとの日常……そんなお話。

原作一誠のポジションをオரி主に置き換え、ポジションを弾き出された一誠がどうするのか……的なそんな話です。

目次

少しヤサグレ男と優等生ちちゃん	
朝イチの屋上	1
一人焼肉とセンパイ	14
恋人作るの不可能男	33
徐々に掛かる逆補正	
弱腰な弟と、何でも出来る兄	52
被害妄想・一誠と専属教師・ソーナさん	
兄者アアアツ!!	94
ちよつと前と現在	109
不運かもしれないし、幸運かもしれない	128
い	
過負荷(マイナス)一誠とお持ち帰りシ	
トリーさん	151
過負荷で何が悪い	
センパイ以外には基本変わらない	167
過負荷の絶対値とセンパイの本音	186
ソーナさんのマジ	204
一人焼肉からの携帯電話	225
本当の初恋	248
一誠くんの日常	
ちよつぴり克服一誠	264
猫は好き。でも猫の妖怪は知らない	b

悪魔のゲーム……があると聞かされる

トモダチだから助ける。他が何を奪お

だけの一誠くん

——

うが復讐に燃えてようが知らない

『だって興味が無いもん』

——

447

俺はあくまで人間だ。だから悪くな

だから、『私は悪くない。』

い。

——

エクスカリバーと幻実

超越者と無力男（マイナス）

——

不意討ちじゃない『正当防衛』だ。

閑話・安心院さんの安心トーク（チラリ

486

もあるヨ）

——

トモダチ泣かせは罪である

——

一誠くんとトモダチ

三人のマイナス

——

格好いいと思ったから言って何が悪

先に結末

——

い。

——

実はある彼の性癖

——

幼馴染みが普通と何時から錯覚した？

その後の……

——

負完成・マイナス組

1038

マイナス組の日常

泣き虫ゼノヴィアちゃんとの違い

1054

忘れられぬ安堵をどうしても求めて

1079

クレーマー一誠

1092

少しヤサグレ男と優等生ちやん

朝イチの屋上

兄なんて最初は居なかった。

俺は元々一人っ子だった筈。

なのに5歳くらいのある日、俺の前に現れた兄と名乗る誰か。

顔立ちは俺とそっくりで、双子の兄と宣うその誰かは兄弟が居るなんて言っていなかった。両親も自分の子と言っている。

そのある日までそんな存在があるだなんて無かった筈なのに、両親はソイツを俺よりも可愛がって育てた。

俺はソイツが何者で何故兄と名乗っているのかが分からないし、兄とも思えず寧ろ恐怖を感じた。

だって、笑顔浮かべながら突然俺の前に現れて兄ですとか言われてもピンと来る訳無いし、ソイツの言葉を普通に受け入れている両親を見ても不気味以外何も思わない。

ともなれば、当然そいつを警戒してしまうし心を許す訳も無かった……それがいけないかったのだろう。

ある日から……俺は邪魔者となつてしまった。

脱落者扱いされてしまった……。

兄を名乗る奴に、俺が居た筈の居場所を奪われた

何をやつても結果以上の結果を残す奴のせいで、俺は存在価値を消去された。

でも、その事で奴を恨む事は無かつた。

恨んでもどうにもならないし、別に奴が何だろうが関係ない。あるのは只、俺の兄

と名乗らないで欲しい……。

取つて付けた様な笑顔で気安く近づかないで欲しい。

只の……他人でしか無い貴様なんか。

普通に起床し、普通に朝飯は食わず、あの日まで両親と慕っていた親に挨拶をせず逃げ
げる様にして学校に行く。

アレが現れてから、俺は出来損ないの弟というポジションに両親から当てはめられて
いる。

不自然な程に何でも出来る兄と自称するあの男と比べられて来れば、両親の目は自然
とそうなるし、自覚も一応する。

だから俺は高校すらも、去年から共学校となるという事を余り知られなく、男子枠にて定員割れの恩恵を受けて大した努力も無しに駒王学園という高校に運良く入り込めた。

本当は中学卒業と共に家を飛び出し、何処か地方の料理屋か旅館かなんかに住み込みで働こうかと思つてたのだが、当時中学の担任だった先生がヤケに親身に高校選びをしてくれ、言つても無い筈なのに兄と名乗るあの男が俺の決めていた進路を両親にリークしてくれたせいで、両親からは世間体がどうのこうのと言われたという経緯の下、今俺はこうやって自分で似合わないと思う制服を身に付けて高校に通つてゐる。

定員割れで高校に入ったせいなのと、中学卒業と共に家を飛び出る計画だった俺に当然学力なんてものは無く成績はビリツケツ。

今こうして2学年に在籍出来てる自分に対して奇跡としか思えないくらいだ。

まあ、進級出来たのはとある理由があるからなんだけど。

「ふう……」

さつさと家を出て学校に来たせいで、登校時間までまだ1時間以上もある。

到着し、門を潜り、のそのそと俺が居ても意味が無い教室を目指して歩いているが他

に登校している生徒は殆ど居ない。

あの男が現れてからというもの、小学校から俺はこんな感じの生活パターンとなっている。

両親とで囲む食卓なんてものは5歳のあの日から崩壊し、それまでの俺の居場所は既に兄と名乗るあの男のもの。

恐らく今朝も両親と楽しくお食事でもしてるんだろう、何時もの様に胡散臭い笑みを貼り付けた状態で。

そう思うと、逃げるようにして特にやる事も無い癖に学校に来てこうやって屋上で昏れる自分が酷く情けなく思えて仕方ない。

本当なら俺があの場所に居る筈なのに、本当なら兄なんて居る筈がないのに……。

「はぁ……」

逃げてる自分が嫌になる。

あの男が現れてから楽しいと思える事が何一つ無くなっていた俺は、何度したか分からない溜め息を吐く

この溜め息と表情のせいで、兄と比べると根暗だという評価を知らない他人から頂い

ている訳だが、全く以て否定が出来ないのが余計悲しい。

お陰さまで友達なんて呼べる存在も居ない……というより俺が他人に懐疑的なせいだからというのが理由だったりする。

血の繋がった両親ですら今では信じられなくなってるのだ……所詮は他人である連中を信じるなんて俺は無理なのだ。

だから俺には普通の人みたいにおはようと気軽に挨拶を交わすような存在はないし、何でも出来る自称兄貴が居るので、劣等者の弟認識されてる俺に近付こうとする者も居ない。

極少数の変人以外は。

「やっぱり此処に居ましたか」

「む……」

やるせない気持ちで屋上からの風景をぼんやり眺めている俺の背後から聞こえる声に、俺は一瞬だけ身体を硬直させながら振り返る。

先程述べたが、自称兄貴と名乗る男……では無くて何故か俺に関わろうとする極少数の変人。

最初は置かれてる立場柄、仕方なく俺に接触したのかと思ってたのだが、本人は違うと否定する変な奴……尤もその違うというのも本当かは知らないけど。

兎に角その変な奴の内の一人である俺と同じこの学園の生徒である上に優等生バリのバリの肩書きである生徒会長の称号を持つセンパイ。

黒髪と眼鏡という見た通りな感じの雰囲気を持つ人、支取蒼那って人だった。

「どっ……」

「おはようございます、一誠くん」

向こうから接触される事自体にあまり慣れてないせいで気の効いた挨拶すら言えなく、無愛想な声で首だけを傾けて会釈する俺に、嫌な顔一つせず挨拶をしてくれるセンパイに何だかむず痒さを感じてしまう。

フツと笑みを向けてきたセンパイから逃げるようにして背を向けた俺は、手摺に寄り掛かってまた意味もなく見飽きた風景を眺めると、センパイもその隣に来て同じく風景を眺める。

「……」

会話は無い。

元々見た目も性別も違うし、親しいとは言えない微妙な関係なのだから当たり前だ。何より俺は他人との会話経験が無さすぎて何を言つて良いのかよく分からないのだから尚更だ。

とは言え、2・3言のジョークなら何とかなるが、それでもやはり普通の友達同士の会話は解らない。

「奴は居ないんすか？」

「奴？ 奴とは誰の事でしようか？」

「ほら、ヤケに喧嘩腰で突っ掛かってくる男子の……」

「ああ、匙ですか？ いませんよ」

他人は信じられない。

だけど、話をするくらいなら何も思わないし、いくら会話経験が無いとはいってもこの程度ならギリギリ何とかなる。

無言に耐えられなくなって思わず話を振ってみれば、センパイはフツーに応じてくれ

るし、将来就職するに当たって必要なトークスキルはこの人を練習台にするのが丁度良い。

「匙に何か用でも？」

「いや、嫌われてるみたいですからね。正直居なくてホツとしてます」

センパイの取り巻きの一人でこの学校の数少ない同学年の男子の話は割りと盛り上がる。

今センパイが言った匙という男子は、どうも俺が気に入らんのか顔を見る度に嫌そうな顔をする。

理由は……まあ何となく分かるっていうか、この人にあると思ってる。

何せこの人、基準が俺にはよくわからないけど、一般人から見たら美人と言えるでしょう顔してるしね。

しかも真面目で俺みたいな劣等拗らせて半グレ気取っちゃってる奴にもこうやって話しかけてくれるんだ。

そりゃあ奴……ああ、サジくんだったかが面白くないと思うのも仕方ないと思うよ。

「なんか申し訳ないですね。

何時も匙には言っているつもりなのですが……」

「いや別に……。」

「アンタみたいなのが俺みたいな馬鹿&見た目アウトロー気取りの奴とこうしてるのを見てるのが心配なんでしょうよ」

「む……またそうやって……。」

「自分を卑下するのはやめて欲しいのですが……」

「殆ど事実ですから。」

『兄』と比べれば何の取り柄もない搾りカス同然だし」

何でも人並み以上にこなし、常に周りには誰かが居る。

今の俺と比べたらどちらが良いかだなんぞ答えるまでもない。

だからついつい自虐的になってしまっただが、どうもこのセンパイはそういうネガティブな事は嫌いらしい。

自分の事じゃ無いのに何故かムツとしてる。

「確かに兵藤君は優秀な人なのかもしれません。」

よく評判を耳にしますから」

「……」

名字が被るという理由で、何時からか俺を名前で呼ぶようになったセンパイが敢えて風景を見て俺をまつすぐ見つめる。

「それに比べて、一誠くんはネガティブですぐ自分を卑下して、何かに付けて人を避けようとする臆病者でちよつとエツチなのかもしれない」

「………………。おい、ちよつと待て。何で俺の話に——っ」

何で知らんけど途中で俺の事なってるし、しかも随分と酷い事を真顔で言われてる気がした俺は、校庭で走り込みしている女子達から思わずセンパイに顔を向けると、俺の目の前にはセンパイの顔が至近距離で映っていた。

「けど、それでも私は貴方に興味があります」

「………………。ア、ハイ」

近い……何か良いこと言われた気がしたけど全然聞こえん……あ、眼鏡で気付かなかつたけど睫毛が長いや……………。

「なので私の前で自分を卑下するのは止めてください。」

それじゃあ、私が貴方に勉強を教えた意味がありませんからね」

「ア、ハイ」

「ん、よろしい」

「ア、ハイ」

よく解らないけど返事だけはしとこう。

何を言われたのか全然聞こえんかったけど返事だけはしとこうと、俺は変な声で何度も首を縦に振りながら返事をする。とセンパイは微笑んだ。

何でなのかは解らないけど、機嫌が直ってくれたのならそれで良いに越したことは無いのは確かな事だった。

「あ、チャイムが鳴りましたね。」

どうも一誠くんとお話すると時間が経つのが早く感じますね……フッフ」

「ア、ハイ」

「む……。さつきからそれしか言わないのは何故ですか？」

「ア、ハイ」

「……」

チャイムの音が鳴り終わると同時に、バシン！ と背中に張り手を貰ったお陰で、俺は意識が戻った。

そして戻った頃には何故かセンパイはちよつと怒った様子でさつきと行ってしまった。

「最後は結構勇気を出したのに……」

とか何とか言ってたのが聞こえたが、サツパリ分からなかった。

兵藤一誠

趣味・一人焼き肉か一人人生ゲーム

好きなもの・特に無し

嫌いなもの……5歳の誕生日の日に突然現れた双子の兄と名乗る男。

備考……神器無しの高校生&ちよつとコミュ障

一人焼肉とセンパイ

俺に友達はない。

知り合いはあれど友と呼べる者はない。

だからそんな俺には放課後誰かと一緒に帰るとか、遊びに行くとかの経験が全く無い。

夕飯も5歳のあの時から一人で食べる様にしてる。

なので俺が食う飯は大概一人で外といった感じだった。

そして本日の夕飯は秘密裏にやってるバイト代をコツコツ貯めた自分へのご褒美という事で、ちと豪勢なものとなる。

「いらつしやいませ〜！ 何名様ですか？」

「一人です」

駅前通りにある焼肉屋で独り焼肉だ。

「……へ？」

「なにか？」

「ハッ!? あ、い、いえ……こ、こちらへどうぞ……」

店内に入り、出てきた案内役の店員さんに人数を教えた瞬間、顔を硬直させていた。しかし独りだろうが百人だろうが来れば皆お客なので、店員さんは何とか笑顔になりながら俺をテーブルへと案内する。

「ご注文お決まりでしたらお呼びください……」

テーブルに通され、業務用語を告げてそそくさと去って行った店員さんを横目に、店内に香る炭焼きの匂いに腹を鳴らしながらメニュー表を広げる。

フフフ、今日はガッツリ食うぞ……。

「ご注文お決まりでしょうか？」

「えー特上霜降カルビ3人前と、特上霜降コース2人前……。

あとクリームソーダ……取り敢えず以上で」

「かしこまりました。それでは真ん中失礼します」

そう言つてテーブルの真ん中に炭火の達磨状の網を置く店員さんはまた去つていく。どうやらさつきよりはマシな対応と顔になつてゐるなあ……とか考えながらポーツとすること10分、頼んだ肉がやつて来た。

「ご注文は以上ですね？ それではごゆっくりどうぞ！」

「ども……ふくく」

この瞬間が実に好きだ。

誰にも邪魔されず、誰にも指図されず、自分のペースで焼いて食べるこの一時がね……。

「まずは……」

前掛けを装着し、小皿にタレを注ぎ、割り箸を手元に置く……これで最後の準備が完了だ。

小さなめのトングを使ってカルビ一枚を掴まんで網の真ん中に乗せる。ジューウウウ……という音と共に肉の焼ける良い香りが鼻腔を旋回するのに気分を良くしながらひっくり返すと、丁度良い色の焼き目が付いている。

「5……4……3……2……1……0」

もう片方を小さくカウントダウンしながら焼けるのを待ちつつ0と同時に割り箸で肉を掴む。

表裏共に焦げは無く、思わず頬を緩ませながら肉をタレに絡めた直後に口へと運ぶ。

「んふ……うーむ……ふふ……」

口いっぱい広がる肉の味は美味なり。

多分今の俺は宇宙1幸せなのでは無かろうかとすら思える余韻に浸る。

これが独り焼肉の醍醐味である。

「お次は……」

侘しい？ そんなことは全く思わない。

寧ろ焼肉はギャーギャーと騒ぎながら食うもんで無い神聖な食事とすら思うのだ。

だから俺は独りで良い……周りの目なんて全く気にしないしね。

とまあ、お次の肉を焼く合間にクリームソーダをチビチビ飲む俺だったが、神聖な食事は中断させられる。

「……………。よく独りで来れますね……」

「へ？」

二枚目の肉を口に入れようとした瞬間の出来事だった。

あんまりにも肉に意識を向けていたせいで目の前に人が立ってた事に気付かなかつた俺は、肉を食べようとしていた口を開けたまんま斜め下に向けていた視線を上に向けると、そこに居たのはちよつと呆れ顔になつて支取センパイだった。

「まあ、一誠くんの性格だからこそですかね……」

「な、何で……？」

「外から貴方が独りで幸せそうに食べてるのが見えたからですよ」

ボタボタと絡めたタレが肉の端から落ちてテーブルを汚しているのに気が付かずに、ただただ此処に現れたセンパイに驚いている俺の質問に答えながら、さも当たり前のように座ったセンパイは、許可も無く俺のクリームソーダを飲んで居る。

「あ、それ飲み掛け……」

別に深い意味は無いのだが、こういう飲み掛けのものを異性の人に飲まれるのは余程の仲じゃないと無理とか聞いた事があったので、既に飲んじやってて遅いが気を効かせるつもりで教えた。

「(ピクツ) ……。別に気にしません」

俺の言葉にセンパイが一瞬硬直した様に見えた。

が、すぐに何て事無いと言わんばかりのポーカーフェイスで飲み続けている。

……。情報が古いのかな、嫌そうな顔になるのかと思ってたんだけどな……。あ、肉が

冷めてしまった……まあ美味いけどさ。

「すいません……少し走ってたので喉が乾いてました」

「いやそりゃ構いませんケド……え、走ってたって何ですか？」

学校の制服姿だし、運動をしたとは思えないんだがとか思いながらよくよくセンパイの顔を見てみると、本当に走ってたのか頬が少し赤かった。

運動って見た目じゃないのに不思議だ。

「生徒会の仕事が早く終わったので、一誠さんと帰ろうかなと思って探してたのですが、もう帰ったと聞いて追いつこうと走ってただけです」

と、思ってたらどうやら俺が原因らしい。

意味がちよつとよくわからんけど。

「一々俺なんか探してたんですか？」

別にわざわざ探さんでも他の人と帰れば良いじゃないですか。

例えばホラ、匙君でしたっけ？ 多分彼なら俺の数千倍気が効くと思いますよ」

「なんでそこで匙が？」

彼は確かに友人ではありませんけど……」

「あ、そうですか……」

真面目にキョトンとしてしてるセンパイに俺は心の中で匙君に同情したのと同時に、先は長そうだなと思った。

てか、匙君を友人と認識してるなら、単なる知り合い程度の俺より優先すべきだろうに……。

「そういう訳で私も一緒に食べます。

勿論、一誠くんの奢りで」

「はっ!! ちよ、ちよっと待っててくださいよ、俺そんな金持っていないんですけど！ そもそも今日の焼肉だつて数カ月前からコツコツと貯金して……」

「そうですか、なら良いですよ。

そしたらこのお店を出たら少し付き合ってください」

「そ、それなら大丈夫ですけど……」

よ、良かった……この焼肉屋って割高だから、考えを変えてくれて助かった……。
何か付き合わされる羽目になったし、その理由も納得出来ないけど財布の中身が全消
えしないだけマシだと思って、俺は黙って領くのだった。

「ふふ……良かった。」

それなら早く食べてください……」

「え、センパイ食べないの？」

ガン見されると食いづらいんだけど……。

「一誠くんが今食べようとしてるのを分けてくれるんですか？ それなら頂きますけど

……」

「いや、ダメ……これはダメです。」

こればかりは俺のだからダメっす」

こればかりは渡す事ができぬ。

頑張った自分へのご褒美だけはな……。

そう断りの言葉を告げた俺は、言われた通りさつさと味わう事も無く食べきるのであった。

さつきまで感じてた神聖さもクソも無く。

そんなわけで腹に詰め込むだけの食事を終わらせた俺は、言われた通りセンパイの用事に付き合う事にしたのだが……。

「は？ さ、散歩?!」

「はい」

付き合うのは単なる散歩だった。

ホントに言葉の通り、ただ歩くだけだった。

「その為に俺は焼肉を味わえなかったのか……」

「あ……その、その事に関しては本当にすいません……」

こんな程度なら待たせてまで味わつときや良かったと後悔する俺を見て、罪悪感でも感じたのか謝ってくるセンパイ。

「あ……いや、別に食いたきやまた金貯めれば良いんで気にしないでください。

寧ろ何時までも嫌味つぽくてすいません」

しかしながら俺の方はセンパイにデカイ貸しがあるし、今言つた通り食いたければまた貯めれば良い。

大体、何か奢らされるなんて事が無いのだから寧ろ喜ぶべきなのだ。

だから俺は気にするなと言うと、センパイはホツとした顔をしてから少しだけ笑つた。

「ありがとう一誠くん、我儘に付き合ってくれて……」

「いや、別に……」

お礼言われる様な事をした覚えが無いのに、笑つてありがとうと言つてきたセンパイ

に、またむず痒い気持ちなってしまった俺は顔を逸らすと、気持ちを紛らわすつもりで匙君の話に切り替える。

「その我儘つてのを匙君に言つてやれば喜んでくれると思いますよ」

「え、また匙？」

「この前から何故か匙の話ばかりするのは何ででしょうか？」

「いやだつてホラ……やつぱり良いです」

理由を言つてしまおうと思つたが、そのキョトンとするの止めてやれよ。

言いづらいし、何か意味もなく匙くんが可哀想に思えてくるんだよ………あ？

「え、なんすか？」

今度匙くんと会つたら応援の言葉の一つでも送ろう……そう決心した矢先だ。

俺の右手を突然センパイが掴んできたきたのだ。

「えつと……これはどういう意味？」

「知らないのですか？ 誰かとお散歩するときはどうして手を繋ぐんです」

掴まれた意図が分からず頭にハテナを浮かべる俺に、センパイは何故か真顔で説明してくれた。

既に辺りが薄暗くなっており、センパイの頬が少し紅いのは果たして気のせいなのか。

だとすれば何で紅いのか。

そもそも誰かと散歩する時は手を繋がなくてはならんなんて初耳だったり……俺には分からんことだらけだった。

しかし、俺はこれまで他人と並んで歩く事が無かったし、手を繋ぐのは常識なのかもしれないと納得すると、そのまま言われるがままに、俺より小さいセンパイの手を繋いで歩き出すのだった。

「誰かと歩く時は手を繋ぐって、小学生くらいの話かと思ってたんですがね……」

世の中の常識はコロコロと変わるもんなんだな……」

「そうです。」

でも、繋ぐのは私以外ダメですからね？」

「は？ 何ですか?？」

「とにかくダメなんです。良いですね?」

「は……はあ……」

どうにも騙されてる気がしてきたけど、知る手立ても無いので頷く他無い。

というか今気付いたけど、こうして誰かと手を繋ぐなんて5歳の誕生日前の両親と以来だし、他人に触れられてるのにあんまり嫌な気分にならないな。

おかしいな、あの兄と名乗る奴に触れられたらゾツとするのに……うーん。

「どうかしました?」

「いや、気持ち悪いとか言われて初対面の連中にボコボコにされるとか以外に、こうして誰かに普通に触れるのは無かったから新鮮な気分……」

分からんな……どう考えても答えが見つからん……。

センパイが俺の様子を不思議に思っただけで聞いてくるのに答えながら考えてもこの妙な現象の正体は不明だった……あ? 何だ、急にセンパイが握ってくる手に力が……

あ、痛い……!」

「なんですかそれ……初対面の人にボコボコにされたとは？」

あ、あれ、何か怒ってる？

「ちよつと待つてセンパイ。痛いっす、手が痛い」

「あ、すいません……」。

一誠くんがボコボコにされたと聞いてつい……」

痛い主張した俺にハツとした顔になって握る手を緩めてくれて少しホツとするのと同時に、割りとその人は握力あるなあと思ひ知る。

というか、何でセンパイが俺が昔やられた事に関して怒ったのか良くわからん。センパイがやられた訳じゃ無いのに……」。

「昔の事ですよ。」

俺つてほら、見た目も中身も根暗だから……はは」

「だからって……」

「今こうして五体満足で生きてますから大丈夫ですよ。」

「ていうか、何でセンパイが一々怒ってるんですか？ 只の他人事じゃないすか」

「む……」

只の他人がやられた事に目くじら立てたってしょうがないのになあ——いで?!
いで?!?!? また手が痛い!

「怒っては駄目なんですか？ 親しい人が傷付けられたと聞いて怒っては……」

「い、いだい！ センパイってばちよいタンマ！」

「つ、潰れるから！ 俺の手がグチャグチャになる!?!」

割りとはじゃない、マジで握力が強いという新事実を身を以て知りながらタップすると、漸くセンパイは手を緩めてくれた。

ああ、ズキズキするし、緩めてくれても手は離してくれないのね……痛い。

「一誠くんにとって、私は単なる他人なんですか？」

「くう……ええ？」

「手をこうして繋いでも、他人ですか？」

そう少し悲しそうな顔でズキズキと痛む俺の手を空いていた手も使って包み込む様にして握るセンパイに俺は何か初めて変な罪悪感を感じてしまう。

「繋いでもって、誰かと並んで散歩の時は必ず繋ぐんじゃあ……」

「嘘に決まってるでしょう？ 手を繋ぐのはその人に心を許せると思ってるから初めて繋ぐんです……」

「じゃあ何で俺なんかと……」

「まだ分からないんですか？ 私は貴方にそれほどに心を許してるという事ですよ……
この鈍感」

……………え？

「は、え？ そ、そうなの？」

思わずため口で頬を染めてるセンパイを見ると、センパイは黙って頷く。

な、なんてこった……そうなのか、俺、心許されてたのか……。
う、うむ……だけどな。

「あの……なんていうか、どうリアクションして良いのか良くわからないんですけど……。」

「すいません、俺はその……。」

俺は別にセンパイは知り合いとしか思ってなかったらピンと来ないし、そもそも他人をどうしても信じる事が出来ないと言おうとした俺に、センパイは言うなとばかりに俺の手を握る両手に力を……今度は痛みは無い……何処か懐かしさを感じる暖かさを以て握る。

「わかってます……。」

「一誠くんが対人恐怖症だつてのはわかってます……。」

「だからこそ、私はその枠から外れる様に努力します……。」

「な、何でそこまで……。」

「それは……ふふ……一誠くんに認めて貰った時に言います……。」

何時も見せるのとは違つて見える笑顔でそう言ったセンパイは、話は此処までとばかりに俺の手を引いて歩き出す。

分からない……何で他人なのにそこまで心を許せるだなんて言えるのか……俺には理解出来なかつた。

「というか、去年のクリスマスにも同じ事言ったのに忘れちゃったんですか？」

「いや、一応覚えてますけど、あの時は俺が空気悪くしたからてつきり和ませる為かと……」

「和ませるだけであんな事言いませんよ……もう」

恋人作るの不可能男

休日というものが俺は大嫌いだ。

居づらい家に居なくてはならないし、遊びに行くような友人も無い。

故に、ただただ居心地の悪さを感じる家に留まるのが嫌な俺は、仕方なしにフラフラと夜の22時前からいまで街を徘徊する。

まあ、一番時間潰せるのはシャワー付きのネットカフェとかだったり、一人カラオケとかだったり……………。

「2、3、4、5…………つと…………。」

ふむ…………『結婚する。ルーレットを回し、出た目の数×2000\$』か」

金が無い場合の独り人生ゲームとかね。

フツ…………この前のご褒美独り焼肉に散財すぎたね…………今日は朝の5時から現在12時まで無限ループでやり続けてるぜ。

「必ず結婚しないとならんのが、このゲームの欠点だな……」

強制イベントマスに止まる度にこんなボヤキをしているが、別に怪しいとかは思わない。

というか、そんな感情は小学生の時点で消滅しているので問題無い。

「6……12000\$ゲッツ……ふっ」

車形状の駒荷は6つ程の穴が空いている。

その上に棒人間をもつと適当にした先端の丸い青い棒があるのだが、それがプレイヤーである。

で、結婚イベントの駒を踏むとその人形が増え、ピンク色の駒を車に取り付けなければならぬ。

ひとつの車に夫婦で乗り、人生を歩むという意味合いがあるんだろうが、ハッキリ言っただけの通り俺個人はこの結婚イベントは任意にしてほしい。

半分以上人生ゲームの駒に感情移入している身であるので、結婚とか必要性が無いのだ。

だって、結婚すれば生活費とか単純計算で倍になるわ、プライバシーも無くなるわ……百害あって一利無しとしか思えん。

よく学校行く時に仲良く男女が手を繋いで歩く様を見るけど、アレの何処が楽しいのかわかりやしない。

……まあ、人生ゲームの場合は出た目の数×2000\$手に入るから我慢するけどさ……。

「1、2、3……。『家を買う、5000\$』か……。

フツ、安いな」

まあ、こうして独りで静かに人生ゲーム出きるだけマシかな。

運良く今日は両親は二人でどっか行ったみたいだし、あの男も居ないさ——。

「——！」

「……!?!」

「…………」

と、思ってルーレットを回そうとした瞬間だった。

下の階から突然、2階にある俺の部屋にうるさい声二つが聞こえ、手を止めて怪訝な顔になる。

ても、その煩い声二つが両親のものでは無く聞いた事の無い声だからだ。

一瞬だけ『泥棒?』とか思ってみたが、だったらこんなギャーギャー騒ぐ訳無いかと考えを改める。

だったら誰なのか……聞こえる声の方向からリビングに入っていた声が少し気になる俺は、一応万が一に備えて部屋に置きっぱなしの、一度も使っていない金属バットを持って下に行く。

(強盗とかだったら………死んだ俺)

喧嘩の類いがそれなりにしか出来ない俺にもしかしたらの強盗相手に立ち回るなんて不可能だし盗みたければ勝手にしてくれとも思う。

だがそれだと、帰ってきた両親に大騒ぎされた挙げ句『放置するくらいなら追い返せ!!』とか何とか言われる。

それを考えたら死ぬ覚悟で特攻し、翌日の新聞の端にでも載った方がマシだ……とま

あ、自分に言い聞かせながらバットを強く握り締め、何時でも殴り倒せる様に構えながら抜き足差し足でリビングに続くドアの前に到着。

『おお、スゲーでかいTVじゃん！』

『これなら大迫力でこのDVDが見れるな！』

『幾らすんだよこんなの？ 誠八の家って結構金持ちだよなあ〜』

『そう、か？』

「……………」

開幕直後に殴り倒そうと準備していた俺は、直ぐに回れ右して自分の部屋に戻ろうとする。

いや…………うん…………なんだ…………アレだよな。

強盗じゃねーかって独りで不安がってたオチがコレなんてね。

ていうか、こっちの方が現実味あったわ。

『見ろ、Gカップお祭りワツシヨイ！ の新シリーズだぜ！』

『え、本当に此処で見るのか？』

『当たり前だろう？ なんだ、誠八ちゃんはこっちの『ロリロリ〇学生の大運動会』の方が良かったか？』

『そうじゃねえよ……どれでも良いわそんなもん』

しかもこの前買ったとか言ってたTVで何か見ようとしてる感じだし……チツ、外に行くか。

そう独りの静寂さを失った家から逃げようと部屋に戻った俺は、セール品で固めた服に身を包み、そんな入ってない財布を持ってソロソロりと階段を降りるが……。

「あ？ 一誠？」

「ツツ!？」

バレた……階段を降りて玄関に向かう所でリビングから出ていた兄と名乗る男と

……。

「フツ……なんだコソコソと——つて毎回そうかお前は？」

「……………」

俺のクローンじゃないかと思うくらいに似てる顔で、奴がどんな意味でしたのかは俺には分からないが、少なくとも俺を小馬鹿にしてるように感じてしまう笑みを見せて来るこの男に俺はイラツとしてしまう。

だけど此処で怒った所で意味なんて無いし、1秒でも早くコイツを視界から消し去りたいので、ガン無視を決め込んで玄関に向かい、靴を履く。

「何処か行くのか？ 友達なんて居ないだろうに何処へ行くのやら……。」

まあ、良いか……あんま父さんと母さんに心配させんなよ？ 一誠……。」

「……………」

ぶっ殺してやりたい。

今の俺の気持ちはそれしか無かった。

今すぐにも顔をグチャグチャにしてやりたい。

バラバラに解体して下水道に捨ててやりたい……出来もしない事を脳内妄想で展開させながら俺は黙って家を飛び出した。

独りになれる所を探して。

まあ、金が無いから行ける場所は限定されちゃうけどね……そう例えば。

「……………はぁ」

近所の公園とかね。

残金が3000円しか無いからネットカフェは不可能なので、こうして公園のブランコに座ってボーッとするしか出来ないのさ……情けないぜ。

「ママー あのお兄ちゃん独りでブランコに乗ってるー！」

「シッ！ 見ちゃ駄目！」

「……………ククッ」

知らない子供と母親に変な目で見られる始末だし……ハア何で奴は家に変な連中を連れてくるかねえ。

そこから逃げた俺はもつと情けないし、ははは……もう笑うしかねえや。

「どうすつかなあ……」

癪だが、奴の言った通り俺には友達なんて存在が無い。

その理由も、人を信じる事が出来ない臆病な性格しているという自業自得な所が殆どなもんだから言い返す事も出来ない。

財布の中身は300円だし、他に暇を潰せる場所も無い。

だから奴のトモダチとやらが消えるまでこうして童心にでも返ってブランコで遊んでるしか道は無い。

ますます自分が情けなく思えながら、ブランコを漕ごうとした俺だが……何だろうな、良いタイミングというか都合が良いというか……とにかく童心に返ろうとした俺の目の前に、よく話をするあの人が現れた。

「こんにちはわー誠くん」

「……………え？ あ、ああ……………どうも……………」

漕ごうとしたブランコを慌てて定位置に戻して俺は頭を下げる。

まさか休日の昼にこの人とかち合うだなんて思っても無かったからだ。しかも公園で。

「独り……………ですか？」

「え、まあ……………」

制服じゃないセンパイを見ると妙に新鮮な気分させる。

そのせいかは知らないけど、何時もより会話が何処と無くぎこち無い気がするのは多分気のせいでは無い。

「センパイは何で此処に？」

「ちよつとお買い物に出掛けようと歩いてたら、子供にしては大きいと思う人がブランコに独りで乗ってるのを見たので……………」

「ああ、なるほど……」

よくセンパイに目撃されるな俺は……。

そんな事を思いつつ、フトこの前の事を思い出す。

この人がわざわざ俺に親切にする理由を知った……というべきあの日の事を。

「一誠くんはどうして此処に？」

「いや……兄がオトモダチを連れて家に来ましてね……。

で、まあ居づらかったからこうして時間でも潰そうかなと……」

「なるほど……」

普段の態度のせいで、俺が奴を避けている事を何となく察してるのだろう。

今俺が言った一言で納得したのか、センパイは軽く頷いている。

「という事は、今は暇なんですね？」

「え……？ あ……まあ……金も300円しかないですし……。

ブランコをやる以外する事は無い、かな……ははは……やばい、自分で言って

「情けなくなってきました」

家に誰か居るから逃げたところとして口にする、改めて自分の度胸の無さを自覚出来るのがしようもなく情けなくて笑けてくる。

恐らく夕方まで家には帰れないのは分かっているので、センパイの質問に対して素直に答えると、何やらセンパイが考え込む素振りを見せる。

「買い物とやらは良いのだろう——」

「えっと……それならその……少し付き合って貰えませんか？」

「か？」

「え……？」

「え、センパイの買い物に、ですか？」

「はい」

「………何で？」

確かに暇だけど、だからと言って何でセンパイの買物に俺をわざわざ付き合わせるんだか分からん。

いやだって、確かセンパイってトモダチ多かったと記憶してるし、その中から……特に匙君とか誘えば超喜ぶと思うし、第一俺なんぞ行つたつて白けるだけだぞ、確実に……。

けど、センパイはそんな俺の考えを知らずにまたあの日の様に手を取ると、ポーツとしていた俺を立たせて公園の外に出ようと引つ張る。

「え、あのちよつと？」

「300円しか持つてなくて、昼間から公園で死んだ魚みたいな目をしてブランコ漕いでる一誠くんなんか見たく無いんですよ。」

その様子から見て、お昼だってまだ食べてないのでしょう？」

引つ張られる形で公園から連れ出され、少し戸惑う俺にセンパイがキツパリと言う。

確かにセンパイの言う通り何も食べてないけど、300円あれば昼くらいは凌げるからそんな心配は必要——

「付き合ってくれたらお昼ご馳走します。

それでどうですか？」

「え……」

無い——と思つたが、奢ってくれる話になつた途端俺の中で何か揺らぐ。

いやだつて、何を買うのか知らないけどそれに付き合つたら昼飯だろ？　ヘタなバイトより楽な臨時収入だと考えると揺らいでしまうわ。

ぶつちやけ朝飯すら食つてないから、今凄く腹減つとるし、誰かに奢つて貰うとか初めてだし。

うむ……。

「はい、分かりました……それなら付き合いますよ。

ええ、喜んでね」

お得感を取るしかない。

俺は二つ返事でセンパイの買い物に付き合う事に了承の返事をする、それまでグイグイと俺の手を掴んで前を歩いてきたセンパイがピタリと止まり、クルリと此方に振り

向く。

「お昼をご馳走しないと付き合ってくれないという所に、少し複雑な気持ちがあります
が……ふふ……ありがとうございます」

「いえ。で、何を買うんです？」

メリツト無ければ他人には付いて行こうと決してしまい俺のしようもない性格を
知っても尚こんな態度だから、何か変に罪悪感が湧いてくるのを抑えて何を買うのかと
問うと、センパイはフフフと笑いながら首を横に振る。

「さあ？ わかりません」

「は？ え、わかりませんって……」

「駅前に行つて、二人で歩きながら決めますから……」

「はあ？」

……………。何を言ってるんだこの人は？

だつてさつきは買い物につて……。

「ああ、いや元々買い物のもりで外に出たつもりじゃありませんから……」

「じゃあ何でさつきは……」

「アレは嘘です。本当は一誠くんの家遊びに行こうとしただけです」

「は!?!」

妙に可愛らしい……のか、俺には判断基準が分からないので何とも言えないけど、笑
顔見せながら本当の事らしい話をするセンパイに対して今度こそ俺は驚いた。

だって、あの兄と名乗る男を訪ねてくるとかならわかるけど、何で俺なのが分からないからだ。

「一誠くんは私をまだ只の知り合いとしか思っていないでしょうけど、私は違いますから……」

「とうとう?」

「友達以上……ですかね」

センパイが何を言いたいのかが分からずに聞いていくと、センパイは少し頬を染めな

がら友達以上と俺に対する認識を宣言する。

「友達以上……って何ですか？ 親友ってこと？」

人の気持ちも友達という概念も知らない俺には友達以上という存在がどんなものなのか皆目検討が付かない。

この前の事と、今言った親友にしても、そもそも友人と親友の違いすら分からないのでどちらも同じにしか見えない。

故に、ただただ頭に？を量産させて聞く俺を、センパイはちよつと呆れたといった様子でハアとため息を吐いている。

「親友とは別系統です。」

知りたかったから自分で調べなさい……………鈍感

「な……………そこまで言つといて言わねえとか酷いんですけど……………」

「鈍い貴方も大概ですよ。」

「こっちはドキドキしながら言ったのに……………」

少し拗ねた様子で Pruitt とするセンパイに、初めて俺は『今だけ餓鬼っぽいなこの人』とか失礼な事を思いながら、友達以上の意味を考えるが、全く検討が付かない。親友じゃないと今言われたし、他にカテゴリーも思い浮かばないのだ……いくら考えても答えが見つかる訳が無いのは必然だった。

「その話は後にして、早く行きましょう。」

ちなみに、一誠くんと此処で会わなかったら、本当に家まで行ってました」

「わ、わからない。何で俺にそこまで……」

「この前言いましたよね？ 私は貴方と仲良く……いやそれ以上の関係になりたいんです。」

鈍い貴方に気付いて貰うにはこうでもしないと……」

「は、はあ……やっぱりわからない……どう見ても匙君の方が良い奴なのに何故陰気な俺なんだ……」

また俺の手を握りながら前を歩くセンパイがますます分らない。

俺は何度も自問自答しても見つからない答えにもやもやしつつ、何処と無く楽しそうにセンパイに付き合うのだった。

「あれは一誠？ それにあの子はソーナ・シトリーじゃないか……。

何で手なんか繋いで……」

このやり取りを遠くから見られる事に気付かず、そしてこの日から俺の立ち位置が、単なるボツチから少しズレ始める事に……。

徐々に掛かる逆補正

弱腰な弟と、何でも出来る兄

今更だけど、この学園は女子が圧倒的に多い。

俺等二学年の代から共学となったという事が主な理由なのだが、そのせいで男子は身が狭い思いをするという事はそんなに無い。

というのも、この学校の男子はアグレッシブさが半端無いのだ……主に思春期的な意味で。

まあ、クールを気取るつもりは無いけど、俺にはその思春期的な行動に理解は出来ない。い。

だって、何であんなコソコソしてまで覗きだの何だのとする必要があるのか……只の余計な労働にしか見えん。

金にもならんしね。

で、まあそんな訳でこの学校はとにかく女子が多く、周囲の男子曰くレベルが高いとのことだ。

言われてみたら確かにそうなのかもしれないし、特に騒がれてるのは3年の女子二人

と1年の女子だったか……名前は知らんけど。

「ん？」

何時もの通り朝早くに家を出て登校し、時間ギリギリまで屋上で意味無く黄昏れる俺はフトここから見える正門が何やら人が集まって騒がしいということに気付き、見てみる。

こう見えて目は割りと良いと自負してるので、此処からでも正門の様子はよく見える。

正門前で何やら男子が集団で騒いでおり、相変わらず同い年には思えないテンションの高さだなあとかぼんやり考えながら見ていると、その男子達が騒ぐ理由が何と無くわかってしまった。

「ああ、なるほどね……あの赤髪の外人とその御伴っぽい人達か」

前に教室で寝ようとした時小耳に挟んだ話。

駒王学園二大お姉さまと癒しマスコットどうのこうのという話だ。

どうやら男子が凄い勢いで騒ぎ立ててる理由は、その女子達が正門から堂々とした足取りで登校してきたかららしい。

赤髪の人を真ん中に、半歩程後ろに黒髪の人と白髪の割りと小さい人が歩いてるのが俺からでも見える。

これは最早毎朝の恒例行事みたいなもので、ああして男子が騒ぐ度に生徒会の人達が止めに入ってるらしく、現に今は匙くんがてんやわんやしてるのが見える。

……残念なことに効果がまるで無いようだけど。

「何で三人の女子の人が来るだけで騒げるのかなあ……」

うおおおっグレモリー先輩ばんざーい！ だとか、小猫ちゃんヒヤツハー！ 的な声が聞こえる訳だが、俺には何故あそこまで騒げるのかが良く分からない。

いやまあ、確かにあの姫島だっけ？ の先輩以外は珍しい髪の色しとるし、分かんないけど美人なのかもしれない。

でもそれなら何故他の女子にはあそこまでテンションを上げないのか。

いやだって、その他の女子の人達だって美人じゃないのか？ とか疑問に思うんだよね、あの三人が現れる度にギャーギャー騒ぐ男子……というか良く見たら混ざってる女

子も。

本当に疑問で仕方ない。

何故ああまで騒げるのか………つて、こんなんだから俺は駄目なんだろうな。他人を信用出来ないからその気持ち分からないから。

「またあそこで騒いでますね………まったく」

「うおっ………!？」

少し理解すれば、マシな性格になれるのかなとボンヤリ考えながら三人組と騒ぐ連中を眺めていたせいで、いきなり隣から声が聞こえた俺はビックリしてしまう。

「な、何だセンパイか。ビックリした……」

「随分とあの三人を熱心に見てましたからね。」

「私みたいな地味女に気付けないのも仕方無いですよ」

「え？」

ビックリした影響でちょっと血圧が上がっているのを自覚しながら手摺に身体を預

けて下を見ていた俺と同じ体制をしていた支取センパイは、何か少し変な様子な気がした。

何だろう……何時もよりツンツンしてる？ というのか。

「えつと……？」

「何ですか？ あの三人に比べたら地味で口うるさいだけの女に何か？」

「え……あ……すいません……」

やつぱりそうだ、ちよつと怒ってるよこの人。

思わず謝ったけど、おかしいな……センパイから貰った個人授業の課題はちゃんとやったし、この通り遅刻もしてないのに……あれ？

「いえ……ごめんなさい。」

今のは私が悪いです……一誠くんは何も悪くないです……」

「いや、でも……何か気に触る真似をしたなら謝ります……すいません」

「違うんです。一誠くんが熱心にあの三人を見てたので、少しヤキモチを……」

「はっ。」

つつけんどんかと思えば今度はちよつとシユンとして謝る支取センパイは、どうにも俺がキヤーキヤー言われっぱなしの三人を見てた事が気に入らなかつたらしい……。

見ちゃ駄目だったのか……。

「はあ……いやほら、何であの三人だけはアイドルグループ宜しくに騒がれるのか考えてたもので……」

「それが解らないと?」

「ええ、確かにあの人達つて目立つ髪とか姿をしてるとは思いますけど、他の人達だつて騒がれるだけの姿してるんだから、ああも大袈裟に騒ぐ理由は無いんじゃないかと個人的に……」

まだ下ではキヤーキヤーキヤーと近くで聞いたら確実に耳を塞ぐレベルの音量で騒いでいるのが聞こえる中、俺は入学してからずっと疑問に感じていた事をセンパイに話した。

するとセンパイは何故か知らないけどちよつと呆れ顔になる。

「あれ、俺今変な事言いました？」

「いえ……何とか本当に変わってますよね、一誠くんって」

「ええつと……それは何ですか、褒めてるんすか？」

「まあ一応……」

肯定する割りには言葉を濁して居るセンパイの態度に俺は微妙な気分だ。

別に普通に褒められても何も思わないけど、どうしてか最近ではセンパイが俺に対する評価はどうかとかが気になってる。

なので、この微妙な態度で褒めてると言われても変にモヤモヤするというか……。

「一誠くんってどんな子供でしたのか気になる所です」

「どんなんて……兄に対してコンプレックス抱き過ぎて中途半端に半グレ気取る様になった——ただのアホ？」

5歳のあの時から、俺はひたすら周囲に対して無駄に怯えていた。

それまで見ていたTVも、読んでいた絵本の何もかも信じられずに見たり読まなくなって12年近く経つ。

自分の家の部屋には寝る為の布団と勉強机と少しのボードゲームとかしか無いお陰で、現在の総理大臣が誰なのかぶつちやけ曖昧だったりする。

だから多分、センパイが疑問に思ってる『モノへの判断基準のズレ』はこういう生き方をしてしまったからだと思う。

だから周りが『あの人は美人だ』と騒いでも俺はピンと来ないし、最近あの兄と名乗る男とよくツルんでる男子二人がよく持つてくる青年雑誌を読んでも多分何にも思えない。読んだこと無いけど。

それは、一般的に考えるとやはり異常な事らしく……もしかしたら俺は精神に病気で抱えているのかもしれない。

「まあ、あの兄があんな感じで俺がこんななのは確かに変ですよね……あはは」

その事に関しては自覚はある。

けど、こればかりは生きなり沸いて出た様に現れた兄と名乗るあの男が原因だとか言えないし、それを誰かに言っても信じて貰える訳が無いので言えずに溜め込むしかない。

だからこうやって笑って誤魔化すしか俺には……出来ないんだ。

「変では無いですよ。」

仮に変だとしても、私は多分そこら辺に惹かれたんだと思いますし」

「ああ、そつすか……」

そんなのに真顔でこんな事を言うこの人も中々変だと俺は思うけどな。

何だよな、惹かれたって……何もしてないよ俺は。」

「アンタって、ホント変な人だ」

「失礼ですね。これでも真面目な生徒会長のもりですよ？」

「は、それが本当なら、ある程度俺のキャラを知った上で近付く真似なんてしないでしように」

何でこの人って俺に此処まで優しくするんだろ。」

この前言われた事をずっと考えても、まだ分からないや。」

しかも、優しくされてる自覚があるくせに俺はまだこの人を信じられないとか……ホント嫌になるよ自分が。」

ハア……。

「ん…………？」

「どうしまし——あれは……兵藤君ですか？」

「……。みたいですわね」

解らないだらけで頭がパンクしそうになるのを感じながら、気分転換のつもりでまだ
煩い下界に視線を落とすと、例の三人組があつた男と何かを話しているのが見える。

「………………。リアス、随分と彼と親しいみたいね……」

「え？」

何を話しているのかは俺には聞こえないし、奴が誰と関わりを持つとうが関係無かつた
ので視線を移そうとしたその時、隣で一緒になって見ていたセンパイが何やら腑に落ち
ない顔であつた三人の内の誰かの名前……多分赤髪の人の名前を口にしてた。

何処か親しそうな感じで。

「あの赤髪の人と親しいんですか？」

「え……………？ あ……………まあ……………」

何と無くのつもりで聞いてみると、センパイは何処か言葉を濁す感じで頷くのが少し気になったが……………その心の引つ掛かりは直ぐに別の出来事によって保留となる。

「あ？ なんだ……………此方を見てる、のか？」

「みたいですね。」

兵藤君が私か一誠くん——もしくは二人ともを指差して何かリアス達に言ってるみたいですが……………ふむ」

あの兄を名乗る男と三人組が下から屋上に並んで立って見下ろしている俺とセンパイを見ているのだ。

眼鏡掛けてるくせにやけに目の良いセンパイ曰く、俺とセンパイのどっちかを指差して。

あんまり気分が良くないな。

「………………。『お・と・う・と・と・せ・い・と・か・い・ち・よ・う・が・み・て・ま・す・よ』……………と言ってるみたいですね」

「はっ。」

突然一言一言を切る様に言葉を並べてるセンパイに俺はビツクリする。

「いえ、ちよつとした読唇術を…………」

「あ、アンタすげえな」

そんなことまで出来るなんて知らなかった。どこまでハイスペックなんだよこの人は。

ただただ歡心するしかないよ本当——あ。

「やばい」

「え、何がって…………ちよ、ちよつと何で私の後ろに？」

「だ、だって下の連中が全員コツチみてる…………さ、匙くんも」

気付いたら下の奴等が全員俺とセンパイを変な目で見ていたので咄嗟に身を隠すつもりでセンパイを盾にするように後ろに隠れる。

確かに俺と生徒会長が並んで屋上から見てたなんて変過ぎる組み合わせは彼等にとってアンバランスとしか思えないだろう。

俺自身がそう感じてるしな。

特に匙くんとかはエライ目して俺を睨んでるようにしか見えないし……あの男もリークしといて何でか知らんけど面白く無きそうな顔だし。

今の此処は家より居心地が悪い。

「見られてるからつてなんですか？ 別に私は好きで一誠くんの傍に居るだけですし、彼等に文句言われる筋合いなんて……」

「セ、センパイはそうかもしれないけど、匙くんとかその他からすれば『何で落ちこぼれのバカが会長と居るんだよ』的な気分でしょうよ。多分」

多分というか実際そうだろう。

この人つて知れば知るほど何で俺とツルもうとするか解らんくらいにいい人だし。

そんな人が俺と屋上で黄昏てたとか、面白く無いに決まってる。

で、それまで空気みたいな扱いだった俺が此処で目立つと、恐らく此処からめんどくさいことになる気がする……というか確実にそうなる。

だつて匙くん一人ですら辟易してたのにそれが一気に百人単位だぞ？

上履き隠されたり、机を撤去されたり、体育館裏に呼び出されてボコボコに殴られるのには慣れてるが、出来ればそんなもんは避けて通りたい道なのだ。

「もう遅いですよ。

皆一誠くんだと思ってますよ？」

「お……遅かったか。くつそ、今日からまた面倒になるな……上履き代を毎週確保しないといと……」

センパイの言う通り、匙くんあの男以外の全てが怪訝そうな顔で俺を見ているのが分かるし、今更隠れても遅い事は明白だ。

つまり俺は詰んだのだ……。

「何を言ってるんですか、一誠くんはちゃんと私が守りますから、そんなにオドオドしないでください」

「いやあ、それは有り難いお話ですけど、それはそれでスゲー間抜けというか……」

センパイはそう言うが、して貰えば貰えばで奴等更に助長させちまうだけなんだよな。

……ああ、これで上履きに画鋏は確定だな……あははのは。

「しつかりしなさい！」

「は、はい……」

だと言うのに、俺は何でわからないけどセンパイと縁を切ろうという気にはなれなかった。

……勿体無いと思ってしまうてるせいで。

「文句なんて絶対に言わせないわ。一誠くんを好きになろうと私の勝手なんだから……！」

「あのー……そこまで評価して頂けるのは誠に光栄なんですけど、俺はその……どうしても臆病癖でセンパイに対しては——」

「構いません。絶対に一誠くんに認めて貰えるまで諦める気はありませんので！」

ピシヤリと言ったセンパイに俺は閉口してしまう。

「ぬぐ……何で俺なんだ……」

やっぱり、他人の気持ちは良く解らないよ。

一誠には友達が居ないと思ってたのに、この前ふとした拍子であの二人が居る所を見てしまった訳だが……。

「ソーナがセーヤの弟君と知り合いだったなんて……」

通りで此処1年位のソーナは妙に楽しそうにしてた訳だわ」

「何度か弟さんを見たことがありますけど、別にセーヤ先輩みたいに神器を持つてるようには見えませんでしけど……」

「あの御方にも考えがあるんでしようかねえ？」

表向きは人気者の三人。

だけど裏の顔は三人とも悪魔であるリアス・グレモリー先輩と姫島朱乃先輩、後輩の搭城小猫ちゃんは何でソーナ・シトリーとアイツが一緒に居るのかを考えているのだが、問題はそこじゃないんだよな。

問題はソーナ・シトリーじゃなくて一誠であるのだから。

「アイツは恐らく彼女が悪魔だって事を知らないと思いますね。

で、恐らく知ったら……。」

「どうなるんですか？」

勿体振る様な口調の俺に、隣に居た学園1の癒し系マスコットこと搭城小猫ちゃん……いや、白音ちゃんが首を傾げているので、つい自然と彼女の頭を撫でながら俺は口を開く。

「……。怯えるだろうね。」

「アイツは他人ですら怖がってるし」

何時の日から、アイツは俺は俺は愚か父や母まで信用しない性格になっていた。

その原因を聞こうにも、アイツは俺を避けるから聞けやしない。

そんな奴がもしソーナ・シトリーさんが悪魔で人じや無かつただなんて知ったら、間違いない彼女を傷付ける事を言うに決まってる。

「それなら、ソーナに言って彼に悪魔の事を教える様に言った方が良いと思うけど？」

「どうですかね……教えた途端、アイツの事だ『触るな化け物！』とでも言って彼女を傷付ける可能性が高いですよ」

「セーヤくんはすんなり受け入れたのにはですか？」

「アイツと俺は性格が真逆ですから……」

リアス先輩と朱乃先輩にも、これまで敢えて言わないで置いたオトウトの事を口にする、何やら難しそうな顔をしている……。

俺はとある事情で彼女達が悪魔な事を知っている……いや、俺も実際はリアス先輩との邂逅を経て転生した悪魔だ。

「ま、そんな難しく考えないでください。」

「一応上手い案を考えますから」

だから此処から見える限りじゃ、屋上で何やらアイツに言ってるのが見えるソーナ・シトリーさんが悪魔なものも知ってるし、もしその悪魔だという事実をアイツが知った時、何て言うかなども予想が出る。

仲は良くないかもしれないが、それでもアイツとは兄弟なのだ。

簡単なのは、アイツとシトリーさんが何かの拍子で絶交すれば簡単なのだが……。

「今更アイツの性格は変わらないだろうしな。」

「ひねくれものの臆病者だから……。」

「弟くんなのに随分と辛辣ね?」

「弟だからですよ。昔から俺を憎んでる様な目でみてくるんですよ……あんまり良い気分はしませんでしたよ」

アイツは独りが好きな筈なのに、ああも楽しそうにしているのを見ると、何かイライ

ラするんだよな。

理由は解らないけど……。

被害妄想・一誠と専属教師・ソーナさん

別に隠してるつもりは初めは無かった。

ただ、俺自身の影が元々薄いせいとか、センパイとの奇妙なツルみは何故かバレなかったんだ。

だから今になってこうやってバレると何を言われるか分かったもんじゃない。

ていうか、多分経験則から言って嫌がらせされる可能性が高い……。

今日はまだ何もされずに1日を終わられたから良かったが……は、ははは……。

上履きに画鋲仕込まれて、それを知らずに踏むのって結構痛いんだよなあ。

「では本日は終わりです」

「っ!!」

何時も以上に疑心暗鬼になりながら授業を終わらせた俺は、担任のその言葉を待ってましたかの如く鞆をひったくって教室を飛び出した。

その際、クラスメートと呼ぶ連中のリアクションとか気にする暇も無く一目散に昇降

口まで走り、下駄箱に置いてある靴の中に画鋏が仕込まれて無いかを確認しつつ上履きを靴に突っ込む。

最早上履きは毎日持って帰らないと不安で仕方無いのだ。

「……」

さつさと靴を履き、また走る。

恐らく今の俺はかなり必死こいた顔になってるだろう。

別に他人からの嫌がらせには慣れているが、あんなもん受けずに居られるに越したことはない。

かなり辛いんだぞ、嫌がらせされるのは。

そして無力なんだぞ、集団から嫌がらせされる身の間人は。

「……。ちよつと楽しかったんだけどな……」

だからもう終わり。

センパイと関わるのは今日で終わり。

それでも嫌がらせが来るんだったら学校も辞めて独りで誰も俺を知らない地方の海で漁師の弟子入りでも何でもして自立する。

俺はもう、あんな思いはしたくない。

確かにセンパイはいい人で、俺も出会った時から今まで楽しいと思えたかもしれない。

センパイは価値のない俺にああ言ってくれたけど、俺はそうまでして自分の意思を突き通す程強く無い。

だから……。

「今まで、ありがとうございました……支取センパイ」

ありがとうございます、そしてさようなら……。

俺は門から出た所で、一度学園の方を振り返りながら小さく呟いた後、そのまま自分の中にあつたナニかを捨てる気分になりながら走ろうとした――

「オイコラ」

その時だった。

「っ!？」

一気に駆け抜けようとした俺を、まるで足でも引つ掛けて転ばずかの様に誰かが後ろから肩を掴み、心臓が飛び出る位に内心ビツクリして足が止まってしまふ。

そして遅れてやって来たのは、誰かに触れられたという恐怖で意思とは関係無くやってきた震えだった。

「な、なん……ですか?」

昔から……いやあの日から俺は他人に触れるのも触れられるのにも怖いと感じる……所謂トラウマという厄介なものがあった。

故に、今こうして後ろからかなり強い力で肩を掴まれているせいでカタカタと身体の震えは止まらないし、何と言っても一番の理由は、俺を止めたその人物にあった。

「今さっき廊下を全力疾走したな？」

校則違反の為来て貰おうか」

俺の中で多分他人の中では最悪に顔を合わせたくないランキングトップ5に入る匙君だったからだ。

「うっ……」

最悪だ。

よりもよって匙君。

バカで無能の癖にセンパイと妙な仲のせいで嫌われてしまってる相手である匙君……。

確か喧嘩が強いとか聞いた事のある匙君………ぐっ！

「す、すいません。よ、用事がありました」

匙君に付いて来いだなんて言われたのは初めてで、この時の俺は只ひたすら逃げたかった。

だからその場凌ぎの嘘のつもりで、震えと吃り口調で完全な挙動不審野郎モードで言

い訳を口にするが、相手は匙君だ………そんな俺の嘘をアツサリ見抜きやがった。

「ないだろ。あのな、お前とは何度か顔を合わせてるし、どんな人間なのかもある程度知ってる。」

急いで帰る理由なんて今のお前にないだろう？」

「うっ……！」

全くその通り過ぎてぐうの音すら出ないとは正にこの事だ。

「やっぱりな、ほら来い」

露骨に顔を歪める俺に、呆れた様子の匙君は容赦無く俺の腕を掴んで、脱出しかけた筈の学校内に再び俺を連行する。

「あ、あ、あの……あ、明日ちゃんと来ますから今日の所は……」

「駄目だ。」

気に入らんが、会長がお前を連れて来いとこの命令だからな。だから俺はお前を連れて

い〜」

まるで死刑執行前の囚人気分です。学校内に戻される俺にキツパリと見逃さないと宣言する匙君に、俺の心は絶望半分と疑問半分か支配する。

「センパイが？」

いや、まあ確かにセンパイとは特に意味もなく会うとか良くあつたけど……とまだ止まらない震えを我慢しながら思わず口にする、どう見ても不機嫌なオーラ全開な匙君が前を見たまま言う。

「お前が今朝会長と屋上に居た時と昼休みの時、しきりに嫌がらせをされると疑心暗鬼になってたらしいな？」

会長はそれを心配して、放課後お前を生徒会室に連れていく予定だったんだ。

それをお前……学年が一緒の俺が呼びに行こうとしたら廊下を爆走しやがって……」

「あ、ああ……なるほど……」

不機嫌にそう言う匙君を怒らせないように当たり障り無く納得しましたと首を縦に振る。

「センパイが……そうなんだ……」

「つたく、会長に要らない心配をさせやがって。」

出来るならお前を一発ひっぱたいてやりたいくらいだ」

いつの間にか靴下の状態で歩かされ、匙君の言った通り生徒会室と書かれたプレートがある扉の前まで来ていた。

そういや生徒会室って所は来たこと無いなとちよつとだけ落ち着いた心で思いながら匙君を見ると、やはりセンパイの件でアレだったのか、相変わらずの仏頂面を俺に見せてくる。

「まさか、会長の好みがお前みたい駄目男だったとはな……」

「だ、駄目男……」

「あ？ その通りだろ？ 辛いことから逃げようとするわ、アレだけ会長に世話になつときながら信用できないとほざくわ……。ホント、機会があつたら殴り倒したいぜ」

「はい……………そつすね……………すみません」

ド正論過ぎて言い返せない……………というよりは最早言い返す気すら起きない。

センパイは確かにいい人だと思う。

けど……………今匙君が言った通り……………俺は世話になつときながらセンパイを信用してないのだ……………心の何処かで。

それはあのトラウマのせい——いや、元々俺はこんな性格なんだろう。

天の邪鬼……………とでも言うのか。

こんな人間、センパイもさつさと切り捨てちまえば良いんだと思ってる時点だな。

「……………」

「おい、色々言わせて貰ってこんな事言うのも変だが、そのみつとも無い顔を会長に見せるなよ?」

「……………うん」

みつとも無い、ね。

俺は何時でもそうなんだよ……………。

心の中で匙君に言い返した俺は、変わらないの仏頂面でドアを開けて中に入れと促される。

正直な所、今センパイに会いたくないのだが、それを言ったら今度こそ宣言通りぶん殴られるので、重たい足取りで中に入ると、センパイ——だけじゃなく、数人の女子の人達が一斉に俺に視線を向けている。

「……………う」

駄目だ……思ってた以上に居心地が悪い。

昔からそうだ……独りで何かするのは良いけど、こうして注目されるのは胃が痛くなる。

キリキリと痛むお腹を無意識に抑え、どうして良いのか分からずに立ち尽くしていると、後から入ってきた匙君が鬱陶しそうに俺の背中をグイグイ押し生徒会室の丁度真ん中辺りまで移動させると、棒立ちしてるだけの俺の隣に立ち、椅子に座って俺を見ているセンパイに向かって口を開く。

「会長、連れてきました。

逃げるように廊下を走って帰ろうとした所を捕まえてきました」

「(´)苦勞です匙……」

さつきまでの仏頂面を引っ込めて、薄く笑みを見せながら捕まえたと報告する匙君にセンパイは小さく礼を言いながら椅子から立つと、相変わらずジロジロ見られて胃がキリキリし、靴下履いた自分の足を一点見しか出来ない俺の前に立つ。

「大丈夫ですか一誠くん？」

そして先の影響でまだ少し震えが止まらない俺の手を取って握ると、何時もの様に俺に話し掛けた。

普通に……何時も何処かで出くわした時の様に。

その瞬間、自分でも驚いているが、身体の震えが止まった……。

「あれ、震えが……止まった……？」

何でだ。

匙君と同じで他人に触れられてるのに、震えが止まった。

いや寧ろ、風呂から上がって身体が暖かいまま寝る時のあの気分の良さとも言うべき
何かが俺の身体を包み込む。

一体これは何なんだ？ 同時にさつきまで見られていた事でキリキリと痛んでいた
胃痛も収まったし………わかんない。

「大丈夫みたいですなね。」

けど、廊下は走っっちゃ駄目ですよ？」

どうしてだ。

この前からそうだけど、何でこの人に触れられても震えが無いんだ。
分からない……いくら考えても分からないけど……。

「すいません……。」

68年に発売された初代人生ゲームの復刻版を手に入れたんですよ。
だから早くやりたいが為につい……。」

さつきまでの焦燥感もパツタリと無くなり、俺は何時もの通りの感じにセンパイと話をすることが出来た。

「それ、独りでやるんですか？」

「え、そうですよ？ あれ、何処がおかしいですかね？」

「それってTVゲームじゃ無くてボードゲームタイプだろ？ 普通は一人でやらないというか……お前やつぱり変だわ」

取り敢えずセンパイも居るし何もされないだろうという事もあって、少し自分を取り戻した俺の言う事に何故か匙君が引いた顔しながら言っている。

ん、何かおかしいのか？

「え、何で？ 人生って個人一人で歩むもので、それをボードゲームにただけじゃん。

じゃあ独りでやったって何の問題も無いと思うんだけど」

『……』

「それを真顔で言い切るのは一誠くんぐらいなものです。

わかりました？ 一誠くんはこういう人なの」

『……………』

いつの間にか俺に対してセンパイ以外の全員が引いた顔をしているのにただただ首を傾げる。

何処が間違ってるのか全然分かんないし。

「んー……あのセンパイ。何でこの人達は俺を変な目で見てるんですか?」

「真顔でパーティーゲームは独りでやるのが当たり前だと宣うからです。」

それより、廊下を走った事に関しての反省文を今から書いて貰いますので、此処に座ってください。

「そういえば上履きは?」

「あ、鞆に入ってます……履きます今」

「よろしい。椿姫、一誠くんには何か飲み物を」

「は、はい」

パパッと椅子に座らされ、文句言う暇もなく紙とペンを渡された俺は、言われるがままに反省文を書くこととなった。

で、その内容を考えてる最中、そーいや会長さんやってるセンパイを近くで見るのって初めてだなあと、室内に居た人達に何かしらの指示を出してるセンパイに自然と目が行くと、背後から低い声で『オイ』と匙君が俺を呼ぶ。

「見惚れて無いでさっさと書け」

「う……………うっす」

さつきより地味に怖い声が、逆らうとロクな事にらんと本能が告げたので、俺はセンパイに向けていた視線から真っ白な紙へと移そうとした瞬間、センパイが急に思い出したかの様に俺の座椅子の隣に来て言った。

「今日は……………いや今日から一緒に帰りましょう。」

「今まではお互い放課後は時間が合いませんからね。今回の事で私は決心しました」

「……………!」

「え……………でも……………」

「帰るって……………そりゃ何も無ければ構わないけど、今朝の事があるし見られでもしたら」

……と背後からちよつとした威圧感を感じながら躊躇気味な声になる俺に、センパイは何処か自信ありげに口を開く。

「今朝から一誠くんの抱いてる心配事なら大丈夫です。

もう手は打ってありますから堂々としても誰も一誠くんを傷付けたりはしません」

「ホントかよ……」

人間が徒党組んだら個人なんかあつという間に螺子伏せられちまうのに、センパイは何処か『それ見たことか』みたいな顔で心配ないと言っているのが信じられない——
——つて、こういうのが駄目なんだろうか俺は。

「現に今日何かされました？　されてないでしょう？」

「………………。た、確かに何もされて、無いけど」

言われた通り、確かに俺は今日何もされてないし、何時もの通り空気だった事をハタ
と思いつつ、

え、あれつて一日逢えて放置して、安心した所を突き落とすという作戦とかじゃなく

てセンパイが何かしたからなのか……？　だとしたらかなり凄いなんだが……。

「だから今日は一緒に帰りましょう。ね？」

「……………。は、はあ……………それなら断る理由もありませんし」

あ、まただ。

確証なんて無いのに、センパイを少し信じてる。

何でセンパイの言うことを……………うつ!?

「羨ましいな色男さんよ……………」

「え……………あ……………だ、だったらキミも良かったら一緒に……………」

「俺をバカにしているのか？　入り込める訳ねえだろうが……………!」

後ろから感じる威圧感の正体に何と無く気まずくなったので誘ってみたが、物凄いドスの効いた声で凄まれてしまった。

俺は微妙にまた居たたまれない気分で、廊下を走った事に対する反省文を書こうとするんだが……………。

「一誠くん、ここの字間違ってます」

「ああ……すいません」

「あと、ペンの持ち方がまた間違ってますよ。」

正しくはこうです……」

「あ、すいま——え、ちよつと……!?!」

「なっ……!?!」

このタイミングで先生モード入っちゃってるセンパイが、癖で中々直せないペンの持ち方を正そうと俺の後ろに回り込んで手を握ってくるせいで何かが背中に当たってる。

毎回疑問に思うこの変にグニグニした感触は何だ？

胸の脂肪……じゃないか、そんな無かった気がしたしこの人。

とにかく周囲の視線がギョツとしてるといふか、信じられんものを見てるといふか……とにかくまた視線が痛い。

特にさつきから怖い匙君がどんな顔してるのか戦々恐々なのに、センパイは知らん顔して俺の指導に熱心だ。

「人差し指と親指を……って、聞いてるんですか？」

「あ、はい聞いてます。聞いてますけど、今は反省文の方が優先では——」

「一誠くんの癖になってるその持ち方だと、指の皮が剥けて痛いんですよ？ その前に持ち方を直してからでも遅くはありません」

「だ、だったらこんな園児に教えるみたいなのは止めて欲しいというか……何か皆見てるし……」

この人って生真面目っていうのか？ そのせいで頑固な所があるというか……一度決めた事はやり通すまで止まらないのが此処で出てしまったせいで、ずっとさつきからセンパイのお友達がガン見してる。

何か知らないけど、その見られてるのが胃痛じゃなくて気恥ずかしいというか……これも初めての気持ちだ。

「何ですか……？ 普段の一誠くんはそんな事言わないのに……」

「普段?! ふ、普段からこんな感じなのかよ?!」

嫌がる俺に、何故かセンパイの声に元気が無くなっていきながら多分余計な事を言っ

ちやつたせいで、案の定匙君が声を張り上げながら驚いている。

いや、まあ……そらビックリするわ。まさか持ち方からレクチャーされてるほどの馬鹿なんだから……。

「な、何て羨まし——いや、違う！

オイ兵藤！ そんな所まで会長の手を煩わせるな馬鹿!!」

「で、ですよねー……」

ごもつとも過ぎる匙君の言葉に何も言えない俺は只笑うしか出来きずに乾いた声で笑つてると、それまで背中に感じてたセンパイの身体が離れ、何やら匙君の方を見ると、妙に低い声でこう言った。

「私が好きでやつてるだけよ。文句ある？」

「うっ……無い……です……すいませんでした」

「でしよう？ 貴方ならそう言ってくれると思つたわ匙」

「……………」

顔は俺からは見えなかったが、途端に萎縮した所を見るとやはり匙君もセンパイに勝てないらしい。

顔を引き吊らせながら謝る匙君に対して急に元の声色に戻すセンパイの顔がどんな顔だったのかが気になるが、あまり深く追求するのはナンセンスだと思い、再会したセンパイの有り難いご指導を有り難く拝聴するのであった。

「さ、匙くん……元氣出して。ね？」

「そ、そうよ……私達が居るから……」

「……………」

彼等のお友達である女子の人達全員に慰めて貰ったのを見た時は本当に自分でも良くわからないけど、匙君に心の中で土下座しておいた。

「猫背は良くありません。」

もっとうとうして背筋を伸ばしなさい」

「ちよ、あのセンパイ……暑苦しいんで離れて貰えませんか？」

言つて貰えるだけで結構なんで」

「無反応だから嫌です」

「何に対してだよ。ワケわかんないなこの人は」

ホントマジで意味の分からない罪悪感なんて感じたくないのに……。

兄者アアアツ!!

俺はあの日から普通では無くなってる。

たまたま車に引き殺されそうになっていた犬を助けようと代わりに引かれた去年のあの日から俺は……。

「すいません、遅れましたー」

悪魔となりました。

「来たわねセーヤ」

本来なら去年のあの日で死んでいた筈の俺を救ってくれた人、リアス・グレモリー先輩とその仲間である皆が既に活動拠点であるオカルト研究部に居たので、最後であり一番の下っぱである俺は詫びの言葉と共にその中へと入る。

当然のこのオカルト研究部というのも表向きの名前であり、本当は先輩——いや、部

長であるリアス・グレモリーが勤める王の眷属達による、人間界に置いての悪魔としての活動が本当のオカルト研究部だ。

「セーヤも来た事だし、本題に入るわ……朱乃」

「はい」

その事実を知るものは俺を含めた部員だ。

部長に今名前を呼ばれて、何やら一枚の封筒を取り出す姫島朱乃先輩。

ソファに座り、もくもくと水羊羹を食べてる白髪の子・搭城小猫ちゃん。

俺と同じ男でよく話し相手になってくれる木場祐人……以上がオカルト研究部の部員で全員が悪魔と呼ばれる存在だが、俺等以外にも悪魔はこの学園に存在している。

それが昨日の朝、弟の一誠と何故か居た支取生徒会長ことソーナ・シトリーだ。

彼女も部長と同じく眷属を持つ上級悪魔らしいが……そんな人が何故悪魔の存在を知らない普通の人間である一誠とああも仲が良かったのか……不思議な話だよな。

「グレモリー家が納めるこの領地内にはぐれ悪魔が潜伏、発見次第排除しろとの事です」
「ありがとう。という訳で今から一時間後にはぐれ悪魔の討伐に向かうわ」

「「はっ」」

まあ、シトリーさんについては今は良い……って訳ではあの一誠と共に居る時点で良
くは無いが、今はリアス部長が言ったはぐれ悪魔の討伐に集中しないと、気合いを入
れ直そうとするが、部長も気になって居たのだろう、唐突にその話をし始める。

「そういえばセーヤの弟くん……確か一誠君だったかしら？」

「はい」

「彼はどんな子なの？ 顔はセーヤにソックリだったけど、雰囲気は余り目立つといっ
た子には見えなかったから気になるわ」

シトリーさんと一緒に居たせいなのか、少しは気になるらしいリアス部長の質問に俺
は少し困り顔になって口を開く。

「確かにアイツは弟ではありますけど……余りよく解らないというか……」

「そういえば一度も弟さんのお話をした事がありませんでしたわね」

リアス部長に続く形で聞いてきた姫島先輩に俺は頷きながら口を開く。

「ええ……何とか恥ずかしい話、兄弟仲は他と比べても最悪に駄目だと思います」

俺は一誠が解らないし、そのせいで仲がよくない。

何せ奴は俺や両親や他人までを避けていて独りで何を考えてるのが読めないんだ。

中学卒業前にアイツが父さんと母さんに黙って家を出て働くと知った時は流石に頭に来て二人にその事を教えたが、その時のアイツの俺を見る目は怯えでは無くて純粹な殺意に感じた。

それくらいなまでにアイツとの仲は悪く、俺が悪魔に転生してからは互いが一卵性の双子とは思えない位に無関心で、他人の様に振る舞って生活をしていた。

だから、まさかあの一誠が他人であるシトリー先輩と普通に会話をしている所を見た時は驚き、シトリー先輩がリアス部長の幼馴染みで悪魔だという事もあつてつい二人が一緒に居る事を教えた。

「前にも言いましたが、恐らくアイツはシトリー先輩の本名も知らないし悪魔だということも知らないでしょう」

「でしようね、見た所悪魔に転生した様子でも無かったし」

そう、所詮アイツは人間でシトリー先輩は悪魔。

他人を信じようとしてもしない臆病者のアイツがもしその事を知れば、恐らく何の躊躇も無く彼女に対して拒絶の言葉を投げ付けるのは目に見えてる。

だから……いやまあアイツの言葉程度でどうも思わないだろうけど、万が一というものがあつし、彼女を傷付けない為にも傷が浅い内から引き剥がした方が良い。

そう思うのだが……。

「けどねえ……。

二人の事に関して私達がとやかく言う資格なんて無いし、ほつといてあげるのが良いと思うわ。ソーナはそんな弱い子じゃないし」

「ですわね。そもそもあのお二人がどんな仲なのかも知らないですし、私達がどうこう言うだけ余計な真似ですわ」

「僕も同意見かな」

「あんまりその人に興味ありませんで何とも……」

、どうにもアイツを知らない4人はほっとけという意見に固まっている。

確かにどんな天変地異が発生して、あの他人嫌いの一誠が優等生筆頭のシトリ先輩と一緒に居るなんて本人達の勝手だし周りがとやかく言う事じゃあ無いのは分かっているのだが……。

「何か腑に落ちないんだよなあ……」

「どうして?」

何か割り切れない気がしてならないのだ。

ポツリと独り言のつもりで出てしまった声が聞こえたのか、リアス部長が不思議そうにして尋ねる。

「いやだって、親や兄弟ですら拒絶してる癖に、あの人とはアイツなりに普通に接してると思うと頭来るといふか……」

「あら、ソーナに嫉妬かしら?」

「はっ。」

ニヤニヤしながら俺の言った事に対してからかいの言葉をくれるリアス部長に、俺はとてつもなく気色悪い気分になり、露骨に顔を歪める。

「冗談じゃないですよ。」

あんな何を考えてるか解らない……家に居ても閉じ込もって独りでボードゲームしてニヤ付いているか夜遅くまで外行つてる奴なんて、もうどうも思いません。

俺が言いたいのは、アイツがシトリー先輩の正体を知った時の事です。

悪魔だと知ればアイツは平気でシトリー先輩を傷付ける言葉を吐くに決まってるんですから」

「へえ、さつきは弟君の事はよく知らないって言ってた癖に、よくそこまで予測できるわね?」

「昔1度『本当はお前なんて居なかった。お前がいきなり現れてから皆が変になった、お前のせいだ。俺の兄なんて名乗るな』……とか訳の解らないことを言われた事がありましてね……」

本当なら居なかったなんて、アイツは妄想癖でもあるのか……1度つきりで言われる事はなかったが、それ以来俺はアイツが嫌いになった。

当たり前だ、存在否定してくる相手と仲良くなれる程俺は器が広くない。

そうやって他人も拒絶し、家族にも黙って中学卒業と共に家を出るといふ進路をアイツの担任から聞いたときは我慢の限界で父さんや母さんに教えたが、俺は自分が悪いとは思わない。

アイツに中卒で出来る仕事をやり続ける根性があるとは思えないからな。

「それは……酷いわね」

「ま、アイツの妄言と思ってるので、もう気にしてませんけどね」

だから、去年から共学校となる情報が出回るのが少なかったという理由でアイツはこの学園に入り込めた訳だが、てつきり相変わらず独りで空気みたいにやっているとばかり思ってた。

いや、別に誰と仲良くなるうとも俺には関係ないし、あの偏屈な性格が少しでも矯正出来ればそれは儲けものだと思う……思うが、その仲良くなる相手がよりにもよって優等生でしかもリアス部長の幼馴染みの悪魔なんだ。

地雷にも程があるとした俺にはどうしても思えないし、この前の休みの日にたまたま飲み物を買いに外出した時に二人が手なんて繋いで歩いているのを見た時は、何故かイ

ラツとしたんだ。

『一誠とシトリーさんが何故……ん?』

『あの、手を繋がなくても良いって言ってませんでしたっけ? なのに何でわざわざ手……というより腕なんか組む必要が……』

『私は一誠くんとかうしたいので、これで良いんです』

『はあ……まあ、飯食わせてくれる身分ですし、何の文句もないですけど、凄い歩きづらいぞこれ……』

『……』

学校でも見たこと無い、シトリー先輩の笑顔。

それに対して鬱陶しそうにしつつも拒絶はしない一誠。

その二人を見た俺は、何故か頭に来た。

親や兄弟の言う事は聞かないくせに、彼女の言う事を聞く一誠に対して……。

散々家族を拒絶しといて……と。

「……………」

「セーヤ？」

単に美人な異性だから聞いているのかどうかは知らない。

だが……アイツと付き合うなんて恐らく地球上に誰も居ない。

そしてアイツがシトリ先輩の正体を知れば、途端に手の平を返すのは目に見えてる。

「いえ、何でも無いです。

取り敢えずアイツの話は置いて、さっきのはぐれ悪魔に集中します」

いっそ、アイツの記憶を弄くって消してやったら楽なのな……………つて、
どうでも良いと思ってたのにあの日から妙にアイツを意識してるな俺…………。

「セーヤ先輩の弟さんをよく知りませんし色々あるみたいですが、これ、あげますので元
気を出してください」

「ああ、ありがとう…………小猫ちゃん」

別に元気を無くしてる訳じゃないけど、小猫ちゃんの好意である水羊羹を有り難く
貰った俺は、何となくさつきより気分が軽くなつた気がする。

うむ…………美味しい…………つてコレ食い掛けか? まあ良いか、味なんて変わらないし。

「あ、これ美味しいね」

「それは私の唾液という意味ですか?」

「は? いや、水羊羹の方だけ……………とかいきなし生々しいよ小猫ちゃん…………」

「む…………」

普通に良い子なんだけど、たまに変なんだよな小猫ちゃんって……女の子だからか？

「フフフ、なら私のもあげるわ。

感想とかも遠慮無く頂戴？」

「なら私のも……」

「え、いや……いいですよ。

だってお二人とももの食い掛け——」

「あら、小猫のは食べられても私のは駄目かしら？」

「悲しいですね、泣いてしまいそう……」

「………………。イタダキマス」

しかも先輩二人も悪ノリし始めちゃったし……。

こうなると大変なんだよな……木場はニコニコしてるだけで助けてくれないし……。
松田とか元浜に怒られるから避けたいんだけど、これは無理かな……。

オマケ

「あの、センパイ? 俺……独りで帰れるんでもう大丈夫ですよ?」

「私と帰るの嫌ですか?」

「別にそういう訳じゃ無いんですけど……只……」

そう言いながら辺りを見渡す俺の居る場所は、最近連れていかれる事がほぼ毎日となつた生徒会室だった。

俺にとつては縁の無い場所だと思つてたのに、何でか知らないけどこの前を境にセンパイと下校する事となつたという理由で、センパイが生徒会の仕事を終わるまで此処で待っているのだが……。

「場違い過ぎて居心地が悪いというか……そもそもそこまでして頂かなくてももう大丈夫というか……」

ハッキリ言つて此処が嫌いだった。

だって、別に役員でも何でも無いのに此処に居るとかセンパイやそのお友だちの人た

ちの邪魔にしかなってないだろうし、そのお友だちが気を使ってくれてるのが悪いというか……。

「へえ、居心地が悪い？ ふーん？ そりや悪かったな兵藤くん？」

「あ、いや……別に君達が悪いとかそういう訳じゃ……あは、あははは……」

この前から不気味な程に匙君がフレンドリーなのが余計気持ち悪いというか……。

「匙？」

「つ……いや……そ、外掃除してきまーす！」

今のところセンパイが何とかしてくれてるという事実が余計情けない。

匙君が嫌いな奴なら殴ってやったかもしれないが、何となく彼は嫌いにはなれないというか……申し訳無い気分させられるんだよな。

「何か飲まれます？」

「あ、いえ……ホントお構い無く。」

もう俺は空気か何かだと思ってくれたらそれで良いんで……はい」

ここ数時間で知り合いとなった副会長さんやその他の人達も、俺がいるせいで要らない気を効かせないとならないのにも申し訳無い気分にはさせられる。

皆は気にするなというし、センパイも良くしてくれるからバックレるのも躊躇ってしまおう。

考えてみれば、今までセンパイ以外に親切にしてもらった経験が無かったからな……。

「まったく……最近の匙は何か変ね」

「俺が居るからでしょ……ホント匙君に悪いぜ……」

『（いえ、お二人の仲が予想以上に良かったからです）』

ああ、独り焼肉してえなあ……。

ちよつと前と現在

夏休だ冬休みとかが俺はずつと嫌いだ。

家に居なくてはならない、顔を合わせたくない奴と合わせる嵌めになる……とまあ色々ある。

中学卒業と共に黙って家を飛び出そうとした事がバレて以来、両親との仲はお世辞にも良いとは言えず、ただただ俺にとっては居心地の悪い場所だった。

故に俺は、冬休みとなった本日も朝起きたら直ぐに服を着替えて外に出る。何処に行くかなどの予定も無いし、遊ぶような友達も無い。

ただ単に家の連中が寝静まるまでこうしてフラ付くだけなんだが、これは別に両親が悪いからとかでは無く俺が逃げてるだけ。

あの日突然現れて、俺の双子の兄と名乗る男が現れてからは、両親も何でも出来る奴を大切にしている……それを見るのが嫌だから逃げる。

それが今の俺だ。

「……………」

つか寒い。

いや冬だからしょうがないけど寒い。

家を出た朝の5時に比べたら、午前10時を回った今はマシになってきては居るが、それもドングリの背比べ程度だ。

何せ今日はクリスマススイブとやらなのに、空は厚い雲に覆われて太陽が出てないからな……厚着をしても寒いものは寒い。

あんまり公園でポーツとしてるだけという虚しさも相俟って余計に寒い。

世間は楽しそうにしてるのに、俺は全然楽しいとは思わない……5歳のあの日からな。

「……………寒い」

独りで居ることは慣れたが、こういうイベントがある日は流石に思うところがある。

まあ、思った所でどうにもならんけどさ。

「クリスマススイブ、ね……」

「そういや、昔トモダチだったあの子は今何してるのかなあ。」

5歳の誕生日に奴が現れてから少しした後、遠くへ行っちゃったあの女の子は今頃、楽しくやっているのだろうか……。

「ハア……」

「いかな、独りのあまり余計な事を思い出してしまってるぜ。」

「そんな昔の事思い出しても、どうせあの子は俺なんざ覚えちゃいないだろうし、思い出すだけ無駄で虚しいだけだ。」

「やめだやめ……くだらねえ。」

「……………。行くか」

「このまま座つてると要らん事まで思い出しそうだし、気分転換に街でもふらつこうかと、ベンチから立ち上がってノロノロと歩き始める。」

「疲れたら適当なファミレスで飯でも食い、それからネットカフェで寝てしまおう。」

金は掛かるが、学校に内緒でやってる仕訳のバイトの給料も明日振り込まれるだろうし、一応無駄遣いしなかったお陰で財布の中には福沢諭吉が4枚ある。それなら今日くらいはパアツと何もかも忘れて遊んでしまえ。そう思いながら街にやって来たのは、多分間違いだっただらう……

「よ、ニーチャン。ゲーセン行く金かんばしてくれや?」

「持ってねえ訳ないよなあ?」

「大丈夫、素直に渡せば何もしないからさ!」

如何にもという風貌のヤンキー達に捕まってしまうという不幸にブチ当たるとは……もう死にたくなつた。

「……………っ!」

「あ!? テメつ、待てゴラア!!」

「逃げられると思うなや!!」

しかし、渡せと言われて素直に渡す程弱気なつもりは無いので、俺は隙を見て猛ダツシユで逃げた。

何でも出来る優秀な『兄』とまではいかないが、これでも運動神経はそれなりに良いので、あっちこちの角を曲がってヤンキー共を翻弄し、無事逃げ仰せる事が出来た。

「はあ……はあ……やっぱりツイてねえ……」

しかし、逃げられたからといって街に戻るのは得策では無く、またかち合うかも知れない危険性を考えた俺は、そのまま郊外に出ようと、息を整えてからもう一走りと地面を蹴ったその瞬間だった。

「て!?!」

「きやつ……!」

ドスンと曲がり角で何かにぶつかり、足が止まった。

しかもこれまた不運な事に、ぶつかった箇所が丁度鳩尾だった為、メツチャクチャな苦しみで思わずその場に膝を付いてしまう。

「ぬ……おいっ……!？」

や、やっべ……久々の苦しみで胃液が出そう……うぐう……。

「も、申し訳ありません！　大丈夫です——あ、あれ？」

ぶつかった相手が苦しんでる俺を見たせいか、かなり慌てた様子で声を掛けてくれたが、取り敢えず苦しくて顔を向けられずに蹲っていると、何かに気付いた様な声を出しているのが耳に入る。

「いほっ！……うえっ？」

そんな声を出されたら、何のこつちやと気になる下世話な俺は、苦しさそのままつぶつかった相手を見ようと顔をあげる。

「……………へ？」

そして俺の顔は間抜けなまま止まった。

恐らく相手も同じ感じだろう。

いや、だってそうだろう……この街でぶつかった相手がだ……。

「一誠……くん？」

「セ、センパイ……？　ゴホッ」

半年前からの知り合いである支取センパイなのだから……。

取り敢えず何時までも地面に踞ってる訳にもいかないという事で、移動する事となった俺はセンパイに連れられる形で家をやって来た。

勿論俺の家では無くてセンパイの自宅らしきマンションに。

「大丈夫ですか？ 本当にごめんなさい……」

「いえ平気です。ちゃんと確認しないで走ろうとした俺のせいですしね……」

寒いという理由で入れて貰ったセンパイの自宅は、中々お高そうな部屋だというのが初めて入って見た俺の感想だった。

小まめに掃除してるのか、床も壁も染みのひとつも見当たらないし、今座らされてるソファもスゲーフカフカしてる。

多分俺が使うベッドなんかより余程寝心地が良さそうだ。

「ありがとうございます……もう大丈夫なんで、帰ります……」

「え……」

しかし、長居をするのは邪魔になると判断した俺は、まだ少しだけ感じる鳩尾の痛みを我慢して、ソファから立つと隣に座ってたセンパイが何故か悲しそうな顔を向けてくる。

「そ、そんな……もう帰るんですか？　一誠くんなら信用出来ますし、まだ居て頂いても……」

「いや……そんな無理しなくても大丈夫ですよ。」

センパイの家族の人たちにも迷惑でしようしね……」

今は出掛けてるみたいだが、これがもし帰って来た時に知らん餓鬼が居たなんて所を見れば、恐らくセンパイを大事にしてるだろう家族の人達はいい顔なんぞしないに決まってる。

だから……いや、正直に言えば一刻も早く逃げたいという衝動に駆られながら、嫌に寂しそうな顔してるセンパイを敢えて見ないフリして玄関に行こうとしたが、この日までロクにセンパイを知らなかった俺は一つ知ることになる。

「いえ、この家には私独りですが……」

「え？」

事故とはいえ、まだ鳩尾に一撃入れてしまった事に罪悪感ありますという顔で独り暮らししていると告げるセンパイに、俺は思わず足を止めて振り返る。

「一人って……あれ、家族は？」

「えっと……冥か——海外に……」

こんな高そうなマンションで独り暮らしするには流石に親とか居ないと無理だろうとか思いながら家族の事を聞くと、センパイは妙に歯切れが悪そうに家族が今居る所を大雑把に教えてくれた。

「家族は両親と姉が居ますが、その三人は今海外に居て、私は学校に行くために此処に残る事に……」

「あ、なるほど……ね」

だからか、ちょっと寂しそうな顔になったのは。

そうか……何か悪いこと聞いちゃったな。

ははは、何時も俺はこうだな。

（う、うう……まさか姉さんが冥界の四大魔王の一人で、実家が上級悪魔貴族のシトリー

家だなんて言えない……。一誠くんは私が悪魔だなんて知らないし……。ごめんなさい、本当は全部嘘なんです……。だからそんな顔しないでくださいよお……)

「余計な事聞いちゃいましたね……。は、はは……。無神経でごめんなさい」

人を信用しないから無神経。

人の心が分からないからズケズケと入り込もうとする。

人の気持ちを理解しようとしなから、こうやって知ろうとするときの手立てが無い。

だから俺は馬鹿なんだ……。

「やっぱり帰ります。お世話になりました」

もう分かった。いい加減理解した。

俺はやっぱ、人を信用すべき人間じゃねえ。

あの男が現れてから俺の中で時間が止まってしまってる以上……。独りで居るべきなんだよ。

獲て失うくらいなら、最初から要らな——

「ま、待って！」

「っ！」

い……あ？

「別に家族は関係ない……！」

帰ろうとする俺の腕を掴んで止めたセンパイの顔は見れないが、この時は何と無く予想できてしまう。

いや、それ以前に他人に触れられた影響で俺の身体に震えが走る。

「は、離してくださいよ」

「い、嫌です……離したら帰るんでしょう？ だから嫌です……」

潔癖症では無い。

何時の頃からか、他人に触れられると自然と震えてしまう。

止める為には今センパイが俺の掴んでいる腕を離してくれば良いのだが、センパイは離してくれない上はかなり強い力で掴んでるせいで上手く外せない。

だから口で言っただけで分かって貰うしかないのだが……。

「そ、そうです。一誠くんを此処まで連れて来たのは私で、その借りがある筈です……だ、だから居てください……此処に……！」

センパイは最後まで離さず、逆に居るとワケの分からない事を言ってきた。

「な、何でそうなるんだよ……わかんねーよ。アンタが何を考えてるのか……！」

俺は……俺は帰りたいんだよ！ 離せ！ 触るな!!」

何を考えてるのか分からない。

段々イライラしてきた俺は、センパイ相手だということを忘れて声を荒げながら手を引き剥がそうと身を振ったりと躍起になる。

けれど最後まで……本当に女かよと思うくらいに強く……けれど痛くは無い力加減でセンパイは離さなかった。

「なんで……アンタが俺なんぞに……」

理解できない。

人気者で周りに誰かが常に居るような人が、他人も信用できず独りの俺に何故此処まで……。

そうだ……思えば最初は単なる追試の講師だっただけの人だったのに……それだけで終わるだけの関係だったのに——

「ほつとけないんですよ……アナタが。」

単なる知り合いで終わらせたくないんですよ……!」

「……………なっ」

その答えがわからず、混乱していた俺にセンパイは教えてくれた……。

予測出来なかつた答えを……。

「最初は学園始まつて以来初の追試者つてだけの認識でした。

そして初めて会つた時、勉強が出来無いと見て分かるくらいに貴方は覇気のカケラも無い人だった。

でも、私にはその覇気の無さが、何か大切なものを無くして自分を見失つて怯えてる様にも見えた……」

「そんな、カツコの付いた人間じゃねーよ俺は……」

「現にアナタは私を含めた他人全部を信じようとしてない……。

それは、昔何かショックな事があつた……違いますか？」

「うっ！」

わからないが、泣きそうな声と顔を向けながらのセンパイの言葉に、俺の心臓は飛び出る思いがした。

それは勿論、殆ど合つてたからだ。

話した覚えなんてないのに……。

「話せとは言いませんし、これは私の単なる自己満足です……」

引き剥がそうと躍起になって俺の身体は力が抜け、その場に崩れ落ちるが如く座り込んでしまい、呆然とした顔になって弱々しい笑顔をしながら俺の手を握ったセンパイを見上げる。

「正直……私自身も混乱してるんです。

それまで興味無かったのが、貴方と出会ってから……私は——

毎日、貴方が頭から離れない……。

「……………」

多分、純粹というのがそういう意味だとするなら、正しく今センパイが見せる笑顔がそうなんだろう。

俺は何か……良くわからないけどその笑顔に目を奪われた気がした。

「あ、あはは……すいません。」

こんな事言われても迷惑でしたよね……」

熱いのか、頬を紅く染めながらペコリと一つ頭を下げたセンパイが悪いとは思ってない。
い。

というか誰が悪いとかそんな話では無い。それは分かる。

「………………。いや、別に……だけど、やっぱり分かんない……。理解しようとしても答えが見つからないんです」

「………………。わかってますよーだ……」

でも、やはり理解が出来なかった。

言ってる事が……その意図が。

でも一つだけ確実に分かる事は……。

「は……………何か疲れちゃいました。」

申し訳ないんですけど、ちょっと休ませて貰っても良いですか？」

この場から逃げたいとは思わなくなったのと、センパイに今も手を握られてるのに、震えが止まってるということだけだった。

「ええ、よろこんで。」

クリスマスが嫌いでも何も無いですけど、ゆっくりしてください」

「へ……………一致しましたね。俺も嫌いなんですよ……………」

だから……………何と無くもう少しだけ此処に留まる事にし、笑って許可してくれたセンパイに本当の事の一部を言ってしまった。

これが去年のクリスマスの話だった。

そして今は――

「人間、か？ ククク……こんな所に来るとは珍しい。

褒美に痛みも無く喰らってやろう」

「え……あ……ど、どちらさま？」

自然界に絶対存在しないだろうと馬鹿な俺でも断言出来るくらいの化け物に見下ろされていた。

久々に一人で帰る時に見つけた、郊外の廃屋に住み着いたにやんこ達に餌をあげただけなのに……。

不運かもしれないし、幸運かもしれない

毎回毎回センパイと帰るのも悪いので、今日だけは独りで帰ると言つて帰つた。

で、その途中、そういえば暫くいつてなかつたなあとふと思ひ出したので、コンビニに寄つてキャットフードと牛乳を買つて街外れにある割りときと大きめの廃屋にやつてきた。

その理由は至つて簡単で、何年も昔から廃屋になつてるにも拘わらず、何故か取り壊しがされないこの場所に住み着いたにやんこ達に会いに来たからだ。

「おお、次郎……お前子供できたのかあ」

「にゃ〜ん♪」

人や大概の生物に嫌われる俺だが、何故か猫だけには嫌われず、こうして暫く会つてなかつた真つ白猫である次郎も（雌の猫で俺が勝手に命名）俺を覚えてくれたのか、顔を見た途端に近づいてくれた……ちっさい次郎5匹程を従えて。

「おうおう、どいつもこいつも同じく白いな。

次郎のちっこい時にそっくりだ」

「みゃ〜♪」

だからというのも現金な話だが、俺は猫だけは胸張って好きだと言える。

次郎が連れてきた子猫達もこうして俺に何の警戒も無くといった様子でスリスリしてくる。

ああ……心が浄化されるってのはこの事かしらね……どれもこれもカワイイぞ。

ちなみにこれは関係ないが、個人的に猫耳コスプレとやらは嫌いだ。

ちよつと前に街で頭に猫耳のカチューシャ付けた奴が『○○だにゃん』とか言っていたのを見たが、ナンセンスとしか思わん。

猫は猫のままだからこそカワイイのだ。

このカワユサを人間が猿真似？ 殴るぞテメエである。

「独りで帰るのは正解だったね。

センプイには悪いけど……フフフ」

「こや〜ん」

「おう、そうかそうか……。」

「お前も色々あったのかあ……。」

本当に独りとなれるこの場所だけは悪いけどセンパイとて教えられない。

別にこの廃屋の主でも何でも無いが、此処は俺だけの……俺しか知らない癒しのスポットなのだから……くふふふ。

「にっ!？」

「いたっ!？」

しかしその幸せは長くは続かなかった。

事の始まりは、それまで俺に抱かれても無抵抗で喉を鳴らしていた筈の次郎が突然暴れだし、俺の手を引っ搔いてから離れると子猫と共にポカンとしている俺を置いて一目散に逃げたのだ。

まるで何かの気配を察知して逃げるかの様に……。

「ジ、ジロー?？」

今まで次郎にこんな事されたことが無く、ちよつとのショックを受けながらも探そうと立ち上がる。

いやだつてもし次郎の嫌がる事をしてたのなら、言葉は通じないけど謝つて置きたい訳だし、何より次郎にだけは嫌われたく無いのだ。

だから取り敢えず逃げて行つた場所を追う……という予定だつた俺の行動は叶わなかつた。

「ほう、この場所に人間が一人で来るとは珍しいな……」
「っ!？」

手の甲に残つた引つ掻き傷が地味に痛いと感じながらも逃げた次郎を探そうと廃屋の奥に向かおうとしたまさにその時だ。

突如後ろからとつともなく低い声が聞こえ、まさか此処に誰かが居るだなんて思つても無かつた俺は、心臓を大きく鼓動させながら恐る恐る後ろを向けば、俺を待っていた

こんな生物は見たことが無い。

いやこんなUMAもビックリな生物が居てたまると、パニックで発狂してもおかしくない筈なのに、何故だかこの時は冷静に、俺はこの訳の分からない生物が何者かを知るために聞いてみたが、答えの代わりは酷いものだった。

「い……………がつ……………!？」

何があったのか、未確認生物の腕つぼい箇所がユラリと揺れた次の瞬間、俺の身体を何かが貫いた。

「これから私に喰われて死ぬ下等生物に知る必要があるとしても？　クククク！」

謎の生物さんはどうやら意地悪な性格らしく、教えてくれないどころか、下等生物呼ばわりしながら見ただけでハッキリと分かる鋭利そうな右腕で俺の腹部を貫き、そのまま吊り上げた。

「あ……………え……………」

痛——くは無く、下半身の感覚が消えていく。

予想するまでも無く、腹はエグい事になっていくだろうけど、目も首も上手く動かないので見る事が出来ずに視界だけが段々と霞んでいく。

そんな俺の様子が楽しくて仕方無いのか、謎の生物は愉快愉快と嘲笑う。

「少し肉身は少なそうだが、無いよりはマシか……………キツヒヒヒ！ 貴様の下半身からまず喰らってやる」

「……………」

喰う……………ああ、俺喰われちやうのね……………。

口の中が鉄っぽい味に支配され、最後に聞こえた謎の生物の声は此処までで、俺は腹から下に変な喪失感を感じながら意識が……………多分だけど死んだ。

駒王学園生徒会長である支取蒼那は、普段の冷静沈着な表情を一変させ、間に合えと

心の中で何度も繰り返しながら日が暮れ掛けた街中を外に向かって走っていた。

「どうして……くっ……！ 嫌われても良いから一誠くんを縛り付ければ良かった……！」

『すいません、どうしても独りになりたいんで今日はこのまま帰ります』

ある日を境にほぼ毎日と一緒に帰る事になれた相手である一誠の言葉を、たまには良いかと軽く考えて頷いてしまった数時間前の自分を殴りたい。

蒼那は自分自身に憤慨しながら、背に人ならざる者の証である翼を広げて飛び立つ。見ていた人が居たかもしれないが、今の彼女にそんな事を考える余裕なんてもの無い。

あるのはただ……。

「い、一誠くんの生命力が弱っている……？ は、早く……もつと速く……もつと……!!!」

感じている一誠の生命反応が弱まり、まさに風前の灯火である事に、蒼那は叫びなが

「ら限界を越えた音速で街外れの廃屋目掛けて飛翔する。

此処はどこだ？

俺は確かあの化け物に食われて——あ、そうか。

俺は死んだんだな。

あつちやあ……人間一人死ぬつても案外呆気ないもんなんだなあ。

まあでも仕方ないか……あんな訳のわからん未確認生物相手じゃあそんなもんだよね。

ククク……結局俺はあの日を境に惨めに死ぬ運命つて奴だったのかねえ。

運が悪すぎだぜ俺は………。

「……………」

にしても死後は天国か地獄に行くか聞いてたが、一向にその場所に行く気配がし
な。

何にも見えないし……というか自分の身体があるって感覚もしないし。

ああ、もしかしてこれが死後の世界って奴かな？

何も無い……ただただ黒いだけの世界で今ある意識が完全に消えるまで漂うだけ
……みたいな？

ふむ、だとするならこのまま寝てしまおうか？ 死んだ後に眠れるのかは知らないけ
どさ。

よくある悪霊みたいに生前やり残した事があつて成仏できないなんて事も俺には無
いし、どうせ俺が死んでも誰も悲しまんさ。

テキトーな葬式をテキトーに両親がやってそれで終わり……それが俺なんだから
……。

うん……そう考えると死んだ方が気が楽な気がしてきたぞ。

誰にも邪魔されず、嫌いな奴等の顔も見なくて済むし、寧ろ此処が俺にとっての天国
か

「何時までアホで恥ずかしい自己回想してるんだお前は。早く起きろ」
「あ?」

な?

「あら?」

真つ暗だった筈の視界に突如光が射すと共に、俺は聞いたことの無い声にたたき起こされた。

「……………はい?」

意識? が覚醒した俺は混乱した。

あの変な化け物にムシヤムシヤ喰われた筈なのに、俺はちゃんと自分の身体があり、そして何故か学校の教室と思わしき場所の真ん中の席に座っていたからだ。

「あ? あ? あれ?? 俺は確か……………」

そう……間違いなく死んだ筈だ。

にゃんに餌やってほっこりしてたら変な化け物が現れ、訳のわからん事言われた後に比喩無しで……………。

「というかココ何処だ？」

いや、そんな事よりも第一にココは何処なのかと辺りを見渡してみる。

真正面に教卓と黒板があり、今座っている場所の周りには同じ机が幾つもあって真ん中に座る俺以外誰も居ない。

……………うん、変だわ。

いやだつてそうだろ、俺はさつき化け物に食い殺されたんだぞ？ それが何で学校の

——しかもよく観察すれば駒王の教室じゃねえ場所に座ってるんだつー話よ。
着ている服装も駒王じゃない学ランだし。

「死後の世界、なのか？」

もしそうなら、昔に絵本とかで読んだのとは随分とイメージが違うなあ。
なんというか……やけに現実的というか細やかな夢をぶち壊されたというか……。

「死後の世界なんてあるわけ——いや、あの世界なら存在したっけか？ まあ、教室が眠
気地獄の場所という意味でなら同意するが、此処は死後の世界じゃあ無いよ。

普通の人間は死んだらそれで終わりなんだから」

「!？」

考えても答えが見付からないそのタイミングを見計らったかの様な声が背後から聞
こえ、俺はドキツとしながら咄嗟に背後を向く。

「……………」

「……………ど、どちらさまっ？」

さつきまでそこに居なかった筈のソレは、人が分からない俺でも分かる程の『魅力的
な笑みを見せる女が』ロッカーの上に座っていた。

勿論死ぬ前に会った事なんて無い……初めて見る顔なので、殺される前にあの化け物

に向かつて言った時と同じ様な感じで誰かと問うてみる。

すると女は一つニコリと笑顔を見せながら『よつと……』とロツカーから降りて床に立つと、誰だか分からずに動揺する俺にテクテクと近付いてくる。

「僕の名前は……いや、今は名乗る必要は無いかな。」

まだキミは完全に目覚めて無いからね」

「は？」

女の癖に一人称が僕とは思った矢先に名乗る必要が無いと宣う謎のセーラー服女に俺は怪訝そうな顔になる。

「そんなことよりやつと僕の声が届いたみたいでホツとしてるよ、兵藤一誠くん？」

「俺の名前——っ!？」

「ああ、知ってるよ。」

というより、皮肉な事にキミを誰よりも解つてるといふべきかな僕は」

なーんか妙に耳に残る声を持つ女はズイッと怪しむ俺の顔すれすれに己の顔を接近

させながら、意味深な事を言う。

「ココが何処かなんてこの際横に置いてだ、キミは先程はぐれ悪魔に食い殺された——此処までは覚えているかい？」

「あ、はい……」

近い……俺が今最も思う事がそれで、女が何か言っているのが全く耳に入らな——
——つて、ちよつと待て。

今サラリと聞き慣れん単語が出たぞオイ。

「ま、待った。アンタが誰でココが何処かなんてのは横に置くが、今言つたはぐれ悪魔つてのはなんだよ？ てか顔が近い」

「つとと……か弱い乙女の顔を乱暴に押し退けなくてくれないか？」

女の顔を掴んで押し出す俺に軽口を叩いているが、そこまで気にした様子は見えない。
い。

寧ろ何処か楽しそうに見える。

「はぐれ悪魔は——その説明もキミが現実に戻った時にサービスで頭の中に叩き込んであげるから説明はしないよ。

とにかくキミはあの化け物に腹部から下を喰われ、めでたく死んだ……これはわかるね?」

「あ、ああ……」

顔に似合わずハッキリと俺は死んでると宣言しちやうことに少し狼狽えるが、女はそれを知ってか知らずかのガン無視で話を進める。

「しかし、この後……キミの死後そのはぐれ悪魔は後にやってきた他の悪魔に始末されただけ……」

「は、はあ……ほかのあくま……」

さっぱり何を言ってるのか理解できない。

てか悪魔ってなんだし……いや確かにあの風貌はまさしく悪魔って感じしたけど、そんなもんが現実に居る訳ねーつつーか……。

「居るよ。キミにとってには残念かもだけど悪魔は存在する。」

「ついでに言えば墮天使だとか天使だとか神だとか妖怪だとか……まあ何でもござれで存在するよ」

「……………まじすか?」

「まじつすよ」

「信じてないと顔に出てたのを読まれたのか、セーラー服女は釘を刺すかの様にして悪魔とその他は存在するとハッキリ言った。」

御丁寧に二度もな。

「ついでに言えばキミと仲良しだったあの女の子……ええつとソーナ・シトリーさん——いやキミに分かる通りだと支取蒼那さんも悪魔さ」

「……………は?」

悪魔云々ですら信じられん話で上手く飲み込めないのに、やはりこのセーラー服女は人のペースを配慮しない性格をしてるのか、次々と俺にとっては衝撃的過ぎる事実

を話す。

その中でもやはり驚いたのは、あのセンパイが俺を食い殺した悪魔とやらと同じ存在だったという事だ。

「センパイが……あくま？」

「そう。ついでに言うときミの双子の兄もそうさ。」

まあ、彼はソーナ・シトリーさんとリアス・グレモリーさんの純血悪魔二人とは違って、人から悪魔に転生した者だけどね」

「……………」

ペラペラと飲み込めないのにも関わらず話を続ける女の声はまた耳に入らなくなり、先程さらつと言っていた言葉が俺の頭の中をグルグルと回り続ける。

こんな今会った女の言うことを鵜呑みにする理由なんて無いが、俺は確かに食い殺される直前に見たあの未確認生物な化け物が悪魔だと言われりやあ何となく納得してしまう。

どう見ても人間じゃないのに人と同じ言葉を発し、知能もあつた様に見えた。

それが悪魔と言われりやあ信じてしまうには材料が多すぎる。

そんな化け物とセンパイが同種の存在……………。

「俺は……………化け物と一緒に居たのか……………？」

ほんの少しでも信じようとか思ってたのか？」

あの化け物は俺を食った。

て、事は……………もしかしてセンパイが俺に構ってた理由は油断させたところを食い殺すつもりだったのだろうか。

だとすれば今まで俺に良くしてくれた理由にも納得行く……………行ってしま……………。

「う、はは……………そうかあ……………そうだったんだね。」

少しだけセンパイを信じたいと思ってたのは馬鹿だったのかあ……………」

悪魔が人食家だったのは身をもって知った今となつては妥当過ぎる理由を獲てしま
い、俺は何が何だか分からずにヘナヘナと椅子に座って俯いてしま……………。

あんなだけいい人だったのも全部が全部演技だったと思う……………うわあ、あの男が
現れて両親を取られた時以来の苦しみが胸を襲撃してらあ……………あは、あはは。

「あらら、キミの被害妄想も此処まで来ると清々しいな。

誰がお前を騙す為に彼女が近付いただなんて言った？」

「今アンタが言っただろ……センパイが悪魔だつて」

「言つたよ？　だが、彼女がキミを食い殺す為に近付いただなんて一言も言つてねーだろうが」

時々口調が荒くなる女は、心底呆れたといった声だ。

「ハア……別のベクトルでキミは面倒な男だな。

まあ、生きた経歴から察すれば分からなくもないが、僕からすればある日兄を名乗る自分そっくりの男が現れて人生がねじ曲がってしまっただなんて話もどうでも良いし、一々その程度のくだらねー事でうじうじすんなと思うわけ」

「……………何で知ってる……とはもう聞かねえ」

不思議な事に、この女は何でも知つてて当たり前だと俺は何故か認識してしまつてるので、あの男の話を出されても疑問にすら思わなかった。

「キミの被害妄想にこれ以上付き合う気は無いから話を進めるぞ。」

キミは確かに現実世界では死んだが、今からまた生き返って貰うよ」

「……………どうやって?」

荒唐無稽すぎる話をまた『なんてことない』って顔で軽く言っちゃう女に突っ込む元気が無い俺は、力無く座りながらその手段を問う。

この時点で俺はもう何か色々ともうでも良くなっていた。

「キミの持つ過負荷^{マイナス}を、僕の手で完全に目覚めさせ、そのスキルの力でキミは神に嘯いて貰うってだけさ」

「マイ……………ナス……………?」

「そ……………人の持つ特技を突き詰め過ぎた結果である異常^{アブノーマル}とは反対に、人の持つ欠点を突き詰めた結果である過負荷^{マイナス}……………」

まあ、僕にとってはそのどちらも腐る程持つてるから、キミがあの世界で初の過負荷となるうがどうでも良いけど、ふふ……………キミは過負荷の割りには運に恵まれているな。

「この僕に目を付けられたんだからね」
「そうは思えないが……」

訳のわからん場所で訳のわからん存在に目を付けられたと言われている時点で、とてもじゃ無いけど運が良いとは思えねえ。

ましてや………うあ？

「さて、そろそろ時間だ。

今回は僕がキミの意識を元の世界に戻すのと、サービスで向こうに放置してある身体を違和感が無い程度に戻してあげるけど、次は無いからな？

じゃ精々頑張りたまえよ………この世界で最初の過負荷マイナスくん？」

「あ、ああ？」

な、なんだ？ 急に目の前がグニャつとす………る………？

「あ、そうだ。気が変わったから名前を教えてあげる。 僕の名前は——」

グルグルと回る景色と遠退く意識の中、今になって気紛れでも起こした女がニコリと微笑みながら名前を言おうとする所で、俺の意識が完全に消えた。

そして……次に意識が覚醒した時に俺の目に映るのは――

「い……………っせい……………くん……………？」

「……………センパイ……………？」

死んだ時に居た元の廃屋の中で、目を真っ赤にしながら今さっきまで下半身の消えた亡骸だった筈の俺の身体を抱き抱えているセンパイだった。

そしてその瞬間……………俺の頭の中に全ての答えが入る。

悪魔のこと……………自分の持つ過^{マイナス}負荷の事全てが……………。

過負荷（マイナス）一誠とお持ち帰りシトリーさん

ぼーっとする頭の中に、例のセーラー服女が言つてた通りに様々な情報が勝手に流れ込んでくる。

この世に蔓延る悪魔やらその他人外。

人を越えた知識や力を持つ存在。

人でありながら人としては欠陥品とも言える存在である過負荷マイナスと異常アブノーマル……。

そして俺は……。

「間違いなく死んでいた……。

下半身も無くし……本当に一誠くんなのかも判別出来ない程に血まみれだったのが、何故か今こうして消えた下半身と共に『いつの間にか何事も無かったかのように再生し』生きている」

「……………」

「……………。いえ、この際その事はどうでも良いんです。

本当……本当に良かった……。」

あの廃屋での復活し、その場に何故か居たセンパイが喰われて失った下半身と共にこの世へと舞い戻った俺を泣きながら抱えて連れられたこの場所は……そう、去年のクリスマスに來た事があつたセンパイの家だ。

あの女の言つてたサービスとはこの事なのか、復活した俺の身体は少々の傷を負つた程度のダメージ間で修復しており、失つた身体も元に戻っている。

なるほど、こうして現実を知れば知るほど、とことん出鱈目な女だと今更ながら再確認させられるぜ。

「気分はどうですか？」

「……………」

足がある感覚もどてつ腹貫かれる直前の頃と全く同じな事を、センパイの家のリビングにあるソファに薄いタオルケットの下で確認している俺に、何故か知らないけどずっと泣いていたセンパイが具合の調子をしきりに聞いてくる。

この人もあの化け物と同じ存在な事も既に知つた今、ハッキリ言つて信用が全く出来なくなっている。

しかしながら、ボロクズの血まみれで、普通なら触りたくもないモノへと成り果てた筈の汚い俺を、全く意に返さず抱えて此処に運んでくれたのも事実だし、まあもしかしたら血だのスプラッターだのの耐性が悪魔故に見慣れているってだけなのかもしれないが、いくら馬鹿な俺でも今センパイが向けている顔が、マジで俺を心配しているという事くらいは分かる。

それに、あのセーラー服女曰く『そこら辺で勝手に落ちぶれたはぐれ悪魔と純粹な悪魔は一応違う』との事らしいし、奴の言葉を鵜呑みにするつもりも無いが……これまでセンパイに世話になった事実はちゃんとある。

だから俺は……………。

「ちと身体は痛いですが……………まあ平気つすね」

たとえ裏切られるとしても、センパイだけは信じてみたい。

それが俺の答えだった。

なあに、裏切られるのも失うのも過負荷マイナスの専売特許なんだ、今更過ぎるって奴だろ？

「そうですか……………良かった……………」

「心配掛けたみたいですね……はは」

安堵する表情で笑うセンパイに俺も同じく笑う。

この顔も俺を食いそびれる事も無くて安心したという顔では無い……俺はそう思う事にした。

というか、こんな顔で人食家つてのがイメージ出来ねえんだよな。

「……。さてと、どうやら俺もセンパイも互いに話さなきゃならない事が多く出来たみたいですね」

そんな事よりも、まずはこの現状を互いに理解しないとイケない。

俺はセンパイが悪魔である事を知った上で生きなければならぬように、センパイは俺が何故自力で蘇生したばかりか失った身体まで復活させたのかという理由を知らないとならない。

そうしないと俺はセンパイに対して不信感を抱かせてしまうからだ。

「……。そうですね……」

その考えはセンパイにもあつたらしく、深刻そうな顔で頷いて見せる。

うむ、普段は感情で動くタイプじゃない人だけに、こういう時はスムーズで助かる。

「流石、話が早くて助かりますね……支取蒼那——あ、いや……ソーナ・シトリーさんでしたっけか？ 本当の名前は？」

「っ!？」

だから俺は一気に確信を突いてやる。

あの女から貰った荒唐無稽な知識から引つ張り出したセンパイの悪魔としての本名を脈絡無く口にする事で反応を確かめる。

すると案の定、センパイの顔は『何でその名前を?』といった感じの、驚愕に満ちた表情に変わる。

まあそりやそうだな。

俺は彼女からすれば只の一般人で彼女の本名も人間でも無い事すら知らない筈の奴だ。

それが急に本名で呼ばれたら例え悪魔だろうが、例外無く少しはビックリするに決

まってる。

「私……一誠くんはその名前を教えた事がありましたっけ？」

「ないですよ」

「なら、どうして……」

「あの化け物——つと失礼、はぐれ悪魔とやらに喰い殺された時に知りました」

あの化け物とセンパイは皮肉にも同種なので、流石に化け物呼ばわりしたら失礼かと訂正しながら『嘘では無い事実』をそのまま伝える。

が、それだけではやはりセンパイも納得する訳が無く、俺に本名を呼ばれた事に対しての驚きがまだ残った状態で怪訝そうに顔をしかめている。

「分かりません……」。

あのはぐれ悪魔が私を知っており、名前を一誠くんに教えたとしても、何故私がソナ・シトリーだと断定出来たのが……」

「出来るさ……だって教えたのはそのはぐれ悪魔とやらではなく、死んだ後の夢に現れた変な女なんだから」

「……。はい?」

人に説明するつても難しいものだ。

今俺が何気無く言つた事に対してポカーンとしているのを見てよくそれが分かる。

「夢に現れた女の人……ですか?」

「そ、夢……。」

死んだ先の意識の中に居た長い黒髪の変な女に全部教えて貰つたんですよ。

この世には人だけじゃねえ……様々な人外生物がいるつてね……」

「……………」

取り敢えず納得云々前に全部話してしまおうと、かなり無理矢理に話を進めるせいで、いよいよセンパイの顔が俺の頭の心配の顔となっている。

まあ仕方無い、俺だつて自分で言つててワケわからないもの。

「は……まあ、こんなアホ過ぎる話を信じるつても無理な話かな……」

「ちよつとだけ話が飛びすぎて整理が上手く付かないだけですから大丈夫です。」

私は……一誠くんの言った事すべてを信じます……」

ヘラヘラと笑う俺に、センパイは真面目な顔で言った。

「どうやら信じないのでは無く、信じようとしているらしい……。」

ホントにいい人だよ……アンタは。

「その黒髪の方のお陰で、言えなかった私の秘密を知ったのは分かりました……少し気に入りに入りませんが」

「え、何で？」

「……。だって……その女の人と二人だったなんて……何か嫌です」

最後の方の声小さくて何を言っていたのか聞こえなかったが、どうやら俺がセンパイの正体を知った理由を取り敢えずは納得してくれたみたいだった。

少し怒ってるのが気になるがな。

「その女の人は今何処に？」

「さあ？ 何せ夢の中ですからねえ。」

現実に存在するのも果たして……」

「……。なら良いですが……。」

私もその人とお話がしてみたかったから少し残念かな……」

「はあ……」

妙にセーラー服女を気にするセンパイに俺は首を傾げる。

まあ、確かに悪魔云々をよく知ってる謎の存在と考えたら気になるのも仕方無いが、何で機嫌が少し悪いのかがよく分からん。

あの様子からして、セーラー服女が何かアンタ等にするって様子は無かったしな……ほっといても害なんて無いと思うぜ……とまあ、借りを返すつもりでセーラー服女の方オローをしたら、ますますセンパイの機嫌が悪くなっていく。

「やけに庇いますね……その女の人を」

「え……いや別に庇ってるというか、センパイが一々気にするような女でも無いんじゃない？ と思ってたんで……」

「ふーん？」

「な、なんすか……」

気付けばセンパイの俺を見る目がじとじととしたものになっており、微妙に居たたまれない気分になってきた俺は咄嗟に話をすり替えようと話題を変えた。

「え、ええつと……取り敢えずその女から全部を聞いてセンパイの秘密を知ったつて事で、次は俺がこうして失った筈の身体を持つて生きている理由を」

「あ……それは確かに気になりますけど……まさかそれも例の女の人の力、ですか？」

「え？ え、あ……一応そうですね。」
「まあ、これに関してあの女は切っ掛けに過ぎませんが」
「どういう事ですか？」

あ、食いついた。これで話を何とかすり替えられる。

此処で上手いこと納得して貰えれば、ミツシヨンコンプリートだ。

あの女のお陰で目覚め始めてる俺の過負荷マイナスの能力スキルを知って貰えれば、多分納得して貰える。

幸い、人間には異常アブノーマルでも過負荷マイナスでもない力……神セイクリッドギア器キなる力があるらしいし、それと比べりゃあ過負荷なんてほんの些細な力だからな。

「先に力の名称を言わせて貰いますが……リアリティーエスケープ 幻実逃否……それが俺の持つマイナス過負荷です」
 「リアリティー……エスケープ……？ マイナス……？」

あの女の力によつて、米粒程度でしか無かつた俺のマイナス過負荷は、今こうして能力名が付くまでに成長……いや退化した。

それが良いことなのか悪いことなのかは俺には分からないし、この力だつて果たして使う時が来るのかどうかも知らない。

今ある現実リアルから目を背け、自分の都合の良い優しいリアル幻実に逃否して無責任に放置する過負荷……それが俺の『リアリティーエスケープ幻実逃否』なのだ。

「マイナスとは？ それは神セイクリッドギア 器とかでは……」

「いえ、ソレとは全く関係無い別の力ですよ。

そんな前向きプラス要素の高い高尚なものなんかじゃあね……」

神器と一緒にしちゃあ、神器に怒られちゃうぜ。

誰も得なんかしない力こそ……マイナス過負荷なんだからね。

「なら一体……。」

その力で一誠くんは今こうして五体満足で生きているというのは間違い無いので私は信じますが……出来ればどんな力なのかを知りたいです……。」

「良いでしょう。センパイになら何でも教えますぜ」

どうやら普段の付き合いがあるお陰で、結構信じてくれているっぽく、既に俺に変な力があるって前提で質問をしてくる。

だから俺は正直に言う。

センパイにだけ……俺の持つ過負荷^{マイナス}すべてを。

そして――

「で、あの……俺の服は？」

「ありません。発見した時の一誠くんは下半身をはぐれ悪魔によって失い、大量に出血してましたからね……残った上半身の所の服ももはや着られる代物じゃあ無かったの
で捨てましたよ」

センパイは俺のマイナスを知り、俺を信じてくれた。

力のこと……マイナスという人種の事全てを。

そしてそれでもセンパイは……全く変わらず俺を信じてくれ、今はすっかり何時もの調子となった。

「だから全裸なんだね……。チツ……。こうなりや現実逃避でもして——いやダメだ。

まだ目覚めたばかりで加減が分からないし、取り返しのつかない事になるかもだから使えねえ……。

でも服着ないと帰れないし……。うぬぬ」

「だったら今日は此処に泊まっていつてくださいな。

明日の朝までには服を用意しますから……。ね？」

「え？ いやあ……。それは……」

タオルケットの下は全裸だったりする俺に、センパイは嫌に微笑みながら何て事無いぜとばかりに言うが……。いくら俺でも深い関係でも無い女の人の家の中で全裸で居るなんて真似は流石に恥ずかしい。

「ただど服を用意出来るのは現状センパイのみであり、そのセンパイは明日の朝までには用意するから今日は此処で寝ると言っているのです、今は外に出ることが出来ない俺にはどうすることも出来ない。」

「ふふ……一誠くんの事も更に知ることができましたし、私の秘密も知って貰えた……。」

「まあ、その黒髪の女の子の人経由ってのは少し気に入りませんが……。」

「いやだから服……。」

「むう、良いじゃないですか朝までそのままでも。」

「ああ、もしかして寒いとか？ それならくつついて一緒に寝ますか？ 私は全然構いませんよ？」

「ニコっと……何故か頬紅くして全身を隠してソファに横になる俺に向けて言うてるセンパイに頬がひきつった。」

「いや、だって何が良いんだよ……全然よかねえつつーか……冗談でも全裸野郎にくつついてやろうと言うなし。」

「びっくりするわそんなもん。」

「い、いやいい……結構ですから服だけ……せめてパンツだけでも買って来てほしいというか……」

たまに変な時がセンパイにはあるんだが、俺は初めてこの時背筋に悪寒が走った気がしたのを誤魔化すつもりで、下着だけは何とかしてくれと要求する。

するとセンパイは、それまで頬を染めながらの笑みから、何処か不満げな顔に変化させた。

「む……まあ確かに全裸のままってのも不健康ですね。わかりました、今買ってきますね」

「あ、ありがたき幸せ……」

よかった……いくら馬鹿でも他人の前で全裸は流石に恥ずかしいので本当に良かったと、財布を手に持っているセンパイに向かって何度もペコペコと頭を下げて感謝した。

「あ、そうそう、関係ないですけど……私、一誠さんの全部を文字通り見ちゃったので、

「いつか責任をとってくださいなね？」
「はっ？」

そんなこんなで身動きとれずの夜を迎える事となったという以外は何とか無事に終わらせる事が出来た。

ただ、俺のパンツ買いに行こうとリビングを出る直前、物凄い良い笑顔でそんな事を言われた意味がワケ分からなかったがさ……。

過負荷で何が悪い

センパイ以外には基本変わらない

さて、色々あつたが、俺は特に別にの何も変わらずだ。

過負荷マイナスがどーたらとかも結局は誰にも為にもならんワケだし、逃げる為にのみしか使わない。

だから変わらない。

何時もの通り、空気で気持ちの悪い友達ナイナイの兵藤一誠で変わらない。

「あーあ、制服は買い替えかあ……。」

3年ポツチしか着ないつてのに、あれつて無駄に高いんだよな」

「事情アリという事で暫くジャージで過ごして貰います。

本当は直ぐにでも制服を用意したかったのですが、何分急だったので……」

「イイツすよ。ジャージ着てようが何着てようが、ガッコーじや空気やつてるしー」

結局センパイんちに泊まり、そのまま朝を迎えてこうして一緒に登校する最中、セン

パイが用意し、貸してくれた赤ジャージに身を包んだ俺は、済まなそうにしてるセンパイに気にするなど言っておく。

そもそも制服を破棄する原因は、あの化け物はぐれ悪魔が俺を食ったからなんだし、そこから連れ出してくれた事に感謝すれど文句付ける理由は無いのだ。

それに……まあ試してないから何とも言えないし成功するかも不明だが、その気にさえなれば『制服がボロボロになったので捨てた』という現実を嘘にして手元に戻せる……かもしれないのだ。

なのでそこまで悲観する必要もないし、元々あの制服に思入れなんての無いのだ。

無くなったなら新しいのを買う……それで解決して終わりの事にセンパイが一々気にする必要はないのよ。俺の事だし。

「にしても、一夜明けて冷静に考えれば考える程、世の中って不思議なもんですわなあ。お伽話みたいな話が本当に存在するとは……」

昨日はゴチャゴチャと有りすぎて半々で実感が無かったが、今俺の隣をテクテク一緒に歩いてるこの人が、あの廃屋に居た化け物と同じ存在かと思うと、やっぱり信じられない。

俺を現実に戻したあの女曰く『彼女達は悪魔とは思えないくらい甘つちよろいんだぜ？』との事らしいが、俺も正直そこは同意出来るね。

あの紅髪の方の悪魔さんは全然知らんから何とも思わんけど、センパイは少しの付き合があるから少しは分かる。

『変な奴』という意味だな。

「いめんなさい。

本当は言いたかったんですけど……」

ほら、そんな必要も無いのにわざわざ一匹の人間に謝ってやがる。

こんなん見せられたら、あのはぐれ悪魔とやらとは違って変な人だと思えないよね。

こう……俺が勝手に抱いていた悪魔のイメージ的には――

『ふつ、餌の分際で私の正体を自力で知ったからどうなんですか？ 餌は餌らしく私に黙って惨めに喰われなさいな。フッフフ…』

なーんて眼鏡を外して超冷酷な笑み浮かべ、キラリと犬歯を光らせながら言
わ、ねえな。

無い無い……あり得ねえわ。

「?」 「誠くん?」

「あ……い、いや……仕方ないんじゃ? だって俺に言う必要も理由も無かったし、結果的には知った事になってるし、それで良いじゃないすかね? あっはははは……」

変な妄想を展開させたせいでポーツとしていた俺に不思議そうな顔を向けてくるセンパイに慌てて気にすんな的言葉返す。

うん……無い。あつてたまるか。

そんなセンパイは何か嫌だ。てか嫌いだ。

「ははははは……」

「??」 「変な誠くん……」

取り敢えず笑って誤魔化す俺を、センパイは変な奴を見る目になるが、アンタも大概

変だぜと心の中で呟いときながら、そろそろ到着するガツコーまでの道を歩くのであった。

ところで、俺は誰かの家に泊まるのは初体験だった。

そしてそういう時は保護者に一言連絡しておかなければならないらしいのだが、昨日は色々有りすぎて訳が分からなくなっており、加えて携帯電話なんてものも持つておらず、というか保護者……いや両親とは既にまともな会話すら無かったので無断外泊という形となっていた。

故に、俺が別に家に帰らずとも両親は何も思わないだろうから良いだろうと思つていた……。

そう、あのチクリ野郎がまたチクリやがっていた事を知らないから……。

「おはようソーナ……と、セーヤの弟君」

「む……」

「リアス……」

あの男が余計な事言ったせいで話が拗れる事になるとは……静かな佇まいで俺の前に現れた紅髪の人を見たこの時は、まだ分からなかった。

「……。ええっと、紅髪の人……あ、先輩でしたっけ？」

あの男とツルんでいる正体悪魔な人……名前は確かあの女がちよこちよこ言ってた覚えはあるが、忘れてしまっているので暫定的に紅髪の人と呼ぶ事にし、早速その名で呼んでみると、紅髪の人はいよいよばい気分にもなったのか、顔を顰めている。

「私の髪を見てその渾名って所かしら？ 残念だけど私はリアス……リアス・グレモ

リーよ弟君——いえ、兵藤一誠君？」

「あ、そっすか………はい」

紅髪の人と呼ばれるのはお気に召さなかったらしく、ええっとグレモリー——
——
やっぱ紅髪の人に名前を教えて貰ったので、まあ取り敢えず話をする時はグレモリー先輩とでも呼ぶ事にする。

………つて、あら？ そういや俺って初対面の人相手にこんな喋れたっけ？

う、ん？ ……………あ。

「あ、え…………あ…………その…………すいません」

「え？ 急にどうし——」

「勘弁してください。自分が対人恐怖症な事忘れてたつてだけです。

人と喋るとかちよつと苦手なんで勘弁してください」

急に自分の性格を思い出してしまい、途端に身体の震えが止まらなくなったので、コツチを困惑した顔で見てる紅髪の人を避けるかの様に、さつきから黙って紅髪の人を見ていたセンパイの後ろに隠れた。

くそ、あの女とかセンパイとかとフツーに喋ってた事で折角忘れてたのに…………ちきしょう。

「な、何で隠れるのよ…………。私まだ何もしてないのに…………」

「そ、そういう人間なだけです——つてか今『まだ』とか言いましたよね？

てことはその内何か俺にする気ですか？」

「しないわよ！ 私はただ——」

何のつもりで俺等の前に現れたのかは知らんが、知らん他人……ましてやあの男と行動してる時点で信用が一切出来ない。

どうせ奴の事だ、俺に対してロクな事言っていないに決まってるからな……いや実際そうだけ。

「落ち着きなさい、二人とも」

センパイを盾にして隠れる俺、それを困惑と少しの怒りで俺を睨む紅髪の人という朝っぱらからの風景にしてはシュールな光景。

そのシュールな絵の『文字通り』中心に居たセンパイが、俺と紅髪の人両方に対して一言声に出すと、それまでざわついていた俺の精神は一気に落ち着きを取り戻し、紅髪の人も俺に対して何か言おう開き掛けた口を閉じた。

「リアス、貴女が私達の前に現れた理由は分かってます……昨日の事ですね？」

「ソーナ……ええ、そうよ。その……昨日……」

流石生徒会長というべきか、俺とは違つて他人相手に一切テンパる事なく紅髪の人と話をする姿に、情けなくとも頼もしきを感じながら、相変わらずセンパイを盾にする形でいる俺をチラチラ気にしながら何か言いたそうにしている紅髪の人。

その視線を受け、何が言いたいのかと一瞬考えるが、昨日という時点で例のはぐれ悪魔とやらの事なのは明白というか、もうそれしか無かつた。

「………………。彼には昨日全て話しましたから、そのまま続けても構わないわ」

それは馬鹿な俺の八千倍頭も察しも良いセンパイも分かつており、例の人外サミットについて俺を前に話して良いのか迷つてる御様子の紅髪の人に淡々とした様子で続けろと促している様も、やっぱしスゲーと思つてしまう。

「話した……そう、話したのなら話は早いわね。」

それなら今日の放課後、二人で部室に来て頂戴。

聞きたいことが今ので一つから二つに増えたから」

「構いません……」誠くんは放課後大丈夫ですか？」

「え？ あ…………いや、はい…………」

結局の所、この紅髪の人が俺等の前に現れたのは何処で仕入れたか分からない昨日の出来事についてであり、俺も来いということはその現場に俺が居た事すら既に見抜いているということ。

ともなれば、今センパイに確認されたのに『嫌だ』とは言えるワケも無いので、ただただ領きながら了承する他俺には道が無かった。

「だ、そうです。ではまた放課後に……」

「そうね……これ以上は二人のお邪魔になっちゃうし、私も皆を何時までも待たせる訳にもいかないから行くわね。」

それにしても……ソーナは変わったわね」

「……………人間界での私は支取蒼那よ」

「はいはい、じゃあまた放課後ね支取さん。」

そして一誠君？ ふふふ」

何やかんやで話は終わりを迎え、放課後また紅髪の人と会う事になったという流れで纏まった。

センパイを終始本名で呼んでいたのを最後の最後で訂正させ、紅髪の方は苦笑いしながら生徒会長としての名前を呼びながら最後の最後でセンパイの後ろから様子を伺っていた俺と目を合わせてウインクしてから一足早く学校へと続く道を歩いて行った。

「もう一人の悪魔さんね……………あ？」

スタスタと姿勢良く歩く紅髪の人の背を見て、小さく呟く俺はその横にのそのそと現れた御供の人達の中にあの男の姿があり、何やら此方を見ている事に気がつく。

「……………」

「……………チツ、こつち見てんじゃねーよ」

その瞬間、俺の胸の中にどす黒いナニかが涌き出てくる。

俺を気に入らんとばかりに見ているあの野郎のツラの皮を今すぐ剥いでやりたい……………そんな出来もしない衝動は、奴の姿が消えるまで止む事は無かった。

「あの女の言った通りか……………」

「どうやら奴が悪魔に転生つてのをしたのはマジらしいね……チッ」

別に奴の人生なんぞ蚤にも興味無いし、出来れば今後一切関わりたくも無い。

だけど、あの紅髪の人と放課後また会うという事は自動的に奴と物理的な距離が近くなる訳だ。

ハッキリ言つて、奴の近くに居るだけでストレスが速攻でカンストする自信があるの
で今から既に憂鬱だった。

「ハア……」

「大丈夫ですか？ 何か、勝手に話を進めちゃったみたいで……」

「いや、センパイ居なかつたらまともな会話も不可能でしたから。」

「フオローありますがどうぞいます……」

リアリティーエスケープ

「現実逃避で『奴が存在しているという現実を逃避』してやりてえが、目覚めたばかりで半端状態の今はまだ無理だ。」

俺がこのままマイナス成長でもすれば何時かは可能かもしれないが、まだ先は長そう
だぜ……と、助けてくれたセンパイにお礼を言いながら未だその背に隠れていた状態か

ら離れて隣に立つ。

「本当はリアスが冥界からの命令で始末する予定だったはぐれ悪魔を、私が勝手に始末してしまいましたからね……。」

眷属を持つ王としてきちんと話し合わないと……。」

「はあ……何か俺のせいではない……。」

考えなくとも、センパイを面倒な事に巻き込んだのはほぼ間違いなく俺のせいだ。

あのまま居辛い場所から逃げずにセンパイと普通に帰ってれば今頃——

「そう、か……昨日のことが無ければ俺は過^{マイナス}負^{スキル}荷の能力にも目覚めなかったし、センパイの正体も知らなかったのか……。」

過^{マイナス}負^{スキル}荷はどうでも良いとして、昨日の事が無ければ俺はセンパイの上っ面しか知らなかったと今気付き……あれ？

「ねえ、センパイ……。」

「なんですか?」

センパイを知った……と今こうして改めて実感したその瞬間、自分の中で変な感情がグルグル回っているのが何なのかが分からない。

だから無意識にセンパイに声を掛けると、いつもの様にセンパイは俺の話を見て返事をくれる。

「俺って昨日食い殺されたじゃないですか?」

「……。天気の良い朝にする話じゃあ無いですが、事実ですね」

「で、昨日話した通りに俺は復活し、センパイの家で互いに話し合ったじゃないですか?」

「そうですね……それが?」

急に昨日の話を切り出す俺に相槌を打ちながら、何が言いたいのかと問うセンパイは何時もの眼鏡で真面目そうな顔だ……。

何にも変わってない、ただ単に昨日の事でセンパイが悪魔だって事を知っただけで、センパイは俺を化け物はぐれ悪魔とは違って食い殺そうとはしない。

だから俺は……いや、違う。食い殺されないという所じや無い……。
そこから先の……。

「センパイが悪魔なんだなって知った昨日の事を改めて思い返してたんですよ。」

そしたら……なんての？ 自分でも良く分からないけど腹の中がフワアつとずるつていうか……心地良い気分というか……そんな気分になさつきから……」

「え？」

腸が煮え繰り返るのは数あれど、こんなフワフワはさた気分になるのは初めて……いや、久しぶりで何なのかが良く分からないというべきなのか？

とにかくこの分からない気分になっていると、上手く説明出来ないままセンパイに話すと、センパイは目を丸くしながら固まっていた……って、何でだよ。

「あれ、センパイ？」

変な事言ったか？ とちよつと心配になって目を丸くしつばなしのセンパイの顔を覗き込むようにして顔を近付ける。

そういやこれも昨日以前だったら、他人相手に此処まで接近するなんて絶対出来ない事だったのに、自分から何の躊躇無しに出来てるな……俺。

「(ハツ!?) な、な、なんですか?」

ブーツとしてたのか、顔を近付かせて初めて意識が戻ったセンパイが、珍しく吃っている。

「いや、だから俺が感じてる意味不明なこの感情が何なのかなあ……つて」

「さ、さあ? 抽象的過ぎて私にはわかりませんね! 全く! これっぽっちも!! 解りません!!!」

「あ、ああ……?」

ささつと俺から少し離れ、妙に大きな声で知らぬと顔を逸らして言うセンパイに俺は何をそんなテンパってるのかが分からずに首を傾げてしまうのと同時に、この珍し過ぎる反応からいつて何か知ってるだろと思うんだ……ふむ。

「センパイって嘘吐く時顔を逸らしますよね。」

「今もそうだ……てことは——」

「えっ……う、嘘……!?!」

何てことない、普通に他愛のない話でもするかのように然り気無く口にした俺の言葉にハツとするセンパイに、俺は内心ニタリと笑ってしまふ。

割りと単純な所もあるんだな……とね。

「はい、勿論嘘ですよ。」

まあ、お陰でセンパイが今嘘吐いた事はわかりましたが……」

「なっ!?!」

自分なりにカマを掛けてみた所、見事に引つ掛かってくれたらしく、センパイはシヨックを受けた顔となる。

まあ、馬鹿にカマ掛けられりやあそうもなるのは仕方ないけど、俺は俺で今も感じるこの妙な気分が知りたい……だから俺は『悪くない』。

「う、うう〜！　そ、それも過負荷マイナスというのに目覚めたが故ですか？　変に意地が悪くなっていますよ」

「いやそれは全然関係ないですよ。」

普通にこの妙に悪くない気分が何なのかセンパイに聞こうかなと……はははは」

恨めしそうに俺を睨むセンパイだが、何故だかちつとも怖いとは思わず、寧ろ自分の中にあるざわざわがより心地よくなり、思わず笑みが溢れてしまう。

「し、知りません！　自分で分からないのを私に分かる訳ないじゃないですか！　ふ、ふん！」

「あ、ちょ……」

だけどしかし、センパイからすれば小馬鹿にされた気分ではかないらしく、変な意地を張る子供みたいにわーわーと言ってから俺を置いてさっさと歩き出す。

しまった、やりすぎたと後悔しても今更で、ヤケに顔真っ赤にしながらズンズンと歩くセンパイに走って追い付き、その横を歩きながら次はフオローの言葉をと口を開くも、あんまり効果は無さそうだ。

「信用してないとか言つといて……くう……!!」

「え、ああ……それ撤回しますわ。」

センパイだけなら信用しま——もが!

「そ、それ以上真顔で言うのは止めてください……!!」

身体が熱くてどうにかなにそうだから……!!」

「もがもが……」

信用してますと口にしようとした瞬間、真つ赤になつてるセンパイが、初めて見るよ
うなテンパリ具合で俺の口を無理矢理塞ぎ、取り敢えず黙れと鬼気迫る声で言うので、
その迫力と相俟つて俺は黙つて何度も頷くしか出来なかつた。

……余計な事聞いたのか俺は?

過負荷の絶対値とセンパイの本音

放課後に嫌な事がある日の授業って、普段と同じとは思えないくらい嫌味に時間の経過が早く感じてしまう。

学校に到着し、学年の違うセンパイとそこで別れ、そこからは何時もの様に独り空気の如く教室に入り、自分の席に座って授業を受ける。

その間、まるで遠い昔の事の様に思い出される、センパイとツルんでる所を見られた結果からおこる周囲から受ける嫌がらせは、センパイが言った通り本当に無かった。

これには素直にセンパイがすげえ——いや、雑誌で見た現代っ子風に言えば『センパイってマジパネエ!』と思いながら、のそのそと買ったばかりのシャーペンの芯を一本一本折る作業に集中するんだが、まあ流石にセンパイとツルんでた事は周りにとつてシヨッキングだったんだろう……嫌がらせは無かった代わりはヒソヒソ話(俺の事)だった。

「昨日の朝、誠八の弟が屋上で生徒会長と居た話……」

「ああ、それなら見た見た……」

けど意外だよな……ていうか、純粹に悔しいんですけど」

「だよな……支取先輩って美人だし……。」

てつきり4組の匙が美味しい思いをしてるのかと思つてたのがまさかのだけぞ？」

「何でだろうな？ いや、1000歩譲つて誠八とかだつたら何かまだ無理矢理納得させられるけど……見ろよ、誠八の弟……朝からずつとシャーペンの芯折つてやがるぞ

……」

「ああ……ピンポイントで不気味な事するよな……。」

この前なんて鉛筆を1ダース分カッターで粉々に砕いてたぞ」

「マジか……誠八が関わりたく無いと思うのも分かる気がするぜ」

「……………」

まあ、普段通りだな。

上履きに画鋏仕込まれても無いし机の中身も無事。

センパイが言つた通りになんもされてない。

平和……実に平和だ。

周囲の人が俺見て何か話してるだけなら痛くも痒くも無いね……フフフ。

ああ、ちなみにそのヒソヒソ話の輪に入ってる連中の中にあの男も居るが、見た限りは俺を気に入らん目で見てくるだけで何にも言わずって感じた。

見られるのも見るのも嫌なのに我慢し、目ン玉抉り取りてえとか思うだけに留めてる俺は悪くないよな？

「では今日は此処までだ。また明日な〜」

この分ならストレスもあの男からの視線だけに済みそうだと一瞬掛けた検証で理解し、この日の授業は終わって放課後となった。

「……………」

「……………」

さてさて、センパイと一度合流しないとねえとかボケーっと思えながら教科書数冊を鞆の中に入れてみると、窓際が一番後ろの席であるあの男が、扉側の一番の後ろの席である俺の後ろから、通り様に小さく話し掛けてきやがった。

その瞬間、今の俺なら『リアリティエスケープ』で奴の存在を嘘に出来るんじゃないかと思って程にどす黒いパワー的なものな内から溢れてきた気がしたが……これ以上余計な真似してセンパイに迷惑を掛けると、コイツを消して喜ぶよりも遥かに死にたくなるので止めて我慢して黙っていると、奴はそのまま去り際言うのだ。

「分かつてると思うが逃げるなよ？」

「お前はすぐに逃げる癖があるからな……じゃ、また後で」

「……………」

逃げるなよと言われた。分かっている事を一番言われたくないこのクソ野郎に。

それは多分、奴からすれば馬鹿にしてるつもりじゃないんだろう。

俺が逃げ腰野郎だつて分かつてて釘を刺しているだけなんだろう。

「……俺の気分は。」

「……………」

「うっ!? き、気分が……おええっ!!?」

「な、なに……ふ、震えがとまら……ない……!?!」

「い、嫌だ……怖い……怖い怖い怖い怖い！ ヒイヒイイツ?!?!?」

キャパシティーオーバー マイナス
許容範囲越えで最悪だった。

くそ、くそ……分かっていてもノウノウと俺の居場所を取ってヘラヘラと生きてるのが憎い。許せない。殺したい……。

とまあ、こんな感じにこれから大事な用事を前にして気分が絶不調となりながらも、センパイの顔見たら何とかなるだろうという根拠も無い確信を持って俺も教室から出るであつた。

その際、集団食中毒にでもなつたのかクラスメートの殆どが死にそうな顔して吐いたり蹲ってたりしてたが……何を食つたのだろうか？

「ああ、マジで絶不調だ。このまま逃げたいな……」

後にした教室からまだ鳴り止まぬ悲鳴と嗚咽が、何故か気分の悪い筈である俺の過負荷を増大させてる気がしたのは……まあ多分気のせいだ。

そもそも初めは単なる人間でしか無いと思っていた。

恐らくあの日の事が無ければ今も出会う事が無かつたくらいに、印象が無さ過ぎる人だった。

しかし今は違う。出会えた事の己の運の良さに感謝すら覚える。

人でありながら人でなしな心を持ち、触れたら容易く壊れてしまいそうな不思議な人。

力なんて無い……私達のような種族が指一本で殺せてしまう程に弱い彼……。

何時もネガティブで弱虫で他人を信用しない臆病者。

端から見たら良いところなんて無いと皆は言うだろう……だけどそれで良い。

彼の良いところは私が知っているし、これからもずっと誰にも教えない。

彼の親兄弟ですら知らないだろう彼の笑う所や、無邪気に驚く顔は私だけが知ってれば良い。

「あー……えー……失礼、します？」

対人恐怖症で触れられたら震えてしまう怖がりな所も、今朝みたいに心の成長が止まってるせいで平気な顔してあんな事を言うのを聞くもの私だけで良い。

「ええっと、諸事情により今から生徒会長と……つて、あれ……センパイだけ？ 他の人は？」

「他の者は各々何時もの通りに生徒会の仕事をしていますよ」

不思議そうに首を傾げるその仕種も。

「あ、ああ……そうですか。」

どうも多人数の中つてのは慣れる気がしないもんで……」

ビクビクと怯えるその顔も。

「ふふ……朝カツコいい事を言って動揺させた癖に、そこは全く変わりませんね？」

「カツコいい事？ ……うん？ 何の事だかよく解りませんが、これは多分1万2000年くらい経たないと直らないかなあ……俺だし」

諦めが呆れる程に早い所も。

「それじゃあ行きましようか一誠くん。」

ああ、変に緊張しなくても平気ですからね？」

「は、はあ……初対面の人と会うつてのは俺にとつちやあエベレスト級のハードルなんだけど、そももいつてられないのは分かってますよ」

「大丈夫です、一誠くんの秘密はちゃんとぼかして説明しますから……。」

それじゃあ、手を繋いでくださいな？」

「うっす……」

私は胸を張って堂々と言ってやれる。

彼が好きだと……。

まだ彼には言わないけど。

「今思ったんですけど、手を繋ぐ意味ってあるんですか？」

鈍くて、意図が掴めず疑問に思うその顔が好き。

「ありますよ。ほら……自分で気付いて無いみたいですけど、震えが止まってるでしょ？」

「おお、言われてみれば確かに気持ちがお楽に……」

なるほど、それを見越してるとは、やっぱりすげーやセンパイは」

半分本当の事を話した瞬間、何の疑いも無く私に笑みを向けるその顔も好き。

「よーし……奴のツラは見たくないけど、これなら何とか我慢出来そうだと今だけ思える！」

適当な事を言うその声も好き、好き、大好きだ。

死んだ様に生きてるだけと言われていても、ちゃんと彼の体温を感じ取れるこの行為を含めた全部が好きだ。

……ふふ、姉さんや家族は今の私を見て軽蔑しますか？ それとも許してくれませんか？

まあ、許さなくても構いませんけどね……一誠くんから離れる気はとうの昔に消え去りましたから。

オカルト研究部の部室では、二人の客人を招く準備をしていた。

「学園だと他人のように振る舞ってたし、今日は結構楽しみだったりするのよね」

いそいそと部員……いや眷属達が準備をしてる中、備え付けのソファに座る王・リアスは言葉の通り楽しそうに微笑している。

王が楽しければ眷属達からしても何よりだったりするのだが、唯一兵士の駒である兵藤誠八は余り楽しそうには見えなかった。

「……」

「あら、まだ不貞腐れてるの？ ホント仲が悪いわね、セーヤと一誠君は」

「別に俺は……」

不貞腐れては無い……と楽しそうに微笑みながら自分を見てくるリアスに言いかった誠八は結局言えずに、掃除する手を再び動かす。

仲が悪い……まさにその通りだからだ。

いや寧ろ終わっているというレベルと言える。

(相棒も色々あるんだねえ……)

(煩いぞドライグ)

そんな彼の心境を彼の中に存在しているが故にダイレクトに受信し、少しおちよくる声で誠八の意識に直接語り掛けるこの声の正体は、誠八が『生まれながら』にして宿る神器……ブラスレット・ギア赤龍帝の籠手の力の根源であり、かつて二天龍と云われた伝説の龍……ウエルシュ・ドラゴン赤い龍だ。

(俺も中から見てたが、イツセー……だったか？ アレは本当の意味で今まで見たことの無い人間だな)

(……)

(なんていうの？ 何しても負けそうっていうの？ そんな感じするし)

話すつもりもなく無言で床を掃く誠八に話続けるドライグの言ってる事は少し当

たってるのかもしれない。

(まあ、俺には血の繋がった家族云々が存在しないからその気持ちは理解できんが、少しはまともな関係になったらどうだ？)

奴も此方の事情を知ったんだからさ)

(……………無理だな)

宿主である誠八にお節介とまではいかない進言をするが、あつさりとは却下する。

誠八としても昔は何故ああまでして自分を拒絶するのかが分からず、兄として上手くやろうとしていたつもりだった。

だけど最早修復は不可能なまでにお互いがお互いを嫌っている領域まで来てしまった。

だから誠八は諦めた……諦めてしまった。

そして残ったのは……。

(アイツと拘わる人間は皆腐る。

だから俺はずっとアイツを孤立させていた……なのに、ソーナ・シトリーがまさかあ

そこまで……)

人間から悪魔に転生しても残った、本能的に感じる一誠の『人間として終わつた』部分と、それに触れることで変化してしまう人間が出る事への危惧だけ。

だけど既に一誠は捕まえてしまった。

自身に自覚は無いけど、一誠は——

コンコン……

「む……来たわね……どうぞー!」

(早く、アイツと同じ人種を増やさない為にも、彼女を引き剥がさない——っ!?)

「失礼しますよりアス」

「し、失礼しまー……な、なんだこりや……」

「暗いし何か怖い……」

部室に入ってきた一組の男女。

一人は誠八と瓜二つな顔立ちの男。

もう一人は学園生徒会長であり悪魔。

本来なら関わる事も無かった二人が扉を開けて入ってきた瞬間、誠八……そして他のリアス眷属である木場祐人と姫島朱乃の顔つきが変化し、全身に氷水を掛けられたと錯覚するほどの寒気が襲う。

(な……一誠……なのか？ さっきまでとはまるで違う……！ な、何だこの不快感は……！ 何だこの気持ち悪さは!?)

ほんの少し前までとはまるで違う、弟の雰囲気は今すぐ消し飛ばしてやりたいと健全に思う誠八。

(だ、誰だ……彼は?)

僕が前に見た時とは明らかに違う……この嫌悪感なんだ……！)

一度だけ見たあの時と、今とは全く違う……見ただけで心が抉られそうになり、思わず切り捨ててやりたいと本能的に感じる祐人。

(セーヤくんと顔は似てますが、それは姿だけで中身は全く違う……。ただ見ただけでここまで不愉快な気分になる方がいるなんて……!)

隣で唾然とした様子で双子の弟を見ている誠八と、そわそわと落ち着き無い様子で周囲を見ている一誠を間近に見て、当たり前前の様に吐き気と電撃で炭化してやりたいと思ってしまう朱乃。

人と人外のハーフ。

人から悪魔へと転生した二人。

意味は違えど中身は同じ……人間を持つ者。

リアスと最後の一人である小猫は、気まずそうに小さく促される形でソファにソーナと共に座る一誠の姿を見ても別段気にしてる様子は無い。

人の側面を持つ三人だけが、小さく縮こまる一誠の……その雰囲気にも明確な嫌悪感を示し、そして思った。

人はあそこまで腐れるのかと……。

「座つて頂戴、今お茶を用意するから。」

朱乃……朱乃？」

「っ!? は、はい……」

「どうしたのよ? ほら、二人が来たからお茶の用意を……」

「う……か、かしこまりましたわ……」

一誠の持つ気持ち悪さに吞まれ、リアスに呼ばれて初めて我に返った朱乃は、命じられるまま……そして少しでも一誠から距離を置こうと部室の奥に設置した給湯室に入る。

その様子に、リアスは『らしくないわね……』と首を傾げながらも深くは考えず、改めて呼んだ二人のお客人に視線を戻し、ニコリと笑みを浮かべる。

「さて、と。朝も言ったけど、改めさせて貰うわね。」

私がリアス・グレモリーよ。歓迎するわ兵藤一誠君」

「はあ……………」丁寧にとども……………」

リアスの全く敵意が無い笑顔と声。

後ろに控えていた祐人と誠八は険しい顔つきで何も感じてなさそうなりアスを疑問に思いつつ一誠を見つめ、小猫は興味もなさげな目で一誠を観察中。

(うーん……………見た目は『普通』の人間だし神器も無い。

昨日の現場にあつた血の量を考えれば、今こうやって居るなんてありえない……………何かあるわよね、この子)

(……………普通。何も無い。セーヤ先輩とは真逆……………)

(さてと……………リアス達が始末する予定だったはぐれ悪魔を、私が始末したという事は気にしてる様子はまるで無い。

やはり、一誠くんが何故無傷で生きているのが知りたいってだけのようね……………教えたくないけど)

(……………なんか胃がキリキリしてきた)

基本的にコミュニケーションは、この時点で『合わないわ』と、さっきまでソーナと手を繋いで安定させていた精神を早速ぐらつかせるのであったとか。

続く

ソーナさんのマジ

あの女曰く、過^オ負^レ荷はこの世に一人しかいないらしい。

『この世界で初めてのの——』という言い方からして、今まで他に居たのかもしれない。会いたいとは思わんが。

あの女が何者なのかは取り敢えず横に置くとして、という事はだ、悪魔に過負荷と言っても通じ無いということになる。

似た能力に神器というのがあるらしいが、俺はそんなもん持ってないし、厳密に言っちゃえば神器と過負荷は違うし……どうしたものか。

いや、別に正直に言えばそれで終わりなんだろうけど、過負荷を知らない時点で信じて貰えないかもしれないし、何よりさつきから此方を敵意丸出しで見てくるあの男と……あれ、よくみたら金髪の人と黒髪の人と同じ目をしてる………ああ、嫌われてるのか。

「なるほど……偶然はぐれ悪魔に出くわしたと」

「ええ、そうですよね一誠くん？」

「ああ、はい……」

金髪の人、黒髪の人、そしてあの男からの視線にそろそろ鬱陶しさを感じる最中、俺の代わりに先日の事情を紅髪先輩に説明してくれているセンパイに次いで相槌を打つ簡単な作業をする。

トークスキルというよりは対人スキルが壊滅的な俺には、初対面でしか無い他人である紅髪先輩とまともに話をする事は不可能。

よってこの場合はセンパイに任せるという形になつとる訳だが、やはり偶然出くわして死にかけてた所をセンパイに助けられたってだけでは信じて貰えないらしく、紅髪先輩はかなり怪しんでいる様子だ。

「助けた……それは分かったし、本当でしょう。」

「けどねえ……」

「何ですか。本来なら貴殿方があのぐれ悪魔を始末しなければならなかったのですよ。」

「それをモタモタしてる間に、一般人が殺されかけた……」

「む……。それを言われると痛いし、彼には申し訳無いことをしたと思ってるわ……。」

だからこそ、現場にあった血の量から考え、彼が今こうして無傷で居る理由が知りた
いのよ。

まさか一日程度で此処までソーナが完治させたとは……悪いけど思えないのよ」
「完全に死にさえしなければ何とでもなります。」

現に一誠くんはこうして私の隣に居る……それが何よりの証拠です」

俺がなまじ生き残ったせいで、面倒な事にセンパイを巻き込んでしまってるのは俺で
も解る。

そして過負荷マイナスの事を隠しながら説明しているせいで更に面倒な事になっているとい
う事も……。

一歩も両者退かずな話し合いは平行線のまま、ただ時間だけが過ぎていく。

「……。さつきから貴方は何も言わない様だけど、あなたからは何か言うことは無いの
かしら？」

「あ……いえ特には……」

「あのはぐれ悪魔に殺され掛けた所をソーナに助けられたと……？」

「はい……」

教えても何にもならない。

そうセンパイが此処に来る前に言ってたから俺も誤魔化す。

ジーツと真つ直ぐ見る紅髪先輩の目から思わず顔を逸らしてしまったが、これまでの行動と挙動から俺が人見知りの激しい性格してる事は向こうに伝わっている筈だし、何処も怪しきは無い。

恐らく紅髪先輩の後ろから俺を見てる忌々しい男からも伝わってるだろうからな。

「………………。そう、解ったわ。

貴方もそう言うのなら私もこれ以上聞かない。

そもそも私達がさっさと退治してれば、貴方を巻き込む事なんて無かったしね」

俺もセンパイも頑な事にこれ以上は無駄だと感じたのか、紅髪先輩は少し肩を竦める。

どうやらしつこい性格ではないらしい。

「ごめんなさい…………怖かったですでしょう？」

その上、あの化物と遭遇した原因としてからなのか、謝られた。

その瞬間、後ろに居た例の三人の顔が露骨に歪んでいるのが俺から確認できる。

『そんな奴に何故謝る必要がある』

的な顔で。

まあ、そういう扱いは慣れてるし、初対面の人からの第一声が『死ぬ』と顔面パンチなのが殆どだし、寧ろ普通に謝られる方が背中が痒くなる。

「いえ、あんな所に不法侵入して勝手してたのがそもそも——あ、!?」

ゾワゾワと全身に変なものが駆け巡るのを誤魔化す様にして謝る紅髪先輩の先輩に気しないで欲しいと告げようとした正にその時だった。

色々と在りすぎて完璧に忘れていたが、俺が元々あの場所に出向いたのは——そう。

「ジ、ジローとその子供が無事なのか確認してねえ……」

にやんこと戯れるという理由だ。

それをあの化物のせいで台無しにされた挙げ句一度完全に食い殺されたんだつた……。

うう……思い出してから急に心配になってきたぞ……ジロー……。

「ジロー? ……? えつと……?」

「一誠くん?」

急にソファから立ち上がり、彼女等には伝わらない名前を口にしたせいで、センパイと紅髪先輩……ついでに無表情でこっち見てた白髪の人とか例の三人もキョトンとしている。

「あ、いや……元々あの廃屋に行った理由が、そこに住み着いてたにやんこ——つまり猫に会いに行こうとしてたんですよ。」

ジローって雌の白猫とその子供達なんですが……あの化物のせいですっかり忘れてた……無事なのか……」

何の事だか分からないセンパイと紅髪先輩にジローつてにゃんこの事を教える。

「だからあそこに居たんですか……」

教えてくれたら一緒に行ってたのに……」

「いや、センパイをあんな小汚い場所に連れてくなんて失礼かなって……」

「そんなの気にしませんよ。」

地獄だろうが、私は一誠くんについて行きますから」

「え……あ、はあ……」

悪魔にとって地獄は逆に天国なんじゃねーのか？ というふとした疑問に突っ込まず、俺は真顔でそう言ってきたセンパイに曖昧な返事をする。

いや、申し訳ないけど今はジローとその子供達の無事が気になってしょうがないのだ

……。

これ終わったらまた行くか……。

「猫……私は見なかったけど、セーヤは見た？」

「いえ……」

「朱乃は？」

「私も見て無いですわ……」

「祐人も？」

「はい……」

紅髪先輩が仲間にジローを見たか確認してくれてるが、どうやら見てないらしい……。

うむむ……まさか俺が食い殺され、センパイが来るまでの間に……な、なんて……はは、だとしたら俺は今すぐ幻^{リアリティー}実^{エスケープ}逃^フ否で食い殺されたという現実から逃げて――

「私は見ましたよ……その子達」

「!？」

己の中の過^{マイナス}負^ス荷^スが黒く増大しているのを感じながら、初めて自分の意思で発動させようとした正にその時だった。

それまで一切喋らずに俺を見ていただけの白髪の人が、小さく……それでいてこの場

に居る人達によく聞こえる声で言ったのを俺は聞き逃さなかった。

「見た……見た？ ジロー——あ、違う、白い猫とその子供達を。」

親猫含めて全部白い猫5匹を見たのか!? あ、これも違う、見たんですね!?

気付けば俺は、人見知りとかそういうのを忘れて白髪の人元へと近付き、割りと小さいその両肩を掴んで揺さぶって確認する。

「ちよ、おい！」

その行動が常識外れで行儀が悪いせいとか、それまで睨んでただけの男が俺に向かって何か言おうと口を開く。

だが、元々この男はクソ程に嫌いだ。加えてジロー達の安否の方が俺にとっては何よりも優先的に知りたかった。

「何も知らねえテメーは今黙れ……」

だから、久々に殺意の籠った目であの男を睨み付ける。

「っ……………」

するとどうだ、男はブアツと汗をかきながら固まって動かなくなった。

珍しい事もあるもんだ……………とはこの時思わず、取り敢えず邪魔が消えた所で再び白髪の人に視線を戻す。

「で、本当にジローは無事なんですか？」

「え、ええ……………あの、私は後輩なんでタメ口で構いません——」

「はい分かった！　で、無事なの!？」

そんななんでも良いんだよ。

どうせもう2度と話す事なんて無いんだから。

んな事よりジローだよジロー!!

「は、はい……………無事に逃げ仰せてましたよ……………」

無事だ。

2度の確認の末に得た白髪の人の言葉は、それまでテンパってた俺の心を落ち着かせるには十二分であった。

「……。そう、か……。よ、良かった。

ジロー達……。逃げられたんだな……」

その瞬間、力んでいた俺の身体は突如として力が抜けていく。

驚いた顔で俺を見る白髪の人の肩から手を離し、フラフラと目を丸くして座ってるゼンパイの隣に戻ると、そのまま崩れ落ちる様にして座り込む。

「アイツ等が無事で……。ホント良かった……」

1年以上も付き合がある、ある種友人とも言えるジローが死んだとなれば俺はこの世界を今すぐ嘘にしてやってた……。それくらいジロー達は大事なんだ。

だから無事で良かった……。心からそう思える。

「猫……お好きなんですか？」

「え、あ……まあ……」

「そういやセンパイには言っただけか……」

目を丸くしっぱなしなセンパイに頷きながら、今日にでも様子を見に行こうと決めると、センパイに続いて紅髪の人が、少し面白そうなものを見る顔つきになっている。

「へえ、中々可愛らしい趣味じゃないの」

「殆どの生物に嫌われてるけど、猫だけは俺を嫌わずに居てくれるから好きなんですよ」

「ほら、にゃんこはいきなりバットで頭力子割る真似はしませんから……」

「何が楽しいのか、少しニヤ付いている紅髪先輩に好きな理由を教えた途端、ひきつった笑みに変わっていた。」

「……………」

「あ、その白髪の人……ごめんなさい」

情報提供者である白髪の人には、迷惑を掛けちゃったので謝る……というよりはジーツと見てくるその視線に堪えられなかったからというのが強いが。

「いえ……でも分かりました。」

あの子達が気にしてた人間が先輩だったんですね……」

「え？」

「あの子達が言ってたんです。」

『トモダチが危ない』って……それが兵藤先輩なのが今分かりました」

印象的な金色の瞳を向けながら、まるでジローの言ってる事が解る的な物言いに首を傾げていると、その顔を見て察してくれた紅髪の人が口を開く。

「彼女……小猫は元々人間じゃなくて猫の妖怪なのよ。」

だから普通の猫と意思疎通が可能ってわけ」

「猫……よーかい……？」

「搭城小猫です……よろしくお願いたします、兵藤先輩……」

要するに化け猫って奴か……と、悪魔以外の人外もマジで居るんだなあと白髪の人
頭からにゃんこの耳が出現しているのをポーツと眺める……………が。

「あ、そつすか。ども……」

凄い微妙な気分だった。

「あら、猫好きなのに随分と反応がドライね？ 確か最近の男の子は小猫みたいな姿を
好むのが多いつて……」

何処から獲た情報かは知らないけど、紅髪先輩はそんな事を言う。

「いや、パツと見は人間と変わらないのが猫の耳付けてるだけじゃないですか。

どう思えつてんすか逆に」

「え……………ええつと、可愛いとか？」

いつの間にか挙動不審が消えて、多分真顔になって紅髪の先輩に言う俺に少し戸惑いつつ答えるので、俺はじーっと白髪の人顔と頭の耳を見てみる。

「……………」

「……………」

可愛い……………猫の耳取っつけただけの白髪の人が？

「……………」別に思わねー」

うん、全然そうは思わない。

てか、例えその化け猫で人と何ら変わらない姿でそんな耳付けられても『にゃんこを嘗めんな』としか思わない。

流石にそれは言わないけどさ……………。

「……………。あ、そう」

「フツ……………」

「……………」

素直な感想に紅髪の先輩が何か知らんけど呆れ顔になって、センパイも何か知らんけど勝ち誇った顔になってる。

白髪の人は……………猫耳引っ込めて無表情だから知らん。

「おい、随分と慣れてきて調子に乗ってるみたいだが……………」

「は？」

何やかんやで上手い具合に話をうやむやに出来た……………てな所で今まで固まっていたあの男が突如白髪の人の隣に立って俺を睨んでいた。

「やはりお前はダメだ。危険過ぎる……………こうやって人をズルズルと墮落させる……………シトリ先輩が良い証拠だ」

「……………。どういう意味ですか？」

俺……………そしてその隣に座るセンパイに視線を移しながら、訳のわからん事を言う男に

センパイの目は細まる。

「シトリー先輩……俺は最近知りましたが、コイツは——一誠は他人と共に居るとその人をどんどん墮落させるんですよ……。貴女には既にその兆候がある」

「あ？ 何を勝手な——」

「さっきお前は黙れと言ったよな、だから今度はお前が黙れ。

俺は今シトリー先輩と話をしてるんだよ」

なにも知らねえ癖に知った事をほざく男に対して文句を言おうとした瞬間、男は俺を殺気混じりで睨んできやがった。

その瞬間、俺の中のナニかが再び唸り声をあげる。

「………………。やつぱりテメーは嫌いだぜオイ」

「………………。つ。ほらな、その腐った目と雰囲気……それがシトリー先輩を墮落させる証拠なんだよ……」

顔を歪めながらも、ハッキリと俺がクスだと言い切る男に、いよいよ本気で消してや

りたくなってきた。

いや……多分今なら出来る……今なら完全にリアリティーエスケープ幻実逃否が発動可能だ。

何やら黒髪の人と金髪の人が俺を気持ち悪いものをも目の前にしてる顔付きになつてゐるが、知らん。

取り敢えず今はこのエセ野郎を消して——

「………………。だから、何ですか？」

「っ!？」

今度こそ自らの意思で発動させようとしたその瞬間、またもやセンパイが俺の手を握りながら、あの男に向かって無の表情を向けた。

お陰で俺の中の黒いナニかが一瞬にして霧散してしまい、やる気が失せてそのままソファに座り直す嵌めになるわけだが、考えてみたらせつかく誤魔化した所なので、我慢すべき場面なのだ。

「な、何って……そ、そもそもシトリー先輩は何でそんな奴と……」

無表情ながらも、異様な迫力で見据えるセンパイに男はしどろもどろに目を泳がせる。それは隣で見てた俺も正面に座る紅髪先輩の先輩も同様だった。

「貴方は一誠くんの兄という事になってますが、今ハッキリ解りました。貴方は一誠くんと相容れない存在なんだと……そして、その一誠くんと好きで一緒に居る私も……ね」

「なっ……ち、違う！ 俺は只、コイツのせいで人が墮落するのは見たくな——」
「今言いましたよね、だから何ですかと。」

ダメになる？ 墮落する？ 笑わせないで貰えますか。

それは貴方の勝手な思い込みですよ……だって——」

淡々と物を言うセンパイに、男は何故か必死になって俺から引き剥がそうとするが、逆にセンパイは此処で笑顔になった。

そして俺を含めた驚く面々に向けて言い切った。

啞然としている紅髪の先輩達に1度頭を下げてからさっさと俺を連れて出ていった。

「猫の件で上手くはぐらかす事が出来ましたね？」

「え、はい……」

「しかし本当に仲が悪いんですね、貴方と兵藤君は」

その手をずっと離さずに繋ぎながら……。

一人焼肉からの携帯電話

色々あつて無事に誤魔化せた。

が、その過程でどうやら俺が奴に対してと同様、奴も俺が嫌いらしいということがハッキリ解つた。

まあ、逆に好きだとか言われたらその場でのたうち回つてたと思うし、それを考えたら嫌われてる方が全然良い。慣れてるしね。

その後は特に何も無い日々で、唯一変わった所と言えば紅髪の人と白髪の子と学校ですれ違う時があれば軽く会釈する程度つて関係になつたかな。

黒髪の人と金髪の人とあの男からは滅茶苦茶気持ち悪がられているケド。

俺を色々助けてくれたセンパイとは相変わらずつて関係で、センパイの御供の人達とも……まあロクに会話はしてないけど認識し合つてる関係だ。匙君によく怒られるケド。

そうそう、黒髪の人と金髪の人同様に、センパイの御供の人達も俺を見て気持ち悪がるのかとか過負荷に目覚めた時ふと思つてたりしてたが、実際彼等と対面しても何も言われ無いし気味悪がる事もしなかつた。

あれ、何故に？ とか思っても質問はしなかったが、どうも彼等は、俺がセンパイとツルんでると、センパイ経由で俺を1年の頃から知っていたから……らしい。

だから気味悪がる事が無いとか言われても何となく納得出来なかったが、まあ彼等がそう言うのだからそうなんだろう。俺は悪くない。

で……俺自身は――

「いらつしやいませ、何名様ですか？」

「一人です」

「え……。あ……。此方どうぞ……」

俺のクラスにのみ発生した謎の集団食中毒のせいで、学級閉鎖となつてしまったので、普段秘密でやつとるバイト先のおっちゃんからの臨時収入ポナナスを獲たので、格安の焼き肉屋にまたやって来た。

「ファミリースェット2人前で」

「はい、ファミリースェット2人前……。 (学生？ 一人なのにファミリースェットで……)」

「あとクリームソーダ。以上です」

「はい、暫くお待ちくださいまし……。 (不幸そうな顔してるわね……。) どうか、何だろうこの不愉快な気分……)」

前回よりも3ランク下げた焼肉屋だが、俺は別にグルメでは無いので喰えれば正直何でも良い。

終始俺を可哀想なものを見る目を向けてくる店員さんに気分が良かったので微笑んだら顔を真つ青にされた挙げ句逃げられちゃったというアクシデントがあったものの、無事に注文の品がやって来たので気にせずにお食事のお時間を楽しむ事にする。

「……………ぬ、ふ、ふ」

注文の品置いて逃げる様にして去っていった店員さん横目に、先ずは基本からと小さいトングでカルビを1枚掴み、熱した網の上に乗せる。

ジューというあの音と共にお肉様の香りが鼻を通過し、俺の腹は早く食わせろいと喧しく鳴り始めるが、フライングは駄目だ。

表裏共に程よい焼き加減を目指して食べる……それが美味いんだからね。

「ぬふ……クククツ……」

「あの学生さん一人で笑ってるわよ……」

「こ、怖い……焼いてるお肉を一点見しながらだから余計に……」

2……1……よし、良いか。

表裏共に繊細に焼いたカルビを手元に置いておいた割り箸で掴み、辛口タイプのタレが乗ってる小皿に乗せて絡めて……

「んぐ……」

喰らう。囓む。飲み込む！ そして美味すぎる!!

「グス……美味しいなあ……」

おっちゃん、あんまりシフト入ってない俺なんかにも臨時収入をありがとう！

お陰で俺は今限定で超幸せです！

「な、泣いてる……あの学生くん……」

「あの制服って確か去年共学になった駒王学園よ……。友達居ないのかしらあの子……。とうか今お昼なのに授業はどうしたのかしら……」

「美味しい、美味しい……クリームソーダもおいちー」

やっぱり焼き肉は一人が良い。

ていうか一人じゃないとこの気分は多分味わえないし、聖域モードにもなれない。

誰にも文句言われず自分のペースで焼いて喰らう……。この時間が俺は本当に大好きだ。ふふふ。

「うーん……むふふ……」

ああ、もう全部ひっくるめてサイコー

兵藤誠八は後悔していた。

弟である一誠があそこまで腐り堕ちていた事を完全に見抜けなかった事を。

それは、弟と自分のクラスの生徒の過半数強が謎の不登校になってしまったのを見てしまえば余計にだった。

対面しただけで心が押し潰されそうになる感覚を何も知らないクラスメートが受けたら折れてしまうのは容易に予想が出来る。

だからこそ、誠八は後悔したのだ。

—アイツを両親の世間体の為に高校卒業はせめてさせなければ—

という考えを持った事。

そして同じ高校に入ったのだからもつと一誠を監視すべきだったと。

その穴があったから、今の一誠が出来てしまった事。

そして……よりもよってあのソーナ・シトリーと相当なまでの深い関係になっていた事を……。

「リアス部長は、ソーナと一誠君の問題に例え友でも血の繋がった兄だろうと干渉すべ

きじゃない”って言ってたけど……。

くつ、部長はアイツのあのドロドロした雰囲気を感じて何も思わなかったのかよ……！

ソーナと一誠の二人を部屋に招いたあの日感じた、一誠の雰囲気は、殺気とはまるで違うものだった。

負……真正面から受け続ければ塗り潰されそうな程の凶悪な負のオーラ。

見るだけで心が折れそうになる程の禍々しいナニか。

既に深い関係まで堕ちたソーナはともかくとして、ほぼ初対面だったリアスと小猫は何故かそのオーラを受けても何も思わず、寧ろ好意的に接していた訳だが残りの者達は全く一誠に好意的にはなれそうに無かった。

兵藤誠八・木場祐人・姫島朱乃。

この三人だけは一誠の持つ正体不明の不愉快さを敏感に感じ取り、そして危惧していた。

あのままにしておく、その内とんでもない事になると。

だけどリアスと小猫は言うのだ……。

『ふうん、三人は彼をそう思ったのね。』

うーん、私はそうは思わなかったけど……小猫もそうよね?』

『そうですね。ちよつとイラツとする事を真顔で言う人ですが、先輩たちの言うような危険な感じはしませんでした』

全く問題になる相手じゃない。

誠八・朱乃・祐人の三人が感じた不愉快さに気付いた様子も無く、ただただ普通に。

だから余計に一誠に不気味さを感じてしまう。

自分達三人にはわかったのに何故二人には……。

果たしてそれはわざとなのか。

だとすれば何の為に……。

「生徒会の人達はアイツの不気味を認知してる……けどその上で何も思わずシトリー先輩と一緒に居る事を容認している……それが解らない」

同じ立場である筈の生徒会の面々に至っては認識した上で一誠を容認しているとい

う理解不能な状況。

まあその事に関しては、一誠と一緒に居始めてから徐々に変わったソーナを近くで見ているが為にある種の『耐性』が出来ていたというのが大きい、誠八に知る由は無かった。

「まさかシトリー先輩見みたいな人まで変えるとは……クソ」

『私は元々駄目な女ですから』

『好きで一誠くんと一緒に居ます。これまでも……そしてこれからも……』

全く淀みの無い目を向けて皆に言い切ったあの時ソーナの姿が鮮明に誠八の頭の中に浮かぶ。

あの二人が何時知り合い、どんな経緯があつてあそこまで堕ちきつた関係になったのかは知らないし、ああまで言つてるといふ時点で既に手遅れの領域になつている事も分かる。

故にリアスが言つた通りにソツとしとくべきなんだろう。

二人の好きにさせるべきなんだろう……。

だけど……だけど。

「……。どうしても許せない。」

人をあそこまで墮落させるなんて……それが例え悪魔だろうが何だろうが……」

何故か誠八の中では現状の一誠が許せなかった。

「そもそも、好きで居るって言ってる相手は只の人間だぞ……寿命も種族も違う。」

先輩……貴女は遠からず不幸になる。

別に俺はアナタとは仲が良いわけでは無い……でも一誠とだけは止めるべきなんだ
「よ」

一誠が、なのか。

それともソーナが、なのか。

二人が楽しそうにしている姿を見ると酷くイライラする。

それが何故なのかは解らないが、誠八の中では穏便に終わらせる為には『二人を引き剥がさなければ』という考えに至ってしまった……。

その理由は……誠八の中でも解らないままに。

「ハア……木場と姫島先輩に相談してみるかなあ……」

そして――

「きやつ!？」

「つと……あ、ごめんなさい。大丈夫ですか？」

「は、はい……こちらこそ申し訳ございません……」

「………………。え、シスター？」

一人のシスターとの出会いが、誠八の運命を加速させる。

「ありがとうございました……」

「いぢぢぢぢぢぢ」

んっんー♪

食った食ったあ。

思う存分聖域での食事を堪能し、満足のままシケた顔で見送る店員さんに挨拶してから店を出た俺は、膨らんだ腹をポンポンと叩きながら宛も無くフラフラと歩き出す。

時計の針が5を刺しており、既に学園は放課後になつてるっぽいけど……さてどうしましようかね。

家にはまだ帰りたくないし、だからといって金の掛かる事はしたくない。

となれば、食後の軽い運動を兼ねてのウォーキングで決まりだと、俺は一人テクテクと歩いていった。

夕方の街は中々に人で溢れており、ガッコー帰りの学生さんやらこれから居酒屋で一杯引つ掛ける気満々のリーマン軍団やナンパしとるチャラ男……等々が俺の目に飛び込んで来る。

見てる分だと皆幸せそうだねえ……なーんて意味もなく思いながら郊外目指して歩いている俺だったが、その足は突然止まる。

それは通り魔に刺されたとか、後ろからいきなし鉄パイプで殴られたとかそういう

ちよつとしたアクシデントでは無く、ただただ普通に最近頻繁に起こる出来事……。

「また焼肉ですか？ 制服からそんな匂いがします」

「あ、センパイ……ども」

支取蒼那さん改め、ソーナ・シトリーさんになっても俺の中では変わらずのセンパイが現れたからだ。

基本的に下向いて歩いて歩いているので、直前まで全く気が付かなかったのは何時もの事だし、脈絡無く俺の目の前に現れるのももう慣れたので、こうして会ってもリアクションはこんなもんだ。

「学級閉鎖でしたか？ 兵藤君と一誠くん以外は皆お休みらしいですね？」

「ん……俺と奴以外が何か変なもんでも食って集団食中毒になっちまったのが予想なんすけど、センパイはどう思います？」

「さあ……でもまあ、一誠くんの話も有り得なくもなさそうですね」

「でしようっ?」

そして自然に二人並んで宛も無い散歩を開始する。

最初は嫌だったけど、慣れというのは俺みたいな存在でもあるらしく、今はどうも思わない……いや寧ろ話し相手が居てくれるだけ楽しいとさえ思える。

……まあ、相手が素で話せるセンパイだからというのが大きいけどね。

初めて会った時も殴ってこず、いつの間にかこうして肩並べて歩き、他愛の無い話をする。

昔、トモダチだったあの女の子以来無かったこの関係……悪くねえな。

「そういえば一誠くんは携帯電話を所持してませんよね？」

「えっ？」

そんな中、突如思い出したかの如くそんな事を口にしたセンパイ。

「携帯電話あ？ ああ、持ってないっすよ」

携帯電話……何時でも何処でも連絡可能な、現代社会に復旧した便利アイテム。

最近の携帯電話は電話やらメールは当たり前にしても、色々と『それって携帯電話に

『必要なのか?』と思うような機能も取り付けられている。

例えばボタンで操作では無く、直接画面に触れて操作する……とか。

だがしかし、センパイが言った通り俺はその携帯電話を持っていない。

理由は勿論ある。

「うん、だって電話する相手もされる相手も居ないですもん。

そんな奴が持ってたって単に使用料を無駄に吸い取られるだけっすよ……はははは」

そういう事である。

使う用途が無いのだ。

俺に対しての緊急の電話なんて殆ど無いのだ。

ほら、必要がないだろ?

「でも、学校が無い日に、一誠くんがお暇かどうか直ぐに聞けないのは結構不便だったり

……」

「おいおい、休みの日にまでわざわざ俺なんぞに暇かどうか聞くんすか?

やっぱりアンタって変な人だよ」

「変で結構です。良いじゃないですか、最近は何日だって会いたいって思ってしまうんですよ」

だから俺に携帯を持ってというのがセンパイの弁らしい。
だけどなあ……。

「操作とか全然解らないしなあ。

ほら、此処最近復旧してるアレ……ス、ス、スマートなんちゃらって奴？ この前本屋で偶然マニユアル本があったから立ち読みしましたけど、かなり難しく俺には手に余るっつーか……」

会いたいから会う。

その為に今暇なのか、そして何処に居るのかを聞くには確かに携帯は便利だ。

しかしながら、俺は生まれてこの方携帯を持った事が無い処か触れた事も無い。

最近はやつとパソコンのローマ字入力を人差し指使って入力出来る様になれたレベルの俺じゃあ、パソコンを小さくした携帯を使いこなせる気がしない。

大体、数千万の便利アプリってなんだし、メールと電話だけに機能絞れよ。

何だよ無料通話って？ 普通の電話と何が違うんだよ……つと話が逸れたが、要するに俺は掛ける相手も掛けられる相手も居ないのだ……多分センパイ以外はね。

「それにほら、アレって二十歳前は単独で契約できないじょう？ 散々テメーから避けてきた両親に今更ゴマ擦るのもアホっていうか、厚顔無恥通り越してるっつーか……」

あの男が何の脈絡無しに現れ、当然の様に受け入れてしまった両親が一切信じれず、自分から関わりを切ったんだ。

それを今更現実逃避なかつたことにするなんて、流石に馬鹿な俺でも嫌だ。
今も信じられない相手だし……。

「そうですか……」

「わかってくれました？ まあ、将来に向けて一度は触っとくべきなんでしょう——
「それならこれを一誠くんにプレゼントします」

が………え？

「ちようど実家から開発サンプルとして貰ったものなのですが……」

だから持たないと、解って貰えたのも束の間、センパイはそれならと俺にどうしても携帯を持たせたいのか知らないが、懐から例のスマート何とかを取り出して俺に差し出しやがった。

……案外諦めが悪いのは今に始まった事では無いが、これには俺もビックリだ。

「道楽好きな姉が気まぐれで作らせた人間界の携帯と見た目は変わらない携帯電話です。」

使用料は掛かりません……どうぞ」

「え、えっ?」

殆ど無理矢理に近い形で俺の手を取って黒色のスマート何とかを握らせるセンパイは変に良い笑顔で、俺は断る暇もなく受け取る事になってしまった。

「センパイってホントに強引ですよね……」

「あはは。どうも一誠くん相手だとそうなっちゃうみたいで……」

「……。まあ、良いですけど……」

クソ、やっぱり無駄に良い笑顔だな。

普段から世話になりっぱなしだし、断れねえよ……。

まあ、どんなカラクリで使用料がタダなのかはこの際置いておいて、くれるってんなら貰うさ……。ん、あれ？

「センパイあの……。画面がずっと黒いんですけど、これってどうやってつけるんですか？　これ？　ん、ん??」

「ああ、これは電源が切れてますので、横に電源ボタンがありますよね？　それを2秒ほど押しっぱなしにすれば……」

「あ、ついた……。おお、何か感動……」

電源の付け方すら解らない俺に果たしてこの携帯を使いこなせるのか……。は、後で考える事にして取り敢えずクラスの皆が休み時間に触ってるのと同じものを俺も遂に動かす時が来た妙な感動を暫く――

《ヤッホー♪ 皆大好きレヴィアタンだよー!!》

「……………あ?」

え? なに? 電源入れて画面にロゴが出た瞬間、妙にスカートの中の短い女の人が棒をクルクル回し――

グシヤツ!!!

「……………は?」

「……………」

結論から言わせて貰うと、俺は貰った筈の携帯が手から消え、気付けば隣居たセンパイが無表情で握り潰していた。

スリもビツクリなセンパイの早業も去ることながら、さっきの訳の解らない女の人を目にした瞬間、センパイから変な殺気が見え隠れしているのが俺には分かるが……もしかして知り合いかな?

「あの、センパイ？」

「ちよつと、家に来て貰って良いですか？　まだ予備がありますのでそつちを渡します」

「え、ちよ……な、なに？」

ヒクヒクと口の端を歪めながら俺の腕を掴んで歩くセンパイに連行される形になるが、訳がわからな過ぎて思考が追い付かない。

取り敢えずあの変な人が画面に登場した辺りからセンパイの様子が変わったから、原因がそこにあるのは分かる……。

「あの、今の画面に出たの誰ですか？　知り合いですか？」

だから地雷覚悟で俺は聞いてみた。

いやだって気になるんだもん、あの女の人じゃなくてセンパイの様子が変貌した事に。

するセンパイは、一瞬……ほんの一瞬だけ立ち止まり混乱する俺を見ずに前を向いたまま言うのだ。

「私の姉です……誤解が無いように言っておくと、別に嫌ってる訳でも仲が悪いわけでもありません。」

ただ………あんなあざとい格好をした姿を、よりもよつて一誠くんに見て欲しくなかつただけです」

「……………はあ」

おねーちゃんらしい……センパイの。

そういうや思い返してみれば確かにセンパイが眼鏡外したら似てなくもないかもしれない……いや、顔より格好の方に目が行つちやつたからよく見てなかつただけ——
——ん、ちよつと待てよ？ てことは……。

「あの、まさかと思えますけどセンパイもさっきのお姉さんみたいな格好を——」

「しません。一誠くんがしろというのなら別に吝かではありませんが、私は少なくとも進んであんな格好はしません。ええ、絶対にね」

「……………あ、はい」

しないのね。

それだけは解った。割りと切羽詰まったセンパイ声でよくね……。

そんなこんなでちよつとのアクシデントを経てセンパイの家に連行される形で連れてこられた俺は、さっきの言った通り予備の携帯を貰い、そこから朝までずーつと操作を教わる事になったのは……まあ、別にどうでも良い話だな。

本当の初恋

携帯電話つてのは中々に便利なのが16年の歳月で解った。

電話やメールは勿論の事、デジタルカメラ宜しく写真撮影も出来るつてのは聞いたが……スゲーなこれ。

インスタントカメラと違って容量の続く限りほぼ無限とも言える枚数を撮れるのは便利だな。

お陰でジローとコジロー達のショットがファイルを埋め尽くしてるぜ。

勿論待ち受け画面もジローとコジロー達の微笑ましいワンショットだしな……ふへへへ。

「でもこれで使用料タダって何か悪い気が……じゃなくて悪いとしか思えない。

まさか代わりにセンパイが払ってるなんてことは……」

「ありませんよ。本当にタダです」

「おう!? い、いたんすか。びっくりした……」

「さつきから居ましたよ。一誠くんが携帯の画面を見ながらニヤニヤしてる所からね」

本日も学級閉鎖で授業が無く、帰りたくないが故に放課後まで屋上で時間潰しを決行していた俺の元に、当たり前ですとばかりに現れたセンパイが笑みを浮かべながら朝から昼休みの今まで座りっぱなしだった隣に座る。

どうやらジローとコジロー達のフォトを見てニヤ付いていた辺りから見たらしいが、だから恥ずかしいとかという感情は皆無だった。

「気に入ってくれたみたいですね。良かったです」

「ええ、まさかケータイが此処まで便利だとは……特に写真とか動画撮れるのはスゲーですよ」

「……。大分前からある機能ですよ、それ」

センパイの有り難いご指導の賜物のお陰で、今じゃソレなりに使える様になった携帯をしまっ俺に、センパイは苦笑いしている。

多分、俺があんまりにも世間知らず過ぎるもんだから笑けてくるんだろう。

まあ、俺も自覚してるから何も思わんけど。

「ほんと、何から何まで申し訳ないです。何時かこの借りは返します、絶対に」
「要りません……と言いたい所ですが、私と死ぬまで一緒に居てくれればそれで良いですよ」

「ええ、死ぬまでつてまたかよ……」

センパイの寿命と俺の寿命を考えたらほぼ不可能じゃないすかねえ？

ほら、俺がジジイになる頃でもセンパイは恐らく今と変わらないでしょうし」

センパイが返して欲しい借りの内容は、くたばるまで一緒に居ろとの事だが、それは
実質無理な話だ。

というのも、死ぬまでというのが『センパイが死ぬまで』という意味なのだ。

俺がくとかならまあ分からなくもないが、センパイがとなると俺の短い寿命では無理。

まあ、本当の意味での現実逃避をしてしまえばパスは可能だが、ぶっちゃけると俺は
寿命やら不老だとかに魅力を感じないと思ってるせいなのか、リアリティスケール幻想逃避否が上手く発動
しないのだ。

前に悪ふざけで、『じゃあセンパイみたいにご長寿になったらうやんけ』とか吹いてス
キルを発動させてみたけど上手く行かなかったので、ちゃんとした確証がある。

そこから思うに、この幻^{リアリティー}実^{エスケープ}逃^フ否^フの発動の条件って『こんな現実^{リアリティー}は認めない』と『現実^{リアリティー}がこうなったら良いな』という信念というか、頑固とも言える私の強さみたいなのが無いと上手く発動してくれないんじゃないかと俺は気付いたんだよ。

だから、センパイと同等レベルの寿命を得るよりも、40手前まで独身貴族貫いてから成人病で死ぬという方に俺は魅力を感じてしまっている現状ではそんな夢みたいなのが現実に自分自身を書き換える事は出来ないのだ。

まあ、その独身貴族よりもセンパイといえとか思える様になれば話はまた変わるんだろうけど……。

「そうですか……。ハア……。一誠くんが私を好きになつてくれたら叶うのに……」

「こればかりはスイマセンとしかね。他人を好きになる事にまだまだ理解が出来ないんすよ……」

「いつその事一誠くんを監禁して悪魔に転生させてしまおうかしら……」

「……。物騒だなオイ。俺なんぞ悪魔にしても害悪にしかならんでしょうが」

「冗談ですよ、半分はね……。フフフ」

一瞬だけ身構える俺に、センパイはニコリと悪魔なのに邪気がないとはこれ如何に？

てな具合の笑顔を見せてくるのだが、何でしょうね……冗談には思えないよ俺には。

「どうして俺なんでしょうね、貴女程の人が」

「貴方が好きだからですよ……他にありません」

好きねえ……。

好きだから一緒に居たい……それはまあ何と無く分かる。

俺だってセンチパイが嫌いならこんな風に話したりはしない。寧ろこうして居て貰え
るとホツとする。

この感情の意味が何なのかはわからない。これが好きだと意味なのか……。
だからこそ……俺は知りたいんだ。

「ねえ、センチパイ——」

センチパイに賭けてみたくなつたんだ。

「ちよつとしたお願いがあるんですけど……」

「? なんですか?」

つまる所、俺は中途半端なのだ。

あの女曰くの過負荷マイナスとは程遠いというレベルの中間地点を行ったり来たりしているのが今の俺。

だから自分自身の死だけは逃避可能だけど、それ以外は不可能。

スキル能力を十全使える様になるには、まず自分の持つコレを使う事に躊躇を覚えない事と、そして……受け入れる事だと思っただよね。

理不尽を

事故を

裏切りを

悪意を

墮落を

巻き込まれを

嫌悪を

偽善を

不条理を

負ける

自己満足を

それら全部を差し伸べられた手を取って抱き締めて受け入れるぐらいな気構えが無いと駄目な気がするんだ。

只の憎悪だけでは甘えにしか過ぎない。

あの男がどうかかという拘りを捨てなければ俺は完璧な駄目人間にはなれない。

冗談だと言ってた、センパイが俺を監禁して云々も本来なら笑って受け入れるべきなのだ。

幸も不幸も何もかも受け入れ、弄ばれ……その中で相手と不幸を分かち合い、自己満足の世界でずーっと這い寄る。

それが俺の中の過負荷^{マイナス}って奴だ。

俺以外の過負荷が居て、その考えが間違いだと指摘しても変えないし変わらない。

つまり、センパイは俺に死ぬまで傍に居て欲しいと言った。

けれど、それは無理だ。

俺はセンパイに隣居て貰うとホツとするし悪く無いと思ってるが、そこまでなのだ

……センパイに感じる思いがそこまでだから、スキルが上手く発動出来ない。
ならどうするか？ 簡単だ——

「そのお綺麗な顔……剥がしてみたいんですけど」

センパイが過^オ負^レ荷^シになれば良いのさ。

「もしかしたら俺は、センパイの綺麗なその顔が好きなだけなのかもしれない……だから知りたいんですよ。」

センパイの顔を剥がし、それでもセンパイと一緒に居たいと思えるのか」

そうすれば不幸と不幸を分かち合え、マイナス同士がツルめば誰にも文句は言われ
ない。

あの男も妙な事を言つて俺とセンパイがツルんでる姿を見ても何も言わないだろう。

いや、寧ろセンパイも意味無く誰からも嫌われるかもしれないけど大丈夫さ、死ぬま
で俺が傍に居る時点で俺だけがセンパイを嫌わなければ万事解決だからね。

その為にはまず、センパイのツラの皮を剥いでもトモダチだと思えるか、一緒に居た

いと思えるのが重要だ。

これでもし変わらなかつたなら、俺は駄目になりセンパイの後ろにずっと付いて行ける——いや、好きだという感情が理解出来る気がする。

いや、気がでは無く確実だ。根拠なんて無いけど絶対そうだ。

「もし、顔面を剥がしても変わらずセンパイと一緒に居てホツと出来るなら、恐らくそれが俺の他人に対しての好きって感情だと思っんです。

だからセンパイ……俺の気持ちを受け取ってくれますか？」

後は今言った言葉をセンパイが受け入れるかどうか……まあ、無理なら無理で構わな
いけどね。

言うだけ言い、ポカンとしてるセンパイを見詰め続ける。

さあ、センパイ……答えを教えてください……。

俺に、人を好きになるって感情を教えてくださいよ。

「ふふ……なんだ、そんな事ですか？ 良いですよ」

そんな俺の不安な気持ちの混ざった顔に、センパイの答えは……yesだった。唐突過ぎる俺の求めにセンパイは眼鏡を外し、笑いながら即答してくれた。

「中々エキセントリックな要望ですけど、ふふ……そうしてみたいのならやれば良い。何と無く、その果ては不幸な予感シアワセがしますから」

無い。受け入れてる、理不尽を。

今の半端者な俺とは違つて躊躇いがまるでない。

くく……なあにが世界で最初の過負荷だぜ『安心院あしむなじみ』よお。

居るじゃねえか……俺なんぞカスレベルに霞んじう程の絶対マイナスがさ……クツクツクツ

!!

「ふ……ははは、アンタやつぱり変だわあ。

フツー真顔で顔面剥がしても良い？ とか聞いてくる奴にそこまで素直に即答するかねえ？」

「む……失礼ですな。

誰彼構わず応じる訳が無いでしょう。私は貴方だから受け入れたに過ぎない。だつ

て、大好きなんですから」

余りにも即答過ぎて、笑ってしまふ俺に少しムツとした顔になるセンパイ。その表情が俺の心臓が大きく鼓動させる。

「だから構いませんよ。全部一誠くんに任せます……ふふ」

その笑顔で心臓が早鐘する。

「そうです、か。なら……」

隣に座るセンパイと向き合い、白く綺麗な頬に手を添えながら……理解する。そうなんだ……これが――

「ありがとう、センパイ……」

人を好きになるって事なんだ。

「後できつちりお礼は戴きますからね？」

「最期まで笑って俺を見てくれるセンパイから教えてくれたこの感情を大事にしな
ら、頬に触れた手に力を込め——」

そして……。

「変わらないや……」

俺はセンパイの顔を剥がした。

リアリティーエスケープ
幻実迷 否で俺の腕力を化け物クラスに書き換え、力一杯無理矢理に……。

「全然変わらない……」

生暖かい鮮血が俺の右手を中心に広がる。
目の前には顔が無いセンパイの亡骸がある。

「ふ、はは……」

変わらない……何も変わらない。

全く何にも変わりやしない。

見て、目に写し、脳裏に焼き付いたセンパイの亡骸を見下ろしている俺は気が付けば小さく笑い、やがて心の中の何かが発火した。

「はははははははははは!!! 顔の無いセンパイを見ても何も変わらない!! 一緒に居たいとハッキリ思える!! ふくくく……そうか、これなんだな! はははは、恋って奴はこういう事なんだねセンパイイイイツ!!!」

右手は赤く染まり、顔の無いセンパイが横たわるのを前にして俺は笑った。理解した。思い知った。

センパイが俺を好きだと言った様に、俺はセンパイが好きなんだと。見た目で判断してなんか無かったと。

ほら、顔が無くとも俺はこうしてセンパイを抱き締められる！ ふ、ふはははは……ハッキリと一緒に居たいと思える！

クツククク……何だか気分が良いなあ……。

今なら本当の意味で使えそうだ。

「リアリティーエスケープ
幻実逃否……。センパイの顔面を剥がしたという現実から逃げる……。」

意味も無く溢れ出てくるナニかに後押しされる形で俺はスキルを発動した。

すると、辺りに飛び散った鮮血は消え去り、センパイの剥がれた顔は剥がす前の綺麗な顔の時と寸分変わらない状態に戻り、ゆっくりとその目蓋は開かれる。

そしてその姿を見ていた俺は笑い、戻ってきたセンパイも優しく微笑みながら互いに言った。

「おかえり、そして初めましてソーナ……。『俺』だよ」
「ただいま、そして初めまして一誠……。『私』ですよ」

同じ者同士による初めての挨拶を。

「気が変わったぜセンパイ……。死んでもアンタからは離れない事にする」
「それは此方も同じです一誠……。私ってかなり執念深いですからね？」

微笑むセンパイと同じく俺も笑みを浮かべながら、センパイの手を取り……。そして抱き寄せる。

「今ならハッキリ言える。センパイが大好きです」
「私は前からずっと、一誠くんが大好きよ」

センパイを抱き締めて感じる体温や匂いが安心する。

なるほどね……。これは良いと思うのと同時に……。他の誰にもセンパイを渡したくないという気分になる。

うん、分かった……センパイに変な事する奴は串刺しにしてやろう。
センパイを俺から引き剥がそうとする奴は道連れにしても殺す。

「あ、鐘なつてらあ……んじやセンパイ……また『後でとか』」

「ん……勝手に帰っちゃ嫌ですよ？」

唯一見つけた生きる意味を世界が奪うんだったら……そんな世界からセンパイを連れて逃げ切つてやる。

一誠くんの日常

ちよつぱり克服一誠

……………。センパイの顔面を剥がしても気持ちにブレが無かったという事を完璧に自覚した瞬間、俺の中にある過負荷マイナスはほぼ完璧といえる制御を可能としたのと同時に分かった。

殆どの生物に嫌われていたその殆どが自分のこの性格キャラだったんだなど。

しかしそれを今更知っても直す事は無い。

だって直す必要が無いとセンパイが言っていたから。

センパイはそんな俺のしようもない性格キャラを好きだと言ってくれたから。

だから俺は変わらないし変えない。

俺に過負荷を教えた、あの安心院なじみ以外で全てを知るセンパイだけにこの幻実キス逃否キルは使わない。

センパイの身に降り掛かる嫌な現実には俺がその手を無理矢理取って逃げてやる。

それが俺の生きる意味だ。

その為なら他など……今まで無駄に敵愾心を抱いていた兄と名乗るあの男も最早ど

うでも良い。

奴が何者で何処から来て、何で兄と自称しても周りから疑問に思われず生きてこれたのかも考える必要も無い。

そんな身元ジョン・ドゥ不明よりセンパイと一緒に居る方が余程有意義だ。

「俺のクラスの人達の半分が学校を辞めちまったみたいですよ」

「そのようですね。何でもその内の殆どが突然精神を病んだとか」

「てつきり集団食中毒かと思ってたんですがねえ」

センパイが好きだったんだと知ってから早いもので数日が経った。

俺の所属するクラスの生徒の過半数が謎の精神病で学園を去っていった事以外は何も変わらずで、ただただ穏やかな日々をセンパイと一緒に過ごしていた。

のどかな陽気の屋上でこうして話をするのも、センパイに対する気持ちを完全に自覚したあの日を境にとても気分の良いものへとなっている。

なんていうの？ 安らぐって奴かな？ 自分と同じ者が居るというだけで感じるあの安心感って奴を俺は感じているんだよね。

「あ、そういや忘れてた。兄貴が女を家に連れてきたんすよ。金髪で、どこぞの教会か何かに居そうな外人のシスターみたいな女の子」

「ああ、確かりアスの新しい眷属になった方ですね。

確か僧侶……だったかしら」

「ぼかぼかする気分のまま、昨日あった事をふと思い出した俺の話に、センパイはある程度事情を知ってる様子で返してくれる。

「どうやらあのシスターさんは紅髪の人が新しく眷属にした人らしい。

「へえ、教会つてカミサマ奉る人間の集団つて聞いたのに、それが悪魔つてかなり皮肉効いてますね」

「どんな経緯があつて転生したのかは詳しく知りませんが、まあそうですね」

「俺からすればあの金髪のシスターがどうなるうが知ったことでは無いし、昨日の様子からして悪魔になつても自殺する様子も無い。

「寧ろあの男と一緒に居るのが嬉しそうに見えた所を考えれば、気にする必要が皆無だろ。」

「その金髪のシスターも俺を見た瞬間、ものっそい怯えたりしたんですけどね」

「何故？ 何処かで会ったとか？」

「いや、初対面っすね。」

まあ、嫌われるのには慣れっここですから全く気にしちやいませんよ。

両親もその金髪のシスターをお気に入りみたいですし」

聞けばあの金髪シスターは家に住むとか何とか。

あの男はどうも俺が居るからという理由だか何だか知らないけど乗り気じゃあ無さそうだったが、両親はめっちゃめっちゃ乗り気だったので多分住むんだろう。

部屋なら確か余ってたし。

「そうなんですか。」

「誠くんは反対しなかったのですか？」

「え、しませんよそんなもん。」

意見を聞いてくれるとは思えないし、そもそもどうでも良いですもん」

「はあ……」

「どうせ中学卒業したら出てく予定だった所でしたしね。我が儘言つて避けて来た両親にこれ以上迷惑掛けたかありませんから」

この事に関しては割りと本音だ。

あの日から両親を信じられずに避けて来といて、今更家の方針に口出しする程俺も馬鹿なつもりも凶々しくもない。

だから何にも言わない。

例え両親が犯罪の隠蔽を強要して来ても俺は従うつもりだ。少なくとも高校を卒業するまではね。

「それなら仕方ないですね。

同年代の女の人と一つ屋根の下というのは少し不健全な匂いがしますけど……」

「ええく？ 不健全な事なんて俺にあると思います？ あつてあの兄貴にでしょうよ。あははははは」

ちよつとジト目なセンパイに俺は思わず笑つてしまふ。

不健全という意味も何と無く分かるが、初見で思いつき『ひいつ!?!』とか悲鳴あげ

られた人とそんな事になる訳がない。

断言出来るくらいに何も無いと胸張れる。

大体、俺もあの子も互いにどうでも良い相手だし、何がどうしてウチに来たかとか、知りたいたとも思わない。

何かやむにやまれない事情とやらがあつたとしても、俺には関係の無い話なのだからね。

「なら良いですけど……」。

どうも最近は一誠くんの近くに誰か居るだけでモヤモヤします……」

「おいおい……」

俺と同じが故なのかは知らないけど、考え方が俺に似てるセンパイに思わず苦笑い。

俺が他の人と居るのを見るのが嫌らしいのだが、そりゃ俺もであるのだ。

まあ、こんな世界で生きる上では嫌でも人と関わらなくてはならんから我慢はするけど、それでもベタバタと誰かにセンパイが触られてるのを見ると殺意が沸くのは否定しない………って、俺はいつの間にかセンパイに対して気色の悪い執着心を抱いてしまってるんだよなあ。

いやあ、恋とは末恐ろしいぜ。

「まあ、大丈夫ですつて。

俺の性格知ってるセンパイなら、単なる他人に変な真似はしないって分かるでしょう？」

「……………まあ」

腑に落ちなさそうな顔をしつつも、一応はといった様子で頷いてくれるセンパイに少しほっとする。

少なくともあの金髪シスターの顔面を剥がして確かめたいとかいう気分にはならんし、本当にその所は大丈夫なんだけどねえ。

少女は運が良いのか悪いのか……よく解らない人生を只今送っていた。

神に遣える者として一生懸命生きたつもりが、どんな存在でも治せてしまう力を持つがゆえに恐れられ、疎んじられた結果、ある墮天使の末端みたいな者達に利用されて一

度完全に命を落とした。

そんな短い人生だった少女自身、これも神からの試練だと思つて受け入れていた。故に利用されて死んでしまつても致し方ない。

本音を言えばトモダチが欲しかったけど、それすら許されないのなら仕方ない……そう思つていた。

悪魔となつたあの少年と出会うまで。

「セーヤさん！」

「おう、アーシア。やっぱし制服似合つてるな」

「えへへ……ありがとうございます」

結論から言うと、少女——アーシア・アルジェントは今を生きていた。

自身がセーヤと呼び慕う少年・兵藤誠八に救われるという形で失つた命を悪魔としていう形で取り戻して。

神に遣える存在でありながら、悪魔に身を堕としてしまつた訳だが、最早少女には悪魔として生きる道しか残されてなかつたのと、誠八という初めてのトモダチが出来たという事が重なり、アーシアは割りと楽に受け入れた。

「学校にまで通わせて頂いて、本当にありがとうございます！」

「お礼ならリアス部長に言いなよ。」

「俺は大した事はしてないし」

「でも、セーヤさんとお友だちになれたから私……」

「はは……何かむず痒いな……」

そして、元々帰る場所も無かったので、誠八の家に居候する事になったアーシアだが、此処で初めて誠八に双子の弟が居る事を知った。

「どんな人なのだろう。」

「誠八みたいな人なのだろうか……」。

何処か苦々しげに双子の弟が居ると言った誠八の横で一人想像していたアーシアだったが、会ってみて最初に抱いたのは――

「んじやセンパイ。今日もまた『放課後にでも』」

「ええ、例の様にまたフラフラと先に帰らないでくださいね？」

「わーってますって」

まだ昼休みの終わりだというのにガラリとした……いや、アーシアと誠八しか居ない教室の外から聞こえる男女の声に、それまでのほほんとした空気で会話をしていた二人の表情が強張る。

それは、聞こえた声を知った声であり、二人にとつては無条件で警戒心を抱いてしまふ声であつたからだ。

「んっんー♪」

ガラツと教室のドアが開かれ、アーシアと誠八は自然と強張つた顔付きのままその場所に視線を向けてしまう。

開けられた扉の前に居る……誠八とそっくりな少年に。

「う………」

姿形は誠八とそっくりで、本来なら仲良く出来る相手である筈だ。

先日初めて見た時と比べて、明らかに機嫌良さそうに鼻唄歌つてる姿を見ても思わな

い筈だ。

けれどアーシアの身体は、本人の意思を嘲笑うかの様にカタカタと小さく震えていた……。

目の前の、一誠という少年を無条件で拒絶するかの様に……。

「さてと、5時間目はまた自習かな。

いい加減早くまともな授業もしたいねえ……」

「……………」

誰に対してでもなく、独り呟きながら机から出した課題のプリントに取り組み始めるその姿の何処にも、間違いは無い筈だ。

とうか寧ろ不自然な程の学生っぷりとも言える訳で、本来ならどうにも思わない筈だ。

だというのに、アーシアの身体は拒絶反応の如く震え、誠八も先日以降から更に変わった——いや、退行した様にしか見えない弟を険しい顔付きで見つめていた。

「う……………うう……………！」

（アーシアが怯えている……）

くっ……だから俺はアーシアを居候させる事に反対したんだ……それを部長が……）

寒さに耐えるかの様に自分の身体を縮こませるアーシアを見て、誠八は後悔していた。

アーシアをあゝの墮天使集団から救い、悪魔に転生させてしまった事に対しても負い目があったが、アーシア自身が誠八と一緒に居たいと許してくれたから少しはその負い目も無くなっていったのに……リアスが誠八に自身の家に居候させてあげなさいと言ったもんだから……。

「甘かった。」

アーシアみたいな子ならと思っていたが……やっぱり一誠は危険だ……あらゆる意味で）アーシア……大丈夫か？」

「だ、大丈夫です……。」

何もしてないのに、私が勝手に怯えてるだけですから……」

一誠の持つツナカを本能的に感じて、すっかり怯えてしまったアーシアを案じて優し

く語り掛ける誠八にアーシアは健気にも微笑んで見せる。

普通なら今の一誠を見ただけで心が折れてしまう。

それは今ガラリと自分とアーシアと一誠しか居ない教室を見れば分かる。

既にこのクラスの大半は一誠の持つナニかに当てられて精神を病んで学園を辞めたか不登校となつている。

それを考えれば、怯えてはいるが一誠の姿を直視出来ているアーシアの心は強い部類だ。

けど、それも何時まで持つかは解らない。

居候をさせているという事はこの場でも家でも、嫌でもアーシアと一誠は顔を合わせる事になる。

ともなれば、何時かは完全に心を折られ、精神病んでしまうかもしれない……誠八はそれを危惧していたのだ。

(部長と小猫ちゃんはアイツを見てもまるで動じて無かったが、木場や朱乃先輩……そしてアーシアは明らかに嫌悪をしている。

一体何が違うのかは解らないが、このままだとコイツのせいでこの学園の人間の心が折れてしまうかもしれない……)

こんな事なら中卒で家を出ていこうとした一誠を止めるべきでは無かったと、誠八は心の底から後悔していた。

あの時点ではまだ一誠は単なる卑屈なだけの奴だったのに、今はどうだ。

本人は無意識かもしれないが、対面する人間の殆んどが一誠に明確な嫌悪感を示している。

そこまでに至るまで一体何があったのかは誠八の知るところでは無い。

しかし、一つだけ思い当たる所を挙げるならば……一誠が恐らく一番に仲が良い相手であるあの人物。

(ソーナ・シトリー……あの人と一緒に居始めた頃から、一誠は劇的に退行した気がする。

それは彼女がそうさせたのか……それとも元々一誠がこんな性格だったのを隠さなくなつたからなのかは知らないけど……)

先程も教室の扉の向こうで別れていた少女。

自身の主であるリアス・グレモリーと同じく、悪魔を正体とする存在であるソーナ・シ

トリートとの出会いが一誠を更にマイナスへと墮としたと考える誠八。

その考えは強ち間違いでも無いのかもしれない。

けれど、最早ソーナと一誠は誠八の思っている仲を遥かに凌駕する……普通の感性な
らまず吐き気のするような関係まで深まっている事を知らない。

「セ、セーヤさん……ごめんなさい。

その、私……」

「いや、良いんだ。

アーシアは何も間違っていない。アイツを見て何も思わない方が異常なんだよ」

ソーナ・シトリーとかな。

双子の弟に対して怯えている自分を恥じて謝ろうとするアーシアを元気付けながら、
誠八はペンをクルクル回してプリントの問題に取り組む一誠を睨む。

リアスと小猫には一誠のキャラを予め教えていたからあの態度だったのだろう……
それを考えると只出会っただけに過ぎないソーナがああまで一誠を気に入っていると
すると、もしかしたらと誠八は思ってしまう。

（一誠に塗り潰されたのか、それとも前に俺に言つてた通り、元々そういう所があつたのか……。どちらにしても――）

一誠とソーナの関連性についてあれこれと考える誠八。

しかしその思考は停止する。

他ならぬ、一誠によつてだ。

「あのさ、さつきからこつちをジロジロと見るその理由は何なの？　俺、何か悪いことしてるか？」

「っ!？」

気付けば、プリントに向けられていた一誠の視線が自分とアーシアに向けられており、その表情はジロジロと見られていた事に対して不満げであつた。

この一誠の言い方にも誠八を困惑させる要因の一つでもあつた。

以前の……それこそ少し前の一誠ならこんなラフに話し掛けて来る事なんて無かつた。

無視をするか、殺意の籠つた目で睨まれるかのどちらかで、こんな風に話をするなん

てのは無かった。

それがどうだ……今の一誠は人が変わった様に不機嫌そうではあつても殺意が全く無い雰囲気自分で自分に話し掛けてくる。

誠八はただただ困惑するだけだった。

「ていうかキミ等は自習の課題はどうしたんだい？」

ああ、金髪のキミは転入したばかりだから無いのかな？」

「あ……いや……その……」

「っ……ああ、そうだ。アーシアは転入したばかりで課題は無い。それと俺はもう朝に全部終わらせた……」

まさかこうして弟とまともな会話(?)をする日が来るとは……。

隠せないままの動揺を見せながら返す誠八と上手く喋れないアーシアの二人に、一誠は興味なさげに『ふーん』とだけ言うのと、再びプリントに視線を戻しながら口を開く。

「流石、優秀な『お兄ちゃんだぜ。』どう足掻いても敵わねえや」

「……………」

皮肉のつもりなのか、それとも本当にそう思っているのか分かりづらい声でそう一言だけ言つてカリカリとペンを走らせる一誠に、誠八の顔は大きく歪んだ。

これまで兄とすら呼ばれた事が無かったが故に、今こうして呼ばれた事に対する、巨大なまでの嫌悪感に。

「う……う、ご、ごめんなさい……」

「は？ 何でキミが謝るんだ？ ああ、俺を気持ち悪いとか思つちやつた事に対してか？」

なら別に謝る必要は無いぞ、どうにも昔から俺は嫌われ体質でね。

だから、そんな事を初対面で言われてる事に慣れてたりするんだ。

大丈夫気にしなくても問題ないし、『キミは全く悪く無いぜ？』」

人見知りが激しい筈なのに、震えながらそれでも謝ろうとするアーシアに対して、貼り付けた笑みを浮かべて悪くないとまで言うその姿に吐き気すら覚える。

「ち、違います！ わ、私は……！」

「おいやめろ！ アーシアをこれ以上つ……！」

「はあ？ おいおい、何を言ってるんだ？ 俺はただこの金髪の女の子が謝るから気にするなつて言っただけだろ？ ん、今のが暴言にでも聞こえたのか？ 聞こえないだろ？ ほら……だから『俺は悪くない。』」

これ以上アーシアに何か吹き込まれない様にと庇う誠八に一誠は真顔で自分は悪くないと宣う。

それは確かにそうかもしれないし、現に一誠はアーシアに何にもしちや居ない。

けれど……一誠の吐く言葉と形容しがたいドロドロした雰囲気のできて全て台無しとなっていたのは言うまでもなかった。

猫は好き。でも猫の妖怪は知らないby一誠

そう言えばな話だが、生徒会のメンバーさん達にはあんまり嫌われてなかったりする。

理由も不明だし、自分の心に折り合いを付ける今も変わらずで、センパイと帰る為に生徒会室に行っても、匙君や他の人達は殴り掛かって来る事は無い。

寧ろそのメンバーの一部の人から『会長をよろしくお願いしますね!』なんて無駄に良い笑顔で言ったりする始末だったりする。

一体何を宜しくすりやあ良いのか俺にはよくわからんが、まあセンパイを好きでいても生徒会——いや眷属の人達から反対されてないのは良い傾向なのかもしれない……匙君はたまに悔しい顔しながら嫌味を飛ばしてきたりはするけど、それ以外は無愛想ながらも普通に会話してくれるから俺は嫌いじゃ無い。

あんまり関係ない話だが、匙君は男前のお陰か副会長さん以下役員の人達からモテモテだったりすることを考えれば、かなり良い人なんだろう。

昨日もセンパイと二人して見てる前で副会長さんとか他の人達の引つ張りだこになつてたしね。

マイナスの俺とは明らかに違うプラスの人種の典型的な人だとよく分かる。

………………。まあ、だから何だっつー話だけど。

「よーつす、ジローとコジロー達」

そんな俺は今、前に化け物にぶち殺されたあの廃屋へとやって来ていたりする。
理由は当然、にゃんこに癒されに来たという一点だ。

「ニャー」

「にゃーん」

「おうおう、揃いも揃って元気そうで何よりだなオイ」

土曜・日曜は学校が無い。

無いとなると家に居なくてはならない。

となると、お兄ちゃんとかお父ちゃんとかお母ちゃんとかあの金髪の人と顔を合わせなければならぬ。

俺は既にその所の折り合いを付けてるから、割りとか家に居ても平気だったりする

が、向こうはそうはいかない。

なんせ金髪の女の子含めた家の全員が俺を気色悪がつて、家の中の空気が居るだけで悪くしてしまうのだ。

ともなれば、折り合いを付ける前まで散々身勝手に避けてきた俺が今までと変わらずに早朝4時起きして外に出る必要がある。

そうすれば家に居る人達の空気は悪くならないし、俺もこうして朝早くから帰るまでの間をジローヤやコジロー達とモフモフ出来るといふ双方にとって良いこと尽くめなのだ。

意外とこの廃屋は廃屋らしからぬしつかりした作りを未だ維持してるので、雨風程度なら余裕で防げたりするしね。

「お、コジロー達も母ちゃんに似て来たんじゃねーのか？ んん？」

「「「にゃーん♪」」」

親猫であるジローと共に、心に折り合いを付けた以降でも変わらずにこうして寄つてきてくれるコジロー達一匹一匹を順番に撫でながら全員床に胡座かいてる俺の膝の上に乗る姿に頬が緩む。

やっぱり猫だけには嫌われないんだよな俺。いや、それで助かってる訳だけど。

「にゃー」

「ほうほう、最近この近くのボス茶猫が横暴を働いてるだど？」

「「「にゃー……」」」

「あんだど？ お前らを虐めてる〜？ おいおい、そいつあ赦せねえな。」

お前らと同じにゃんこだとしてもそれは許されねえぞオイ」

ジローとコジロー達の鳴き声に頷きながら、俺はまだ見ぬボス茶にゃんこに対して憤慨を覚える。

野生の世界では力こそが正義だとよく言われるし、野良猫であるジローやコジロー達もその範疇に収まるから仕方ない話なのは分かってるつもりだ。

しかしそれでも、トモダチであるコイツ等が蔑まれてると知れば立ち上がらない訳にやあいかん。

折り合いを付ける前から俺みたいな奴に躊躇無しに近付いてくれたコイツ等も、センパイと同じく好きな存在なのだから。

「よし、今日の帰りにでもソイツを探して『お話』してやる。だから安心してくれても構わんぜ？　にっしっしっしっしっ！」

「「「「にゃーん」」」」

「お、そうかそうか嬉しいか？　にゃっはっはー！　カワイイ奴らめ！」

え、何を普通に会話っぽいことをしてるのかだつて？

いやいや、これは『ほい』では無くてちゃんとした会話だつたりするんだぜ？

いやあ、過負荷^{マイナス}だ何だ言われてるけど、ほんとこのスキルは意外な所での便利性を俺の中では発揮してくれてるよ。

だつてさ、『俺が猫と会話が成立しないという現実から逃げ、逆に当然の様にコイツ等と会話が成立するという現実』に書き換える……なんて使い方を洒落のつもりでやってみたら何か普通^{マイナス}に出来たんだもん。

馬鹿と鈍^{マイナス}と過負荷^{マイナス}は使いようつて奴だね、少なくとも俺の中では目覚めてくれてマジせんきゅーと思うぜ。

まあ、こんな使い方をするのはセンパイとコイツ等のみだけだね。

他は……まあ、目の前で例え事故つて死んでもその事故つた奴の現実を書き換えてやるつもりは無いな。

うん、だって事故で死んでしまうのはその人の運が無かっただけで俺は関係ないもん。書き換える理由にはならないね。だって俺は悪くないもん。

まあ、センパイとジロー達だったら当然即使うけど。

「今日は学校も無いし、夜の10時前まで居るぜ！」

「「「にやにやーん！」「」」

「ふはは！ そっか、嬉しいのかこんにやろめ！ 全くお前ら大好きだちくしょー!!」

今はまだ朝早いのでセンパイに電話はしませんが、9時位になったら電話してみようと思う。

んで、予定が無かったら此処に来ないかと誘って見ようかと思う。

理由？ それは単純に会いたいからだ。

それは、本当に偶然だった。

偶々偶然朝早くに目が覚め、本当にそんな気分になったから外に出て散歩してみた

けだった。

(あれは……)

早朝特有の清んだ空気は嫌いでは無く、人も全く居ない住宅街をトボトボ歩いていた少女は、突如その足を止め、数十メートル先を見つめてる。

(セーヤ……いや、違う。あの人はセーヤ先輩の弟さん……?)

一瞬、自分の良く知る先輩の姿だと思った少女だったが、良く良く見てみれば感じる気配の違いで分かった。

アレはセーヤ……つまり誠八では無くその双子の弟である少年。

一度自分の仲間と共に話をし、少女に対して真顔で失礼な事を宣ったあの少年……一誠が、何やら軽くスキップしながら住宅街の外へと行こうとする姿を発見してしまったのだ。

(……………。こんな朝早くに何処へ……)

早朝も早朝なこの時間に、一人スキップする一誠の姿は物凄くシユールなものを感じ、双子の兄である誠八となまじ似てるので、どうにも違和感を感じてしまう白髪の少女の足は、自然と一誠の姿を追って歩き出していた。

「〜♪」

(……………ハハハ……………)

尾行を開始すること数十分。

ついにはスキップしながら口笛まで吹き始めた一誠の向かった場所は、彼が運悪くはぐれ悪魔に遭遇してしまったあの廃屋だった。

一体何の為にわざわざ自分が死にかけた場所に？ と疑問が尽きなかった少女は、一誠程度では到底気付けない追跡技術で廃屋の中にスキップしたまんま入っていったその扉の横にあつた窓から中を覗いてみる。

彼と誠八の仲が余り宜しくないのは前から聞いていたので知っていた。

そこから考えると、この一誠という少年は休日のせいで兄の顔を見なくてはならないという事を避ける為に、こんな朝早くから家を出た……そう少女は推測しながら窓の中

を覗いてみると……………。

「よーつす、ジローとコジロー達」

「にゃー」

「「にゃーん」」

大人の白い猫一匹とこれまた白い子猫数匹と楽しそうに戯れている一誠の姿が少女の目に映り、そこでふと思いだした。

ああ、そういうえば彼は猫が好きなんだったと。

(本当に楽しそうにしてる……。あの子達がトモダチと言ったのは本当だったみたいですね)

はぐれ悪魔が既に消された後、この場所にやって来たあの日偶然見つけた猫の親子が言つてた『トモダチ』

それが一誠だったというのは、今こうして本気で双方嬉しそうに戯れている姿を見れば納得してしまう。

だからこそ、こんな一誠の姿を目にすればするほどに疑問なのだ。

(セーヤ先輩、祐人先輩、朱乃先輩……そして新たに上がったシスターの人が何故この人を嫌悪してるのか……わからない)

単なる人間。

見た限りなんの害も無さそうな存在でしか無い一誠を何故あまで嫌悪しているのか、少女と同じく彼を見てもどうとも思わなかった主・リアスは理解出来なかった。

曰く、ただそこに居るだけで不快感を感じる事とのらしいが、白髪の少女・小猫も紅髪の純血悪魔であるリアスも理解の外だった。

だって一誠を見ても不快感も嫌悪感も感じないし、まあ、だからと言ってどうとも思わない。

平行線………どうだって良い存在なのだ。

それを彼より遥かに力のあるあの4人が何でそこまで気にしてるのか、小猫は考えてこうして今も猫と心の底から楽しそうに戯れている一誠を見ても分からなかった。

観察している内に、一誠とあの猫達が何でか会話が成立してる様な気がしないでもない事に気付いたりするが、単なる偶然だろうと片付けつつ、観察するのちよつぱり飽

きてきた……その時であった。

「……………で、キミはさつきからコツチを見てるみたいだけど何か用？」
「!？」

心臓を鷲掴みにされた気分だった。

それまで穏やかな表情をしていた一誠が、窓の外から見ていた自分と、微妙にうざそうにしているその目と合ったという出来事に、油断していた小猫の身体は金縛りにあつたかのように硬直してしまう。

「折り合いは付けたつもりだけど、意味無くジロジロ見られるのはやっぱりいい気分しないもんだね。そう思わないかい？」

「っ……………！」

折り合いの意味が何なのか、小猫には分からなかったが、ユラユラと立ち上がりながら硬直してしまつてる小猫を真っ直ぐ見つめて向かつてくる一誠に上手く声が出せない。

「……………？ ああ、君は確か紅髪の人……………ってまあ良いか……………」

先日会ったばかりのお陰で、どうやら一誠も小猫を覚えてくれているらしく、固まって動かない姿を見て思い出しながら叙々に窓へと近付いていく――

いつの間にか両の手に不自然な程に巨大な『釘』と『杭』を持ち……………へらへらと不気味に笑って。

「つ……………え？ な……………」

何だこれは……………？

小猫はただ困惑した。

それまで無害な虫と同等レベルの雰囲気しか纏ってなかった一誠は今、全くの別人としか思えない程のドロドロとこの場の空気を螺旋曲げる程の十二かを纏いながら己の元へとゆっくり近づいてくるのだ。

「知ってる？ 人間ってわりかしデリケートだね。」

特に俺みたいな小心者とかは、意味も無く誰かに見られるっただけで胃がキリキリするものなんだ」

「う……」

変貌した空気に添ぐわぬ無垢な少年を思わせる声に、初めてゾクリと……小猫の背筋に戦慄が走り、目の前に居るのは単なる人間で吹けば飛びそうな程に弱い相手なのに、思わず一歩後退しようとするが……その足は地面に縫い付けられたかの如く動かない。

「で、そういうものから解放される為には、俺がさつさと此処から消える事……なんだけど、考えてみたら先に居たのは俺だし、このにゃんこ達と今日は夜まで一緒に居ると約束してあるんだよねー」

動けずに困惑し始める小猫を知ってか知らずか、一誠は変わらずのトーンで話をしながら窓の前へと立つ。

壁一枚隔ててあるものの、これで一誠と小猫は互いに間合い内だ。

ゾワゾワする気持ちのまま固まって動けずの小猫は、ニコツと気色の悪さすら覚える笑顔を見せる一誠から目を離せない。

「い、いめんなさい、もう帰りま——」

よく分からないが、どうも一誠は見られていた事が嫌だったらしい。

だったらさっさと謝ろうと小猫は口を開き掛けるが——

「遅せえよ」

「がっ!?!」

小猫の謝罪の言葉を否定するかの如く、それまでのトーンから一気に低い声へと変貌

させて被せたその瞬間、小猫の身体に無数の釘と杭が突き刺さる。

「な……あ……!?!」

見えなかった……動体視力と腕力にはそれなりの自信があつた小猫が全く認識出来ず、禍々しいまでの大きさの杭と釘が全身を貫く。

その痛みで思わず顔を歪めながら、逃げなければと身体を動かそうとするが、全身に刺さつた釘のひとつが小猫の身体を縫つて地面に刺さつてしまったせいで身動きが完全に取れなくなつていた。

それを知つてか知らずか、濁りきつた瞳をした一誠は口を開く。

「センパイの知り合いのお供だから攻撃されないとでも？」

どうせ雑魚な人間だし、何かされそうになつてもワンパンで黙らせられるとか思つた？

負け犬根性染み付いてる様に見えた？」

口を歪め、笑つて言う今の一誠は素人目でも分かるくらいに先程までとは全く違うナ

二かにしか見えず、全身から血を流す小猫は、歪んできた視界のまま一誠の言葉が耳に入れながら思う。

あれ、自分はこの程度の攻撃で此処まで致命傷になったっけ？

悪魔としての強靱な肉体なら、この程度なら攻撃をし返せる筈なのに、今の自分は意識を失う寸前にまで追い込まれているでは無いか。

なんで……何故……？ 小猫は数瞬程思考を巡らせたが、直ぐに考えるのは止めた。

「人間嘗めんな、猫娘め」

(なんか、どうでも良くなってきました……)

左腕を大きく振り上げ、持っていた巨大な杭を小猫の額目掛けて投げ付けようとするのと同時に、彼女の気分は冬の馬拉ソン大会に全くやる気が出ないソレとなっていた。

「なーんてね！」

再び無邪気な少年を思わせる声を出すその瞬間まではだが。

「え？」

一誠の快活な声と共に、それまで失い掛けていた意識が突如として覚醒。

ハツとした表情になって目の前で笑っている一誠をただただ見つめるのと同時に、小猫はギョツとする。

「あ、あれ……傷が……？」

そう、今さつきまで己の全身の至る箇所を貫いていたモノが消え、傷も痛みも同じ様

に綺麗サツパリ消えていたのだ。

これには小猫も驚愕の表情となつてさつきまでハッキリと感じていた筈の痛みの箇所に触れる。

「な、無い……？ 刺された感覚も痛みも……」

「おーモフモフ……」

「にゃー♪」

訳が分からないと困惑しつつも、その原因である一誠を睨む小猫だが、当の本人は知らん顔して猫達とじゃれあつていた。

「何を……したんですか？」

幻覚……いや違う。

確実に自分の身を貫かれた感覚があつた筈が、気付けば何にも無い。

一誠が投げ付けたと思われる無数の釘と杭も全く無い。

「さてね。下世話は身を滅ぼすって幻覚じゃないのー?」

全てを知るであろう一誠に問う小猫だが、ふざけてると思えないくらいのすつとぼけた口調で返され、小猫は苛立ち始める。

「ふざけないでくれますか? さつきまで私の身体は傷付いた……他ならぬ貴方のせいで。なのに今は嘘だったように何も無い。」

だからもう一度聞きます、今のは何だったのですか?」

冗談じゃない。

さつきの際は確実に目の前の男が私を攻撃したのに、本人は素知らぬ顔をしてる?

そんなこと許す訳が無い。

誠八達が一誠を嫌悪してる理由はこれ何と無く理解した、後はこの手品じみた行為の正体を知る。

小猫の頭はそれで一杯で、とにかくカラクリを知ろうと普段の彼女らしくもなく一誠に詰め寄るが、一誠はヘラヘラと笑ってるだけだ。

「だから知らないって。

キミの妄想じゃないの？ そんな頓珍漢な妄想で俺が悪者にされるとか勘弁して欲しいんだけど？ まったくもう、これだから猫耳付けければチャホヤされると勘違いする痛い子は……」

「……。(プツツン!)」

あくまでも小馬鹿にする態度の一誠に遂に頭の中での線が5本程切れた小猫。

「ぐへっ!?!」

「……」

部室で邂逅した時といい、何処までバカにすれば気が済むんだと、内心怒り狂った小猫の右ストレートが、ヘラヘラと笑いつばなしの一誠の顔面にクリーンヒット。

潰れた蛙みたいな声を出した一誠はひっくり返って目を回し、その様子塵を見る目で一度見下ろす小猫は、もう良いとばかりにムカムカしたまま帰っていったのだったとか。

「絶対に知ってギャフンと言わせてやる……」

「あはらひほれ……」

「「「みゃー……」」」

去っていった小猫と目を回す一誠の両方を見ていたジローとコジロー達。

その鳴き声からは『あーあ、やり過ぎだよイツセー』と言ってる様に聞こえなくもなく、意識が戻るのはほぼ完璧に一誠の行動パターンを把握してるソーナに起こされるま
で目を回し続けていたのだったとか。

白髪の人に殴られて一撃で気絶した俺は、意識を失ってる間に廃屋にやって来ていた
センパイに起こされた。

起き抜けに感じたのは、頬の痛みであり、センパイが見るに『派手に腫れてる』らしい。

「いって……手加減してくれたにしても痛いぞ……」

「本気だったら首がもげてたでしょうね……」

「え、マジすか？ ……おちよくり過ぎたかな……」

「からかう相手を間違えましたね……まったく」

濡らしたハンカチを頬に当ててくれるセンパイの呆れ混じりの声だ。

まあ、仮にもげて死んでも、その現実から逃げちまえば何でも無かったりするし、今感じてるこの痛みも同様に逃げられるんだが、敢えてそれはしない。

何でか？ そんなもん決まってる。

「学校行ったら謝ろうかな……。それでこう……。『キミから貰ったパンチで大きく反省した。』『だからまだ痛むこの頬の恨みはキミとは関係の無いそこら辺の誰かで晴らす事にする』……。とか何とか言えば近付いて来なくなるだろうし」

取り敢えずギャフンと言わせたいからだ。

俺は根に持つタイプだったりするし、やっとなないと割りと気がすまない。

「リアスの眷属の方ですし、ちょっとは自重してください……もう」

ハンカチを離れたセンパイがペシリと軽く俺の頭を叩く。

その表情は仕返しは止めて欲しいと本気っぽく、そんな顔をされたら俺も諦めるしかない。

「そんな顔されたらやるわけにはいかないっすね。

はい、わかりました……普通に謝ります」

センパイが好き……だから止めろと言うならやめる。

それ以外だったら止める気が無いが、センパイは特別だ。

そんな気持ちと共に止めると宣言する俺に微笑んでくれたセンパイが俺の身を抱き締めてくれる。

「ありがとうございます一誠くん。」

代わりにこんな事しか出来ませんが……」

「ん……全然構わないっつーか、寧ろ褒美というか……。」

なんだろ……俺センパイにこうされるの好きです……」

あの日以降感じる安心感がセンパイに抱き締めて貰い、胸の鼓動を感じると更に増す。

俺はこの時間が好きだ……なんか横でジローとコジローが並んでコツチをジーツと見ているのが気になる。

「あんまり胸が無くてごめんなさいね？」

「え？ いや、あろうと無かろうとセンパイが好きなんで何の問題も無いっすよ……あ、また眠くなってきた」

よく分からない眠気にまた襲われ、俺は抵抗することなくセンパイの胸の中で意識を手放した。

……後でセンパイに謝らないと……そう思いながら。

悪魔のゲーム……があると聞かされるだけの一誠くん

金持ちの家の人は婚約者なるものが居るらしく、最近家に兄者と居候の金髪が居ないその理由が、何でも紅髪の人婚約者とやらとの婚約を解消する為に、悪魔内で流行ってるゲームで勝たなければならぬ為に特訓とやらに出掛けてるからだ、兄者がいなくなつた2日後くらいに知つた。情報元は勿論センパイだ。

「婚約者ねえ……お金持ちも大変ですな」

「その婚約者の方がリアスの好みとは真逆なタイプで、本人は本気で嫌がつてたりしてますが……」

「ふーん」

紅髪の人もその好みとは真逆と言われている婚約者のどちらとも興味が無く、センパイの説明に気の抜ける様な返事をしておきながら、ポケットと屋上から空を見上げる。

あ、飛行機雲だ……。

「今日を数えて8日後にレーティング・ゲームを行うみたいでして、リアスにとってはそれが初ゲームになりますね」

「ほうほう……初陣って奴ですね」

レーシングゲームだか何だか俺にはよくわからないけど、どうやらそのゲームは人間という所の未成年は禁止されるとの事で、今回は特例でやるとか何とか。

どうも紅髪の人の子貴は魔王らしく、その恩恵で無礼くりルールをねじ曲げたっぽいと俺は予想する。

そんなにその婚約者とやらが嫌いなのかな……。

「あれ、てことはセンパイもまだそのゲームは参加した事は無いんですね？」

「ええ、そうなります。」

それに関する夢も昔は持ってたのですが、今は正直どうだって良くなったりしませんでした」

「夢？」

悪魔と無関係過ぎる存在が故に興味が湧かなかったが、センパイの発した夢という言葉

葉には興味があるので、それまで向けていた空への視線を横に座つてくれているセンパイに向けると、センパイはコクンと一度頷く。

「冥界に学校を作りたかつたんですよ。レーティング・ゲームのね。」

上級・下級も関係なく平等に学べるような学校を……」

「へえ、凄いじゃないですか。」

何でまたどうだつて良くなつてるんですか？」

「昔の冥界は身分制度がガチガチに制定されたのですが、現魔王様達でそれは大分緩和されています。」

ですが、それでもまだ身分の違いによる差別は多いんです。それを無くすという意味も込めた学校設立の夢だったんですけど……」

俺には到底打ち立てられない大きな夢を語るセンパイは、そこ一度言葉を止めて俺の手を取つて笑みを見せる。

「一誠くんと出会つてからは、そこまで頑張る必要が全く無いって気付いて止めました。ほら、良く言うじゃないですか……夢は夢を見るだけのほうが美しいって……」

俺からすればときめく様な……あの男曰く『濁りきった腐った目』で微笑むセンパイの言葉は、目から鱗だった。

確かに夢なんでもんは叶わない夢であるからこそ綺麗だし、それを叶えたら多分急激に萎えると思えるからだ。

何事も諦めが肝心だし、そもそもセンパイが日々知らん誰かの為に頑張る必要は無いだろ？ そんな誰かの為に頑張るセンパイを見たら、俺はうっかりその誰かが『痛い思いをする事故』でも起こせと健全に願う日々を送る事になってしまっただろうしね。

「だから私はその大きな夢を死ぬまで想い馳せるだけにします。

誰にかに言われてやる様な事では無いですし、夢見るだけなら責められる事も無い……だから『私は悪くない。』」

「うん、そうですね。

センパイが知らん奴の為に頑張るだなんておかしいですもん。

大丈夫……少なくとも俺は胸を張って味方しますよ……『センパイは全然悪くない。』」

夢は所詮夢物語……。

センパイが頑張る必要は無いし、どうしてもセンパイがそうしたいとなれば俺は無力ながらも全力でサポートする。

しかし頑張らなくとも、どうせセンパイより更にご優秀な魔王姉な人が頑張るだろうしね……うん、ほら何度考えても何の問題も無い。

俺だつてご優秀な兄者がいるんだし、俺が頑張る必要もやっぱり無いのと同じさ同じ。ふふふ。

「やっぱり、一誠くん一人だけに味方して貰えるだけで安心します……嬉しい」

「ははは、そりやしますさ。括弧付けた言い方をすれば……『全部がセンパイを否定しても』『俺はすーつと肯定し続けます。』つてね」

「あは……。それなら私も一緒です。」

「一誠くんを気持ち悪がるなら勝手にしなさい……お陰で私が一誠くんの隣に居られますから……つて」

センパイの言葉は何物にも変えられない安心感がある。

どうしてあの日まで気付かなかったのか分からんくらいに、今のセンパイは魅力的過

ぎる。

此処まで来るとセンパイ以外の全部が同じナニかにしか見えなくなるほどに、俺の目は盲目になっていく。

小綺麗な景色も、あれだけ散々死んで欲しいと願ってた兄者も何もかもが、センパイの前では只の置物と化す。

ふふ……昔何かの雑誌書いてあった『恋は盲目』って単語も強ち間違いじゃあ無いかもなあ。

「そーいや、ウチのクラスの担任の先生が教職を辞めたらしいんですねえ。」

俺と兄者と金髪のシスターさん以外のクラスメートが辞めるか不登校になっちゃってストレスでも貯めちやっただんですかね」

「まあ、教師も人間ですからね……そんな想定外に出くわしたら疲れてしまうのも仕方ないですよ」

「確かになあ。名前とか微妙に忘れてるけど、多分いい人だったんだろなあと思うと心配ですぜ」

既に日課となってるこの時間も、俺はやっぱり大好きだ。

リアス・グレモリーの眷属の一人、戦車ルックの駒を持つ搭白小猫は、先日急遽決まってしまうた非公式のレーティング・ゲームに勝つため、学校を休んで仲間達と修行をしていた。

主であるリアスの婚約者……となってしまうている相手であるライザー・フェニックスとの婚約を解消する為、眷属達は来るレーティング・ゲームの日までの間をグレモリー家の別荘で其々切磋琢磨していたのだが、小猫は中々集中出来ないでいた。

(……。あの日以降、兵藤さんとは顔も合わせてなければ話もしてない……)

それは、レーティング・ゲームを行うと発覚するほんよ数日前に起こった小さな出来事が原因となっていた。

兵藤一誠……小猫の所属するグレモリー眷属の兵士を勤める現・赤龍帝である兵藤誠八の双子の弟。

己の神器の力を楽々と引き出し、騎士である木場祐人と模擬戦をしてる姿を見るに圧倒的な才を感じる誠八とは反対に、お世辞にも才能があるようには見えない人物。

どうにもその誠八や木場祐人、向こうでリアスと何やら話をしている女王・姫島朱乃、悪魔に転生したばかりで只今『魔力とはなんぞや』を学んでいるアーシア・アルジェントは本来なら相手にもならない、人間でしか無い筈の一誠に対して過剰なまでの嫌悪感や畏れを感じているらしく、小猫とリアスは何故なのか理解が出来なかった。

あの日までは。

『センパイの知り合いのお供の人だから攻撃されないとでも？』

どうせ雑魚だろうし、何かされてもワンパンで黙らせられるとも思った？
負け犬根性が染み付いているように見えたのかい？』

『あんまり人間嘗めるなよ猫娘めが……』

最初に見た時のオドオドした態度とは全く真逆……ヘラヘラした態度とゾワゾワと背筋を慄られる様な雰囲気を纏う一誠を、最初小猫は別人に見えた。

両手に持った、何処で手に入れたのかと逆に気になるほどの禍々しい大きさと存在感

を放つ『釘』と『杭』を小猫の全身に刺し、それでもヘラヘラと笑って最後は額に突き刺そうとまでしていた一誠の姿はまだ覚えている……というよりは忘れられない。

直後に起きたビツクリ現象を踏まえても印象が強すぎたのだ。

(結局バカにされて頭に來たせいで聞かずに帰ってしまいました……アレは明らかに『普通』じゃない。

一体何をしたのか……)

今でも鮮明に覚えている……自分の身を刺した釘や杭の感覚も、それが嘘の様に消えたことも……。

『まったく……これだから猫耳付けてりやチャホヤされると思い込んでる痛い子は……』

(……………)

自分を最後まで小馬鹿にしてくれたあの態度も……。

思い出して再びイラッとした小猫の持つスチール缶がプレス機に潰されたかの如く

圧縮されていく。

(好きで耳が出てる訳じゃ無いんだ……)

チヤホヤされるだなんて思ってたない……)

所謂化け猫から悪魔へと転生した小猫は誠八達と違って元・人間ではない純粹な人外。

故に一誠の悪戯とも言える串刺し攻撃やら負のオーラをまともに受けてもゾワゾワとしただけで心が折れるなんて事は無かった。

だからこそ、何時か一誠に仕返ししてやろうとすら思えるハングリー精神もちゃんとあるし、少なくとも一誠が見せた手品じみたナニかの正体を完全に掴むまでは2度と関わらないとは思わない。

やはり大なり小なり、純粹な人外の心をへし折るのは容易では無いらしい。

「小猫? どうしたの?」

「あ、部長……?」

知って暴いて悔し顔に塗りつぶしてやる。

小猫が取り敢えず仕返してやると改めて決心した矢先、向こうで朱乃と話をしていた筈のリアスが不思議そうな顔をして腰を下ろしてプレスしたまんまのスチール缶を持つ小猫の顔を覗いている。

どうやら話は終わっていたらしい。

「いえ……すいません。直ぐに再開します」

随分とあの男について考えていた様だと、内心あのヘラヘラ顔を思い出して少しだけイラツとしながら修行を再開しようと立ち上がる小猫は、リアスにぺこりと頭を下げてその横を通りすぎようとする。

「セーヤの弟君の事かしら？　今アナタが考えていたのって」
「……………」

自分の心の内を見抜いている様な言葉に、小猫は思わず足を止め、その場に立ち尽くす。

「……。凶星のようね。」

「気になるの？ アナタが言ってたその手品の正体が？」

「……………」

主であるリアスにだけは、あの日の事を報告していたので、言い当てられても驚く事も無く小さく頷く。

するとリアスは、少しだけ難しそうな表情を浮かべる。

「アナタの話から『幻覚を見せる神器を実は持っていた』……なんて推測してみたけど、彼からそんな気配は微塵も感じなかったわ」

「はい……………」

「一番距離が近いセーヤもアーシアもそんな気配は無いつて言ってた……尤も、あの二人と祐人と朱乃は何故か弟君を嫌ってるようだからちやんと見てるのか分からないけど」

「ですね……………」

人当たりの良い4人がアレほどまでにハッキリと一誠一人に嫌悪感を示す……アシア除いた3人とは長らく共に居たリアスと小猫からすれば少し驚く話だが、自分達は全くそんな感情は沸かない。

寧ろ何故か『似てる気がしないでもない』と感じるのは4人には秘密だった。

だが、所詮は気がしないでもないだけに過ぎずの相手は気難しいソーナに好かれてるというだけの単なる人間でしか無い。

だからリアスはそこまで警戒しなかった。

取り敢えず今回のうざったい騒動をさっさと鎮圧しなければとこんな修行も行っていた。

「でもやっぱり気になるわね……その手品の種」

ソーナはバレるとマズイとでも思ったのか、あの日誤魔化され、リアスも深く追求はしなかった。

が、自身の眷属である小猫がちよっかいを出されたのなら話は違う。

例え此方に落ち度があるにしても、もう一度謝罪を入れてからの『お話』をすべきだ。

「レーティング・ゲームの観戦に彼を招待出来ないか、お兄様に掛け合ってみようかしら」

「……え？」

ポツリと呟いたりアスに、小猫は目を丸くする。

「いえね？ まだ子供でしかない私は人間をまだ把握出来てないし、その点魔王様や他の大人の悪魔なら弟君を見て何か感じるかなあつて……」

「なるほど……」

果たしてそれが正解なのかはわからないが、何か妙な説得力がある言葉に小猫は頷いている。

「まあ、それよりも先にライザーに勝たないといけないわけだけど……」

「ええ……そうですね」

だがそれはあくまでオマケであり、今回はレーティング・ゲームに勝たなければなら

ない。

故にこの話は一旦終わりにし、小猫もリアスも来るゲームの時までのこの間を己を磨く時間に費やすのであった。

ちなみに、マークされてるとは知らない一誠はといえば……。

「あ、匙君だ」

「げ……兵藤……」

シトリー眷属兵士である匙元士郎とバツタリ廊下で出会うという素敵イベントの真つ最中だった。

偶然見付けたとばかりな顔をする一誠とは裏腹に、元士郎は嫌そうな顔だった。

「あれ……何でそんな顔を？」

確かセンパイのお供の人達は俺を気持ち悪がらない筈だったんだけど……とか思いなながらも『まあ嫌われるならそれで仕方ないや』と一切気にせずな様子でスタスタと

元士郎に近づく一誠は、心に折り合いを付ける前のビクビクした態度だった頃とは大違
いだった。

ニコニコと貼り付けた笑顔で近づくだなんて前までは考えられない行動……それは
以前の一誠を短時間ながら近くで見っていた元士郎も把握していたので、この変わり様
はただただ驚くしかない。

しかしながら、嫌そうな顔をする理由は、他の人間が一誠に抱く嫌悪感とかでは無く、
普通に別の所だった。

「お前……屋上で会長とイチャ付いてだろ？」

「え？」

苦々しげな声を出す元士郎に一誠はキョトンとしながら足を止める。

そう……彼が嫌そうな顔を一誠に向けていた理由はまさにそこだった。

「この前を境にお前と会長の距離がすごい縮まってる……誰が見たって縮まってる
……。」

ハッキリ言って羨ましいんじゃないよーめ！」

「………………。え、ええ…………。」

ガシツと一誠の華奢な肩を掴んで揺さぶりまくる元士郎の顔は悔しき一杯だった。

そりやそうだ……自分は会長——つまりソーナと将来ほにやららするつて夢があつたのに、それをこんな負け犬根性丸出しな目をした一誠に『あばよとつつあくん!』の如く盗まれたのだ。

それはもう悔しい……誰だつて悔しい。

一誠の持つ気持ち悪さだなんて知らんし、微塵も怖いとも思わない元士郎の悲痛な叫びは一誠の身体をガツクンガツクンと揺らす強さで推し量れる訳だが、一誠は一誠で彼に対して思うところはある。

「で、でも匙君モテモテじゃん。

ほら副会長さん以下役員の人達……」

「ああつ!! 下手な慰めで話を逸らそうとすんなよ? んな訳あるかあつ!!」

「ちよ、痛つ!! 匙くん肩! 潰れるからやめつ…………!!」

「うるせー!!」

取り付く島が無い。

今の元士郎はまんまそうであり、痛がる一誠を無視して半泣きになっても肩を掴むその力は増すだけだ。

「俺だつて……俺だつて会長に惚れてたんだよ……グスツ……それをおまえがぁ……」

「あ、ああ……うん……」

そして遂にはグスグスと一誠の華奢過ぎる肩を借りて泣き出す始末に、一誠の顔は引き吊るだけだ。

どうにも元士郎相手には折り合いを付ける前の性格キャラに戻されやすいと一誠は思っていた。

「あ、あの……取り敢えず俺のクラスくる？」

絶賛学級崩壊中だから無人だし、文句なら全部聞くよ。

なんなら気が済むまで張り倒しても構わないというか……」

「……グスツ。(コクン)」

何だ何だと教室やら廊下から感じる、嫌悪感と下世話半々の視線に気まずさを感じた一誠が、グスグスと泣く元士郎を連れて、今や『永久自習』と黒板にデカデカと書かれたつきり隔離気味に放置されている教室に案内し、適当な席に座らせる。

（匙君ってやつぱすげえな……嫌ってるには変わり無いだろうけど、他のとベクトルが違うし……） 飴舐める？」

「……………うん」

一誠にしてみればソーナと同等の新種な存在だったりする元士郎は、差し出された飴を素直に受け取って口に入れ、徐々に落ち着きを取り戻していく。

が、その落ち着きを取り戻したせいで、元士郎による一誠の駄目出しが午後の授業全返上で開始される事になるとは、この時の一誠は知らなかったという。

続く

オマケ……というよりネタ（本編とは全く関係ない I F）

「でもやっぱり気になるわね……その手品の種」

ソーナはバレるとマズイとでも思ったのか、あの日誤魔化され、リアスも深く追求はしなかった。

が、自身の眷属である小猫がちよっかいを出されたのなら話は違う。

例えば此方に落ち度があるにしても、もう一度謝罪を入れてからの『お話』をすべきだ。そう考えたリアスは………

「手品か……ふふふ……」。

その種が私のコレと似てるのかしらね？」

「……え？」

笑みを溢し、小さく呟く声は小さくて小猫には良く聞こえなかったが、今のリアスは何と無く……あの時の一誠に似てなくも無かった。

「部長……?」

「? あら、ごめんなさい。取り敢えず今は彼の事はほつときなさい。ソーナと一緒にら害は無いし、結局のところアナタも無傷なんでしょう?」

「はあ、まあ……」

「なら今はそれで良いわ。『貴女は悪くないし』『弟君も悪くない。』」

フツと何時もの笑みで小猫に言い聞かせるリアスに頷き、誠八の元へと向かう小猫の背を、見つめるリアスの顔は『良い笑顔だ』。

(まったく……暫くは『自分が大きく関わる』勝負事からは逃げてきたのに、余計な事をしてくれたわねお兄様達は……)

この分じゃ徐々に使うかもしれないの……)

アンハッピーエンド
大怨懷を……。

小猫も誠八も……眷属達全てが知らないリアス・グレモリーの愚骨頂……それは奇しくも単なる人間でしか無い筈の一誠と同じなのかもしれない。
続かない。

『だって興味が無いもん』

俺って手品みたいなスキル持ちだけど、ちゃんとした人間だ。

なにやらしても負ける欠陥品かもしれないけどやっぱり人間のつもりだ。

うん……そう、人間なんだよ俺は。

なのにさ、意味がわからんと思うんだよ俺は。

「サーゼクス……ルシファー……？」

事の始まりは、体調不良にさえなりそうな程の清んだ朝から始まる。

あの男と金髪シスターは居ないけど、それでも小学生の時から生活パターンを変えるつもりが無いので、何時もの通り朝の6時前くらいに家を出てポストを覗いていくといういつも通りの行動を起こしていたのだが、そのポストの中に1枚の封筒があった。

ダイレクトメールの葉書やら朝刊新聞等とは一線を画する特徴的なその封筒の宛名に、間違いなく俺の名前が書いてあるのだが……。

「……………いや誰だし」

俺個人に手紙が来るなんて何年も無く、それだけでも珍しいなと思う訳なのだが、それ以上に送り主の名前に身に覚えが無さすぎる。

手紙の中身からして外人かと思われるが、生憎の所俺に外人の知り合いは無いし、この手紙の内容が中々に地雷要素が満載だったりするのだ。

「えーつと……何々？ 『兵藤一誠様。この度上級悪魔、リアス・グレモリー並びにライザー・フェニックスによるレーティング・ゲームを行うに辺り、兵藤様には是非御観戦をして頂きたいと思い、一筆申し上げると共に招待状を同封しました』……は？」

悪魔という単語には心当たりがあり、外国人なのに日本語で書かれている手紙に書かれた名前の片方にも聞き覚えがあるので思わず顔をしかめてしまう。

「……………いやいやいや、何かの間違いだろこれ」

だが、頭の中で展開され始めた考えは即打ち切る。

只の無関係な人間が悪魔のゲームとやらの観戦ってバカらしい……どうせプレイヤーのあの男と何かしらを間違えたんだろう……無い無いと勝手に自己解決させた俺は、馬鹿馬鹿しいとばかりに手紙をポケットに挿し込みながら通学を開始する。

悪魔のゲームの内容はおおよそセンパイから聞いているが、人間でしか無い俺には無関係だし、ましてや俺はチェス派じゃなくて将棋派なんだよ……独り回し将棋のな。

だから、チェスの駒に見立ててくゲームに魅力をまるで感じないので見ないよ俺は。

なぐんて思っていた俺の予想派見事にぶつ壊される事になるなんてのは何時もの事だったと知るの、そのレーティング・ゲームの当日の日になってからだったりする訳であるのはご愛敬だった。

今日はジローとコジローの所へ行こうかなあとか考えながら、終えた課題プリントをファイルに閉じている時だった。

「あ、いた……。準備は出来てるみたいですね、行きますよー誠くん」

「ん…………え？ おお？」

スタスタと教室に入ってきたセンパイに挨拶する暇も無しに引つ張られ、何事かと聞く暇もなしに連れてこられた場所は、例の紅髪の人が部活の拠点としてるあの趣味悪すぎ部屋にいつの間にか居た。

「何事だこりゃ？」

センパイに引つ張られ、気付けば紅髪の人の部室。

警察もビックリな連行術に俺はセンパイに文句を言う事は無いけどこの場に居ることに対して当然疑問はある。

よく見てみれば10日は居なかった紅髪の人とやら白髪の人やらその他やらあの男がこっち見てるし……。

「お久しぶりね兵藤君」

「あ、どうも……って、何すかこれ？ 俺は何で此処に連れてこられてるんですかね？」

訳も分からず困惑しながらも、確かこの部屋の主で合ってる筈の紅髪の人が挨拶してくるので、それを返しながら趣旨を問う。

すると、紅髪の人や隣に居たセンパイ……………では無く、その時まで居ることにすら気付かなかった見慣れぬ銀髪の人がヌツと薄暗くて良く見えなかつた部屋の奥から現れるではないか。

「お初にお目に掛かります、兵藤一誠様。

私、グレモリー家でメイド長をやらせて頂いてますグレイフィアと申します……………以後お見知り置きを」

「……………」

礼儀正しくど丁寧な挨拶を俺の真前でやらかす銀髪の方は、まあ、多分美人なんだろう姿してるんだが、彼女にInanoも興味が無いので、挨拶されてもお見知り置きしないし、仲良くなろうとも思わない。

そんな事よりも俺がなんでこんな場所に連れて来られたのかだ。

「……………で、センパイ。俺は何で此処に？」

紅髪の人も銀髪の人も勿体付けそうな気がするし、何より彼女等とは只の他人同士でしか無い。

だからこの中で一番話が分かるセンパイに聞いてみる。

ガン無視されたと思ってるのか、銀髪の人は無表情のまんまだが紅髪の人の顔はひきつってる……………うん、いや、知らん女に話し掛けられてもアレだし俺は悪くないだろ。

「…………。その様子じゃ届いた招待状と手紙の内容を把握して無きそうですね…………」

「は？ ………………ああ！」

ちよつと困り顔で言うセンパイを見て、此処に来て朝見た変な手紙の事を思い出し、ポケットに挿じ込みっぱなしだった手紙を取り出して見せると、一瞬だけ部屋の温度が下がった気がしたかと思えば、センパイ以外この場に居た者達の顔付きがしよっぱい顔になっていた。

「……………ずいぶんとグチャグチャですが」

「え、ああ……何かの悪戯かと思ひましてね……。後で捨てようかって……」
「捨てないでください。」

このお手紙は魔王様——サーゼクス・ルシファー様から一誠くん到现在行うレーティングゲームの観戦の招待状なんですから」

「ええ、じゃあコレ兄貴宛なのを間違えて俺に……つて訳じゃ無かつたのね……」

「兵藤君はプレイヤーの一人であつて、観戦する訳じゃないでしょう？ だからこれは正真正銘一誠くん宛の招待状です」

はああ……と呆れ顔になつて説明してくれるセンパイに少し申し訳なくなる……勿論センパイに対して。

しかしだからこそわからんのだ……俺は人であつて悪魔じゃないのに、何故悪魔の話に俺が巻き込まれてるのかが。

「あれか、人間連れてつて集団ランチでもするとか？」

「しません。仮にそうだとしたら私が連れてくるとでも？」

「ああ、そりゃ確かにね」

俺のした予想を即否定するセンパイ。

となると……………なんだろ。

「私にも意図は掴めませんが、恐らく一誠くんにごうごうするほど魔王様は暇では無いとだけは断言出来ます」

「だろうね。俺の言った事が本当だったらその人に『暇人も大変っすねー』とか言っちゃれましたが……………クク」

結局何がしくてイチ人間に魔王とやらがこんなものを寄越して来たのかは知らないけど、要するに悪魔のゲームを見てくれとだけは分かったし、連れて来られたのも合点がいった。

「ご理解頂けたようですね。それでは招待状を此方に渡して戴けますでしょうか？」

理解した様に見えたのか、そのタイミングで銀髪の人が寄越せと言ってくる。

その顔は業務的なまでの無表情で、俺は何と無くこの女は苦手な気がした。

だから、俺は持っていた手紙と招待状を――

「あーっと手が滑ったー(棒)」

目の前でビリッビリに破いて捨てた。

「なっ!？」

「あーあ、やっぱりそう来ましたか。

しょうがない人ですねー誠くんは……」

驚く紅髪の人と兄者含めたその他お供の人達と、予想してたのか呆れた顔をするセンパイ。

「………………。私には把握しかねますのでお聞きしますが、何のつもりですか？」

そして此処に来て少し目付きが変わる銀髪の人問いに、俺は笑って口を開いた。

「俺が理由言われたら黙ってついて来るとでも？　おいおい、勘弁して貰えませんか

ねえ？ 俺はアンタ等と違って純粋な人間だぜ？ だったら魔王様だか何様だか知らん訳の分からん奴の言う事を聞く義務なんてないでしょう？」

「……………」

そうさ、俺はそのレーティングゲームになんぞ興味なんて一切無いし、悪魔でも無いのでそのTOPの言う事を聞く義理も義務も無い。

だから断る。

レーティングゲームってつまんなそうだしね。

「だ、だからって手紙を破り捨てる事は…………」

俺の行動が予想外だったのか、紅髪の人がちよつと怒った様子で俺に言うので、俺はニコやかに胸張って言い返してやる。

「こうした方が『俺は絶対行かないぞー！』って意思が伝わると思ったんですよ。

ほら、現にあなた方に伝わってるっぽいじゃない」

『……………』

口よりも行動で示せておやつさんに教えられた通りにやつたまでに過ぎないのさ、だから俺は悪くない。

「このバカ野郎!!」

悪くないのに、それを言った次の瞬間、俺の身体は頬に感じる突き刺さる痛みと共に吹っ飛び壁に背中を思いつきり叩き付けられていた。

「ごほっ……っああ……もーれっう……」

「一誠……お前は何処まで……!」

それまで見てただけの兄者によってね。

ひ弱な人間が悪魔にぶん殴られてタダで済む訳が無く、背を壁に叩きつけた俺はそのままズルズルと崩れ落ちそうになるところを、兄者は無理矢理胸ぐらを掴んで俺を立てると、何時にもなく憤怒の形相で睨み付けてくる。

「痛いなあ『お兄ちゃん。』」

「つ……心にもない事を口にするな……!」

謝れ……今すぐ皆に……!」

「はあ? 何でさ? 俺宛に送られたものをどうしようとか俺の勝手じゃないか、それをたまたまキミ達がその勝手にする過程を見ただけじゃない。

だから俺は『悪くな——』」

悪くない——そう言おうとしたその瞬間、兄者がまた俺の顔を殴り、俺は床に叩き伏せられる。

ぶつちやけなくてもかなり痛い。

「酷いなあ……奥歯が取れたじゃないかあ……」

しかしそれでも俺は笑顔を崩さない。

どんな殴られようが、貶されようが、陥れられようがヘラヘラ笑って見せる……それが過^{オシ}負^{タチ}荷^チなのだから。

取れた奥歯2〜3本を床に吐き出し、ガタガタとなった身体に鞭入れながらゆつくり

と半笑いになって立ち上がった。見せる姿に兄者は思いきり『気持ちの悪いものを見る目』となって2、3歩後退する。

それはよくよく見てみれば、金髪のシスターやら金髪の男の人やら黒髪の女の人も同様に、嫌悪感丸出しな視線を俺に送っている。

「っ……は、早く……部長に……グレイファイアさんに謝れよ！」

その筆頭である兄者は、部長⇨紅髪の人とグレイファイアさん⇨銀髪の人に謝れと訳の分からんことを言い出す。

「あーん？ 謝るねえ……まあ、良いけど」

が、まあ……怒ってるというのなら謝らないわけにもいかないもので、俺は何か唾然としとる紅髪の人と無表情に戻った銀髪の人にそれぞれペコペコと頭を下げながら謝罪の言葉を口にする。

「すいませんでした、もうしません。頬を殴られて歯あ折られたお陰で目が覚めました。

だからもうこんなことはしないけど、『この頬の痛みと折られた歯の恨みはそこら辺を歩く何の関係も無い誰かを使って晴らす事にしますね!』

人間、素直に謝るのが一番だしねと自分を納得させた上での渾身の謝罪は、銀髪の人や紅髪の人にちゃんと伝わったらしく、困惑気味な表情をしながら其々……。

「いえ……結構です……」

「わかったから、取り敢えず関係ない人は巻き込んで欲しくないかなあ……」

と言って許してくれた。

いやあ、誤解してたよ。この人達割りと良い人だね。

「[[[[……]]]]」

例の4人は俺のボコボコにされた顔を見て今にもその場で吐きそうな顔になってるがな……失礼な。

「あんまり皆さんを困らせるのはそのくらいにしない一誠くん」

「む……何だよセンパイ……味方してくれねえのかよ……」

「味方ですよ、間違いないからね。」

ただ此処でごちやごちややつて時間の浪費は無駄じゃなくって？ ……そういう意

味です」

「むむ……へいへい、確かにそうですね。わかりました……大人しく帰りますよ」

言われてみりやあ時間の無駄なのは否めないし、これ以上は飽きてきたのもある。

静かに俺を咎めたセンパイに免じてこれ以上喋るのを止めた俺は、言った通り大人しく帰ろうと皆に背を向けて扉に行こうとするが、何故かそれは叶わず銀髪の人に止められた。

「招待状は無くなりましたが、あくまで形式上の事ですので無くても問題ありません。取り敢えずその傷の治療も予て来てください」

「あれ、話聞いてました？ 俺はアンタ等悪魔のゲームとやらには興味が全く無いんですけど……」

そんなもん見るくらいならジローとコジロー達をモフモフしてた方が億倍有意義だ。従う義理も理由も無いし、そのまま体よく断り続けよう……

「私は一緒にみたいな……」

「すいません、前々からレーティングゲームに興味がありましたねえ。」

「いやあ、こんなしょぼい人間に見る機会を与えてくれるなんて魔王様はお心が広い！ あっばれ!!」

「したけど、センパイが横でボソツと言って考えが変わったので快諾した。」

「うん、レーティングゲームって面白そうだね。」

「……………」

「ん、なんすか?」

「……………いえ。それでは先にリアス様列びに眷属の皆様をゲーム会場に移転させますので、シトリー様と兵藤様は暫くこの場にてお待ちください……」

「どいつもこいつも仕舞いには渋い顔になるのを不思議に思いながら、銀髪の人の言う」

通り待ってる事にした俺は、結局悪魔のゲームを見る事となった。

見てるフリして終わるまで寝てようかな。

「ごめんなさい一誠くん。」

ああでも言つて置かないと無理矢理連れて行かれる可能性もありましたので……」

「いや別に……後で膝枕してくださいよ。それで手打ちにしますので」

「それは勿論、喜んで……」

うん、寝るで決定だね。

俺はあくまで人間だ。だから悪くない。

センパイが言うからレーティングゲームとやらの観戦に乗ったけど、正直興味なんて
まったくない。

どうでも良い奴等同士の潰し合いなんて見たって何にも思えないし、勝手にしておく
れって感じた。

魔王って人が何で俺を招待したのか含めてどうすりや良いのか分かりやしないし、セ
ンパイに言われてスキルをホイホイ使う訳にもいかないし、先程から取れた奥歯の所と
頬が痛くてしやーなかった。

まあそれはセンパイが持つてきた苦くて不味い変な薬で直ぐ治るんだけどさ。

「おおスゲー。センパイがくれた苦い薬で口ゆすいだら口の中の傷と取れた歯が元
戻った……」

銀髪の人の治療は普通に嫌だったんで断り、センパイにして貰った優しい治療のお陰
ですっかり頬の痛みと取れた奥歯が元通りになる。

そのお陰大半とも言える謎の緑色の液体の正体は結局わからんし、センパイがくれたもんに対して一々疑問にも思わないので、治してくれたセンパイにキツチリお礼を言う。

「いやあ、ありがとうございますセンパイ。

痛みも腫れもお陰で無くなりましたぜ」

「効き目はバツチリみたいで良かったです」

紅髪の人達がやるゲームの会場……まあ、ぶつちやけると学校をまんまコピーした謎の場所だったりする所の外側に設置してあった観戦用のホテルみたいな個室のソファに座る俺とセンパイは何時もの通りの会話をする。

「しっかし、何で俺が悪魔のゲームを見る事になったんだらうか……しかも魔王って人直々の招待状付きで」

で、やはり先ずはこの話題だった。

結局俺の悪ふざけとちよつとした意趣返しでゴタゴタしてうやむやとなってしまう

たが、何故人間でしか無い俺がこの学園にクリソツなレプリカ空間に居るのか、何故俺を呼ぼうとしたのか……その理由が分からないままで、さつきからそればかり気になつてたりするんだよね。

「もしかしてですが、一誠くんの持つ過負荷マイナスの能力スキルの情報が漏れて、それが本当かを確認する為に呼んだ……とか」

「スキルを？」

リアリティーエスケープ
幻実逃 否をか？

うむ、まあ確かに俺が持つてるものといえればこんなもんしか無いけど……。

「ですが、一誠くんは普段スキルを安易に使用する事は無いですし、知っているのは私だけの筈だからこの線は薄かったりしますけど……」

「うん。最近一回だけ使いましたけど、それだつてジローとコジロー達との会話を成立させる為——あ」

うんうんとセンパイに同意する様に頷いて見せてた俺は、不意に思い出してしまつ

た。

ジローとコジロー達以外にスキルを使ってしまった相手が居ることに……。

「どうしました？ ……と敢えて言いますが、まさか一誠くん……」

物凄い気まずい気分になった俺の顔を見て察してくれたのか、徐々にジト〜つとした目になるセンパイ。

うん、これはもう隠せんわね。

「いやー……実はジローとコジロー達と会話したいからって理由でスキルを使った日に……。

ほら俺あの白髪の人にぶん殴られて気絶したじゃないですか？ その前にジロジロと盗み見してたのにイラツとしてつい牽制的な意味合いで……」

「使ったと？」

「はい……」

「……。確か一誠くんはちよつとおちよくつただけと言ってましたよね？」

「いやそれがその……直後に殴られて意識吹っ飛ばしたから言うのを忘れてました

……

「……………はあ」

白髪の人視線がついつい鬱陶しく、出る杭を打ってから次見たらマジこうするからって釘を刺してしまった話をしたら、センパイは大きいため息を吐いてしまった。

「搭城さんにスキルを使えばそりゃありアスにも報告は行くし、探ろうとしますよ。」

「せっかく無理矢理誤魔化したのに……………」

「ホントすんません……………あの白髪チビ今度シバキ倒しますんで……………」

「即返り討ちされるに決まってるでしょう？ もうバレたものは仕方ないですし、こうなったら最後まで苦し紛れにはぐらかす事にしましょう」

「……………はい」

今になって短絡的だった自分にちと反省する。

ちきしょうが。まさかチクリ入れるとは……………あの白髪……………今度は完璧に俺を見ただけで即吐くレベルの仕返しをしてやる等と、内心は仕返しの算段を立てる俺だが、結局

の所スキルがあつても持ち前の運の悪さで全部ひっくり返されちゃうので、かなりの難易度なんだよね。

この前串刺し攻撃当てられたのも半分スキル頼りだったし……結局解除した瞬間殴られて気絶させられたし、俺って呆れる程弱いよな。

「さつき兄貴に一発殴られただけで意識飛びそうになつてたな……そういや」

「寧ろ生身の人間で加減してくれたとはいえ、転生した悪魔に殴られて気絶しなかつただけ、何気に一誠くんの身体に耐久力がありますよ」

「そうすかあ……？　こんなひ弱ボディですけど……」

何か誉めてくれてるセンパイの言葉をイマイチ素直に受け取れず、ペタペタと自分の身体を触る。

運動は嫌いでは無いが好きでも無く、普段は引き込もってばかりなもんだから、肌は青白いし身体付きも全体的に細い。

兄者は悪魔に転生してから鍛えでもしてるのか、俺と比べりやあガツチリしてるのが分かるし、さつき胸ぐら掴まれた時に感じた腕力の強さから見てもよーく分かる。

腹周りなんか括れとるし、肩幅狭いし……。

「身体鍛えるなんて今更やりたくないし、この貧弱さは諦めるしかないかあ……」

無駄な努力やら、痩せこけたしょうもない勝利は昔の時点で諦めちやつてる身であるが故に、貧弱体型に嘆くだけ嘆いて終わり。

そんなストレートに怠惰な性格してるから勝てないんだろうと去年辺りに一瞬だけ考えたりもしたけど、結局考えるだけ。

まだ始まらぬレーティングゲームの様子を映像として映すだろう巨大スクリーンをポーツとソファに座って眺めていると、不意にセンパイが膝の上に乗せていた俺の手を取って握る。

「……どうしたんすか？」

「いえ、確かに砕けそうな程に脆そうな手だなあつて……」

改めて見ればやっぱり一誠くんは貧弱かもしれないね……そう少し笑って言うセンパイに俺は乾いた声で笑うつきやない。

「否定が全くできねえや……あははは」

これで良く歯を折った程度で済ませられたよなあと自分でも不思議に思うくらいに雑魚い肉体持ちなのは一番自分がよくわかってる。

こんなもん想像せずともわかるが、例えばセンパイと今この場で喧嘩しても3秒で組伏せられて終わるか、ワンパンである世行きする自信がある。

まあ、あの世に行っても直ぐに逃げ戻れるからある意味不死身だったりするんだけどさあ。

「でもそれで良いですし、今決めました」

「何が？」

制服とYシャツの袖を捲り、血色の悪い細腕を『美味そうな食い物を今まさに頂きますして食べようとする』……みたいな、何かこう……うつとりした目で頬を染めながら見つめて何かを決心した口調のセンパイに何の事だと返す。

するとセンパイは『フフフ』と小さく笑いながら俺の細腕から手を離してからピツタリと身体を寄せて来ながら何処か甘える様な声で言うのだ。

「文句を言う為に今までは一誠くんが殴られても黙ってましたが、次からはちゃんと仕返ししてやります……」

「んな事わざわざせんでも……」

「いくらあのスキルがあつて、殴られても平気だつて分かつてもやはりいい気分はしませんもの……」

まあ確かに、センパイが傷つけられたのを見たら、負け戦だろうとも仕返ししてやりたくなる気持ちになる俺と同じか？ と考えれば何と無く納得出来る訳だが、どうにも珍しくセンパイがこんな……えーつと、そう……ジローとコジロー達が擦り寄つて来るみたいなアレと似た感じの事をしてくるのには何かドキドキする。

「ええつと……こうですか？」

「ん……そうです。ふふ……本当に一誠くん身体は男性らしく無いです……」

「悪かったですね……」

あんま慣れて無いので、おっかなびつくり応で俺よりちよつと小さいセンパイの身体

を抱き寄せてみると、どうやら正解らしく、喜んでくれている様で何よりであった。

……その際にくれた感想はグサツと来るものがあつたけどね。

「でも良いんです……別に私は一誠くんが変わつて欲しいなんて思つてない……そのままが良いんです……」

「……」

ふわりと香るセンパイの匂いに何だか頭ボーツとするし、何時の間にか始まつててモニターに映し出されていたレーティングゲームもさつき以上にどうでも良くなつていた中俺は改めて思う。

うん……やっぱり俺のこの幻^{リアリティー}実^{エスケープ}逃否はセンパイにだけ使おう……他の奴相手にはおちよくる時か本気で消してやる時しか使わね。

だって、互いの顔を剥がし、それでも変わらずに好きで居られたと分かつたあの日から、俺の全部の決定権はセンパイに明け渡してゐるんだもの。

『ライザー様の騎士一名、兵士二名、僧侶一名……リタイアです』

おや？ ちょうどお兄たまが腕に変なモン付けて女の人数人をブチのめしたってア
ナンウス付きの映像が流れてらあ。

うーん、やっぱし何をしてもそつなくこなしやがるなあ。

ああ、応援したくなってきたぜオイ。

まあ、その前に……。

「見られるのつて、やっぱり嫌いだわあ……」

割りと早く使う時が来ちやったかもね、リアリティーエスケープ 幻実逃否をさ。

多分それでも精々殺されない程度にしか出来ないだろうけど。

簡単な話、普通に信じられなかった。

単なる人間の……それも見た限りじゃデコピン一発で首が飛びそんな人間をリアス・
グレモリーがちよつと探つて見てくれないか……そう言われたグレモリー家メイド長
兼魔王サーゼクス・ルシファー眷属の女王であり妻でもあるグレイフィアは、そのサー

ゼクスの妹であるリアスの眷属の兵士であり、今代赤龍帝である兵藤誠八の弟……一誠が次期シトリ一家当主であるソーナに連れてこられたのを目にしても何も感じなかった。

神器なんてありもしない只の人間。

無駄に口が回るだけの只の人間。

その性格キョウラに少し難アリなだけの只の人間。

グレイファイアにはそう見えるだけだった。

どれだけ目を凝らしても何も感じない……転生悪魔数人が彼を見て異様とも言える嫌悪感を示していたのに違和感こそ感じ得ても、やはり自分にはそこら辺に居る一般人と同じにしか見えなかった。

目の前でサーゼクスの手紙を破り捨てながらベラベラと屁理屈捏ねる姿を見た後、誠八に殴り飛ばされてもヘラヘラ笑いながら、『昔何処かで感じた似た雰囲気』を出し始めたのには若干驚きはしたがそれでも所詮は人間だった。

但し彼の隣に居たソーナが殺意に満ちた目を隠しきれなくなっていたのを見た時は、素直に驚いたが……。

「で、グレイファイア。どう思ったかしら彼は……？」

「兵藤一誠……ですか？ 普通の人間としか思えませんでしたね」

一誠とソーナよりも先に、本日の主役の片割れであるリアスとその眷属達をゲーム会場に転送し終え、戻って今度はあの二人を転送しようと準備するグレイフィアに話し掛けて来たリアスに対して正直に話す。

「グレイフィアでも分からないか……」

「彼は本当に何かを持っているんでしょうか？ 傍目から見てもやはり只の人間としか……」

「この前お兄様に連絡したのを聞いたと思うけど、彼はうちの眷属である小猫に『妙な幻覚』を見せたらしいのよ。実際私は見てないけど」

「ええ、サーゼクス様からお話を聞きましたので存じてます」

難しそうな顔で話すリアスに小さく頷くグレイフィアは、一誠からスキルを使った脅しを實際受けた小猫からリアスへと伝わり、それを探る為に頼る事になったサーゼクスを経て軽く耳にしていた。

だから一誠の動向を探ろうと誠八に殴られてる所を仲裁せず見ていたけど、結局彼は

ヘラヘラと笑いながら殴られっぱなしなだけでその変な幻覚を使う事は無かった。

単純に使うまでもなかったから……と言われたらそれまでだが、それを考慮しても一誠という人間にそんな力があるとはとても思えなかった。

「サーゼクス様が直接拝見すれば、或いは何かを感じてくれるかもしれませんが……。お役に立てなくて申し訳ございません」

「いいえ、私だつて彼を見ても何も思う所が無かつた訳だし仕方ないわよ。ただ、ああもうちの眷属の大半が彼を嫌悪してるのを見るとやっぱり何かあるとしか思えないのよ」
「木場様、 姫島様、 アルジエント様……そして彼の兄である兵藤様ですか……」

部室で見た時の4人はまさに一誠に怯えているか嫌悪しているかだったのを思い返すグレイフィアにリアスは頷く。

「ええ、それと彼のクラスの生徒達と担任もね。」

もう大半が学園を辞めたか不登校になつてゐるわ」

「それは……」

確かに異常だ。

人間の心理は純血悪魔故に余り理解出来ないが、共に学ぶ場所で、彼と近い距離に在った者達が軒並み消えていくと聞けばやはり怪しく思えてしまう。

自分やリアス……そして今は一人天井を見つめてブーツとしてゐる小猫以外であるあの4人の転生悪魔は何かを彼から感じてゐる。

自分達では理解出来ない何かを……。

「とにかく今はこの話を止め、レーティングゲームに集中してください。立場上大きな声では言えませんが……頑張つて欲しいので」

「ええそうね……ありがとう」

しかし今は兵藤一誠よりもレーティングゲームだ。

グレイフィアは小さくリアスに激励を言葉を送り、リアスも笑みを溢しながら小さく応えると、その問題の存在である一誠……そして暫く見ない内に何処か変わつてゐるソーナを観戦室に転送する為にもう一度戻る。

シトリー家次期当主であるソーナはともかく、一誠は単なる人間であるので、多数の悪魔が集まる場所での観戦は難しく、特別に個室での観戦となる。

それは人間でありながらもすんなりと許可してくれたサーゼクスの配慮だったりする。

だから、その配慮を知らずにヘラヘラ笑いながら招待状と直筆の手紙を破り捨てたあの時は若干頭に来た訳だが、彼が言った通り、悪魔じゃない彼が従う理由も無いのも事実なのでほんの少しだけ表情を変えるに留めた。

まあ、少しだけ嫌いになった訳だが。

(聞いた通り、どうもシトリー様はあの人間に対して情念を向けているようですが……)

グレイフィアの中では不思議人間化している一誠に、情を向けているソーナを思い返ししながら自身転送させる。

転送前と変わらないオカルト研究部の部室……違いは先程まで居たりアス達の姿は無く、代わりに居るのは取り残しておいた一誠とソーナが、何やら互いの立場なんぞクソ喰らえ状態でのほほんと会話をしている場面。

「だから俺は応援というものはしませんよ。

俺が応援した者は全部確実に負けますもん。

なので、そんな気分になれたら兄貴だけを誠心誠意応援しますわ……ふふ、前と比べて仲良くなつて来てるでしょ？」

「その話をした後には誠心誠意応援すると言われたって、まるで説得力が皆無なんですけど……」

「あれ、そうすか？」

(……………)

やはり何も感じない。

ソーナが右の頬を真つ赤に腫らせている人間相手に楽しそうにしている、という事以外は何も思う所が無い。

だが、リアスの言っていた事を踏まえれば普通に処理は早計と判断したグレイフィアは小さくコホンと咳払いをして二人の会話をそれとなく中断させる。

「準備が完了致しましたので、お二人を特別室に転送させますが……シトリー様の眷属の方々は……」

「ああ……私の眷属達なら既に向こうに居ますのでご心配は無用です。観戦場所は別になることも予め伝えてありますし」

「……。かしこまりました、では転送致しますが、兵藤様は向こうで治療をさせて頂きますのでもう暫く——」

王は女王を常に横に置く——という常識を真つ向否定してるソーナにやはり変わったと思えなくなってきたグレイフィアだが、取り敢えずは先程殴られたままの……既に腫れ上がって痛々しくも思えてしまう一誠に視線を向けて治療の話をしようとするが……。

「ああ、そんな気を回さなくて結構ですよ。

ほら、こうなつた原因は俺が魔王様とやらの手紙を破いたせいですしね」

一誠は右側の頬をだけが異常に腫れた状態のまままで貼り付けた笑顔を浮かべて体よく断ろうとする。

しかしながら彼は紛いなりにもサーゼクスが招待したゲスト。

故に、そんなポコポコに腫れた顔のまんまはいくらなんでもアレだと判断しているグレイフィアは『そうはいかない』と食い下がる。

「そうは参りません、我々のせいで貴方様は怪我を負ったのですから——」

責任を取らせて頂きたい……そう続けようとしたグレイフィアは言葉を止めてしまった。

その理由は謂わずもながら……一誠がそのグレイフィアに被せる様にしてこう言っただけからだ。

「なら止めれば良かったでしょうに。『お兄ちゃん』にぶん殴られる前にさ……貴女なら出来たでしょうに、それくらいは」

「……………」

ニコーツと嫌味な程に可愛らしく見せてるつもり笑顔で言う一誠にグレイフィアは何とも言えずに口を閉じてしまう中、続けざまに彼の放った言葉を耳にして一つだけ一誠という単なる人間の事が解った。

「なーんて事を建前に本当の事を言うと実に単純で簡単な事ですぜ。

極々普通に、アンタみてーな今日知っただけに過ぎない得体もしれない人に触れられたく無いだけなんですよ。はい以上」

「……………」

あくまで笑顔で、人懐っこい声で……………自分より遥かに弱い人間が言い切る。

単なる馬鹿なのか、それともリアスや自分が考へてる通りに何かを持つが故に挑発しているのか……………それは解らないが……………この人間は人を……………悪魔を的確にイラツとさせる事を言うのが上手いのかも知れない。

グレイフィアは横から一誠の頭をペシリと叩いてから何度も頭を下げるソーナにお気になさらずと返しながら思うのであったとか。

『俺は悪くない』

双子の兄である誠八君に殴られる直前に口にしようとしていたその言葉を初めて聞いた時、自分の胸が大きく鼓動したのと同時に、昔の事を思い出してしまった。

別に彼が私を知ってる筈も無いし、私も彼を知らないのに、あっけらかんとした態度でその言葉口にしたのを耳にした瞬間、固い鎧で覆って忘れたフリをしていた筈のある記憶が無理矢理思い出された。

だから私は彼に嫌悪感を抱いた。

けど同時に私は、あの全てを台無しにする雰囲気、『羨ましき』すら感じてしまった。そんな存在に……あの男の様には絶対にならないとあの日誓い、自分なりに必死に生きた努力全てを水泡に帰すようなその言葉をその時私は嫌った。

それは、彼を同じく嫌悪した騎士と兵士の2人も同じ気持ちだったらしく、その日之境に、後に加わる僧侶の子も含めて妙な仲間意識が芽生えた気がしたが、私は少しだけ違う気持ちで小さな芽の様に生まれていた。

「私は……悪くない」

「え、何か言いましたか？」

レーティングゲームが始まる20分前の最終ミーティング。

無意識にポツリと口にしてしまったその言葉に、彼にそっくりな顔立ちでありながらその中身は全くの真逆であるセーヤ君が不思議そうな顔をして私を見ている。

「いえ、何でもありませんわ……ふふ」

そんな彼に私は何時もの調子で何とも無いと返すが、内心はまるで違う事を考えていた。

もし……もしもシトリーさんでは無く、私が彼と親しく、私の全てを知った場合彼は何と言うのか……。

あのシトリーさんを見る限り、彼は親しくなった人には絶対に嘘は吐かないとある種の確信すら覚える。

だからこそ、誠八君や祐人君やアーシアちゃんには絶対に秘密だし言えないけど……気になってしまう。

彼は……兵藤一誠が私と親しく、そして全部を知ってたとしたら何て言ってくれるのか……。

いや、大体予想は出来る。

彼ならあの男との確執に対してどうこう言わずにこう言う筈だ……………。

「ああ、それは大変だったんですね……。辛かったですね。

うん、大丈夫ですよ……。どう考えても『先輩は悪くなんてない。』」

へらへらと笑って言ってくれるだろう。

そして簡単に受け入れた挙げ句、私を優しく腐らせてくるだろう。

頑張る必要なんか無い。

悩む必要は無い。

母が死んだのは私のせいでは無くて、あの男だから気に病む必要なんか無い……。そう、笑って言ってくれる気がする。

自分より最低な人間が近くに居るだけで安心するように……。彼は――

「一誠……アイツは急激に変わった。

前は……ほんの少し前は只の臆病者だったのに……」

「そ、そうだったんですか？ 私には……その……想像が……」

「まあ、わかるよ。その……セーヤくんの前で言いたくは無いけど、今の彼は本当に人が変わった様だよ……」

グレイファイア様やサーゼクス様相手に喧嘩を売った真似をし、セーヤくんに殴られてしまっても心を抉るような笑みを崩さなかった先程の彼の話が私を中心に祐人君やセーヤくんやアーシアちゃんの間で展開される。

主であるリアスはグレイファイア様と何か話をしており、小猫ちゃんは一人で考え事をしている様子だ。

もうそろそろレーティングゲームが始まると言うのに、彼——兵藤一誠のお陰で私も含めた皆の精神は余り宜しくは無さそうだ。

リアスの婚約を破棄するためのレーティングゲーム……敗北は許されず、今は関係の無い彼の事を考えるのは良くない筈なのに……最近はその話がリアスと小猫ちゃんを除いたこの4人の間で持ちきりだった。

力なんて全く無いし、弱い筈なのに……初めてマトモに見た彼のあの負のオーラは本当に人なのかと思うほどのインパクトがあったから仕方ないと思う。

女王として、副部長として私は3人に集中するように告げながら、私自身も関係の無い彼の事を頭から消そうと精神統一をする。

『大丈夫さ……先輩は悪くないですよ。』

悪いのはその墮天使つて奴さ……俺はそう思いますよ？　ククク』

「っ……」

出てくるな。

私とアナタは話なんてしたことは無いし、そんな事言っても無い。

だから、私の心を乱さないで……シトリーさんみたいに私を腐らせようとしなくて……。

私は……。

『頑張る必要も悩む必要も無いさ。』

ご飯食って、トモダチと遊んで、只その日その日を無意味に生きてればみーんな幸せさ……そうは思いませんか？　ほったらかしにしてくれた父親擬きを恨んだ所でお母さんは帰って来ないよ？』

「う……」

やめて……やめて……！

『大丈夫、何度だって俺は言ってあげる……先輩は悪くない。悪いのは余計な事をした奴と育児放棄した父親さ！』

私の中を荒らすのは……想像でしか無いアナタが私を腐らせるな……！

超越者と無力男（マイナス）

最初は下世話な奴が来たかと思ってた。

だから白髪チビの様にしようかと思ってた。

隙見て杭と釘で串刺しにした後、脳天ぶち抜いてからスキルを発動してやろうと思ってた。

けれど俺は、自身の弱さを忘れていた。

圧倒的過ぎる奴には無力だということを忘れていた。

『リアス様眷属の女王……リタイアです』

モニターから聞こえる誰かの脱落アナウンスには興味は今無い。

俺が全神経を集中させているのは扉の向こうから感じる圧倒的強者を主張してくるプレッシャーだ。

「誰……？」

「恐らくは……魔王様かと」

段々と大きくなるプレッシャーはその大きさに比例して此方に近付いている事がよくわかる。

素人の俺ですら膝を折りたくなるようなこの強い気配は、センパイ曰く魔王って奴らしいが……ゲームが終わっても無いのに来るのかよ。

「……………。チツ」

こういうのを生物の危機的本能って奴なのだろうか。殆ど無意識の状態のまま両手に杭と釘を持って、何時でも投げ付けられるようにと構える。

……。まだ怖いという感情は俺の中にどうやら残ってるらしいな。

「その二つを構えるのは止めた方が良いです。

いくら何でも魔王様にソレを向けたら私も庇いきれなくなりますから……」

「……………はい」

久しぶりに全身が強張る感覚に陥る俺の腕にそつと触れるセンパイの言葉に我へと返り、持っていた杭と釘を未だ見ぬ魔王とやらから隠す様に適当な植木の後ろに向かつて放り投げておくと、遂に扉を2度叩く音が聞こえる。

「はい……………どうぞ」

「……………」

リアリティエスケープ
幻実逃否……………。

自分に降り掛かる嫌げんじつな事を否定し、優しい幻実げんそうへと逃げる俺の過負荷マイナス。

多少の奴にはそれが効いたが、お伽噺の存在としか思えないその親玉に果たしてそれが通用するか、今のままの俺マイナスで逃げられるのか……………その答えは、たった今開けられた扉の向こうに居る存在を見てから解る。

「失礼するよ」

「……………」

この紅い、赤い、朱い……………魔王に。

「自分から招待しといて挨拶が遅れて申し訳無かったね。

僕がサーゼクス・ルシファード……よろしくね兵藤一誠君！」

「……………」

一見すれば優男にしか見えない……いや、貧弱の俺が他人の事は言えないが。

「お久しぶりです……ルシファード様」

「こんにちはソーナさん。あはは、そんな畏まらなくても良いよ？」

目が覚めるような整った容姿と赤い髪に俺は目が離せず、サーゼクスと名乗った男がペラペラとくつつちやべってからセンパイに話し掛けているのを只見ているだけしか出来ない。

安心院なじみは確かにこの男すらカスとなるレベルの人外かもしれないけど、それを感じない雰囲気を持っていたら軽口が叩けた。

しかしコレは違う。無意識に放つてあるだろうオーラからして解る……人間……いや過負荷では絶対に届く事の無い勝利者特有の気配。

あーあ……これは凹むわあ。

だってどう足掻いたって勝てねーもん。

「その……彼が色々と失礼な事を……」

「いやそれは全然……寧ろ此方が謝らないと。」

唐突で無理矢理過ぎたしね……申し訳無かったよ兵藤一誠君」

「……………いや……………別に……………」

分け隔てありませんと主張する笑みで謝ってくるサーゼクスと名乗った男に俺は上手く声が出せないままぶつきらぼう気味に返してしまう。

くそ……飲まれてるな……彼に。

「そう言つて貰えると嬉しいよ」

「……………ええ、脈絡無く手紙だけ寄越し、成り行きとセンパイの顔立て目的でこの場所に居ますが、別に嫌だという感情は今はありませんので……」

だからせめて皮肉だけは言わせて貰おう。

その横に何か居た銀髪の人の頬が若干動いた気がするけど、不敬？ 知るかそんなもん。俺はさつきも言ったけど悪魔じゃないし、人間代表として言ってるまでだからな。

「あはは……ホントに(笑)めん」

皮肉と察してくれたのか、彼は苦笑いしながらまた頭を下げて来た。

チツ、やりづれえ。

「一誠くん……」

そんな俺を見てマズイと感じたのか、センパイが先程から俺の腕を掴んだままだったその手を動かして手を握って安心させようとしてくれる。

「分かっています……」

それだけ、たったそれだけだが、俺は他の誰にも感じない絶対的な安心感を得てざわつく心が落ち着くのと同時に、胸の中にあつた黒々としたナニかが綺麗サツパリ消えて

いく。

「すみません……」

「え？ 何で君が謝る必要が……？」

「その他色々含めて何となくです」

ボソツと謝る俺に目を丸くするサーゼクスつて魔王に適當すぎる理由を口にする。

どうであれ彼は俺を嫌悪した様子も見られない……だから俺も何も思わないし、今謝ったのですらそんな気分だったからに過ぎねえし俺は悪くねえ。

「そう……うん、そうだね」

俺の死んだ魚と最近評されまくってる目を見て勝手に納得したサーゼクスつて魔王さんはニコリと……紅髪の人を思い出させる笑顔を見せる。

ああ、そういやこの人紅髪の人の子貴だっけ？ は……兄より優れた弟や妹は存在しねえってか？

「うん、自己紹介はこのくらいにしようか！」

「……………はい」

どうにも気安いこの魔王の人は、ポンポンと話を進める。

いやそつちのほうが有り難いしさつさと消えて欲しいから良いんだけど……。

「妹……………あ、今レーティングゲームで凄い頑張ってるリー——いや、リアスの事なんだけど、どうかな？ レーティングゲーム」

「……………」

何故か中々帰らずにペラペラと話始めました。

椅子座って、隣に居た銀髪の人がいつの間にか用意してた茶なんざ飲んで。

「……………。うちの姉と同じで案外軽いんですよ……………」

「……………。あ、そうっすか」

ニコニコニヨニヨしながらレーティングゲームじゃなくて妹の自慢話にスライドさ

せている魔王の人に何とも言えずに呆然としている俺の横からヒソつと耳打ちするセンパイに、何でか知らないけどしよっぱい気分になってきた。

やっぱり折り合い付けても人見知りするこの性格の根は変わらないらしく、こうも向こうから一方的に喋られるとキツイとか言い返せない。

その点銀髪の人はそのような喋んなかったから何とかなれたけど……この魔王の人みたいなのが人で居たとしてもトモダチにはなれそうもない。

「それでね、小さい時のリーアたんは……」

「は、リーアたん？ ナニソレ？」

（サーゼクス様がプライベート時に口にするリアスの呼称です）

気付けば一緒のテーブルに座らされ、紅髪の人と兄者が手なんぞ繋ぎながら炎オーラを纏ってる変な奴をタコ殴りにしてる映像を見ながら嬉々として語りまくり、意味不明な単語が出る度に隣に座るセンパイが耳打ちで補足してくれるのだが、正直に言わずとも……すんげえどうでも良い話ばかりだ。

「おや、ライザーが圧されてる。」

フム、リアスの横に居る彼はキミの双子の兄だったね？」
「ええ、まあ……」

兄とは思っても無いし最早どうだって良い奴だったりするんだけど……心の中で補足しながら頷くと、魔王の人は意味深に笑っている。

「赤龍帝・兵藤誠八君か……」。

リアスも随分と頼もしい眷属達に恵まれたみたいだ」
「ですね」

赤龍帝が何だか知らんし、変ちくりんなもんが付いてるあの腕が何なのかにも興味は無いが、アレが俗に言うところの神器って奴か……そういや直接目にするのは初めてかも。

「あんまり仲が良くないみたいだけど……」

「最近はそうでも無いですよ」

(……)

んな事まで把握してるのかよこの魔王の人は。

何処までチクった事やら……あの紅髪は。

それとセンパイ……横で『えー？』って顔しないで……本当に最近はある意味で距離縮まつてるんだから。

「お兄さんが悪魔に転生した事について何か思うところはあるかい？」

「別に。奴の人生だしどうだって良い。」

俺が一々心配せずとも『お兄ちゃんは』優秀ですから……」

消えろとも思わないし、死ねとも思わない。

奴が誰で、何処から来て、何で周りが兵藤一誠の双子の兄と認識してるのかも未だ知らない。

だからどうでも良い。

悪魔に転生しようが、誰かに殺されようが、そのまま生きてようが俺にとって何の意味も為さない。

周りがなんて言おうが、俺に兄弟は居ないと折り合い付けた今でもそれだけは信念と

し持つてる。

それだけで今は充分だ……画面の向こうで俺とムカつく位に似た顔した男が男らしく変な奴を殴り付けているのを見ながら人知れず思う。

そして……。

『ライザーフェニックス様がリザイン致しました。』

よって、勝者はリアス様率いるグレモリー眷属となります』

勝敗は決まったらしい。

「リアスの勝利か……フツ、少しホツとしたかな」

「へっ……負けたら結婚でしたか？ そんなに妹が大事なら、偉い地位である貴方様の権限で潰せば良かったものを……」

「はは、意地悪しないでくれ。魔王なんてやってるけど、実際は若輩者でしか無いし、一部じゃ『若造』ときとか思われるだろうからね」

たははと苦笑いする魔王の人。

思わずそんな言葉も出てしまう。

「勿論そういう意味じゃないよ？ 僕だって普通の^{ノーマル}つもりさ。妻子もいるしね。

僕が言いたいのはその……上手く言えないけど人格が好ましいって事。それにキミは彼女とそういう関係なんだろう？」

はははと乾いた声で笑いながら訂正する魔王の人は、センパイに対して意味深な視線を向けている。

「………………。センパイがお金持ちの純血悪魔だから、人間ごときはとつとと消えろと？」

「違う。まあ、冥界の悪魔達はそういう考えを持つのが少なくないけど、僕はそうは思わない。

寧ろそういう考えはぶち壊して欲しいくらいだもん……。

ホント、自分達こそが至上の種族だの、純血こそ選ばれた存在だのと……全部『あの人の前では平等にくだらないのにさ……』」

「……………」

最後、一瞬だけ暗い顔をする魔王の人の小さな眩きはこの場に居る全員の耳に入る。それは魔王というよりはサーゼクスという個人の声に聞こえた。

「サーゼクス様……少々口が過ぎますわ。お控えください」

「あ、ごめんよグレイフィア。てな訳一誠くん、今言つた事は秘密ということ……」
「俺としても言い触らす理由が無いんで」

ウインクなんざ囁ましてくる魔王の人に気色悪さを感じながら言わないと約束するが……あの人が誰だ？

……………まさかな。

「それじゃあ一誠くん……またね！」

「それとソーナさんもね！」

「はい」

魔王の人が口にしたあの人が何でか気になり考えている間に、もう一度挨拶をしてか

ら銀髪の人と共に部屋を出ていった。

漸く去り、ホツとしながらソファに座り直す俺にセンパイもその隣に座る。

「結局ストレートには聞いてきませんでしたけど……」

「ですね……俺、ああいう一方的に話す奴が苦手みたいです」

相手が俺を薄気味悪がる前提なのに、ああいうイレギュラーは俺に気持ち悪さも嫌悪感も抱きやしない。

だから相手のペースに飲まれてしまう………今後の課題だなこれは。

「ですが、どうやらサーゼクス様の様子からいつて一誠くんを引き剥がそうとはしないみたいで安心しました。

後は姉さん辺りを抑えれば……」

「姉さん？ ああ、携帯画面の人か……」

「この場には今日は来てないみたいですが、その内会うことになるでしょう……。その時はよろしくお願いします……」

「……………はあい」

携帯画面の人……センパイの姉らしいけど……俺はこの時点で、さっきの魔王の人以上にめんどくさそうな奴だと予感する。

大体、普段センパイが携帯画面の人の話を全くしない時点で察せるもの。

「なんか疲れたわ……知らん間に紅髪の人達も勝ってるし」

「結構ギリギリだった様ですがね」

そんな事より……今は眠い。

早く帰りたい。

センパイは紅髪の人に一応挨拶しに行くらしいので、その間ちよつとだけ寝るか………夢の中をチヨロチヨロするあの女にちと聞きたい事が出来たし。

閑話：安心院さんの安心トーク（チラリもあるヨ）

結局何で俺は変なゲームの観戦に付き合ったのかわかりやしない。

魔王の人は何も聞かずに喋るだけ喋って帰ってしまおうし、ロクにゲームしてんの見なかつたし。

なるほどこれが時間の無駄って奴なんだな。学習したぜ、うん……。

「さつき魔王の人が言ってた『あの人』がアンタなのか、それを聞きに来た」

世間の事を一つまた知ったそんな俺は、2度目となる学ラン姿と謎の教室に居たりする。

センパイがゲームに勝った紅髪の人に挨拶してる間の僅かな時間を使い、ある人物に会うために眠ってみた所、気が付けばこんな格好と場所にいるという訳だ。

所謂夢の世界というこの場所……確証なんて無かったが、どうやら現実で意図的に念じながら意識を手放せば来れるっぽく、ハツとした頃には学ラン姿で椅子に座らされ、教壇に行儀悪く座った例の女が微笑して俺を見ている。

只存在してるだけの人外こと安心院なじみ。

俺に過負荷マイナスという存在を教え、能力スキルを覚醒させる手伝いをしてくれた掴み所が一切無いこの女に俺は聞きたいことの主語を取っ払って聞いた。

どうせ俺が何を聞きたいかなんて言わなくても解ってるだろうし、案の定長い黒……………いや、今改めて見ると少し茶色っぽい髪を持つ安心院なじみは人付き合いが上手そうな笑みのまま『フツ』と小さく息を吐く。

「なんだいなんだい？ キミから僕を求めて来た理由が優男君の話聞きに来たってだけかい。」

あーあ、まさか一誠君にそっちの趣味があるとは……………」

「ねえよ。知ってんだろうが……………」

「まあね。」

皮肉な事に僕はキミの両親よりもキミを解ってるつもりだ。大方さつきキミがトクしてた相手であるサーゼクス・グレモリー君が僕と面識あるのかとか……………そんなことを知りたいんだろう？」

相変わらずの余裕こいた態度だこと。

いや、実際「余裕」なんだよね。

コイツにとつてすれば全部がカスでくだらねーんだからな。

「まあね。あの魔王の人の言葉に妙な引つ掛かりを覚えて、何と無く気になっただけ」

回りくどい言い方なんぞこの女にや通用しないので、ドストレートに訪ねと、本日の安心院なじみ意地悪では無いらしく、ニコリと微笑んだ。

「簡単な質問だし暇だから答えてあげる。

うん、結論から言うとなんには昔一度会った事はあるぜ？」

なんてことあ無いさつて顔で言う安心院なじみ。

コイツの言う昔が一体どれ程の時間なのかはお察しレベルで敢えて口にはしないが、どうやら魔王の人が言つてた『あの人』はコイツで確実らしい。

そこから考えると、やはりあの魔王の人は……。

「いや違うね。彼は僕とは何の関係もない『只の』サーゼクス・グレモリー君だよ。

キミや僕の持つ様なスキルは無く、単純にそういう種族だからとか、そういう血統だからという理由での人外さ」

「わざわざ先回りして貰って光荣です……」

俺の思考を先読みしてアツサリと否定した。

「僕等に近い」と言ってたのは単純に勘か何かで言ってたのか……。

「だが、あの様子からしてアンタの影響を受けてるって感じだったんだが……」

軽い性格らしい魔王の人が一瞬だけ見せた醒めた表情とあの言葉はなあ……なんて考えてると、安心院なじみは微笑みそのまま座ってる教壇の上で足を組直す………つてオイ見えてるんだけど……。

「ちよこつとだけ昔の話になる。

ある日の朝の事だ。持ってた新品の消ゴムの角が欠けちやったんて、腹いせに表に出て迷える子羊共の人生相談紛いな真似を飽きるくらいまでやったんだ。

その中にはまだ若造だったグレモリー君が居たのは何と無く覚えている」

つと、真面目な話だし見えてる事は言わないで置こう。

「なるほど……で？ 共感させて悪平等アソウダにでもしようかと？」

あの一瞬だけ見せた魔王の人の顔は醒めてたというか、色んなものに対して『くだらねえ』って心理が見え隠れする様子なのはちゃんと覚えている。

今こうして教えて貰って思い返してみれば、絶対強者が故に持つ『安心院なじみ』と似通った考えを持つっていると推測出来たのだが、安心院なじみは教壇に座って組んでた足を組み替えながら首を横に振る。

その際また見えてしまい、色が白と分かってしまった事については全く関係ないのでソツとしとこうと思う。

「いや、そんな事は全く考えてなかったぜ？ 只単に僕はチヨロチヨロと色んな所に行つては適当な奴にそれっぽい事を言っただけ。

どうやら彼は僕の話の聞き、独自で解釈して勝手に共感してるみたいだけど、決してグレモリー君は平等主義じゃ無いし見下しもしてないからな。

大体、今在るこの世界にノットイコール僕ぼくであり悪平等あくびょうとうは存在しないさ」
「的てきが外れてとんだ赤っ恥ちだな俺は……」

違うのかよ……てつきり人外同士の徒党を組みましたいな事を密かにしてんのかと勝手に思い込んだのに……。

だがしかし、悪平等か。言い得て妙だ、平等なだけの人外さんであるこの人にやあな。

「そもそも、魔王だの神だの龍神だのなんて僕の興味の対象外だし」

「なんで？」

「つまんねープライドか何かで同族同士や他種族と潰し合って勝手に数減らしてる連中なんぞ平等にカスだから。彼等も確かに人外だけど……僕とは相容れない人外さ」

「ふーん？」

良くわからんが、要するにどうでも良いという事は分かった。

じゃあ俺は何だろ……蠅かな？

「そうかもね……と言ってやりたいけど、キミは少しだけ僕の中では特別だったりする

んだぜ？

何せ、過負荷マイナスとはいえ唯一僕に近付いたある種のイレギュラーなんだもん。

キミ以外に本当の意味での過負荷マイナスや異常性アブノーマルを持つ人間は居ないしね」

「なぜ？」

「過負荷や異常者……では無く、セイクリッド・ギア神器があるからだよ」

ああ、成る程……神器は確か本人の才能を具現化させたもんだもん……多分。
アブノーマルでもあるしマイナスでもあるだろな……アレは。

「それが何故、キミに神器とはまるで関係ない僕に近い存在……スキルホルダー能力持ちとなったのか
……。」

5歳の誕生日に現れた謎の兄が原因のトラウマか、それともその前の——」
「俺の話はどうでも良いだろ」

「おいおい何だよ、拗ねるなっつて〜」

本当に何でも知ってやがるなこの女。

怖い女だよ本当。

「確かに今は一誠くんの話じゃ無かったね。ごめんごめん話を戻そうか。」

まあ、兎に角彼は単に僕を『覚えていた』ってだけ何処にでも居る只の魔王さ。

キミじゃ逆立ちしても勝てねーってだけは言っておくよ」

「あ、そう……」

「キミ以上……いや以下であり、負完全である球磨川禊君なら勝てずとも色々やらかしてくれるだろうし、主人公の頃の黒神めだかちゃんならもしかしくなくても勝てるかな」

「ごめん、いきなし知らん名前出されても困る。誰だし」

意味深な名前を意味深な笑み浮かべて呟く安心院なじみは何故か地味に楽しそうに見えた気がした。

「単なる週刊少年ジ○ンプ内の登場人物さ。」

キミが知らないのも無理は無い、だってキミは集○社組じゃ無いしねー」

「あ、ああ?」

サッパリ何を言っとなるかわからん。

何だよ週刊少年ジャ○プって……？ ホッピングなら知ってるけど、そんな漫画雑誌は聞いた事がないんだが……って、答えてくれそうもねえなこの顔は。

「ま、良いか。とにかく色々教えてくれてサンキューな。取り敢えず俺は帰る」

会いに来た理由の大半は把握した。

となれば最早此処には用は無く、そろそろセンパイが戻ってくる頃合いだろうし、帰ろうと席を立つ。

何やかんやでこの女にや世話になりっぱなしだな。

「ん、もう帰るのかい？ 色々教えたんだからもう少し付き合って欲しいんだけどなあ」

「今は無理だ。センパイがそろそろ戻って来るだろうしね」

「あーら、随分と彼女に対してお熱だな……はいはい、分かった分かった。さっさと戻ってイチャコラしてきな」

……。何かムカつく言い方だな。

「……………わかった。帰って寝たらまたコッチ来るよ」

けど世話になつてるのは本当だし、俺は借り物はちゃんと返す主義だ。人から物を貸して貰った事はねーがね。

だから奴にとつてすれば俺は蟻以下でしか無いが、俺にとつては……。

「おやおや、言ってみただけなのに随分と律儀だね。

彼女に嫉妬されちゃうなこれじゃあ……」

「ハッ、アンタとか？　ねーよそんなもん。」

俺は単純に『トモダチ』が好きなだけで、そのトモダチの頼み事だからだよ」

『今は』俺にとつていい人だから勝手にトモダチになつてもらつてるに過ぎねえ……。そして俺はトモダチに借りっぱなしは嫌だ……只それだけだ。

「ふ~~~~ん？」

「何だその目は……いや、大体解るわ。」

カスにトモダチ扱いされたかねーってか？　ハン、残念だが勝手に決めた事だ……ア

ンタどう思おうがな」

「いやそうじゃない。僕を一方的に好きになる奴とか、悪平等（ほく）になる奴は多かったが、トモダチと抜かす変な奴はお前で二人目だなど思ってたな」

「変で結構だね」

フツと鼻で笑う安心院なじみに腹が立つことは無い。

寧ろ今言つてた一人目が誰なのか地味に気になる。

「そいつも俺みたいな負け犬なのか、それとも………つとと、そんな事よりこれも言つとかないと。」

「それとだ、さつきから足を組み直す度にスカートの中が見えてるから気を付けな……自称アンタのトモダチのお節介だ」

「センパイを見習えセンパイを……と続けようとしたけど、最近のセンパイは時たま怖い時があるから言うのは止めといた。」

よし、やつと言えたぜ。全く、こっちはハラハラしてたんだからね！

「え？」

俺の言葉にキョトンとした安心院なじみが、目線を自分の足元へと見やり、やがていや々な笑みに変貌させる。

「大丈夫だよん。これは計算してギリギリ見えない様にしてあるからね」

とか言ってまた足を組み直す安心院なじみの顔は自信満々と言わんばかりである。

しかしながら太股は見えるし普通に中も見えてるから計算もクソもなかったりする………あ、これわざとやってんのか？

「うん、普通にギリギリじゃねーしモロに見えるよ。」

流石にガキの俺でも見てて恥ずかしくなるぜ」

「ほっほーん、何やかんやで一誠君も年頃かい？ まあ、本来のキミは馬鹿みたいな性欲持ち小僧」だし、僕個人としては責めるつもりなんて無いよ。

ほれほれ、何なら捲って見せてやるか？ んん？」

………あ、これわざとだ。

腹立つ笑顔でワケわからんこと言いながらスカート先端摘まんでやがるし。確信犯だったんだな……あれ、言葉の使い方間違えてるかも。

まあ良いか……。

「いやだからね………うん、アレだな。あんたつて割りとビッチつて奴だよね」

見たからといってどうも思いやしねえ………つてのは最近センパイと仲良しになってから段々と嘘になってきたが、それでもトモダチのスカートの中身を見せろ言う程猿じゃない。

寧ろ俺としては、よく巷で聞くビッチギャルつて言葉が半端無く今の安心院なじみに似合つて見えてしまつて、みつともねえと思つてしまうんだ。

だつて考えてみる。例え一方的の自称で余計なお世話だとしても、トモダチの人が人にパンツ見られてハアハアする変態だつたなんて………な、嫌だろ？ だから言つて置くんだよ………その他にも理由はあるけどね。

そんな意図を込めた俺の軽いジャブ言葉に、笑いながらもちよつとだけ眉をピクリと動かす安心院なじみは、そのまま笑つたまま口を開く。

「……。あつそー。それなら今度シトリーさんを此処に招待した時に僕がうつかり——
『実は一誠君はパンツと太股フェチだったりするんだぜ？ ソースは僕のを見た時の反
応』」

——なんて言ってみた後に彼女がどう行動するか賭けてみないかい？ 相当愉快な
事になるに僕は一票を入れる」

「………………。それはヤメテ」

何時かこの安心院なじみをポカンとアホ面にして『ザマア見ろ』とケタケタ笑って気
分が良くなりたいたいなあなんて思つてて、案外早く叶うかと思つてた矢先の核兵器持ち込
みに、半端もんの過^{マイナス}負荷である今は無理だわと悟つた瞬間だった。

うん、センパイを引つ張つて来たら負けるわそんなもん。

ちくしょう……ニタニタしおつてからに……パンツでも太股フェチでもないのに
……。

一誠くんとトモダチ

格好いいと思ったから言って何が悪い。

安心院なじみに教えられ、結局はあの魔王の人は彼女に会ってただけで只の魔王だということも解り、最早初めの頃のキャラ崩れも彼を前にしても二度と起こらない。

勝てない相手にどうしようだなんて勇氣も無いし理由も無いのだから、無氣力・無関係・無関心の精神に乗っ取って知らん顔しとけばどうって事は無いのさ。

『此度はありがとうございしました魔王さま……』。

あーそうそう……さっきの事が気になったんで『安心院なじみ』に聞いてみた所、ア
ンタを悪平等ノットイコールではない只の魔王だつて言っていましたぜ?』

『っ!? か、彼女と会ったのかい!? やっぱりキミは……お、教えてくれ彼女は今何処に
……!』

『さあ〜て? 天国・地獄・宇宙・人の心の中やら夢の中……腑罪証明アリバイプロックで何処でも居られるあの女の居る場所は誰にも彼にも解りやしませんよ———おおつと? 唯一奴に近い存在らしい俺に対して無理に聞こうとしたら、安心院なじみちゃんはアナタをどう

思うのかな?』

『……………っ』

『フツ……………その内願つてりやあ来るだろうし、気長に待つてりや良いんじゃないですかね? んじゃ……………『またいつかとか。』』

『……………っ』

ちよつとした仕返しも済ませた俺としては結構スツキリ出来たし何の問題もない。

魔王の人にだけ聞こえる声量で、安心院なじみの名前出した瞬間の取り乱しっぷりは中々愉快でザマア見ろと思つたのと同時に確信できた。

この魔王……………かなりあの女にタラシ込まれたんだなあ……………つてね。

ホント気紛れでやらかしたのにキツチリ禍根は残すなんて、やり手と拍手すらしたくなる。

「さつき、別れ際に魔王様と何を話されてたのですか?」

人間界の学園に戻った俺とセンパイ……………と、センパイのお伴の人達は、流れ解散にしますというセンパイの命令の元、何やら俺に言いたげにしてた匙君を副会長以下役員一

同が拉致つて行くのを生温い目で見送り、残った俺とセンパイは帰り支度をしながら話をしていた。

兄者達の方は、戻つて来るなり重い荷物を捨てられてハッピーだと言わんばかりのテンションで帰つてくのを目撃したんだが、何か知らないけどあの白髪チビ……そして一度たりとも話をしたことが無く、ゲーム終盤で脱落した黒髪の……姫小路だかそんな名前の人が沈んだ目でこつちを見ていたのが何か気になった。

まあその姫小路さんも白髪チビも紅髪のは人に連れられて今は居ないし、興味も沸かない連中よりセンパイだセンパイ。

「アレっすよアレ。何かあの人、安心院なじみの行方が気になるらしくてね？ センパイが部屋出てた間に彼女から色々聞いた話の一部を教えただけっす」
「……………」

あの時俺が魔王の人にほんのささやかな仕返し目的で耳打ちしてやった内容を知りたがるセンパイにテクテク帰り道を並んで歩きながら教える。

すると、嘘じゃ無いのにセンパイの顔は不満そうな顔だった。

「またその人ですか……」

「はい……え、なんすか？」

「……………」

安心院なじみの話をする決めて不機嫌になるセンパイに俺はもしかしなくても地雷を踏んでしまったと気付いた時には既に遅く、そこからの帰り道はセンパイのご機嫌とりに費やしたのは言うまでも無かった。

それから暫く経ったある日の休日の出来事の話だ。

家ですることと言えば一人でボードゲームするか寝るかしかないので、何時もの通り朝早く起きて一人人生ゲームを楽しんでいた訳だが、どうにも俺の居る部屋の外が騒がしい……というか家の住人以外の声が聞こえる。

両親は朝にどつか出掛けるとか言っていたのを聞いていたので、今聞こえる声は両親のでは無く……というか最近良く聞くような声だった。

主に兄者と関係の深い連中と言えば分かるだろうか。

「ハア……人気者を近くに持つと騒がしいのを我慢しなきゃならんのか……」

暴れてる音は無いが、話し声が俺の一人人生ゲームの集中を乱してしまうので、このまま続行するのを諦め、片付けしながらこうやって文句言つたつて下のリビングで和気あいあいしてる連中に届く訳も無く、俺は自然と服を着替えて財布を手に持っていた。

理由は当然外に行く為だ。

別に彼等が煩く話をしてようが勝手だし、最早金髪の元シスター以上に『住まわせてもらってる』って肩書きが似合ってる俺が都合良く文句言える立場では無い。

でも煩いのは煩いので、そこから逃れるには外に出るのか一番現実的で得策なので俺はこうして部屋を出て階段を降り、案の定リビングに集まって何か楽しそうにしとる連中を扉の隙間からちよつとだけ見てから玄関に向かおうと回れ右をす………

「……………」

「……………」

る……………つて感じで振り返ってみれば、まるでコントを彷彿をさせるタイミングの良さ……いや悪さで俺はいつの間にか背後に立ってたと思われる人と鉢合わせしてし

まった。

トイレから戻ろうとした所で俺を発見してしまったのだろう、その人は俺と顔を合わせたその瞬間から『何でオメーがそこに居るんだよ?』的な目で俺を見ている訳だが、俺から言わせて貰えばオメー等が何で此処に居るんだよっつー話だったりするので覗いた事に罪悪感なんか無い、寧ろ前々から俺を気味悪がってるこの人とは一度も話した事が無いので、一言だけ挨拶してから家を出ようと思い……。

「ああ、部屋でのんびりしてたら何か騒がしてね?

どうにも聞き覚えのある声ばっかするからちよつと気になっただけなんですよ……ええつと、姫小路先輩?」

俺は勤めて……最近一人鏡の前で練習した『人当たりが良さそうな胡散臭い笑顔』を浮かべて、一言も発する事無く俺を見てるだけの人……黒髪の人に挨拶をする。

「……………」

「あれ?」

しかし黒髪の人は何も返さないで、ただただ俺を見てるだけだ。

「えー無視ですか……」。

若干傷付くんだよなあ。ま、良いけど……それじゃ」

別に返事が欲しくて言った訳では無いし、今言ったのも嘘だ。

ていうか、なまじ返されても逆に困るので丁度よかつたりすると内心思いながら、また練習した笑顔を見せると、黒髪の方はビックリと身体を動かしながら、今度こそ嫌悪感丸出しな顔となっていた。

うーむ……身に覚えが無いのになーつと……。

「すみません、のいてもらえますか?」

「……………」

いつまでもそんなツラしながら狭い廊下を通せんぼすんなと黒髪の人に言うと、そこでやつと微妙に反応しながら横にずれてくれたので、俺はそのまま彼女の横を通り過ぎながら……………」。

「あ、そうだ……。この前のゲーム見てましたぜ。かつこよかったと素直に思いましたよ……………先輩が」

俺はこの前のレーティングゲームを見た感想と遅れながらのお疲れ様コールを送っておいた。

「……………な……………」

するとどうだ。

どういう訳かは知らんけど、見ずとも分かる位の殺気が背中越しから伝わり、何やら細かい声を出しているが聞こえた……………つて、え？ 何で？

「なんで……………そう思うんですか？」

今にも爆発しそうなのを必死に抑えています……………そんな気持ちしがヒシヒシと伝わる声で漸くまともな会話になった彼女の第一声に、俺は良く解らんままやはり物凄い怖い顔

をしていた黒髪の人の方へ向き直す。

「なんで……つて、ただそう思ったただけなんですけど？ 他に何を言えと？」

怒りを助長させるつもりもない、ただ思った事をそのまま口にしたその瞬間だった。

「私は何もしてないっ!!」

確か学園二大お姉様だかという御大層な二つなを持つ黒髪の人らしからぬ、怒りに満ちた顔でそう叫び出す。

そのせいでリビングに居た兄者の残りのお仲間共がこぞつてやって来たせいで俺が居る事がバレてしまった。

「朱乃……？ それに兵藤君じゃない。こんな所で何をしてるの？」

「どーも。何か知らねえっすけど、急にキレ出したんですよ」

珍しき組み合わせのせい、紅髪の人が目を丸くしながら怒る黒髪の人と俺とを交互

に見て状況を知ろうとするので今あった事を正直に教える。

しかしながら、紅髪の人も兄者もその他も全く俺を信じて無いって顔だ。

「朱乃が声を荒げるなんて余程の事が無ければ無い筈よ？ 何を言ったのよ……」

「いや、だから……ほら、この前のレーティングゲームでしたっけ？ あれについてこの人に『お疲れ様でした、格好良かつたっす』……みたいな感じで普通に言っただけっすよ？ そしたらヒス起こしたんすよこの人」

「っ!!」

チラツとこつち睨んでる黒髪の人を一瞥しながら正直に説明をすると、一瞬俺を殴ろうとしたのか飛び掛かろうとしていた所を金髪の男と白髪のチビに止められる。

うん……何でこんな怒ってるのかが分からないし、紅髪の人が心の底から呆れた顔でコツチ見てるのかも分からない。

「………………。それは怒るわよ。貴方、最初から最後まで見といてそのコメントなの？」

「そうですよ？ 確かに終盤この人はリタイアしてましたけど、一般小市民代表としての意見は『格好いい』ですね。うん……」

うん、あんな手から変なもん出したり剣振り回したりなんて人間は無理だし、昔そんなものに憧れてた時期もあった事を思い返せば素直にそう思うのに、何故か黒髪の人には更に怒りメーターを上げながら食って掛かった。

「私は何もしないまま脱落したんです。それを格好いいとアナタは呑気に良く言えますね……！」

「良く言えますねって……じゃあ何ですか？ アンタは負け犬じゃねーかアーホとでも言えば良かったんすか？ じゃあ言ってやるよ……！」

要はこの黒髪の人は罵倒されたかったらしい。

うん、ならお詫びの代わりに目一杯言うよ。

『『あーあ』『王様の次に偉い位置に居る癖して』『相手の一人も倒せずにはリタイアしちゃってさー』『それで女王（笑）とか——』』

キレてる黒髪の人のお望み通り、罵倒してやろうと半笑いな顔になり、抑えられてる

彼女を指差しながら思い付く限りの悪口を言つてやった。

それなのに、何故か俺は殴り飛ばされて玄関の扉に背中からダイブしていた。例によつて兄者のお陰でね。

「イタタタタ………。え？　ちよつと意味が分からない。

普通に労いの言葉を掛けたらキレられ、文句言えつーから文句言ったら殴られるとか……。訳わかんねーなアンタ等は」

「黙れよ……。人の気持ちも察する事を知らないのかよ……！」

盛大にダイブしたせいで、玄関に並んでた靴がグツチャグツチャにしてしまったままドアを背を預けて座り込む俺を怒った顔して見下ろす兄者がまたまた良いこと言つてるつもりの台詞を並べてる。

「そうやってお前は——」

「ちよつと待とうぜ」

しかしながら、今回は前々からこの良いことばつか言おうとしてるだけの兄者に言い

たいことがあるので、また何か尤もらしい事を宣おうとすると、ひっそりとリアリティーエスケープ
幻実逃否で『兄者に殴られてダメージを負ったという現実から逃避する』——という
感じで使用し、ガタガタの身体と腫れ上がった頬を真っ白な状態にしてからスクツと立
ち上がったから兄者……そして驚く他の面々を1度見てから俺は頬を擦りつつ口を
開いた。

「前から『お兄ちゃん』に言いたい事があるんだけどさあ」
「腫れが……無くなってるだど……？」

腫れた頬を手で覆い隠しただけで、端から見たら腫れが癒えたとしか見えない演出を
盛り込ませ、驚く連中を無視して話を続ける。

「そうやってすぐ殴るのは構わんよ。」

でもさ、それだったら俺が言おうとする前に止めれば良いんじゃないの？ こんな中
途半端に言わせてから殴り掛かるよりも」

「何が言いたい……」

「え、わかんない？ ううむ、頭の良い『お兄ちゃん』なら分かるとおもったんだけど、

まあ良いや。

だからね――

「大概が後手にしか回れてねーのに、偉そうに説教垂れんなよ中途半端偽善者ヤロー」

前より距離感が縮まったが故に口にしたこの言葉は、兄者の顔を途端に歪めさせるのに十分だったらしく、これ以上何も言わずであった。

よし、ザマア見ろ。

「っ……………い、一誠エ……………!!」

「はあ……………止めなさいセーヤ。」

ホント兵藤君は的確に人を傷付ける言葉ばかり口にするわね……………とことん私達に似てるわ」

「はあ？ 勘弁してくださいよ。アンタ等と一緒にくたにされても困るし……俺は人間ですよ」

人間であり、中途半端な過負荷^{マイナス}でだけで、俺はお前らじゃ無ければ似てもしねえ。だからセンパイを俺方面に全力で引きずり込んだんだからな。

ズレてんだよ……魔王の人然り紅髪の人然りね。

「そうね、アナタは人間で私達では無い……」

だからこそ、気になるのよ……『今さつきセーヤから負った傷をどう治したのか』のかをね」

ギリリとした目付きで俺を見据える紅髪の人から、嘘は通用しないというオーラがバシバシ伝わり、俺は思わず笑ってしまう。

笑ってしまうからこそ。

「はあ……あのさ……」

俺は前々から余計な真似をしてくれた事に対する仕返しを今この場でしてウサを晴らす為、隠し持っていた釘と杭を奴等に投げ付けてやろう――

「………………。何をしてるのかしらリアス？」

とは思わず、実は兄者に殴られて玄関まで吹っ飛んでひっくり返ってるその隙を見て、センパイをコツチに呼び出してたので、後はセンパイに頼ることにしました。

「そ、ソーナ…………？ 何で此処に…………」

「決まってるでしょう…………一誠くんに会いに来ただけです」

そして今日のセンパイは目が違うぜ。

だってねえ…………？

「一誠くんの頬がまた腫れている理由はちゃんと教えてくれるんでしようね……皆さんは？」

「「「え!」」」

リアリティーエステート

幻実逃 否で消した傷をまた元に戻したからね。

俺の頬はズキズキの真つ赤に腫れ上がってるぜ。

そして一言言うのも忘れないぜ。

「今回に限っては俺は普通に殴られたあげく、この人達はこの腫れた頬を自分で治したとか訳の解らんことを事を言うんですよ……。」

しかもそのワケを言わないとボコボコにするとも……いやマジで怖いっすわ」
「なっ!?! そ、そんな事言っただけ——」

再び腫れ上がった頬をセンパイに擦って貰いながら、被害者アピールをする俺に紅髪の人が慌てて弁解しようとするが、何時にも増して氷の様に冷たい目をしてるセンパイは最後まで聞かずに口を開く。

「じゃあこの腫れた頬はなんですか？　あなた方は人間相手に悪魔の腕力で殴ったんですか？　例えば手加減しても許される話では無いのは判るでしょう？」

「う……ち、違うのよソーナ……これには——」

「理由がある？　良いでしょう、なら言ってください。」

それで一誠くんが悪ければ私からも謝罪しますが、そうで無かった場合は覚悟してください。

私達を知つてるとはいえ、人間である一誠くんに対して力を行使したと魔王様にご報告させて頂きますので……」

冷徹な表情で、押し黙ってしまふ連中に言い放ったセンパイは俺の手を引きながらリビングへと向かう。

うーむ……やっぱ黒髪の人よりセンパイの方がカッコ良かったぜ。

幼馴染みが普通と何時から錯覚した？

裁判に勝てた。

……つてのは大袈裟な話だが、センパイのお陰で俺は連中にスキルがバレる事は無かった。

それどころか、これ以上俺を無意味に探るようなら魔王の人にチクるぞと脅し入れたら本当に黙ってしまった。

魔王はやっぱり彼女達にとっては絶対らしい。

連中の目は最後まで俺に懐疑的だったが、必要以上に互いが干渉しなければ宜しいじゃないかというセンパイの意見で取り敢えずまとめられ、その日の裁判は閉廷した……これがこの前の出来事だ。

で、つい先日は球技大会があつたりした。

しかしながら俺は出てない。

ていうか出るクラスも無ければ部活も無い。

だから見ていただけ。

兄者のチームを見てたり、その過程で金髪の男の方が色々ミスしまくってたのを只見

ていただけ。

まあ、元々運動の類いは苦手だし見学なだけ俺としてはありがたかったので、ブーツと蟻の巣数えながら見てたよ。うん……………まさかトモダチと会うなんてこの時は思わなかったけど。

婚約騒動を鎮圧させ、球技大会も終わらせて漸くまつたりとした日常に戻ると踏んでいたりアス・グレモリーだったが、そうは問屋は降ろさねえと次なる問題と対峙していた。

それは、今までの騒動の中に常に己と共に存在する兵藤誠八の弟である一誠が先ずはそうだった。

誠八とは違い、純人間でありながら着々と自分達の正体なかみを知り続けてありながら、彼には本当に普通の人間なのかと疑問に思えて仕方ない現象が数多くあった。

最初は眷属の一人である小猫の報告で明るみとなった話……『幻覚を見せてきた』という事と、ついこの前直接目にした『負った傷を瞬間的に消したり出現させる』という……本当に純粋な人間ならまず不可能で不可解な現象を見せたのだ。

当然何なのか気になるリアスとしては、本人に直接聞いてやろうと、この前誠八の家へと赴いた時にアクションを仕掛けた。

最近精神が嫌に不安定な朱乃との小競り合いを利用して聞こうとした。

けれど結局の所は知ることは出来ず、逆に一誠と現状で一番近い存在であるソーナに全てを潰された。

『今回の事は全て魔王様にご報告させて頂きます。

リアス……そして兵藤君……アナタ達が一般人に手を向けたとね』

『なっ……ま、待ちなさいソーナ！ 私は只……』

淡々と……それでいて何時も以上に冷えきった瞳でリアスとその眷属達を見据えながら言葉を発するソーナに焦りながら弁解しようとする。

『只……何ですか？ アナタ達の誇大妄想が真実か知りただけで、ヘラヘラして一向に話そうとしないから仕方なく——とでも？ 残念ですが彼のこの姿を見せられて私はアナタ達の味方は無理ですし、そもそも私は、例えば彼に落ち度があるうと無かろうと関係ありません。

私は、何が何でも一誠くんの味方になりますから……』

とりつく島がまるでない。

今のソーナはまさにその言葉通りの態度だった。

声を荒げる事も無ければ怒りに支配された顔でも無い……ただただ冷徹なまでの無表情で語る彼女の姿は、幼馴染みであるリアスも流石に身震いを覚えた。

しかもソーナを怒らせるもう一つの要因として、先程から彼女の隣に座って頬に氷嚢を当てている一誠の大袈裟過ぎる大法螺だった。

『うげげ、また奥歯が取れてるし……』

どうも最近は歯を折られてばかりだぞ……』

モゴモゴと口内を舌で探ってから口許に手を当て、何かを吐き出してからテーブルにカランと置いたソレは紛れもなく一誠の奥歯であり、血で真っ赤に染まっていた。

『ぐっ……さ、さつきまでその傷を魔法みたいに消してた癖に……！』

『はあ？ いやいやいや、んな訳無いでしょうが。』

ほら、俺の永久歯の奥歯がこんな様なんですけど？ これでもまだ俺が何かしたみたいいな事言うんですか？ まあそんなに『お兄ちゃん』が殴った事を無かった事にしたい

のならそれで良いですけど——』

ソーナ来る直前に見せたあの不可解な現象は気のせいでは決して無かった。

それなのに、あくまでも一誠とソーナは『お前らの誇大妄想だよ』と言わんばかりの惚けた態度で、逆に自分達を責めているものであるが故に、リアスと誠八の顔は悔しそうに歪んでいた。

しかも一番に厄介なのが……。

『よくはありません。一誠くんは毎回被害を被害と思わないでヘラヘラ出来るから良いかもしれないが、私は違う。』

好きな男性が『只言い方に苛立った』という理由で殴られて黙ってるられる程大人じゃない』

ソーナが全面的に一誠の肩を持つからだ。

しかもサラリと好きとまで宣う徹底ぶりだった。

『だから私はやれるだけの仕返しを代わりにやる。』

その為には何だって利用する……他の事なら一誠くん同様にヘラヘラ笑えるかもしれないけど、これは譲れない……だから覚悟してくださいリアス——そして皆さん』

過負荷相手にルール無用で戦おうとする愚かさを……。

ズズズ……寒気を感じる魔力がソーナの身体から溢れ、口を半月に吊り上げた一誠とを目にしたリアス達は息を飲んだ。

そして悟った……勝つ勝たないでは無く、この二人と事を起こしたらナニかを台無しにされると……そして気付いた。

誠八もリアスも小猫も祐人もアーシアも朱乃も解ったのだ。

『ああ、本当の意味で同じなんだこの二人』

そんな気がしただけかもしれない。

ひよつとしたら違うのかもしれないけど、リアス達は思ってしまったのだった。

『これは差し歯確定かなあ……幾らすんだろ？』

『私が治療すれば何とかかなります……痛かったですでしょう？』

『ええ、まあ……蜂の様に刺すって言葉を身を以て体感しましたわ。ホント生きてるのが不思議なくらいだぜ』

『……………』

何を一誠とソーナが隠しているのかは知らないが、これ以上踏み込んだら危険なのかもしれないと……。

(私も言われてみたい……『貴女は悪くない。』って……)

そしてそのナニかは、リアス達の中の誰かに埋め込まれた事に……本人も気付かないまま時は流れ、今度は別の問題がリアス達へやって来た。

それが……本日教会から来た二人のシスターである。

一応前以て来るという話は聞いてたので慌てる事は無かったが、話の内容が内容だけにリアス達は頭が痛かった。

「分かったわ。要するにグレゴリの幹部のコカビエルから強奪された聖剣の成の果てを

奪い返すか破壊するかの話に私達が介入するなって話ね？」

「そういう事だ」

「うんうん」

リアスの何処と無く投げ槍な物言いに、派遣された二人のシスターの片割れで、青髪に緑のメツシユが入った少女・ゼノヴィアは割りとは不遜な態度で頷き、もう片割れである少女は『早く話を終わらせろよ』という態度見え見えな顔でゼノヴィアと自分と幼馴染みだったらしい誠八を見てはコクコクと頷く。

「何で私達の領土なのよ……」

「それはコカビエルに聞いてくれ、私は知らん」

「確かに……ハア……」

二人がやって来てから幾度となるため息の理由は、今ぼやいた事もそうだが、先程から自分の後ろで殺気を隠さず放ってる騎士のせいでもあったし、昨日兄・サーゼクスから直接怒られたというのもあった。

あの妹に甘いとされるサーゼクスが、らしからぬ厳格な態度で『彼にはソーナさん以

外に干渉する事は許さない』と厳命してきたからだ。

それは、この前ソーナが言った通り告げ口されたからかも知れないと考えるが、それ以上にサーゼクスのあの態度は『一誠にヘソを曲げられたらヤバイ』という感じがヒシヒシと伝わってきたのだ。

只の人間に何故サーゼクスが庇うのかは知らないが、これでもう一誠の事を探るのは彼が気まぐれでも起こして自分から話でもしない限り、あの不可解な手品の種を知ることとは出来なくなつた……………のと、それ以上に魔王に怒られた事に凹んでいたのだ。

「事情は分かつたけど、もしコカビエル達が私達に何かするようなら『正当防衛』で抵抗くらいの真似はさせて頂戴……………」

「良いだろう。但し聖剣は……………」

「分かつてるわ、そんな毒にしかならないものをどうこうしない……………約束するわ……………ハア……………」

魔王には怒られる。

ソーナとは敵対寸前までになる。

自分達の領土で墮天使と天使陣営が傍迷惑な事をやろうとしてる……この時点で三重苦となつてしまつてる現状のお陰で、普段なら別陣営の連中に噛み付く筈のリアスも自棄つぱちでホイホイ了承した。

「待てよ……」

「む……何だキミは？」

しかも極めつけは……。

「キミ達の先輩で失敗作の生き残りだ……！」

騎士・木場祐人が聖剣とただならぬ因縁があるという事だった。

殺意を身に纏い、そこらじゅうに剣を出現させながらゼノヴィアと先程からソワソワしてる少女の前へとでた祐人やそれを止めようとする誠八とアーシアの存在に気付いたゼノヴィアが余計な事を言つたせいで誠八まで祐人と一緒になつて怒つたもんだから、そろそろリアスは胃が痛くなつてきた。

うーむ平和だね。

相変わらず教室には誰も居ないけど、慣れれば静かに過ごせる空間だと思えるしこれはこれで良い。

そう思いながら今日も一日を健全に過ごせ、気分良く余韻に浸っている最中、ふと今朝方センパイに言われた事を思い出した。

そういえば、今日センパイは用事があるとかで遅くなるかもしれない……なんて話を聞かされていたので、最早一緒に帰るのが自然の摂理と思ってしまうている俺としては、その用事が終わる時間まで何をしようかなと考えながら飲み物でも買おうと食堂横の自販機目指して歩いていたら時だった。

既に外は暗く、他の生徒達も殆ど居ないのでやっぱり静かです……なんて思いながら歩いていると、旧校舎からけったいな音が聞こえた。

「爆弾テロか？」

そんな訳は無いのだが、旧校舎にたむろしてる連中が連中だったので、ちよつと……ほんのちよつぴりだけ覗いてみようかなと旧校舎に足を向けると、前方から二つ人陰が目に入り、足を止めて目を凝らす。

「んんん？」

薄暗いので良くは見えないが、この時間にまで此処に残るのは教師か生徒会の人とかあの連中なので、誰かなどは限られてくる。

気配と匂いからしてセンパイじゃ無いことは解るし、向こうも俺に気付いてないのかこつちに向かつて歩いてくるお陰で、姿がうつすら見えてきて分かったのだが、格好からして先ず此処の関係者じゃ無いぞ。

「……。やっぱり止めよう。下世話は身を滅ぼすしね……うん」

勘とかで片付けたくは無いが、それでも俺の中ではあのフード被りの二人組と関わりと絶対変な事に巻き込まれる気がしてならなかった。

悪い予感に関してにはほぼ間違い無しに的中する運の良さを持つ身としては、このまま

教室に戻って大人しくセンパイが来るまで待つてるべきだという結論となり、回れ右をしようとした時に事件は発生した。

「あれ？ あそこに居るのって……」

はい、バレました。

こういう時に逃げようとするやと直ぐに相手から見つかってしまふ運の良さに笑えてしまうが、今はそんな場合じゃ無いので、知らん顔して逃げようとするが、そうは問屋が降ろさないのも俺の運の悪さが故だった。

「間違いない……イツセーくんよ！ やつと見つけたわ！」

「む……先程見た兵藤誠八の弟の者か？」

「そうよ……つて……待つてよイツセーくん！」

何でかなんて後で考えるべきだし、どつかで聞いたような気がする声の主が意味の分からんくらいなハイテンションの理由も同じくだ。

とにかく今はさっさと逃げようと、名前を連呼しながらこっちに向かって走ってきた

怪しい二人組を振りきろうと走るが、俺の体力の無さと運動不足気味の足では駄目だったようで、気が付けば俺は背中に襲い掛かる衝撃と共に地面へとダイブしていた。

「ぐぴゃ!!」

受け身もクソも無く、顔面をすり下ろし大根宜しくに擦りむいてしまつて痛いところじゃねえ。

「あつ!? ご、ごめんねイツセーくん。だ、大丈夫?」

タツクル咬ました謎の人物（女声）が、我に帰つたらしく、うつ伏せてで動けない俺から離れて何か言つてるが、転ばされて痛い思いをさせてくれた時点で全部遅い。

しかしながら、この二人組に顔を擦りむいてボロクズになつてゐる所はまだ見せてないので、密かに幻^{リアリティー}実^{エスケープ}逃^ス否^スで顔面をすり下ろし大根されて血だらけになつたという現実から逃げてダメージを消してゆつくりと立ち上がつて見せ、自分からやつといて何故かオオロしてる変な連中二人に俺は人として当然の疑問をぶつけた。

「いきなり何だよキミは？」

「え……………あ……………ご、ごめんなさい……………」

ごめんなさい……………ほう、ごめんなさいと来たかオイ。

「流星タツクル咬ました理由を俺は知りたいんだけどねー？」

謝られた。うん……………まあ許すよ？ そんな素直に出られたらこっちはもう何も出来ないしね。

だから、許すついでに仕返しのため取り出した釘と杭を俯いてる襲撃者の脳天目掛けてぶっ刺してやろうと後ろに回していた手に杭を持つ。

「その……………イツセーくんが此処に居るって誠八君から聞いて、それで見付けたからついで……………」

明らかにしょんぼりした声と態度の怪しい人物の片割れ。

さつきから俺の名前を口にしないと、おあいにく様こっちは彼女が何者かなぞ知らん

し興味なんて無い。

「あ？ さつきから俺の名前を言ってるのは良いが、こちらアンタみたい人は知らないんだけど？」

だから少しだけ哀想だなとは思うが、俺はこのしよんぼりしとるのとその数歩後ろで様子見てるこの二人のドタマを刺してやろうと後ろに回して持ってた杭を――

「わ、私よ……イツセーくん……忘れたの？」

「はあ？ ………………!？」

したが、それは途中で止められた。

フードが取れて見えた謎の襲撃者の顔に、俺の手は止まってしまったからだ。

「うそ……？」

刺してやろうと腕を振り上げたまま、俺は固まってしまった。目の前の人物の顔を見

てしまったせいで。

もうかなり昔に会ったつきり見る事が無かった……初めてのトモダチに成長したとはいえそっくりだったから……。

「久しぶりイツセーくん……『私よ。』」

「イ、イリナちゃん……？」

そして笑顔を見せる目の前の人物は、紛れも無いトモダチだったから、俺は持っていた思わず杭を地面に落としながら、あの頃のトモダチの名前を自然と口にしてしまった。

「うん……覚えててくれたんだ？」

「そ、そりや……まあ……」

トモダチが居なかった俺に初めて出来たトモダチが、この紫藤イリナって子だった。

今とは違って昔……あの男が出てくるちよつと前から知り合いで、唯一信用していた子だったから忘れる訳も無かった。

「そうか………そうか……真面目に久しぶりだね」

てつきり忘れられてると思つたこの子に覚えて貰えていた……何かやっぱ素直に嬉しく思えてしまう俺は自然と笑つてしまう。

「うん……イツセーくんも『昔と全然変わつて無い』から安心した……」

それはイリナちゃんらしく、互いに覚えていた事に対する安堵で笑い合つていた。

「一誠くん？」

こつから話がややこしくなるわけだが。

「む」

「え？」

「あ、センパイ……用事は終わったんですか？」

黒髪に眼鏡というスタイルで紅髪の人やらその他に隠れがちだが、やっぱし美人なセンパイが現れたので、取り敢えず再会の余韻を仕舞い込んでから俺は用事か終わったかどうかの確認を試してみる。

するとセンパイは黙って首を横に振ってから口を開き……。

「いえ、まだだったのですが……」

「ん？」

「……」

チラリとイリナちゃんと……もう一人の人に視線を向けると、無言の二人に対してペコリと頭を下げ始める。

「話はいかがです。お待ちしました……」

「ああ……」

「ええ……」

「用事って……え、まさか」

何か微妙に重苦しい空気が両者から流れる中、俺は何と無しにセンパイの用事とやらが何なのか分かってしまった。

「ええ、天使陣営の彼女達がやって来て話をする……それが私の用事でした」
「は、天使陣営？」

天使って天使か？ あなの？ と首を傾げる俺にセンパイは頷く。
詳しく聞けば、どうも教会所属だったらしい……イリナちゃんも。

「ちよつと待て、彼は一般人だろう？ それなのにその話をするのは……」
「構いません。彼は人間ですが、我々の事は知ってますので」
「む……なら良いが……」

イリナちゃんと一緒に居たもう一人の人がフードを取る。

目を引く青髪に少し緑のメッシュが入ってる………っただけで思うところは無かった。

「悪魔とイツセーくんが知り合い………セーヤくんもだけどイツセーくんも……」

そんな中、イリナちゃんはショックを受けた顔をしながら小さく呟くのを俺は聞き逃さなかった。

聞けば天使陣営って悪魔の天敵みたいなもんだしね………っつて。

「何ですか？ 一誠くんが誰と親しくしようが貴女に何の関係も無いと思いますか？」

グイッと俺の腕を引っ張り、そのまま組んでイリナちゃんに対して淡々とした声を出すセンパイにイリナちゃんの目付きが鋭くなる。

「………………。離れなさいよこの悪魔」

「何故貴女に命令されなくてはならないのですか？」

「イツセーくんが嫌がってるわ」

「そうは見えませんが……ね？」

「え？」

え、あれ……何だこの空気？ え、あ、そうか……イリナちゃんにとっては敵対する相手と仲良くなってるのがアレなの、か？

まあ、でも……うん。

「センパイは悪魔だけどいい人だからさ。好きだし」

「なっ……！」

「……………フツ」

悪魔は別にどうでも良いけど、センパイは言った通りに好きだ。

そう伝えるとイリナちゃんはまたショックを受けた表情になり、センパイは何でか勝ち誇った顔になる。

「そんな……………そこまで洗脳されて……」

「は？ 洗脳？」

そしてブツブツと変な事を言い始めるイリナちゃんに、かなり不穏な空気が見え
……………あら。

「うん、きつとそうどうせその悪魔がイツセーくんを洗脳して良いように利用しようとしてるに決まってるそうよそうに決まってるわだつて昔イツセーくんと結婚する約束したものの大きな白いお家に猫3匹と子供四人と幸せに暮らすつて約束したもん

それなのにあの悪魔が洗脳したせいでイツセーくんは忘れてるみたいだし私が即滅してから思い出させなきゃそしてそのままイツセーくんを本部に連れてつて……ふ、ふふふ……出来るわ私なら……やつてやる……消してやる……連れ出してやる……愛でてやる……フォーリンラブでパツピーエンド相思相愛純愛ゴールイン……!!」

真顔でブツブツと良く嘯まずに言いきれると感心する早口で呟くイリナちゃん。

「おわ………出た。やっぱり変わつてねえなイリナちゃん」

俺はその姿を見て、ああ、昔もこんななんだつたな……兄者が現れ、イリナちゃんと知

り合いになった時もこんな感じな事を見せたせいで、兄者に敬遠されてしまったのが今では懐かしい思い出だ。

「すみません」

「何だ？」

「彼女から邪気が見えるのですが、本当に教会所属なんですか？」

「一応な……。どうも幼馴染みである彼と再会したせいでタガが外れたらしい……。はあ仕方無い」

その姿に何か思うところでもあるのか、センパイが隣で頭を抱えていた青髪の人に質問すると、疲れたように肯定しながらイリナちゃんの背後に回って首に一撃入れて気絶させた。

「きゆう……」

「うむ……。取り敢えずこれで大丈夫だ。

さてソーナ・シトリーよ……。話をしたいのだが」

「ええ、生徒会室に案内します……。此方へ」

「行っつてらっしやーい」

気絶したイリナちゃんを抱えた青髪の人を案内するセンパイを見送る。

うーん………しかし、イリナちゃんは相変わらず妄想癖が強いな。

結婚の約束なんて一切してねーし。

トモダチだから助ける。他が何を奪おうが復讐に燃えて
ようが知らない

イリナちゃんとの思いがけない再会にちよつぴり嬉しい気分に浸れたまま次の日と
なった。

あの青髪の人と何の話をしたのかは知らないし、センパイに聞くことも無かった訳
だが、どうやら話を終わらせた後寝てたイリナちゃんを引っ張って帰ってしまったとの
事らしく、その後会う事は無かった。

因みにな話だが、兄者もイリナちゃんと会ったらしく、珍しく向こうから自習の最中
に話を振られたっけか。

どうにもこの兄者はイリナちゃんを俺と同じレベルで嫌悪してるっばいが………
無知とは罪だね。

お前が現れる前のイリナちゃんはちよつとだけ妄想癖のあるっただけの普通の子
だっただけだし、今もそんな悪い子じゃ無いぞ。お前はその頃を知らないからそう見て
るだけなんだろうけどな………とまあ、内心ニヤニヤしながら金髪シスター共々嫌
な物を見る目をしながら話掛けてくるのを適当にあしらうなんて事があってから放課

後。

「♪」

たまには良いだろう……ということでもセンパイとその部下の皆様方に差し入れでもしようとしてドラッグストアで茶菓子でも買いに行こうと街を歩いていた時だ。

道行く人々が何故か俺を見るなり露骨に道を避けるもんだから、スイスイ歩いて快適だぜとか思っていると、向こうの方で昨日見たばかりの格好をした二人組が、何かを言いながらその場にずっと立っているのを発見し、思わず足を止めて遠巻きに眺めていると、駒王の制服に身を包んだ数人が二人の前に現れて何かを話している。

それだけだったら気にはならなかったのだが、その数人の駒王の生徒は例の紅髪の人
の部下と兄者……そして何故か生徒会室で頑張ってる筈の匙君だったもんだから、俺は
ついつい彼等に近付いて話し掛けてしまった。

「や、匙くんじゃん。こんな所で何してんの？」

「どわっ!! きゅ、急に背後から話し掛けるなよ馬鹿! ビックリすんだろうが!」

普通に声を掛けたつもりなのに、どうやら匙くんは驚いてしまったらしく、びっくり顔になっていた。

「あら、ごめん……。いやほら、買い物しようとしたら珍しい組み合わせの匙くんを見つけたから……。さ」

「っ……。一誠……」

「おいおい『弟』を目にした瞬間にその顔かい？」

「はっはっはっ、今日も良い『お兄ちゃん』だぜ！」

俺が現れた事で一気に嫌そうな顔になる兄者と金髪の元・シスターさんと……。嫌そうでは無い顔して見てくる仕返しし損ねた白髪チビに一瞥くれながら話すと、匙くんは不貞腐れた表情になる。

「ケ！俺だつて好きで居る訳じゃねーよ。」

「何でか知らねえけどお前の兄貴に協力をせがまれて……」

「へー『お兄ちゃん』にかい？ あらら、何かごめんよ？」

何の協力かは知らないけど、どうにも兄者は嫌がる匙くんを無理矢理引つ張って来たらしい……。

理由が良くわからんな。センパイ直属の部下を簡単に連れ出して良いものなのかとか、そもそもその事をセンパイが知ってるのかとか、色々疑問に思うことは多かったが、取り敢えず『弟』として謝っておいた。

「こんな所を会長に見られでもしたら何て言われるか……」

「あら……黙って来たんだ。つたく……他人の事はとやかく抜かす癖に自分^{デメイ}はこういう事するなんて、随分とまあ横暴な『お兄ちゃん』だわ」

「……。嫌い……お前には関係ない」

「……だ、そうだぞ？ ごめんよ匙君。俺じゃあどうにもならんぜよ」

「期待なんかしてないから安心しろ」

強くは言い返せないのか、嫌な目をコツチに向けたままボソツと小さな声を出す兄者の言った通り、確かに俺には関係無い話だったので、これ以上は何も言わず、順番が遅れてしまったイリナちゃん……と序でに青髪の人に挨拶してから帰ろうと、彼女達に視線を向ける。

「昨日振りだねイリナちゃんと……ええつと青髪の人。

何かお邪魔みたいなんで帰りますわ……んじや——」

向こう側関連で此処に来たって話だけは知ってるので、所詮一般人でしか無い俺に入り込む余地は無し。

そもそも外に出た理由だつて茶菓子を買いに行こうとしてただけだったので、このまま軽く挨拶してから帰ろうとするんだが、何故か俺はイリナちゃんに手を思っクソ掴まれてしまつて帰るに帰れない状況となつてしまった。

「待つてよイツセーくん！ 折角会えたのに直ぐに帰つちやうなんて嫌！」

「つとと、嫌つて言われてもねえ……」。

何か大事な話でもしてたんじやないの？」

ほら、俺とキミ等以外全員悪魔だしねえ……なんて思いつつ話すが、どうやら違つたらしく、イリナちゃんと青髪の人は揃つて首を横に振つていた。

「いや、イリナが行動資金を贖作の絵に使う馬鹿をやってくれたせいで、道行く人の慈悲を分けて貰おうとしてたら、彼等がやって来ただけで特に何を話してた訳では無いぞ？」

「そうそう……って、ゼノヴィア酷い！」

「贖作？」

贖作という青髪の人の言葉に首を傾げる俺に、イリナちゃんが背中に背負ってた布に包まれてた何かを取り出して中身を見せる。

それは………俺から見たら子供の落書きか何かにしが見えん絵だった。

「展示会の人が聖人様のありのままのお姿を絵にしたって言っついで買っちゃった♪」

テヘ♪ って顔をするイリナちゃんの話聞きながら俺は絵を見るが、絵のレベルが高すぎるせいで理解が出来ない。

「というかコレ贖作なんだろ？ じゃあ聖人様じゃないじゃん……青髪の人も怒ってるし。」

「私にはどう見ても落書きにしか見えんものをこいつは簡単に騙されて買ってしまつてな……………お陰で支給された資金が無くなつてしまつたのだ。

だからこうして慈悲を貰おうとしてたところを彼等と遅れてキミがやつて来たつて訳だ」

「慈悲を貰おうとしたら悪魔か……………うーん、何だか運が良いのか悪いのか……………」

「まあな」

「イツセーくん……………私お腹すいた……………」

『……………』

別にそんなつもりは無かつたのだが、悪魔の皆様には皮肉に聞こえたらしく、早く帰りたいオーラを出してる匙君以外が後ろから俺を睨んでるのを感じる。

で、イリナちゃんは……………相変わらずマイペースだった。ううむ……………青髪の人はどうだつて良いけど、イリナちゃんが腹減つたつて言つてるし……………うーむ、トモダチが困つてるなら仕方ないな。うん。

「ホントは茶菓子を買うに行く予定だったんだが、イリナちゃんがこんな様子じゃあ可哀想だ。

うん……ほら、その御慈悲とやらになるかは知らないけど……」

こんな事くらいしか出来ないケド……と言って財布から貴重過ぎる一万円札を取り出してイリナちゃんに渡す。

マイナスが御慈悲というのも変な話だけど。

「良いのか？」

「ん、まあイリナちゃんが腹減つとるって言ってますし。

結構こう見えてトモダチ想いなんですわ、俺は」

青髪の人が意外そうな顔をして言うので、俺は手をヒラヒラさせながら構わないと返す。

何だか後ろの方で数人の誰かさんが『こ、こんな事するんだ……』って顔をされてる気がするが、無視で通す。

「やっぱリイツセーくんだけが私に優しい！ だから大好き!!」

「あー……ハイハイ。トモダチだからねうん」

そしてイリナちゃんがスッゲー笑顔で抱き付いてくるのに適当に付き合う。

正直、センパイ以外にこう事されても受け入れるなってセンパイに言われてるからアレなんだけど……………仕方ない。イリナちゃんって見た目に依らず力が強くて剥がせないんだもん。

「元はと言えばお前のせいだろうが……………」

「良いもん、お陰でイツセーくんに優しくして貰えたし。」

「そもそも騙した展示会の人が悪いのであって『私は悪くない。』」

ニコリと邪気無しの笑顔で、自分は悪くないと堂々と言い張った瞬間、後ろに居た兄者達から『うつ…………』という狼狽えた声が聞こえ、何やらヒソヒソと話し声が…………。

「あ、あの紫藤イリナって人…………兵藤さんに今似てた気が…………」

「………………。一誠とまともに付き合える幼馴染みなんだよ彼女は…………俺はあんまり関わらなかつたが、ハッキリとあの頃より退化してつてのが解る。」

天使の陣営に居れるのが不思議なくらいだ…………」

「同じ……」

「なあ、俺もう帰って良くね?」

ボソボソと煩いなあ。

文句があるなら堂々と言って貰いたいもんだ……あ、俺に関わつちや駄目って魔王の人に言われたから出来ねえのか。なら仕方ないか……ん? そもそもこの連中は二人に何の用があつたんだろうか……匙君に迷惑まで掛けてよ。まあ良いかどうかでも。

「んじゃ俺はこれで……むむ、イリナちゃんやそろそろ離してくれないか?」
「や」

大人しく戻ろうとイリナちゃんを剥がそうとするが………離れてくれない。
クツツ……女の子より力が無いとか笑えんのだけど。

「どうせ離れたらあの悪魔の所に行つちやうんでしょ? だから嫌」

「嫌って……うーん困ったな。あのーすいません……イリナちゃんを何とかしてくれませんかね?」

昨日の時みたいな感じで上手い事気絶させてくださいよと、青髪の人にペルプを送るも、2度もその手を通じる事が無く、イリナちゃんが青髪の人をギロリと睨み付ける。

「昨日は何も言わなかったけど、今日もまた邪魔をするならゼノヴィアでも容赦しないわよ……」

「あのないリナ……隣の彼に会う為にわざわざ志願したのは分かっているが、その前に任務の方も忘れては困るんだよ……」

どう見ても苦勞してるっぽいと解る疲れ気味な顔で説得する青髪の人。
察するに、イリナちゃんとはそれなりの付き合いがあるっぽい。

「任務ってなに？」

そして俺は俺で、地味に出てきた任務つての言葉の内容が気になったので、まあ教えてはくれんだろうなとか考えながらも取り敢えずイリナちゃんと青髪の人の方を見ながら聞いてみると、意外な事に青髪の方は答えてくれた。

「あーそうか……キミは我等がこの場所に居る理由を知らないのだったな。

うむ……まあ、簡単に言うのだ、ある墮天使が天使陣営で保管してた物を奪ってこの地に潜伏しててな。

それを私とイリナが奪還するといった所だ」

「へー……随分と危ない事になってるんだねこの街。

ていうか二人で大丈夫なの？」

人の知らない間にそんな事になってると街の人達が知ったら大騒ぎだろうなあ……とか考えながら二人だけって事に関しての疑問を問うと、青髪の人はサツパリとした顔だった。

「普通に行けば殺されるの関の山だろうな。何しろ相手は墮天使の幹部クラスだ」

「その様子だと死ぬと分かっててやってるって感じかな？」

ありや……随分とアレな考えを持つてるんだなこの青髪の人……いやイリナちゃんもだけど。

俺がその立場だったらさっさと逃げてしまうのに、中々どうしてお強いというか。

「それが教会——いや、主から与えられた試練なのだから仕方ないが、私達は別に奴等に正面切つて挑もうとは思つてない。

要するに奪われたソレを破壊すれば良い話だしな……と言つても破壊工作も容易では無いが」

「うんうん、私もイツセーくんとゴールインするまで死ぬつもりは無いわ！ 意地でも何とかして見せる」

なるほど、ゴールインは知らんけど、トモダチが死地に赴くのを黙つて行つてらっ
しいいは……この青髪の人はどうだつて良いにしてもイリナちゃんはなあ……。

いやでも戦う術があるからこんな事をさせられてるんだろうし、最近では野良犬にすら
負ける気がしてならない俺にどうすることなんて出来ない。

最悪、イリナちゃんが殺されでもしたら幻^{リアリティ}実^{エスケープ}逃^ス否で殺されましたという現実から逃
げてしまえば何とかなるけど……うーん、ま、そうなる時が来ないと俺じゃ無理だな無
理く墮天使とか瞬殺確定だしー

「そっか……ならば俺なんぞに構つてないで頑張らないとじゃないかイリナちゃん。俺は応援するよ……あ、勿論青髪の人も」

「ああ、キミから頂いたこのお金を無駄にしない為にも全力は尽くすつもりだ」

「うん……分かった我慢する。私だって、イツセーくんとハッピーエンドを迎える為に絶対死なない……だからこれが終わったらあの時みたい……」

「ああ、分かっている分かってる」

うん、遊ぶくらいならセンパイも許してくれる……かな？

それにだ、キミが例え死んだとしても……イリナちゃんだけは死んだって現実から逃げて見せるから大丈夫さ。

んで、死なせてくれたその堕天使とやらには、勝つ勝たないじゃなくて、その『ツケ』を払わせるから……フフ変な気分だ、やっぱりトモダチだけは裏切れない。

まあ、多分『お兄ちゃん』達が何かするんだろうし、気楽に行くよ気楽にね。

別に最初はそうではなかった。

ただ単に近いものを感じたから仲良くなったただけだったのが、何かが原因で少年の心

に変化が起き、それが少女の心を掴んだ。

出会い、認識、そして別れという経験を経て数年の歳月の後に再会した時、少女は完全に確信した。

ああそうか……やっぱり変わらなかったと。青年の双子の兄に関してはある限り関わりが無くて名前を呼ぶだけの関係だったので良くは分からないが、一誠は一目見ただけでわかった。

見るだけで、触れるだけで、話をするだけで安心する程に彼は退化せいちようを遂げていた。

これが何なのかは分からない。相棒の少女は青年を見て『お前以下の奴が居るなんて……』と顔を歪ませていたが知ったことではない。

そもそも自分は偶々聖剣の適合者たる資格があったから、彼とお別れをしたついでで、確かに主に対する信仰心もちやんとある訳だが、それ以上に青年に対する想いがあった。

故に誰もが青年を気味悪がるのは寧ろ好都合で、悪魔に洗脳されている事を除けば全て思い通りだった。

後一つだけを上手く済ませられれば全ては解決する。

青年をあのスカした上級悪魔から引き剥がして連れ去り……誰にも干渉されない場所まで一緒に祈りを捧げる。

その為には……。

「じゃあイリナちゃん…… 『また今度』」

「うん…… 『絶対に今度だよ?』」

上手い事揃って『死んだ事』にする。

そうすれば誰にも邪魔されない幸せが訪れる。

人懐っこい笑顔を見せながら手を振って去っていく青年の背中を見つめ、少女は純粹な心のまま至極まともにそう思っていたのだった。

だから、『私は悪くない。』

イリナちゃんの任務が何なのかは知らないけど、そのせいでイリナちゃんが死んでしまうのは俺としても真面目に辛い話だから『もしも死んでしまったらスキルを使う』——
——みたいな話をしたら、センパイの顔付きがあからさまに嫌そうになっていた。

その理由を聞いてみた所、センパイは少しむすつとしながら答えてくれた。

「一誠くんが彼女と幼馴染みの間柄で、トモダチだという事も解ってます……」

「はっ」

何時もの通りにセンパイと帰り、ジローとコジロー達とも戯れ、この街が何処ぞの墮天使によって割りと危険な事になっている事もどうでも良かったりする俺が今居るのはセンパイの家だ。

あのはぐれ悪魔に喰い殺された時以来なこの場所は相変わらず綺麗に掃除されており、フツカフカナソファに座らされた俺は、同じく隣に座っているセンパイを説得するのに必死だった。

「ですが……その……」

イリナちゃんと波長が合わないのか、どうにも俺が彼女と親しくしてるのにセンパイは我慢ならぬらしいのだが、自分でも理不尽な事を言ってる自覚があるせいであんまり強くは出てこれないのか、少しシヨボンとしている。

「あー……つまり、センパイ以外にセンパイと似た態度をしてるのが嫌だと……」

「はい……。ごめんなさい、無茶苦茶な事を一誠くんと言ってる自覚はあるのですが、どうにもあの紫藤イリナという方は一誠くんに対して友達という感情以上のものを持っているので……」

俯き、罪悪感を感じる声で言うセンパイに、俺は確かにとイリナちゃんと再会した時を思い出す。

昔からどうもあの子は思い込みが激しいというか……えーつと、そうメンヘラっぽい所があった。

いや、最初はそんな事は無く、偶々出会って一緒に遊んでたら気が合っただけだった

に過ぎなかった。

変わり始めたのは、あの男が現れてからだっただか……。

とにかくセンパイが言うには、イリナちゃんは俺にそんな感情を持つているらしく、俺が彼女にフラフラと行つてしまうのでは無いかと不安らしい……はは、何か俺バイト先のおやつさんが昔体験したらしい『モテ期』つて奴になつてゐるっぽいな。

他人からモテてもしょうがないが、センパイとイリナちゃんからなら……つと、この考えは過負荷マイナスじゃなくて只の最低ゲスだな。

「うん、イリナちゃんはトモダチ以上の事は思つてません。

いえ、確かに大事な子には間違いないですが、センパイとは別方向の大切さというか

——うぬ、上手く説明が……」

「つまり、異性としては意識してないんですね？」

「そう、それです。異性というよりはやっぱりトモダチですね……」

そう……確かにイリナちゃんは大事だ。

だけどやっぱり好きって感情を向けられるのはセンパイ只一人だ。

互いに顔を剥がし、肉片だけになつても変わらずに好きな相手はセンパイだけ……他

に居ない。

こればかりは他とは違い、顔面を剥がしてまで何かを確かめるといふ気にはイリナちゃんに対しては無い。

だから俺はセンパイが好きなのは一貫しているのだが、今回の事でセンパイに要らん心配を掛けちまったのもまた事実だった。

だから俺はそのケジメを付ける……その為に今日はセンパイの家に来た訳だ。で、そのケジメの内容も決まってる。

「センパイ……俺を煮るなり焼くなり好きにしてください」

文字通りの意味で、俺自身の生殺与奪をセンパイに明け渡す事だ。

「中途半端にしか物が考えられない俺にはこうする事でしかセンパイの信用に答える事が出来ませんからね……だから切るなり喰うなり刺すなり磨り潰すなり好きにしてください」

元々俺はもう、センパイに死ぬまで付いていくとあの時から決めていた。

しかし、その付いて行く相手であるセンパイからの信用を失いかけてしまつて居る今の状態で俺が出来る最大の忠は最早これしかなく、隣に座るセンパイを見ながら両腕を横に広げて『お好きにどうぞ』と一切の抵抗はしないという趣旨を見せる。

しかしセンパイの顔は浮かないままだつた。

「あんまりそういう真似はしたくないというか……そもそも一誠くんのスキルで痛みも何も全部無くなつてしまふじゃないですか……」

意味がありませんよ……とソツポを向いてしまふセンパイ。

あ、そうか……センパイは知らないのか。

リアリティーエスケープ
幻実逃 否の穴を……。

「いえ、それでも無いはず。」

リアリティーエスケープ
確かに幻実逃 否で痛みや死という現実から逃げる事は出来るかもしれませんが

……が、それは何処とも知らねえ——どうとも思わない只の他人から受けたもの
だつたららの話です」

「え？」

リアリティーエスケープ

幻実逃 否の弱点というか穴を知らなかったセンパイが、多分ヘラヘラ笑って見えるだろう俺に顔を見せてくれる。

その目は子供の様に丸くてちよつと可愛く……俺はそんなセンパイにニツと笑みを見せながら穴であり完全な欠点を教えようと口を開く。

「今ある現実から都合の良い幻想を作り上げてそこへ逃げるスキル……それがリアリティーエスケープ
幻実逃 否ですが、これは俺自身の欠点の一つで、どうにもセンパイから受ける全ての現実からは逃げられ——いや、逃げたくないんですよ」

「それはつまり……」

「そうです。俺を無条件で殺せるのはセンパイだけですネ。

センパイから受けた全ては幻実逃 否が発動されません……この前自覚しました」

まあ、センパイにぶつ飛ばされたとかは一度たりとも無くて試した事は無いが、俺の中のナニかがそう告げてるのだからこれは間違いない。

要するに、俺を消滅させられるのはセンパイだけなのだ。

こればかりはイリナちゃんでも無理なセンパイだけに許された特権つて奴だ。

「まさか……」

「あ、やっぱりそう思います？　なら失礼して……」

俺の過負荷^{マイナス}を唯一知るからこそ、信じられないといった表情になっているセンパイ。

まあ、早い話が因果関係なしに全部の事象から逃げ切るスキルをセンパイという存在だけがパスできるだなんて嘘だろうとは思うでしょうが、事実は事実なのだ。

現にほら、こうしてセンパイの手を取り、自分の首筋に指先を当てて爪を引っ掻いて出来た傷も……

「消えない……」

「でしよう？」

ピリピリと痛む首筋の引っ掻き傷が消えないことに驚くセンパイに俺は変に得意気な顔となる。

「意図的に消そうにも消せない……いや消さない。」

センパイから受けた全ての現実はあるのまんま受け入れる。故にセンパイだけが俺を殺せる。センパイだけが――

俺を支配出来る。

それがトモダチと初恋の相手との違いだった。

イリナちゃんも安心院なじみも……いや安心院なじみはぶつちやけ素でブチ殺されそうだが、それでも仕込みも何も無しに俺をどうこう出来るのはセンパイだけな
さ。

「と言つても、センパイが俺を必要と思えば自動発動は可能ですけどね。ほら、前に顔面剥がした時何かがそう。」

簡単に言えば、センパイが俺に死んで欲しいと思いつつながら殺せばリアリティーエスケープ幻実逃否が自動発動せず本当に死ぬと……まあそんな感じっす」

「そうだったんですか、なら私が付けたその首筋の傷から逃げて欲しいと思えば……」
「消えますね……ほらこの通り」

逃げて見せろと告げるセンパイに応える形で、リアリティーエスケープ幻実逃否を発動して傷を消して見せ

る。

につひひひ……センパイだけに許された俺に対する支配権限だ。
俺を生かすも殺すも全部センパイ次第って訳さ。

「わかりました？」

「はい……つまり一誠くんは私の言うことは全部聞くということですね？」

「その通りでございます………って事でさあセンパイ。」

さっき言った通り殺すも黽るも思うがまま……これはイリナちゃんにすら不可能な事ですぜ……あはははは

勝手な事だが、俺はトモダチだけは裏切りたくない。

それは、例え向こうから裏切られても俺は許してしまうし、センパイがもし俺を裏切るのならそれはもう仕方無いと喜んで死んで見せる。

それが俺にとっての『好き』って感情であり、譲らないモノって奴だ。

故に今こうしてセンパイに好きにされる事に苦は感じない。

「……………」

フンと笑って見せる俺をセンパイが見つめながら何か考えているのが分かる。
さあ、何だって良いぞセンパイよ。脳味噌ぶちまけるのもやったるし、腸抉り出して
だってやる。

さあ……さあ……どんと来い！

「それなら……」

内心覚悟バリバリで指令を待つてる俺に、センパイが小さな声を出した。

さあ、なんだ？ やっぱりセンパイ自らボコボコつか？ よっしや来い！

「上の服だけ全部脱いで貰えますか？」

「よし、喜ん——は？」

よっしやあ！ と意気込んで手に持った釘を心臓にぶつ刺してやろうかと思つてた
俺は思わず間抜けな顔になって真顔なセンパイの顔を見る。

「……。どうしたんですか？ 嫌なら別に——」

「え、い、いや……。そんなんで良いんですか？ はい……今やりますね」

何か思ってたのと違うんだがと内心困惑しながらも、言われた通り制服の上着とYシャツをさつさと脱いで上半身裸の姿となる。

太らない体質なのと、栄養バランス最悪な食事パターンが形成されて早10年近く……。

見れば見るほど情けなく、貧相で青白い自分の身体は前に体育やら水泳の授業で見た同い年の男子と比べると一目瞭然レベルの貧弱さであった。

「前に見た時と同じく、細くて直ぐに壊れそうな身体ですね……」

「はは……ちよつと情けないと思えてきたかも……」

上半身裸となつてソファから立ちあがり、隣でジーつとその様子を見てたセンパイが的確にて正直な感想をくれる訳だが、やっぱり筋トレくらいはしておくべきだったのかもと今更後悔してしまう。

いやだつてねえ？ こんなガリガリの身体は見てて見苦しいとしか思えない——

—う!?

「本当に脆そう……」

「え……せ、センパイ……?」

軽く自己嫌悪に陥って意識を別方向に向けてたので気付かず、ハツとした時にはセンパイがさつきよりも近くに居て、俺のショボい身体の腹の部分に指を這わせながらピツタリと身を寄せてきた。

これは………罰なのか?

「え、ええつと……」

「む……動かないでください。何でもすると言ったのは嘘なんですか?」

「あ、はい……」

動くなと言われてもセンパイの指がくすぐったくて………あ、わかった。これは樂りの刑なのか………なるほど、それは確かに拷問にもあるしちゃんとした罰だねうん——
—つつふ……擦ったくてゾワゾワするぜ——つあ!?

「いったたた……！」

此処から何をされるんだろうかと想像しながら身を寄せているセンパイを見てた時だった。

こんな見た目でもセンパイは歴とした悪魔で俺みたいな人間でも最弱のレベルの雑魚なんぞとの腕力は天と他程の差があり、急にセンパイが俺を突き飛ばしたせいで、背中と後頭部を床にぶつけながら仰向けにひっくり返ってしまった。

そして痛がる俺の上にセンパイが乗っかって馬乗り……つまりマウントを取られた。

「な、何だか今日のセンパイは嫌にミステリアスっすね……わははは」

「別に私は普段と同じですが？」

丁度俺の腹辺りに乗り、真面目に意図が掴めなくなつて困惑する俺を見下ろして笑顔を見せてくるセンパイだが、やっぱり何がしたいのかサツパリわからない。

いやもしかしたらこのままポッコポコに殴られるのかかサツパリわからない。イがそんな真似をするとは思えないし、殴るなら最初の時点でやってるだろうからわざ

わざとマウントを取る必要も無いだろう……。

となれば別の意図があるんだろうけど……やはり分からん。

「一体俺は何をされるんですか？」

わかんねーし、こういう時は素直に聞いてしまえと考えるのがダルくなった俺は、笑みを浮かべたまま俺を見るセンパイに聞いてみると、センパイはアツサリと答えてくれた……俺の予想の真逆な答えを。

「考えてみたんですけど、私は一誠くんが好きです。

それで一誠くんも私が好き……これは分かりますよね？」

「は……」

うん、それは間違いない。

死ぬまで付いていく時点で、顔を剥がして自覚した時点でそれは確定している。

だから俺は迷わずに頷くと、センパイは此処に来て一番の笑顔を見せた………何か寒気を感じるタイプの。

「そう……そうなんですよ。」

「て事はですよ……私達は世間的にはお付き合いをしている事になってる……ですよ
ね？」

「ん、ん……まあ……確かに」

世間に蔓延るカップルのなアレ……センパイが言いたいのはそのなんだろうけど、俺等の場合ってその括りで果たして合ってるのか……微妙なんだよな。

上手く言えんけど、そういう概念とはまた違う関係というか……まあいいか。センパイがそうしたいのならそうなんだろうし、そんな関係で俺は全く困らないし寧ろ嬉しいね、とか考えつつ頷くと、センパイは『ふふふ……』と笑いながら言ったのだ。

「一誠くんは私が死ぬまで傍に居てくれる……つまりこれはもう結婚ですよね？」
「は、はあ………は？」

ニコニコと笑って過程をすっ飛ばした言葉を口にしたセンパイに俺は思わず変な声が出てしまった。

「け、けっこん……って、ええ？ あー……その話が出るの早くね？」

俺は真面目にそう思ってるのだが、センパイはそうじゃ無かったらしく、ちよつとだけ傷付いた顔になる。

「……。嫌ですか？」

「いやいやいや、そんなもん嫌な訳ないですけど……」

「あは、良かった……嬉しい……」

人間と悪魔の価値観の違いって奴なのか……？ イマイチ分からないけど、この話とこの今の状況の共通点は何だろう……そっちが先だったりするんだけどね……。

「ですから……そういう関係なら良いじゃないかなと思って……」

「何を？」

「最後まで言わせないでくださいよ……恥ずかしいじゃないですか……」

頬を赤めるセンパイに俺はまた真面目に考える。

ええっと、結婚とやらがめでたく決定しました……んじやあそんな関係なら何をしましよう………つて、まさか。

「すいませんけど、センパイは生徒会長ですよね?」

「そうですよ?」

「おう、即答ですネオイ……。

ならダメじゃね? だって、センパイが今言ってるの……」

脳裏に過った何かが嘘だと信じつつ、俺はセンパイに確認するも、物凄いわつげらんとした顔で即答してきたに加え、じゃあ駄目なのでは無かろうか? という俺の意見の言葉は半ば無視される形でセンパイは言うのだ。

「今の私は支取蒼那じゃなく、只のソーナ・シトリーです。だから何の問題も無いし『私は悪くない。』」

ふふ……何処か間違ってますか?」

「……」

首筋から始まり、鎖骨、胸、脇腹へと指を這わせながら紅潮した頬で言い切るセンパイに俺はただただ黙ってゾワゾワする感覚に半分溺れ掛けてしまう。

「な、なるほど……だからこんな遠回しな事をしたのかセンパイは……」

「いえ、これでもかなりストレートにやったつもり。」

それと今は名前で呼んで一誠……お願い」

「……。ソーナ……」

訂正させてくるセンパイ……じゃなくてソーナに言われた通りに名前を口にする。するとソーナは本当に嬉しそうに微笑む。

「待つてもどうせアナタは手を出さないでしょう？ だから本当は恥ずかしくて死にそうだけど、私からこうするしかない……」

ほら一誠……こうしたらわかるでしょう？ 私の心臓の音が……」

「つ……お、おお……!?!」

俺の細腕を掴み、そのまま手を胸に押し当てるソーナの心臓は確かに目茶苦茶激しく動いているのが分かる。

というか、それ以前に彼女の胸触ってしまってるせいで何か頭の中がカーツつてなっちゃってるぜ……あは、あははははは……。

「こうすれば誰も一誠に手出し出来なくなる。

こうすれば一誠はずーっと私と一緒に……幼馴染みだか何だか知らないけど……一誠はもう私だけの……」

「あ、あの……なんかブーツとしてきたんだけど……」

「ん……大丈夫よ一誠。私に任せてくれれば……」

任せる……はい、任せれば良いんだったらもう何でもいいや……あは、あはははのは。

とかなんとかブーツとした頭で考えていたら、ソーナの顔が徐々に近付き……念願の初キスを貰った……まあ、俺も初めてだけどき。

「ん……一誠……キスは初めて？」

「は……………あ……………。そりや当たり前だつっの……………う？　な、何か変なんですけど……………」
「ふふ、良かった……………私もです」

嬉しそうに頬を紅く染めるソーナは、何だか何時も以上に魅力的に見えた……………そしてそこからの記憶は……………うん、永遠に黙つところ。

つまる所、ソーナにとってイリナという存在はイレギュラーに近かった。

何せあかも一誠に対して好意を超えた感情を向けているのだから、基本的に嫌われ体質である一誠に対しては予想外だ。

（不安だから実行する……………）

だからソーナはさっさと手を打った。

一誠を騙してる様で申し訳無いかなどは思ったが、これもあの幼馴染みとやらから一誠を奪われぬ為には仕方無いとソーナは割り切つて実行に移した。

どうやら一誠の持つスキルである幻^{リアリティー}実^{エスケープ}逃^{スクリュー}否はソーナにのみ効果を發揮しないらし

く、それを聞いたソーナは遠回しな事を止めて一気に畳み掛ける事に成功した。

(やった……これで後は……)

眼下にはブーツとしている一誠が居て、抵抗する気も無さそうだ……。

正直恥ずかしいし、イマイチ勝手も分からないけど、そこはもう本能で補う事にするし後戻りなんてあり得ない。

「一誠……好き……大好きよ……」

「うん……うん……う……おれも……あ、アレ？　頭がブーツと……うえ？」

「………本当にスキルが発動しない。」

冗談のつもりで仕込んだ無味無臭の媚薬が効くなんて……」

「ひ……ひやく……つてなんら？」

イリナに一撃必殺をくれてやる為には、只の深い関係では無く、言い逃れ不可能な関係まで進める必要があったので、冥界の裏ルートから密かに手にしたヤバイお薬を一誠に使用した結果はご覧の通りで、ソーナに最早躊躇は無く、互いに初めてだというのに

彼女の方から一誠の唇と自らの唇を重ね合い、そこからどうなったかは誰にも分からなかった。

「私の勝ちですね紫藤イリナ……。」

アナタは単なるトモダチでしかなくなりましたが、仲良くしましょう……何と言って
も『トモダチ』なのだから……ふふ、あははははは♪」

「は……ひ……。」

薬で頭がやられて意識がおかしくなっている一誠の上に乗ったまま、ソーナはただひたすらに笑い、そして動けない身体を起こして抱き締める。

これでさっさと諦めて消えてくれればそれで良いし、諦めなかった場合は……。

「ねえ、一誠……もし紫藤さんと何かしらの理由で殺し合う事になっても、アナタの事だから全力で止めるでしょう。けど、その後は私の味方になってくれますよね？」

「う……うん……なる……ソー……ナの味方になる……けど、出来れば……そんな……こと……に……は……。」

「はい……分かってます……私だってトモダチと喧嘩はしたくありませんから……フ

フツ♪ でも味方になってくれるのは嬉しい……」

完全に自分に味方するようになりまで一誠を愛する。

それが今のソーナがやろうとする仕込みだった。

舌が上手く回らず、途切れ途切れながらも今はソーナしか考えられてない一誠を愛し
そうに抱き締めるその表情は見惚れる程に綺麗だ。

彼女もまた『悪魔』であり一誠と同じく他人を退化させる過負荷^{マイナス}だった。

エクスカリバーと幻実

不意討ちじゃない『正当防衛』だ。

何だろう……なーにか大事な事を忘れてる気がするんだが、それが何なのか全く思い出せない。

その大事な事に対する最後の記憶にしても、確かセンパイの家に行ってイリナちゃんに対する認識の違いな事を話してた所までは覚えてるんだが、そこから先の記憶がドロドロしてて全く思い出せない。

気が付いたら朝になって、身体がヤケに重くて……センパイが何でか俺と寝てて………うーむ。

「何があつたんだろう……」

ガランとした教室の一番後ろの席に座りながら、かれこれ数時間は考えているが、結局は思いつけずにこうしてモヤモヤとした気分のまんまだ。

恐らく全部知ってるだろうセンパイに聞いても嫌に笑顔だけで答えてはくれな

かったし、謎は深まるばかりだ。

だがまあ……様子から見てセンパイが俺に対して痛い思いをする事とかをしたとは思えないし、あんまり深く考える必要も無さそうかもな。

何よりやけに機嫌も良かったし。

それよか今はこの孤独すぎるこの時間をどう潰していくかが重要だ。

何せ兄者も金髪の元シスターもサボりか何かで今居なくて真面目に一人だし、いい加減スーパーカー消ゴムで遊ぶのにも飽きて来た。

放課後まで後4時間近くあるし、授業中だからセンパイにメール送って遊ぶ事も出来ないし………あ、そうだ最近RAINとかいう無料通話が出来るアプリを教えて貰ったんだった。

何でも音声会話とメールっぽいメッセージのやり取りがタダで出来るとか何とか……イマイチよく解らんけど世界中で流行ってるらしい。

友達が居なく、話したきや直接会いに行ける近い距離感しか親しい人が居ない俺としては無用の長物でしか無いので不必要なのだが、将来の為に一通り覚えておいて損は無いだろうと、センパイから貰い、本当にお金も払わずに使わせて頂いとる携帯を取り出してアプリを起動させる。

「すたんぷ？　ほうほう……これを使ってメッセージか……よし」

アプリの説明通りに操作すればこれがまた割りと簡単で、携帯のアドレス帳に唯一載ってるセンパイに対して適当な文とにゃんこイラストのスタンプを貼り付けて送ってみた。

センパイならミュートか電源切ってるだろうから受信の音が鳴る心配も無さそうだし、まあ返事は恐らく直接顔を見せて何か言ってくるだろうから、このアプリの意味が無いだろうけど何て一人笑いながら思う訳だが、此処で不意に気付く。

「そういえばイリナちゃんって携帯とか持ってるのか？」

そう……ここ2日程会ってないイリナちゃんの携帯所持の有無である。

再会した時のインパクトが大き過ぎて忘れてたがどうなんだろうか。

でも教会がどうかかって話だし、イメージ的にそういう所に居る人が機械類を持つてるとは思いくらいというか……いや本当に勝手なイメージだけだよ。

うーむ……。

「よし、こういう時は聞いて確かめよう」

思い立ったら吉日と俺は席を立つ。

既に自習課題は終わってるし、そもそも学級崩壊したまま放置されてるクラスなので、ぶつちやけると登校してるだけで単位が取れてるらしいので脱け出しても怒られない。

なので、ちよつとイリナちゃんを探し出してから持つてるかどうか聞いてみようと思っただ。

センパイも何故か急にイリナちゃんに対して悪いイメージを持たなくなったどころか、『トモダチですから』と目茶苦茶良い笑顔で言うので、会いに行っても怒られはしないだろう……多分。

とまあ、こんな感じに都合の良い解釈で自分を誤魔化しながら教室を出ようとドアを開けた訳だが――

「おや？」

「……」

どうも俺は自分から何かしようとするそと悉く邪魔が入るジंकクスがあるらしい。

この時もそうだった。

今は授業中でこの学級崩壊したまんまなクラス以外は皆頑張ってる筈なのに、扉を開けてみればクラスメートでは無い……もつと言えば学年すら違うある人物二人が立っていたのだから、俺は驚きよりも小馬鹿にする笑みが自然と浮かび上がってしまう。

「あーからのら……？ おやおやおやおやおや？ これはこれはあ……このクラスには珍しいお客様だ。あは！」

何が原因だか知らんが一人はただただ暗く、冷たい目をし、一人は相変わらず何を考えているのかわからん、金色の瞳を持つ……正直見ても近くに居ても怠くなると思える黒髪のヒスの人と告げ口白髪のチビなのだから。

『お兄ちゃん』ならサボりですぜ？」

だから俺は右手をポケットに入れ、忍ばせていた小さな杭と釘を握ってスタンバイする。

だつてコイツ等……何よりもメンドクセーもん。

誠八は今日学校に居ない……。

例の聖剣と墮天使の騒動で復讐に駆られてしまった木場祐人を止める為に教会から派遣された二人の聖剣使いと動いている様だが、姫島朱乃と途中までリアスに黙って八と動いていた搭城小猫は最近精神が不安定となっていた。

それは何を隠そう……誠八の双子の弟である兵藤一誠のせいだった。

「退いて貰えないか？ 俺は今から大切な幼馴染みに会いに行かなきゃならなくてね、残念ながら『お兄ちゃん』も此処には居ないんだから、そんな何時までもでく人形みたいに立ち尽くされても困るんだよねえ……。」

「ていうか二人とも授業中だろ？ 『お兄ちゃん』と金髪の元シスターさんもだけどサボりは良くないぜ？ センパイが怒っちゃまう」

「……」

「……」

朱乃と小猫は一緒にこの場所に来た訳ではなかった。

それぞれ理由があつて……彼に用があるから来た時に偶々出くわしたのだ。

最初は互いに『何故ここに?』と思つたが、何となく考へてる事が読めたので無言で頷き合つたのは今さつきあつた話だ。

何の用が悪魔に転生した訳でも無い、単なる人間である一誠に用があるのか……それは互いに分からなかつたが、とにかく今は目の前であから様に怠そうな顔をしながら頭を掻いてる一誠と『話』をしなければならぬ。

しかし、等の本人である一誠はそんな事なども知らずに先程述べた通りのやる気の無さだ。

そりやそうだ。一誠にとっては目の前の二人なぞに関心が無い

彼の中ではソーナ……それに次ぐイリナにしか懐いぢやないのだから。

「聞いてますー?」

だから一誠は目の前でさつきから不気味に沈黙を保つて二人の1つ年下の少女と1つ年上の少女に段々イライラを募らせる。

学園中の生徒達は彼女等をやれマスコットだやれお姉様だと持て囃しているようだ

が、一誠からすればソーナやイリナの方がよっぽど癒させるし、お姉様だと思える。

ましてや、この前の事でヒス起こされたり、自分が原因とはいえ殴り飛ばされた身としては『マスコット(笑)』と『お姉様(笑)』なのだ。

「まーつたく、毎回毎回絡む時となると訳がわからない。

なに？　そうやって黙って見る為にわざわざ来たわけ？　はー暇だねえアンタ等」

「……」

「……………」

「あら、また無視かい」

基本的にソーナや押しの強すぎるイリナや夢の中に現れる安心院なじみ以外には『素』を見せなくなつた一誠の言動は嫌にイラツとさせる効果がある。

小猫も朱乃もその被害者になつた事もある。

しかしどういふ訳なのか、今回の二人は一誠の小馬鹿にした態度にも怒りを見せず、ただただどうやって切り出そうかと気怠そうに片手をポケットに突っ込んで一誠を見つめていた。

それが一誠の顔を顰めつ面に変貌させるのに効果テキメンだったらしく、此処に来て

初めて一誠の方から気紛れではあったものの二人に対して歩み寄る事となる。

「………………。真面目に何か俺に用でも？」

何かおかしい…………。

基本的に他人の心を鑢で逆撫でさせる事しかししない一誠が、ソーナやイリナに見せる顔を見せながら二人に用件を聞き出す。

無気力・無自覚・無関心で通したかったが、どうにもラチが開かないのなら敢えてそれっぽい態度で聞いてやる方が早いからだ。

すると…………一誠の態度変えが正解だったのか、二人の少女は此処に来て瞳を揺らしながら、小さく口を開いた。

「話が出たかった…………ただそれだけです」

「同じく」

何かにすががる様な…………そんな瞳を覗かせた二人の言葉。

王であるリアスでも無ければその仲間である誠八でも無い…………殆ど関係の無い人間

の一誠と、ただ一言のみでは無いちゃんとした会話がしてみたかった……朱乃と小猫はある理由と彼の人間性を見てしまっただけから思っていた。

それが偶々今日だった……ただそれだけの理由だった。

「はあ？」

そんな二人の少女の言葉に、一誠はポカンと口を開けて二人を見つめる。

話が見たい？ そんな事でわざわざ授業もサボって来たのか？ 二人に対してどうとも思っていない一誠は今の言葉を馬鹿正直に鵜呑みにはせず、何を企んでいるんだかと思案するも、基本的にアホな彼には思う浮かぶ事は無かった。

「なにそれ？ ふざけてるの？」

「ふざけてません。私は本気です」

「この前はカツとなつてしまいましたでしたが、前々から真面目にお話をしてみたかったのですわ」

無表情のままと言う小猫と、作り笑いにしか見えない表情の朱乃が言うには本気らし

い……が、一誠は引き続き疑るような目で二人を観察していた。

「……。話すことなんて無いだろ。俺とアンタ等は温い友情で結ばれちやいねーしな」
「本当に他愛の無い話で良いんです。例えば——」

「最近こんな事があった、とか……その程度で良いんです。アナタと話をする事で試してみたいんです……」

小猫が言おうとすれば朱乃が続く。

友達でも何でもないのに、ましてやこの二人は駄目マイナス人間たる自分とは違って友達が多いだろうタイプだ。

だったら何故ソイツ等じゃなくてわざわざ俺なんだ……誠八が言った通り、居るだけで無差別に他人を駄目マイナスに引きずり込む自覚が無い一誠にとっては、ただただ困惑する話だった。

「話す、ねえ……」

「そうです……」

あ、そうだ。前に私も見た白い猫達は元気ですか？」

「そういえば兵藤君は猫がお好きでしたわね？」

終いには勝手にズカズカと教室に押し入ってから話を始める二人に、ちよつとだけ一誠は圧され始めた。

何の意図があつてなのかは分からない……が、どうにもこの二人は俺と話をする事で何かを掴もうとしている……。

「なるほど、なるほどねえ……？」

気付けば一誠は笑つていた。

何時も他人に見せる吐き気を覚えるドロドロした笑みでは無い……爽やかな好青年を思わせる笑みを浮かべて一人何かに納得して勝手に席に座つてる二人に視線を向けた。

「そつかそつかなるほどね、わかつたわかつた……ふふ……俺もまだ捨てたものじゃ無いんだね？ フフフ……」

「あ………すいません。強引過ぎましたよね……」

「でも、どうしても先輩と普通に話がしたかったというか……」

傍から見れば美少女に持ててる男子と勘違いしてしまうシチュエーションだが、生憎この現場を見てる者は誰も居ない。

初めて……ソーナとイリナ以外に話をしたいなんて言われた一誠は笑みを見せながらイリナ探しを中止して、席に座る二人の少女の元へと近付き、今になって心配そうな顔になる朱乃と小猫に首を横に振る。

「いーえ、どうにも俺がひねくれてるみたいだね、余計な勘繰りしちゃいました。あはは、ごめんなさいね……今までの事を含めて」

誠八とそっくりだが……その人間性故キヤラにその笑顔が別物に感じた朱乃と小猫は、漸く此処で再確認した。

（ああ、やっぱりそうだ……）

（彼は私よりも最低だ……）

どんなに爽やかに見えても、どんなに愛嬌のある笑顔を見せられても、彼が……一誠が最低の奴に見える。

だが、それ以上に――

(自分より最低な人が居る……これだけでこんなに安心感を得られる……)

宿題を忘れてしまったが、クラスメイト数人も忘れていたと分かった時と同じ。

テストの点数が悪くても自分より下の点数をとったと知った時と同じ。

リレーをやつて誰かが転んだせいでビリになり、自分の番より前に負けが確定した時と同じ……。

己より最低マイナスな存在が居るだけで、只近くに居るだけで安心してしまう。

朱乃も小猫も……毒の様に一誠の持つ過負荷マイナスの影響を受け始めてしまっていた。だからほぼ無意識に一誠と話をしてみたくなった。

何時も彼が屁理屈捏ねた後に口にする……

『俺は悪くない。』

という只その一言だけを、其々暗い過去を持つが故に言つて欲しいが為に……この二人は彼を訪ねたのだ。

そしてそれは後少しの所まで来た……基本的に他人の心をグチャグチャに掻き回しておきながら無関心である一誠が笑みを浮かべながら話をして欲しいという懇願に応じてくれた……。

よかつた……これでもつと安心出来る。

朱乃も小猫もそう思った。

そう――

「しかしそれでも……『俺は悪くない。』」

笑みを浮かべたまま一誠が右手を二人の前に翳し、その瞬間に大量の杭と釘が朱乃と小猫の身体を貫くまでは……。

「なっ!？」

「がっ!？」

「だって俺は悪くないのだから……」

突如全身に襲い掛かかった激痛は、二人を現実に戻すのに十二分だった。

不気味としか思えない巨大な杭と釘が自身の身を『感知すら出来ず』刺さり、思わず痛みで顔を歪ませながらどうという事だという目で一誠を見ると、彼は只……笑って二人が言つて欲しかったその一言を自分に対して吐いていた。

そして先程と変わらない爽やかな笑みのまま……その場で吐いてしまいそうな程のドロドロした雰囲気纏って彼は口を開く。

「なまじ自分のツラが良いから俺を騙せるとでも？」

友達が少ないから楽にいけると？」

俺がセンパイとイリナちゃん以外に仲間意識を持つとも思ったとか？」

「く……………あ……………こ、これは……………あの時の……………」

「か、身体が動か……………ない……………！」

激痛と指すら動かせなくなった状況に一度受けた小猫も初めての朱乃も金縛りを連想させられたまま、へらへらと笑う一誠を見るしか出来ず、その気にさせといきながら呆気なくブチ落として来た事に対して一種の絶望を感じた。

「おいおい、やめてくれないかねその顔するのは？」

俺は『お兄ちゃん』と違って迷惑にも救いにもなるだろう善意なんて持って無いし、何よりも勘違い甚だしいぜ」

しかし一誠はそんな二人を見ても罪悪感なんてものは感じないし、寧ろ口を半月状に吊り上げた黒く禍々しい笑みへと変貌させたまま、巨大な釘と杭を新たに持つと……………。

「悪魔の癖に甘めえんだよ」

何の躊躇も無く二人の額に突き刺した。

「
」

声すらあげられず、額から大量の鮮血を辺りにぶちまけながらカクンと首が下を向いたまま動かなくなる朱乃と小猫。

「まったく……顔が良いから俺が喜んで聞くとでも思ったのかねえ——いや、もしかして『お兄ちゃん』が実はそんなタイプだったとか？

まあ、どうでも良いか。こっちはイリナちゃんに聞きたい事があるつてのに余計な時間だったってだけだし、キミ等の事もどうでも良い。

話がしたけりや頼りになる『お兄ちゃん』にでもするんだね……あははは！

動かなくなった二人にケタケタと笑って言う一誠は、元々この二人の話に応じる気なんてなかった。

何故勝手に態度を軟化させてるのか……なんてのもどうでも良く……単に時間を取られた仕返しがあったただけだ。

「それじゃーね『幸せ者』」。

そうやって不幸を不幸と呪ってる内は永遠に中途半端な俺にすらなれないよ……ふふふ」

血塗れで動かなくなった二人に、一誠は綺麗な笑顔を向けると、そのまま口笛吹きながら教室を出て行く。

「おっと忘れてた……リケリテイイエスケケケ幻実逃否……キミ等がぶつ刺されたという現実俺が学校を出

てから逃げといてあげる………優しいでしょ？」

扉を潜る瞬間、小さくそう呟きながら……。

ふう……とんだお客さんに時間を浪費してしまつたが、気付かれずに色々仕込んでたお陰で上手いこと逃げられたからイーブンって所かな。

身体に付着した誰かさんの血をハンカチで拭きながら門を出た俺は、さてさてと声に出して思考を切り替える。

それは勿論、今何処で何をしてるか分からないイリナちゃんを探す為だ。

「つつつても何処で寝泊まりしてるとか聞いてなかつたんだよなあ……困つたね」

仕事とやらで街に戻ってるイリナちゃんが何処に居るのかを把握してなかつたりする訳で、早速困りながらテクテク歩く。

センパイの居場所とかなら何と無く分かるから探すに困る事は無いんだが、イリナちゃんは最近再会したばかりだからそうはいかないし……ま、この街内を歩いていれ

ばその内出会すでしょう。

そう呑気に構えてまずはこの前お金を渡した駅近くの場所に赴いてみたが……結果は居ないだった。

「むー……居ない」

確か敵か何かに物を奪われ、それを奪い返すか破壊するかってのがイリナちゃんとの青髪の人のお仕事らしいが……まさか既に死んじゃった——は無いな。

あの子は何と無く殺されてもゾンビの如く復活しそうだし……等と勝手な事を考えながら別の場所に行こうかと人気の無い街外れの道を歩いていたらまさにその時だった。

「カッコつけハツケエエンン!!!」

「え……………?」

後ろ? いや違うね、真上から聞こえる薬でも決めてそうな声が聞こえ、思わず上を見た瞬間だった。

いやホント、何が起こったのかその時は分からず……こう、ヒヤツとした何かがある

頭に触れたと思ったたらそのまま意識がブラックアウトした。

はぐれ悪魔という者が存在する様に、はぐれエクソシストという者も存在する。

主に神に遣えし身でありながら異端と呼ばれる真似をやらかして追放されてしまったのがソレだ。

そしてその中の枠に見事入ってる少年、フリード・セルゼンもまたはぐれエクソシストとして色々とやっていた。

「くっひやひやひやひや！ ザマーミ口腐れ悪魔チャン!! この前の仕返しだばーか！
ひやひやひや!!」

真ん中から綺麗に割かれ、目を丸くしながら地面に転がってる茶髪の少年の亡骸に向かつて狂った笑みを向けて罵倒する白髪の少年であるフリード。

仕返し……という言葉から察するに、どうやら過去に何かしらされたみたいで、それが今殺害という形で晴らせた事に相当な愉悦を感じていた。

「ドグサレた化け物なんて居なくてとーぜん！　後は旦那に頼まれた通りあのアマちゃん共から聖剣回収してオサラバってね〜！」

右手に持つ長剣の先でグリグリと肉塊となってる少年の内蔵と思われる箇所を弄くるフリードを、只の一般人……それもちよつと心臓が弱い者なら一発でシヨック死してしまいそうな絵面だったりするが、運良く此処は街外れだったりするので誰にも目撃されず、ただただフリード少年の狂った声だけが木霊する。

「つとと、聖剣ちゃんがばっちくなつちやうからそろそろ止めてアマちゃん2匹探さない〜」

かなりの恨みがあったのか、物言わぬ少年の亡骸を剣で更にグチャグチャにかき混ぜていたフリード少年は独りそう呟くと、よっこらせと持っていた剣をしまつて現場から背を向けて歩き出す。

さて、一つ此処で問題がある。

このフリード少年が口にした悪魔という単語と今肉塊と化している少年——いやぶつちやけ一誠。

お分かりになると思うが、一誠は悪魔では無く、ほんのチョツピリ気持ちが悪い只の人間であり、悪魔と呼ばれるのはその兄である誠八である。

「……………」

「さてと……………何処にいるのか——」

つまり大体の予想通り、このフリード少年は過去の恨みのせいで見誤っていたのだ。

「痛いなあ……………酷いじゃないか、不意討ちの挙げ句死体蹴りまでお見舞いしてくれさー」

過去に殴り飛ばされた相手である誠八と……………この過負荷^{マイナス}である一誠を。

「な——ありや?」

暢気な声が背後から聞こえたフリード少年は、珍しく一瞬身体を強ばらせつつ背後を振り返ろうとした。

んなアホな、きつちり聖剣でズタズタにしてやったし、呆気なさ過ぎて拍子抜けしちゃったけどちゃんと死んだか確認もした。

しかしこの声は紛れもなくさつき切り刻んでやった筈のムカつくクソ悪魔の声だ……そう思いながら振り返ろうとフリード少年は突如背中に激痛が走り、顔を歪ませる。

「な、なんじゃこりや……?」

思わずそんな声を出しながら、両足の力が抜けて糸が切れた人形のようにカクンと両膝から地面に落とし、背後では無く己の胸元を見つめる。

そこには背中から貫通した巨大な何かの先端が見え、口の中は血の味が広がる。

「な、なあんなんですかあ……!」

訳がわからない。

不意討ちで殺してやったのに、その相手は背後で何事もありやしないといった様子の声を聞かせてくるし、背中になにかを刺されてしまつてゐるし……フリード少年はゴフツと口から血を吐きながら恐る恐る後ろを振り返ると、そこに居たのは――

「現代に甦つた辻斬りに遭遇するとか運悪すぎだぜ俺は……なはは」

殺してやった筈の男だった。

「しかし何だ……卑怯とは言ふなよ? これはお互い様なんだから。

キミが誰だかなんて俺は知らないし興味も無いけど、こうまでされたら仕返しはきつちりしないとき。

ほら、友達に親切にされたら親切を返すように、不意討ちされたら不意討ちしかえしてあげる……それが礼儀つてもんじゃない?」

「は、はあ……?」

無傷の状態ですら右手に巨大な杭を、左手にこれまた同じく巨大な釘を持ってへらへらと笑う一誠に、フリード少年は混乱する。

何故生きてるのか、というか無傷っておかしくね？ と、様々な疑問が頭の中でループするが、やがてそれすらも考えられなくなる。

「だからこれは『正当防衛さ』」

「ツツ!!」

吐き気すら覚える笑顔の一誠に、地面に膝を付いて動かない標的に向かって投げ付けた杭と釘が、それぞれ喉元と額に刺さる。

ドスつと皮膚を貫く音と共に、今度はフリード少年の意識が先程の朱乃と小猫と同じように鮮血を撒き散らしながらブラックアウトする。

「まあ、結局不意討ちでも逃げてしまうから勝てない訳だけでも……」

しかし……日に2回も使うなんて、そろそろセンパイに怒られそうで凹みそうだぜ」

そして残ったのは、一誠の無気力な声だけだった。

トモダチ泣かせは罪である

辻斬りに実はビビったりとかしたけど、肝心のイリナちゃんには会えて無かったので引き続き探す。

そしたらさつきまでの苦労は何だったんだと拍子抜けするレベルで発見できた。

「イツセーくん！」

「おっしや、イリナちゃん発見」

辻斬りされた現場から程無く離れた人気の無い住宅街に訪れた感動的な再会は、イリナちゃんが俺を見た途端に抱き着いてきたという泣かせ演出まで盛り込ませたものとなった。

例の如く兄者と金髪元シスター……そして居ない匙君の代わりなのか金髪の人と青髪の人とかが居たりした訳だが、取り敢えず今はトモダチとの2日振りの再会に盛り上がるうと思う。

「お仕事はどう？」

「んーと……ぼちぼち？」

前に聞いた小の街に留まる理由である仕事について振れば、それなりと答えてくれ……。

「む……イツセーくんから他の女の匂いがするんだけど」

「え、あー……これはセンパイだねうん」

「ふーん……。 (チツ、あの女……)」

センパイの事を口にする途端に不機嫌になったりと、やつぱりトモダチだけあつて普通に会話してくれる事に嬉しさは正直感じる訳だが、イリナちゃんはどうしてもセンパイとは波長が合わないって態度で伝わってくる。

紫藤イリナ、ソーナ・シトリー、そして一誠。

見れば見るほど分かるこの三人の共通点は『口にした次の瞬間に何をされるか分かっ

たもんじやない』という所だ。

そもそもシトリ先輩に関してはその元凶ともいえる一誠のせいで変えられてしまった。

本人はそれで満足らしいのだが……どう見たって彼女は一誠に変えられたという自覚が無い。

一人でも膝が折れそうになる気分の悪さを感じるのに、二人……そして三人と一誠によつて数が増やされれば増やされる程、その底冷えする重圧感が増すし、現に紫藤さんと一誠がこうして近くに居るだけで俺やアーシア、木場や紫藤さんの相棒であるゼノヴィアさんの顔付きも強張っている。

皆分かっているんだ。

普通の感性を持つ奴だったら誰しもが分かるのだ。

「ねーねー、イツセーくんは何であんな女と仲良くしてるの？ 私あのスカした態度苦手なんだけどなあ……」

「いやいや、そんな事ないぞ。あの人って悪魔だけどマジいい人なんだぜ？」

まあ天使陣営のイリナちゃんに言っても説得が難しいのは分かっているけど……」

「むー……それもだけど、あの女確実にイツセーくんの色目使うんだもん……嫌だ」

「色目て……」

あの人はそんな事………しないだろ」

「あ、今日を逸らした」

聞けば普通の友達同士の会話なのかもしれない。

しかし俺の目には今のやり取りをする二人から発せられる形容しがたい気持ち悪さで全部台無しになってるとしか思えず、怖がりなアジアが不安そうに俺の隣に立って服の袖を掴んでくる。

「せ、セーヤさん……」

「分かってる、大丈夫だ……」

何時からだ……只の臆病者だったのが、存在するだけで気分が悪くなると思えるようになったのは。

声を発すれば他人を挑発するような事ばかりしなくなつたのは。
人を傷付けてもへらへら笑つてるだけの奴になつたのは。

「ねえ誠八君……。紫藤さんや兵藤くんみたいな人が他に居ると思う？」

「少なくともあの二人とシトリ先輩以外は見たことが無いな俺は」

「……。私としてはイリナ以外に居た事に驚きが隠せないんだがな」

木場も、そしてゼノヴィアさんも皆あの二人から感じる不快感に顔をしかめている。

どうして……。なんでこうなったのか。

「いやうん、センパイは好きだよ。」

肉片になっても好きで居られる自信がある程度には」

「ぐっ……。そ、そこまで洗脳されてるなんて、卑劣極まり無いわねあの悪魔……」

「いやだから洗脳じゃないってば……。困ったな」

「じゃあ何で好きなのよ！ だってイツセーくんは将来私と結婚するって言ったもん
！」

只そこにいるだけで不愉快になる人間が何故存在するのか、俺には分からなかった。

参ったな……携帯持つてるかどうか聞くために探してたのが、何故かありもしない結婚話にすり替えられているんだが……。

うーん、昔と変わらなずイリナちゃんは若干人の話を聞いてくれないから厄介だぜ。

「言ったもん……」

「いやいや、待とうぜイリナちゃんよ。」

俺はトモダチとの想い出はキツチリ覚えてるんだよ、だから言った覚えが無い事もハッキリ覚えてるんだぜ？」

「言ったもん……それでも言ったもん……」

言つたと言い張るのを何とか納得させようとするんだが、やはり聞いてはくれず、どんどん元気が無くなっていくイリナちゃんに、ちよつと焦りだす。

トモダチに泣かれたら流石に俺も凹むからな。

というか、さつきから外野が黙ってこつちを見るだけなのは何なん？ いや、邪魔にならないからそれで良いんだけどさ。

「言ったもん……互いに18歳になったら結婚して山奥に大きな家立てて即日子作りし

て上手いこと三つ子に恵まるって二人で約束したもん。

だから結婚しよ？」

この通り、イリナちゃんの癖が入っちゃったし、宥めるのに苦労するから邪魔が無い方が助かったりするんだよね。実は。

「イリナちゃんイリナちゃん、それは無いよ。」

そもそも18とか不良だし、するならまともな就職して将来見据えてからじゃないと……」

「ならイツセーくんは働かなくて良い。お金なら私が……」

「いやいや、俺はヒモは嫌だって言うか……あら？ 誘導されちゃいけないかこれ？」

何処と無く安心感を覚える目をしながら迫り来るイリナちゃんを回避しつつ説得するには中々骨が折れる。

バツサリと断ろうにもイリナちゃんはめげない子だから効かないんだよね。

この心の有り様は俺も尊敬すべき所だぜ。

「誘導じゃなくて、決まってる事なの。」

「イツセーくんと私は運命の赤い糸で結ばれてるって主様も絶対言うもん」

「いや、それは無いっての。」

「第一俺の身体の8割はセンパイのモノだし……」

「じゃあ一誠くんを束縛するその悪魔を滅すれば良いの？ そうすれば洗脳も解けて私

だけを見てくれる？」

「だから洗脳じゃないんだよ。真面目に初めて好きなんだよ。」

それに滅するなんて無理だろ。あの人って俺寄りになっちまったけど、それでも勝てるタイプの人だし……」

「しっかしアレだね……全然話が進まない……」。

「どうにもイリナちゃんは俺がセンパイに洗脳されてると思いたいらしいけどさ、それは違うんだよ。」

「まあ確かに別な意味で洗脳されてるのかもしれないし、イリナちゃんには言わないけどね？ 顔を剥がして肉片だけ残ってもトキメク人はセンパイ以外居ないんだよ。」

「受けた全てが現実逃避不可能な人なんてセンパイ以外居ないんだよ。」

「見た目とか性格とか言う問題じゃないんだよ……あの人から感じる魅力って奴はな。」

………………。ホント、トモダチを裏切る様で申し訳ないけど、これだけは妥協出来ない。

「悪いけど、俺は結婚は出来ない。ごめんよ？」

「……………」

でも言わないとトモダチを苦しめてしまう。

だから言う……無理だと。

そしたらイリナちゃんは、黙って俯いてしまった。

……ああ、真面目に胸がズキズキするけど言わなきゃ駄目な事だし、これで絶交されても文句言えないな。

取り敢えずそれを誤魔化す為に、さつきから見ただけの数人をダシに使わせて貰おう。

「そうだ、コッチ見てるだけの青髪の人に言いたい事があるんだ。

さつき俺薬キメてそんな男に西洋剣みたいな剣で辻斬りされ掛けたんだけど、キミ等の仕事と何か関係あったりする？」

「なに？ 何処でだ？」

「えーっと、俺が今出て来た路地裏。」

「運良くその辻斬りさんが顔面から壁に突っ込んで気絶してくれみたいだし、急げば間に合うんじゃないかな？」

「あら、喋った瞬間に金髪の人と青髪の人顔付きが変わったから詳しい教えてしまったが、もしかして今の情報って結構当たりだったのかな？ ま、良いか……。」

「情報提供感謝する……。」

「チツ、オイ木場祐人！ 勝手な事はするな！」

「いや、もしかしたら聖剣かもしれないからね……急がせて貰うよ」

「くっ……おいイリナ！ 取り敢えず彼との話はそこまでにして早く行くぞ！」

「……………うん」

場所を教えた途端目にも止まらぬ速さでダッシュする金髪の人を見て焦る青髪の人が、俯いたままのイリナちゃんを引っ張って追い掛けていく。

兄者と金髪の人シスターも同様だ。

残ったのは、自業自得で痛む胸を残した俺と、ポケットから聞こえる携帯の着信音……。

「あ、センパイ……え？ まあテンションは低いっすね。

うん……トモダチを泣かせるのってかなり辛いですよね……」

センパイ裏切ったら……多分死ぬだろうな俺。

何時からだろう、夢を夢見にしたのは。

何時からだろう、次期当主のプレッシャーもどうでも良くなったのは。

何時からだろう、悪魔という種族に誇りなんて持たなくなつたのは。

いや、分かっている……彼という存在があつたからそうなつた。

彼という存在が居てくれたら心が楽になつた。

彼という存在が居てくれたら……彼を好きになれた。

グレゴリの幹部・コカビエルがこの街に奪つた聖剣欠片を持って潜伏しているという

話を聞いた時は興味が無かった。

そんな事よりも先だったのが、一誠くんの幼馴染みを自称する人間で、その人間は思いの外彼を想っていたという事から来る焦りだった。

幼馴染みだか何だかは知らないが、ベタベタベタと彼に触れているのを見るに、かなり親しかつたと予想が出来た。

だから私は、今在る只の繋がりが、二度と切れない繋がりにする為に一誠くんを家に招いてある事をやった。

その結果……私は一誠くんと更に離れられない関係となれた。

一誠くん自身はその時の記憶が曖昧らしいが、その証拠はちゃんと一誠くんの身体に刻み込んであるので、何時でも記憶を呼び起こす事は可能だ。

後はあの幼馴染みを自称してる女がさっさと諦めて消えてくれるのを願うだけだが、それは多分無いだろう。

だからその時が来れば親切に教えてあげるつもりだ。

洗脳？ 違う、これは互いの合意だ。

顔を剥がした亡骸でも私は彼を愛するように、彼もまた私に対して同じ感情をハッキリ持っている。

だから1回で成功したし、その証は一誠くんの身にちゃんと刻まれている。

現代の悪魔の駒で作る眷属とは別領域にて危険と判断され厳禁とされた太古の一对一の契約術……。

絆なんて目に見えない繋がり等話にならないくらいに強く繋がる事で、互いが持つ力を最大限に引き出せるという話だが、私が着目したのはそこでは無い。

強く繋がる。絆等という言葉では生易しいとさえ感じる強固な繋がり……。

どんなに親しく、幼馴染みだろうと血の繋がった兄弟姉妹ですら立ち入る隙が皆無な絶対的な楔……。

私が欲したのは此処だ。

1度完了すれば死ぬまで……いや死んでも繋がるとされ、ある種の呪いとまで言われる最強最悪の契約術。

その契約を果たす事により、一誠くんの全ては私のモノとなり、私の全ては一誠くんのモノとなる。

だから私はやった……微睡みの状態の一誠くんの身に己の契約紋章を刻み込み……ちよつとだけアレな事もした。

だからもう一誠くんは誰のモノにもならないし、私も誰のモノにもならない。

だって私は一誠くんのモノであり、一誠くんは私のモノなのだから。

「トモダチを傷付けたからといって一誠くんの泣きそうな声を聞くのは私も辛いです。

だから戻ってらっしゃい。私が話を聞いて、必ずアナタを安心させてみせますから……」

聞こえる声は彼の辛そうな声。

幼馴染みが居なければそもそも一誠くんは辛くなかった。

なまじ仲良くしたから一誠くんは裏切らないと誓ってしまった。

中途半端な時期に離れ離れになっておきながら結婚？ フツ……夢見がちな少女としては及第点なのかもしれませんが、一誠くんには通用しない。

そして私は結婚しろとはもう言わない。

だってそんなもので縛る以上に、私と一誠くんは離れたくとも離れられない状態なのだ。

だから言わない。

まあ、一誠くんがしたいのなら構わないし、紫藤さんの言ってた通り、子供が欲しいのは同意するけど……ふふ♪

「大丈夫……トモダチである彼女なら許してくれる筈。
だから貴方は『悪くない。』」

今回の事で伏線は張れた。

最早魔王だろうと何だろうと私と一誠くんを引き剥がす事は出来ない。
寧ろ、今回のこの禁術を使ったと死罪にでもしてくれられたら万々歳だ。

そうすれば全ての邪魔が消え、何処か遠くですーつと静かに二人で生きていける。

安心院なじみとかいう人曰く、世界で最初の過負荷マイナススキルである幻実逃リアリティーエスケープ否と、あの
契約の日に私の中で目覚めたこの力さえあれば、死を偽装する事が出来る。

眷属の皆はそんな私を軽蔑するだろう。

ふざけるなと怒るだろう。

もしかしたら殴りかかってくるかもしれない。

しかしそれを含めれば、それが最悪で最良のエンドなのだ。

心の底から欲してしまったモノの前では全て無価値だ。

勿論、その時が来るまで私は全力になる。

バットエンドを回避……いや受け入れる為に全ての痛みや苦しみを味わってやろう。

そうする事で私はもつと駄目マイナスとなり、自然と周りから人は消えていく。

そしてそれでも残る只一人の人間と墜ちていく。

全てを取り込み、マイナスへと導く……これが私の――

「悪循環バッド・エンド……。私と……。いえ、私と一誠くんの不幸シァワセ……」

その為に今まで一誠くんを眷属にはしなかった。

只の繋がりでは最早足りない。

この世に存在する繋がり全て偽りと錯覚する程の繋がり獲得を、私は今まで我慢をした。

そして今……その為の伏線は全て張った。

その為にはまず、今在る厄介事はリアスに押し付けてしまおうかしら。

彼女は優しいですからね……。フフフ。

三人のマイナス

私には知り合いは居るけど、友達と呼べる者が一人いた。

それは友達と同時に初めて好きになった人でもあり、事情により離れ離れになつてからもずっと変わらずであつたのに、それが今、何処の馬の骨とも分からない女……しかも悪魔に奪い取られそうになっていると知つた時はショックだつた。

しかも尤も最悪だつたのが、彼がその悪魔の事をハッキリと好きだと宣つた時だ。

それを聞かされた時、初めは単純にその悪魔に洗脳されてるかと思つていた。

でもそれは違つており、彼……イツセーくんは本当にあの悪魔が好きと思ひ知らされてしまった。

いくらアプローチを仕掛けても、イツセーくんから出てくる言葉は全て悪魔の事ばかり。

やれセンパイが……。

どれセンパイが……。

「……………」

何でなの？ どうしてその悪魔が好きなの？ 何故私ではなかったの？ 何が違うの？

分からない……理解が出来ない。

私はずっとイツセーくんが好きだったのに、それまで何も知らないあの女が全部……全部……！

「クソ悪魔があああつ!!! 今度こそバラチヨンにしてやらあああつ!!!」

「こ、コイツ……!! 確か前に依頼者を殺してた神父……」

「フリード・セルゼン……天才と呼ばれた元エクソシストにて、今は異端者だな」

喧しい元エクソシスト。

その殺気を受けて構えている悪魔に転生したイツセーくんの兄とその仲間とゼノヴィア。

そして、ただひたすらに横から全てを奪ってくれたあの悪魔からどうやってイツセーくんを取り戻すか必死に考える私……。

聖剣がどうか、聖剣が憎くて復讐したがってる悪魔とか……私にとっては最初^{ハナ}つか

らどうだって良い。

どうすれば私に振り向いてくれるか。

どうすればあの悪魔から全て取り戻せるのか。

どうすれば……どうすれば……。

「うんやん」

取り敢えず考えなければならぬ。

その為にはまず……さつきから奪われた聖剣のひとつを振り回す馬鹿が煩いので、聖剣に恨みがあるらしい金髪の悪魔と切り結んでいる隙を突いて、一応持たされている擬態エクスカリバー・ミミックの聖剣の刀身を槍状に変化させてから脇腹辺りを貫いてやる。

こうすれば取り敢えず黙るだろうと思って。

「あがつ!? いっ、たいですねえ、そこはさつき刺された——ごがつ!」

「煩いんだよキミの声……」

不意打ちをした私に驚いているのか、戦っていたゼノヴィアと金髪の子が、其々獲物

を持ったまま目を見開いて立ち尽くしているが私には関係ない。

そしてこの喧しい奴はまだ騒げる元気があるらしいので、取り敢えず脳天に踵落としをして黙らせてやった。

あは、駄目だ……全然スッキリしないや。

やっぱりこのドロドロと心にへばり付く嫌な気分を晴らすには……。

「ハア……ねえゼノヴィア」

「な、なんだ……？」

もうこれしかない。

地に伏せて動かなくなつた煩い奴と共に、呆然と私を見ているゼノヴィアを呼んだ私は、持っていた擬態エクスカリバー・ミニッツクの聖剣を投げ渡す。

「それアナタにあげるわ」

「な……なんだと？ 何のつもりだ？」

突然渡された事に困惑するゼノヴィアとその他は私の真意が解らないという表情だ

が、本当の事を教えるつもりは無い。

まあ、これだけは言っとくケド。

「私、今を以てこの任務を放棄するわ。

そしてもう教会には戻らない……やる事が出来たから」

「なっ!？」

「!?!?!」

渡した聖剣を抱えたままギョつとするゼノヴィアと悪魔共。

「何を馬鹿な事を言ってるんだ!! そんな事したらお前もそこで気絶してる奴と同じく異端者に——」

「結構よ。元々私は単純に聖剣の適合数が高くてスカウト——いや連れていかれたに過ぎないし、今はもう主よりも大事な者が在る……だから構わない」

主よりも……それは勿論イツセーくんの事であり、話を聞いていたゼノヴィアとセーヤくんが何と無く察したのか、共に顔を歪めていた。

「馬鹿な事を言うのはやめろ！ お前は私に断罪させろとも言わせたいのか!」

「そうだ……キミは一誠のせいでおかしくなってるだけだ。だからー」

「あ?」

ゼノヴィアは良いとして、セーヤくん。

キミ——いや、お前今何て言った？ イッセーくんのせいでおかしいだと？

………フ、フフフ!!

「セーヤくんが私の何を知ってるというの？ おかしい？ あはははははは、私は知ってるよセーヤくん。」

キミとはイッセーくんが『5歳の誕生日を迎えた後に』知ったけど、アレだよね……私もイッセーくんも両方を気味悪がって近付きもしなかったよね？

それでいてイッセーくんのせいで私がおかしいと分かるの？ フフ……悪魔に転生した癖に何時までも偽善者ぶるのは止めたら?」

「ぐっ……!」

知りもしない癖に、自分が正しいと信じてやまないその性格……教会の狂信者達と何ら変わらない。

初めて見た時からそうだ……ホントうすら寒い。

「ゼノヴィア。私を断罪したければそうすれば良い。

けど今はまだ無理……。私にはやることがあるから……それじゃあ」

「ま、待てイリナ！」

顔を歪めたまま立ち尽くすセーヤくんから視線を外し、渡した聖剣を抱えたままどうすれば良いのか解らないといった表情をしていたゼノヴィアに一言告げて私は走り出す。

動揺していたので隙だらけだったので容易に逃走出来た。

後ろから私を呼ぶ同僚の声が聞こえたが無視した。

既に今の私にあるのは……………。

「ふう、邪魔なモノが消えて肩の荷が降りた……。

これでやっと手加減しなくて済むよ……イツセーくん♪」

かつて誕生日以降に変わったイツセーくんを見てから私の中で燻っており、つい最近目覚めたこの謎の力を思う存分ブチ蒔けられる。

勝つ勝たないじゃない……要はあの雌悪魔からイツセーくんを奪い返し、そのまま自分共々世間には死んだ様に偽装すれば良いだけの話。

その為だけに密かに使い方を訓練したこの力。

触れたものを有機物・無機物・因果も関係なく壊れる謎の力。

勿論人の記憶も、人との繋がりも全てが壊れる秘密で裏技で私のオリジナルの力……。

「壊楽手義者……。
ハンドレッド・プレジャー

ふふ、元々私は異端者なのよ」

この力で、あの女からイツセーくんの記憶を壊す。

そしてイツセーくんを奪い返し、永遠に逃げられなくしてからずっと愛してあげる。

ふ、ふふ……あははははは♪ どうしよう、イツセーくんってば女の子みたいに細

かったからなあ……。

生まれる子供も可愛いに決まってるよね？ 楽しみだなあ。

ゾワリとしたものが背中を駆けた気がし、後ろを振り返って見たものの何も無い。

気のせい……そう思えたらそれまでだったが、俺にはどうしてもそれで処理が出来なかった。

「……。センパイとは別だけど、何処か似てる……」

黒く……混沌よりも這い寄り、引き摺り込まんとするこの感覚は、前にセンパイから感じた感覚と似通っている。

ただどセンパイ本人のモノとは違い、今感じてるソレは静かな水面を思わせるものではなく、ただただ無差別に引き摺り込んできそうな底無し沼を連想させられる感覚だ。

それが誰のモノなのか……普通なら解らないし知る止しも無い話だが、俺には何故かその時、この感覚の主が誰かなのか解った。

「イリナちゃん……？」

裏切り、傷付けた相手であるトモダチ……紫藤イリナ。

ちよつと妄想チックな所があるけど、俺にとつては大事なトモダチだった子……。

その子の感覚だと直感した俺の口は無意識にその名を口にし、薄暗くなつてきた空を見上げ、もう一つの感覚がする方へと急接近しているのを察知——

「……………。センパイの方へと向かつてる？おい、ソレはマズイ」

今自分も向かつてる方向に猛スピードで追い抜き、後少しでぶつかり合いそうになるイメージが浮かんでしまった瞬間、俺の鈍足な足は自然と駆け出していた。

のらりくらりで逃げていたそのツケを回収しなければならぬという、強迫観念にも似た気分になって。

「二人にスキルは使いたくない……というより使えない。

ははは……サンドバックで許してくれたら良いんだけど……ゼエ……ゼエ……」

しかし悲しいかな、元が引き籠り体質な俺は、学園に向かって走り始めてから数百メートル地点で既に吐きそうな程にバテていた。

「ぐっ……仕方ない……！」

これで日に三度となるが、仕方が無い。
今在る自分自身から逃げて………。

「時間制限付きだが、これで何とか……！」

己の運動不足な身体という現実から幻想へと逃げ、無理矢理身体をすげ替えるという裏技を決行してから再び全力疾走を開始。

3分だけ自分の身体を幻想と化せるこの使い方……。実は前に安心院なじみから教わった使い方の一つだったりするんだが、どうにも使い勝手が悪すぎて使う事が無かった。

しかし今、トモダチとセンパイが互いを消そうとしているともなればそうも言っつられない。

だから使う……センパイにも内緒にしていた、安心院なじみ曰くの『兵藤一誠・逃争神モード』を。

「……。でも結局逃げるだけなんだよな……」

物理的に逃げる為に自分の身体に幻^{リアリティーエスケープ}実^{リアリティーエスケープ}逃^{リアリティーエスケープ}否^{リアリティーエスケープ}を適応させるつてだけの話……なのだ
が、今更な話自分の身体に幻^{リアリティーエスケープ}実^{リアリティーエスケープ}逃^{リアリティーエスケープ}否^{リアリティーエスケープ}を適応させるのつてかなり疲れるのだ……こう、
精神的に。

センパイの顔を剥がした時以来一度も使うことが無く、大概は杭と釘にスキルを使つて何とかやって来てたが、トモダチとセンパイの間に入ってしっちゃんかめつちゃんにする為には速く動かなければならなく、こうして3分間ヒーローみたいな真似事を決行してるんだが……。

「そうだな……『転んで気分が悪かったから二人の間に入って邪魔したい気分になった』……これで言い訳としては十二分だ」

それでもあの二人……というか全てに負ける気がしてならないのはお約束だった。

思っていた以上に早いですね紫藤イリナ。
まあ、こちらとしても好都合ですが……。

「そうです。今夜駒王学園にと、グレゴリの幹部・コカビエルが先程宣戦布告をしてきました。」

ですから——はい、出来るだけ早めに此方へ来て欲しいのですよ。

私達ではどうにもなりませんからね。それに、貴方様は彼に死なれでもしたら困る……違いますか？」

コカビエルの相手なんて馬鹿正直にするつもりは無い。

だからリアスは嫌がるだろうけど、冥界に居る魔王様に何とかして貰う為に、彼女の兄であるサーゼクス・ルシファー様に連絡をする。

妹の危機となれば天使陣営から例え不干渉だと言われても飛んで来るだろうし、何よりサーゼクス様は彼……一誠くんになれでもされたら困るといふ読みがあった。

「では……これ……」

電話を切り、学園を覆う規模の結界を形成する為に今は皆出払っていて私一人の生徒会室の会長席の椅子に背を預けながら天井を見る。

実際彼は死という現実から逃げる事が出来るから実質不死身だが、その事は教えずに彼が如何にか弱く……そして前に知った『安心院なじみ』と一誠くんが唯一繋がっている為、彼に死なれたらどうなるかと遠回しに脅しておけば彼は絶対に来る。

そうすればコカビエルの事は彼とリアス達に押し付け、眷属達には申し訳程度に協力し、危なくなったらさっさと逃げろと命を出した。

これでこれから来るだろう彼女と平和的な『お話』が出来る。

どうやら一誠くんも此処に来るようだが……フフ。

「今回の一誠くんはどちらの味方になりそうもありませんね……まあ仕方ないですが」

親しいものが少ないからこそ、一誠くんは一度受け入れた者を絶対に裏切れない性質を持つ。

それは安心を覚えると同時に私の不安を煽る……。

だから私はハッキリさせるのだ、紫藤イリナに対して。

「私と一誠くんと同じ過負荷マイナスだろうが、貴女は所詮トモダチ止まりなんですよ」

所詮、オトモダチ止まりで終わりだとね……。

先に結末

命とは本来限りあるもの。

だが、とある少年はある時を境に『現実から逃避する』という力を持つが故に回避が出来た。

例え無限だろうと夢幻だろうと超越者だろうと神だろうと、ちつぽけな……それも所謂過負荷マイナスと呼ばれる彼を完全に殺しきる事は不可能だ。

吹けば飛びそうな……突けば一瞬でバラバラに砕ける程に脆く弱い少年だが、誰にも彼を殺す事は出来ない。

一人の悪魔と人間の少女を除けば……。

そして今宵、少年はその二人の少女の間に入ってある事をしようとする。

二人から受ける全ての出来事からだけは逃げないが故に、自身の持つ力が実質無力化されているにも拘わらず、彼は少女達の間に入って止めようとする。

死ぬかもしれない……そんな事は百も承知だったし、少年もタダで殺される気は無く、全てから逃げる能力を今一度捨ててまで二人を止める気だったが、むぎむぎと死ぬつもりも無かった。

単純に二人が喧嘩してる場合じゃ無い事態に追い込めればそれで良く、その為には他を利用する事も躊躇わない。

「今日は散々な一日でな……頗る機嫌が悪かったりする。

まあつまり、何が言いたいかというところですね皆さん——」

眼鏡を掛け、一見地味っぽい……なんて事は無く美人だと胸張って堂々と思える初恋の相手と長い茶髪をツインテールに束ねているトモダチを想いながら、少年は巨大な杭を地面に刺して足を乗せて笑う。

「テメー等近所でピカピカと眩しいんじゃボケ……というのが一般小市民代表の一誠君の言葉さ。

だからね、俺は代表として責任のある行動をする……。

聞けばその光ってる剣とやらが今回の騒動の火種らしいじゃん？　そしてそこで飛んでる変なのが首謀者らしいじゃない？　だからね……俺はこう思うんだ『剣が最初から存在しなければこうはならないんだとすれば、悪いのはそのオジサマじゃなくて剣なんだよね……だからそんな現実は皆逃げてしまえ』ってね……故に」

リアリティーエスケープ
幻実逃否……聖剣が存在しない現実に逃げる。

地面に刺さっていた杭を踏み抜きながら、一誠は只、喧嘩を止めるといふ理由で関係が無い筈の集団を巻き込んだ。

聖剣という存在から全ての存在を強制的に逃避させるといふ最悪の使い方をして……。

「んー……これで争う理由は無くなったよな？ え？ オジサマダンディーの人が騒動起こした理由が『戦争がしたかった』からだつて？ ふーん、じゃあすれば？ 俺と同じに弱くなっちゃったオジサマダンディーは果たして何秒で殺られちゃうのかしら？ フフフ」

いっしょくたにかき混ぜ、台無しにする。

それが兵藤一誠という過負荷。マイナス

もはや只の棒切れとなった聖剣を見て絶望に膝を落とす皆殺しの大司教。

一誠が持つ釘と杭を目にし、あの時後ろから不意討ちしたのが彼だったと気付かされ

る元・天才エクソシスト。

急激に力が抜け、飛ぶこともままならず地へと落下する最上級墮天使……。

そして……見るものからすれば危険とも最高とも言える能力を見せ付けられてやはり呆然とする悪魔とその眷属達と一誠のトモダチの相棒を勤めていた少女。

皆が皆、関係ない筈の……現・赤龍帝である兵藤誠八の双子の弟というだけの只の間である一誠から目が離せない中、一誠はヘラヘラと笑いながら愉しげに呟いた。

「やるなら人間様が住むこの場所は避けるべきだったね」

地面に埋め込まれた杭から足を離し、左手に釘を持った少年に反省なんてものは無い。

とある悪魔の少年の復讐も、墮天使の立てた計画の何もかもを台無しにしたという自覚もまったく無く、ただただ無邪気な笑顔まま。

「ていうか、学校でやることじゃねーだろ？」

巨大な釘を片手に、全員目掛けて襲い掛かった。

く少し前く

繋がりが私だけで良い、だからお前は壊す。

茶髪の少女は只そう思つて、全てを捨ててこそ泥悪魔と称してる少女が待つ学園へと来た。

運動場では巨大な魔方阵が形成されているのが見えたが、少女には何の関心も無い。あるのは只……横から入り込んで全部奪つてくれた悪魔の少女を壊す事だけだ。

「来ましたか……」

学園全体を覆っていた結界は何の足止めにもならずすんなりと侵入し、感じる気配を辿つて校舎裏の中庭にやつて来た少女……イリナの前に現れたのは、少年を奪つた憎き存在である悪魔……ソーナ・シトリー

イリナが現れたという事に然程驚いた様子も無く、寧ろ待つていたとばかりに迎え入

れたソーナの表情は『微笑』だった。

「何をしに来たのか、というか色々大変な事態になってますよ、主に運動場が……なんて無粋な事は言うつもりはありませんが、敢えて問います……何しに来たのですか？」

クスクスと笑いながら、ただ能面を思わせる無表情で睨むイリナに対して微塵の恐怖を見せずに寧ろ煽るソーナ。

言われずとも分かっているのに、聞く必要も無いのにわざと聞いてくるその態度は、イリナの眼光を鋭くさせるのに十分だった。

「安い挑発に乗るつもりは無いけど、じゃあ言わせて貰うわ。」

壊しに来たのよ……イツセーくんとアナタのシヨボイ繋がりをね」

(ハンドレッド・ブレジヤ)
壊楽手義者……触れたモノ全てを壊すイリナの隠し持っていた能力。スキル

それは目に見えないモノですら破壊し、ある意味一誠の持つ幻実逃リアリティエスケープ否よりも凶悪な能力とも言え、それを主張するかの如くイリナが近くに立っていた木に手を触れると、バキバキと音を立てて木が中から破壊され、ソーナに向かって倒壊する。

「スキルホルダー能力持ち……ですか」

しかし倒れた木はソーナを押し潰す事は無く、寧ろ指一本で押し止めるといふ、一般人が見れば腰を抜かすだろう所業を涼しい顔でやってのける。

「スキル能力？ 確かに能力といえは能力かもしれないし、その口調だと知ってるみたいね……これ」

壊して倒した木で押し潰す事が出来なかったという事に対して特に気に病んだ様子を見せずに、足元に転がっていた石ころを拾うイリナは、ドロドロと濁った瞳であり、その目に呼応するかの如く持っていただけの筈の石はバラバラに碎け散る。

「ならこれも知ってるわよね？ 種も仕掛けも無い……ってね!!」

そして、地を蹴り……人間とは思いたくないスピードで木を退かしたソーナへと肉薄したイリナは、早速とばかりに彼女の顔面目掛けて手を突き出す。

外部からだろうと内部からだろうと任意に選んで壊せるイリナの壊楽手義者は、ハンドレッド・ブレジャーソーナの顔を破壊しようとする。

「知ってますよ……よく……ね」

しかし、ソーナは一切の無駄が無い動きでイリナの突き出してきた手を……いや正確には手首を横に捌いて回避すると、バランスを崩して前のめりに倒れ込もうとする彼女の首筋に一撃を入れようと手刀を降り下ろす。

「チッー」

「む……」

しかしながら、聖剣の適合者たる訓練を行ってきた身体能力が常人の遥か上を行くイリナは咄嗟に身体を振ってソーナへと向けてから手刀をガードし、一旦距離を取ろうと大きく後方へ飛ぶ。

「嘗めないでよね……」。

「アナタ一人くらい壊すなんて訳無いんだから……!」

ギラギラとした目付きで睨むイリナと、只静かに佇むソーナ。

正反対な精神状態なこの二人から少し離れた箇所にある運動場から朝日の様な光と爆音が聞こえるが、この二人には関心はまるで無かった。

『4つの聖剣が今一つとなった!!』

とか。

『借りどころかバラチヨンにしてやるぜクソ共があああつ!!』

とか……まあ何か色々な怒号が聞こえるけど二人にとってはまるで意味の無いものだ。

それもそうだ……そもそもソーナは聖剣争奪の話は聞いてるだけで無関心。

その中心者たるイリナも、途中で放棄した為やっぱり無関心。

あるのは只、目の前の邪魔な奴を消す……それだけなのだから。

「いくら私を消す……いえ、壊した所で一誠くんが心変わりするとは思えませんがどね」
「それでも無いわ。」

私のコレは人との繋がりも記憶も壊せる……つまり、アナタを壊した後、イツセーくんからアナタに関する記憶の全てを壊す……そうすればハッピーエンドよ……」

「……………」

口を半月に吊り上げた不気味な笑みを見せるイリナに、ソーナは内心溜め息を溢した。

確かにイリナの持つ力は一誠や『自分』と同じ過負荷マイナスかもしれない。

しかも一誠とは違ってブレな過ぎる精神のお陰かその退化せいちょうも著しい。
しかしだ……イリナは分かってないのだ。

一誠の持つスキルを……そして、ソーナの持つスキルを。

「そうですか……」

腰を落とし、何時でも飛び掛かれるようにと構えるイリナに小さく呟いたソーナ。そこまで自分が気に入らないのなら仕方が無い。

トモダチで譲歩してやったのに、彼女は無視した……。

それならもう加減する必要は無くなり、自分も今から使うとしよう。

全てを取り込み、本人にとっては最悪の結末へと強制的に誘う己の真骨頂——否、愚骨頂を……。

「バットエンド悪循環……」

ソーナ・シトリーは眼鏡を外しながら小さく口にした。

「終わりよ!!」

一誠なら目視不可能なスピードで再び肉薄したイリナの手が、ソーナの肩に触れる。

（やった……!）

その瞬間、イリナの顔が歪んだ喜びとしての笑みへと変わる。

触れたら最後……その箇所は壊れてしまう壊^{ハンドレッド・ブレイヤー}楽手義者のお陰で、この時を以てソーナの右肩は破壊されて動かせなくなる、そして今度は左肩を破壊してやろうともう片方の掌をソーナの左肩目掛けて突き出す。

これで両肩を破壊し、攻撃手段の大半を封じる事ができる……後は記憶を破壊してから存在自体を破壊すれば勝てる。

少なくともそう思った……思ってしまった。

だが、考えみよう……イリナがもし一誠とソーナと同じ過^{マイナス}負荷だとしたら、彼女は決して勝てない。

勝つ寸前で確実な不運に襲われて結局勝てず終わってしまう……過負荷という存在を知らないが故にイリナは自覚して無かったのだ。

酷いや、俺に内緒で二人で遊ぶなんてさ

「っ!？」

「……………」

ソーナの左肩に触れようとしたその瞬間、まるで耳元で囁かれたかのような声が二人の耳に入り、スキルを発動させようとしたソーナ、左肩を破壊しようとしたイリナの身体が硬直する。

「あーあ、案の定やってるよ……」。

まあ俺のせいだから余り強くは言えないけど」

暗闇から聞こえる少年の声。

それは二人にとっては良く知る声であり、イリナもソーナも無言で互いに距離を一旦起きながら声のする方向へ視線を向け……今になって気付く。

運動場から感じていた複数の力が大幅に消え、巨大な力も感じない事に。

何があったのか……というのは別に双方にとってどうでも良く、取り敢えず此方に近付く彼の姿を目した二人の少女は目を見開いた。

「一誠くん、ですか？」

「ご名答だぜセンパイ」

「そ……その姿は？」

「んん、姿？ 別に変えた所は無いと思うんだけどイリナちゃんや」

白い制服に付着した夥しい量の血。

それは彼の顔にまで広がっており、ヘラヘラ笑いながら歩いてくる姿からして明らかに彼自身の血では無く第三者のものだ。

運動場から気配が大量に消えた……という事を考慮するに彼がもしかしたら運動場に居た連中に何かやらかしたのかもしれないとソーナは一人思うが……。

「いや、違う違う。」

これは二人を追って此処まで来たんだけどさ、何か校庭で凄い事やってる集団が居たわけよ？

でさ、でつかい犬みたいな生物とか無駄に光りまくる剣とか変な模様が空に浮かんでるのを見て『あ、これは近所迷惑だな』って思って注意しに行っただけ。

だから――

「俺は全然悪くなんてない」

左手に持つ巨大な釘からまだ新しいと思われる血が先端からポタポタと流れ、全身血塗れ状態のまま現れた少年・一誠は人懐っこい笑顔で二人に向けて宣った。

「やっほーセンパイとイリナちゃん。

夜の学校で遊ぶってドキドキしない？ 俺はするぜ！」

実はある彼の性癖

一人の過負荷というのが起爆剤となり、今や既に一人は三人となった。
そして今、その三人は対峙する。

「さてさて、夜の学校で夜遊びしたい俺だけど、その前にやらなくてはならないことがあるってのは——ま、二人なら分かるよね？」

全身を真っ赤な血で染め上げているのにも関わらず、ニコリと人懐っこい笑顔をつい今しがた殺し合おうとしていた二人の少女に向ける様は却って不気味さを助長し、二人の少女……つまりソーナとイリナは互いに無言で排除しようとした相手に視線を向けながら口を開く。

「一応解ってるつもりですよ一誠くん」
「止めに来たんでしよう？」

理解しているからこそ二人は領くと、一誠はニコニコと血塗れ姿とは真逆のギャップを感じさせる笑顔で二人に近付き、領くソーナとイリナに無邪気な声を聞かせる。

「そうだが……ふふ、俺がキミ達を無理矢理力づくで止めるなんて事は出来ないのもよーくわかるね？」

なので、正確には争うのも馬鹿馬鹿しく思える程にこの場をぐちゃぐちゃにかき混ぜてやろうかなーとか何とか思ってたります！」

素の戦闘能力が人並み以下で、スキルに頼って漸く食らい付けるというレベルでは、同じくスキルを持つ二人を止めるなんて正攻法ではほぼ不可能。

故に一誠は二人の間に入り込み、徹底的に邪魔をする……その為だけにこの場に馳せ参じたのだ。

「そんなに殺し合いがしたければ、いつそ俺を完全に殺してからにしてくれたまえ……
フフフフ」

ユラユラと笑いながら近づく一誠の右手には杭が、左手には釘が其々握られており、

今まで逃げてばかりだった彼が初めて好きな二人に対して歯向かおうという意思が見え隠れしていた。

「大体酷いよ二人とも……。」

俺を置いてきぼりにして二人だけで遊んでるなんてさ……。」

「別に遊んでた訳では無いのですが……。」

「うん、私はこの悪魔からイツセーくんを解放しようとしたただけだもん」

ポタポタと流れるどこの誰かの血が目元を伝い、まるで一誠が涙を流しているようにも見えたソーナとイリナはちよつとだけ顔を曇らせる。

そう……二人が対峙している理由はまさにこの一誠という少年が理由なのだ。

一誠という少年が好きだからお前が邪魔だとソーナとイリナは互いが互いを排除しようとしていたのだ。

つまり……。

「私は彼女と良いオトモダチになっても良いと思ってたのに、彼女がそれを拒んだのです。」

だから『私は悪くない。』

「イツセーくんをたぶらかした、そしてトモダチと言いながら結局は私を邪魔と
思っている。だからそれ相応な目に遇って貰おうと思った。」

だから『私は悪くない。』

二人にとって一誠を悪いと思わず、だからといって自分が悪いとも思っていない。
だからこそ、己は悪くないとキツパリ言い切るのだ。

「へえ、じゃあそれをめっちゃめっちゃにして邪魔しても問題ないよね？」

別に仲良しこよしじゃなくても俺は散々そんな事は止めてくれと言ったもんね？

だから徹底的に邪魔しても『俺は悪くない。』

そんな二人の言葉に、一誠は一切動じる事無く自分も悪くないと言い返す。

互いが互いのせいにし、あくまでも自分は悪くないと言い切る三人の目……そして雰
囲気はドロドロと身体にまとわりついて来そうな気持ち悪さが滲み出ている。

恐らく第三者が近くに居たら心を凍らせ、吐き気すら催すだろう黒く冷たい空気であ
る。

「ところでなんだけど、俺達はこうしてどういう訳か戦いますよ的な雰囲気なんだけどさ、どうだろ、この際だしひとつ賭けをしないかい？」

「？」

そんな空気の中だと言うのに、いや一誠にとつてはそんな空気だからこそ、今にも戦鬨開始だった空気をぶち壊す様な声で、一言『賭けをしないか』と二人に持ち出す。

言葉にソーナとイリナの目元がピクリと動き、嫌にニヤニヤしている一誠に視線が向け、眉を潜める。

というのも、賭けやらその他やら、とにかく『勝負事』という概念でほぼ確実に負けるということを自覚している上での提案なのだ。

ソーナもイリナも、妙に自信あり気な一誠を怪しむのも致し方ないというものだ。

その血塗れの姿となる原因で、校庭から感じていた複数の気配とのやり取りが一誠に自信をもたらしたのか……。

「そうだな……今から君達が二人かがりで俺を屈服させられれば、君達の望むような事を何でもしてもらおう。

で、俺が君達を何とか出来たら、今日の晩の二人は俺の家で『XXXLサイズの袖ダボダボ裸Yシャツ』になって……まあ、ムフフなことをしてもらおっかな！」

或いは只の馬鹿なのか——その答えはキラキラした顔でソーナとイリナに堂々と無い放つ一誠にしか分からない。

「……………」

「……………」

が、どちらに転んでもソーナとイリナにとって望むべき事だったりする事を察して無い辺り、後者だという方が有力なのかもしれない。

「さて、センパイとイリナちゃんのダボダボ裸Yシャツの為に、俺っち頑張っちゃうぜ！！」

「紫藤さん。相談があります」

「……。何かしら、と言いたい所だけど……言いたい事は分かるわ——取り敢えずアンタを壊すのは後にして、イツセー君のご要望を叶えてあげないとね」

血塗れで杭と釘をブンブン振り回しながらはつちやける一誠に視線を向けたまま、二人の少女はそれだけの言葉を交わす。

出来るならこの女を黙らせてから後でゆっくり一誠の要望にお答えしてやるつもりだ。

だがしかし何気に二人共などと、ソーナとイリナにとつては浮気的な言葉を平気なツラして宣つてるものの、一誠は二人がそうなると嬉しいのだから、取り敢えず今だけは矛を納めんでも無い。

つまり——

「え、あれ？ 何で二人して俺を見てるの？ 喧嘩は——しべ!？」

「ごめんねイツセー君？」

「取り敢えず見たいというなら、見せないわけにもいきませんので……という流れでお願いします」

潰し合いより一誠の要望が最優先なので、取り敢えず優しく気絶させてからお持ち帰りしてしまおう……コカビエルとかその他の反応も消えてるし。

開幕直後の一撃で目をぐるぐる回して気絶している一誠の肩を左右から抱えたソナとイリナは、そのまま彼の自宅へと帰ってしまふのであった。

(紫藤イリナさん。貴女がどう足掻こうとも一誠くんはもう私のものなんですよ……裸Yシャツとやらで誘惑しようともね)

(スタイルなら確実に私の方が上だし、どうせこの悪魔の身体じゃあイツセー君も満足しない……フッフ)

こうして、幸か不幸か戦いの意味合いが別ベクトルになってしまい、この先どうなるかは一切不明なのだった。

一誠が逆お持ち帰りされたその頃、様々な大きさの釘と杭の山と化した駒王学園に一人の少年が舞い降りる。

「チツ、コカビエルはあそこで串刺しか」

月明かりが照らす夜の校庭にソレは面倒そうな声を出している。

暗い銀髪に蒼い瞳を持った少年は、噎せ返るような血の臭いがする校庭内を若干イラつきながら歩き、お目当てのモノを探し当て、そして見下ろしていた。

「コカビエルとあろうものが人間に此処までされるとはな……」

巨大な杭と釘で全身を貫かれ、ピクリとも動かない今回の騒動の火種のひとつである墮天使・コカビエルを見下ろしながら、銀髪の少年は小さく独り愚痴る。

完全には死んではない様だが、恐らく意識を取り戻しても精神に甚大なダメージを負っているだろう。

まあ、その方が仕事も楽だから構わないが……と命じられた回収任務について思いながら辺りを見渡す少年の目に映るのは、コカビエルの他にも串刺しにされたまま横たわる様々なモノだ。

地獄の犬ココロ然り、コカビエルの協力者然り、現ルシファアの妹とその眷属然り。

予想の通り、現レヴィアタンの妹とその眷属の姿は見えなかったが、何よりも怒り覚えるのはグレモリー眷属の一人であり、今自分の足元で転がっている一人の転生悪魔

だ。

「赤龍帝……お前まで人間にやられてるとは失望したぞ」

背中に大量の釘と杭が刺さった状態で横たわる、現赤龍帝・兵藤誠八を怒りの色を隠せない瞳で見下ろし、小さく罵倒するも誠八は一切動かない。

しかしそれでも少年は罵倒を止めない。

「人間の……それも過負荷マイナス相手にこの様とは程度が知れる。

これも彼女の読み通りか……」

本来なら自分の最大の好敵手となるべくする相手がこの様と……少年は過負荷マイナスという単語を極当たり前のように口にする、そのまま誠八から視線を外し夜空を仰ぐ。

「この趣味の悪い惨状を作った過負荷マイナスくんはどうやらすぐ近くに居るらしいな。

他の気配も感じる………はあ、全部貴女の目論み通りという訳かい？」

安心院さん……。

この場に横たわる誰でもない名を口にした銀髪の少年は脈絡もなく現れた新たな気配を背後に感じ取り、ゆつくりと振り向く。

するとそこに居たのは、少年と見た目の歳は変わらない一人の少女が薄く笑みを浮かべながら佇んでいた。

「どうかな。僕としては一誠くんを起爆剤に過負荷マイナスが増えると思つていたりはしたけど、まさかこんなに早いとは思わなかったりしたんだぜヴァーリ君？」

腰下まで伸ばした長い白髪と、日本の巫女服を思わせる白装束に身を包む少女はまるで親しい友の様に少年の名を口にしながら、地獄絵図な校庭を下駄の音をさせて歩き、ヴァーリと呼ぶ少年に近づく。

「彼のスキルは全て後だしジャンケンだからな。先手打つてスキル自体を無効化すれば

後はデコピンでどうにでもなるけど、まあ、此処で串刺しにされてる連中達はそんな事は知らないから防げなかったがな」

カランコロンと気持ちの良い下駄の音が静かな校庭内に響き渡る。

「しかし、リアリティエスケープ 幻実逃否とは恐ろしいね。

この世のルールも簡単にねじ曲げる……まるで神様の様だ。

これで木場祐人君の魔剣創造は永遠に禁手化出来なくなり、この世に存在する力を持った剣は一瞬の内に全て消えたんだからね」

「本人はそんな自覚も無く、煩いという理由で消しただけらしいな？」

「それが彼なんだよヴァーリ君。

嫌な現実から逃げ。都合の良い幻想に逃げ。何でもかんでも取り敢えず逃げることを考える。

それが、何処の『誰か』に改変された兵藤一誠という男の子なのさ」

「……………」

何処か愉しげに、子供がとって置ききの玩具を自慢するかのように話す安心院なじみに

ヴァーリは只黙って見つめていた。

「さあてと、もたもたしてると煩い小僧とかち合ってしまうし、そろそろ僕を『トモダチ』と宣った彼のもとへと行こうかな」

「小僧？ ああサーゼクス・ルシファアの事か？」

「そうそれそれ。」

相変わらず小僧のまんまで嫌になるぜ」

「俺としては赤龍帝と戦う価値が無いと分かったし、アンタと戦いたいんだがな……」
「おいおいやめてくれよ。」

「こんな可憐な少女に暴力か？ 戦闘狂も良いが、キミは少し女性の扱い方を考えるべきだぜ」

飄々とした態度でアプローチをかわした安心院なじみにヴァーリはちよつと残念だった。

いや、まあ………本当に戦う事になったら何秒持つか分からないが、以前挑んだ時のコンマ一秒負けよりは持つ自信があったので試したかったのだ。

結果は断られたが。

「フラれたか。」

まあ良い。それなら次会った時は戦ってくれよ安心院さん？」

「その内気でも乗ったらね坊や」

フリフリと手を振りながら校舎裏へと歩いていく安心院なじみの背をじーつと暫く見つめるヴァーリは、一応生きてはいるコカビエルとその他協力者と共にその場から消える。

そして後に残ったものは……。

「うっ……っ？」

串刺しだった筈が嘘の様に無傷なグレモリー眷属達だけだった。

その後の……

やあ俺は兵藤一誠。

しがな^{マイナス}い過負荷さ。

適当に生きて。適当にダレて。適当に死ぬ。

それを目標にしてまあ、今日も昨日も適当に生きてただけど、そんな俺には顔を剥がしてもハッキリと好きだと思える人と大事な友達が居る。

ソーナ・シトリーという、おとなしそうに見えて実は悪魔な主に俺は親しみを込めて『センパイ』と呼んでるこの人こそが俺の好きな人。

顔を剥がし、判別できない肉片だけになっても絶対に愛せる程にね——と、再会した友達の紫藤イリナちゃんというツインテールの女の子に何度も説明してるんだけどさ、どうも何をどう間違えたのかな。

よく分からないけどかなり好かれてるんだよね……凄くね？ 俺一応^{マイナス}過負荷なのに好かれてるんだぜ？

そのせいでセンパイとイリナちゃんが喧嘩しそうなった所を止めに入ろうとしたら、何故か二人に気絶させられてしまったとか訳わからん事になって、家にラチされてとか

何かもう色々あったけど、それでも楽しくやってるつもりだよ。

無能で、無気力で、無駄骨ばっかで、友達との字すら無かったけど今は違う。

美人で可愛くて大好きな大切な人が出来た。

彼女を前にすれば、突然沸いて現れて俺が居た場所が消えたとか、その人が持つ才能故に人生を上手く渡つてようが最早どうだって良い。

コカビエルだとか聖剣だとか学園で何故か戦つてようが知ったこっちゃ無い。

そのせいでセンパイや幼馴染みの子が危ないのなら、俺はその二人だけを連れてその現実から逃げてやるさ。

それが無能の俺が唯一手にした繋がりなんだから……。

とんだ『イレギュラー』によつて終わりを告げた聖剣奪取事件から数日。

事件の日に運動場で出来上がった阿鼻叫喚の絵図は『最初から無かった』様に片付けられており、そんな事件があつたなど一般の人間に気付かれる事無く平和な学園生活は続いていた。

それは……とある過負荷^{マイナス}の少年により事件全体を台無しにぶち壊され、彼の持つ武器でしこたまぶつ刺された悪魔達もであった。

「んー……やっぱり暇が一番良いですねえ」

「ええ、こうしてるだけが一番です」

いや——正確には『そう思わされていた』といった方が正解か。

コカビエルと戦闘を行ったリアス・グレモリー以下眷属達は全員が『コカビエルは兵藤誠八によつて致命傷を与えられ、その後現れた墮天使側の遣いがコカビエルを氷付けにして終わった』と思い込んでいるのだ。

理由は勿論、たった一人だけのクラスに所属し、今も教室内で暢気に椅子を並べて横になり、ひなたぼっこをしている少年とその少年に穏やかな微笑みを向けながら膝枕をしている悪魔の少女によるものだということも、コカビエルと死闘を繰り広げて勝利したと思ひ込まされてるリアス・グレモリー達……果てには氷付けの封印をされてしまったコカビエルやその一派は信じている。

「それにしても良かったのですか?」

「んー……なにがです?」

現実を思うがままに改竄する能力・幻実逃否スキル。

眼鏡を掛けた黒髪の少女に膝枕されている少年の持つ、神すら知りえず、そして反逆すら可能な過負荷マイナスと呼ばれるソレにより、まずは『この世に存在する聖剣というを否定』し、『最上級墮天使だったコカビエルやその近くに居た連中を自分と同等の強さに引き下がった幻想』へと逃避し、そして全員を串刺しにした後は、『全てを片付けたのは皆のヒーロー兵藤誠八』という現実に書き換えていたのだ。

これにより聖剣を全て消した原因が曖昧となり、神も三大勢力の殆どが知り得ないスキルについての全てを、腑に落ちなさそうな表情で頭を撫でる少女に呼応するように心地よさそうな笑みを見せる少年が抹消したのだ。

手柄も何も要らないとばかりに——あっけらかんと。

「わざわざ一誠くんのお兄さんに全ての手柄を与えるような真似なんて……」

それが少女にとって——初めて純血の悪魔で過負荷マイナススキルに目覚めたソーナにとっては少々納得が出来なかった。

今もこうして自分の膝の上で心地よさ気にモゾモゾと頭を動かす愛する少年——一誠は兄らしい誠八を避けていた処か嫌ってすらいいたのだ。

それなのに、コカビエル戦に於いて何して無かった彼を英雄に祭り上げる様な真似をするなんて——とソーナとしてはほんの少しだけ不満があったのだ。

それは、彼の幼馴染みにて自称・一誠くんのお嫁さんと勝手に言ってる同じ過負荷マイナスに
て、今はこの場に居ないイリナも不満がっていたくらいだ。

けれど一誠本人は至って変わらさずのヘラヘラした笑顔で『構いませんよ、そんなものは』と言うだけだ。

「俺は別に『お兄ちゃん。』みたいに崇められたい訳じゃないですよ。

大事なのは、一々うるさかった連中を黙らせることだけだつてんです……残った結果なんてどうでも良いっすわ」

ふわふわした気持ちで語る一誠は、そこまで言つて一息入れて続ける。

「それに俺達の事が公になるのも如何なものでしょう？　これで良いんですよ……へへ」

「……。わかりました、ならばもうこれ以上は言いません。

私としてもそれまで避けてた連中から手のひらでも返される一誠くんは見たくない

し」

「あはは！ 手のひら返されるなんて無いでしょ？ あつて拉致られて無駄な実験動物にとかじゃないっすかね？」

他人から理解して貰おうなんて思つてない。

知つてる人達から理解して貰えればそれで良い。

それが彼の——兵藤一誠の考えであり、偶々獲られた事柄だつて他人に押し付けて逃げる。

まあ、聖剣が全く存在しない現実に書き換えたのがこんなちつぽけな少年だとバレたらタダでは済まないのは間違いないので、誠八に手柄やら何やらを押し付けたのはある意味正解なのかもしれない。

「そーいやイリナちゃんは何処に行つたんだろ……う？」

「ああ、彼女なら『教会と完全に縁を切る……いや壊してくる』と行つてしまいましたよ……。」

なので多分近い内に戻ってくるのでは？ 私はちよつと嫌ですけど」

「あはは……センパイとイリナちゃん喧嘩ばつかしもんねー」

「喧嘩はしてません、彼女が勝手にありもしない妄想を押し付けながら私を目の敵にしてるんです」

「……………あはは」

ホソライノミチ
主人公を放棄してる過負荷なのだから……………。

誠八は困惑していた。

「ハア、あの時はどうなるかと思ってたけど、セーヤが本気になってくれたお陰で生き残れたわ」

「ええ……………聖剣も『コカビエル達が、無理に再融合したせいで全て消えてしまった』りしました……………」

「それでもこうして生きられてるだけで儲けものよ。」

聖剣の完全消失については私達に何の非も無いし」

コカビエルとの戦い……………いや、一誠による獄殺が『無かったことに』なっていて、そ

れどころかコカビエルを倒したのが自分ということになっている。

リアスも朱乃も小猫もアーシアも……そして聖剣に恨みのあつた祐斗までもが、一誠が目の前で見せていた『あり得ない現象』を目の当たりにしたはずなのに、それを忘れて誠八を誇らしげに称えている。

「……………」

「? どうしたのセーヤ?」

「……………。いえ……………」

ハッキリ言おう……気持ちが悪くて仕方ない。

自分以外がああの夜の出来事を綺麗サツパリ忘れ、その上なにも出来なかつた自分を英雄の様に称えてる。

薄気味悪いどころじゃない……全部一誠がやらかした事なのに皆が何も覚えていないなんて可笑しすぎる。

けれどどれだけ訴えた所で、自分を英雄の様に称えて信じてしまつてる彼女達に、『実は人間でしか無い一誠のおかしな力で聖剣は消失し、ついでだと言わんばかりに自分達とコカビエル達を串刺しにした』と説明しても『彼が? いくらアナタが謙虚でもその

お話は無理があるわよ?』と返すだけで信じてもない。

誰もが誠八がコカビエルを倒し、祐斗の復讐心からも救ったと救われた祐斗本人からも尊敬の眼差しを向けられる。

「……。ちよつと出ます」

「? 何か用事?」

「え……ええ、直ぐ戻ります」

気持ちが悪い。気味が悪い。

まるで自分だけが間違えてるのでは無いのかとすら錯覚してるしまう。

自分が間違えてるのではないのか、本当はリアス達が言ってるので間違いないのではないかと自分自身すら疑わしくなってしまう。

心の整理が出来ず、リアス達に向けられる目から逃れる様に部室から逃げ出た誠八の心は最早疑心暗鬼の領域に入り込んでおり、今はただ独りになりたかった。

「……。どうなつてしまったんだ……アイツのせいなのか? それとも俺だけが勝手に勘違いしてるのか? わからない……今までこうして生きてきたけど……なにが正し

いのかも分からない……!」

ブツブツと旧校舎のある部室から抜け出し、フラフラと頭を抑えながら校内を徘徊する誠八。

あの日、血塗れの姿で両手に巨大な『杭』と『釘』を持ち、アンバランス過ぎる笑顔を浮かべながら聖剣を消し、急激に身体が重くなつた自分達に襲い掛かつて来た一誠が幻だったのか？

だとすれば、はつきりと自分の身体を貫いた『杭』と『釘』の感覚は何だったのか？

消失した聖剣は？

いくら考えても、自分以外の全てがそれを記憶せず、誠八が漫画のヒーローの様に戦つて勝利したという記憶しているのでまともに取り合つてくれない。

誠八は気が狂いそうな気分で、すれ違う一般生徒達の黄色い視線に気付く余裕もなくフラフラと独りになれる場所を探して徘徊する。

かつて、幼き一誠が誠八によって味わい、人間不信にまでなつた気持ちと皮肉にもリンクしている事に気付くことなく。

そしてそれこそが――

「プール掃除い？ それを俺が手伝うんですか？」

「いえ、別に強制じゃないですよ、生徒会の仕事ですし。」

ただ、もし手伝ってくれたら清掃後のプールにいち早く入ることが出来るので、折角だし一誠くんもどうかなくて……」

「うーん……でも俺泳げないんだよな。」

ちゃんと準備運動してるはずなのに、昔からプールに入ると高確率で両足が吊って溺れ死にかけるんですよねー」

「そうなたら私が人工呼吸してあげますから……どうですか？」

「むー……センパイが側なら安心だし、基本毎日暇人だから良いっすよ」

「ありがとうございます……ふふ、当日は期待しててくださいいね？」

「何がすか？」

あ、まさかセンパイも入るんですか？ わーい、この前のXXXLダボダボ裸Yシャツ以来のお色気シーンだぜ！」

「……。一誠……！」

かつてと逆転された再現になっているとは……その『自覚がまったくない』誠八に知るよしも無く、ただただ自分を疑心暗鬼にさせてるくせに、ソーナと楽しそうに廊下を歩く一誠に、怨みに近い何かを抱くのであった。

俺、センパイ……そしてイリナちゃん。

この三人は紛れもない『同類』である。

他の誰にも干渉されず、理解もされないけど、それでも俺達は同じ過負荷^{マイナス}だ。

……。まあ、この二人と仮に戦ったら俺は刹那で殴り飛ばされて負けるくらい弱いけど、それでもマイナス同士だ。

ただの人間、悪魔、悪魔祓い。

これだけ見ると何の共通点なんて無いけどね……。ふふ。

「いってて……やっぱり溺れたただけでしたわ」

センパイに誘われるがままに手伝ったプール清掃は、センパイ率いる生徒会——もとい眷属の人達+俺という組み合わせで割りりと早く終わったのだが、その後のご褒美とし

て綺麗になったプール遊びでは、案の定俺は両足を吊って溺れ死にを何度も味わうはめになった。

何故なんて知らないけど、どんなに入念な体操を経ても入った途端全身の筋肉が硬直して動けなくなるんだよね。

おかげで飲みたくもないプールの水をガボガボ飲んじやうし、センパイに何度も助けて貰うし……まあ、楽しかったけど。

「うーん、あんまりにも足を吊りすぎてまだ軽く吊ってる感覚が……」

「大丈夫ですか？ まさか入る度に溺れる程酷いとは思いませんでしたので……」

「ちよつとは克服したと思っただんですが、世の中そんな上手く行きませんでしたよ」

あの日、お互いの顔面を剥がしても好きでいられるか確かめ合ってから、殆どを一緒に居るようになった俺とソーナセンパイ。

センパイに肩を貸して貰いながら、痙攣し続ける両足を動かして帰路に向かっている。センパイに入っては溺れの繰り返ししかしなかった俺を何度も引き上げては介抱してくれたせいで、物凄い悔しそうにこっち睨んでた匙くんや生徒会の人達みたいに遊べなかつた。

しかしセンパイは何の文句もなく俺を介抱してくれ、センパイの性格らしい、清楚な水着姿を間近で見せてくれただけでも参加した意味は大いにあったと俺は思う。

まあ、ダボダボ裸Yシャツの威力には個人的に劣ると思うけど。

「その身体じゃ辛いですよね？ 私の家に来ますか？ ご飯も作りますよ？」

「ホントですか？ 正直助かりますぜ」

センパイは俺に優しくしてくれる。だから好きだ。

イリナちゃんも同じくだけど、それは友達としてという意味だから少し違う……まあ、イリナちゃんはこんな俺を好いてくれてるみたいで、近日中に教会との縁をぶち壊してこっちに来るくらいみたいだけど、それでも俺は卑屈で無意味に生きて死ぬだけの俺を此処まで引き下げてくれてたセンパイが好きだ。

周りの顔色を伺うだけの人生から引つ張りあげてくれた。

俺に危なくなったら逃げる事の根底を植え付けてくれた。

顔を剥がしても愛せる気持ちを教えてくれた……だから、他の誰にもセンパイは渡さない。匙くんには悪いけどね……ふふ、初恋つてのは人を狂わせるもんだよホント。

「ああ……いい気分だな」

「?」 急にどうしたんですか?」

それが本音として、センパイに肩を借りてゆっくり歩きながら言葉として出てしま
う。

「いや、センパイが大好きですよって事です」

こんな気持ちを抱くのは過負荷マイナスとしては失格なのかもしれないけど、センパイが傍に
居てくれなかったら過負荷マイナスにすらなれない中途半端卑屈野郎で終わってたと考えれば、
この気持ちを抱いた俺は『悪くなんてない。』

そもそも過負荷マイナスが不幸の象徴だとか何だとかはこれ迄の過負荷な人達が勝手に作っ
ただけであつて、だからつて俺も同じだつて話は無い。

考えてもみれば、マイナスとマイナスを掛けたら+になるだろ? それと同じで、俺
と同じ過負荷マイナスのセンパイとこうやって仲良くすれば過負荷マイナスの致命的な箇所を薄める事
だつて簡単に可能だ。

だから俺は自分のやつてることに恥なんて無い。

「今日は妙に甘えん坊さんですね。

まあ私としては、全然嬉しいので構いませんけど……ふふ」

センパイもこうして優しく微笑んでくれる……ほら、何の遠慮があるんだ？ 無いだろ？ だから俺は悪くない。

「私も大好きですよ……」誠くん……」

その為に、邪魔となる奴からセンパイとイリナちゃんだけを連れてみーんな逃げる。数少ない俺の癒しまで連中が奪いに来るといふなら、そんな現実是否定してやる。

あの人外さん曰く『キミの兄と名乗る彼は、本来キミが歩むべき道を奪い、成り代わつてる』という真実が本当なら、俺は喜んでその道をくれてあげる。

だつてもう俺には必要の無いものだもん、センパイもイリナちゃんも居るしね。

だからお兄ちゃんよ。俺の代わりに精々『ヒーロー』として周りから崇められたりモテモテになってくれよ……俺はもうアナタを恨みもしなければ、羨ましいとも思わなくなつたからさ。

「It's reality escape……なーんてね！ あはは♪」

恨んでたのがアホらしいや……俺の代わりに危ない目に逢ってくれてたんだろう。

いやいや、何処の馬の骨ともわからない人にしては親切な人だよな、『お兄ちゃん。』つて……キヤハハ！

「にしても、人工呼吸なのに舌を入れるって逆効果なんじゃないとか俺はフと思ったんですが……」

「舌？ ああ——」

ちゅ♪

「え？」

「こうしてから……んっ……」

「んむ…………つ…………う！」

「ふは…………こうすることですか？　ふふ、諦めの悪い紫藤さんに負けたくは無かったか

ら、つい…………ねっ？」

聖剣と幻実…………終わり。

T o b e n e x t ……？

マイナス三人組……に加わりたい

マイナス三人組と泣き虫ゼノヴィアさん

凄いい結論だけを言うと、言つてた通り本当にイリナちゃんが戻つてきた。

物凄いいスッキリした顔で、俺を見るなり勢い良く飛び込んで来たり、案の定センパイを見た途端嫌そうな顔したりと忙しそうなのは変わり無さそうで安心した。

そしてどうやらイリナちゃんは本当に所属していた教会やら家族やらとの縁を『ぶち壊して』しまったようだ。

俺が兵藤の苗字を使つてるように、便宜上紫藤という苗字を使用しているものの、紫藤の人達との縁が壊れてしまった今、彼女は只のイリナちゃんとなり、然り気無く駒王学園に転入という形で入り込んだみたいだ。

「うふふ、これでイツセーくんとの仲を邪魔する大半は壊したわ。

後はイツセーくんをそこほ気にくわれない悪魔から上手く引き剥がし、私とずーつと一緒に生きる様に出来れば何もがハッピーエンド。

あはははは、白いお家に住んで大きな犬と白い猫を飼つて沢山子作りするのよ。

私が出来なかつた間にこにくたらしいこの悪魔がイツセーくんを誘惑してようが関係ないし、イツセーくんにその気が無くても私は諦めないし頑張ればイツセーくんは絶対に振り向いてくれるもん。どうせこんな悪魔にだつて黙らせてるだけだろうしこの悪魔も良いように利用しようとしてるに決まつてるそうよそうに決まつてるわだつて昔イツセーくんと結婚する約束したものの大きな白いお家に猫3匹と子供四人と幸せに暮らすつて約束したもんね。

ふ、ふふふ……すーはーすーはー……ああイツセーくんの匂いや体温を感じる度にお腹の下辺りが熱いけど気持ちいい。

あはあ……♪ これはきつとイツセーくんと子作りしなさいつて私を応援する誰かさんが言つてるのよきつとうん

だからやつてやるしこのスカしたペチャパイ悪魔からイツセーくんを取り返して死ぬまで愛でてやるいえ、寿命や老化という概念も『破壊』すれば永遠に愛し合える。

うふふ素晴らしい……なんてフォーリンラブでパツピーエンド相思相愛純愛ゴールインなのかしら!!」

「Oh……もーれつう……」

「私思うのですが、紫藤さんはアホの子という奴ではないでしょうか？」

か弱い女の子って言葉あるだろ？ あれ絶対に嘘だと思うんだ。

転校生の癖に俺が所属を一応してる学級崩壊状態のクラスに入ると宣い、実にマイナスらしい良い眼と笑みを浮かべて俺に抱き付きながらマシンガンの様にペラペラペラペラと言葉を高速で繋げている。

いやあ……肉食系もびっくりだよねイリナちゃんって。センパイもそこは感心してるようで……というかセンパイもセンパイで授業を受けずに俺しか居ないこの教室に最近入り浸ってるのはどうかと思う気がしてなら無い——まあ、言わんけど。

「あのーイリナちゃん？ 再会を嬉んでくれるのは実に嬉しいんだけどさ……ちよつと離れてくれると良いかなって思うんだ。

ほら、イリナちゃんおっぱい大きいからさ、もうさつきから凄く当たっちゃって色々大変なのよ……何処がとは言わんけど」

「はあはあ……イツセーくんの子種……♪」

「……ごめんセンパイ。イリナちゃんから身の危険を感じて仕方ないツス」

「大丈夫ですよ、絶対にさせませんから」

ちよつとラリった表情のまま離れてくれず、さらに変な事まで口走るイリナちゃんに

色々困ってしまうのと同時に……男の性というか悪癖というかセンチパイ以外の美少女に好かれてるという現実にならざるを得ないと思ってしまう。

ちかたないよ……だつて多少なりとも男だもの。

「……という訳で今日からよろしくねイツセーくん!!」

「ん……まさか本当に自分の家族との繋がりまで壊して此方側に来るとは思いもしなかったけど」

「あはは！ いやーねーイツセーくんったら！ イツセーくんのお嫁さんになる私にとつてそんなものなんて全部必要ないもん！」

「あ……あ、そう……」

「無駄なことなのに。」

「というか、私だつて大きくないけどあるもん……」

物凄い無垢な笑顔で家族との絆を『壊した』と言い切るイリナちゃんに俺は閉口してしまう。

だつて、イリナちゃんの肉親つて別にないのにもしてないのにそこまでする必要があるのかつて話だし、何より俺自身イリナちゃんは幼馴染みで友達としか思つてないしそう

言つてた筈なのに、お嫁さんがどうか言つてるせいで物凄く断りづらいというか……センパイは後ろの方で胸を気にしてる様だし……混ぜると危険とはまさにこの事だな。

「あ、あのー……」

「ねえねえイツセーくん、私まだこの学校の細かい所とか知らないから案内とかして欲しいな？」

特に人気がまつたくない、ロマンチックなキスが出来る場所があつたら是非！」

「え、それは無いと思うけど……センパイが生徒会長だし」

「ええ、というよりあつても貴女には教えたくないですね」

「あのー……！」

「はあ？ 何を言つてるのかしらこのペチャパイ地味悪魔は？ この前の裸Yシャツで私との差を実感した筈じゃあないかしら？ 特に胸コとか」

「ハア……頭が残念なのは脳に行く筈の栄養がそこに行つてしまったからでしょうね、貴女の場合は。」

一誠くんは胸の大きさに判断する人じゃ無いのに……ね？」

「え？ あ、はい……センパイがセンパイだから好きなんです的な？」

「あのー！」

「ふんだ！ イッセーくんもその内分かってくれるもん！ アナタみたいな真面目しか能の無いつまらない女より私の方が良いってね！」

「いや……それは無いと断言できるんだけどイリナちゃんや」

「あの一！！ 無視されると物凄い空しくて仕方ないのだが!!!」

「「え？」」

そんなこんなでイリナちゃんと正式にツルむ事になった今日この頃な訳ですが、どういふ訳か俺含む三人の他に一人だけ無関係な筈の人がこの教室に居て、仲良く三人でほのぼのとした会話に横槍を入れてきた。

「も、盛り上がってる所申し訳無いが……む、無視しないでくれ……色々と泣きそうになるんだ、疎外感とかで」

わざわざ大きな声まで出してほのぼの日常系の会話に横槍を入れてきた——あー……えー……つと……ごめん名前が思い出せないけどイリナちゃんの仕事仲間だった気がする前髪に多少の緑メツシユが入ってる青髪の女の子は確かに泣きそうな顔だった。

「あー……」

どうも無視されると勘違いしてる様なのだが、俺もセンパイもイリナちゃんも無視したつもりなんて一切無い。

その証拠にセンパイとイリナちゃんに目で『無視でもした?』と確認しても二人はキョトンとしながら首を横に振ってる。

要するに勝手に此処に居て会話に混ざりもしなかった癖に無視されたとか理不尽な事をこの人は言ってるんだ。

失礼にも程があると俺は思う。

「疎外感?」何を言ってるのか俺にはよくわからないな。

俺は無視なんて虐めみたいな真似をしたつもりなんて無いし、センパイとイリナちゃ

んも無視してないよ。

キミが勝手に黙りながら突っ立ってブーツとしてただけで会話に混ざろうともしなかつただけだろ？ ほら『俺は悪くない。』』

「うっ……だ、だつて……」

「そもそもゼノヴィアが勝手に私に付いてきたのよ？」

それなのに何でそんな気を使わなければいけないのか私には分からないわよ……だから『私は悪くない。』』

「黙つてるだけなら子供でも出来ます。」

会話に加わりたかつたら最初から輪に入れば良いと私は思います。

だから『私も全然悪くない。』』

「うぐっ……！」

どうやら色々と壊してきたイリナちゃんにくつついて来たみたいらしい……えつとゼノヴィアつて人は俺達の親切な指摘に顔を歪ませて言葉を詰まらせていた。

『永久自習』という黒板にデカデカと書かれた文字や、俺達以外誰一人として居ない空きだらけの40近くの机やらに違和感でも感じたのかは知らんけど、俺は人見知りなんだよ。

残念ながら見知らぬ他人に無償の親切なんてごめんだね。それは優しくしてお強くて魅力的な『お兄ちゃん。』の専売特許であって俺じゃない。

というかそもそもイリナちゃんを介して俺を知ったのなら、俺がどんな奴かくらい予想できるだろうに……何でイリナちゃんに付いて来たのかも謎だけど、それ以上に『お兄ちゃん。』にすり寄らないのが謎過ぎるぜ。

「だ、だってアイツ等只の悪魔だし……」

「は？　ならセンパイも悪魔なだけど？」

「そうかもしれないが、ソーナ・シトリーは悪魔だけどイリナっぽいから……」

イリナちゃんっぽいから……って、知らんよそんなの。

だから何だよって話だよこっちは。

「神が死んでいたと聞かされ、それまでの何もかもが信じれなくなってしまうた。

けれど、同じく神が死んだとコカビエルに言われてケロツとしてたイリナなら分かってくれるかなって信じられて……」

「だから一緒になって付いてきたと？」

「……うん」

取り敢えず立ちっぱなしも何なので、適当な空き机に座らせて詳しく話を聞いてみると、本人は如何にも傷ついてますな顔で語り始める。

で、聞いてみた感想としては……別にどうとも思わないというか。

「『それは可哀想に、辛かったね？ 俺達が仲間にしてあげるからもう大丈夫だよ』——
なーんて言われることを望む、幸福者が如何にも考えてそうな都合の良い話だね」

「何ゼノヴィア？ 行く宛が無かったから仕方無く私に付いてきた訳？」

「ち、違う！ そんな訳——」

「じゃあ何故此処に居るのですか？」

紫藤さんはともかく、アナタにはコカビエルを討伐するために共に戦ったヒーロー——と兵藤誠八君が居るのに」

いや、別に意地悪とかじゃなくてね？ この人の考えることがふわふわし過ぎというか、何となく俺達がこんなじゃ無かったら、あの紅髪の人に頼んで『破れかぶれで悪魔に転生した』とか言い出しそうというか……神が居なかったからなんて只の言い訳

にしか聞こえねえというか……。

「な、何を言ってるんだ！　そもそも兵藤誠八は——いやあの夜戦った私含む全ては、お前の……兵藤一誠の訳の分からない変な力で皆台無しにしたじゃないか！」

……ん？

「悪魔連中はどうか知らないが、わ、私はハッキリと覚えてるからな！　ヘラヘラしながら聖剣を消滅させた処か、あのコカビエルや悪魔連中……果てには私にまで巨大な杭と釘で串刺しにしたことを！」

「……………」

正直ちよつと驚いた。

どうもこの人……わざと記憶を残してあげた『お兄ちゃん。』とは別に、素である夜の事を覚えてみたい。

椅子をぶつ倒す勢いで立ち上がり、俺に指差してハッキリと宣う様子から見ても、デラタメで言っていないのがなんと無く分かる。

「お陰で私のデユランダも消滅してたし……もう散々なんだよ！」

「でゆらんだる？ なにそれ？」

「英雄・ローランが持っていたとされる伝説の聖剣よイツセーくん」

半泣きになって俺にキレるゼノヴィアって人の口にした、デユランダなるものが分からず頭に？を浮かべると、横からイリナちゃんがりしつかりと説明してくれた。

どうもこのゼノヴィアって人は希少極まりない天然のデユランダ適合者だとか何とからしく、あの日の夜ピカピカと鬱陶しかったのと、争い理由がそれだったからという俺にとってはかなり真面目な理由で『この世に存在する全ての聖剣を否定し、存在なんてしない幻想に逃げる』ってスキルを使った二次災害的な意味合いで、この人のデユランダってのに作用しちやっらしい。

お陰で彼女は武器を失い、挙げ句に信仰してた神が実はハリボテの大嘘だったと聞かされて絶望したりと散々な目に遇わされてメンタルがスタボロ。

そのせいで、ちよつと泣き虫になつちやつてるらしい……と、泣きべそかいてるゼノヴィアさんって人の八つ当たりを受けながら、隣に居たイリナちゃんにこつそり耳打ちで教えられた俺は、物凄いシラケた気持ちにしかなれない。

「結果的に解決したが、そのお陰で行き場が無いんだよ！ だから養え！ 責任とって私を養え!!」

「……。結局それが本音なの？」

「……。ゼノヴィア——いえ、この雌犬。

自分の行き場が無くなったからってイツセーくんに寄生ですって？ ぶっ壊してやろうかしら……」

「それとも永遠に死に続ける『ループ』にでも嵌めてしまうのも悪くないかもしれませんね」

それまで所属してた教会が信じられない。デュランダルは消えた。行き場が完全に無くなった。

この三重苦に悩んだ結果——ハッキリと覚えているその原因に寄生するが為にイリナちゃんに付いて来た——というのがゼノヴィアって人の真相だった。

要するに食い物と家をデュランダル代わりに寄越せと言いたいのには解るけど、イリナちゃんとセンパイがかなり物騒な事を言ってるのが聞こえてないのかね。

いや、聞こえてないか……。

「う……グスツ……そもそも何だよお前らは……！ 反則みたいな力を平気な顔してつかいおつてからに……！ 私だつてデュランダル使えたんだぞ！ コカビエルとかバールパーだつて驚愕したんだぞ！」

それにも気付かず、過去の栄光を引きずるかの如く文句を言ってくるゼノヴィアつて人は、多分将来大物になりそう——とは別に思わなかった。

「ふーん、してたんだ……そりゃ凄いな。もう聖剣もデュランダルとやらも纏めて消えたけど」

「確かに天然のデュランダル使いは希少の中でも希少なのは分かるわね……もう全部消えちゃったけど」

「さぞ教会側の上層部からは重宝されてたのでしょうか……もう存在が消えていますけど」

覚えてる事には多少驚いたけど、別にだからと云つてそこまで困る訳でもないのだから、取り敢えず煽れるだけ煽つてやることに。

すると……。

「うわああああん!! わざわざ三人揃ってヘラヘラした顔で言うなあああ!!
びええええん!!」

遂に我慢の限界だったのか、子供を彷彿とさせる本気の泣きをしだすゼノヴィアって人。

あんまりにも煩いので、隣のクラスから何だ何だと人だかりが………というのは俺が居るので無く、空しく子供宜しく泣きじやくるゼノヴィアって人を俺とセンパイとイリナちゃんて眺めながらどうしようかと相談する。

「正直に言って良いですか?」

俺は嫌ですね、何でこの人の聖剣まで消したからって責任なんて取らなきゃならないのか、そんなもん知るかって感じっすもん」

「うんうん、イツセーくんは浮気しないタイプだからそうだよね! 私としては誠八くんに押し付けちゃえというのに一票!」

「紫藤さんに同意です。」

いつその事を皆で彼女の記憶を『壊して』『否定して』『二度と甦らないように悪循環』

させてしまった方が彼女も『幸せ』な人生を送れると思いますよ……私達には一切理解のできない幸せでしょうけど」

満場一致だった。

全く友達甲斐の無い発言を何故か嬉しそうにするイリナちゃんと、実に悪魔らしい発言のセンパイと……そして俺はグスグスしてるゼノヴィアって人へ揃って視線を向ける……ニヤニヤしながら。

「にゅ!? な、なんだその目は！ 私は屈しないぞ!？」

別に兵藤一誠の事なんて何とも思っていないからな!？」

「結構だよ。俺もキミの事なんて何とも思っていないもの……だから今から否定しても『俺は悪くない。』」

「残念だけどゼノヴィア。アナタこれまで良い『友達』で居られたけど、雌犬みたいな発言は許されないわ……だから今から壊しても『私は一切悪くない。』」

「悪魔の私に言われたくないでしょうが、貴女は私達と関わらなくて良いと思うのです。

なので今から二度と思ひ出さないように繰り返させても『私は全然悪くない。』」

センパイが眼鏡を外し、イリナちゃんがパキパキと両指の関節を鳴らし、俺は両手に何時ものアレを持ちながら、どっかの薄い本の女の子みたいな目付きで……されど涙目で俺達を睨むゼノヴィアって人に近付きながら、俺達は宣言した。

「リアリティーエステイプ」
「幻実逃否。」

あの日の夜の真実を記憶しているキミを『否定する』

「ハンドレッド・ブレンジャー」
「壊楽手義者。」

貴方の邪な思考を『破壊する』

「バッドエンド」
「悪循環。」

二度と記憶が甦らないよう、思い出した瞬間に忘却する様に『貴女を嵌める』
「な、なにをする！ や、やめっ——」

完全にさよならするための最終処置を施す為に、ゼノヴィアさんにスキルを使う俺達はマイナス三人組。

嫌嫌と逃げようとするゼノヴィアさんをイリナさんが足払いをして転ばせ、俺が彼女の着ていた衣服にのみ釘と杭を刺して動けないよう固定し、センパイがトドメ刺す。

うーんこれぞまさしく特撮ヒーローのお約束のごとし……悪役は——まあ、居ないけ

どそれっぽいのでそれで良いのさ……。

「らめええええつ!!!」

この人をどつかに放り込めればそれでね……。

とまあ、そんなこんなで彼女の持つ記憶を否定して壊して二度と甦らないようにループに落とそうとした俺達に、身の危険を大いに感じてか嫌嫌とマジ泣きしながら首を横に振ってるゼノヴィアさんの生身目掛けて持ってた釘と杭を投げつけてやろうと大きく振りかぶって――

「イヤだあ……ヒック……独りぼっちなんて嫌だよお……エグツ……」

振りかぶってえ――

「くすん……くすん……」

振りかぶって……え……。

.....

「ねえ」

あー……うん、ちよ、ちよつとタンマ、腕が痛いからタンマして同じように固まってるイリナちゃんとセンパイにちよつと言っておきたい事が……。

「……。何イツセーくん？」

「考えてる事は分かってますが、聞きましょう」

しくしく泣いてるゼノヴィアさんを取り敢えずそのままに、ついさつきから感じる変な気分について二人の意見を聞いてみたいと何となく思うというか——

「あの……此処まで来て物凄いいいづらいですけど……正直——ショージキね？」

さつきからメソメソしてるこの人見るとちよつとだけドキドキしてるんですよ」

「うん」

「はい」

あ、良かった怒られなかった——じゃなくてだね、今二人に暴露つた通り、この人がマジ泣きしてる辺りから、その様子を目にしていると物凄いワクワクしますと言いますか——引かれるかもしれないけど二人に相談しなきゃならないという意味不明な使命感に駆られるがままに俺はぶっちゃけてみた。

「その……この人が——いや女の子が、ガチ泣きしてる姿を見ると物凄いワクワクというかソワソワした気分——えっと、この前二人が見せてくれたダボダボ裸Yシャツ姿を見てドキドキしたあの気分になってる気がするんですけど、俺ってばもしかなくとも変態なのかな？」

「あー……大丈夫よイツセーくん、私も今そんな気分になってるから」
「ええ、皆一緒にみたいですし安心して思いますが……多分」

あ、ああそう。

釘と杭を刺したせいで、サラピンの制服が所々破け、目尻に涙溜めながらしくしくしてる女の子抱くこの気分が俺だけじゃなくて良かったけど……うーん。

「くすん……くすん……ふえ？」

「「……………」」

……。やばい、それ以上に緊急事態な展開になってしまった。

実はそんな性癖もありましたよりヤバイというか、さつきから妙なんだ。

俺もセンパイもイリナちゃんも……さつきからゼノヴィアって人に『危害を加えたくない』って気分させられてるというか、心が誘導されてる様な感覚がするんだよ。

こう……この前安心院さんから聞いた異常性って奴の中にあつた『人心支配』みたいな……そんな様な。

まさかとは思うが……。

「独りぼつちは嫌だあ……エグツ……」

まさか……な。

それは無いと思いたい……ていうかそんなホイホイ能力スキルホルダー保持者と出くわすなんて、そんな漫画みたいな話がある訳ないよね……いやあつて堪るか。

「んー……都合良く現れた『お兄ちゃん。』がこの光景を見て、眠くなる正義感と勝手な勘違いでこの人を連れて行ってしまえば楽なだけだな……こういう時ほど彼は出てこないから困る」

まあ、あんな後手後手の偽善英雄様に期待するだけ無駄なのは最初から分かりきつてるけどさ……。

「独りぼつちが嫌ならさ……ちよつとエロい格好とかして夜の繁華街でも彷徨けば良いと俺は思う。」

主に変態からモテて独りぼつちじゃなくなると思うよ？ ご飯代とかくれると思う

「ごはんたべられる……？」

「あ、いやごめん……今のはちよつとした嘘というか……」

……。その捨てられた猫みたいな目をする相手を間違えてると思うんだよ……俺は。

過負荷に浸る

どうしたものか。

どうしても攻撃しようという意思が削がれてしまう。

良い歳した人がピーピー泣いた所で滑稽だし同情もしないけど、何故かそのせいで彼女にサヨナラバイバイしようにも出来ない。

「うーん……」

「な、なんだよ……グスツ……」

「やっぱり見ると攻撃衝動が無くなっちゃうわね」

「ええ、不思議なもので」

それから幾度となくスキル使ってサヨナラバイバイしようとしたが、結果はその都度めそめそしだすゼノヴィア……だっけ？ 確かそんな名前の人のせいで意志がねじ曲げられてしまう。

今だってドタマに杭をぶっ刺してやろうと構えても、めそめそしながら此方見てるせ

いでやはりやる気的な何かが削がれてしまう。

これがもしも『分かっててやってる』なら警戒すべき事なんだけど、厄介な事に本人に自覚が無いんだから大したものである。

無意識に人の心理に入り込み、罪の意識が薄い子供の様に無自覚にねじ曲げる。

さしずめ無邪心クライコントロール……なんて言ったところか？ イリナちゃんの話だところのゼノヴィアって人は神器なんて持ってないし、デュランダルつてのも俺のせいで失つてつまなま身体能力が凄いの人らしいし。

多分、俺がああ夜近所迷惑そうだったからなんて理由で何もかも書き換えて『お兄ちゃん。』にその功績諸々全部を押し付けたという現実を、予想外にも彼女が覚えていたせいで、デュランダルを失った穴埋めと失意の気持ちで覚醒しちゃったスキル……かもしれない。

とはいえ、だからと言っても俺はこの人を迎え入れるのには抵抗がある。

まず第一に、俺はこの人を全然知らない。

第二に、頭に元が付くものの悪魔祓いだったイリナちゃんが腐つても悪魔の領地であるこの場所に何食わぬ顔で居る事自体、あのグレモリーさん連中は不審に思つてると思うし、それに加えて彼女とまでツルんでたら折角『お兄ちゃん。』に諸々の全部を押し付

けた意味がない。

そして第三に……これはソーナ——つまりセンパイ情報に依るお話なのだが、どうやら本日開催されてる『父兄参観』の際、そのどきどきに紛れて三大勢力のアタマが来て今後について会議をするとかしないとか。

そんな状況で元と勝手に自称してるイリナちゃんやこのゼノヴィアって人がこの地でその日暮らしてます……だとか、天界陣営のアタマの人に知られたら厄介な事になる……かもしれない。

現に今も俺のみ在籍のこのクラス以外は父兄でゴった返してるみたいだし、その中に前見た……誰だっけ？ 魔王ってが居るらしいし。

「父兄参観？」

「らしいね……」。

ま、俺を見に来る家族なんて居ないから関係ねーけど」

「え、お前には親が居ないのか？」

結局何をしようにも悪い流れになってしま……という運の悪さを考えると余計な事も出来ず、その時になったら何時も通り開き直ってしまえば良いや……みたいな考え

になつてしまつた俺は、だーれも来てくれない寂しい教室で、正式な生徒じゃないのに此処に居るイリナちゃんとゼノヴィアさんとでボソボソと時間が過ぎるのを待つていた。

ちなみにセンパイは俺なんかと違つてしつかりした生徒会長であり、生徒であるので今頃授業でもやつてると思う。

隣の教室で英語教師が紙粘土でどーたらこうたらと……お前それ英語と何の関係があるんだしと突つ込みたくなる授業をしてるのが壁越しに様子として聞こえるも、永久自習生徒扱いされてる俺や、生徒でも無いのに学園に居るイリナちゃんとゼノヴィアさんにはなーんの関係もないので、ただただお時間をむだくに過ごすだけ。

いや良いんだけどね？ まだこのクラスにちゃんと他のクラスメートが居たときの授業なんて俺を『気持ち悪いものを見る目』で誰もが見てくるし、酷いときは先がこれでもかと尖つた鉛筆で俺をダーツの的にでも見定めて投げまくってくるし、いやあ、あの時は生傷が絶えなかつたなあ。

「あつて無かつた様な親なら居るよ。

多分今隣のクラスで騒いでる『お兄ちゃん。』のクラスの様子を見てると思うし」

「あらー……予想はしてたけどやっぱり一誠くんもそうだったのね」

「つまり……お前の『その性格』を拒絶されてると?」

「まーねー」

ただ、別に俺としても構わねえと思ってるんだわ。

ほら、ヒーロー様々『お兄ちゃん。』と比べたら俺は絞りカス以下のどうしようもない奴だし」

両親の有無や、その両親からそういう扱いをされてきたせいで慣れきつてますと笑い話にして話す俺にイリナちゃんはなるほどと身に覚えでもあるのか納得しながら頷いている。

ゼノヴィアさんにしてもそう——では無さそうにさても察してるのかこれ以上突っ込まず、罰が悪そうに俯いてる。

両親については最初はショックで死にたいと思ったが、今じゃそうは思っていない。

俺を理解^{ワカ}ってくれてるセンパイとイリナちゃんが居るんだ、最近はもう家にも帰らなくなつたし、心配してる様子も顔を見せてこない時点で大体察してる。

最早あの人達にとつての俺は只の厄介者で、帰らなくなつた事で厄介払いが出来たと内心喜んでると思う。

それを考えれば、無能で何の結果も今まで残せなかつた俺による唯一の『親孝行』と

して去ってしまう方が互いに健全で間違いない。

まあ、残った唯一の『お兄ちゃん。』はこの先数千年も老けない悪魔になっちまってる訳で、多分そのせいで死に目に会えないかもだろうが俺の知ったことでは無い。

「まあ、そういった訳なんで俺に寄生してもロクな事ねーぜよゼノヴィアさん？」

だから傷が浅い内に教会に戻った方が良いんじゃない？」

「そうよゼノヴィア。

私は別に一誠くんとのたれ死にしても良いように後腐れなくこれまでの人生の全てを『壊して』無かったことにしたけど、アナタは違うでしょ？」

「い、嫌だ嫌だっ!!」

もう教会も何も信用できないし、戻ったら何をされるか……」

「チツ」

「し、舌打ちするなよお……うう……」

俺にはもう……両親との血の繋がりに以上の繋がりがあんだから……ね。

「ああもう、泣くのをやめろよな……色々と削がれちまうんだよ」

「ゼノヴィア。あんた此処に来てから随分と涙腺が緩くなってるわよ？」

「くすん……くすん……だって不安なんだもん。」

「まだお前から仲間外れにされてるし……」

俺にはもう必要がない。

薄気味悪がつてるのを我慢してまで一緒に居ても互いの為にもならないしな。

「これで良いんだよ……うん。」

「ハア……取り敢えず昼休み入ったから、何か食べ物調達してくるね。イリナちゃんは
その人頼むね？」

「はい……。あーあ、めんどくさい」

「グスン……お腹すいた……」

そんなこんなで4時間目が終わって父兄交えた昼休みとなったのをチャイムで確認した俺は、お腹を透かしてるだろうイリナちゃん……とついでにゼノヴィアさんの為に食堂から食べるものを買いに行こうと財布を持って教室を出る。

「わーお、賑やかですな」

案の定昼休みということと廊下には他クラスの生徒と父兄がごちゃごちゃしてて誠にうるさく、満足に歩けそうもないので。

取り敢えず――

「退のいて。」

誰に言うでも無く只その場でそれだけを小さく言ってみればあら不思議。

『う?!』

それまでわいわいしていた生徒や父兄の視線は一斉に俺へと向けられ、これまた予想通りすぎて鼻で笑ってしまうくらいに『何時も他人に向けられる嫌悪感丸出し表情』をしながらモーゼの十戒みたいに人の波が真つ二つに割れるではないか。

「なはは、人を化け物みたいな目で見ちゃってさあ……ま、退いてくれてありがとさんつ

と」

『……………』

皆が皆同じ様な表情を向けられるといっそ清々しくも感じてしまう中を悠々とした足取りで食堂目指して歩く。

まったく、廊下を塞いじや駄目だって昔から言われてるのに皆守ろうぜ？ それくらい基本だぜ。

「〜♪ む……………」

そんな訳で歩けば自動的に皆が道を開けてくれるという何とも親切設計な廊下を歩き、階段を下り、校舎から独立してる食堂に行くため中庭をフラフラと歩いていた俺はまたも人の波……………いや人だかりに邪魔されて足を強制的に止めてしまう。

よく見たら男子生徒だらけであり、何やら揃ってバカみたいに騒いでるのが聞こえるが、一体何に騒いでるのかは人が多過ぎてよく見えない。

「あの……………そんな真ん中で——」

「うおおおっ!! サイツコーだぜええ!!」

「……」

取り敢えず目の前で跳び跳ねてる人に声を掛けてもガン無視される。

ぬぬ……何があるんだか知らないけど、満足に食べ物も調達させてくれねえのかよと内心ちよつとムカつきつつ、今度はマジになって「退いて」と言ってみようとする口を開きかけた――

「退い――」

「ゴラアツ!! 人が通る道のだ真ん中で何をしてる!!」

その時だった。

折角元氣よく「退いて」と言ってみようとしたそのタイミングで、俺の音が簡単に掻き消されちまう怒声が後ろから聞こえたかと思いきや、ドスンと思いきり突き飛ばされて華麗に宙をちよつとだけ舞って地面に顔面からダイブしてしまった。

「うびゅ!?!」

受け身なんてどんくさい俺が取れる訳も無く、無様に地面と熱烈キツスをかました。しかも運の悪いことに顔面ダイブした地面は固い固いコンクリの……しかも年月が過ぎてちよつと盛り上がつてる箇所だった。

声こそ間抜けだが、ダイブした拍子に盛り上がった所に調度俺の左目が見事に入り、一瞬の激痛と共に左目の感覚が無くなった。

「おわつと!? って、生徒会かよ……てか匙かよおー!」

「んだよ、俺達は今撮影中なんだけどお!」

「るっせえぞボケ共!

道塞いでまでやってんじゃねえ! さつさと散らねえと校則違反で反省文書させるぞゴラー!」

「……………」

更に言えば、俺を突き飛ばした人……てか匙くんは人だかりの男子生徒を散らすために奮闘してる為、無意識に出てしまった悪魔の腕力で数メートル吹っ飛ばされてうつ伏せのままひっくり返ってる俺に本人も他のだーれも気づいてない。

いやあ……やっぱり聖剣の存在を否定した時は奇跡的な運の良さだったんだなあと、感覚がない左目と下へと伝う生ぬるい感触に変に笑えてしまう。

「アンタもこんな場所で——てか、親御さんですか？　あの、言葉は悪いですけど、親御さんなら相応の格好つてのがありますよね？」

やっぱり気付いてないのか、匙くんの呆れの入った声が聞こえる。

どうやらあの変な人だからの原因に注意をしてるようだが……。

「私にとってこれが相応の格好——つまり正装なんかもーん☆」

言われてる方の、なんか肩がガクツとなりそうな声の主さんはケタケタ笑いながら聞き入れようとしてない。

つて、俺は何で左目潰れてるのにうつ伏せのくの字体制でこんな実況じみたことを……。

と、そろそろ慰謝料請求して、その金で待つてるだろうイリナちゃん——とついでにゼノヴィアさんに少し豪勢なご飯を食べさせられると負け犬の癖に勝てる気で、盛り上

がつてる所に割って入ろうと起きようとしたのだが……。

「何事ですか匙……。まだ騒ぎは収まりませんか？」

「あ、か、会長……。いや、この親御さんが……」

ぶつちやけ毎日聞いても飽きない、俺にとつては道を示してくれたに等しい大好きな人の声に思わずくの字のまま固まってしまった。

本当なら『あ、センパイだー』とでも言つて起き上がれば良かったんだが、俺がこんな格好でひっくり返ってしまいました、しかも匙くんに突き飛ばされて——なんて知られたら匙くんが色々とヤバイかもしれないのだ。

こちらら折角20000円の示談金で無かったことにしようとしたのに、これじゃあ別意味での騒ぎに——

「あー！ ソーナちゃんみーっけ！」

なるだろ。だから騒ぎが少しだけ収まるまで寝たフリでもしちまえなんて思つてくの字のままだった俺だったが、騒ぎの原因であるっぽい女の人の声がセンパイを物凄く

気安く呼んでるのにちよつと固まってしまった。

いや、お前誰やねんという意味で。

「お姉様……ですか」

少なくとも俺の耳に入る騒ぎの原因の人の声に覚えは……無いようなあるような。

いやでも見たことは無い筈だぜと、そーっ消えた左目側の視界のせいで上手いことピントが合わない右目で様子を盗み見ようとする俺だったが、それよりも早くセンパイが無表情でキヤーキヤー言いながら抱き着いてきてる謎の女性の正体を普通に口にした。

「え、？」

その瞬間、匙くんの信じられませんか声が聞こえた。

「え……!？」

という……いつの間にか居たらしい『お兄ちゃん。』の声が聞こえた。

まあ、俺もその場に居たらってか人だかりのせいで今まで見えなくて気付かなかったが、よくよく思い出してみればどっかで聞いた声だったと今ハツとなる。

そう、アレは携帯を持ってなかった俺にセンパイからのプレゼント貰った携帯の立ち上げ画面に自己主張の塊みたいな姿でバトンみたいな棒をクルクル回してた女の子の……。

「うん、お姉ちゃんだよソーナちゃん……!」

って、あれれ? サプライズで来たのに随分とドライ……?」

つまりセンパイの姉さん……だったらしい、この騒動の原因は。

「うそおおつ!?!」

思わぬ衝撃事実に、魔王の姉がセンパイに居る事は知ってても生で見たことが無かったらしい匙くんがびっくりしてまっせーな声をあげてる。

うん、俺も前もって偶然に知らなければ引いてたかもしれないからよくわかるよそのリアクション。

「でもでも酷いよソーナちゃん！ 参観日があることを教えないなんてさ！ ショックの余り天界に喧嘩売りに行つちやう所だったよ〜」

わーいわーい……みたいなノリを醸し出すのが魔王ね。

意外と悪魔さんも平和なんだろうね……とセンパイに抱き付いて何やら物騒な事を言ってる……ええつと、名前知らない魔王様その2の姿はお世辞にも……キチツとはしてない格好だったみたいで、さつきまで男子生徒達の視線を独り占めするに足る……アレっぽい格好だった。

「来てるから良いじゃないですか。頼みもしてないのに」

センパイとまるで真逆なキャラ。

似てるといえば……まあ似てなくもない容姿なんで、類に漏れない整い方をしていると俺は思いながら初見で驚く匙くん達に紛れてちよつと離れから眺めると、されるがままに抱き付かれてたセンパイはただただ無表情で魔王様その2を軽く突き飛ばしたではないか。

「やめてください、此処は学校ですよお姉様」

「え……？ あ、な、なんかソーナちゃん反抗期？」

しかし現実の携帯画面の人もずいぶん軽いのね……あの時センパイが携帯を握り潰してまで隠そうとしたのがよくわかる様な対応に、魔王様その2は結構な困惑を見せていた。

多分、想定していたリアクションと全く違ったんだろう……顔に書いてある。

まあ、俺等で互いに色々と駄目になっちまったせいでセンパイも性格とか変わってないようでも変わってるからなあ。

多分暫く会ってなかっただろうし、余計驚くわな。

ほら今だってゾクゾクするような濁った目だもんセンパイだったら……なんてステキなんだ。

「反抗期？ 別に反抗じゃなくて思った事をそのままお姉様にこうしてお話しているだけですが」

「え、で、でもでも！ 前はちゃんと可愛い反応を……」

「ああ、してたようになしてなかったような。

兎に角今は参観日でお昼休みにこんな騒ぎを起こしたお姉様に駒王学園生徒会長として対応をさせて頂いてるだけですわ」

困惑しながらも何とか食い下がろうとする魔王様その2に、これまた淡々と言い返す
センパイ。

うーむ、今日のセンパイは何時にも増してCOOLであるね……などとそろそろ血糊が出来上がり始めてるくらい出血しながらぼーっと聞いてたら、センパイが『そんな事より——』と言いながら、魔王様その2……じゃなくて離れから盗み見てた俺を見て足早に近付いてくるではないか。

まるで最初から気付かれてたかのように……。

「……。一誠くん？ 最初から見えましたね？」

「ありや、やっぱりバレてました？ あははは」

やはりセンパイは誤魔化せないか。

俺が吹っ飛ばされて連中から離れた所で惨めに左目潰して小さく転がっててもセン

パイはちゃんと見てくれてる。

ああ、なーんかやっぱ嬉しいもんだねえと土まみれと血まみれ……そして右側しか見えない状態で此方に駆け寄るセンパイに、思わず笑いながら顔を上げて見せてしまう。

あ、しまった、思わずそのまま顔を上げただけで幻^{リアリティーエスケープ}実逃否で受けたダメージから逃げるのを忘れた……右半分しかセンパイが見えねえし、センパイも流石に左目^がエグい事には気付いてなかったのか、一瞬にして狼狽えながら駆け寄ってきた。

「一誠くん、左目が……!」

既に制服まで血塗れで汚ならしくなったのに、センパイは全く気にせず俺の左目にソツと手で触れる。

その表情で直ぐに『あ、マズイ』と思ったので即座に笑い話に持ち込もうとヘラヘラと笑って話す。

「これ? いやー……何処かの誰かさんに突き飛ばされた時に派手に転びましてねえ。

ちようどこの盛り上がったコンクリートに左目ちやんがブスツとね……」

「……。誰に突き飛ばされたのですか……?」

「さあ、後ろからだつたんでよくは……」

センパイも俺がまさか左目を潰してしまつてるとは思つてなかつたのか、痛々しそうな表情で肩を貸してくれ、それに甘える形でフラフラと突き飛ばされただけでガタガタになつた身体を立たせる。

匙くんがやつたとは流石に言えないので、そこは臨機応変に誤魔化すが……これも何時まで通用するかはわからないかもしれない。

主にセンパイによって、漸く俺の存在と悲惨ともいえる大怪我の様子を見てどよめく中、完全に死人みたいな顔でガタガタ震えてる匙くんがエラく目立つちやつてるんで。

「な、ひよ、兵藤!? お、お前何時から……!」

言つたらぶつ殺される……と勝手に思つてるのか、震えながら俺に何時から居たと問う匙くんがちよつと可哀想に思えてきた気がしたので、取り敢えず何時も通りふざけて笑いながら、緊張だけは解してあげようと努めてみようと思う。

「いたよ、さつきからずっとね……。食堂に行く為、近道しようと中庭通つてたらばか騒

ぎする男子生徒のせいで進めずに居た所を……まあ、色々とあつてこの様になつちまつてさ」

「うっ……!?!」

大丈夫、大丈夫だつて匙くん。

俺はキミのせいだとか絶対に言わないさ、だからそんな露骨にガタガタしないでよ。バレちゃうぜ？

「ひ、左目が完全に潰れてるよね？　だ、大丈夫？」

割りと追い込まれると脆いことが今分かった匙くんは、内心もう少し頑張つてよなんて思いながらセンパイに身体を預けると、一気に蚊帳の外に追い出されてた携帯画面の人が……だから魔王様その2が、やつぱり直接見てもアレとしか思えない不埒な格好で超心配そうに大丈夫かと聞いてくるので、取り敢えず別に親しくないこの人に匙くん身代わりになって貰おうかなと大丈夫ですよとヘラヘラ笑いながら口を開く。

「ええ、見ての通り全然大丈夫ですよ。」

左目が二度と使い物にならなくなっちまったのは、中庭で男子達の視線に晒されて悦に入っただどつかの誰かさんのせいじゃなくて、俺がわざわざ近道なんてしなければ良かっただけですからね……。だから『誰も悪くない。』」

よーし完璧！ 匙くんもこれで悪くないし、魔王様その2もそんなに悪くない感じに持っていていた！

「う……!?!」

だと言うのに、何故か魔王様その2は叱られた子犬みたいな顔で俺を見てくるではないか……。何で？

悪くない。って言ったのになあ……。って、あら？ お兄ちゃんが魔王様その2の前に立って俺を睨んでらあ。

これも何で？

「お、おい！ お前誰に向かって……」

……。ああ、そゆことか。

魔王様その2に気安い態度だったのが『お兄ちゃん。』的に許せないと……。

ふむ……。

「あれ、いたんだね『お兄ちゃん?』 全然気付かなかつたし、急に出て来て何を言うてるのか俺にはわからないよ。」

ああそつか、もうアンタも悪魔だもんな……。

ひ弱な人間ごときが突き飛ばされた程度で失明したのは、俺が弱いからであつてその魔王様関係ないもんね?

うんうん、大丈夫大丈夫……俺もそれは同意するから心配しなさんな」

「くっ……い！ ならなんでヘラヘラと……い！」

取り敢えず言いたいことだけ言っておくと、痛いのが我慢してこれでもかとヘラヘラしながらぶちまければ、誰も彼もが顔をこれでもかと歪ませてる。

おかしいよね、誰も悪くないといってるのに潰されそうな顔してるなんて、意外と皆優しいんだね。

そんな俺の、ちよつとだけ他人の暖かさにプチ感動する横で肩を貸してくれたセンパ

イは、ただただ無表情で淡々とした態度のまままず捨てられた子犬さんこと魔王様その2に、責めるでもなく味方するでもない……

ただただ『真つ直ぐな視線』を向けて話始めた。

「お姉様、アナタが何処で何してようが私は否定しません。

ですが、その騒ぎのせいで私の大好きな人が『こうなる』のは許せない……」

「い、いや……え、好きい!？」

俺もそうだが、まさかこんな人の多いところで好きだと言ったセンパイに魔王様その2は心の底から仰天した表情だ。

「なんででしょうか？ 私が誰かを好きになって悪いんですか？」

「そ、それは……で、でもその子……」

全くブレない態度のままのセンパイに完全に圧されてる魔王様その2は、物凄い複雑そうに俺を見る。

その目からして『いやキミがソーナちゃん？ い、いやいやいや……キミが!？』とで

も言いたそうな様子であり、多分センパイがこんな態度じゃなかったら言ってたろうなと内心笑ってしまふ。

しかしセンパイもそんな魔王様その2の視線を察したのか、今より更に低い声で……そしてスツと見透かすような目で魔王様その2を見据えてこう啖呵した。

「彼を好きになつて何が悪いんですか？ 人間だからでしょうか？ あなた様から見たら話ならない弱さだから？」

ハツ……何だかんだでお姉様も悪魔らしいようで」

まあ、弱さは俺のチャームポイントみたいなもんだけど、悪魔からすればカスと同類なんだろうなあ……ああ

センパイ以外は。

「無駄話は終わりです、私は彼を全力で治療しなければなりませんので。」

匙……彼の事は後でお話するにして、今は此処の後片付けを頼みましたよ」

「っ!?! は、はいっ!?!」

此処まで言われるとは思ってなかったのか、物凄いシヨック受けた顔で固まる魔王様その2とのお話を打ちきり、やっぱりバレちゃった匙くんに指示を飛ばし、センパイにリードされながらその場を後にしようと思われ、彼等に背を向けてゆっくりと歩く。死人みたいな顔で震えてる姿に、ごめんよ匙くん……と謝りながら。

「ま、待ってソーナちゃん！ わ、私そんなつもりは……！」

「分かってます、ちよつと皮肉っただけです。」

お姉様はそういうのがお好きで、つい舞い上がってしまった……ただそれだけですものね？ だからお姉様は『悪くありません。』

「うっ……!？」

魔王様その2も慌ててセンパイを呼び止めようとするも、オレタチ過負荷らしいトドメをセンパイに刺されてしまいそれまで。

うーむ、俺のせいで姉妹仲に変な亀裂が入ってしまったみたいだな……。

「大丈夫ですか一誠くん？ ゆっくり歩きましょう」

「あ、あのー俺は良いんでイリナちゃんといいでゼノヴィアさんにご飯を……」

「後で私から用意します。寧ろその姿を紫藤さんに見られてごらん下さい……ここら一带全てがミジンコすら住めなくなる世紀末な事になりますよ」

「うーっす……」。

それにしても随分と言い切りましたねえ。

俺は単純に一言言いたかったから、わざとこのまんまで居たのに……」

背中に感じる何とも言えない視線を感じながら、センパイに肩を借りてフラフラと人の居ない場所を目指した歩く中、既に『痛くも潰れてもない左目』でちよつと笑ってるセンパイと話す。

誰にも邪魔されず……ただ楽しく。

「つーか、最近家を探してるんですよ。」

あの家もそろそろマジで居づらいんで」

「ああ、それなら私の家に来てくださいよ。」

家賃も掛からないし、毎日一誠くんのお好きな姿でご奉仕しますよ？」

「おおう、夢がありまくだねえ……てか、センパイとこうしていると良い匂いして眠くならあ」

「ふふ……それならこの後好きにだけ膝枕してあげますね？」

「わーい」

そして、怪我の話なぞすぐに終わり、さっきの事も刹那で忘れてただ楽しい会話をする。

だってホラ、嫌なことは直ぐに切り替える主義なんだよね、俺もセンパイもイリナちゃんも。

それでも俺は『ブレません。』by一誠

三大勢力首脳会つてのがあるんだってさ、知らんけど。

よく分かんないけど、やっぱりあのコカビエルつてのと聖剣騒動は色々アレだったのと定期的にそんなやり取りをやるらしいんだね。知らんけど。

「取り敢えず眼帯を付けて、怪我人ですと主張しておきましょう」
「おお、ちよつと中二病っぽいくて良いっすね」

結論を言つてしまえば、そんなもん俺には関係が無いのだ。

センパイと親しくしてるからって理由である程度連中の事を把握してるとはいえ、突き詰めても俺は劣化人間なのだ。

聖剣の存在を否定して消したって現実も、知ってるのは極少数だろうし？ イザ何か言われても知らんで突き通すつもりさ。

だって、どうであれ今の現実には『お兄ちゃん達とコカビエルとの戦闘により、ちよつとした想定外な事故で聖剣や聖剣にまつわるものが消滅した』って事にしておいたも

の。

一介の人間の俺が何かしたなんて……ふふ、このスキルの存在、もしくは能力保持者の存在を知ってる人しか分かりやしないからくりさ。

……。前にレーティング・ゲームとやらの時に顔を合わせた、サーゼクス・ルシファーって魔王はちと警戒しないといけませんが、それもイザとなれば安心院さんの話でもチカつかせて誤魔化せば良い。

それよりも気になるのは、俺がセンパイの姉の人に何を思われてるかである。

物凄くよく考えたら、センパイって普通に純血悪魔の名家なお嬢様だし、今まではそんな関係ですと周りに知られても、別にどうとも言われんかった訳だが、センパイの実家の人達が俺ごとき人間——しかも最低マイナスとよろしくやってまーすとあの魔王様その2を通して知られた今、そこら辺のゴタゴタがあるような気がしてならないぜ。

「これで良し。ふふ、あんまり似合いませんね一誠くんの眼帯姿は」

「ん、そつすか？」

「ええ、やっぱり『一誠くんらしい』目が二つ揃ってないと」

眼球破裂で左目が失明したという現実を否定し、何のダメージも受けてませんな幻想

に逃げたお陰で、痛みも失明もしてないことになった。

しかし、あんだだけ大々的に『僕失明しました』と見せてしまったって手前、まさか『ご覧の通り復活しました』とは言えないので、取り敢えず眼帯でもして怪我人を装う事にしたのは、どうでも良いとして、さっきセンパイがああ魔王様その2にエライ啖呵を切ってしまつて大丈夫なのか……それだけが気掛かりなのだ。

「センパイは、あの魔王様その2の人と大丈夫なんですか？」

「へ？ 何がです？」

「いやホラ、俺って結局は人間の……しかもその中で更に欠陥品だし……」

そんな人間とよろしくやってみましたなんて知られたら、あの魔王様その2とかセンパイの両親が怒るんさじやないかな……なんて今更ながら思い出したもんで」

こんな事言つたからつてセンパイから離れる気なんて更々無いが、やはり気にはなつてしまう。

俺には後ろ楯なんてなーんも無いし、どれだけ疎んじられようともう何にも思わなくなつた。

だからなんだろうね、俺は多分物凄く怖がつてる。

センパイが何処かへ行つてしまふことに。

センパイと二度とお話が出来なくなつてしまふ事に。

考えただけでゾツとする。考えただけで、そんな世界を『否定』したくなる。

いくら駄目マヤスになろうとも、いくら自分が変わつてしまおうと、俺は断言してセンパイを失つたら全てを否定してしまふ。

……。うっかり『この世界を否定し、何も無いもない無へと書き換えて逃げてしまふ』くらいに。

「……。何度目かな、そんな事を一誠くんが言つてくるのは」

『お兄ちゃん。』をどうとも思わなくなった。

恨めしいとも思わなくなった。

なんでもかんでも出来て、誰からも愛される事を羨ましいと思わなくなった。

「不安になる度……。かな。鬱陶しくて申し訳ないっす」

理不尽と虐待を受け入れた。

偽善と偽悪を受け入れた。

墮落と無気力を受け入れた。

巻き込まれと二次災害を受け入れた。

風評と冤罪を受け入れた。

裏切りと虐待を……格差も不条理も不幸も不都合のなにもかも受け入れた。

「確かに、姉のリアクションと初対面のタイミングの悪さで何か言っては来るでしょう。前にリアスが何処かの純血悪魔と婚約させられた時の様に、私にも似たような話があるかもしれない」

「……………」

だが、それでも受け入れられないものがある。

失いたくないと思うものがある。

中途半端な過負荷^{マイナス}となっても、センパイだけは失いたくないという、マイナスとしては致命的な物が残ってしまったとしても、俺はそれでも構わない。

俺にとって『生きる』というのは、センパイが居てこそなのだから仕方無い……『俺は悪くない。』

薄く笑みを見せながら眼鏡を外し、俺にとって不安がメチャクチャ助長される事を平然と話すせいで、余計不安になり、しようもない表情を出して二人きりの生徒会室の椅子に座ってる俺の頬に手を添えたセンパイと目が合う。

「そうだったらそうだったで、全力で『逃げて』しまえば良い話です。違いますか？」

センパイの何処までもマイナスで綺麗な目に吸い込まれそうになる感覚を覚えながら、言って欲しかったその一言に俺は何処までも安心してしまう。

そう……逃げる。

俺からセンパイを奪うのであれば、センパイを連れて逃げてしまう。

簡単に俺らしいやり方……。

例え姉で魔王だろうが実の親だろうが捕まえられない……最高峰の逃走経路が俺にはある。

頬に伝わるセンパイの手と言葉と表情が、単に不安だった俺を更に駄目にしていく……。

「うん……そうだね。逃げれば良いよね。」

センパイも友達もみんな纏めて連れて、誰も捕まえられない場所に逃げてしまえば良いもんね」

ああ……気分が最悪に良いなあ。

心が落ち着くなあ……。

センパイを見てると……周りがどう思っただろうかどうでもよくなる……。

「そうよ……だから私は何処にも行かない。

何時だってアナタの傍よ……一誠」

優しく、何処までも優しい微笑み^{マイナス}を見せるセンパイの——俺の頬に添えられてたその手を握り、反対の腕をセンパイの腰に回す。

「……。あ、イリナちゃん——とついでにゼノヴィアさんのご飯……」

何となくそんな気分になったから、こんな風にセンパイを抱き寄せてみた俺だったが、ふと此処で本来の目的だった二人のご飯調達について思い出し、抱き寄せてたまま

の状態はどうしようと考える。

考えてみればあの魔王様その2だのその余波による怪我も元々なんの関係も無い話だった筈なのに、左目筈潰れるはセンパイの姉さんの俺に対するリアクションで不安になるわですっかり忘れてしまった。

きつとイリナちゃん——とついでにゼノヴィアさんもお腹空かせて待つてる筈だし、うん、早いとこ食料を調達にしない行かないとね……食堂じゃなくコンビニか何かで——

「……。今すぐじゃなくてもあの二人は死にはしません。それより、こうしてるのに他の女性の事は考えないで……？」

「え……あ、はい……」

変なタイミングで思い出した俺に、センパイがむっとなってコツンと額を軽くぶつけてくる。

最近はそんな表立って喧嘩してなかったからこれも忘れてたけど、そういやイリナちゃんとセンパイの決着って俺がゴチャゴチャにしたせいで曖昧なまんまなんだよね……なんてセンパイと額をくつつけたまま見つめあってボンヤリ考えてると、センパイと唇が重なる。

「ん……」

「今は紫藤さんは居ませんよ……私と一誠くんだけです。」

「だから私とこうしてるのに彼女の事は考えちゃ嫌です……」

座ってる俺の膝にセンパイが乗り、そのまま唇を重ね合う。

……。まあ、こんな体制になった時点でお察しだった訳でありまして、俺もそうなたらいいなーみたいなの考えもあつたし、何よりセンパイのキスつてめっちゃめっちゃ良いんだよね……。こう、ポヤーツと出来るから。

「んんっ……。何度こうしても、私の胸ドキドキしてるでしょう?」

その上、最近は何に進んでる感じなものでありまして、頬を染めながら微笑むセンパイが俺の手を取ってその胸に当てて心音を感じさせてくる。

「ホントだ……」

「……。紫藤さんみたいに大きくは無いですけどね」

「いやいや、大きいとか俺は拘り無いですよ。それに無いって訳じゃないしセンパイって」

トクン……トクン……と早鐘する心音を胸越しに感じ、妙に自虐してるセンパイを妙に『可愛いなあ』なんて思いながら、腕を腰と背中にして小さいとは思ってないし物足りないなんてのも思わない胸に顔を埋める。

なんだか、こうするのが俺的に一番好きで安心するんだよね。

「ん……やっぱりセンパイにこうするのが一番ですよ。」

実家に居るより遥かに安心する……」

「ん……ふふ……擦ったいですー誠くん……♪」

……
こう、センパイの心音とか胸とか？　大きいと絶対こんな気分になんないというか

……
小さく嬌声を出しながら身を振るセンパイは、多少コンプレックスを持つてるっぽいけど、俺はこのままが良い……この胸も、ちよつと視線を上げれば見える綺麗な首筋も……。

「やあ……っん……や、やだ一誠くん……。此処学校なのに、こんな甘えん坊さんになるなんて……」

「いや……すいません。なんと無くで」

「もう……誰かが来たら恥ずかしいのに。」

けど……ふふ、一誠くんからこうして来られると、やっぱり嬉しい」

あーあ、これだからやっぱりセンパイは失いたくないんだ。
優しいし、俺と『同じ』だし、何より理解^{ワカ}ってくれてるし。

「紫藤さんとゼノヴィアさんには悪いけど……ふふ、此処からはセンパイ呼びじゃなく……ね？」

「うん……わかったソーナ」

何より一緒に駄目^{マイナス}になれる。

イリナちゃんも同じだし一緒に駄目になれるけど、それ以上にこの人は『好き』だつて感情にもなれる。

「生徒会長な私がこんなことを……ふふ、そろそろ眷属達にも『見限られ』てもおかしくないかもしれないわね。

でも……それでも止めれないわ、大好きよ一誠……」

「ん……うん……俺も、絶対に離したくない……」

微笑むセンパイ——いや、ソーナに言われるがままに頷く俺は、さつきまでの不安も全部消えて、ただただその繋がりを確かめる様に互いを求めていくのだった。

まあ、大人じゃないからそれ以上の事はしませんけどね。

サーゼクス・ルシファー

冥界四大魔王として名を馳せる彼は、実のところ魔王という地位なんぞに興味は無かった。

単純に『彼女』に認められたくて超越者とすら恐れられてる己の力を限界以上まで研ぎ澄ませてたら、気づけば自分より力を持つ悪魔が居なかった……ただそれだけの理由で魔王をやっていたのだ。

まあ、他にすることも無かったし、『彼女』は全然会ってくれないしで今もこうして魔王をやっているのだが、此処最近のサーゼクスは『やっと訪れたチャンス』に狂喜しながらも慎重になっていた。

「ふーん、ソーナさんとリアスの兵士の弟がね……」

「う、うんそうなの……」

彼女……安心院なじみの持つ力の半分側を持つ少年であり、最も彼女と会える頻度が高い人間……兵藤一誠。

妹のリアスの非公式レーティング・ゲームの際に出会った時から、サーゼクスは彼をマークしており、当然シトリー家の娘と『そういう仲』なのも初見で察した。

故にサーゼクスはそれをチャンスだと思い、寧ろ一誠と平行して過負荷^{マイナス}として覚醒したソーナにかよくぞ彼を射止めてくれたと感謝すらしていた。

もしもソーナとの仲を反対する輩が出てくれば、魔王権限で封殺し恩を売る。

そうなればサーゼクスの元に安心院なじみを引き連れて一誠がやって来る時が来ると確信出来ると……サーゼクスは一誠本人の知らないところで色々と根回しをしていたのだ。

が、そんなサーゼクスは今日妹の授業参観に来る名目と三会談で人間界にやって来た訳だが、ただ今彼は同じ四大魔王として名を馳せている……ソーナの姉であるセラフォル・レヴィアタンから話を聞かされていた。

主にそのソーナと一誠の関係について。

「ソーナちゃんが私を嫌っちゃった様な気がして……」

「嫌う？ 何でさ？」

「その……一誠って子が大怪我した原因が私にもあるって理由で……」

ノリが軽く、何処までもはっちゃけたキャラの筈のセラフォルが物凄い落ち込んで、中庭での騒ぎについて話すのを、サーゼクスは聞いてはいるものの内心辟易していた。

彼女が如何にソーナを大事に思ってるのかはよく知ってるし、そのソーナからかなりの事を言われたのは想像しやすいが……そんなもの自己責任じゃねーか……そんな心境だった。

「どうしよ……あんなに怒ったソーナちゃん見るのはじめてで……」

「あのさ、セラフオールはソーナさんがイツセーくんと『そういう仲』になのに反対な訳？ それによって言う事も此方としても変わるからさあ」

まあ、仮に反対だとしても僕は何が何でも安心院さんに撫で撫でされながら膝枕して貰うためにくつついて貰うけどね……と内心ほくそ笑みつつ、妻子持ちにあるまじき考えを展開するサーゼクスの考えを知りもしないセラフオールは、ゆつくりと首を横に振る。

「反対だなんてしないけど……彼つて転生悪魔じゃなくて人間でしよう？ 仮に一緒になってもソーナちゃんと一緒に居れる時間が余りにも……」

「ふうん、じゃあ反対なんだ？ ウチの所みたいに勝手に純血悪魔の婚約者でも宛がうのかい？」

「そんなことしないし、させないもん！ 私が言いたいのは、あの一誠つて子とは寿命の差が大きすぎるって言いたいもの！」

嫌に冷たく言い放つサーゼクスにムキになって言い返すセラフオール

自分のせいで脆い人間の……それも一生治らない傷を作らせた罪悪感もあるし、『何

となく悪魔っぽい気質より更にアレっぽい』気質も好みといえば好みだし、何よりソーナが自分の意思で見付けた想い人だ。

出来ればソーナの意思を尊重はしたい……したいが、どうせなら何でソーナの下僕になつて寿命問題をクリアしなかつたのか……それが気掛かりで心配だったのだ。

そんな姉としての心配を他所に、同じ妹を持つ身であるサーゼクスはといえば変にあつげらんとしており、悩みに悩むセラフオールに向かつて軽く笑みを見せながら口を開く。

「寿命問題をソーナさんがそのままにするとは思えないし……ふつ、あのイツセーくんを只の人間と甘く見すぎだよセラフオール」

君達は知らないだろうけど……あんまり彼を刺激しない方が良いと思うな僕は——
下手したら『全部を失うハメ』になるだろうし」

「は？ それって——」

どういうこと？ と、昔から変に達観というか、自分の種族の未来について割りとうでも良さそうにしてるサーゼクスの言葉の意味が分からず、セラフオールはよつこらせと席を立つサーゼクスを見つめる。

「不安なら彼と腹を割って話せば良いし、多分大怪我も『治ってる』と思うし、本人達はキミを恨んで無いと思う。」

まあ、キミが二人の仲を反対して引き裂こうとする考えだったらアレだけど、そうじゃないみたいだし？ 時間を無駄にして更に顔を合わせづらくなる前にケリを着けるべきだと思うぜ？ 案外上手いこと言って安心したってオチで終われるかもしれないし。(安心院さんだけに)」

「う……でもソーナちゃんが……」

「それはキミ等姉妹の問題だからなあ。僕やイツセーくんがどうこう言える問題じゃないね」

「サーゼクスちゃんまで冷たい……」

結局、自分で撒いた種は自分で処理しろと突き放されたセラフオールはうう……と恨めしそうにサーゼクスを睨むが、サーゼクスは涼しい表情だ。

「冷たいんじゃない、余計な心配事増やしてこれから始まる会談に支障をきたされても面倒なだけさ……」。特にアザゼルの顔見たら殴りたくなるのを我慢しなくちゃな

らないし」

「あ、相変わらずアザゼルちゃん嫌いなねサーゼクスちゃんは……うう、わかったよ……ちゃんと謝るよ二人に」

三大勢力戦争の時代からアザゼルをほぼ一方的に何故か敵視していたサーゼクスを知るセラフォルは、戦争が終わって和平交渉の時代となってる今でも無駄に嫌ってるね……と苦笑いしつつ二人にちゃんとケジメを付けに行く決心を固めたみたいで、ちよつと不安ながらも、持つていたステツキをギュツと握り締めながら立ち上がり、サーゼクスよりも早く無人の教室を飛び出す。

「……。まあ、やり辛いどころか、『心をへし折られかねない』レベルまで二人は——いや、紫藤イリナさん含めて過負荷マイナスだからなあ。

セラフォルの性格キャラ的にはキツいだろうけど、精々頑張つて二人のご機嫌を取つてくれ……僕が安心院さんに膝枕と撫で撫でと、踏み踏みされる為……クツクツクツ……！」

一人残るサーゼクスが黒い笑みを浮かべてる事に気付かずにセラフオルーはシスコ
ン故にソーナとの仲直りの為にひた走る。

それが吉なのか凶なのかは……まだ誰にもわからない。

センパイとお姉さん

怪我の功名って奴でセンパイとわいわい出来た俺だけど、イリナちゃんとゼノヴィアさんのご飯の事をすっかり忘れてたせいで、教室に戻ったらお腹を空かせていた二人に若干怒られてしまった。

「もう、お腹空いてたのにこの雌犬がイツセーくんに余計な真似をしたせいで……ぐぬぬぬ！」

「余計？ 怪我をした一誠くんの心を癒せたのが余計とは私自身全く思いませんが？」

「ま、まあまあ二人とも……」

「菓子パンおいしい……」

遅くなった理由がセンパイにあると察しの良いイリナちゃんは見抜き、恨めしそうに睨むのをセンパイは涼しい顔してスルーしていると、何と無く罪悪感みないなそれを感じながら弱気に止める横でゼノヴィアさんがチビチビと買ってきたメロンパンを食べる。

ゼノヴィアさんは置いとくにしても、俺にとって唯一交遊関係が強いセンパイとイリナちゃんやが喧嘩してるのは嫌だというか……俺のせいなのかもしれないけど、して欲しくは無いので一応止めには入る。

「とういか、アンタの姉と部下のせいでイツセーくんが怪我したのに……」

「それは申し訳ないと思つてます。ただ、一誠くんが『別に良い』と言つてる以上、波風たてずに居た方がと」

「うん、単に左目が抉れただけだし、その程度なら『否定して逃げられる』から問題ないのさ」

「む……一誠くんがそう言うなら……」

ハリボテでしている左目の眼帯に手を添えながら、不満そうにするイリナちゃんに言う。

死んでも尚その現実を否定して逃げる事が出来る性質になつてしまつたし、今更怪我程度でギヤーギヤーと喚くつもりも無い。

魔王様その2はセンパイのおねーさんだし、匙くんはセンパイの眷属だもの……：そら許すよ。将来的にそつちの方が良いし。

「それにこの怪我のお陰でセンパイに撫で撫でして貰えたしね！」

「ふふ、先程の一誠くんは甘えん坊さんでした……」

「あーっ!! やっぱりそういう事してたんだ!　ズルい!　私とはそういうことしてくれないのにー!」

「クリームパンがおいしい……」

セラフオルーはソーナの姉だ。

そのキャラと趣味のせいで、若干引かれてる部分はあったものの、決して仲が悪いわけでは無かった。

寧ろセラフオルーからすれば、妹のソーナは何よりも大切で、可愛さのあまり目に入れてグリグリしたって痛くないと言える程だった。

けれど、久しぶりに見た妹の姿は、前回会った時とあまりにも違いすぎていた。

上手く説明できないが、こう……駄目になつていてというか、コカビエルを倒して一躍ヒーローとなったリアス眷属の兵士の少年の双子の弟という、セラフオルーにとって

は正直どうでも良い人間とソーナがあんなにも仲良くしていた事に軽くショックだった。

更にいえば、自分の落ち度でその人間の少年の目が潰れ、その事について本人はおろかソーナにですら『アナタは悪くない。』と言われた時は、言い知れぬ不安を煽られてしまった。

「こゝ、此処に居るんだよね？ 確か……」

責めることもせず、ただ揃って『悪くない。』と言われたのに感じる不安。

それが今のセラフォルの心を覆い尽くし、何かを知っているだろうサーゼクスからは『そんなに気になるなら一言謝罪したら？』と他人事の様に見えるがまさに、一誠とソーナが居ると聞いた『ほぼ誰もない教室』の前までやって来て、中から聞こえるソーナと先程の一誠と呼ばれた少年……そして二人ほどの少女らしき声を盗み聞きするかの如くドアに耳を当てて探ってみる。

『そんなこんなで、近々家を出ようと思うんだよ』

『え、そうなの？』

『うん、最近は『お兄ちゃん。』のお友達が毎日のように来てさあ。独りで人生ゲームするにと喧しくて』

『そんな訳で、近々一誠くんを私が住んでる部屋に連れていこうかと……』

『はあ!? いやふざけんなこの雌犬！ 次々と抜け駆けばかりして!』

『……。最近、暖かい布団で寝てない……』

「す、住む？ ソ、ソーナちゃんがああの子と？」

耳を当て、気配を極限まで押し殺して聞く一誠達の会話の内容にセラフオールは愕然……とまではいかないけど驚いた。

予想していたとはいえ、余りにも知らない間に妹が人間の男の子との仲を深めすぎた事に。

そして平然と受け入れているソーナ自身に。

「駒で転生してる訳じゃないのに、人間なんて直ぐ年老いちやうのに……」

ソーナが決めた事に今更姉面して反対するつもりは無かったが、種族としての寿命と

老化の差が大きすぎる者同士の恋愛については、どちらかといえれば反対だった。

それは確実に先立つ一誠に取り残されたソーナを思えば当然の事なのだが、セラフオルーは知らないのだ。

『ふむ、何なら貴女達にも部屋を提供して差し上げましょうか？ 正直独りで住むには

前々から広すぎる部屋でしたし、教会から脱退して寝床が無いなんて一誠くんの『お友達』である以上、放つてはおけませんし』

『む……………！』

『え、暖かい布団で寝れるのか？』

『あー……………良いんじゃないやねそれ？ ちよつと俺の肩身が狭くなりそうで緊張しちゃうかもだけど。へへ……………』

一誠の持つ性質から覚醒した能力マイナスがある事を。

そしてその力が、ソーナと過ごした時間に比例して、更に手の付けられないものにマイナス成長している事を……………そしてその力があれば生も死も老化も寿命も思うがままな事を……………。

「!?」

そうとは知らないセラフォルからすれば、ドアの向こうでの会話は色々アレな会話にしか聞こえない。

ソーナの住んでる部屋に一誠が……更には例の事件のせいで神が不在だという事実を知って教会から脱退した二人の元悪魔祓いまでもが住むという話にセラフォルは強烈な危機感を覚えた。

何せ元とはいえ悪魔祓いが二人もだ……何かの拍子で喧嘩になって滅されましただなんて笑い話にもならない。

「ソ、ソーナちゃんから出した提案だけど、それは無謀すぎるよ……」

スキルホルダー
能力保持者という共通点を知らず、只の人間と悪魔祓い二人と決めつけてるセラフォルからすればゾツとしない話に、今にもドアを蹴り破って登場し、ちよつと変わってしまったソーナに駄目だと反対したい衝動に駆られた。

しかし、誰かが止めないと既に扉の向こう側での4人の会話はソーナの住んでる家に住み着くという話で終わりそうになっている。

「う……………く……………！」

家族の賛成反対の話すら無いのに、年頃の男の子一人に女の子3人なんて、何も無い訳がない。

そうでなくても一誠という少年は人間なのに人間とは違うナニか得体の知れないものがあると、長年の魔王少女的勘が働いていたセラフオールは――

「ス、ストップ!!」

心の準備も後回しに扉を勢い良く開け放ち、4人しか居ない教室の真ん中で菓子パンを頬張っていたソーナ、イリナ、ゼノヴィア……。

「あ、さっきの魔王様その2」

そして一誠のもとへ突撃を囓まし、自分の登場に若干ポカンとしてるその瞳に、早速戦意的な何かが削がれた気分になってしまう。

「うっ……」

「お姉様？ 今度は何の用ですか？」

「え、この人がアンタのお姉さんで魔王なの？」

「……。なんか、色々とイメージが壊れた気がする」

「俺は前に携帯画面で見たからね……若干の免疫はあるぜ」

自分の姿を見て胡散臭そうな表情をするツインテールの女の子と青髪に緑のメツシユが入ってる少女と、眼帯をした少年……そして妹のソーナから一斉に浴びる視線と、その『初めて感じる形容しがたい雰囲気』にセラフォルは尻込みしてしまったのだ。

特にツインテールの少女——つまりイリナと一誠とソーナは殆ど同じ雰囲気を感じ、その瞳も濁ったそれに見えなくもなかった。

「まさか律儀に一誠くんが気になりましたか？ それならこの通り、治療がギリギリ間に合って失明という事態は免れましたよ」

「あ、そ、そう……なんだ……」

もぐもぐとコッペパンを食べながらジーツと自分から視線を外さない一誠・イリナ・ゼノヴィアに妙な居心地の悪さを感じつつ、淡々と述べるソーナの言葉にちよつとだけ安心しつつもやはり変わってしまったとセラフォルーは思った。

第一、前なら自分が姿を現した時点でもっと可愛く恥ずかしがっていたのに今はどうだ？ 何処までの淡々と抑揚無い調子で話し、恥ずかしがる反応の『は』の字すら見せず、若干突き放されてる感もある。

それがセラフォルーにとっては何よりも心にグサリとくるものがあつた。

「え、えつと……い、ごめんなさい。私のせいでキミに大怪我させて……」
「え？」

だが取り敢えずは謝る。

どうであれ、自分がハシャイだせいで大怪我をさせてしまった事実には嘘は無いし、何よりこのせいでソーナと疎遠になったら死ぬる。

だからソーナと親しい通り越して普通に恋人っぽい空気放つ人間の男の子を『ほんのちよつぴり気に入らないけど』謝った。

するとそれを受けた一誠は、眼帯で隠れてない右目を丸くしながら軽く驚いたリアクションをする。

「謝られたぞ……？ 寧ろ殺しに来ると思ってたからちよつとビックリ」

「はっ。」

謝れた事実には驚きつつ、殺しに来たと思つたと宣う一誠に今度はセラフオルーが目を丸くする。

「何時ものパターンだと、お前がそこに居たからだ！ とか何とか言われて釘バツトでボコボコにされるからさあ……逆に謝られる事にオイラ驚くよ」

「く、釘バツト……？」

「ああ、私と再会する前のイツセーくんの話を書く限り、無意味に嫌われてたつばいもんね」

「街でチンピラに無意味に絡まれて腕と足の骨をへし折られたつて話もあるくらいですからね、まあ、この姉は流石にそうはしませんよ流石にね」

「……。色々と壮絶だったんだなお前」

それが当たり前だと言わんばかりにヘラヘラした顔で話す内容にさしものセラフオルーもちよつと引いた。

「どうやら一誠はやはり『普通』の人間では無いという確信と共に。

「そ、そんな事しないよ……。ただ私は——」

「あーはいはい、さつきも言いましたが、別に気にしなくても良いですよ？」

魔王様その2ともあろうお方がこんなちっぽけ人間が一匹や二匹壊れちまおうが気にする必要なんてねえ？」

「うんうん、寧ろ放っておいて欲しいわ」

「もう騒動は懲り懲りだ……。」

静かに普通に暮らしたい……。」

「……。と、我々はこの意見で纏めてますわよレヴィアタン様？」

「う……。」

ヘラヘラと笑いながら眼帯越しに左目に手を添える一誠と、それに同意するかの様にニコニコしながら頷くイリナと、何処と無く哀愁を漂わせながらポツリと呟くゼノヴィ

アと、姉とすら呼ばず『良い笑顔で』話すソーナにセラフオルーはすっかり凹んでしまった。

気にして無い訳がない言い方なのだ……全員が全員。

魔法のステッキという名の鈍器で数多の悪者（魔王少女的な意味で）を凝らしめてきたセラフオルーにとってはあらゆる意味でやりづらい相手だった。

「ぜ、絶対気にしてるでしょ？」

「嫌だなあ？ そんなこと無いっすよ、寧ろこの怪我のお陰でセンパイともっと仲良しになれましたし」

「う、嘘だ……」

ソーナちゃんに『センパイのおねーさんキライ』って後で言うんでしょ？」

疑心暗鬼……今のセラフオルーの心はその言葉で埋め尽くされていた。

伊達に姉をやってる訳じゃない。ソーナがこれ程まで何の特徴も無さそうな人間の男の子を好いてる事ぐらい今回のことでよく知った。

だからこそ、一誠に余計なことをソーナに吹き込ませる訳にはいかなかった。

例えばそう……『センパイのおねーさん苦手であんまり関わりたく無いっす』とか『セ

ンパイのおねーさんを見ると怖くて仕方ない』とか。

「あのですねえ……」

そんな意図があると察しているのかいないのか、一誠はしつこく食い下がるセラフオルーにちよつと呆れながら、この際ハッキリ言ってみようかと口を開きかけたその時だった。

「いい加減しつこいですよレヴィアタン様」

一誠の声を遮るかの様に声を出したソーナが、ちよつと怒った様子でセラフオルーの前に立った。

「あ……ソ、ソーナ……ちゃん？」

その表情は激しい怒りというよりも、人が人を見限るソレに似ており、一瞬でそれを察したセラフオルーの身体がビクリと強ばった。

「何も思つてないと本人が言つてるのに、女々しくしつこいんですよアナタは。」

何時ものあの小煩いノリで呑気に構えてれば良いものを、今日に限つてゴチャゴチャと……」

「そ、そんな……私は——」

冷たい雰囲気と視線を向けくる実の妹に、ますます小さくなるセラフオールは慌ててそうじゃないと口を開こうとするが……。

「そもそもこの様な場所でそんな痴女みたいな格好をして来る時点で真面目に謝れるとでもお思いですか？ え？」

「うぐ……そ、それはソーナちゃんだつてわかつてるでしょ？ こ、これが私の正装——」

「へえ？ 所構わずそんな格好で変なポーズ取つたり、わざとらしく殿方に下着を晒して悦に入るのが正装ですか？ 昔からそうじゃないかと思つてましたが、どうやら真実はその通りのようで……」

「ち、違うもん！ そ、そんなんじゃ——」

「ほう、なら私的に言わせて貰いましょうか？ そんな露出の多い衣装着て男性騒がれて喜んでる人を総じてビッチって言うんですよ」

「びっ!？」

「あら……センパイが何時にも増して怖い」

「なんか……お前等三人にこの前散々言われた時のデジヤブが……」

「早く終わらないかしら……怠いわね」

一誠を思わせる薄ら笑いを浮かべ、セラフオールが現在進行で着ている大きなお友達の大好きな格好について真っ向からエグい一言をぶつけるソーナに、すぐ後ろで眺めていた三人は飲み物を飲みながら呑気に聞いており、姉妹喧嘩は更に加速していく。

「び、ビッチじゃないもん！ この格好が好きなだけで——」

「言い訳なんて何とでも言えますよ。」

露出の多い服着て大勢の前に出て、あざとい台詞を吐く方など姉だろうがなんだろうがノーটারリンのお馬鹿かビッチですよ——私にとってはね」

「うぐぐ、違うもん！………違うもん……」

「まあ、他の方からすれば違うかもしれないし？ そんなに悲観しなくても宜しいのでは？ まあ、私はあなた様を『アホな格好して出てあざといポーズして、反応を楽しんで悦に浸る痴女な姉』と思ひ続けますがね、これまでもこれからも」

薄ら笑いから無表情になってザツクリ言い切るソーナにセラフオルーは心の中に留めといた何かが壊れそうになっていった。

いくら違うと否定しても、実の妹にこんな幻滅され顔で痴女扱いされてるのだ……心に来るのも仕方ない話だった。

「違う……違うんだも……ふえ……」

故に涙腺が壊れてしまうのもまた……致し方なしであった。

「び、びつちじゃないもん……じゅんすいに好きただけなの……」

「ほう、今度は泣きに入りましたか？ それはそれは……そうすれば世の殿方はあなた様に味方しますものね？ 流石は魔王様——実に人の動かし方を熟知されておいで

……」

そして散々言われ、ポロポロと溢れ出る涙が止められず、それでも違うと言い続けるセラフオールに無表情で言い放つこの一言が、心を支えていた最後の壁を破壊した。

「びええええん!! 違うのにいいい!!」

姉としても魔王としての威厳もぶち壊れ、ただただその場に崩れ落ちて大泣きする魔王少女（推定数百歳以上）。

「ど、どうしたそんな意地悪言うの? グスツ……ま、前のソーナちゃんは言わなかったのにい……!」

「泣けば済むんですか? ああ、泣いたら皆に味方されますものね? 流石レヴィアタム様……参考にさせて頂きますわ」

「うわああああん!! ソーナちゃんがグレたあああ!!」

目を真っ赤に腫らした実の姉にニッコリしながらトドメこ言葉を刺し、まあ大声で泣

く。

何というか、後ろで見ていた第三者からすればシユールすぎる絵面だった。

「わあ、センパイがSだ……」

「さつきお前等にされたのとまんま同じだから、何と無くあの魔王の気持ちはわかる……」

「泣いてないで早く帰れば良いに……姉妹喧嘩を此処に持ち込まないで欲しいわ」

どんな形でも心をへし折るのに長けているが故に、へし折られたセラフオール……ではなくてへし折ったソーナにキラキラした目で見つめる一誠。

ちよつと内心ドキドキしてるのは内緒だ。

「そういう訳ですので、さつきと帰って魔王の仕事も痴女な趣味も頑張ってくださいね……お・姉・さ・ま♪」

「ごめんなさい……ごめなさい……!」

「私に謝られても困りますね……そもそも怒ってる訳じゃありませんし」

「ふえ……」

妹が豹変した理由を探りに来たら心を抉られ、更には泣かされてしまったセラフオルーはくすくすんと鼻を噉り、目を真っ赤にさせてガツクリ項垂れる。

今まで言われても平気だったのに、無表情でお前なんてもうどうでも良いと主張する目で言われただけでこの様……。

これじゃあ魔王もクソも無いと、セラフオルーは心の中で考えていたが……。

「くすくすん……ご、ごめんなさい……怪我させて……」

「別に俺は良いんで……はい」

「さっきからそう言ってるのにまだそれを言いますか……しつこい人ですね」

「うきゅ……ご、ごめんなさい……ごめ……んなさい」

今現在も向けられるソーナからの罵倒される言葉と蔑む様な表情に、セラフオルーは俯きながらモジモジと身体を揺らし……思っていた。

「……。(ど、どうしよ……泣き止んだ辺りからソーナちゃんに罵倒されると——)」

「……。何ですか？」

「っ!? な、なんでもないよ……あ、あはは……グスッ。（あ、あの目と顔をされると何
だか——）」

（もっと蔑んで欲しい……かも）

実の妹に罵倒される事に言い知れぬ気持ちよさがあると……。それが如何に駄目な方向に進んでしまっている事に気付かずにだ。

終わり

四人組

良かったね……と拍手をすれば何故か殴られる。

大丈夫？ ……と苦しめる人によかれて話し掛けたら石を顔面に投げ付けられる。

ご飯を買いに行こうとしたら、人の山の騒ぎに巻き込まれて片眼が見えなくなりましてとさ。

全く以てどうしようもない不運。

自分一人でだとうしようもなく理不尽な目に遭う。

これはもう生まれ持った俺のどうしようもなさなので今更憎む事も絶望する事も無い。

だって、そんな不運の中にも出会いはちゃんとあるのだから……。

「大変な事件だったね」

「うむ、まさか会談を行っている三大勢力のトップのもとに旧魔王派なる団体が現れるとはな」

「まあ、正直私達にはなーんの関係もないけどねー」

「まあ、偉い方々が頑張ってくれるでしょう」

怠惰に過ごす日々というか。

そこら辺の消ゴムでしかない俺からすれば、結局の所、悪魔だ墮天使だ天使だが何を
してしまおうが知ったこつちや無いし関わる理由も資格も無いのである。

故に、学園で会談してたその偉い人たちの元に変な集団が現れて何かをしてようが、
俺達に何が出来る訳じゃ無いのだ。

まあどーせ『お兄さま。』やそのお仲間達が何とかするだろうし、何とか出来なくとも
それはそれで仕方ない。

蟻んこに出来る事なんてなーんも無いのだ。

「で、結局キミは向こう側に行かなくて良かったわけ？　ぶっちゃけ最後のチャンス
だったんじゃないかね？」

「そうよ、ゼノヴィアだったら頼めば仲間にしてくれたのに」

「やめてくれ、いくら何でも悪魔に転生してしまおうと考える程、人生を投げてるつもり
は無いんだぞ私は」

とある休日。

会議とやらが終わってから妙にピリピリしとる『お兄さま。』とそのお仲間が何故かうちに来て、お父さんお母さんと仲良く楽し気にやってた空気を壊さないようにと自分に気を利かせたつもりで外でお散歩していた時に出くわしたセンパイ、イリナちゃん、そしてまだ宙に浮きっぱなしのゼノヴィアさんに誘われるがままにセンパイの家に遊びに来た俺は、ちよつと古いテレビゲームタイプの人生ゲームをしながら、この前の事について何となく振り返っていた。

センパイのおねーさんやら、三大勢力会談やら、そこに襲撃かまして宣戦布告してきたどつかの誰かさんとか……。

まあ、悪魔であるセンパイ以外は無関係の部外者でしか無い様な内容なんだけど、無言でゲームするよりマシなんでこうしてペチャクチャしとりますって訳さ。

「あーあ、またマイナスマスで……『引ったくりの被害に遇って銀行からおろしたばかりの財布の入った鞆が盗られる』……—3000万だよ」

「これでイツセー君がまた最下位になっちゃったね」

「というか、何故私達はルーレットを回してもマイナスマスの目の数しか出ないのかしら……バグ？」

「いやそんな事無いだろ。ほら、私はちゃんと十のマークに止まれるぞ」

もつとすることは無いのか？　と思うかもしれないけど、こうしてブーツとやってる方が楽だ。

でなければ英雄様にお兄たまを祭り上げた意味が全く無いしね。

少なくともセンパイとイリナちゃんは当然として、独りぼつちが嫌だと泣きわめくぜ
ノヴィアさんも似たような考えなんで誰も文句なんて言わないし、こういうのが平和つて奴なんだろうね。

「匙が一誠さんに謝りたいと言ってましたよ。目の事で」

「え、わざわざ黙ってあげたのに自分からバラしちゃったのかよ匙君は？　何か人が良い
というか……別に気にしてなんか無いんだけどな……直ってるしもう」

引つたくり、冤罪、理不尽な言い掛かりによる様々な災害が1ターン目から重なり続け、気付けは中間結果の時点で総資産が145億という、現実ならとづくに自殺してる
だろウ人生をゲーム内でエンジョイしてる俺は、起死回生のギャンブルエリアで更に総
資産をマイナスにしまくりながらもゴール目指してポチポチやっている最中、隣に座つ

て総資産―35億円になってるソーナセンパイから、この前の事故についてその原因となった匙君について教えられ、思わず苦笑いをしてしまう。

あの人……てかまあ同い年なだけで、センパイの眷属さんである匙くんは割りとい人と云うか……確かセンパイの事が好きだったと記憶してる。

だけどその、まあ、うん……。

横から横取りしたみたいな形で俺が割り込んだじゃったせいで――なんかうん……ごめん匙くん。

「ああ、あの無駄に空回りしてそうな人？　へーその人がイツセーくんの目をね……」

「別に気にしてないけどね。だって故意じゃなかったし」

「まあ結果的に目は元通りになってるしな……相変わらずエグい力だ」

好きだと気付かされた時には既に完成していたというか……ホントに匙君には寧ろ悪かったなーというか。

珍しく俺と内心はどうであれ普通に接してくれる人だから余計変な罪悪感が沸いてしまう訳で……。

「匙なら最近はおうちの姉と楽しくやっつてる様ですよ。

今日も一緒に何処ぞへと出掛けてるみたいですし」

「へえ……匙くんがセンパイのおねーちゃんと——はい？」

なんて思ってたなら、予想外な情報に俺は思わず目が丸くなった……と思う。

センパイの姉って……あの変な格好してた人だよな？ え、マジなんすか？

「よくは知りませんが、イツセーくんの目を潰してしまった原因同士として一緒に罪悪感に苛まれていたらそうなったみたいで」

「あら、イツセーくんが出会いの架け橋になったって事？ 凄いいじゃない、貴女だったらもっと良かったけど」

「む……ギャンブルに勝利して十億円か！ やったぞ！」

そうなんだ……。

センパイにボロクソに言われて散々な目に遭ってちよつと同情してたけど……。

まあ、何だろうな……結果オーライ？

「1億円だぞ！」

「そもそも罪悪感なんて必要ないですよ。別に匙と恋人同士だった訳じゃないし」

「はあ……」

「そこは微妙に同意出来るわ。」

恋人だったところを——というのなら話は別だけど、彼がこの悪魔を好きだったってだけで具体的にそこから何かがあつた訳じゃないし」

「そりゃそうだけど」

「私の総資産が40億円になつたぞ皆！」

まあ、今更俺からセンパイを取り上げますなんて事があつたらそりゃ道連れにしても地獄に引きずり込んでやるつもりではあるけどさ……何か微妙なオチで消化不良な気分というか……。

じゃあ良いや……これ言ってももう問題とか無いみたいだし言うよ。

「じゃあ言っちゃお、家の部屋が無くなって寝る場所が消えちゃいました……昨日付けで」

家での自分の居場所が完璧に抹消されちゃった話をね……。

「え、どういう事それ？」

予めセンパイにそうなりそうだと言っていたので、センパイは特に驚く事はしなかったが、知らなかったイリナちゃんやんは信じられないと驚きながらどういふ事なんだとコントローラから手を離しながら聞いてきた。

「よくは知らないんだけど、あのー……誰だったっけか、あの金髪の女の子が家に住むようになってから益々俺が空気になっちゃってね。」

で、よく知らない内にまたお兄さまが誰か拾ってきて住まわすようになったら俺が部屋から追い出されてね」

「それ、おじさんとおばさんは何て？」

事情を説明している内に、勝手にわいわい騒いでたゼノヴィアさんまでもが若干温度の下がった表情になってイリナちゃんとセンパイ二人と揃って耳を傾けていた。

特に昔の両親を知ってるイリナちゃんは若干怖いくらい冷えきった顔だった。

「いや……男だし、住み辛くなったら独り暮らしとかしてみないか？　という言葉と共にこのお金貰っただけかな」

元々お兄たまが現れてからは、俺を居ても居なくても良いみたいに見てたし、その内そうなるんだろうなどと予想してたんで別にシヨックなんて無い。

寧ろよくぞ今まで我慢してたねと尊敬すら両親にしているぐらいであり、この札束一つの手切れ金と共に遠回しに出て行けと言われたら俺は黙ってありがたうという言葉と共に出ていくつもりさ。

「こんなお金で出て行けですって？　ふざけてるの？」

「どっちも至って真面目だと思っぜ？」

「だ、だがこれじゃ捨てられたのと同じじゃないか！」

「いや捨てられたというか、自立させて貰ったと思うことにしてるけど」

黙ってらそのまま壊しかねないイリナちゃんと、憤慨し始めるゼノヴィアさんをどうどうと宥めながら俺は気にしてないと大真面目に自分の本心を告げる。

親が出て行けと言うならば子はそれに従うべきだし、俺より何でも出来る『お兄さま。』を可愛がるのは、例えば本当は偽者でそれに気付いてなくとも真理だと思う。

だから俺は別に両親に捨てられたとは思わない。

寧ろ早くから自立できると信用してくれたと喜ぶところなのだ。どうであれね。

「センパイにはこの前言いましてけど、やっぱり正式にそうなっちゃいました」

マイナス

過負荷化した実子より、聞き分けの良い他所様の子の方を可愛がりたい両親の考えを尊重してる俺は多分実に親孝行者だと思うし、ぶっちゃけあの底無し沼みたいに変な空間居辛かったからね……。

家賃としてセンパイにこの札束二つを渡して部屋を貸して貰った方が、俺としては実に安らげるし。

「了解しました。これで堂々と一緒に住めますね？ ふふ」

「ですです」

「私も居るのを忘れないで欲しいわね」

「わ、私もだぞ……」

俺らしく生きるには、あの家は窮屈すぎたんだよ。

これで漸く一誠君が……と思うと実に心が満ちていく。

紫藤さんとゼノヴィアさんは呆気なく一誠君を捨てた両親に対して憤慨している様ですが、窮屈を我慢してまで居る位なら、私が永遠を共にしてあげれば何千倍も良い。

だから私は一誠君の両親に何を思うことも無いし、寧ろありがとうございますとでも一筆書いて送る位はしてあげたい程だ。

「貴女達には余ったお部屋を貸しているのです、家賃代わりに晩御飯の材料を手分けて買ってきなさい。お金とメモはこれですので」

「チツ、嫌味っぽく言っちゃって……」

「お、お釣りでアイスは駄目か？」

「良いですよ。人数分をお願いしますね？」

行く宛が無いのと、一誠君の知り合いという理由で住んでる家の部屋を貸している二

人を体の良い理由で先ずは追い出そうと、わざと多目のお使いを頼む。

「イツセーくんに変な事しないでよね!」

その際紫藤さんがゼノヴィアさんに引き摺られながら煩く釘を指してきたが、私は別に一誠君に変な事をするつもりなんて無い。

「さてと……お使いをして貰ってる僅かな間ですが、一誠君を慰めてあげましょう」
「はい?」

だって変な事なんて初めてから一度もしてないんですもの。

「慰める? 俺別に落ち込んでませんけど……」
「じゃあ言い方を変えましょう、急に一誠君を甘えさせてあげたいので、お二人が帰って来て煩くなる前にに思いきり甘えてください」

共に堕ちてマイナスへと変わった時から、私達は一緒に生きる事を誓っている。

だから住む家が無ければ当然一緒に住むし、頼れる人が居なくなれば頼れる者になる。

今更過ぎるけど、私は一誠君が大好きであるが故に、ちよつとした恋人気取りになりたくもなる。

「甘えるか……住まわして貰つてる時点で思いつきり甘えてる気がしてならないんですけどね」

「一緒に住むのは初めから決まつた事ですからノーカンです。それとも……やつぱり嫌ですか？」

「いえ全然、寧ろご褒美つす」

紫藤さんには悪いが、こればかりはいくら言われようが譲つてやるつもりなんて無い。

二人を追い出し、リビングに残つた一誠君と並んでソファに座り、そのまま膝枕をしてあげながら頭を撫でる。

何度もやっている事だけど、こればかりは飽きない。

「リアスは何か言っていました？」

「さあ？ 俺あの人とそんな話したこと無いんでよくわかりません」

心地良さそうに目を軽く閉じてる一誠くんの頭を撫で続ける。

妙な事に随分と久しぶりというか……知らない間にモテモテに一誠くんがなつてたとか、ちっちゃい子供と取り合いをしてたとか……そんな映像が頭の中で一瞬浮かんで来たけど、全部気のせい。

だって一誠君はちゃんと此処に居る……。

弱くて、負けてばかりで、理不尽な目に遇つてもヘラヘラ笑い続ける私と同じ過負荷^{マイナス}。

「夏休みになったら冥界に帰らなくてはならないのですが……困った事に一誠君とお会いしたいとサーゼクス様がおっしゃってまして……一緒にいきますか？」

「留守番してるよりはセンパイと一緒にの方が良いし、構いませんよ。」

何で会いたいのかは知りませんが」

私の大好きな人……パートナーはちゃんとココに居る。

それだけで私はもっと駄目になって幸せになれる。

「んー……センパイのお腹は温くて柔っこくてサイコーっす」

「あ……つとと、これじゃあ押し倒されたのと変わりませんね」

「いや、何故か微妙に久しぶりな気がしましてね。ちよつと色々タガが外れて」

「一誠くんもそう思ってたのね——っ!?! も、もう……私の小さい胸なんか顔を埋め
たつて面白くも何とも無いでしょうに……」

「んー……このくらいが一番良いっす」

正しくて偉大で、褒められる様な事は他の誰かがすれば良い。

マイナスの宿命

冥界に行くのは二度目になっちゃったんだけど、これは果たして運が良いのか悪いのか——多分良くは無いんだろうな。

行く理由だって魔王その1の人から呼び出されに近いそれだし、センパイの後をセンパイの眷属の人達に混ざって、イリナちゃんとゼノヴィアさんと揃って付いていくにしても、『何だあのナマモノは?』的な視線を常に浴びなければならぬし——

「キミはその、娘と随分と深い仲だと聞いたのだが……」

「えっと、まあ……」

「それは娘の立場を分かっている上で関係を結ぼうとしてるって事ですか? 悪魔である

ソーナと……」

「勿論そうですよセンパイのお父様にお母様。

勝手にボツチ拗らせてた自分にも良くして貰って、僕はもうセンパイに足を向けられて眠れません」

「……」

——うん。分かってたし予想通りで逆に笑っちゃうとかさ。

「いっやー……センパイの実家がばらばうにデカく、改めてセンパイが良いところのお嬢様つてのを思い知ると同時に、そういう家の生まれだからこそというか、血を重んじてるといふべきなのか……。」

「そう……その上でシトリー家である娘とね……。」

最悪に嫌な顔されちやつてるねえ……俺。

わざわざ人目……えっと悪魔目多きセンパイの実家のお食事場でセンパイの両親から集中攻撃されちやつてんだから美味しそうなお飯もこりや食えないや。

匙君にかなり同情めいた視線を貰えてると、予想通りだった為ダメージは無いにしても、やつぱりセンパイって元々は高嶺の花なんだよな……あはははー。

あのイリナちゃんですら、寧ろセンパイの両親を壊しかねない顔で密かに睨んでるからして相当なんだろうね。

「お父様、それとお母様。彼が只の人間だからといって何か問題でも？ おかしいです

よね、昔そういった固い考えを持つ者達に現魔王様方がクーデターを起こして今の政権をお築きになられたというのに、お二人は旧政権の考えをお持ちなのですか？」

「そう言う事を言ってる訳じゃないソーナ、お前は次期シトリー家の当主で純血の悪魔。この前の婚約の話もお前の意思を一応は尊重したつもりだが、だからと言って人間との交際を認める為に動いたつもりは無いと言ってる」

「そうよソーナ。人間の方と交流を持つ事を咎めているではありません。

『こういう方』と交流を持つ事を私達は気にしてるのです……」

「こんな、普通よりも遥かに最低な人間なんかと……とでも言いたそうな目で、愛想笑いだけは崩さないでいる俺を、汚らわしいものを見るような感じで見ながらセンパイに話すご両親に、とうとう俺も悪魔にすら最低呼ばわりされる所まで退化したんだなあ——なんてぼんやり考える。

下座の席からガタンと誰かが勢いよく立ち上がろうとする音が聞こえたけど、多分それはイリナちゃんで、そのイリナちゃんの隣に小さくなつて座つてたゼノヴィアさんが必死こいて止めてるのが何となく想像できる。

「リアスちゃんの所の赤龍帝と同じ顔なのに、どうしてこども違うのかしら……」

『……………』

誰とは言わないけど小さく呟いたこの声で空気が一瞬完全に凍りついたりもしたけど、結局行つて良い事なんてある訳もないのは分かりきった事だったし、俺は最期までヘラヘラと愛想笑いで誤魔化す事にしたさ。

一応はソーナの友人という体だった為、シトリ一家へ招待された一誠、イリナ、ゼノヴィアの三人だったけど、案の定成長——いや、退化したせいでソーナの両親からは散々言われた夕食で終わってしまった。

「あー……例の魔王その1の人と会わなきゃいけないから此処に居ないといけないんだよね。正直言うとかかなり帰りたいや」

「何よあの悪魔の親達！ 散々イツセーくんの事貶しちやつてさー！」
「確かに。こっちは初対面なのに、随分と言ってくれたな……」

元悪魔祓いが二人と、マイナス人間。

本当なら冥界という場所に居る事自体が可笑しな存在なのだが、安心院なじみと所縁がある自称するサーゼクスが会いたいと言う理由で滞在する事になったのだが、夕飯時による散々な評価をソーナの両親に貰ってしまったので、三人は正直言うとお普通に家に帰りたかった。

「しかも兵藤セーヤなんかと比べちゃつてき、本当に失礼しちゃうわよ！」

「まあ、片や赤龍帝で、ちよつとした英雄様だからねえ。欠陥品の俺と比べるのもわからないでも無いでしょ」

「だからと言って奴とお前を比較して貶す理由にはならないだろ。」

いや確かにお前達はちよつとその、アレかもしれないが」

「何よゼノヴィア？ 勝手に付いてきた癖にあんな悪魔共の肩を持つのか？」

「そ、そうじゃない！ 誤解をする言い方をしたのなら謝る！ だから私を見捨てないでくれ！」

「別に見捨てるなんてしないよゼノヴィアさん。……………そもそも見捨てるのか見捨てないとかの関係じゃないけどさ」

宛がられた客室に集まり、豪華なソファにダラダラ座りながら、色々と言われて全然

食べられなかった夕飯のツケである空腹を回収する為、冥界に来る前に買っておいた冷えたたい焼きを食べており、会話の内容はソーナの両親による一誠への低すぎる好感度についてだ。

「自分を理解出来てなかった時なら、勝手に傷ついてたかもしれないけど、今は何で自分が無意味に敵意を買うのか理解してるつもりだから、別段特に何を思うことも無いんだよね。」

まあ、センパイの両親に嫌われ続けるのはちょっと困るけど」

「ねえねえ、やっぱりあんな女の事なんて忘れてこのまま私と遠くに行きましょうよ？」

私なら誰にも邪魔されないわよ？」

「ごめんねイリナちゃん。センパイをすっぱり忘れられるなんて俺には出来ないよ」

更なる退化により、悪魔にすらその人間性マイナスさに軽い嫌悪を抱かせる様になっていた一誠は、以前よりもよりズルズルドロドロしたオーラをデフォルトで放っていた。

それにより一応はソーナのお陰で正式な手続きで悪魔領土の冥界にやってこれた一誠を見た多数の悪魔達からは初見で嫌われ、シトリー家で働く悪魔達からも顔には出されてないが普通に避けられ、トドメにソーナの両親からは遠回しに娘に近寄るなどまで

言われた。

同じく招待されたイリナはそれを聞いて何度も壊死させてやろうとスキルを暴走させようとしたが、ゼノヴィアや一誠自身のアシストにより何とか可愛らしく頬を膨らませるだけに留められた。

これがもし完全に暴走したら、マイナス組の中でもその気になれば大都市すら数分掛からず某モヒカンマッチョメンがヒヤッハーする世紀末みたいな死の都市へと変えてしまうのだから、知らないとはいえ多くの悪魔達は幸せである。

「サーゼクスって魔王の人に何を言われるか分からないけど、その件が終わったらさっさと帰った方が良いね。センパイに迷惑掛けたくないしこれ以上」

「そうね、こんな場所の空気なんてイツセークんの身体に悪いし」

「それには私も賛成だ。元とはいえ主を信仰して居た身だし」

たい焼きの腹の皮を手で破り、本物の魚の腸が飛び出る様に出てくるアンコを舐めながら一誠の食べ方にイリナは特に何も言わず同意し、ゼノヴィアは若干引きながらもやはり元悪魔祓いなのか同じく同意するように頷く。

「それとも逆に、俺やイリナちゃんに害は無いよと根気強くお話してみたりしても良いけどね？ ほら、悪魔も人もまずは腹を割ってお話することが大事だと思うし？」

ぶちゆりとたい焼きの腹からアンコを捻り出しては笑って指についたのを舐めとる一誠の目は最低にマイナスだがとても澄んでいる。

「どうかしら？ 私なら途中で頭に来て壊しちゃうかもしれないしお勧めできないかも」

「ああ、それとたい焼きが可哀想だぞ……」

その最低っぷりや、コカビエルとの一件でより底無しに退化しまくりであり、最早普通の人間では挙動一つ一つに嫌悪感を抱かせるものであった。

イリナにしてみればその気持ち悪さはより魅力的に思えるのだが、まだ常人のゼノヴィアには嫌悪を感じさせる——という訳でも無く、寧ろ変で行儀の悪すぎるたい焼きの食べ方に対しての注意をしていた。

「それにしてもセンパイ遅いなあ？ センパイの分のたい焼きも買っておいたのに、何

してるんだろ？」

「あれでもシトリ一家の悪魔だから色々あるんじゃないの？ 話し合いとか」

「何でも若手悪魔による会合があるらしいが、もしかしてその会合についての打ち合わせでもしてるんじゃないか？ リアス・グレモリー達も出席する様だし」

「へー、ゼノヴィアさんだったらよく聞いてるんだね。ちょっと助かったよ」

そんな空気を独自に、アウエー環境の中でも作り上げていく三人の会話の内容は、この場に居ないソーナについてになっており、中々来てくれないせいも少し寂しそうな顔をする一誠にムツとするイリナや、来ない理由をゼノヴィアが予想で教えるといったやり取りをしながら各々たい焼きにパクつく。

すると噂をすれば何とやら、一人部屋の客間にしてはやはり豪華な部屋の扉が開かれると、噂をしていたソーナが入ってきた。

「遅くなっちゃってごめんなさいね一誠くん、待った？」

「待たないと言えば嘘になるんで待ったと答えますけど、こうしてセンパイが来てくれただけで全部ノーカンです」

一誠がマイナスとしての自覚を持って完全に覚醒する前の最初から一誠を意識をし、遂には猟奇的なまでの手法で互いを想い合う強さを確認する仲となり、覚醒した一誠の影響を最も強く受けている悪魔の少女にてマイナス……ソーナは既にたい焼きパーティーをしていた三人を見るやホツとした表情を浮かべ、その輪の中に入る。

「遅かったわね。一誠君を待たせるんじゃないわよ」

「ごめんなさい。案の定夕飯の後に父と母に呼び出しされちゃって色々と言われてたのよ」

「それはアレか、一誠に近寄るなとかか……？」

「有り体に言えばそうだわ。けど大丈夫よ、全部右から左に受け流したから。」

今更一誠くんから離れるなんて私には無理なもの」

そうにつこりと、若干イリナに対する牽制が籠った笑顔を浮かべ、当然の様に一誠の隣に座ったソーナは、ムシヤムシヤとたい焼きの腸部分から齧っていた一誠の頭を優しく撫でる。

「というか、もう離れた所で私は取り繕うのを止めちゃったしね。多分若手の悪魔の集

いでも散々言われるんじゃないかしら？」

「だから離れないと？ アンタの親がそれを認めるとは思えないけど？」

「そうね、最悪勘当でもされちゃうかもじゃないわ。」

けどそうなったらそうだったよ。もしそうなくても大丈夫な様に眷属達の事は姉に頼んであるし」

「用意が良いっすねセンパイ。俺だったら全部行き当たりばったりなのに」

ソーナに頭を撫でられ、犬みたいに喜ぶ一誠の言葉にソーナは微笑みを続けながら言う。

「単純に無責任なだけよ？」

「だとしても今のセンパイの目、やっぱり素敵っすよ」

アメジストの様な色をした瞳にマイナス特有の濁りが見えるソーナ。

真実に到達させないマイナスのスキルに覚醒して以来、目を負う毎に一誠との波長が更に合っていく感覚がソーナは堪らなく好きで、こうして傍に居るだけで満たされた気持ちになる。

だからこそ、実の親からの命令だろうが悪魔全体の総意だろうがソーナは一誠の傍らを選ぶのだ。

「ちよつとアンタ！ こうしてアンタとくつちやべるのは吝かじやないけど、一誠くと良い雰囲気になるのは許さないからね！」

「わ、私を忘れてもらおうと困るぞ……無視されるのは辛いんだ！」

「あら、一誠くんが望んでるのであればその意思を尊重するんじやなくつて？」

まだ健全な精神回路を持つゼノヴィアを除いた全員が、どうしようもない駄目マイナスを持つ者であるが故に。

「ちなみに明後日にはサーゼクス様と面会できる様だから、それが終われば帰れるともうわよ？」

「明後日かあ……つまり明日もこつちに居ないと駄目つてか？」

「居づらい？」

「居づらいと言いますか、ほら……初見でセンパイのご両親に嫌われましたからねえ。」

そんな奴が居ても空気悪くなるだけと思うと、ねえ？」

「初対面でいきなり失礼かましたアンタの両親と顔を合わせるのには確かに憚れるわ。悪魔ってのは不躰な連中ばっかりね」

同族嫌悪より同類意識。

マイナス達は他者から疎んじられるからこそ、独特の結束の固さを見せる。

それこそ例え裏切られても笑って許してしまう程には。

「父と母については申し訳無いと思ってるわ。

けど、今更認めて貰えるなんてムシの良いことなんて考えてなかったし、ある意味予想通りじゃない？」

「ええ、寧ろ好意的だったら逆にビックリですし」

「否定はできないけど、あんなバイ菌を触るような目を無遠慮に向けられるのは頂けないわね。しかもイツセーくんだけに」

「私達の場合、一応元悪魔祓いだつたからなのか特に何も言われなかったな……」

「だから何も無いイツセーくんだけに言ったんでしょ。ホント面白くも何ともないわ、せつかくの夏休みだつてのに」

弱いし只の人間——だけならあそこまで言わなかった。

しかし娘が——人間界の学舎に通ってから『何か』急激に変化した娘が連れてきた只の人間は、悪魔が見ても最低最悪なタイプの人間だったから、両親は反射的に出てしまった嫌悪感情をぶつけてしまった。

「ソーナの様子が変わったのはあの人間のせいだろう」

「間違いないわ。ソーナの変化した様子と、あの人間の放つ雰囲気が一致してるもの」

シトリー家の寝室にて、夫婦は神妙な面持ちで、ソーナが連れてきた人間の男についての討論を行っていた。

ネガティブな意味での印象を互いに言い合っていると意味で。

「ソーナの眷属の子達に聞いてみたが、やはりあの人間の少年に影響を受けているらしい……と口を揃えてた。となるとやはり、彼を排除すべきか……」

「近づくなと言っても聞かない場合の措置ね。」

ソーナに関する——いえ、我々に関する全ての記憶を操作して消去すれば一番穏便に

済むのだけど……」

「ああ……あの少年の兄がリアス嬢の赤龍帝の兵士でコカビエルを打ち倒した将来性のある青年だというのに、その弟がまさかソーナに付きまとい、あまつさえアレだ……。どうせなら兄の方と仲を深めてもらっての方が良かったくらいだよ」

既に悪魔にすら嫌悪感を持たせる程の退化が、ソーナの両親をこう考えさせている。兄と比べるまでもない愚弟で、どうせなら兄の方をソーナが獲得していればという厳しい評価。

本人達が聞いたらケタケタと腹でも抱えて笑う事案を真面目に話し合う両親だが、それもこれも娘が心配だからこそだった。

「明後日には帰る予定らしいし、その後ソーナに二度と彼に接触するなど厳命するか……？」

「勿論それが良いとは思うけど、今のソーナがそれを素直に聞くかどうか……」。

聞けば両親に見捨てられた彼を自宅に住まわせてる様じゃない？ あの元悪魔祓いの二人組と一緒に」

「年頃の娘の部屋に住む図々しさか……一筋縄ではいかなそうだ。

ソーナも変な男に引っ掛かってしまつて……はあ、そんな風に育てたつもりは無かつたのだが……」

「その間違いを正すのも親の役目よ。頑張りましょう」

「うむ」

しかしそれも遅い。

何もかも遅い。

ソーナはもう影響され始めてるでは無いし、そもそも影響されたとかされてないとかいう問題ではない。

ソーナという少女は、実の肉親すら気付けなかつた重大なる欠陥マイナスの素養があつたとい
うだけで、一誠という少年と出会つてそれを隠すのを止めただけなのだ。

つまり――

「Aの3カード！」

「「パス……」」

「よし！ トドメに5のスリーカードでまた私が大富豪だ！」

元々ソーナは悪魔を下回るマイナスなのだ。

「ゼノヴィアさんと匙くんとセンパイのおねーさんの配られるカードが良すぎてクソゲーなんだけど。俺もう15回連続大貧民なんだけど」

「私と紫藤さんが貧民と平民を争ってるのも変わらないし……」

「大体なんでJ以下のカードしか引けないのよ。このトランプ、イカサマの細工でもしてんじゃないの?」

「お、俺は何もしてないぞ?!」

「私も普通にやってるつもりなんだけどな……☆　　というか、ソーナちゃんって昔からトランプゲームが強くなかったような……」

「ええ、ポーカーにしてもブタばかりでしたね、久々にさっきやったらツーペアすら引けなくなってるし」

「それ、俺もつすよセンパイ。人生ゲームやっても借金マスばかりに止まるし、なんなんすかね?」

「昔から肝心な勝負事に負けちゃうんだけど、不思議よね?」

混沌より這い出るといふ過負荷^{マイナス}。

「あのさ、一誠君だっけ？ 聞いた所によるとそこのお二人とソーナちゃんの家に住み出したらしいんだけど……」

「へ？ ああ、実家完全に追い出されましたからね……。あの、誰だっけ？ あーし……。だか何だかの女の子がお兄たまのお陰で引き取られる様になつてから、両親からその子に悪影響だから金渡すから好きに生きろつて言われちゃいましてねー……」

「そ、そんな事言われたのかよお前……。その引き取った奴つてアーシア・アルジエントだよな？」

「そうそうそんな名前だ！ 流石匙くん！ 色々知つてて助かつたよ！」

「い、いや、それよりお前実質親に勘当されたんじや……」

「だからソーナちゃんの住んでる部屋に……。というのわかるんだけどさ、その……。まさかとは思うけど寝る時は一緒に——なんて無いよね？」

「まさかあ！ あるわけ無いじゃないですか！ そりや確かに叶うなら毎日だつてそんなシチュエーションにあやかりたいですけど、お世話になりまくりな上にそんな事までやつてもらつたら俺もう恩返しに死ぬしかできませんよお！ ねえ？」

「ええ、一緒には寝てませんね」

「確かに一緒には寝てないわ。別々ね」

「うむ……それは保証する」

『………………。(一誠君が寝付いた後、寝惚けて寢室に行つて、寝惚けて一誠君が寝てる布団に入つちやう事なら毎日あるけど)』

終わり。

遅すぎた

わざわざ匙君から貰った情報なんだけど、何でもお兄ちやまは俺と違って悪魔からの受けが宜しいらしい。

グレモリーって人の実家の両親からも受けがよく、純血悪魔じゃないのに結婚云々カ
ンヌンと言われて満更でも無いとか何とか……。

「すっげーな、あの『お兄ちやま。』は。

「どんだん出世してるじゃん……悪魔社会の中でだけだ」

「ああ、腑に落ちない点はあるんだが、奴はほら赤龍帝でこの前コカビエルを倒したって
功績があるから……」

「はは、墮天使の人だっけ？ そうだねえ、倒したらいいねえ？ ふふふっ」

「何だよ？ 何が可笑しいんだ？」

「いゝやべつつに〜？ フフフフ！」

本人はコカビエルを倒す所かこんな俺の不意打ちで『気絶』し、起きたら自分がコカ

ビエルを倒した事にされて疑心暗鬼になりかけてるつてのに、周りからはどんどん期待されていく。

まあ、あの何でもかんでも『優しく』そつなくやれる『お兄ちやま。』なら、これからもその期待に答えられるだろうさ。ふふふ。

「お前、憎くないのかよ？ 親はお前を捨てたも同然な扱いをして、他人の女を受け入れてるつてのに」

「最初の頃は思ってたぜ？ けどさ、結局の所決めたのはうちの両親だし、無駄に逆らう真似して拗れるよりかは言うこと聞いてあげる方が親孝行つてもんじゃない」

「そんなの無茶苦茶だろ……。お前、やっぱり変だよ」

「だろうね。けど今のところ後悔はしてないよ匙君。」

ふふ、家を出たお陰でセンパイともっと一緒に居れるようになったし……。ふっふっふ」

「嫌味かこのヤロー……。と、言いたいが、最近の会長を見てると思うわ。」

「お前みたいな奴じゃないと合わないんだらうなって……。なんつーか、理解できないつーかさ」

「その理解できない所が素敵なんじゃないか」

俺は俺なりに楽しく生きるから精々頑張つて欲しいと心の底から応援するよ……ふふふ。

一応ソーナの両親に気を使い、極力ソーナにひつつく事はしなかった。

若手悪魔の会合ならびに、魔王・サーゼクスとの個人面談を明日に控える身であるので、この日もソーナの実家に留まつてる一誠は、既に並みの悪魔から『穢らわしい存在』という認識を受け、あからさまに居ない者扱いをされていた。

「一つ学習したよ。どうもセンパイ以外の悪魔の人達も人間とあんまり精神は変わらな
いみたい。」

もう既に何時もの対応だもの」

「ホント、ぶっ壊してやろうかしら……」

「良いって良いって、寧ろ何時も通り過ぎて肩肘張る必要が無いって考えようぜ？」

「だが露骨だろ。イリナにも徐々にそんな態度だし……」

「私は良いのよ、悪魔なんか好かれてもしょうがないし」

雄大な自然に囲まれるシトリー領土の湖の畔に腰掛け、下手くそに石を投げて水切りを楽しむ一誠に対するあんまりにも露骨な対応に顔を歪めるイリナを、ヘラヘラ笑って宥めている。

ソーナの実家に籠ってても、遣いの悪魔達やソーナの両親の露骨過ぎる視線が鬱陶しいというイリナの要望に依えての湖訪問な訳だが、ここに来るまでもまた中々に修羅場だったらしく、一誠の頭から軽く血が流れていた。

「いやー石まで投げつけられる辺りもまた同じだよな？　しかも悪魔さんって人間より強いから勢いが強いこと強いこと」

「顔は覚えたから絶対に後で壊してやるわ……あの悪魔達」

「それも良いよイリナちゃん。」

「そんなんで目くじら立ててたらキリなんて無いし、それに石投げつけられて怪我しても、逃げちやえばなんて事ないもの」

米神を伝う赤い血を手で乱雑に拭き、傷口のある頭を撫でる一誠がスキルによる否定をし、一瞬で消しながらクスクスヘラヘラと笑い続ける。

現実を否定し、幻想へと逃げるマイナスが一誠の傷を消し去る訳だけど、石を投げ付

けられた現実には存在し続けている。

だからこそイリナは報復に出たい訳だが、本人がヘラヘラとイリナにとつてはドキドキするような笑みを浮かべながら下手くそに水切りをするもんだから抑える他なかった。

「イツセーくんが言うなら我慢するけどさ……」

「そうそう、蔑まれても、殴られても、罵られてもヘラヘラ笑い続ける。それが俺たちマインスなんだぜ？ もっと楽しくやろうぜ。あ、ゼノヴィアさんは違うけども」

「うっ、そうかもしれないけど私は仲間だと思ってるからな？ やめろよ！ 見捨てるとかはやめてくれ！ ひとりぼっちは嫌なんだ！」

「わかっているって。マイナスじゃないにせよ俺達とつるもうって時点でキミも大概変わってるしね。」

それに俺もトモダチは欲しいし」

過負荷マイナスじゃないと言われ、仲間外れにされると思い込んだゼノヴィアが、すっかり泣き虫になったせいか半泣き顔で、すがりつくように懇願するのを一誠はクスクス笑って見捨てはしれないと言っている。

聖剣という概念そのものを消し去った一誠により、デュランダルまで失ったゼノヴィアには最早相棒のイリナや一誠やソーナしか居ない。

故に必死だった。

「ほ、本当だろうか？　後でやっぱり嘘だよとか言わないよな？」

「言わない言わない。イリナちゃんの相棒の子だし」

「教会に戻った方がゼノヴィアにとって良いのかもしれないと思うんだけどね私は」

「も、戻れる訳無いだろ。神は死んでいた事を隠されて私は教会という組織そのものが信じられないのに……」

ある意味信用できる奴から見捨てられたくない……と。

そんなマイナス達とは別に、英雄と持ち上げられつつある兵藤誠八は、ソーナが実は一誠を冥界に連れて来ているとリアスから知らされ、グレモリー家の客室で難しくしていた。

「なんでアイツが……」

「何でもお兄様——兄から直接話したいからって理由らしく、明日の会合の時に会うみたいよ?」

「サーゼクス様がですか? 何で魔王様が人間一人と……」

「それは私にも分からないけど……もしかしたら彼の持つナニかを突き止めるつもりなのかも」

「それで危険なら殺す……ですか?」

「そんな事はしないわよ。紛いなりもアナタの弟君なんだから」

「……………」

一誠が冥界に、それもサーゼクスと面談する理由で来ていると詳細までは知らぬリアスに聞いた誠八は、眷属ですら無い奴が何故そこまで……と嫌な気持ちで両親から勘当された一誠を思い浮かべ、若干顔を歪めた。

「シトリー生徒会長の様子が完全に変質した事を部長はどう思いますか?」

「ソーナの事? ……まあ、確かに彼と深く関われば関わる程おかしくはなってるわね。

やっぱりセーヤは自分の弟のせいだ?」

「そうとしか思えません。だってアイツは昔から他人を不愉快にさせるし、人の気持ち

をまるで考えない。

こつちが歩み寄ろうとしても拒絶する……そんな奴が何でシトリ―生徒会長と仲良くなれたのか……まったくわからないから不気味なんです」

「今彼はソーナのお世話になってるみたいだけど、確かに不思議と言えば不思議ね」

ソーナの幼い頃から知るリアスも、そう言われてみればと頷く。

確かに元々……というか今もそうだが、普通の人間——それもある意味底辺とも言える性格かもしれない男と何故気付いたらあそこまで仲良くなれていたのか。

「ある時を境にまったく隠さなくなつたというべきか、最近はその悪魔祓いだつた二人とも一緒に居るし、何だか本当に変わったわねソーナは」

「そうさせたのが俺はアイツだと思ってるんです。

見たでしょう？ 副部長や小猫ちゃんやアジアに対する最低な話し方を」

「……。確かに煽る様な言い方だったわね、自覚があるない拘わらずに不愉快にさせるというのかしら？」

「そんな奴だからこそ、生徒会長の事を騙してる可能性だつてあるんです。

だから早くアイツを生徒会長から引き剥がさないと、生徒会長まで……」

「そうは言うけどソーナ自身は楽しげだし、もつと言えば彼がソーナに対してそこまでするとは思えないと思うのだけど……」

コカビエルの件が一誠によるナニかと疑っていた誠八はこれまで以上に一誠を排除したがる言動が多くなっており、今もリアスに同意を求めるかの如く一誠は駄目だと話している。

「一応言うには言うけど……そこまで彼が嫌なの？」

「嫌とかじゃないんです。関わらせたくないんです。」

「アイツのせいで無関係な人達が不幸になるなんて……」
「不幸って……」

仮にも弟に向かってクズ扱いする時の誠八はどこか必死であり、それを最近気付いたリアスは確かに一誠自身に問題はあるかもしれないが、何もそこまで言わなくても……と胸の中で呟くに留める。

リアス自身も一誠がまともじゃないとここ最近思い始めてたので。

「取り敢えずその話は置いておいて、明日の会合を頑張りましょう。」

ソーナ達も出席するし、その時にでも様子を見れば良いわ」

「……………はっ」

落ち着かせる為に頭を撫でつつ、この場に他の女の子が居ない事を利用して然り気無く抱きついたリアスにしぶしぶ頷く誠八。

それが正解だったのか、それとも終わりの始まりだったのか……………この時点で知る者は誰もいない。

両親達からの一誠との関わりについての小言を右から左に受け流したソーナはと言えば、血塗れになってもヘラヘラしながら外から帰ってきた一誠を出迎えていた。

「あははは、冥界つてのはクレイジーっすねセンパイ。」

三人して湖で遊んだ帰りに山賊に襲われちゃいました!」

「山賊? そんな輩はうちには居ないのだけど…………」

「山賊じゃなくて多分この地に住む悪魔よ。」

急に取り囲まれたかと思ったら襲い掛かって来たのよ」

「何とか追い払えはしたが、その……私とイリナは慣れてるから怪我も無かったが、戦闘力が無い一誠が袋叩きにされてしまつて……」

そう一誠を怪我させてしまつたと自分を責めてるのか、罰の悪そうにして襲われた経緯を話すゼノヴィアに、ソーナの顔が恐ろしいほどの無表情になつていくと、シトリー夫婦が口を開く。

「手当てをしてあげなさい。」

それとうちの領土にそういう狼藉を働く者はいない」

「転んだだけじゃありませんか？」

「……………あ？」

自分達の管理するシトリー領にそんな野蛮な悪魔はいない、単に自分で怪我をしたくせに盛つたのではないかと言うソーナの両親の態度に、様子を見ていた匙達は『え？』と困惑し、思わず一番に反応してしまつたイリナは、相手がソーナの親とも忘れて若干擦りむいた頬から血を滲ませながら食つてかかろうとする。

「ちよつとアンタ達いい加減に——」

「イリナちゃん！ …………… 良いから別に」

「けど……………」

「大丈夫だから。」

センパイもゼノヴィアさんも…………大丈夫」

我慢の限界だったイリナが爆発しそうだったのを止め、同じく何かしでかそうとしていたソーナや、しでかすことはせずとも一言文句を言いかけていたゼノヴィアの肩をそれぞれポーンと叩きながら血塗れの顔でヘラヘラ笑って見せた一誠は、思わず悪魔ですら吐き気を覚えさせる笑顔を深めてソーナの両親に言った。

「ごめんなさいセンパイのお父さんとお母さん。」

確かによく思い出してみたら俺の勘違いだったかもしれない。ええ、そうですね…………俺は転んだだけです」

「……………」

不愉快さしか感じない笑顔で自分は転んだと訂正する一誠に、両親や聞いていた悪魔

達やソーナの眷属達の顔が怪訝なものへと変わる。

しかしその怪訝な気持ちは――

「こんな転んだ程度で一々騒いで申し訳ございません。だから――

――これで許してください」

傷だらけだった自分の指をへし折り、第二間接から骨が飛び出てる様を見せ付けながら謝罪した事で驚愕に変わる。

「なっ!?! 何のつもりだ……!?!」

「何故自分の指を……!?!」

当然驚く周囲。

だが一誠はその理由を答えない代わりに……。

「やっぱり一本程度じゃ足りませんか？　なら二本でどうです？」
『!?!』

ニコニコ笑いながら、へし折った人差し指の他に中指もへし折る。

「な、何をしてるんだ!?　何故!?!」

「そ、そんな事をして何の意味があるのですか！　やめなさい!!」

流石に気持ち悪くなってきたソーナの両親が怒鳴る様に一誠にやめる様に命じる。

しかし一誠はそれを――

「意味ならありますよ、ふふ……お騒がせしてしまつたセンパイのご両親に対してお詫
びがこれしか無いんですよ。こんなちっぽけな人間である俺に出来る事が……はい、三
本目です。これでも足りませんか？　あ、足りませんよね？」

笑いながら謝罪の意味だと返し、薬指をへし折った。

「あはは、こりや痛いや。良くみたら骨飛び出てるしね。

あ、でも段々痛く無くなって来たぞ？　これはもしかして壊死でもしちやつたかなあ？」

「や、やめろ！　やめなさい!!　誰も謝罪など求めては——」

「いえいえ、これは求められるとか求めているとかじゃなくて、俺自身のアナタ達に対して行える精一杯の誠意ですから……ふふ、はい小指もやります！」

あまりにも終わってるやり方に吐き気を覚えたソーナの父が顔色悪く一誠を止めようとするが、一誠はそんな二人に笑顔を絶やさなのまま、鈍く嫌な折れる音を奏でさせながら小指の骨もへし折った。

「あー……：右手の指がおしやかになつちやつたなあ。でもこれじゃまだまだ許されないよなあ？　あ、そうだ逆の指も折りましょう！　お二人が許してくれるまで！　足の指も！　歯も！　それでも足りなければ目を潰し！　それでも足りなければ手を切断！　それでも足りなければ内臓をこの場でぶちまけて見せましょう！　許してくれるま

で!!」
「」

あははは! と無垢に笑つてる一誠だが、言つてる事は吐き氣を通り越した不愉快な言葉の羅列だ。

悪魔と言えども、いや、悪魔だからこそなのかもしれない。

脆弱な人間が平然とここまでやれるという様を目の前で見せつけられてしまつて抱く得たいのしれない恐怖は、それまで毛嫌いしていたソーナの両親に思わず言させた。

「わ、わかつた許す! 許すからもうやめたまえ!」

「だ、誰も罰を与えるなんて事はしないから……お願いだから——」

「いえいえ、これじゃ俺の氣が収まりません……ふふ、大丈夫ですよ? これは只の俺の自己満足ですから、アナタ達は何にも『悪くない。』」

やめろと懇願にすら聞こえる二人の言葉に血で汚れた顔で笑いながら一誠は右目を折れない指でくり貫き、その眼球をソーナの父の手に乗せ、悪くないと宣つた。

結局これが引き金となつて、遂に吐き氣に耐えきれずにソーナの眷属達やシトリ一家

の使用人達はその場で吐き、両親もその場に尻餅を付くようにしながらへたり込んだ。

「い、今すぐに彼を治療するんだ！ は、早く!! フェニックス家に連絡して秘薬を手に入れろ！」

そして生まれて初めて、只の人間に精神的にへし折られた。

精神的に潰される形となったシトリ―夫妻は当然の様に寝込んでしまった。

そのせいでソーナと一緒に居ても文句すら言えなくなってしまった訳だが、一誠にしてみればそれこそが目的だった。

「すいませんセンパイ、ちよつと無理矢理過ぎました」

とはいえ、敬愛するソーナの両親を精神的に傷つけてしまったのは頂けなかったと思ったのか、客室へと戻るや否や、受けた傷をイリナとゼノヴィアのも含めて全て否定すると、二人をお風呂場に入らせ、二人きりとなって謝った。

「良いわよ別に。どうせその内似たような事を私がやろうと思ってたもの」
「本当はもう少し時間を掛けたかったんですけど、あのままだとイリナちゃんが完全に
ブツツンしちゃうと思っただんで」

ソーナに頼み込んで敬語口調を止めて貰ってたせいかより親密に見える会話を繰り
広げながら、備えのソファに座る一誠。

「暫くは父も母も何も言わないでしょう。」

明日には一誠くんも向こうに戻るし、会うことも無い」

「ええ、今更センパイを諦めろなんて俺には無理ですから」

「私も、ですよ……ふふ」

ソーナもその隣に座り、自然と肩が触れ合う距離で微笑み合う。

互いに顔を剥がしても好きだという感情がぶれが無いかと狂気とも言える確かめ方
をしただけあり、周囲から何を言われようが離れる事は出来ない。

「二人はまだお風呂……ですよね？」

「ええ、シャワーの音が聞こえるから間違いないわ。ふふ、どうする？　今なら紫藤さんに邪魔されないと私はチャンスと感じてるのだけど？」

それ程までに二人は波長が合い過ぎた。合い過ぎてしまった。

イリナとゼノヴィアが席を外し、二人きりである事をわざとらしく微笑みながら強調するソーナが一誠の肩に頭を預け、手を重ねる。

それはソーナからの合図だ。

「あはは、センパイには敵わないなあ」

その合図を受け取った一誠はソーナの肩に手を回し、ゆっくり向かい合うよう動かすと、どこまでもマイナスに濁る……一誠にとっては素敵な目をしているソーナと見つめ合い、掛けていた眼鏡を外してあげる。

「センパイ……」

「今はセンパイって呼び方は嫌。名前で呼んで？」

「わかりました、ソーナ……」

そして促されて名前呼び、徐々に顔を寄せ合って額をくっ付け合うと。

「やっぱり大好きです……」

「私も大好きよ一誠……」

ふふ、皆して今更言っても遅いのにな……」

抱き合い、そのまま唇を重ねた。

何も変わらないと互いに教え合う様に、時間も忘れて何度も。

「ん、紫藤さんと違って胸が足りないかもしれないけど、ぎゅってしてあげる」

「胸の大きさとか俺全然気にしないですよ？　そもそもセンパイ以外にして貰うとかも考えてないし……」

それにしても、センパイって安心する良い匂いがする……」

それこそイリナとゼノヴィアが戻ってきた事にも気付かず、特にイリナに大騒ぎされるまで何度も何度も。

成長

同類という仲間を得てからの一誠は日に日にその最低マイナスさを増幅させており、今回遂に純粋な悪魔にもその在り方を嫌悪させる所まで墜ちに墜ちた。

その記念……という訳じゃあ無いだろうが、ソーナと互いにマイナスを磨き合ってたらの晩。

一誠は久々に夢の中で彼女と対面していた。

「ああ、アンタか。暫く振りだね」

「うん、良い具合に仕上がってる様でなにより」

何処から来たのか、一体何者なのか。一誠にマイナスという概念を教え覚醒を促した人外・安心院なじみとのどこぞの教室空間での対面。

魅力的な容姿と魅力的な声は人間どころか悪魔の様な存在すら心奪うレベルなのだけど、生憎一誠には一切効果が無い。既に安心院なじみの魅力を越える者を知っている。

「聞いたよ、ソーナちゃんの両親に悪戯をしたんだって？」

「やっぱりお見通しってわけか。」

「そうだよ、ちよつと色々とおつてね……」

耳心地の良い声をした安心院なじみの言葉に一誠は意外とも思わずに、質問に対して頷いてみせる。

「紫藤イリナちゃんが理由かな？ あの子が最初期のキミに影響されてまさかスキルを持つてたなんてのは、実のところ意外で僕もお腹抱えて笑っちゃったんだぜ？」

「そうなの？ 確かに世界で最初で最後つて俺に言つてたけど、アレはアンタが仕込んだからかと……」

「んな事したつて僕に何の得にもならないからやつたないよん。」

「あの子はキミという存在に種を蒔かれて後天的に発現させたのさ」

「俺がねえ……？ それよりアンタ何で天井を足場にしゃがんでるの？ 疲れないの？」

「上から物を見るのが僕だからね、キミもやってみるか？」

「足の裏は生憎吸盤で出来てないんでね、やりたくてもできないなそりゃ」

どういう原理かはわからないが、冷静に教室空間にある席に座ってる一誠を見下ろす……いや見上げる様にして天井を足場にしてしゃがんで此方を見つめる安心院なじみの言葉に一誠は少しスツキリと納得した様な顔だ。

「それより、イリナちゃんの件はアンタに直接聞いただけでも儲けものと思うことにするぜ」

元々イリナにも素養があり、決してこの蝙蝠みたいに天井を足場にしてる安心院なじみの貸し与えたスキルじゃないと分かれれば、イリナもまたオリジナルのマイナスだと安心出来る。

だからこそ、それ以上イリナについて探る必要も無いし、それよりも一誠としてはこうして夢の中で安心院なじみと会合出来たチャンスは是非とも利用したいと口を開く。

「てな訳で、何故か俺は明日例の魔王の人と会わなきゃならないんだよ。

ぶっちゃけ正直会わなきゃならん意味が無いと思うんだけど、仕方ないとも思っ

る。

それでなんだけどき安心院さんや、アンタに一つお願いしてみたい事があるんだよね？」

「ん？」

この先、真正面から勝ち目の無い人生を送る上で少しでもその辛さを和らげる為に、一誠はキョトンとした顔の安心院なじみに一つ頼み事をしようと口を開いた。

「アンタの——を——こうして——あーして——」

「……………ええ？」

その頼みとは一体何なのか。

話をした途端に若干嫌そうな顔をした安心院なじみが見える辺り、良いものではないのかもしれない。

若手悪魔……その中でもっとも将来性が高いと目されていく者達の会合。

そんな会合に出席する事となっていたソーナは、昨日の一誠の悪戯によりすっかりテ
ンション駄々下がりな眷属を連れて、会場である冥界都市・ルシファードの会場にやつ
て来た。

「緊張もしなくて良いし、終わるまでただカカシの様に突っ立ってれば良いわ。後は私
が適当にやるから」

「は、はあ……。でも俺達別に緊張してる訳じゃないというか……」

「昨日の兵藤君のアレが……」

「アレは実に素敵な最低^{マイ}つぶり^{ナス}だったわ。

思い返すだけでも惚れ惚れしてしまうほどに……」

他愛の無い(?) 会話をしながら、会場の控え室へと足を進めるソーナ達。

途中会場に居た悪魔達からの視線を受ける事になるのだが、ソーナは全く意にも返さ
ない様子だ。

「兵藤達はもう来てるんですよね? 朝方サーゼクス様からの遣いが来てましたけど

……」

「ええ、多分私たちとは別の控え室にでも——」

そんなマイペースさを発揮しながらいよいよ控え室の前までやって来たソーナが、顔色最悪な匙からの質問に答えた正にそのタイミングだった。

「だあかあらああつ!!! 何でアナタに一タイツセイ君と好きで一緒に居ることに文句言われなきやならないわけえ!? 何時からそんなに偉くなったのかしらねえ!」

控え室——と表現するには匙にとつては豪華すぎる作りの扉の向こう側から聞こえる、聞きなれた少女の声にビクツと身体を震わせた。

「紫藤の声つすよね……?」

「間違い無く揉めてるわ。まったく、昨日折角一誠君が身体張ったのにもう無駄にしちゃって。」

「一体誰と揉めてるのかしら?」

ソーナを含めて奇妙な四人組の中では一番キレイやすい激情な面を持つイリナの怒鳴り声に嫌な予感しかしなかった匙の声に呆れた気持ちで領きつつソーナは扉を開ける。そして飛び込んできた光景を見て納得した。

「もう良いってイリナちゃん。ここで騒いだらすんなり帰れなくなるし、大した怪我じゃないもん俺……あ、傷口が……」

「大丈夫よ、ここは私に任せて！ 一誠君の手前何とか我慢したけど、もう頭に來たわ！ 全員破壊してやる!!」

「お、落ち着けイリナ!! これじゃあ今までの苦勞が水の泡になるだろー!」

「そっくだやめろ！ お前達も何のつもりだ!!」

昨日の悪戯で、スキルをバラさない為に白い包帯だらけの姿の一誠が、その包帯に血を滲ませながらボロボロの出で立ちでひっくり返り、その一誠の盾になろうと激怒しながら恐らく一誠をそうさせただろう相手を親の仇の如く睨みながら今にもマイナスを全解放しそうな形相のイリナ、何をして良いのか分からずにオロオロしてるゼノヴィア。

そして――

「第一無理だつて、イリナちゃんでもこんな大勢相手に戦うなんて……いつてて。それにアナタもわざわざ庇わなくても大丈夫ですよ？ 立場もあるでしょうに？」

「いや、これはいくらなんでもおかしい！ 何故キミが……」

「こればかりは生まれついてのものですからね……あははは——うぶっ!? 内臓やられたかなこりゃ？」

唯一一人の若手悪魔が一誠を心配していた。

『……………』

そんな四人を——特に一誠とイリナを嫌悪するように 無言で見つめる若手の悪

魔達とその眷属を代表するかの様に前に立つ兵藤誠八。

この構図を見た瞬間、ソーナは何がどうして一誠がボロボロになってるのかを悟った。

そして悟つたと同時に行動も速かった。

「これは何の騒ぎ？ 寄つて集つて一人の人間を苛めるのがアナタ達の趣味なのですか？」

昨日の一誠並み——いや、それを越えるかもしれないレベルの圧倒的な負マイナスを放ち、嫌でも自分に意識を向けさせたソーナの出現に今気付いた様子で全員が、老若男女全てが見惚れてしまいそうな『笑顔』を浮かべながら鈴が鳴るような声を放った。

「そ、ソーナ!? いや、いやこれは違うのよ!? 私は止めようとしたのに皆聞いてくれなくて……」

ゾツとするような、誰が見たつて笑顔なのにドロドロとした不愉快さを肌で感じ取つたりアスが慌てた様に弁解しようとする。

だが、どう見ても一誠と同じ顔をしただけの男を御せてない時点で同罪でしかない。

「シトリー生徒会長、これは……」

「あら兵藤君、暫く振りですね。」

相変わらず一誠君がお嫌いな様ですが、一体全体私にとつても見知つた方々まで味方

につけて何をしてたのでしょうか？」

許すとか許さないとかじゃなく、ただただ疑問ですよと笑みを浮かべながら誠八から目を逸らしたリアスへ……そして今日の会合に出席する若手の悪魔達に目配せする。

「それはコイツが……」

「コイツが？」

「ここに、居たからですよ……」

よく見れば一誠を庇ってるのはリアスの従兄弟一人で、他は誠八側に居るような立ち振舞いだし、素行の宜しくない悪魔や、眼鏡を掛けた女悪魔等々までもが誠八の言い分に同意するような様子だ。

「アナタも含めて、イリナもそのゼノヴィアもコイツのせいでおかしくなってる。

だから、アナタ達を救う事と同時にコイツのせいでこれ以上誰かがおかしくならぬように遠ざけようとしただけです」

「おかしい、ね？」

「何がおかしいよ。ふざけんじやないわよ……マイナスとは別の意味で最低よ」

「そもそも何故私達がおかしくなったとか、救うとか一々上から目線なんだ……」

「見た限り双子じゃないか。なのに何故こんな……」

一誠を害悪と判断し、それを他の誰かにも植え付けてる様な行為にイリナは吐き捨てる様に誠八の方が最低だと罵り、ゼノヴィアも上から目線の言い方に顔をしかめる。

「それで数の暴力ですか。」

なるほど、笑えるくらいに悪魔らしいですねアナタって人は？」

害悪^{マイナス}である事は一誠も自覚してる。

なので害悪だからという理由でこんな真似をしてくれた事自体に文句は無い。

現に男としてはかなり頼りない撫で肩でスラツとした体型の一誠と違い、顔立ちこそ似ていてもガツチリとした体型の誠八は一誠を害悪と言わんばかりだ。

「それはコイツが……」

「はいはい、二言目には一誠君が悪いですよね？ わかってますわかってます。けど、

もう少しらしい理由くらい考えたらどうです？　というか、こう言っちゃなんだけど言わせてもらって良いかしら？」

ほらやつぱり。

どうあつても一誠が害悪マイナスを振り撒くからと言う誠八にソーナはわざとらしくため息を吐いて一拍置き、誠八を含めて黒く、ハニワを連想させるような思わせる様な寒気のある笑顔をしながら言った。

「自分のやつてる事が全部正しいと思つたら大間違いよ……………『この偽善者以下が。』」

「つ……………」

「そ、ソーナ…………？」

「一誠くんに影響されたから？　笑わせないで貰いたいわね。」

少なくとも私は『元々』こうだし、紫藤さんだつてその素養があつた。まあ、ゼノヴィアさんはどうか計りかねてるけど、少なくとも強制されて我々と共に居る訳じゃない。

それを一々、心底どうでも良い…………リアスの兵士つてだけの男にとやかく言われたくなんてないわ」

猛毒とも言える言葉を刺すように投げ付けたソーナは、すっかりマイナスに飲み込まれて声を詰まらせた連中に続けた。

「それでも彼を排除したいというのなら構わないわ。けど覚えておく事ね——私達^{マイナス}過負荷にルール無用で戦う事がどれ程に愚かなのか」

以前リアス達にも言った事がある台詞。

それはある意味での宣戦布告なのかもしれない。そして明確な宣言なのかもしれない。

自分は確かに悪魔だけど、アナタ達とは違った欠陥品である事の。

「例えばそうね……？　一誠君、紫藤さん、ゼノヴィアさんはサーゼクス様から直々に招待されたゲスト。

そのゲストに暴行を働いたとサーゼクス様が知ればなんて言われるかしらね？」

「……いや、こんなクソ不愉快な人間なんだぞ？　サーゼクス様に話せばわかって——」

「あらそうゼファードル・グラシヤラボラス？　なら今すぐにでもサーゼクス様に聞き

ましようか？　なんて答えるかしらね？」

「……」

一発で不愉快な人間と本能で察知し、それまで喧嘩してた相手であるシーグヴァイトと共に共闘・そして誠八の言葉に共感して思わず暴行を働いてしまっていたゼファードルが再び言葉を詰まらせる。

人間で云うところのヤンキー然とした姿や性格をした悪魔でも、魔王の名が出てしまえば何も言えないのだ。

「まあ、告げ口なんてしないから安心して欲しいし、今回の事も黙ってるわ。だって皆同じ若手の悪魔ですもの？　だから『皆悪くない。』」

でしょ？　一誠くん？」

「ちえ、全くセンパイの素敵さが天井知らずのせいで見惚れちゃいましたよ。

そうですね——確かに皆は『悪くない。』」

悪くない。その言葉を受けた瞬間、言い知れぬ吐き気を覚えた誠八達を他所に、此処に来てソーナが優しげにひっくり返っていた一誠に対して話を振ったとたん、それまで

満身創痍で立てもしない筈だった一誠が、『平然』と『簡単』に……立ち上がってソーナの横に立つ。

「な!?! お前、何で立て……!?!」

ギョツとする面々に一誠は真つ赤に染まった包帯を取りながらニコリと笑う。

「色々ギリギリに決まつてるじゃないか皆さん。その『お兄ちやま。』にや鼻折られてこんなんだし、前歯もこれ総入れ歯確定。

んで、えくつと、そののヤンキーみたいな人にはお腹殴られて——ガバツ!?

……うえ、失礼、こんな風に血を吐くのは止まらないし? その眼鏡の人には足を折られて倍に腫れてるぜ? ふふふふ」

マゾを疑うくらいにヘラヘラとボロボロのナリで笑う一誠に罪悪感よりも嫌悪が勝ったのか、顔を歪める面々。

「だ、ダメだコイツ……」

勿論誠八に至っては完全に見放した顔をしてるのだが、それ以上に本能的に気に入らないのは、多くの賛同があつても尚溢れた一人の悪魔の行動だった。

「今すぐにも俺の眷属達に治療させよう。この度は本当に申し訳ない……。俺の従兄妹共々……」

「ちよ、ちよつとサイラオーグ！ 私は——」

「黙れ！ お前が直接じゃないにせよ、そんな言い訳が通用するか！ 異常だと思わないのか!？」

従兄妹と言われて慌てるリアスを一睨みで黙らせたサイラオーグなる悪魔が、味方をしているのが気に入らない。

誠八は日に日に膨れる一誠への嫌悪により、内心顔を歪めに歪めていた。

「別に俺の事なら良いですつて。それより止めた方が良いつすよ？ 俺なんか庇つたつて寧ろ良いこと無しですし。」

てか、その先輩と従兄妹だったんですか——あー、よく見ると寧ろ魔王の人その

「に良く似た面影がありますねえ？ 髪の色は違うけど——ごほごほっ！」

「もう喋らない方が良い。内臓が何カ所潰されてる筈だし、逆にそこまで流暢に喋れるキミは中々タフかもしれないが……」

「タフじゃなきや人生なんてやってられませんよ、ねーセンパイ、イリナちゃん？」

「ねー」

「え、私には同意を求めないのか……？」

「だってキミ、ジャンル違うし」

「うー……」

サイラオーグ・バアル。

リアスの従兄弟にて、若手の中では文句無くナンバーワンとも言われてるらしき悪魔が何故、欠陥品を庇うのかと、誠八は当然として一誠を一発で嫌悪したゼファードルやシーグヴァイラなる悪魔も疑問だった。

今だって不愉快キモチワルサさを撒き散らしながら勝手に談笑してる姿を見ても心配してる。

「後少しで此処から帰れますし、この程度の代償なら問題は無いっすよ？ えーつと

……」

「サイラオーグ・バアルだ。しかし……」

「問題はありせんわサイラオーグ殿、彼の治療は私が行いますので」

何故平気なのか、何故あの不愉快さが何とも思わないのか。何処かで事前に傷でも負ったのか、服の下から血を滲ませ、フラフラし始めた一誠に思わず手を伸ばして支えてあげてるサイラオーグに気に入らないという感情を密かに抱き出した誠八だったのだが――

「これは何の騒ぎかな？」

『……!?!』

普段温厚な姿が多い紅髪の魔王が、戦時の時を思わせる鋭い殺気を放ちながら現場へとやって来たせいで、一誠に暴行を働いた者達はそれどころでは無くなってしまった。

「さ、サーゼクス様、何故ここに……?」

「君たちが騒ぎを起こしていると聞いて少し様子を見に来たんだ……うん、畏まらずに楽な体勢で良い」

どう見ても、どう感じても穏やかじやない雰囲気を感じてもなく放ち、膝を折ろうとする一誠、イリナ、ゼノヴィア以外の面々に楽な体勢と告げながらサーゼクスは、着ている服まで血まみれの包帯まみれな一誠を目に入れながら、取り敢えず近くに居たヤンキーみたいな悪魔と眼鏡の女性悪魔、そしてリアスに問う。

「彼に……彼達に何かしたか？ いや、見ればわかる、何かしたな？ 暴行か？」

「こ、これは……」

「じ、事情がありました……」

穏和な雰囲気は無い。嘘偽りは一切許さないという殺意を放つ悪魔の長の一人からの質問に顔色を真っ青にしながら目を泳がせる面々。

「俺の弟がこの方々を不愉快な気持ちにさせ、それを良くないと思って自分がやりました」

そんな悪魔達を、端から見れば庇う様に前に立ったのは兄弟である事をわざとらしく

主張する誠八だった。

簡単に言えば単なる兄弟喧嘩だったと納得して貰う算段らしい。

双子の兄である誠八がそう言えば多少サーゼクスも許すだろう、そうゼファードルやシーグヴァイラヤリアスはホツとするのだが……。

「なるほど、兄弟喧嘩ね。

キミは少しばかり自分が転生悪魔である自覚を持つて欲しいものだ。

弟……一誠君は一般人で転生すらしてない。にも関わらず転生悪魔の力で傷つけられようかくらいわかるだろう？」

サーゼクスは笑わせるなとばかりに誠八の主張に対して辛口に返した。

「そもそも彼等はこの私の客人だ。その客人に対してこの行動を取るといふことは、招いた私に弓を引くと判断しても良いのかな？」

己の客人に暴行を働き、招いた自分に恥をかかせたという言葉には全員が顔を歪めて俯くしか出来ない。

だが、そんな彼等にある意味で助け船を出したのは意外な事に……

「あー、魔王の人そのーさん……じゃなくてサーゼクスさん？ その辺にしてあげれば良いんじゃないやありません？ この人たちこの後何かやるんでしょう？ やる前からそんなテンション下がる様な事したら可哀想じゃありませんか」

『……』

「む、キミは彼等を許すのか？」

殴る蹴られるをされた一誠が誠八を含めて庇ったという事実には、自分達が一瞬庇われてると分からずにポカンとしたり、逆に一誠が完全な被害者と思っていたサイラオーグは目を見開く。

ゼノヴィア、イリナ、ソーナは『ああ、何かしでかすな』と内心ちよつとわくわくした眼差しを一誠に送り、偶々見ていた匙達ソーナ眷属は昨日の件を思い出して気分悪そうに顔を真っ白にする。

「許すとか許さないとか以前に、別に何も思ってますからね俺。

ほら、雷に打たれたと思えば誰のせいでも無いでしょう？ 自然の成り行きなんです

から」

「つまり、こういった暴力行為を受けるのは自分にとって日常茶飯事だから、今更気にも止めちゃいない？」

「ええ、ま……最近俺も大好きなトモダチと一緒に居てくれる様になつたんで暫くこんな事は無かつたのですがねえ？　むぐむぐ……べっ！　あ、失礼さつき横つ面ひつぱたかれた時に奥歯がへし折れたみたいで……あーあ、また歯科医でお世話にならないとな」

肩を貸してくれていたサイラオーグに小さくお礼を言いながら離れて貰い、フラフラと控え室にしてはホテルのスイートルームみたいな豪華絢爛さを誇る部屋に備えてある大理石みたいなテーブルの前に立った一誠が口から吐き出して持っていた歯をカランカランと置いてあつたグラスの中に染まつていた血と共に放り込み、につこりと顔を歪ませまくる面々に微笑む。

「強いて言うなら、歯医者代くらいは保証して欲しいなあ……なんてのも言いません。

だから魔王様もここは抑えて抑えて……ね？」

「む、むう……」

『……………』

意味がわからない、何を考えてるのか全然わからない。

行動がまるで読めない生物を目の当たりにしてる様で逆にちよつとした恐怖を感じる悪魔達はその場から下手に動くことが出来ず、渋い顔をするサーゼクスを宥める一誠を不愉快な気持ちを持ちつつも目が離せず――

「だから、この怪我の仕返しはこの方々とは何の関係もないそこら辺の悪魔の住人で晴らさせて貰いますね？ 仕方ないよね、それもまた『雷に打たれた不運』みたいなものだもん」

直接では無く、一生根が残るやり方をすると堂々と微笑みながら宣言してみせた一誠に、関わらなければ良かったと後悔した。

「例えば、俺が憂さ晴らした相手がその人達にとって偶々大切な方だったとしても、仕方ないよね？ だって運が悪かったただけなもの？ ねえイリナちゃん？」

「ええ、そうね。仕方ないわね、一誠くんは『悪くない。』」

口を半月につり上げ、心が全く無い笑みを浮かべながら例え話という名の仕返し宣告に、思わずいきり立つ。

「あ、アナタ！ さつきからふざけた事を言ってる様だけど、アナタの様な人間が私のアガレス家を——」

直接では無く周囲への仕返しとの言葉にシーグヴァイラ・アガレスが思わずと云った様子で一誠に食って掛かろうとする。

それは勿論他の面々も同じ気持ちであり、現に誠八は一誠の口を閉じさせてやろうと人間相手にオーバークルな赤龍帝の籠手を纏っていた。

しかし、そんなシーグヴァイラの威勢は、ポリポリと頭を搔いていた一誠により——

「アンタの実家はアガレスって言うんだ？ 俺アンタに言われるまで名前すら知らなかったけど——」

「うっ!？」

「ふーん？ ありがとう、その名前覚えておこーつと！」

全身がズタボロとは思えない蛇のような気持ち悪い動きでズイツと顔面をこれでもかと接近させた一誠の感情が全く見えない、張り付けた笑みとその何かやらかしてしまいうような言い方に、全身を氷付けにされたかの様な寒気に襲われた。

「眼鏡掛けてるからセンパイと被ってるなあと思つてたけど、アンタ厚化粧だね……あはは、センパイの方が億万倍美人さんと俺は個人的に思いました」

その失礼な物言いに怒りさえわかない。

この先自分の家の者が、この得体の知れない人間に『何を』されてしまうかという、脆弱な人間相手に抱くにはおかしい不安感が勝ってしまったシーグヴァイラは、遂にカタカタ震えながら、声も震わせながら本能的に言ってしまう。

「わ、私が悪かったです。だ、だから許してください」

それは一種の屈服かもしれない。

わざと殴られてたのも、全部はこの状況へと持っていく事への伏線だった——という

のは流石に大袈裟かもしれないが、やつと見えたこの得体の知れなさは本当の本当に危険なのかもしれない。

そう思ったからこそ、震える声でシーグヴァイラは言ってしまったのだが……。

「許すって何を？　俺何にもアンタに許さない感情は無いぜ？　だつてさつきまでの単なる天災と思つてるし？　元々好かれる様な人間じゃないもの？　だからアンタ達が俺を嫌悪する理由もわかるし、それを責めるつもりだつて一ミリも無い。」

うん、ほら……誰も彼も、アナタも『悪くない。』」

ニコニコと、ジーグヴァイラだけでは無くゼファードルや他の面子に向けてそう締めた一誠は、それまで遠慮無く暴行していた一誠に誰もが手を出せずに居る中、微妙な顔をしているサーゼクスに向かってだめ押しをする。

「あーそうそう、サーゼクスさんにお土産持ってきたんですけどね」

「え、お土産？」

「うん、安心院なじみの生写真なんだけどさ……頼み込んでパンチラしてるアングルで撮らせて貰ったんですよ。サーゼクスさん喜ぶかなーって？」

「あ、あ、当たり前じゃないか!!!」　　そ、それは今あるの!?!」
 「あるにはあるんだけど……あーすいませくん、怪我が酷くて懷に仕舞ってたその写真がズツタズタの血塗れでおしやかになってますわ……ほら」

安心院なじみという誰もが聞いた事が無い名前が出た瞬間、明らかに変なテンションになるサーゼクスに驚く面子が多い中、一誠が懷から取り出した写真だったそれを見て絶望する。

「あ、あ、あああああつ?!?!?!?!」

絶叫するサーゼクスが、一誠から受け取ったグシャグシャで血塗れで、修復が完全に不可能な写真だったものを抱えて半泣きになる。

「そ、そんなあ……そんなあああつ?!?!?」

「いや、ホントごめんさい、良いお土産だと思っただんですけどねえ………えーつと、センパイにイリナちゃん?　別に俺パンチラを撮ったからって変な事考えてた訳じゃないからね?」

「わかってるわ、けど何か複雑だわ」

「安心院なじみって前に一誠くんが言ってた女よね？ モヤモヤする……」

「そ、それより魔王が泣いてるが……」

おいおいと妹やその他にドン引きされてるのも何のそので写真だった紙切れを抱いて泣いてるサーゼクスをゼノヴィアが指差すと、一誠が『おっと』と思い出した様に近寄り、気安くポンと肩を叩き、穏やかな声で言う。

「そうなった原因は俺が勝手にしばかれたからです。

まあ、しばいたのはこの人達ですけど、安易にポケットなんぞに入れなきや無事だったんで『責めないでやってください。』……………ね？」

「……………ぐう、ぐうう!!!」

いつそ優しき天使の様な言葉だが、一誠に暴行を働いた連中にしてみればまさに悪魔の言葉だった。

サーゼクスにとっては余程欲しかった写真だったのは態度でわかった。

だからこそ、一誠の言葉を聞いた瞬間先程が赤子レベルに思える鬼の形相と殺意を

もって睨まれた面々は、蛇に睨まれた蛙の如く恐怖に顔をひきつらせて動けない。

「さ、サイラオグ……ソーナさん、彼等を……別室で丁重に、治療ともてなしをなさい。

わ、た、私は……ちよーつと、この——ガキ共に話があるんだ……ふ、ふひひひっ!!」

「ちよ、さ、サーゼクス様!」

「あらら……あんな口調のサーゼクス様を見るの始めてかも」

「暢気に言ってる場合か!?! お、お止めしないと殺されるぞ!?!」

「仕方ないんじゃないですか? サーゼクス様へのお土産を彼等が破壊させちゃったんだし、少なくとも私達はまったく悪くないわ」

「いや、それは……なるほど、一誠と言ったか、キミは恐ろしい奴だな。

あの局面からここまでひっくり返して……」

「過大評価が過ぎますよサイラオグさん? 偶々そうなたただけですから。

まあ、あの人も流石に殺しはしないでしようし、そもそも俺じゃあ止めるなんて無理なんで、とつとと退散しましょう……いてて、センパ、イ、後であの人が終わるまでギユツとして欲しいっす」

「勿論、後でどこるか今してあげる……はい」

「へへ……センパイ……」

「ふふ、でも紫藤さんにも少しは頼んだら？ 怒っちゃうわよ？」

「ええ？ ……じゃあ申し訳程度にイリナちゃんにもお願い——」

「当然！ その女より絶対満足させてやるからね!!」

「ぐえ!?! ぐ、ぐるじ……! 息できない……!?!」

「ふふん、そいつと違っておっぱいに自信あるもん、どう一誠くん？」

「……………」

「窒息しちゃってるわよ紫藤さん、下手ねえ？」

「う、うっさいわね!! ちよつと失敗しただけよ!! 今度メイド服でご奉仕してあげるん

だから!!」

「別に私はやらんけど、何だこの寂しい気持ち」

「キミはちよつと違うのか？ なんとというか、大変だな」

「ふつ、初対面の悪魔に同情されては私もいよいよおしまいだな……」

バキバキと指を鳴らし、殺戮オーラ全開で震える面子の前に仁王立ちするサーゼクスを放置し、とつとと部屋をサイラオーグをさりげなく巻き込んで出ていく一誠達。

この後、死んだ方がマシだったという顔色で会合が行われたのは云うまでももなく

……。

「私の目標はレーティングゲームを学べる学校を設立する———というの、どうせ皆様に半笑いで受け流されると思ってたので建前で、好きな人と永久に一緒に居続ける、ですかね。ああ、相手は人間ですのでシトリー家の血は姉の魔王セラフォル・レヴィアタンに押し付けますよ？ 悪魔の未来なんてどうでも良いんで」

ソーナもソーナで上層部に平然と喧嘩を売るような真似をしたもんだから、最悪な空気となったらしい。

終わり

種時き一誠くん

殆ど喧嘩を売るような真似をソーナは平然としたせいで、シトリー家の次期当主としての評価は最低に近いものだった。

いや近いじゃなく完全に最低となった。セラフォルルが必死こいてフォローしたのも虚しく『向上心の欠片無し、自分の血筋に対して健全ではない、目上に対する尊敬もない』という、散々過ぎる評価を降されてしまった。

「い、良いんすか会長？ これじゃあいくら何でも……」

「言いたい事はわかるし、十二分にアナタ達を幻滅させた自覚はあるわ。」

けれど、自分の本質を隠して生きるのは嫌なのよ、あの日私達は誓い合った様にね」

「誓い合った相手は兵藤くん、ですな？」

「そうよ……ふふ……」

『……………』

シトリー家に戻り、精神をある程度回復させた両親に会合での行動について怒り、早

速のお説教を受けたソーナは、集まった眷属達の前でニコニコヘラヘラしながら、これまで表に出さなかつた本質マイナスを隠さないと宣う。

当然眷属達は——特に匙は表向き性格をしていたソーナに惚れ込んでいたのもあり、かなり複雑だったが、一誠というソーナの隠していた本質に最も近い存在による共鳴により、互いに惹かれ合っている事を知ってしまった為、失恋にも似た気持ちでソーナのこれからについて反対出来る訳が無かつた。

「最初から俺に脈なんてありはしなかつたんですね……」

「私から言つても嫌味にしかならないと思うけど、そういう事になつちやうわね。残念だけど……」

「ええ、わかつてます、けどだからといって俺は会長の兵士を止めるつもりはありません。ん。」

「そうじゃなくても貴女には多大な恩がある」

「それは家の力が大半で私は殆ど何もしてないわ」

「それでもです」

ソーナが素で楽しく、心地よく、安心させられる相手は匙より遥かに『弱い』人間の

一誠だけというのは、既に痛いほど思い知ってる。

弱い癖にソーナが好きで、弱い癖に自分ならまず出来なかつただろう、悪魔への喧嘩を平然と売り付け、挙げ句逃げる。

どれもこれも匙には出来ない……歯がゆすぎる真似。

真正面からでは無く、右斜め後ろからグサリと鋭利な刃物で刺して来るようなやり方……言つてしまえば卑怯なやり方をする男。

「でもやっぱり悔しいっす」

いっつも生傷だらけで、最近では周囲の嫌悪を受けてもヘラヘラ笑つて見せる人格破綻者に一人の女性を巡つて負けた。

自嘲気味に笑つて悔しがる匙に、ソーナを含めて眷属達は——特に匙に仄かな想いを持つ者達は悲痛な面持ちだった。

「兵藤達は人間界に今日にでも帰るんですか？」

「ええ、本当は何故かりアス達と行う事になつちやつたレーティングゲームの日まで居て欲しかつただけ、あんまり我が儘言うのもね。

父と母はさっさと帰って欲しいみたいだし」

そんな少女達の眼差しに気づいてない匙は、気持ちを切り替えようと一誠が本日人間界に帰るのかという話題をソーナに振る。

サーゼクスからの招待を受け、それが終わればさっさと帰るのが当初からの一誠達の予定であり、後はソーナが人間界で使ってる自宅でお留守番する段取りだった。

一応自らの評判を地に向かって投げ落としたとはいえ、ソーナはシトリー家の次期当主な為冥界に残らなければならないので、ほぼ一ヶ月は一誠と会えなくなる計算だ。

「会長が頼めば余裕で残るって言いそうですがねアイツ……」

「そうかもしれないけど、多くの悪魔から既に嫌悪を持たれてる以上、残ってもらう訳にはいかないわ。」

紫藤さんもゼノヴィアさんも嫌でしょうし」

匙の意見にソーナは静かに首を横に振る。

確かに今述べた通り、一誠にもう少し冥界に残って欲しいとでも頼めば、ソーナ大好き人間である彼の事だし即頷くだろう。

だが此処は人間よりも力の強い悪魔だらけの異界。

既に悪魔をも嫌悪させる程のマイナス成長が著しい一誠が残ってみろ、イリナもそうだけど毎日が嫌悪の感情や行動を向けられるだろうし、誠八みたいな輩に暴力を振るわれる。

現実と幻想を入れ換えるスキルで死をも欺ける一誠なので、ぶつちやけ誰も殺せやしないが、殴られるとわかってるこの冥界に自分の感情を優先させてまで残って欲しいとは思いたくない。

受け入れたとはいえ、ソーナにしてみれば覚醒前の卑屈な一誠を知ってるので。

「別に四六時中一緒じゃないと生きていけないって訳じゃ無いし高々夏休み中会えないってだけよ。」

心配しなくても大丈夫」

「はあ……」

薄く微笑むソーナに眷属たちは気の抜けた様な声を出す。

意外にもソーナと一誠はそこから辺が結構ドライだったという一面を知ったからどうだって訳じゃないけど、それでも少しだけ意外だったので、微妙な相槌をしてしまった

ようだ。

(………………。というのはこの子達への建前で、本当はかなり不安なのよ？ だって紫藤さんがその間に絶対一誠くんに何かするだろうし)

内心は凄く不安がってたりするソーナの本心に気付かずに……。

「ところでその兵藤達は部屋で帰る準備ですか？」

「準備なら昨日の時点で終わってる。今三人は外よ」

「え!? そ、外って、外に出たら悪魔の住人の方々に何かされるんじゃないか……」

結局帰る方向は変わらずに話はそれで終わりを迎えたのだが、ふとその一誠達の姿が見えないと気付いた匙の質問にソーナは軽い調子で外に出払っていると返すと、一誠が学園だろうが冥界だろうが嫌悪される事をよく知ってる他の眷属の一人が驚いた様に危険じゃないのかとソーナに問う。

「ええ、確実に何かされるわ。」

けど、手を出せばタダでは済まされない誰かと一緒なら問題無い。そうは思わない？」

「手を出せない相手と一緒？」

ソーナの意味深な言い方に全員が頭に？を浮かべる。

まさかサーゼクスと会ってるのか？ と会合時でのやり取りを思い出す眷属達は、クスクスと笑いながら『意外な方と接点が出来るなんて思わなかったわ』と呟くソーナを見つめるのだった。

元々、兵藤誠八の弟という理由である程度彼がどんな人間なのかという探りは行っていた。

その探りの結果は、兄の才能に何一つ勝てやしない凡人で、それによつて卑屈気味になつてしまつてる人間。

というのが、私達の認識だった。

そう——『だった。』

「久しぶりだね白音？ 元気してた？」

「黒歌……姉さま……！」

全てはシトリー先輩と関わる様になってからその歯車は狂った気がする。

卑屈を通り越したナニか、開き直った様な変質。

最早今の兵藤一誠先輩は、卑屈にセーヤ先輩を避けていた時の様な人じゃない。

圧倒的に酷くて、圧倒的に不幸で、それを受け止めて何時もヘラヘラ笑ってる理解できない人。

「会場に紛れこませたこの黒猫一匹でここまで来てくれるなんてお姉ちゃん感動しちゃうにゃ〜？」

「姉さま、これはどういうつもりですか？ 何故アタガここに……！」

でも、だからこそ朱乃副部長とも話し合ってた事だけど、私達はもしかしたらヒーローみたいなセーヤ先輩より、シトリー先輩や最近じや聖剣事件から加わる様になつてる悪魔祓いの二人組側なのかもしれないと思ってしまう。

だって、私も朱乃先輩もほんの少しだけ思ってしまったのだ。

『大丈夫大丈夫……キミ達の抱える嫌な事はゼーんぶ俺が『否定』して『逃げさせて』あげるから』

こんな台詞を言つて欲しいという願望が。

勿論、あの人にそんな事を言われた所で本当にその願望が叶うなんて思つていない。

先日の会合でも無意味に嫌悪されて一方的に殴られて反撃もできず、悪魔祓いの二人やサイラオーグ様に庇われてしまつてゐるのだし、期待できる話じゃない事ぐらいはわかつてゐるし、あの人でも私や朱乃先輩に興味なんて欠片も無い筈。

でも、あの悪魔祓いの二人……特に何の接点も無いゼノヴィアという人がすんなりとあの人達のドロドロした輪に入れたのだと思つてしまうと……。

「怖い顔しないでよ、ちよつと野暮用なの。」

悪魔さんたちがここで大きな催ししているつていうじゃない？

だからあ、ちよつと気になつちやつて。にゃん♪」

「そうですか、じゃあ私を個人で呼ぶのは止めてください」

ああ、もしこの状況から逃げらる手段があるなら……私はあの人に死ぬほど感謝できる自信があるな。

はぐれ悪魔なのに冥界に侵入し、あまつさえ私を人気の無い森に呼び出した『姉』とその仲間だと思われる男の人の前に、私は頼りになるセーヤ先輩達では無く、殆ど関わりが無い……けれど放つ異様な——されど心地好い雰囲気を放つひよろひよろの先輩の姿を思い浮かべるのです。

「うん、わかった——と言いたいんだけど、実の所白音を連れ出すつもりなんだよね？一緒に来てよ？　また仲良くしよ？」

ああ、こんな事なら周囲に相談も無しにノコノコ一人で来るんじゃないかった。

どうやら久しぶりに顔を見た姉は、私の置かれた状況をガン無視で私を連れ出そうって魂胆らしい。

はぐれ悪魔になってるのにこの場所に居る事はそういう事だし、そもそも今までこの人は何処で何をしてたのやら……。

「嫌です。アナタが何処で何をしてたのかも知らないし、聞きません。」

私はリアス・グレモリーの戦車ですから」

「ふうん、随分とあの女に懐いてるんだあ……へー？ 嫌だなそれ」

「おいおい、勝手に連れ出したら騒ぎになるしヴァーリが何て言うか……」

「大丈夫よ、白音には仙術を扱える才能があるって言ったらヴァーリも納得するにやん」
「そらそうだがよお……」

ヴァーリ？ 確かその名前は三大勢力の会合で耳にしたし実際見た白龍皇。

アザゼルさんが禍の団に寝返ったってめんどくさそうに言ってたけど、まさかこの人、テロ組織に与したって事？ そしてあの男はその仲間。厄介だ。

「私の仲間が周りで待機してるというのは考えてないんですか？」

冗談じゃない。テロ組織に連れていかれた挙げ句勝手に寝返ったなんて吹き込まれたら今度こそ私は死ぬ。

リアス部長に保護された事で今の立場を維持できたのに、勝手に流されていくのはごめん。

ここはブラフを噛ましてでも乗り越えるべきで――

「それは嘘だろ、あんまり俺達を嘗めて貰ったら困るぜい黒歌の妹？　今この周りには何の気配も無い、だからお前一人……だろ？」

「……………」

……………そんな都合良くなる訳がないか。

最悪だ……バカ正直に一人で来るんじゃないか……。

「白音、大丈夫だよ？　今度こそお姉ちゃんが守るから、ね？　一緒に行こうよ？　追われても追い払えるからさ」

「……………」

姉が微笑みながらゆっくり近づいてくるのに合わせて私は後ろに下がるけど、全力で逃走を図った所で絶対に捕まる。

昔からそうだ……この姉は私は所詮ただの出廻らしと違ってしまいう程に才能の塊。だから私は嫌いなんだ……そして共感してしまうんだ。

「イリナちゃん、ゼノヴィアさん、サイラオーグさん……うう、完全に迷子だこれ」

「「?!」」

兄弟を避けようと思うその心理が。

「誰？」

「いや、誰っていうより何時から居たんだ？ 気配なんてまるで——うっ!? な、何だ

よコイツ……!?!」

「……………。兵藤、先輩……」

左側の顔以外は全て包帯に巻かれたズタボロな出で立ち。それは冥界に入ってから負った数々の生傷……と思う。

撫で肩、セーヤ先輩より頭一つ分は低いかもしれない身長、そして何より感じる吐き気を催す形容しがたい雰囲気。

それは間違いなく、ある意味セーヤ先輩以上に印象深く残ってしまう最低な人……兵藤一誠先輩だった。

「ん？ あー!? やつと人が居た！ すいませーん！ この無駄に広すぎる森の出口つてどつちですかー？」

「う、こ、こつちに來るぜい……」

「な、なにアレ？ 気持ち悪い……」

「……………」

何か理由があつてこの場所をさ迷つてたらしく、それも一緒に居た人たちとはぐれてしまったのだろうか、大分メソメソしてた様に見えた先輩が此方に気付いた瞬間、本当に心底気持ちが悪い貼り付けた笑顔を浮かべてこつちに近づいてくる。

その出で立ちは全身ほぼ包帯だらけというのもあつて中々に凄みもあり、黒歌姉さまとそのお仲間の男の顔色を変えるに至つていた。というか、早速初対面の相手に無意味に嫌われる才能を發揮してる辺りは流石かもしれない。

「もうかれこれ三時間は迷つちやいましたえ？ このまま力尽きてウジ虫の餌になつ

ちやうかと……いやはや今世紀最高の運が発動できて助かった！」

「……………」

「……………」

「………………。何をしてるんですかアナタは？」

黒歌姉様すら引かせる程だとは思わなかったけど、この状況に置いては正直かなり心強い。

そう感じざるを得なかった私は、心の奥でホツとしながら思わず兵藤先輩に話しかけてしまうと、黒歌姉さまと男と人は驚いた顔をする。

特に黒歌姉さまは驚きの他にシヨックを受けた様子だった。

「へ？ えっと、何だっけキミ？」

「塔城です。いい加減覚えて欲しいんですけど」

「塔城？ んん？ ……センパイの眷属にそんな人居なかつたけどな。サイラオーグさんの眷属にも居ないし……あ、『お兄ちゃん。』のシンパか？」

お兄ちゃん……つまりセーヤ先輩の事を指してるでしょう、思いきり皮肉を込められ

た様に聞こえるお兄ちゃんという言葉を私は気にしない様に努めつつ、シンパという言われ方にちよつとムツとする。

というかこの人、サイラオーグ様を何で親しげにさん付けで呼んでるのだろうか？ 確か会合の時唯一この人を庇ったのがサイラオーグ様とリアス部長が嫌そうな顔で言つてたけど、その伝なのだろうか？

いや、それより今はシンパ呼ばわりを訂正しないとイケない気がする。

「シンパというのを止めてください。別にシンパじゃないんで」

「ふーん？ てつきり『お兄ちゃん』の優しき（笑）にコロツとメロメロにでもなつたクチと思つてた——あ、キミの事思い出した、前にジローとコジロー達をモフモフしてた所を盗み見してた子だろ？」

「………………。まあ、盗み見したのは否定しませんが、嫌な思い出し方はやめて欲しいです。もつと他にあるんじゃないですか？ ほら、私が猫耳出せる所とか」

「え？ ああ、んな特技あつた。けどなあ、人間みたいな姿で頭に猫の耳生やした所で、真正正銘の猫様にやあ可愛さで勝てる訳ねーつつーか、どう解釈しても本物にゃんこを冒流してるといふか……………そういうキミってそんな喋るタイプだっけ？」

「実はピンチなんです私。そのせいか何時も以上に口が回るんです」

「は、ピンチ？ どこが？」

「誘拐され掛かっているという意味です」

と言つて、私は先輩を嫌悪した顔で睨んで二人組に視線を向ける。

先輩に指摘された通り、何時もならその気持ち悪さで参ってしまうのが嘘の様にベラベラと舌が動く…何か不思議だ。

「……………え、あの二人に誘拐されそうなの？」

「はい」

「何で？ つーか誰？」

「片方はその……姉です。もう片方は知らないです。多分姉の仲間……」

「姉？ 姉!? あらー……随分エロい姿したねーちゃんだね」

……。本当にどうしたんだろ私。殆ど話せなかった先輩とこんなに話したのも生まれて初めてかもしれないし、言わなくて良いことまで話してるし。

「まあでもセンパイの方がやつぱ綺麗だな。なんつーかありや微妙だ……」

「センパイってシトリイ様……?」

「うん、キミのねーちゃんの手前言うのも何だけど。どーもあれは魅力的じゃない。

あれか、あの人『お兄ちゃん。』タイプだからだな」

でも流石。ある意味一番この中で存在感があるせいかすつかりこの人ペースになっていて、姉さまその仲間もどうしたら良いかわからないって顔になってる。

「んーで、キミは今その姉から誘拐されそうになってると? ……………姉なんだから誘拐もクソもなくね?」

「いえ、姉はそのはぐれ悪魔で、どうもテロ組織に所属してて…………」

「テロ? あ、センパイの言ってたカオスなんたらって奴? おいおい、そんな輩が何でこんな所にいるんだよ?」

「それを言ったらアナタこそここに居るのが不思議なんですが…………」

「いやいや俺はこう見えて正規の手続きに基づいてるんだぜ? それに、迷ってたのもサイラオーグさんと一緒に冥界オオクワガタをだね…………」

「…………何をしてるんですかあの方は」

完全に主導権を握ってしまった先輩の得体知れなさに迂闊に動けないと踏んだのか、二人は睨みつつ隙を窺ってる。

「ねえ、キミが何なのか知らないけどさ、こっちはその子と話をしたんだ。邪魔しないで貰えない？」

「森の出口なら俺が教えてやるから、大人しく帰ってくれや、な？」

「ん？ 教えてくれるなら黙って大人しく帰るけど」

「やめてください帰らないでください。私拐われちゃいます」

「いやだって別にキミ拐われちゃおうが関係ないし俺。」

「良いじゃん、お姉ちゃんなんだろうあの人？ 酷いことはされないんじゃないの？」

「嫌なんです。アナタならなんとなくわかるでしょう？ セーヤ先輩みたいなタイプなんですあの人。自分が惨めに思えて、一緒に居るだけで苦痛なんです」

呆気なく私を見捨てるどころか普通に姉に差し出そうとする先輩に対して私は必死になって引き留めようと、ずっと秘めていた事を思わず言ってしまった。

「え、白音……？」

「あ……」

「空気最悪だぜい……」

ハツとした時には遅く、姉は何を言われたのか一瞬分からなかったといった顔をし、仲間の男は気まずそうにし、先輩は――

「じゃあ後はお若い者同士で」

それでも普通に逃げようと背を向けた。

「ぐえ!?!」

「帰らないでください。出口わからないくせに」

この状況でも帰ろうとする性根ははつきり言つて羨ましい。

けど今帰られたら、このぶちまけた本音を聞いた姉に何されるかわからない。この人が頼りになるとは思えないけど、一人で居るよりマシ。だから帰られてたまるかと先輩の足を引っかけて転ばせる。

「俺全然関係ないじゃん、キミが本音ぶちまけて空気悪くしたんだからキミが責任とれよ。俺は悪くない」

「いいえ、アナタがセーヤ先輩に対して向ける態度を見てる内自覚したんです。

という事はもし先輩がそんな事しなければこの事に気付かなかった。だから私が悪い訳じゃない」

「おっと、俺のせいと来たか。まあ、冤罪をふっかけられるのもまたマイナスだし別に良いけど、キミは俺に何を求めたいわけ？」

「決まっています。先輩のたまに見せる『不思議さ』でこの場から、逃げ出せる様にしてください。そうしたら私も迷子のアナタを何とかできるし、Win-Winです」

「そういうのは誰にでも優しい(笑)『お兄ちゃん。』に頼めよ。強いんだろ？」

「セーヤ先輩は逆に姉引き込んでしまう気がしてならないんです。あの男の人はなんとなくボコボコにしそうですけど、姉はほら……見てくれは良いのでもしかしたら……」

「あー……それは何となく想像できるかも」

逃げないようにつつ伏せに倒れた先輩の上に跨がり、取り敢えず逃げる事なら得意なんだろうと思ってる先輩の力を借りたいと懇願している内に出てきたセーヤ先輩の話

に、先輩……イツセー先輩は微妙に納得してる。

セーヤ先輩って、今まで気にしなかったんですけど、冷静に見てるとホント異様にモテるんです。

それこそ他勢力の女性だろうが関係なく…。

だからもし、もしもセーヤ先輩を姉さまが好いて此方側に寝返ったとかになったら、私は嫌でも姉さまと顔を合わせる頻度が高くなる。それが嫌なんです。苦痛だから。

「白音、お姉ちゃんと居るのが苦痛なの？」

「最近この人とこの人のお兄さんの関係を見て悟りました。

アナタと一緒に居ると自分が惨めに思える……だから私はアナタの妹をやれるのは無理です……所詮私はアナタの出廻らしですので」

「そ、そいつのせいなの!？」　　「どうか白音はそいつが誰なのか知ってるんだね!？」

「うわお、俺に矛先が——」

「この人、赤龍帝の双子の弟さんです。

才能ゼロ、寧ろゼロ突っ切ってマイナス——けれど、私個人は正直この人に共感できただけの……なんでしようね？　　まともにここまで喋れたのも初めてだし、私達の間関係って何だと思えます?」

「そこで俺にのし掛かりながら話を振ってくるキミは、気付かなかつたけど中々性根が腐ってるね。」

『この前』の不幸を不幸と嘆いてた時より断然最低だ」

最低……そうですか。でも不思議な事に褒められてる気がする。

何でだろ、極限の状態で色々と自棄になりすぎたせい？ いえ、この際何でも良い……。

「オマエ、白音に何をした……!」

「え？ 俺のせいなの？ いやいやいや、キミが妹に苦痛に思われるくらい敬遠されるからって人のせいにするなよ？ なあ、その人もそう思わない？ これ完全に言いがかりだよな？」

「……。いや、俺つちにもお前つて生物がろくでもないつてのがわかるから、あながち言いがかりじゃねーように思えるぜ」

「わーお、どいつもこいつも都合が悪くなると初対面の人間のせいにするとか酷いなあ。」

「まったく、運が良いと思つてたけど訂正……今日も最悪マイナスだな」

逃げる……この人達から何が何でも。

そして良かった……セーヤ先輩に知らせとかないで。

もし居たらイツセー先輩に突つかかかってそれどころじゃありませんからね。

「オマエ殺して白音はもらうにや」

「の、手伝いだ。悪く思うなよ？」

「——と、俺は全然知らん人からめっちゃ殺されそうなんだけど」

「一応謝ります……ごめんなさい」

「はあ……こんな時に『お兄ちゃん。』は来ないし、肝心な時はいつも役に立ってくれないじゃんか」

大きいため息を吐く先輩に緊張感は見えない。

相手の実力を計れないだけなのかもしれないけど、姉とその仲間の強い殺気を前にしてこの余裕に見える態度を示してくれるお陰で私も不思議と冷静になれる。

まあ、冷静になれた所で解決はまったくしてませんけど。

森の中で他に気配も無いし、いつそサイラオーグ様やら先輩のトモダチさんが出てき

てくれたら――

「……あ、サイラオーグさんだ!! おーい、こっちつす! 助けてくれー! テロ組織の構成員が不法侵入してまーす!!」

「っ!?! さ、サイラオーグだあ!?!」

「!?!」

不意打ち気味に発した先輩の声に思わずといった様子で二人は後ろを向く。

勿論サイラオーグ様がこの場所に近づいてる気配なんて無いので、これは先輩の単なるブラフ。

けど、そのブラフが成功する事が先輩にとって重要だったらしく。

「ぐっ!?!」

「て、テメエ……」

姉と仲間の男の背には、前に見た巨大な釘と杭が何本も刺しこまれた。

「俺が弱い人間と油断し過ぎたなお二人さん。何時もならこんな不意打ちだつて意にも返さない筈。」

けど、俺を見くびり、そして簡単に騙されたお陰で見事に成功だ……ふふふ、揃つて甘えよ」

「!?!」

そして倒れ伏し、忌々しげに睨む二人に向かって先輩は、より最低でより凶悪な気持ち悪さを撒き散らしながら笑顔で言う。

リアリティーエスケープ
「幻実逃否」

何で先輩が気持ち悪いのか……その理由とわかってしまうソレを。

オマケ

「センパイ、それかサイラオーグさん助けてください。変なのが追い掛けてくる」

「は？ ……アレはリアスの戦車じゃないか。はぐれたと思っただら彼女と鉢合わせでもしたのか？」

「ええ、まあ……けど何か勝手に無言で付いてくるんです。ぶつちやけ鬱陶しい」

「ふうん……マイナスを使ったわね？ あの子の目の前で」

「あーまあ……ちよーつとありましてね。今イリナちゃんが追い返そうとしてくれてるんですけど……」

「なにアンタ、兵藤セーヤじゃなくて彼はイツセーくんなのよ？ 早くとつと帰れば

？」

「わかつて勝手に付いて来ただけなんで気にしないでください。」

別に何にもしません。ただあの心地よすぎる雰囲気にも包まれたいだけですから」

「あ？ ふぎけんなよチビ。イツセーくんにも包まれて良いのは私なんだよ。お前は兵藤セーヤに抱かれてろ」

「……。中途半端に素養があるみたいあの子」

「みたいね。参ったわね、また兵藤君に言い掛かりつけられちゃうわよ?」

「ですよねー……。あーもうめんどくさい! 暫くセンパイに会えないし、ちよつと抱き締めて良いっすか?」

「良いわよ、はいどうぞ」

「わーい」

「……。あの悪魔に素養があつて私は無いのか……。は、ははますます仲間はずれにされそう」

「素養ってなんだ?」

終わり

マイナスという底無し沼

姉との接触から逃げられた小猫は、心配していたリアス達の元へとサイラオーグとソーナによって送り返された。

そして怒られた。

「どこ行つてたの小猫！ 心配したじゃない！」

「ええつと、実はちよつとした食べ歩きに……」

「それならそうと誰かに伝えなさい！」

「ごめんささい」

食べ歩きどころか誘拐されるところだった小猫は平然と嘘をついた。

まさかテロ組織に加入していたはぐれ悪魔の姉からの接触到にホイホイ乗つかつてしまったなんて正直に言えるわけも無いので仕方ないのかもしれない。

ましてや、偶々その現場に現れたあの一誠に結果的に助けられたなんて言ってみろ、さつきから疑り深そうな顔でこつちを見てる誠八が不機嫌になるに決まつてる。

小猫は何が何でも食べ歩きをしていたんだと誤魔化した。
それもそうだ、まさか言える訳が無い……。

「もう良いわ。とにかく黙って何処かに行くのはダメよ？ レーティングゲームも近いんだから」

「はい……」

「……………」

マイナス達の輪の居心地の良さに惹かれてるなんて……。

マイペースで、周囲に何を思われようが関係なく、楽しげにしている姿が羨ましく、ついその空気の中に居座ってしまったなんて言えやしない。

だが小猫はリアスの注意に頷きながらも、どこかぼんやりとした眼差しだ。

それが誠八の猜疑心を深めるのは当然の流れであり、今も怪しむ様な視線を小猫へと送りながらしつこいくらいに問い詰めてくる。

「本当に食べ歩きだったんだよな？」

「そうですけど、何処か疑う所でもあるんですか？」

「いや……」

質問に対して呆気なく返す小猫を見て誠八はそれ以上追求が出来ずに小さく唸る。

漠然としたものだが、今の小猫はどこかおかしい。故に只の食歩きという理由で誰にも言付けせずに外出した——というのがどうにも信じられない。

『何もしてない』自分がコカビエルを倒した英雄と持ち上げられてる気味悪さがあったか、誠八の最近は前より余裕が無くなっているのだ。

「顔でも洗ってきます」

その誠八の疑惑は概ね当たっている。

だって小猫もまた……腐ってしまったのだから。

まるで一度嵌まればどこまでも纏わりつき、地の底へと引きずり込んでくる底無し沼の様に這い寄るマイナス達によって……。

「はあ、何とか誤魔化せた……」

滞在中に宛がわれたグレモリー家の部屋に一人戻った小猫は、バシヤバシヤと洗面台で顔を洗い、先程までに残っていた微睡みの様な感覚を拭い去り、ポツリと呟いている。

「これってやっぱり裏切り行為になるのかな……」

日を追う毎に、それこそそこそそとしくなつてソーナと堂々と一緒に居るようになってから最低さに拍車が掛かっている誠八の双子の弟。

一卵性の双子らしく、顔は殆ど同じなのだけど、背丈と体格に差が開き出したのと、赤龍帝としての才能を開花させてプラスへとなり続ける彼とは真逆に沈み続けるせいで最早双子だろうが一発でどちらかを見抜けてしまう。

互いに嫌い合つて二人にしてみれば上等と思えるだろうが、問題はポジシヨンのに誠八側ともいえる自分が弟……つまり一誠側に多大な魅力を感じてしまっている。

姉とその仲間を不意打ちで刺し倒し、挙げ句不思議な力で『この二人が今日のこの時の記憶を持つ現実を否定する』という訳のわからない理屈を捏ねて消し、会うのが苦痛となつていた自分と『会わなかった事』にしたのは、何よりも具体的に助かったと心底思える手助けだった。

そうでなくても、共感を覚え、ふらふらと付いていき、一誠と一誠と同じ最低な仲間

達との殆ど対等なやり取りを見てたら、楽しそうで……そして安心できそうな、羨望とも言える感情を抱いてしまった。

弟は危険だという誠八の忠告が嘘みたいに思えてしまうくらいに……。

「でも、元々リアス部長だってあの人を嫌ってた訳じゃないし、別に関わるなんて言われて無いし、誠八先輩の忠告だけだし、私が悪いって訳じゃないと思う。

うん、別にやましい事なんてしないし、私は悪くない」

きつとその忠告は半分以上は当たってるのだろう。

マイナスという凶悪な底無し沼の浅瀬に来て、興味本意で片足を突っ込んだら最後。

自分の意思はそのマイナスに染め上げられ、やがては同じ不幸を撒き散らす同類マイナスへとなる。

勿論、それがプラス側の存在なら影響は受けずにひたすらに嫌悪感を抱き、排除の姿勢を見せるのかもしれない。

しかしもしその者の心に小さな綻びが、目を背けたくなる過去を抱えていたとしたら、それを克服せずただ逃れたいと考える様なら……。

「あーあ、シトリー先輩や、あの紫藤って人、それから何故か居るゼノヴィアって人が羨ましい。

あの輪の中に居たらどんな失敗をしても責められないし、きつと優しく慰めてくれる……。

私が実の姉と顔を合わせたくないと言ったら、きつと何が何でも姉と出くわさないように……いえ、出くわしても逃げられる様に助けてくれる筈……」

一誠達の存在は強烈な薬物による感じる多幸福感の様に魅力的で依存感が強いものだろう。

現に小猫は、ただの卑屈人からソーナとの関わりを強くする事で墮ち、マイナスへと変貌し、惹き付けた同類達による奇妙な集団に対して絶望的なまでの羨望を持っている。

前に進むでは無く逃走し、目を背け、否定し続ける。

一誠がソーナとの確かめ合いにより確立させた過負荷マイナスとそれを可能にさせるスキル。

「シトリー先輩は本当に良い人を捕まえましたね……はあ」

羨ましい。塔城小猫は顔を洗った事で少し濡れた前髪をそつと指で触れながら、体験してしまったマイナスの世界がとてつもなく自分にとっての地獄である事に気付くのが遅かったと、小さくため息を漏らすのだった。

そして小猫だけじゃなく……。

「小猫ちゃん、ちよつと良いかしら？」

「？ 副部長、どうかしました？」

「……。いえ、さつきはセーヤ君達も居たし聞けなかったから今がチャンスと思って聞けど、正直に答えて？ ……もしかして彼等と会った？」

今の現実から目を背け続けた『患者』は居た。

墮天使を父に持ち、その父から受け継いでしまった力共々嫌悪しているハーフ墮天使の女王、姫島朱乃という複雑な過去を小猫と同じく持つ少女が。

「彼等？ さて、何の事です？ 私はさつきも言った通り食べ歩きを——」

「惚けないで頂戴……いえ、誰にも言わないからどうか本当の事を教えて？」

「……………はあ、わかりました副部長——いえ朱乃先輩には正直に話しましよ

う。

「そうですよ、偶々セー先輩の弟さんと出会いました」

「…………どこで？」

「冥界の森です。何でもサイラオーグ様に誘われて冥界のクワガタ捕りをしてたとか…………」

「く、クワガタ？ あ、あのサイラオーグ様が？」

「ええ、虫かごを肩に背負いながらキラキラした顔で弟さん——いえ、イツセー先輩と肩を組んではしゃいでましたよ？ 信じられないかもしれないですけど」

「……………あ、あつそう。ま、まあ、あの方のご趣味については横に置いておくにしても、彼に会ったのね？」

「ええ…………」

本当ははぐれ悪魔の姉とその仲間に誘い込まれたのにまんまと乗っかって危うく拐われ掛けたのだけ…………と本当の事は隠しながら小猫は一誠と会ったと頷く。

「……………そう、会ったんだ」

肯定した小猫を見て、朱乃は小さく目を伏せながら呟く。

「どうだったの？ まともに話せたとは思えないけど……」

誠八が常々、過剰なまでに最低と揶揄し、言外に自分達が関わる事を嫌う相手である一誠の事を思い浮かべた朱乃は、まともに会話が成立しないこれまでの事を思い出し小猫にどうだったのかと気になる様子で質問している。その答えが朱乃にとっては意外過ぎる答えだった訳だけど。

「今回はかなり普通に話げできました。

それにこれは一番内緒にして欲しいんですけど、シトリー先輩やあの元悪魔祓いの二人組の輪に少しだけ入れて貰えました」

「え!?!」

どことなく自慢気に聞こえる小猫の言葉が信じられず、思わずといった声を出す朱乃は、よく見たらついで朝方までには無かった小猫の変化にここで気が付く。

「一言で言うなら、果てしなく居心地がよかったです。」

どんな失敗だろうとも責められないし、辛い事もあの輪に居たら全て忘れられるという雰囲気にも包まれてました。

辛いことから逃げて怒られない、寧ろ皆で逃げる手助けすらしてくれると思えるくらいに最低サイコロです」

「小猫、ちゃん……?」

目に光が無く、まるでソーナが自分達に嗤って見せた時の様な——とまでは全くいらないものの、濁った瞳。

でも、それは間違いなく自分達を見てヘラヘラ笑って居るあの最低な男の子と同じだった。

「あの人達ならはぐれ悪魔を姉に持とうが、ハーフ墮天使だろうが、制御できない神器を持つハーフ吸血鬼だろうが輪に入れたら関係無く優しくしてくれます。」

いえ、もつと言えはそんな柵を持つ現実から逃エスケープがしてくれる。

ふふ、私ってどうしちやつたんだろ? これじゃあ誠八先輩を裏切ってますよね?」

「……」

求めて止まない。逃げる事を一切否定もせず受け入れる。
何と甘美な響きなのだろうか……。

「まあでも関わるなとリアス部長に言われてる訳じゃないし、問題は無い……そう思いますよね？」

「それ……は……」

確かに言われては無い。けどあの人間性を見たら関わるべきじゃないのは誰が見ても分かるのは朱乃とてわかっているし、実際仲間である誠八が毛嫌いしてるのだから必要以上の接触は控えるべきなのだろう……。

しかし朱乃はクスクスと笑う小猫の言葉に強く否定できずに言葉に詰まってしまった。

もし、もしも小猫みたいに何かしらのタイミングで深く彼等と話をしたら……してしまつたらどうなるかというビジョンが頭から離れない。

『ハーフ墮天使で、父親が大嫌い。へー、母親が父親のせいで死んだ……そっかー、大変

だったんですね。何れ来る再会もしたくない……か。

良いよ、何が出来るかは俺達じゃわからないけど、その現実を否定してあげる』

否定。逃げる。それが可能だとしたらとてつもなく素晴らしい。

いつそ嫌悪までしている父親の事を全てきっぱり忘れられるのだとしたらそれは……。

「……………。彼等はまだシトリー家に？」

「多分。まさか会うなんて考えてます？ 良いんですかそんな事しちやつて」

「あ、会うだけで言われる事なんて……」

「いえいえ、確実にセーヤ先輩は言いますし、恐らくイツセー先輩も凄く嫌な顔をしますよ？ 決まって文句を言われてうんざりだって言っていましたし」

「で、でも小猫ちゃんは現に——」

「私はタイミングがよかっただけです。まあ、好きにしたら良いと思いますけど、会うなら早くした方が良いでしょう。明日の朝には人間界に帰るみたいなので」

「え……………!!？」

傾き始めた朱乃に小猫は内心『やっぱり』と笑みを浮かべながらタイムリミットがある事を洩らす。

今はもう夜で、明日の朝には彼等は人間界に戻る。

そうなれば次に顔を見るのは新学期以降になるのは確実であり、遠い場所で近い場所にある安心という場を目の前に指をくわえて見てるだけなんて耐えられる訳が無い。

だから朱乃はほんの数瞬だけ迷ったけど、小猫に向かって言った。

「…………。こっそりお城を抜け出してシトリー家に…………あの、小猫ちゃんも付いてきて欲しいの…………」

「……………ふふ」

この前の様に適当にあしらわれて終わる可能性の方が高い。

けれど小猫が此処まで言うのだから、体感してみたい欲はある。

故にタイムリミットの明日の朝の前に誠八やリアス達に内緒でこっそり…………そう、ただ会うだけ。

自分に対して言い訳するかのように心の中で何度も復唱した朱乃は、まるでその言葉を待ってたかのように笑みを深めて頷いた小猫と共にこっそりとグレモリー家を抜け出し

た。

「私は道案内をしただけ……だから悪くない。ふふ、今頃あの人は何をしてるのでしょうか？ イッセー先輩はシトリー先輩が大好き過ぎるから大体予想はつきますけどね……」

「……………」

王道の包容よりも邪道の安心を求めて……。

結果的に言うとおツサリし過ぎなレベルでシトリー家へとたどり着いた小猫と朱乃だったのだが……。

「え、今居ない……？ なぜ？」

「えーっと、妙に兵藤君とサイラオーグ様が仲良くなっちゃって、昼間に罨を仕掛けてたポイントに行つてクワガタ捕りをしに……」

「ああ、あれ罨も仕掛けてたんですか……」

入れ違いで留守である事を虫嫌い派で留守番してたソーナの下僕達に告げられ、ちよつと……いやかなりガツカリした。

けどそれも小猫の正に悪魔の囁きな言葉によつて突き動かされてしまう。

「だったらその場所に行きましようよ？　ほら、私達は冥界蛍の鑑賞に来たと誤魔化せば良いですしね？」

「……………そ、そうよね」

確かに蛍を見に来たと言えば誤魔化せる。

別に蛍なんかに興味なんて無いけど、向こうはそんな事を知る訳も無い……なら！
と、留守番組の人達に口止めをしてから小猫の先導で雄大過ぎる森の中へと走つた朱乃。

そしてこれまたアツサリ過ぎる拍子抜けレベルで一誠達は見つかった。

「見ろイツセイ君！　これが冥界産のオオクワガタだぞ！　しかもこれは大きい！」

「日本のオオクワガタより大きいっすね確かに！」

「すっげー……！　小さい頃よりテンション上がって来たんすけどー！」

「だろ！　だろ!？」

「男の子してますね、あの三人」

「変な組み合わせよね……あ、蛍だわ」

「わあ、これは綺麗だな……」

罨に引つ掛かってた冥界式のクワガタやカブトムシを前に三人の男が割りとテンションを上げ、それを生暖かく見守るソーナとイリナとゼノヴィア。

それは間違いなくマイナスが大半で、まともなのはサイラオーグと匙の二人だけ。けれどその二人はマイナスのオーラに割りと平然として付き合っている。

とてもとても奇妙な集団で、微妙に声がかげづらい。

けれどそれを知らんとばかりに小猫が突撃するもんだから、朱乃も最早勢い任せだった。

「奇遇ですな先輩？」

「は？　………げっ、何でキミが此処に………帰ったんじゃないかよ？」

小猫に気づいた途端、嫌そうな顔をする一誠とサイラオーグや匙、ソーナ、イリナ、ゼノヴィアが遅れて気付いて一齐に振り向く。

「アンタこの期に及んで何しに來たのよ……」

イリナが一誠以上に露骨に嫌そうな顔をし、ぶつきらぼうに問う。

「いえね、この朱乃先輩と冥界虫の鑑賞にきたら偶然、偶々貴方達が居たので……ね？」
「え、ええ……」

小猫に振られてコクコクと首を縦に振る朱乃。

「む、リアスの所の戦車と女王じゃないか、虫を見に來たというが此処はシトリー家の領土だろ？ グレモリー領土にも森はあるのに何故ここに？」

「いやほら、此方の方が自然が豊富なので。あ、勿論ちゃんと手続きをして入国してますので……」

「……………」

全部嘘なのに、ペラペラと並べる小猫に内心ハラハラしながらも黙ってる事にした朱乃に一誠がわざとらしく指を差す。

「あ、この人前にヒス起こした人じゃん」
「う……」

ライザー・フェニックスとのレーティングゲーム後の事を思い出したらしい一誠の言動に朱乃は気まずそうに顔を俯かせる。

「ヒス？ 何の事？」

「いやさ、イリナちゃんと再会する前にちよつとあつたんだよこの人と。」

まあ、結局それだけの事だから深い話でも何でも無いけどね。ねえ、センパイ？」

「ええそうね、兵藤君のお陰で元氣を取り戻した筈だし殆ど関係ないわ」

「ふーん？」

ヒスなんて起こしてない！ とは言えずにひたすら小さくなる朱乃。

それを見て小猫が然り気無くフォローするお陰で何とかなつた訳だけど、事態としては此処から複雑になってしまった。

「キミさ、ちよつと俺達に関わつてから偉く強気だよね？　もしかしてお兄ちゃんに言われて監視でもしてるの？」

「まさか、セーヤ先輩は寧ろイツセー先輩に関わると露骨に嫌な顔をするし、関わるなつて言つてきますからね。」

単純に個人的に会いたいから会つてるだけです」

「へー？　今の言葉だと蛭を見に来たつて訳じゃなさそうですね？」

「あ、バレました？」

この面子相手にシレッと出来る小猫に改めて驚きつつ、うまいタイミングを待つ朱乃を見てたのか、気を使う様なトーンでサイラオーグと匙が口を開く。

「あの、結局塔城と姫島先輩は何の用なんですか？」

「ああ、用があるから来たんだろ？　話してみたらどうだ？」

「えつと……」

微妙にありがたいフォローを受け、朱乃の視線は遠慮がちに一誠へと向けられる。

「……………？ あ、俺っすか？」

「えっと、そう……………なのですけど、その……………あの、具体的に何をどう話すべきなのかが自分でもまだ整理がついてなくて」

「はあ？ なら何で来たのよ？ ま、まさかイツセー君にえつちな事を……………!!」

「ええ？ それは困るといっつか普通に嫌ですわ。そういう事はセンパイと決めてるんで」

「!? そんな事しないですわ!!! そういっ事じゃなくて……………くうー!」

全力否定で大声を出す朱乃。

「でしようね、そうだってほざいてたらアンタの事をぶっ壊してたわ」

ふん、と警戒心ばりばりで言うイリナに朱乃は『彼女は凄い苦手かも』という印象を持ってしまう。

だが彼女もまた最低なオーラを放つてるということはソーナや一誠の同類。何故サイラオーグや匙やゼノヴィアが平然とできるのかはよくわからないけれど、この最低なオーラを受けると異様なまでの安心感を覚えるのに否定ができない自分がいる。

「こんな言葉のやり取りだけでも……。」

「そう……。」

「小猫ちゃん、それに姫島先輩……何でソイツの所に居るんですか？」

「っ!？」

「あれ、セーヤ先輩……?？」

最初から小猫を疑っていた誠八による尾行に全く気付けない程に。

「一誠……もう許さない。二人に何をしようとしたんだよ……!？」

「こんなに面子が居るのにピンポイントで俺のせいっすかお兄ちゃんよ?　　まったく、どうあつても俺のせいになるなんて世の中って不条理だよなあ?？」

尾行していた誠八の怒りはまっすぐに一誠へと向けられている。

「ちよ、待ってセーヤ君！ 私と小猫ちゃんは——」

最悪の展開だと焦った朱乃は勿論止めようと声を出す。

だがしかしその言葉に被せる様な大声を出したのは他ならぬ一誠だった。

「許さないからなんだってのさ？ ん、また殴るのかい？ おいおい、進歩がないじゃないか？」

いのかお兄ちゃん？ つーかそもそも、何でお前がこの人達の行動を抑制できるんだ？

ああ、もしかして二人と一発ヤツたとか？ で、俺がこの二人にエロい事すると心配

しちやった？ おいおいおいおい、つまんねー被害妄想じゃねーか、笑えるギャグだけ

お兄ちゃん？」

「……………」

ヘラヘラと何時もの笑みを浮かべながら、割りとアレな言葉をぶつける一誠に小猫と朱乃……特に朱乃は違う意味で顔が真っ赤になる。

「ふざけるな、お前と一緒にするな！ お前こそ違うのかよ!!」

「は、俺がかい？ 勘弁しろよ、何で俺が女好きみたいなレッテル貼られちゃうの？ いやまあ好きだけどき、そういうのは経験なんて無いし、するならセンパイとって決める——」

「ちよ、私は?!? ねえイツセーくん私は——」

「はいはい、今は黙ってなさいね？」

「もがもが——」

確かに一誠は凄い分りやすくソーナに好き好き光線を送ってるので、誰とも構わずというのはいし、そこに関しては小猫や朱乃もはつきり肯定できる事実だ。

「話が飛躍してるといふか、キミも少し落ち着いたらどうだ？ 俺達はそもそも虫捕りをして、そのその二人が……」

「アナタもだ！ 何故コイツに何も抱かない!？」

「はい？ 抱くと言われても、俺が初めて見た時はキミ達に理由も無く不快だからと殴られてた姿だからな。寧ろ逆にお前達がおかしいと思ってしまうんだがな？ それにこうして付き合ってみたら普通の奴だし、その匙くんだってそうは思っていない」

「いや、俺はたまに理解できない面があるんですけどね？　でも別に殴るとかは思った事は無いです。会長の件以外では……」

「ぐつ、そ、それがおかしいのに……」

会合の時とは違って同意の者が全く居ないアウェイ環境に誠八の顔がこれでもかとか歪む。

しかしそれでも小猫と朱乃を引きずり込まれてたまるかと誠八は正義感だか何だかで突き動かされてるので、止まらない。

「わかったわかった、そんな言うならさっさとこの二人連れて帰ってくれよ。こっちは楽しく昆虫採集してんだからさあ……まったく、声ばつかデカくてかなわないよ」

「言われなくても帰るさ。二度と関わるんじゃない……行きましょう二人とも」

毛嫌いする割には絡んでくるんだらめんどくさいと思う一誠を親でも殺されたのかと思う憎悪に満ちた形相で睨んだ誠八は、ちょうど中間に立つ朱乃と小猫を呼び寄せる。

が……。

「先に帰ってくださいか？ 一時間後には帰るんで」

「えーっと、一応ここまで来たから用事だけはちゃんと済ませたいのよ」

「なっ……！」

二人は誠八側では無くマイナス側へと行き、先に帰つてると誠八に言ってしまった。

それは大層誠八にショックを与えるに、そしてより一誠に憎悪を抱くに十分であり……。

「一誠エエエエツッ!!!」

遂に誠八はその憎悪を殺意に変えて一誠に殴りかかった。

籠手を纏い、倍加も加え、本気で殺すつもりで殴りかかってきた誠八。

だがその殺意は呆気なくサイラオーグに抑え込まれた。

「落ち着け！ 丸腰相手に神器を使うな愚か者が!!」

「ぐう、は、離せ!!」

もがく誠八だが、鍛えに鍛えまくったサイラオーグを振りほどけずに抑え込まれた体勢で一誠を睨み上げている。

「絶対に許さない……お前だけは……!」

「だってさ、キミ達のせいで今度から俺はお兄ちゃんに暗殺でもされそうだけ」

「何でそこまで嫌われてるんですか?」

「な、なにかしたの?」

「さあ? センパイと関わり出してからずっとこんな調子だったけどね。」

まったく、前から言いたかったけどさ、センパイとの恋の駆け引きに余計な水差さないでくれない?」

と、言つて睨んでくる誠八に対して笑いながら、ソーナに近づき、後ろから抱きついて甘える一誠。

「じゃないと、そろそろ馬に蹴られて地獄行きになるぞお兄ちゃん?」

宣戦布告にも聞こえる言葉は、サイラオーグに抑え込まれてる誠八にとってより憎悪

を煽る言葉だったのは間違いない。

奇妙な団体

よく分からない勘違いをされてる気がしてならない……いや、確実にされている。

お兄たまの仲間である……えーつと、何だったかな、そう、塔城つて子と姫島つて子だ。

その二人は自分を勝手にマイナスの側面と思い込んでるらしく、俺達に無意味な同類意識を抱きたがってる。

別に勝手に同類意識を持つのは個人の自由だし好きにしたら良いと思うけど、ハッキリ言つてそれがかなり迷惑なんだよね、お兄たまの仲間つて時点で特に。

「えーつと、取り敢えずグレモリーの先輩さんにフォローの手紙を皆して『わざわざ』書いてあげたんで、とつとと気絶してるお兄ちやま連れて帰つたらどうです?」

お陰で勝手に仲間を奪われた的な被害妄想をして殺され掛けるし、俺達にとつては要らない騒ぎを引き起こすだけでしか無いこの二人は、早い所元の鞘にでも戻ってもらいたい。

てなわけで、サイラオーグさんやセンパイと協力して今回の騒ぎについてのある程度なフオローをした手紙を二人に渡し、丁寧にお願い頂く事にしたんだけど……。

「でも明日には帰るんですよね？」

「正確には今日の朝ね。もう日付変わってるし」

「そ、それならせめてその時間までは……」

何をどう間違えてしまったからのか、この二人はどうしても俺に自分が抱える何かをぶちまけたくて仕方ないらしい。

目の前でお兄ちゃんを串刺しにして俺とイリナちゃんとゼノヴィアさんがセンパイに先んじてが冥界から帰るまでは目覚めないように細工したというのに帰るつもりが全くないらしい。

正直言うよ？ ……………めっちゃ鬱陶しい。

「あのさ、俺——いや、俺達にどんな期待をしてるのかなんてのは知らないけど、そういうのはやめて貰えませんか？ 正直鬱陶しいとしか思わないだよこっちは」

「そうよ、第一イツセーくんに頼ろうとするのが実に気に入らないわ。アンタ達には誠

八君つてのが居るじゃない。今串刺しにされて寝てるけど」

俺の言葉を援護する様にイリナちゃんが割りと敵意を持ちながら姫島つて先輩と塔城つて後輩を睨む。

イリナちゃんつて基本的に外様の女の子が寄ってくるのが嫌いだし、お兄たまの仲間つて時点で地雷しかないのもわかってるから今回はかなり風当たりがキツイね。

「こんな事を言うのもなんですけど、一誠君に何かを頼るのは完全に間違えですよ？解決なんてできないし、状況を悪化させる確率の方が高い。」

まあ、それは一誠君に限らず私と紫藤さんにも言える事ですが」

センパイも二人に忠告する。

そうだよ、何を思ったから俺達にすり寄ろうとしてるのかは知らないし、ぶっちゃけ聞いたら後戻り出来なさそうだから聞きたくないけど、勝手な勘違いから来る変な期待は止めてもらいたい。

「というか、君達二人に時間割くくらいならゼノヴィアさんに構う方が大事だし」

「ええ、ゼノヴィアは一応私にとつても元は相棒だし」

「厳しい事を言うようで申し訳ありませんけどね」

「え!？」

何故か驚くゼノヴィアさんは今は放置しときながら、二人には何にも出来ないよとかなりハツキリと言つてやる。

緩い馴れ合い、だらけきつたその日暮らし、無気力な勝利。

これをスローガンにその日をダラダラ生きる俺達にとつてはこの爆弾持ちの人達は正直避けられるなら避けていきたい訳で……。

別に同類でもなんでもない人達に頼られても大いに困るのさ。

「そういう訳なんで早いところお兄たまを連れて帰つてくれよ。俺は早いところ匙君とサイラオグさんに混ざつてゲツツしたカブトやクワガタで対戦したいから」

「そ、そんな……」

「随分と意地悪ですね」

意地悪つて言うけどな塔城さん、キミ達がそもそも勝手な思い込みで俺達に近寄つて

きたんだらう？ 意地悪も何もないだらうに。

「よし！ よし！！ よーっし！！ よっしやあ！！ 今のは俺の勝ちつすよサイラオーグ様
！」

「ふ、ふふつ、中々やるじゃないか。ならお次は切り札であるパラワンオオヒラタを出撃
させるっ！！」

早くあの二人に混ざりたいんだよ俺は。

俺の虫かごにある日本のノコギリをちよつと大きくした冥界型ノコギリクワガタと
ミヤマクワガタを出撃させたいんだよ。

「だから早くそこのお兄たま連れて帰った帰った！」

「じゃあわかりました。帰りますので副部長のお話だけは聞いてください」

「だからなにが『じゃあ』なのよ？」

「妙にメンタルが強くなつたわねこの子」

しっしつと犬でも追いつく様に二人——いや正確には三人に帰れと言つたのに、それ

でも食い下がるこの塔城さんき対するセンパイの感想には本当に心の底から同意できる。

あのエロい格好のねーちゃんとのやり取りに巻き込まれかけてつい逃げた所を見られたせいか、おかしいくらいに開き直ってる。

これはいつそ幻実逃否で——

「人と墮天使のハーフってどう思います?」

「何だこの人、遂に勝手に話し出しちゃったよ……」

「一体何が彼女達を駆り立ててるのでしょうか?」

「しかも私達に於てのが意味分らないわ」

「な、なあなあ、さつき言った事は本当なのか? 本当に私に構う方が大事なのか?」

所謂ごり押しして奴なんだろうけど、此処まで来られるといつそ清々しいよね。

ていうか何だよ急に墮天使と人間のハーフって? 何の話だし。

なんてほぼ呆れてたら急に姫島って先輩は背中に転生悪魔の羽根とは別に前に不意打ち噛ましてやった墮天使と同じ様なカラスっぽい翼を、見せてきた。

「やっぱり汚らわしいと思えますか？」

いや汚らわしいって言われても、何のこっちゃ俺にはわからないんですけどね。

「ふーん、ハーフだったんだアンタ？」

「父親は確かバラキエル……でしたわね」

「バラキエルって、コカビエルと同等の大物の墮天使じゃないか。人間と交わってたのか……」

無知な俺とは違ってイリナちゃんやゼノヴィアさんなんかは少し驚いてる様子だし、センパイに至ってはどんな墮天使なのかも知ってる様子。

しかしながら俺にはそのどれもがピンと来ないしさっぱりわからない。

「つまり？ この人は墮天使と人間のハーフって身分に日々後ろめたさがあったって事？」

「えーっと、それだけじゃないと思います……ほら副部長、早く言ってしまうでしょうよ？」

むかし少し流行つたらしい、某ムシキングばりに楽しそうにやつてる匙くんとサイラオグさんに早いとこ混ざりたいから話を巻きで進めさせると、塔城さんかこつちの先輩に早く話せと突つついてる。

この姫島つて人は前々から思つてたんだけど、ヒス起こしたり、かと言つて急に何の脈絡も無く無関係な俺達に悩み相談を強制させたりと……こう、構つてちゃんとか、メンヘラというか……イリナちゃんとは違つて地雷だらけな人つてイメージしかない。

だつて冷静に考えようぜ？ 俺達この人つて本当に顔がある程度知つてるつてだけの間柄だぜ？ そんな間柄同士相手に自分語りして尚且つなにかを求めてくるつて、普通にマイナス関係なくおかしいぜ。

それこそそこで背中から釘と杭を一本ずつぶつ刺して寝てるお兄たまにすりやあ良いじゃん。

ハーフだか何だか知らないけどホントにこの人は一体俺達に何を求めてるんだ？
ワケわからない。

「その、父とは顔も合わせたくないんです。でもこの流れる血がそれを許してくれない

から、私はどうしたら良いか……」

「はあ………えーつと………」

父親と顔を合わせたくない？ う、うん、じゃあ会わなきゃ良いんじゃないの？ 流れる血云々は別に意識しなきゃ良いんじゃないの？ 純人間の俺が言っても説得力ないかもしれないけどさ。

「あのー………そういうお話はそれこそ優しいお兄たまにした方が俺達より千倍マシな答えが返ってくるんじゃないやありません？ なんとというか、今のアナタからは何から何までフワついたイメージしか湧かないっつーか、ねえ？」

「ええ、本当によくわからないわ。意地悪とかじゃなくて、何故接点の薄い私達にそういう深刻そうな話をするのかも含めて」

「キツイ言い方かもしれませんが、アナタの王はリアスであつて私じゃ無いんですよ？ いえ勿論こういう事情をリアスが知らない訳じゃないのはわかつてますけど」

変にこつちに拘るせいでまたお兄たまから変な殺意抱かれちゃうし、数カ月前までの俺ならまず引きこもりになつてるぜこんなの………おうふ、姫島つて先輩が今の言葉

に凹んでるし。

え、これ俺達が悪いの？ そうなの？

「こ、小猫ちゃんがアナタ達の側の方が凄く安心するって言うし、実際私もこうしていると肩肘張らなくて良いって気がしてちよつと安心するから、もしこういう経緯があるって話しても平気かなって……」

「キミさあ、何を言ったワケこの人に？」

「だから先輩達の輪の中では例え駄目になろうとも責められず寧ろ居心地が良いって話を……」

「お兄さまに制止されてるのにそんな都合の良い話をしたんだキミは？」

「おいおい……変なイメージ持たれてるし、何なの？ 俺達は単なる溢れ者同士でセコセコとその日暮らししてるだけの存在だけ？ 別に他人のメンタルケアなんかしてな
らう」

あのエロい格好した塔城さんのねーちゃんとの一件のせいで勝手なイメージ持たれてるのは分かってたけど、此処までとはね。

前々から妙に変な所があるとは思ってたけど、これは逆に関心しちゃうかも。

「センパイ、イリナちゃん……あー、あとゼノヴィアさん、ちょっと集合」

話して追い返すには罅が開かないと判断し、取り敢えずいつもの三人を呼び寄せ、陣を組むために身を寄せての会議をする事にした。

「あの二人さ、いやほんの少しだけだけど確かに突いたらそうなる素養はなきにしもあらずかもしれない。

けどさ、けどだよ？ だからといって俺達って仲間が欲しいとかってタイプじゃないよな？」

「うん、私イツセーくんとイチヤイチヤできたら他なんて滅べば良いと思ってるもん。仲間？ なにそれ美味しいの？」

「既に困らないくらいに仲間が居るし、第一リアスや兵藤君に何を言われるか……」
「わ、私のこと仲間と思ってくれるのか？ マイナスじゃないのに……」

イリナちゃんとセンパイの意見はやっぱり俺と同じ様で、特にセンパイの意見と俺の考えはほぼ100%合致している。

なんか円陣組んだ際に隣になったゼノヴィアさんが一人でニヘラニヘラとしてるけどそれはスルーし、俺も小さく二人に頷く。

「でしょ？ ましてやサイラオーグさんが止めてくれなかつたらまだ怪我の箇所が増えてたんだぜ？ しかもスゲー滅茶苦茶な勘違いまでされてさ。

俺ってそんな女好きに見えます？ てか割りと俺露骨にセンパイにアピールしてるよね？」

「ええ、その筈なんだけど、どうにかしてでも彼は一誠を悪者にしたいみたいよ。まあ、悪者扱いされるのは慣れてるし、虐げられるのもまたマイナスだから仕方ないのかもしれないけど」

「仲間……仲間……えへへ」

「さつきからゼノヴィアが変……って、変なのは何時もの事だったわね。

取り敢えず適当に対応して適当に追い返した方が最早無難じゃないかしら？ それかいつそ全員でマイナスぶつけてしまおうか……」

「うーん、変に素養が芽生えてるからそれが逆効果になりそうではないな……」

ていうかもう2時になりそうって時刻なのに帰らないこの二人の根性も別の意味で

大したものだと思えてならないというか……。

しょうがない……どうせ朝には帰るんだし、いつそ居たきや勝手に居れば良いスタンスで行くしかないか。

どうせ俺が人間界に戻るまでお兄たまの意識は否定され続けるんだし——と、勝手にニヨニヨとしてるゼノヴィアさんを抜かして三人で結論付けた俺達は、互いに顔を見合わせて頷くと、まだ熱中してたサイラオーグさんと匙君を連れてセンパイの実家に戻る事にした。

シトリー家客室・イツセー達の寝室部屋。

「えー……お兄たまはそこで寝かしてあげる事にして、取り敢えず皆さんには申し訳ないけど朝までオールで付き合っただけです。」

文句があるなら何故かここに来たグレモリー先輩の眷属のお二人に言ってください」

結局煙に撒けないまま仕方なしにソーナのゲストとしてシトリー家へと入れた一誠達は、なんかもうすっかり仲良しになっちゃって、小猫と朱乃とは逆に100%の善意で招待したサイラオーグを混ぜてのトランプ大会をする事になった。

「何かすいませんねサイラオグさん」

「いや、俺は全然構わないよ。」

それより結局キミ達は一誠君達に何を求めたかったんだ？」

「えーつと、安らぎとか？」

「失敗しても怒らない所とか……」

「いや、それこそアンタ等にとつての兵藤じゃないのかよ？」

「そう何度も言ったんだけど、どうも二人にとつて兵藤君ではそれに当てはまらないらしいのよね、困ったことに」

「私達をどこかの心療内科医と勘違いしてて困るわ」

「トランプなら勝てるかもしれない……」

マイナス人間イツセーとイリナ

マイナス悪魔のソーナ。

バアル家のサイラオグ。

泣き虫ゼノヴィア。

リアス眷属の朱乃と小猫。

一周回ってそんなメンツを前に平然とできるようになってる大物化待った無しの匙。
そして――

「何か私が居ない間に物凄い奇妙な組み合わせになっちゃったね元士郎くん？」

「もう気にしたら疲れるんでそこら辺はフィーリングっぽく感じる事にしました」

四大魔王が一人セラフォル。

以上、すさまじく奇妙な組み合わせの中、残りのソーナの眷属達が緊張した面持ちで見守るなか始まるトランプゲーム……名を神経衰弱は、周囲の緊張とは裏腹に殆どがマイペースであった。

「リアスちゃんに怒られないの？　こんな夜中にこっちにウチに何も言わずに来ちゃってさ……」

「多分凄く怒られるけど、そのリスクを受けても有り余るメリットがあったのじゃないと諦めています」

「小猫ちゃんと同じですわ」

床に散りばめられた無数のトランプを囲って始まる神経衰弱。

まず最初は一誠から時計回りの順番なのだが、運がほぼ死んでる一誠は勿論揃える事はできない。

「ちえ、やつぱり無理か……」

「まあ、最初だからな……つと、次は俺だな……」

捲ったカードを戻し、軽く混ぜるのを確認した後にサイラオーグの番となり引く。

こうして次は匙、次はセラフォル、次はイリナ、次は小猫、次はソーナ、次は朱乃、次はゼノヴィアと時計回りに捲っていくのだが、別にメインが神経衰弱ではなく、神経衰弱をやりながらのトークであった。

「なんでもこの人、堕天使の親父さんの血が流れてる自分が嫌いらしいです。

ぶっちゃけて言うけど、人間の俺からしたら『だからそれが何なの?』って感じなんですよ? だってこの人そうじゃなくても見た目は良いしそれで得してるし。な、匙くん?」

「確かに。毎日男女問わず、塔城達共々キヤーキヤー言われてるからなあ」

「へえ、人気者ってやつだな。まあリアスもそうだがそんなオーラ持ってるのが見えるな」

「そんな事は……」

「別に頼んでるわけじゃないですからねアレ」

「その台詞をさつきまでのアンタ等にそっくり返してやりたいわ。」

「こっちは断ってるってのにしつこいんだから」

「私からしてみたら贅沢な悩みには見えなくて……あ、揃った！」

然り気無く朱乃の秘密が普通に他の者達に広まっちゃってるけど、本人も多少開き直ったのかそこら辺は気にしてない様子だ。

寧ろそれは悪化してるというべきなのだろうが、生憎誰も指摘はしない。誠八が背中に大きな釘と杭を刺したまま死んだ様に寝てるのを誰も突っ込まない時点でお察しだ。

「第一お兄さまは何て？」

「えっと、私の墮天使の方の翼を見せたら『綺麗です』と言って、副部長は副部長だから……と」

「へー、流石に模範的な回答で笑いそうになるね。で、姫島先輩はそれで満足しなかった

と？」

「あ、いえ、他の子にも同じ様な台詞を言ったのを聞いたので……」

「おいおい、とんだ致命的ミスだなお兄ちゃんよ。そりやフォロワー無理だわあ」

「言つた相手はちなみにアーシアって人です。ほら、金髪で元シスター見習いの」

「ほらつて言われてもね、あ、元両親が実の子扱いするから俺に出てけつて言つた理由の子か？」

「え、キミはそんな事を実の両親に……？」

「そうなんすよコイツ。しかも言われてる当の本人はこんなヘラヘラしてるし……そこだけはちよつと理解ができないんですよ」

「だつて昔からそんな扱いされてたし、何を今更つてかんじだもん。」

それにセンパイの家に住める様になれたし、俺としては寧ろ歓喜的状况でしたよ」

「酷い親だな……何故そこまで差別するんだ」

「まあほら、俺つてひねくれて可愛げも無かつたんで両親からしたら素直でお優しいお兄さまの方がかわいいんですよ。」

だから別に両親の気持ちはわかる気もしますし、怒りだのつて感情は無いつす」

「で、でもさ……ソーナちゃんのお部屋に住むのは——や、ダメつて言わないけど男の子と女の子だし……」

「なんですか？ 間違いが起こるとでも？ ふふ、お姉様、寧ろ私はその方が良いんですよ？」

「!? だ、だめだよソーナちゃん!? ま、まだお互い子供だし、は、早いというか」「心配しなくても良いわよ、この悪魔とイツセーくんより先に私がそうなるから」

地位や生まれが全くバラバラで、かつその差を一切感じられないほのぼのとしている様に感じる神経衰弱。

それはある意味平等的な場とも言えなくもないのだけど、本人達にその自覚は無さそうだ。

「アーシアちゃんが住む様になってアナタが追い出されたって……。」

「セーヤくんは自分から家出したって言ったけど……。」

「概ねそれで合ってますよ？ ま、正確には両親に札束投げつけられて『これ持って家を出ていってくれ頼むから』って言われたのがオマケにありますけど」

「流石にそれは笑えないぞ一誠。」

「それはもはや両親じゃない」

「ある意味一番キツイ追い出され方ですよね……。」

「それでこんなヘラヘラできるんだらわからねー……」

「その哀しみがすつ飛んで余るくらいのもダチが出来たのが大きいですからねえ。」

いやホント俺、センパイと出会えて良かったつすよ。匙くんやサイラオーグさんともこうして出会えなかったでしょうし」

「……おう」

「俺なんかで良いなら光栄だが……むう」

そんなやり取りがのほほんと続く中、朱乃は小猫の言った通りだと肌で感じとる。

確かに話してる内容はお世辞にも良いものじゃないし、一誠の話はぶつちやけ笑えない。い。

けど、やはりというかこの漂うマイナスの雰囲気は誇張なしに朱乃の心が安らいでいく。く。

そして居るだけで徐々に心が腐りだしていくこの不思議な感覚。

どれもこれも朱乃にとっては初めてで……そして何とも居心地が良い。

「ね、ねえ……もしかしてソーナちゃんと……そ、そのお、き、キスなんてしてない？」

「普通にしましたけど？」

「したのかよ!! おいイツセーこの野郎テメー!! ど、どうだったんだよ?」

「え、どう?」

「だ、だからほら……か、会長とのアレだよ……どうだったんだよ?」

「えーつと、センパイの舌は凄かったなあ……としか」

「し、舌あ!!? お、お前っ! そ、そんなことまでしたのか!! しちゃったのか!!?」

「うん。だってあの時は……ねえセンパイ?」

「ええ、もう色々あつてお互いに好きになりすぎてついって感じだったわ……って、あら? お姉様が気絶しちゃったわ」

「進んでるなあ……最近の若い子供は」

「いや、サイラオーグさんも若者じゃないっすか」

「いやいや、俺にはそういうのは無いからなあ。まあ、今はそれどころじゃないってのもあるけど」

「なんだろう、この安堵。」

何処よりも、何よりも安心する。本当だったのね小猫ちゃん……」

「でしよう? 私達って爆弾を抱えてた分、それを爆発させても尚開き直ってるあの三

人が羨ましくも安心するんですよきつと。

多分、何もかも成功しちゃう誠八先輩には絶対により得ない安心です」

「ええ、そうね……自分の心が段々腐っていくというのに、抗う気になれないどころかそれが心地良いとすら感じるもの。」

やっぱり私達つてどちらかと言ったら彼等側……なのかしら」

「私はある種自分がそうだと確信しています。」

あの人……イツセー先輩に助けられてからはとくに」

プラスを否定し、自らマイナスへ。

それを心地よき事と思ってしまうのもまた、誠八の思惑をすり潰す展開だった。

帰還と帰還後

何故だか妙に長く感じた冥界への滞在も、最終日に朝まで神経衰弱をする事でやつとの終わりを向かえることが出来た。

姫島朱乃と塔城小猫……それから死体みたいに寝てる誠八の後の事をソーナ達に任せ、シトリー家の誰からも惜しまれる事も無く冥界を去った一誠達は、人間界のソーナの自宅に戻るや否や、死んだ様に眠った。

理由としては朝まで本当にトランプして勝手にひつついてた二人の話聞いていたのから来る微妙な気疲れだったのかもしれない。

とにかく三人が起きた頃には既に夕方になっており、遅すぎるおはようを三人で交わした後、安いシリアルでお腹を満たし、ソーナが帰ってくるまでの残りの夏休みをどうしようかと相談しながら、興味が無いタレントが滑稽に思える感動エピソードで勝手に泣いてる様が映るテレビをぼんやりと鑑賞していた。

「宿題が完全に免除扱いだからやるのが一切無いよね、これからセンパイが帰ってくるまでどうしてる？」

人間界へと戻ったその瞬間、それまで冥界の悪魔達から受けた傷の全てを否定し、最初から傷なんて無かった様な姿へと戻った一誠がまだ寝起きで頭が覚醒してないのか、ぼーっとした顔で同じくぼーっとしてるイリナとゼノヴィアに問い掛ける。

「その時思い付いたら何かすれば良いんじゃないの？ どうせ私達が予定立てたって、その通りに動ける訳じゃないだろうし」

「私もイリナと同じ意見だ」

「あ、そう……確かにその方が良いかも」

つまりダラダラしてれば良いという、ニート宜しくな怠惰な生活をしようぜという提案に一誠も反対する理由が無く頷くと、徐に席を立った。

「んじや行ってくる」

「へ？」

「何処へ？」

「そそくさと此処に住み始めてたから購入したセール品の安い服へと着替えた一誠の脈絡無しな行つてきますすにキョトンとしてしまう二人。

元々一誠は覚醒前だと卑屈で一人で焼肉屋行つてニヤニヤしながら肉を食べたりする性格——てのは微妙に知らない二人は、ソーナも居ないのに一体何処へ行くつもりなのかと、テレビから目を離して興味津々だ。

「一緒に来る？ 二人にとっては退屈かもだけど」

「行く」

ソーナ以外に誘い言葉を放った一誠にたいして二人は即答し、いそいそと着替える。一体全体何処へ向かうと云うのか……それは、ある意味でソーナよりも早く打ち解けられたトモダチの所であり——

「おーい、ジローにコジロー達ゝ 居るかー？」

『にゃーん♪』

お猫様の住み家であった。

「猫ね」

「猫だな」

一誠についていく事数十分、誰も近寄ろうともしない廃墟へとズンズン入っていくのに慌てて追いかける二人が目にしたのは、呼んだその瞬間、びっくりするくらいの早さで一誠目掛けて飛び込んできた白い猫の親子達だった。

「おお、コジロー達ったら大きくなったなあ。まだジローより小さいけど」

『にやーにやー!!』

「あー、ごめんごめん、最近色々あってさあ」

「にやー……」

「あー……まあな？ ごめんごめん、忘れてたとかは無いらな拗ねるなよジロー　うりうり〜」

「……………。　会話してるわね」

「……………。　会話してるな……………」

基本的に殆どの生物からも嫌われる一誠が、白い猫の親子に滅茶苦茶懐かれてるどころか、どう見ても普通にも普通に会話をしている様に見えると言う、二人にとつてはとても新鮮な姿に暫し呆然としながら眺めてる。

「ああ、この子達はトモダチ、うん、そうそう……え？　また女の子だつて？　おいおい、これでも一応男のトモダチだつて居るんだぜ？　………向こうはどう思ってるのかわかんないけど」

「にやー……」

「え、他の雌の匂いがしてちよつと嫌だ？　おいおいジロー……俺人間だつっのの」
「にやー！」

「勿論ジローだつてトモダチだぜ？　お前だけ優しかったしなあ」

埃っぽい廃墟で服が汚れるというのにそれも気にせず壁を背に腰掛けて小猫——では無くて子猫達を膝に、親猫を抱っこして撫でながら話しかけてる一誠の姿はある意味で非常に珍しい。

というかチワワにすら全力で噛み殺されそうな程に動物に嫌われてる一誠が気紛れ

と揶揄される猫に滅茶苦茶懐かれているのが奇跡である訳で、どれを見ても白い猫達をモフモフしてる一誠にイリナとゼノヴィアは若干遠慮がちに話し掛ける。

「イツサーくん、この猫達は一体？」

「野良猫なのに異様に慣れてないか？　しかもお前に」

「おう、笑うかもしれないけど俺の数少ないトモダチ」

よじよじとコジロー達の何匹かが身体をよじ登るのに抵抗もせず受け入れつつ、雌なのにジローと呼ばれる親猫のお腹を撫でる一誠が二人にヘラヘラした何時ものそれとは違う笑みを浮かべながら答える。

「実を言うとセンパイよりも付き合いが長いんだよね。子供産んだのは最近だけど」

「へー？　私も触つて良いのかな？」

「私もモフモフしてみたい」

どちらかと言えばモコモコしたタイプの毛並みであるジロー達にイリナとゼノヴィアがちよつと期待した眼差しをしながらソツと心地良さそうに目を閉じてるジローに

手を伸ばす。

マイナスの一誠が良いなら同じマイナス、もしくはマイナスですらないゼノヴィアが触れても普通なら何の問題も無い————筈なのだが。

「フシャー!!」

イリナとゼノヴィアが手を伸ばしたその瞬間、それまでゴロゴロと喉まで鳴らしていたジローが突如一変、全力で拒否してやると云わんばかりの威嚇と共に二人の手に割りと威力のある猫パンチをした。

「な、なによこの猫……!?!」

「きよ、拒否されたあ……」

誰がテメーなんぞに触れられてやるかといわんばかりに毛を逆立て、二人を睨む様な目で一誠の腕の中で見据えるジローにイリナは微妙な敵意を、ゼノヴィアは拒否られた事による悲しさで涙目になってしまった。

「えーっと、ジローは嫌なんだって……。なんか俺が二人とトモダチなのが気に食わないみたい」

「気に食わない!?　なんでよ!」

「パンチされた……。ぐすん……」

「センパイにもあんまり心を開かないからなあジローって。こればかりはちよつと……」

「あの悪魔にも?　というかイツセーくんってさつきからその猫の気持ち分かるって感じだけど……」

「ああ、スキル使ってそこら辺の障害を否定したからね。俺にはジローが何を言いたいのかがわかるんだ。」

「折角だし、二人にもわかるようにしてあげるよ」

そう言つて猫と軽く修羅場つてるイリナとメソメソと泣いてるゼノヴィアに
リアリティーエステーブ
幻実逃否を使い、ジロー達とのコミュニケーションが取れる様に仕込んだ。

「ほらジロー?　二人に挨拶を」

「にゃん。(嫌よ、只でさえあの悪魔の子にイツセーが取られてるのに、その上どう見て

もイツセーが好きそうな雌とこれ以上仲良くなりたくないわ)」

「はあ!! 悪魔の子つてソーナの事よね!! 何でアイツが良くて私はダメなのよ!!」

「にや。(騒がしい上に、イツセーの話とか全然聞かなそうじやないアナタ? その隣はニンゲンつぽく例えたら一々うざそう)」

「うざ!! わ、私は猫にまでウザいと思われる性格なのか……そっか、そっかあ……うえ、うええん……!」

「お、おいおいジロー!? お前なんでそんな毒舌!?!」

「にやー♪ (これ以上イツセーと一緒に過ごさせる時間が減らされたくないの♪)」

「こ、こんの猫がああつ!! 昨日の小うるさいチビ猫といい、白い猫の性格はこんな悪いわけ!?!」

「ににゃん。(おねーさん、ちよつとうるさい)」

「うる!! こ、こ、子猫達まで……ぐ、ぐぬぬぬ!」

しかしコミュニケーションが可能になった事が却って余計な修羅場を増やしてしまう事になり、イツセーの膝に乗って甘えまくりながら、どこか自慢してる様にイリナやゼノヴィアを見据えるお猫様親子に、イツセーがとにかく好きでしようがないイリナは一発でソーナと同じ意味での敵と認定し、激しく睨み合うのだった。

「にやふ。(あの悪魔の子に横入りされるように取られショックを知らないでしょう？
これ以上横入りされるのはごめんだわ)」

「へへんだ！ 所詮普通の猫のアンタじゃイッサーくんには本当の意味で愛されないもん
ね！」

「にやー。(そうね。けれどももしイッサーがあの時目覚めた不思議な力を使ったら、私達
とて同じ姿になれるかもよ?)」

「いや、色々と被るからそれはやめよーぜ。それにほら、別に俺イリナちゃんとはそんな
んじゃねーし」

猫と人がマジな意味で修羅場ってる。

そんな不思議な光景はひぐらしの鳴き声と共に廃墟内へと融けていく。

「にやー。(そういえば前に私達と同じ匂いのするイッサー達と同じ姿の女の子が居
たけど、あの子はどうしたのかしら?) 確かに私が同じ姿になったら被りそうねえ?

まあ、あんな小さくはないけど私)」

「仮な話、あの後輩と同じという幻想にしたらジローって……人妻みたいな雰囲気

人になりそうだな。

けど、それはちよつとなあ……ジロー達はそのまんま方が良いよ絶対。
ありや似非だもん」

「へっくち！」

「大丈夫小猫ちゃん？」

「ずっと……はい。多分誰かに噂されてるんだと思いますから」

人間界へと帰り、猫達と戯れてる一誠達と時を同じくして、冥界に残っている者達……勝手に城を抜け出してシトリー家に上がり込んだ小猫と朱乃は、覚醒と共に怨念にまみれた誠八による告げ口で、自室待機をリアスに命じられていた。
つまる所、暇を相当にもて余していた。

「リアス部長に皆さんから書いて貰ったフォローの書状を渡したのに、あんまり意味は無かったみたいですね」

グレモリー家の客室に留まり、同じく待機を命じられた朱乃と一緒にたってお茶をしながら暢気に話す小猫。

「ええ、というよりリアスはそこまで怒ってなかったわね。あれはどちらかといったらセーヤくんが……」

「ええ、裏切ったのだと滅茶苦茶騒いでましたね。

確かにあの人のしてみれば裏切ったも同然ですが」

目の敵にしている一誠達の方が居心地が良いとつい宣言してしまったせいで、すっかり誠八から裏切り者扱いされ、それをリアスに精神バランスがおかしい状態で告げ口したせいでの軽い謹慎なのだが、二人の心は不思議な程に落ち着いていた。

「凄まじく居心地が良かったわね」

「ええ、ごろ寝しながらお菓子食べられる様な感覚というか、種族の違いなんてあの人達

にしてみたら関係ないんですよきつと。

だから私達みたいな『後ろめたいもの』がある存在にとつては良い場所なんです」

ポリポリとシトリー家からの帰り際に一誠から貰ったポツキーを二人で食べながらうんうんと頷き合う。

心底自分達……牽いては誠八に関わりたくないといった顔をしたままだったが、確かにあのシトリー家にお邪魔していた時は、サイラオーグ達や匙達と共に、何にも考えずに遊んでたし、その時だつて投げ槍つぼくも色んな意見をくれた。

その中でも一番二人の印象に残つてるのは……。

「自分にある不運^{マイナス}を全部受け止める……か」

「目を逸らして来た私達には考えもしなかつた事でしたね」

理不尽、不幸といったマイナスの全てを受け入れる。

二人にとつてはとても出来そうに無い行動だったが、彼等にそれを言われてからは何故か前向き——いや、後ろ向きに考えられる様になつていた。

「私がハーフであり、バラキエルを父に持つ事実を受け入れ……その上で否定する」
「SS級のはぐれ悪魔が姉である事を受け入れ、その上で逃げる」

人も、猫妖怪も、ハーフの墮天使も皆同じ。

一度でも心地よき体験をしてしまえば、その元を手放したくはない。

最低で、最悪で、息をする様に周りにその不幸を撒き散らすだけの欠陥達が集い、そしてその集いに引き寄せられた不思議な集団達による一切の差別が無い空間。

後ろめたい過去を持つ二人にとってはとてつもなく素晴らしき居場所。

そこに居れば誰からも後ろ指を差されない、自らの過去を忘れられる。

二人が居座りたいと思うのもある意味仕方ないのかもしれない。

「はあ……やつとセーヤが落ち着いてくれたわ」

「あ、お疲れ様ですリアス部長」

「あの子はどうしてますか？」

「同じ事を言い続けて疲れたのか、アーシアと祐斗に支えられて部屋に籠っちゃったわ。

あなた達が裏切ったって」

「あー……まあ、そう解釈されても仕方ないので反論はできませんね」

「ええ、それにアナタに無断だったわけですし」

「それは良いわ、サイラオーグやソーナ達からの手紙も貰って、招待されたという事になつてるから。」

でも問題は誠八の弟君と一緒に引っ越したというのがね……セーヤは最近特に弟君を目の敵にしてるから……」

誠八を落ち着かせ疲れた様子で部屋にやってきたリアスに、朱乃はお茶を入れながら様子を聞くと、やはり小猫共々裏切ったと思われてるらしい。

深くソファに座ってお茶を飲むリアスの疲労の色からしてちよつと悪かったと二人は軽く反省する。

「今度ソーナ達とゲームをする訳だし、あまりそういう行動はね……」

「はい、ごめんなさい」

「申し訳ありません」

「いえ別に良いのよ。元々弟君はお兄様の客人だった訳だし、そんな客人を傷つけてしまった私達に落ち度しか無いのだから」

多くの悪魔が一誠達を嫌悪してた中、一人オロオロしていただけに、そこまで一誠を嫌悪してないリアスが苦笑いを浮かべている。

「下手に刺激だけはしないで欲しいのよ。何故か彼つてお兄様から相当大事なお客様扱いされてるし」

「……………」

「……………」

魔王であり兄であるサーゼクスに生まれて初めてかもしれないレベルで激怒された事がまだ残ってるのか、リアスの表情はかなり切実だ。

しかるに無言となる二人は既に知ってしまったのだ。

「で、そんなに居心地が良かったの？ ソーナと弟君達のグループは？」

「ええ、とつても」

「何もかも忘れられますわね」

「そう……あのサイラオーグと一緒に居たみたいだし、何か不思議なものでも持つてるのかもしれないわね……」

何も考えずに自分で居られそうな場所を……。

外側の避難所（アウターハイブ）

マイナス達の新学期

長いようでやっぱ短い夏休みも終わり、いよいよ始まった新学期。

始業式に体育館に集まる数多くの生徒達、そして一般教師の全ては一番端つこに縦一列に並んでいる三人組——いや、正確には内二人の人間に揶揄じゃない体調不良を起こしていた。

「以上、生徒会長の挨拶を終わりにしますが……皆さんどうかされました？ 始業式だ」というのに随分と顔色が優れないように見えますが。

具合が悪ければ遠慮せず退席し、保健室に行つて下さい」

視界に入れるだけで、近くに居る気配を感じるだけで抱いてしまう途方もなき嫌悪感を放つクラス崩壊の原因と噂される欠落人間と、その欠落人間と共に平然と一緒に行動出来るという時点でまともじゃない夏休み前に転校してきた少女二人と……欠落人間である少年とかなり深い仲と噂される、同じ空気を感ぜさせる美人な生徒会長。

約一ヶ月というインターバルを経てより凶悪に退化したマイナス達の存在は、最早一般生徒と教師と精神をガリガリと削っていき、美人だけど、それを台無しにする貼り付けた笑顔で体調変調を起こした生徒や教師に気遣う言葉を送る生徒会長——支取蒼那により、ほぼ全ての一般人は我先にと体育館から逃げ出す様に去っていった。

「あーあ、始業式がメチャクチャになっちゃってやんの」

「皆して具合悪いなんて、何時まで夏休み気分なのかしらね？」

「いや、多分理由は違うと思うんだけど……」

まるで化け物から逃げ惑うかの様に消え去る生徒や教師を見送り、ズレた事を言うのは、完全な覚醒と共にどんどんと退化し続ける『負完全になり得ない』と自称する過負荷こと兵藤一誠と、そのマイナスに惹かれて素養を一誠よりある意味早く芽吹かせてしまった過負荷な紫藤イリナ、マイナスのせいで単なる一般人にさせられてしまった泣き虫のゼノヴィア。

「びつくりするくらい逃げちゃったわね」

そして、壇上から普通に降りてきた悪魔でありながら欠陥であった過負荷の支取蒼那——いや、ソーナ・シトリー。

ゼノヴィアを除けば三人となる過負荷達は、己の引き起こしたこの光景に対し、まるで他人事のように平然とくつちやべっていた。

「まあ、俺達だって立派な駒王学園の生徒なんだし、別に何にもしてないしね。体調崩した皆も多分偶々だったんでしようよ」

「そうそう、私達は悪くないわ」

「ええ、同じ生徒なのに爪弾きにするなんて差別ですもの。差別はよくないわ、生徒会長として見過ごせないし」

どう聞いても確信犯にしか思えないやり取りに、何とか加わりたいとちよこちよこ三人の周りを犬みたいに回るゼノヴィアも、もしかしたら頭のネジが何本か抜け落ちてるのかもしれない。

だが誰もその事を指摘する勇氣は、始業式処じやなくなった体育館に生き残る形で残ってる複数の者達には無かった。

「それよりどうするんすか会長、残ったメンツを見たらわかる通り、普通の人達には最早耐えられないみたいすよ？」

唯一まともに突っ込めるのは、ソーナが抱える兵士の匙元士郎だけであり、本人が半ば呆れ気味に残ったメンツ達に目配せしながらソーナにこのオチにどう收拾付けるのかを問う。

「さあ、適当に後片付けして終わりで良いんじゃない？」

「……………。いえ、まあ、こんなオチになった以上そうするしかありませんけど」

すつかり一誠と関わる事で変質——いや、関わる事で曰く本来の自分に戻ってしまつたらしいソーナの何とも軽い調子での言い方に匙は実にしよっぱい顔をしてしまふ。

「いやあの、ソーナ？ そんな軽くて良いの？ 教師まで逃げちやつたのに」

がらんどうとしてしまつた体育館故か、ちよつと響く声が集まるソーナ達の背後から

聞こえて振り返ると、そこには同じくある程度耐性を持つていたもう一つの悪魔団体であるリアス・グレモリーとその眷属達が居た。

内何人かはそこまで耐性が無く、そして一誠の兄という事になつて誠八の言葉を飲み込んでる側という事もあつてか、嫌悪にまみれた顔で一誠を睨んでた。

「しようがないじゃない。急に体調が悪くなる時だつてあるんだもの。

無理矢理引き戻して始業式を再開する訳にはいかないし、もう中止として処理しちゃえば角も立たないわ」

「……。この前のレーティングゲームの時でもそうだったけど、やっぱりアナタ変わったわね……」

「変わった……ねえ？　変わったつもりは私に無いのだけど、褒め言葉として受け取っておくわりアス？」

「……………」

親友であり幼なじみであるソーナがクスクスと微笑するのを見てリアスは嫌悪こそ抱かぬものの、微妙に彼女のこの先が心配だった。

聞けばそのすぐ隣で『小腹が空いたな……』とぼやいてる双子ながらすっかり体格の

差が誠八と開いて小柄に見える一誠を冥界に滞在させてから、両親との折り合いが相当悪くなったと聞いたし、レーティングゲームの時はそれまでのソーナからは信じられないやり方で、削られる様に追い込まれるしとで、結果的に『勝った』けど、あのゲーム以降、ソーナの冥界での評判は会合での唖呵もあつて若手の中ではぶつちぎりに悪かった。

「なあなあ匙くん。ゲームボーイカラーの通信ケーブル持つてない？ それとメダロット2つてゲームも」

「ああ？ 随分と古いゲームだなオイ。」

通信ケーブルはどうだか知らないが、メダロットは確かクワガタバージョンがあつたような……」

「え、マジ!? じゃあ今度ロボットルしよーぜ!」

それもこれもあの一誠と深く関わり、遂には親の反対も無視して付き合いを更に深めてしまったからの目で見るとも明らかだ。

誠八が今もそうだが、この世から消すべきだといった顔で睨むのはどうかとリアスは思うし、その一誠の存在が余計に色々と拗らせてる感があるのも否めない。

例えばそう——誠八やアジアや祐斗達嫌悪している自分の眷属も居れば……。

「めだろつとつてなんですか？」

「聞いた事ありませんわ……」

「げ、ちよつとこつち寄んないでよ。向こうからの殺気が跳ね上がるんだからさ」

「シツシツ！ あつちいけ！」

この様に、寧ろ一誠達側に居心地の良さを覚えてしまった眷属も居る。

姫島朱乃、塔城小猫……そして——

「そう邪険にしないでくださいよ？ 今日皆さんに紹介したい子が居るんですから」

「ほらギヤスパークン、私達の背中に隠れてないで皆さんにご挨拶しましょう？」

「は、は、はいいい……！」

夏休み前に封印を解いて外に出すようになった僧侶の駒にて転生した悪魔……。

「ぎゃ、ギヤスパークンです……その、皆さんの事は小猫ちゃんと副部長に聞いてます……」

「うわ……また何か出てきたし」

ハーフの吸血鬼、ギヤスパ・ヴラディだった。

薄めの金髪で見た目は臆病な少女にしか見えないが、その実男という性別を間違えて生まれてしまった——では済まされないと暗い過去を持つ彼がビクビクしながらも、一誠、ソーナ、イリナの前に立って挨拶している。

「こう見えてギヤークくんは男の子なんです」

「ふーん？ あつそ」

「興味無しって感じですね……？」

「そりゃね……」

仮にこの……ええっと、ヴラディ君が女の子だったとしても同じ反応しか出来ないよ俺は。

寧ろ何の反応期待してるか逆に聞いたみたいね、だろ匙くん——」

「や、やっぱり男だったというのは聞き間違いやなかったのか……なんてこった」

「——みたいな反応は匙くんに期待してね」

暗い過去を持つが故に、人見知りというより対人恐怖症であるギヤスパーに対して、特に一誠は既に鬱陶しいとしか思っていない相手である誠八に難癖つけられるのが面倒で嫌なのか、小猫や朱乃を含めて是非とも距離を置きたがってる顔で素っ気ない態度だった。

「ふざけるなよ……何処まで俺から奪うつもりだアイツは……！」

「せ、セーヤさん。だ、大丈夫です、私はそんなことしませんから……！」

「僕もしないよ。あんな薄気味悪い相手に……！」

「……………」

完全に割れてる自身の眷属の現状にリアスは内心大きくため息を吐く。

弟の行動に対して過敏に反応して、異常なまでに敵意……いや憎悪を募らせる誠八を見てると何時それが爆発してやらかすのかとヒヤヒヤしかない。

誠八に対しては寧ろ望み通りに関わる真似はしてないのに、周りがまるでその不運を一誠に押し付ける様に結果的にこんな形で関わらせている。

本人から見たら誠八の言ってる奪う行為をしてるつもりなんて無いのはぶっちゃけリアスから見てもわかるし、そもそも朱乃や小猫はわかるが、何故ソーナにまで関わる

事をいやがってるのか。

寧ろリアスにしてみたら逆に家の名前とか関係なく、ソーナと楽しくやってる一誠に感心できるくらいだ。真っ向からソーナの両親に消えろとまで言われてるのに拘わらず。

「部長は良いんですか!? またアイツは……!」

「冷静になりなさいセーヤ、単に話をしてるだけでアナタにそこまで言う権利は流石に無いわよ」

「ですが見たでしょう!?! あのシトリー先輩だつて……!」

「本人は心の底から楽しそうにしてる様にしか見えないわね」

誠八のギラついた目を流しながらリアスは冷静に諫めつつ、イリナが手を一誠と繋いでたソーナに食って掛かり、それをヘラヘラしながら返してるといやり取りを見てふと思う。

小猫と朱乃の言うとおり、確かに『あの奇妙な集団』の間に身分や生まれの差別は一切無い。

いや無いどころか平然とその差を踏み抜いてる節すらある。

それは多分、一誠という人間が確かに周りが言うような欠陥を持った人間だったとしても——否、欠陥だからこそ開花した一種のカリスマ性が自然と惹き付けてるのかもしれない。

「良いから向こうに戻ってくれよ。さつきからお兄ちやまがぶつ殺しに来そうで俺怖いんだけど」

「その割にはヘラヘラしてますけどね先輩って」

「それに、うちの部長の判断の結果、別に裏切ったという訳じゃあ無いし。そもそも裏切る定義が不明ですし」

「それはそっちの勝手な判断でしょうが。ったく、鬱陶しいわねえ」

「大体俺達に何か期待してる時点でズレてるし。」

俺達は適当にその日暮らしたいだけだし、俺個人はセンパイと更に仲良しになりた
いだけだし」

「マイナスに期待は確かに良い判断では無いですね」

「……………」

暗い過去を特に持つ三人にしてみれば、ある意味誰にも分け隔て無い一誠達の輪の中は居心地が良いのかもしれない。

リアスはほんの少しだけ、この前から小猫と朱乃から引きずり込まれてる感を何となく感じながら、無意識にあの集団の中心化してるソーナが羨ましく思うのだった。

結局誠八に殺意向けられたまま中止となった始業式から数時間後の放課後。

一瞬にして学園閉鎖化した駒王学園内はゾツとするレベルで静寂化しており、声が聞こえるのは補強工事を終えた旧校舎一部と、永久自習とデカデカ書かれた黒板のある教室……そして、学園の屋上だった。

その三ヶ所の内のひとつ、屋上では永久自習教室からジュース買ってくると適当な理由を付けて抜け出した一誠と、職員室に残ってる教師の確認に行く別の理由を付けて抜け出したソーナが手摺に背を預けながら久々になる二人だけの会話を楽しんでた。

「つーかうちのクラスの教室生徒会の業務なんてしていいんすか？」

「大丈夫よ、どこでだって出来る事だもの」

イリナとゼノヴィアに始まり、最近では純粹に二人だけになる時間が無かった為、会話は他愛無いものの、一誠とソーナの表情は互いに楽しそうである。

その証拠に一誠の口調はどことなく覚醒前のそれに戻っている。

「久々に一人人生ゲームとか一人焼き肉したいなあ。バイト代も溜まったし」

「あら、まだそういう趣味は残ってたの？」

「当たり前っしょ。あの一人の空間は未だに好きだね」

「それは私も入り込めない？」

「うーん……そうなるかなあ」

一人でボード型の人生ゲームのルーレット回してニヤニヤ、店員に引かれてるのにも拘わらずお構いなしで焼き肉を拘りの焼き方で焼いて食べてニヤニヤするという、本来なら結婚できない男みたいな気質だったりする一誠の少し申し訳なさそうな苦笑の顔にソーナは仕方ないわねと微笑む。

それを含めてソーナは一誠という人物を知り、尚且つ惹かれているのだから。

「最近よくわからない期待じみたものを受けるんだけど、ああいうのは地味に勘弁して欲しいね。」

イリナちゃんとゼノヴィアさんは……まあしょうがないし、匙くんとサイラオーグさんは良くしてくれるから良いとしても、あの塔城つて後輩と姫島つて先輩……それからその二人に連れられてきたヴラディつて後輩に関しては……ねえ？」

「最近になって確かにそういう流れが増えてはいるわね。」

別に悪いことじゃないのかもしれないけど、紫藤さんの言うとおり妙に女性比率が多い気はする」

「だから兄貴様に目の敵にされてるのかも。」

「まったく、アレってストーカーの心理に近いもの持つてる気イしません？ 関係ないゼンパイと仲良くしててもあんな感じだし」

「それが一番不明だわ。」

「姫島さん達はまだわかるにしてもね」

兄という事になってはいる誠八の事で、半ば愚痴の言い合いになってる二人。

「ほぼ兵藤家から勘当された今、ほっとして欲しいし無駄に関わる事も控えてるのに何故か敵意が日に日に増す。」

まるで作作的なものを感じるが、それを引き起こして存在が居るとも思えない為、結局の所過^{マイナス}負荷が故にということであらへら笑って受け止めるしかない。

「まあ兄貴様の話はここまでにして、そろそろ戻りますか」

「名残惜しいけど、紫藤さん辺りに勘づかれちゃうしそうしましょうか」

その上で逃げてみせる。

おとぎ話の様な負完全にはなり得ない。

だがなり得ないなりに生きてやる。

お互いの顔を剥がしても尚、互いに心の底から大好きという気持ちで居られた二人はどこまでも最低^{マイナス}で、何処までも惹かれ合い続けている。

互いのどうしようもない過負荷に……。

「でもそのまま帰るのもちよつと寂しいので、ほら一誠くん？」

「んあ？ なんすか両手なんか広げちゃって……？」

「わからない？ 二人の時になると結構ニブいのね一誠くんは？」

教室に戻ろうと先に屋上を出ようとした一誠を呼び止めたソーナの行動に首を傾げ、クスクス笑って鈍いと言われて『ああ……なるほど』と気づいた瞬間、一誠は真っ直ぐ両手を広げてるソーナに近寄り、軽く抱き締め合う。

「すっかり兵藤くんと的身長の差も付いちやったわね？ 向こうは見た感じだけ一誠

くんは全然変わらない」

「貧弱だからなあ……」

「私にとつてはちようど良いわよ？ ふふふ、それで？ 久々に誰の邪魔もなくこうやって出来たのに、これで終わりにしちゃう？」

互いの背中を優しくポンポンしながらのハグと言えば多分それまでだけど、最近二人のみになる事が無かったのかしばらく続いたが、ソーナの甘ったるいトーンの声による耳打ちにより変わっていく。

「………………。誰かに見られてました的なオチは無いやな？ あと割って入られるとか

……………」

「うん無いわ。だからほら……………」

キヨロキヨロと最近多いオチを警戒して辺りを伺う一誠の頬を両手で添えて固定し、額をコツンと軽くくっつけ合わせたソーナがポイッと邪魔だと云わんばかりに眼鏡をそこら辺に置き、目を軽く閉じる。

「一誠、大好き……」

「負けるよセンパイには。俺も大好きっすよ」

少し冷たい風が屋上を吹き抜け、発した声が掻き消される最中、確かに二人の間にだけは聞こえる声で互いに変わらない重度の想いを告げながら唇を重ねる。

何度も離れてはまた重ねてと繰り返し、やがては所謂大人のキスにエスカレートしていこうとも、今だけは文句を言われる事は無く、互いに持つ強烈な想いを確かめあうのだった。

「はあ、久し振りだったからちよつと興奮しちゃった……一誠は？」

「そりゃまあ……俺もっすよ。」

少なくとも、もしセンパイの両親に排除されに来たら、センパイを拐って全力で逃げ

て、エロいことでもしてやろうかと思うくらいには

「あらそう？」

ふふ、そうなたら本当に私を拐いにきてね？　ちゅ……♪」

終わり

悪平等？

紫藤イリナにとって、ソーナ・シトリはまさしく目の上のたんこぶだ。

数少ない同類なのだから、ソーナが悪魔だとしても本来なら共感できる箇所は多いのだけど、それでもイリナにとってソーナとは同じ一人の男の子に惹かれた同士による敵になる。

だからしょっちゅうソーナに突っ掛かったり、酷い時は取っ組み合いの喧嘩にすら発展し、その都度一誠が止めたりゼノヴィアがオロオロしたりする生活が日常化している。

まあ、取っ組み合いのとはいえ、最初期の頃みたいなスキルを使用した本気と書いてマジな殺り合いで無くなっただけマシなのかもしれないし、基本的には同類同士ということもあって一誠の事さえ無ければ普通に馬が合うようなやり取りも多い。

「天界陣営が、転生悪魔の駒システムと同じシステムを開発したらいいのですが、ゼノヴィアさんとイリナさんはご存じかしら？」

「な、なに!？」

「ふーん？」

この日も永久自習と書かれて放置されている元一誠のクラスの教室では、マイナス三人と十まだ普通のゼノヴィアが集い、持ち込んだプリンをパクつきながらの楽しい楽しいトークが繰り広げられていた。

内容はどうやら元々イリナとゼノヴィアが所属していた天界陣営の技術発展についてらしく、転生悪魔となる駒のシステムに似たものが出来上がったらしいというソーナからの情報にゼノヴィアが特に驚いていた。

「つまりこの先は選ばれれば天使に転生できるのか……!」

「まあそうなるわね、先の事情で純粹天使は生まれないし」

「へー? それはまた革新的ね」

「随分と他人事だねイリナちゃんは？」

プルプルと皿の上で震えてるプリンをスプーンで軽くつついているイリナのあまりにもどうでも良さげな反応に一誠が首を傾げながら話し掛ける。

それに対してイリナは『うん』と頷くと、さも当たり前ですとばかりに返す。

「だってもう私、向こうとは完全に手を切った——いえ、手を壊しちゃったしね。今更転生天使の話に興味なんて無いわ」

覚醒前ですら魅力に感じ、再会時の完全覚醒の一誠とこうしてのんびり過ごさせてる今、向こう側に残る自分の痕跡と記憶全てを壊したイリナには最早どうでも良い話らしい。

「ま、ゼノヴィアの場合はそれでも無いみたいだけどね」

「え？」

チラツとゼノヴィアを見るイリナの視線にギクツとするゼノヴィア。

「貴女の場合、私に流れで着いてきただけだし、そういうシステムが出来上がった今、寧ろ天界側に魅力があるんじゃないの？」

「あー……確かに、ゼノヴィアさんと今までこうしてられたのがおかしい話だし、やっぱり戻りたいだろ？」

「え? え?」

「未練が無いようには見えないわね確かに」

ジーツと三人揃ってスプーンの先をくわえながら向けてくるマイナスらしい瞳にゼノヴィアがオロオロとしてしまう。

「わ、私はそんな別に……」

指摘されてみれば確かに未練はある。

あるが、ずっと信じて信仰してきた神はとつくの昔に実は死んでましたと知った今、そういう技術で補ってたとしてもゼノヴィアの中に残る天界側への不信任は拭えない。

いや逆にそんな所とは無縁のこの場所で、若干扱いが適当にされてる感はあるけど居心地は良いし、腐っても自分はこの奇妙な集まりの中でも初期的メンバーなのだ。

マイナスでは無いにせよ、ゼノヴィアにこの場所を捨ててまで戻る勇氣も氣力もある訳が無かった。

「無理しなくても戻りたかったら戻っても良いぜ? なんやかんやゼノヴィアさんが俺

達みたいになる事なんて無いんだし、普通に戻るなら戻るべきだけ」

「ええ、ただミカエル達に選ばれないと無意味だけど」

「あー……そういう意味では芽は無きそうね。デュランダルも消えたし」

「う、うん、私別に戻りたいなんて思っていないぞ？　な、なんで皆して戻れつて空気を放

つんだ？　やっぱり私って邪魔なのか？　そうなのか……グスツ」

「別に邪魔とは思っていないって。」

「いやまあうん、君がそうしたいなら別に好きにしたら良いと思うよ。そのちよつと前の俺に通ずるネガティブさは嫌いじゃないし」

聖剣のゴタゴタ以降、すっかり泣き虫になってしまったゼノヴィアがメソメソと泣き始めたのを見て、一誠が苦笑いしながら好きにしても良いと、取り敢えずは言っておく。

一誠に限らず、ソーナとイリナもそうなのだが、どうにもゼノヴィアが泣いて愚図り出すとその原因をなんとかしないといけないという変な使命感に囚われてしまう。

それがデュランダルを失うことで代わりとなって芽生えたゼノヴィアの何かなのか、それとも単に泣き虫なのが見ててしようもなく思えてしまうからなのかは三人にもまだわからない。

「ぐすん……ぐすん……」

「あーあ、また泣いちゃった」

「この子、デュランダル失ってから凄くよく泣くようになったわ。」

「こんな子じゃなかったのに」

「仕方ないからお菓子与えて泣き止ませましょう」

少なくとも、すぐれる相手がこの三人しか居ないというゼノヴィアの気持ちには気づいてないみたいだ。

「ほら、チュツパチャツプスあげるから泣くなよ?」

「わたあめもあげるわ」

「それなら私は板チョコを」

「ぐすん……ありがとう」

三人からそれぞれお菓子を与えられる事で少し泣き止んだゼノヴィアは、無垢な子供みたいにはにかみながらそれを受け取る。

隠れる存在がそれまで信仰していた神で、それが張りぼてだったというショックが大

きすぎたせいでの軽い幼児退行を引き起こしてる様子らしく、今の彼女が心底信用できないのは、よりにもよってこの過負荷三人だけなのだ。

「うん、おいしー」

三人から貰ったお菓子を、泣いた後の赤く充血した目ではにかみながら食してるゼノヴィアを見て少し一安心した三人は再び会話に戻る。

内容は勿論先の転生天使の話なのだが、決してゼノヴィアに戻るとか転生してみたらという話は振らない。

クラスどころか学年すら違うソーナに対して授業はどうしたという突っ込みをする野暮な者達も居ない中、気付けば何てことない日常的な話になって行くと、最近よく頻繁に誰かが開けるようになった教室の扉がガラリと開けられる。

「おいーっす」

入ってきたのは……この学園の生徒にしては老けているし、教師というにはあまりにも変な態度の一人の男だった。

「おーおー、集まってるな。聞いてた通り全然人も居ないし」

そんな見知らぬ男の侵入に思わずポカンとしてしまう一誠、ゼノヴィア、イリナだったが。

「何故アナタがこんな場所に……」

一人、ソーナだけは当たり前前の様に入ってきて教室中を見渡してる男に対して意外な表情をしながら話しかけている。

なのでソーナの知り合いなのかと判断し、一誠達は暫く黙ってソーナとその男を交互に静観しようとする、話し掛けられた男は何となく親近感を感じるヘラヘラした笑みを浮かべてソーナに対してこう答える。

「単なる様子見だよセラフオーの妹のソーナ。勿論悪魔としてとかじゃない意味でな」

「はい?」

「ねえ、誰あの人？」

「さあ、どつかで見たことあるような気がしないでもないんだけど、思い出せないわ」
「うーん、何かに似てるんだよな」

主語が抜けてるせいでよくわからない返答に若干警戒するソーナの横でヒソヒソとイリナとゼノヴィアと話す一誠達にしてみれば、平然とこっちに來るこの男に違和感しかない。

だがしかし、そんな四人の疑問はこのすぐ後、特に一誠にしてみたら現実で耳に入れる事すらまず無いと思っていたその名前を聞き……。

「アイツ……『なじみ』がわざわざ面倒見てまで覚醒させたオリジナルの過負荷を一目見たくて來たんだ……と言えれば取り敢えず警戒は解いてくれるか？」

何故この男が平然とできるのかを理解してしまふまでの時間はそんなに掛からなかった。

「おお、お前がオリジナルの過負荷だな？　そして二人のお嬢ちゃんもマイナス……」

へー、今の所三人かあ。いや、スキル持ちにと広げたら俺を含めて6人って所か」

「………………。何者ですかアナタは？俺の知ってるなじみって名前が安心院なじみだとしたら、知り合いと解釈しますけど」

「まあな、知り合いっつーか……アイツのパシリっつーか、まあ割りと長い付き合いではあるな」

「安心院なじみ？ っつて、それ確かイツセーくんの夢に出てくる女の人よね？」

「そしてスキルを自覚させた原因よ。」

「現実が存在してたなんて……」

「??? な、なんのことだ？」

か細い一誠の両手を掴んでブンブンと振りながら安心院なじみの知り合いを自称する男に対し、特にソーナは驚いた顔だ。

「まさか墮天使の総督殿が一誠君の夢に出てきた女性と知り合いだとは……」

「世の中ってそれだけ広いようで狭いって事だ。」

さて、自己紹介がまだだったな」

ソーナの一言に軽く返した男はその背にコカビエルと同じ色の翼を広げる。

「初めまして、この世界で最初の過負荷達^{マイナス}。」

俺はアザゼル、墮天使総督をやらされつつ安心院なじみのパシリまでやらされてるだけの人外だ」

安心院なじみに恐らくは最も近い人外としての自己紹介に全員が動けない。

サーゼクス・ルシファーが異様に嫉妬する相手こそ、このアザゼルであった。

「その人外さんが一体俺達に何のご用で？」

「見ての通り、私達はのほほんとお菓子を食べながらお話をしてる最中でしてね」

「墮天使がスキルを持つてるって……」

一瞬でまず勝てないと悟った一誠、ソーナ、イリナは別の意味で警戒しながらアザゼルの見据える。

「あー、そう警戒すんな。別に何もしない」

その警戒を肌で受けたアザゼルは翼を消し、苦笑いしながら適当な椅子に腰掛ける。

「俺はどつちかと言えば研究者気質でね。

戦闘とかは得意じゃないし、そんなものは出来たら避けて通りたい。

まあ、そのせいでコカビエルのバカが勝手やらかしやがった訳だが……元・ミカエルの所の悪魔祓いだったなその二人は？ すまなかつたな……」

「む……む……」

「墮天使の総督がこんな人間二人に頭なんて下げて良いのかしら？」

ふざけた調子では無く、真面目な雰囲気ですまず最初に頭を下げたアザゼルに対し、ゼノヴィアは何とも言えない顔を、イリナは皮肉を返してやる。

「まあな、そろそろ俺も引退してシエムハザ辺りにでも総督を押し付けようと思ってる。だから総督である内にお前らに謝っておきたかつたのさ」

然り気無く今の地位から引退するというカミングアウトと共にもう一度頭を下げる

アザゼルに二人はそれ以上何も言えずに目を逸らした。

「もう良いわ、あのタイミングでこっち側にすんなり行けたし」

「し、信仰する神が居ないと知ってしまった今はもう、何も思えないし……」

ちよつとやりづらさを感じてる二人の言葉にアザゼルは頭を上げる。

「そうか、という事はミカエル側には戻るつもりは無いと。まあその……紫藤イリナだったかは戻るつもりがないからスキルで細工したみたいだが」

「っ!? 何でその事を……」

「素養があり、殆ど覚醒しかけていたお前がその一誠と接触する事で完全に覚醒したことは俺もなじみも既に知ってる。」

お前達は知らないだろうが、一誠は他人を引き下げるのに特化してるマイナスだ。

だからソーナもスキルを持つまでになったのさ」

「他人を引き下げる。じゃあ俺と居ると弱くなるといふ事なのか……」

「まあ、が、例外もちゃんというぜ? 例えばサーゼクスと妹のリアスの従兄弟であるサイラオーグ・バアルなんかはその例外。」

既に自己を完全に確立している奴ほどその影響は受けづらい」

「……。随分と詳しいわね一誠君に？」

「そりやあな。今まで形に出せるマイナスに覚醒した奴はこの世に存在しなかったし、しかも一誠のスキルは俺もおとぎ話でなじみから聞いた球磨川禊フックメーカーの大嘘憑オールワイクソンきに少し似てるからな。お前達二人のスキル共々興味あるぜ？」

ニヤリとどことなくマッドサイエンティスト風な顔をするアザゼルに三人は内心『絶対嫌だ』と思い、一歩引く。

「俺は負完全にはなれませんよ。彼だからこそそなり得たんですから」

「だろうな、アイツを一時でも封じられる過負荷なんて彼ぐらいなもんだらうし」

「それで、そんな話をする為にならざるを得たのでしようかアザゼル殿？」

「正直言うとなんだが、元々はリアスの所に次のレーティングゲームの対戦相手のデータを渡しに行ったついでにな……」

「レーティングゲーム？ リアスの次の対戦相手は誰かしらね」

ピクリと反応するソーナ。

「デイオドラ・アスタロトだな。ちなみにソーナ、お前の所はアガレスだが……あー、その調子だとやる気は無いな？ データは一応手土産に持ってきたが……」

「……………。何で墮天使のあの人が悪魔のゲームのデータなんか持ってんだろ？」

「さあ？ よくわからないわ」

「もうお菓子食べ初めても良いのかな……」

蚊帳の外の三人は何で墮天使のアザゼルが悪魔のレーティングゲームについて割りとかんなに詳しいのかが不思議で、ソーナと話してるアザゼルの観察しながらトツポをかじる。

「アガレスはアスタロトの小僧に負け、サイラオーグ・バアルはグラシャラボラスの小僧を完封し勝利した。」

ランクでいうと、一応お前の所は5位なんだが……」

「ああ、それならどんどん順位は下がるでしょうねえ？」

「いや、お前の場合やる気出したら上位に食い込めるだろ。知ってるか？ 悪魔でマイナスは『勝てる』って可能性があるんだぜ？」

「あらそう、でも興味なんてないわね。うちの眷属達に怪我して欲しくないし」
「まあ、ゲームで一喜一憂するのが世の全てじゃないのは同意はするけど……聞いてた以上に一誠と馬が合う様だな」

こりや相当エグいマイナスだなあと、思わず笑うアザゼルは一応四人共通の知り合いであるサイラオグの試合の様子を教室にあつたテレビに映して見せる。

「ゼファードルって悪魔は知ってるな? 一誠を殴り飛ばした悪魔の一人だが……」

「ああ、あのヤンキーみたいな人かあ」

「あらら、サイラオグさんにズタボロね」

「やはり彼は強いな、全部素手で圧倒してる」

サイラオグの戦いを見てパチパチと心の籠ってる拍手をしながら、ゼノヴィアが素手のみで戦ってる姿に歓心していると、アザゼルが首を傾げながら補足する。

「聞いてなかったのか? サイラオグ・バアルは魔力を扱えないんだ」

「なに?」

「魔力つて、センパイの水の力みたいな奴？」

「そうだ。サイラオーグにはそういう力を扱う才能が無く、子供の頃は相当落ちこぼれ扱いされたらしい。」

が、今や奴は若手どころか冥界でも有数の強さを誇ってる。何故だかわかるか？ 奴は扱えない才能に腐らず、壮絶な鍛練をひたすら続けたんだ。

結果、この様に並みの坊っちゃん嬢ちゃんを捻り潰せるまでに成長したって訳だ」「すっげーなサイラオーグさん。」

そんな人とクワガタ取りして貰ってたんだね俺」

努力を放棄した自分にとって最も耳の痛い話だった一誠は、今更ながらそんな人物に庇って貰ったどころかクワガタ取りをしたりして遊んで貰えたあの夏休みの出来事が夢と錯覚してしまう。

「もつとも、サイラオーグは魔力の代わりに鍛えた肉体の他に切り札を持つてるんだ。」

それが——あ、ほらこの場面見てみる」

画面のサイラオーグを差しながら注目しろと言うアザゼルに対して四人はジーツと

素手で圧倒しまくりなその凛々しき姿を見つめる。

そこにはそれまで素手で相手を圧倒していたサイラオーグの手に、細身の白鞘の剣が握られていた場面だった。

「剣？ 彼は剣を扱うのか？」

「てかもう相手ボロボロじゃない」

「気迫で既にゼファードルの心は折れてるんだが、なんつーかサイラオーグはどうも油断しないタイプらしくてな……ほら見る、これが奴の切り札のひとつだ」

これでもかと顔を歪めるゼファードルを鋭く見据え、鞘から剣を抜いたサイラオーグが剣を天に掲げ、そのまま小さく円を描く様に回転させる。

その動きに合わせて空間を切り裂くような光の輪が浮かび上がる。

光の輪の内側がびび割れたような模様を描くと、太陽のような光が降り注がれてサイラオーグの体を包み込む。

閃光と共にサイラオーグの体は頭部と一部の胸部装甲が黄金に輝いているのを除いた黒ずんだ鎧を纏っていた。

「えっと、あれは……?」

「さあ? 神器の類いじや無いらしく、いつの間にか扱い出したらしい」

「まるで狼みたいな鎧だな」

「ゼファードルの攻撃も弾かれてるわねあの鎧に」

堂々とした足取りで躍起になって攻撃するゼファードルへと近寄り、時折片手でその攻撃を弾き飛ばす様はまさに騎士であり、狼の様な顔で覆われてるのもあつてまるでここの特撮アニメみたいだった。

「ゼファードルのリザインでこの勝負は終わった訳だが、やはり群を抜いてるのはサイラオーグだな。」

奴の鎧の事もそうだが、間違いなく強い」

「クワガタ相撲を匙君とキラキラした笑顔でやってる人のイメージが強すぎるんだけどな……」

終わり

マイペースなマイナス達

墮天使のアザゼルが悪平等であると知った———とかカミングアウトしてから、ちよくちよくやって来る事が多くなつた。

「俺オカルト研究部の顧問として一応教師やる事になつたからさ」

曰く、自分の趣味に生きたいから好きにやりたく、その為には天然でマイナス化したイツセー、ソーナ、イリナ達を調べたいらしい。

それを聞いた本人達は嫌そうな顔をしたが、アザゼルは全く気にしない。

「あ、そういやリアスの次のゲームの対戦相手のディオドラ・アストロだけど、どうもアジアに求愛して兵藤誠八と小競り合いをしてるらしいぜ？」

「ふーん」

「そう」

「だから何？」

「よくわからん……」

こうして情報もくれるのだが、どれもこれもイツセー達にしてみたらどうだつて良い情報でしかなく、アーシアがディオドラに求愛されてストーカーまでされていると聞いた所で別にどうでもよかつた。

「でよ、そのディオドラも中々エグい奴でな？ どうも奴の眷属はアーシアみたいな教会を追い出された元シスター達で構成されてるとかなんとか。」

アジユカの奴はそれを知ってるのかねえ？ 知ってる上で放置してたら笑えね？」

「いやだから知らんし、兄貴様がなんとかするんじゃねーの？」

「まあ確かにアレなら何とかするかもしれないな」

どうせ誠八がどうにかする。

ディオドラだろうがアーシアだろうが蚤よりも関心が無いマイナス達は、今ゲームをしてる方が大切なのだ。

「まあ、ディオドラの話は関係ないだろうが、小猫と朱乃についてはそうもいかないん

じゃないのか？ ……つしやあ！ またまた天使カードゲッツ!!」

「え……あの二人がなんすか？ ……げ、借金でマイナス五千万……」

カチャカチャとコントローラを操作しつつ、夏休みの最後から妙に寄ってくる小猫と朱乃についての話になったとたん、イツセー達の表情がうんざりしたものに変わる。

「いやな？ 俺がお前達の様子をちよくちよく見に行ってるって言ったら凄い理不尽に怒られてよ？ お前達ってあの二人に懐かれたのか？」

「懐かれたんじゃないくて、頼んでもないのに勝手に向こうが寄ってくるのよ」

「その都度兵藤君がイツセーを目の敵にするから、寧ろ困ってるくらいよ」

「あ、あの二人が来たら大体私の扱いが悪くなるか……」

揃って二人に対して寧ろ迷惑だと言い切るものだから、1人独走状態でゲームをプレイしてるアザゼルはちよつと苦笑いだ。

「あの二人も色々大変だからなあ。特に朱乃は父親のバラキエルと疎遠で、嫌悪すらしてる」

「それは前にチョロつと聞きましたよ。自分がハーフ墮天使である事に嫌悪してるとか
なんか」

「正直、だから何なの？ としか言えないわよ」

「それこそ兵藤君に慰めて貰えば良いじゃないと言つても聞かないし」

「なるほどな」

全くもって鬱陶しいというスタンスを全員がしている。

本人達からしてみたら厄介ごとばかり運んでくる貧乏神にしか思えないのだから仕方ないし、アザゼルも悪平等的なせいか特に説得しようとは思わない。

しかし噂をすればなんとやらで、教室のドアが突然開けられたかと思えば、噂の二人が本当に入ってきてしまった。

「こんにちは」

「えーつと、暇なので来ました」

『……………』

「おー、噂をすればなんとやらだなオイ」

普通に我が物顔で入ってきた朱乃と小猫に、思わず嫌な顔する四人に対してアザゼルは画面に視線を向けたまま二人に対して軽く手を挙げて挨拶をする。

「えーつとき、何をしに来たのかな？ いや、言わなくて良いやっぱり。」

聞いても大体碌でもないことなんだろうから」

「次のレーティングゲームの相手であるディオドラ・アスタロトが、アーシア先輩にストーカーをしまして、セーヤ先輩が守ろうとしてるんです実は」

「……………また頼んでもないのに勝手に話始めたわよ」

「それで、ゲームまで暇なのでこうして来たわけでした……………」

「でしたらディオドラ・アスタロトに負けないために特訓でもしたらどうなのですか？ わざわざ私達の所に来て何にもなりませんよ？」

抱えてる過去が過去なせいとか、最近はずっかりマイナス組に嵌まってしまってる朱乃と小猫に、ソーナが自分の事を完全に柵に上げて少し呆れながら言うも、二人は帰ろうとはしないし、そればかりか勝手に空いている椅子に座り出す始末。

「さ、これだけ言っても帰らんぞあの二人……………」

「相当お前らが気に入ったんだろうな」

「勘弁してくださいよ……。もし兄貴様に知られたらまあ何か言われるのは俺なんですから」

揃って勝手にイツセー達が持ち寄ったお菓子とジュースを飲み食いし始め、流石にイラツとしてきたイツセーが心底うんざりした顔で、アザゼルに連れ出してくれと頼む。

「顧問なら連れ帰ってくれませんか？」

「えー？　しょうがねーな。」

おい二人とも部室に戻れよ、部活中だろまだ」

「なんでアナタの言うことを聞かなければならないのですか？　嫌です」

「同じく。しかもアザゼルだし」

「……………嫌だつてさ」

さつさと断る二人を前にアザゼルがヘラヘラ笑いながらイツセーに無理だったと言
う。

役に立たねえ…………と内心毒づくイツセーも最早ゲームをする気にはならず、そのまま

ゲームの電源を切ると、勝手に飲み食いをしてる二人からお菓子とジュースを取り上げた。

「これ、俺たちで金を出し合って買ったものなんで勝手に食べるのとかやめて貰えます？　そして帰ってくれます？」

「二度と来るなこの雌共」

「兵藤君に文句をまた言われるのもしんどいですから」
「構ってくれなくなるんだ……お前達まで来ると」

「……………」

Get out. と言われてしまう朱乃と小猫だが、どうしても席から立つつもりは無いらしいし、しかもまたしても勝手に語りだした。

「最近セーヤ先輩から避けられてまして」

「なのでちよつと向こうでの居心地が悪くて……」

「ええ？　話も聞かずにまた勝手に語りだしてますけどこの人達……」

「しかも完全に自業自得だし」

遠回しに『なので受け入れて欲しい』と言う二人に、イツセー達はここまで来ると逆に感心してくる気分になる。

「はあ……もう良いや、居てくれても構いませんけど、この先どうなろうが知りませんか
らね？」

その結果、追い出すのも怠くなったので居るだけなら勝手にしろってことにして放置する事にした。

そして後日、ディオドラ・アスタロトとのゲームの日になんやかんやとごちゃごちゃあつたり、誠八が活躍して拐われたアーシアが救出されたとか何とかがあつたらしいが……。

「あー……誰も来ないのがこんなに気が楽なんて思わなかったぜ」

「あの会長……どうやら冥界で何か事件があつたみたいなのですが」

「あらそう？ 別に私達には関係ないし放っておけば良いわよ。」

どうせ偉い人達が後片付けとかするでしょうから」

イツセー達は変わらず学園の教室でダラダラやっていたようだ。

「禍の団とディオドラ・アスタロトが繋がってたという話が……」

「ふーん？」

「ふーんって……良いんですか会長？」

「良いも何も私達に何が出来るの？ 余計な徒労や怪我をするのがオチだし、巻き込まれてるでしょうリアス達が何とでもするんじゃないのかしら？」

ほぼ順応し始めた匙以外の眷属が何かしないのかとソーナに問うが、本人は教室の椅子を並べて横になるイツセーに膝枕をしながら頭を撫でてあげる方が余程重要らしく、本当に他人事だった。

「ぐ、ぐぬぬ！」

「お、落ち着けイリナ、じゃんけんに負けたのだから仕方ないだろ？」

「あ、あの時パーを出していたら私の勝ちだったのに……!!」

「良いなあ兵藤の奴……」

そのすぐ後ろからイリナがこれでもかと怨めしそうにしてるし、その横では匙が指を咥えながら羨ましそうにしている。

そんな割りとカオスな空間にも拘わらず、ソーナとイツセーはとても幸せそうで、とてもマイペースだった。

「あ……♪ ふふ、もうイツセーったら、流石にうつ伏になられると恥ずかしいわ……」
「センパイの匂いがして眠くなる……」

「お、おい!? そ、それって会長の股に顔を……!!」

「か、代わりなさいソーナ! 私がそれを……!!」

『あ、あわわ……!!』

それどころか、段々イチャイチャの度合いが凄い事になり、見てるもの全員が顔を真っ赤にしてしまうくらいにアレだったとか。

終わり

オマケ・秘密の夜

互いのマイナスに惹かれ、互いの見た目が醜かろうが愛すると誓い合えた。
ソーナはそんなイツセーが大好きだし、イツセーはそんなソーナが大好きだ。

「ふう、イリナがやつと暴れ疲れてゼノヴィアと眠ったわ」

「大変っすねえセンパイも」

同じ気持ちを持つ者にイリナが居るけど、これだけはソーナは譲るつもりもない。
今だってイツセーをめぐった決闘をし、何とか疲れさせて眠らせる事に成功したぐら
いだ。

「きや………！」

そうしたイツセーもまたソーナに対する気持ちは強烈で強大だ。

お風呂でも入ろうかしら……と呟きながら水を一杯飲んでから立ち上がろうとしたソーナを後ろから抱き付く。

「あ……んっ……！ イツセー……！ 汗かいちゃつてるから恥ずかしいわ……！」

「大丈夫だよセンパイ……。」

なんだろ、今見てたらこうしたくなっちゃったんだ」

後ろから抱きつき、もぞもぞとソーナの服の中に手を入れてまさぐり始めたイツセーに、ソーナから嬌声が洩れる。

「こつち見てよセンパイ……」

「も、もう……！ 今日のイツセーはちよつと強引よ？」

身体を暫くまさぐられてから解放され、頬を上気させたソーナが頬を膨らませながらイツセーと向かい合う。

それがまた可愛らしくて……我慢ができなくて、イツセーは手を絡ませながら眼鏡を

外し、何度もキスをする。

何度も何度も……くぐもった声だけが部屋の中を支配する。

「……………は……………あ……………イツセー……………」

ソーナは嬉しかった。

大好きな男の子が求めてくれるという今が、愛しくて愛しくて下腹部に熱が帯びるのはきつと自分も求めているからなのだ……。

「ソーナ……………」

「今、二人は寝てるわ……………」

だから私をアナタのモノにして？」

種族は違うけど、生物としての本能は同じ。

ならば抗う理由なんてありはしないし、自分を求めるのは愛する人だ。

ソーナはただ幸せに……………そしてこの日やつとイツセーを手に入れた。

「あはは、これで間違いなく私はアナタのモノでアナタは私のモノ……。」

ふふ、もしこれで子供ができたら皆どんな顔をするのかしらね？」

「苦い顔か、俺を殺そうとするかのどっちかだろうなあ。」

あ、命の危険を感じたらまたセンパイが欲しくなっちゃった」

「きゃん♪ もう、イツセーは弱い癖にケダモノなんだからあ……♪」

親に反対されようが手放すつもりは無い大好きな繋がりを……。

契り・終わり

英雄視されてる者の裏

冥界で何かあったらしい。

ストーカーがどうだとか、悪魔の旧社会派の一人が乗り込んでどうだこうだだとかがあったのって。

まあ別に知らんし、関係ないわけだけど。

「大変だったらしいぜ？　ディオドラが旧ベルゼブブと結託してまでアーシアを自分のモノにしようとしたのが発覚しちゃってたり、お前の兄貴つつーか兵藤誠八が何か切れて覇龍化して暴走したり、なぜか放蕩中のヴァーリがやって来て何かやってオーフィスとかグレートレッドが泳いでたりとかあってさあ」

「それは何ですか？　そんな状況があつても呑気に学校で宿題やってた俺達への嫌味かなにかつすか？」

「いや別に？　お前達には全然関係ない話だし、俺が言いたいのは、そういったイザコザで活躍してくれたのがあのサイラオーグだって話がしたかっただけだぜ」

「サイラオーグさんが……?」

「おう、例の黒ずんだ狼の鎧を纏って覇龍化して暴走したオメーの兄貴を止めたりとかしてな。」

いやー……アイツ思ってたよりは強いねホント」

「ふーん……?」

兄貴君が英雄視されるのはどうでも良いが、夏休みにクワガタ捕りをしたサイラオーグさんが色々と頑張ったみたいな話を聞いた時は、ぬぼーつとしていた一誠も聞く気になった。

どうやら彼はアザゼルの思っていた以上にやり手だったらしい。

「アイツの持つてる鎧ってマジ調べてえわ……」

謎の鎧を見て研究者気質が刺激されてるアザゼルがニタニタ笑っている。

どうやら概ね冥界はそんな感じになってる様だが、やはり一誠にはほぼ関係のない話だった。

「で、そんなこんなで今兵藤誠八はデート中らしい。

若いよなあ」

「はあ」

「そんな話をされてもね」

「かなりどうでも良いわね」

「美味しいな、このチョコチップメロンパン」

悪魔でしかもシトリーだが、全然興味がなさげなソーナ、元から人間なので悪魔社会がどうなるうが知ったことではない一誠、元は敵対組織に居たイリナとゼノヴィア。

ソーナはともかくとして、残りは悪魔でもなんでも無いのだからこんな態度なのも仕方ないのかもしれない。

まあもつとも――

「やあイツセー君!! 釣りに行こうぜ釣り!」

「はえ?」

噂のサイラオーグがニコニコ笑顔の釣りキチスタイルで現れるからそうもいかない

のかもしれないが……。

コンビニ行ってくる的なお手軽感覚でやって来たサイラオーグに連れ出されてしまったイツセーは、後からやって来た匙を巻き込んだの釣りキチタイムへと突入した。

「定番の湖や沼も良いが、こういう小さい川での釣りこそ至高だとは思わないか？」

「は、はあ……」

「ギヤツプがスゲーっす」

「釣りとか何年振りだろうな。割りと総督業が急がしくてさあ」

本当に用水路みたいな小さな川。

それも普段は誰も近づくことも無さげな川に、若い男女が割りと大所帯で畔に腰掛けながら釣りをする……それも全員が釣りキチスタイルで。

誰も何も言わないが、それはまさにシユールすぎる光景だった。

「申し訳ありません、突然言い出したら聞かない人なので……」

そんな主に慣れてるのか、女王のクイーシャ・アバドンが例に漏れない釣りキチスタイルで釣糸を垂らしながら、イツセー達に謝罪する。

「やることも無いし、寧ろ親切にして貰ってるので構いませんが……」

「先日のご活躍を聞いてるだけに趣味が少年というか……」

金髪ポニテの美女が釣りキチスタイル、しかも妙にこなれてる。

何とも言えない残念さを醸し出すクイーシャに、匙とイツセーは微妙な気分になる。

「そこが可愛いのですがね」

「……………」

クスクスと笑うクイーシャ。

ああ、そういう事か……と、匙とイツセーは無言で顔を合わせながら悟る。

大変そうだけど勝ち組なんだなあ……と。

「あ、また釣れたぞ！」

結局、そんなシユールな状況を出来るだけ楽しむ事にしたイツセーは何度も餌の付け替えをしては水面に垂らすという作業を繰り返すが一向に釣れやしない。

別に釣れないからイライラする気は無いが、さつきから横でゼノヴィアが入れ食い状態でもかんでも釣り上げてはハシヤイでいるのを聞くと、何だか微妙になつてくる。

「これはなんとという魚なんだ？」

「フナだな。人間界のフナは小さくて釣りやすい」

「フナか……。なあなあ三人共、フナが釣れたぞ！」

しかも釣り上げる度に、小さな子供の様にハシヤイでは獲物を捕まえては飼い主に見せに来る飼い猫みたいに一々報告までしてくる。

一切まったく釣れてないイツセー、イリナ、ソーナはその都度はいはいと適当な返しだ。

「よかったねー……？ 俺は一匹も釣れてないけど」

「楽しそうねー……？ 私も一匹も釣れてないけど」

「さぞ気分が良いでしょうねー……？ こっちはまったく釣れてないけど」

「え……あ……」

魚にまで避けられる程に退化が進んでいるのか、サイラオーグや匙やサイラオーグの眷属達はチビチビと釣り上げてるのに、この三人だけは未だに零。

別にだからムカつくって訳じゃないが、何となく虐めたくなつたので、凄まじく良い笑顔で一言ずつ返してやると、途端にゼノヴィアの顔は泣きそうなそれになる。

「す、すまない！ そんなつもりは無かったんだ！ お前達に褒めて貰いたくてつい

……！ 不愉快に思ったのなら謝るから！」

「「……………」」

三人に見捨てられてしまうと思ったゼノヴィアがオロオロしながら何度も謝る。

先に言うのと別に三人は怒っては無い。ただ単純にゼノヴィアが慌てふためくのを見ただけという最高に最低な連中である。

「や、やめてくれ……見捨てないで——うわああん！」

三人からの感情の见えない瞳を受け続けた結果、遂にビービーと泣き出してしまいうぜノヴィア。

ご存知の通り、コカビエルが起こした騒動の際、一誠がこの世に存在する聖剣の存在全てを『否定』してしまい、ゼノヴィアが所有していたデュランダルまでもが消え去ってしまった。

しかも信じていた神は既に存在していないという現実まで突き付けられてしまいうせで、軽く世の中に不信を持ってしまいうせのも無理はなく、彼女が今信じられるのはよりにもよってある意味表裏が無いこの三人だけだった。

だからこの三人に見捨てられてしまえば今度こそ自分は生きてはいけない——だから必死になって自分を見捨てないでくれと懇願するし、そのせいで泣き虫気味にもなってしまうている。

「お、おい……泣いたじゃないか」

「可哀想だろ……」

端から見れば可哀想に思えてしようがなく、思わずサイラオーグや匙が助け船を出すくらいにゼノヴィアの取り乱しっぷりは凄まじいのだ。

「ぐすん……」

「すぐ泣くわねアナタは。精神的に退行してるようにしか思えないわ」

「ごめんごめん、ほんの冗談のつもりだったけど、流石に悪かったよ」

「グミあげるから許してちょうだい？」

よりにもよって、このマイナス三人に依存してしまっている。

ゼノヴィアの未来はあまり明るいものではないのかもしれない。

「もぐもぐ……おいしい」

本人は楽しそうだけど……。

しかし、この依存度の高さが後に小さな小競り合いに発展するとは釣りに興じる皆は知らなかった。

というか、ある意味事の発端は地味に巨鯉を釣り上げてサイラオーグとはしゃいでるアザゼルから始まったともいえなくもなかった。

釣り遊びから明くる日。

常にイツセーという本来の性格とはかけ離れ過ぎて害悪と化した存在のせいで自分の精神の均衡が崩れる———と思ひ込む兵藤誠八は、デイオドラ・アスタロトや旧魔王派の一人とのイザコザに、イツセーが一切しやしやり出て来なかったというのもあつてか少しは落ち着きを取り戻していた———

「アザゼル、何故アナタはそう簡単に接触できるのよ?」

「私達が行つても居ないのに」

「知るかよつてか仕方ねーだろ、アイツのクラスは崩壊してるし、教師も全員嫌がつて勉強を教えたがらねえんだから」

「……………」

———てな事は無く、アザゼルが学級崩壊を引き起こしたイツセーの勉強の面倒を

見てて、それを聞いた朱乃と小猫の二人が納得いかないとかばかりに毎度イツセーの事を話題にするので、イライラが止まらなかった。

「クソ、またアイツの話を……」

「セーヤさん……」

「大丈夫だよ、最近大人しいみたいだし」

最早何かある度にイツセーが余計な真似をしてるのではないかと疑ってしまう妄想に囚われ始めてる誠八に、イツセーという存在そのものを嫌悪する木場とアーシアが落ち着かせる。

「別に何もしてないのに、どうしてそう過敏になるのかしら……。朱乃と小猫も気にし過ぎな気もするし」

あくまで中立なりアスはそんな割れてる自分の眷属達を前にため息を吐いてる。

「それでアザゼル？ 北歐神話の主神クラスが日本神話との会談の為に来日している――

——からの続きをそろそろ話しても良いんじゃないの？」

「んあ？　そうだったな。おいイツセーの事は後にしてオマー等もちゃんと話を聞け」

取り敢えずこの変な空気を紛らわす為に、リアスは話をすり替え、アザゼルから北歐神話が日本神話との会談を行い、その護衛の手伝いをするという話を聞かされた。

(ロスヴァイセか……)

その話を聞いてる最中、知識を持つ誠八はその中に後々仲間となる者らしき名前を心中呟き、彼女は間違いなくイツセー達と関わることは仲間になって以降でなければあり得ないと考えつつも、油断はしないことを固く誓う。

「アザゼル先生、当然その話をイツセーにはしませんよね？　何の関係もないアイツに」
「してどうするんだよこんな話。一般人を巻き込む訳ねーだろ？」

「……………」

アホらしいとばかりにアザゼルは返す。

いくらアザゼルとて、分類上は無関係のイツセーにこんな話をしても無意味なのは分かっているで言うわけが無いのだ。

「——と、いう訳でオーデインが来るぜ」

「いや誰ですか？」

「北欧神話の主神クラスの一人よ」

「ふーん？」

そう、イツセーには無くソーナには言うが。

そして常に一緒にイツセーの耳に入るのは事故みたいなものであり、嘘は言っていないのだ。

「噂だと結構な好色ジジイらしいわねオーデインって」

「ご名答。良い言い方をすると結構軽い性格してるともいえるな」

朱乃と小猫をリアスに任せ、イツセーの教室へと来たアザゼルは、当然の様に居たソーナにリアスにした話と同じ内容の話をする。

横で聞いていたイツセーはオーデインという者が何なのかすら知らない様だったが、ソーナ、イリナ、ゼノヴィアの三人は裏の顔も持っていたので知ってはいる様子。

「でよ、一応護衛の手伝いをリアス達に頼んだ訳だが……」

「えー？ そんな事をする暇があるならイツセーとダラダラしてたいから嫌だわ」

とはいえ、ソーナには最早使命感だの責任感だのというモノが完全に消え失せてしまっており、リアス達が頑張るなら自分はやらないと、珍しくソーナの方がイツセーに膝枕されながら、ニートみたいな台詞を吐いている。

「だろいな。別に俺も墮天使としてやらなきゃなんねー事であつて悪平等まとしては正直蚤程にどうでも良いと思つてるからな」

「第一そのオーデインってスケベなんでしょう？ 変な事されたら嫌だわ」

反対側の膝で膝枕をされてるイリナのやる気もへつたくれもない言い方に、アザゼルも墮天使として仕方なくやつてる感はあると同意する。

そのすぐ後ろでゼノヴィアがイツセーに膝枕をされてる二人を親指をしゃぶりながら羨ましそうに眺めてるのだが、アザゼルは——敢えて黙っていた。

「一応こんな事があるんだって話だけをしとこうと思つてただけだから気にすんな。

つーか下手にイツセーが関わるだけで兵藤誠八の精神が笑えるくらいおかしくなるしな?」

「言われなくてもそんな小難しそうな事に首なんて突つ込みたくはないつすよ。

頼りになるお兄ちゃまがどうせ頑張るだろーし」

「そうそう、最近上層部から無能シトリーと呼ばれてる私よりもっさりものであるりアスが頑張るでしょうし?」

「もう私は教会とも天界陣営とも関係ないし?」

「良いなあ……私も加わりたい……」

「くくく! すっかりマイナス化しちゃったなお前らも」

若手の中でもぶつちぎりの評判の悪さを誇るソーナの墮落っぷり——というか、隠

してきた本質の凶悪すぎるマイナスっぷりにアザゼルは思わず笑ってしまう。

いや、その本質を100%引き出させてるイツセーの他人を墮落させる性質の凶悪さともいべきなのか……。

朱乃と小猫もその一端に触れただけでああも魅入られてる辺り、闇を抱える者にとつてのある意味救世主なのかもしれない。

もつとも本人にその自覚はまったく無く、友人と楽しく生きられればそれで良しとか思つてない様だが。

「そーいやお前に婚約話があつたつて聞いたんだが……」

「何時の話をしてるのよ？ そんなものどつくに消えて無くなつたに決まつてるでしょ？ 全身の皮を剥いで、『この姿でも愛してくれるなら考えてやらないこともない』つて言つたら吐きながら逃げたわ。

ふふ、やつぱりイツセーだけよ、そうなつても私を愛してくれるのは」
「逆もまた然りですけどね」

「うーん、狂つてて最低だなお前ら！」

ある意味今の悪魔達よりも悪魔らしい本質を持つ人間。

それが兵藤イツセーなのかもしれないと、逆にオーデインや日本神話の連中に会わせてリアクションが見たくなるアザゼルなのだった。

終わり

ちよつとした実験だよ実験！

等と、横暴だけど小心者などこぞのディレクターみたいな事を思ったアザゼルは、まず試しにほんの一瞬オーデインとマイナス三人とオマケを会わせてみた結果。

「アレヤバくね？ 悪魔もそうじゃけど、あの人間ヤバくね？ 儂初めて人間怖いつて思ったわ」

神相手にすら潜在的な恐怖を植え付けられる程、イツセー達マイナス組のマイナスは退化の一途を辿っている様だった。

どうやら突き詰めればマイナスは神にとつての天敵にすらなりえる——という研究結果を得たアザゼルは少し満足したのだが……。

「センパイ、あの人がこっち見てきます　一人置いてきぼりくらつてる女の人がこっちをガン見してきます」

「放っておきましょう。」

リアス達がなんとかするでしょうし、早く帰つてご飯食べましょう?」

「そうね、余計な女は邪魔にしかならないわ」

「……」

そこで少しだけ予定外な事が発生してしまう。

何が理由なのか、突然リストラをくらつたとあるヴァルキリーがリアス眷属に――

「リストラされました、路頭に迷いました、お腹空きました……ご飯ください」

じゃなく、ほんの少しだけしか顔を合わせてないどころか話もしてないマイナス組に飯の催促をしてくるのだ。

「いやこっちは来ないで貰えます?　うちのお兄ちゃまの所行けば飯だろうがなんだろう

が貰えるでしょうし」

「リアスに連絡しておきますから、ね？」

「帰れ」

「そ、そうだそうだ！」

何でこんなほぼ知らんヴァルキリーに寄られるのかマイナス組には自覚が無い。

何故なら彼女はリストラ前までリアス眷属達……特に誠八と何やら楽しげにしてたように見えたのだ。

特にゼノヴィアは、この女がもし自分みたいにくつちに來たら追い出されてしまうかもしれないと必死にヴァルキリー——つまりロスヴァイセに帰れと連呼する。

「な、何ですか!？」 優しくしてくれただじゃないですか! 特にその赤龍帝の弟さんは優しく微笑んでくれたのに!」

だがロスヴァイセは帰ろうとしないばかりか、イツセーを指差しながら優しくしてくれた人と——

「優しくって何よ?」

「オーデインってのにリストラ食らったって一人シヨック受けてる顔が面白くてつい笑ってただけなんだけど、それを勘違いしてるみたい……この人」

「……………。ゼノヴィアみたいな人ね」

「! わ、私とあの女が被るとするなら、やはり私はあの女を懐に入れるのは反対だ! じゃ、じゃないとキャラが被って私が捨てられてしまうだろう!」

「心配しなくても君を今更見捨てる気はないから安心しろよゼノヴィアさん?」

この時点で特にゼノヴィアはロスヴァイセを敵視し始める。

「彼氏もできない、リストラされる……く、くふふ……私が生きてる意味なんて……」

「じゃあ養ってくれそうな男の人でも探したら良いでしょうに。」

夜中のホテル街に行けば金だけは持つてる変態なおっさんにご飯食べさせて貰えるでしょうしね」

「そうよ。」

変態プレイさえ我慢すれば、見てくれは良いんだし食いつばぐれる事なんて無いわよ?」

「もしくは兵藤君に胸でもさわらせて懐柔させるとか」

「私はそんな安い女じゃないです!! 何ですか皆してニヤニヤと人の不幸が楽しいみたいな顔で!!」

「……………」

どう見ても自分に対してやってた事をこのロスヴァイセに向け始め、何だかんだで勝手に押し入ってくる彼女にご飯を食べさせてる。

「……………おい」

「なんですか! アナタも私を馬鹿に——っ!？」

だからゼノヴィアは、生まれて初めて感じたトス黒い気持ちを包み隠さずに解放した。

「私から三人を奪うようなら……………どんな手を使ってでもお前を殺してやる……………!!」

「う……………」

嫉妬——というには余りにも凶悪すぎる殺意。

「ゼノヴィアさんがいつになく怖い顔してる。似合ってるねーけど」
「妙に声も低いわね。似合ってるないけど」

「泣き虫が何を急にかっこつけてるのよ？ 似合ってるないわよ？」

「何時も泣き虫な訳じゃないぞ私は！ ……………ふ、ふふふ♪」

（馬鹿にされてるのに心底嬉しそうにわらってる……）

三人の前では泣き虫ゼノちゃんだけど、その三人を自分から奪うと認識した者には殺戮ゼノヴィアちゃんに変貌する。

彼女も割りとマイナス組らしくなっているのかもしれない。

「私にはこの三人しか居ない。」

三人が居なかつたら生きている意味なんて無い…………だからお前が私から奪うのなら…………お前のせいで三人に捨てられてしまうのなら私はお前を絶対に許さない…………！」

キャラかぶり同士の戦い……………始まらない

逃げ出したい女王の駆け込み寺

北欧神話の会談がどうのこうのという、イツセー達にはまるで関係の無い話が出来上がってる最中、姫島朱乃はまさに修羅場に身を置いていた。

「私に近寄らないで!!」

「ま、待て朱乃!」

日本へとやって来たオーデインの護衛役としてグリゴリ側から派遣された墮天使バラキエルは姫島朱乃の父であった。

まさか顔を合わせる事になるとは思っていなかった朱乃は父の姿を見るなり全力の嫌悪と憎悪を剥き出しに拒絶の声をあげると、そのまま走り去ってしまった。

「俺が連れ戻してきます!」

「待ちなさいセーヤ!!」

「修羅場じやのう」

走り去る朱乃を追いかけようとする誠八をリアスが止め、一部始終を見ていたオーデインが他人事のように呟く。

「仕方ねーな、俺が連れてくるからバラキエルは引き続きオーデインに付いてろ」

「す、すまんアザゼル」

「まあ、お前から父娘の事は知らん訳じゃねーからな。」

「っー訳だから兵藤、お前はここに居ろ」

「で、ですが……!」

「わかった、言い方を変えようか？ お前がこのまま朱乃を追いかけても何にもなら

ねーんだから大人しくしてろ」

「っ!?!」

追いかけようとする誠八に対してそう言うと、アザゼルは朱乃が走り去った方向へとテクテク歩いていく。

（まあ、行く先の予想はできるが、それはハッキリ言つて悪手だぜ朱乃よ？）

どうせ向かう先は彼等の所だという外れる事はない予想をたてながら……。

知らない所で修羅場になつてるだなんて思いもしてないイツセー達はというと、この日は真面目に何時の間にか学級崩壊となつたイツセーのクラスの教師を担当し始めたアザゼルから出された課題をやっていた。

「イリナは割りと頭が悪いのね」

「うー！ うっさいわね、良いのよ成績なんて！ イツセー君のお嫁さんになるのが私の将来設計なんだし！」

「いやイリナちゃん？ 悪いけど俺はセンパイと駆け落ちする予定しかないんだけど？」

「くっ、この古文というのは難しいぞ」

まるで某・ファーストフード店に集まつて勉強にもならない勉強をするノリだが、割

りと彼等は真面目にやっているようで、意外に地頭が悪いイリナに対して全員がフオーするという流れだった。

「センパイ、できましたー」

「ん、正解よ。ふふ、イツセーはやれば出来る子ね？」

「やったぜ、センパイに褒められた」

「ぐ、ぐうう!! わ、私もできたわ! 正解したらイツセーくんに頭なでなでもらうからね!」

「わ、わたしもできたぞ!」

それはひとえに一問正解ごとに指定した相手から何かして貰えるという彼等が好きそうなお褒美システムのお陰であり、今も一問正解したイツセーがソーナに撫で撫でされている。

「全問正解したら、何をして欲しい?」

「抱き締めて欲しいっす」

「わかったわ、だから頑張りなさい?」

「よーっしや、やる気出てきたぜー！」

動機は不純だけでもやる気を引き起こす。

上手い勉強方を考えたものと、今は居ないアザゼルに拍手を送りたいと思うソーナは、正直正解しなくても抱き締めるどころかそのまま外国映画のちよつとエツチなシーンばりのキスでもしてあげたい気持ちを一瞬ながら、愛しそうにペンを走らせるイツセーの姿を見つめるのだった。

だがそんなのはほんとした——常人達から見れば吐き気を催す時間は、勢い良く開けられた扉の音と共に入ってきた泣いてる少女によつて唐突に終わりを迎えてしまう。

「……………ぐすっ」

「チツ、また来た」

「ホントだ、飽きない人だなあ」

「姫島さん、いきなり入ってきてなんでですか？ 確か今お仕事じゃなかったかしら？」

「ま、待て待て。泣いてないか？」

誰かと言われたら姫島朱乃であり、入ってくるなり泣いてる彼女を前にイツセー、

ソーナ、イリナの三人は特に疑問に思わず、最近頼んでもないのに勝手にやって来る片割れに対して割りどドライな態度をする中、ゼノヴィアだけは泣いてる彼女に気づいて首を傾げていた。

「ぐすん……ぐすん……」

「転んだとかじゃないのか？」

「だとしたら保健室にでも行けって話よ。何でわざわざここに来るのかしら」
「姫島さん？ 見てわかる通り今勉強中なのよ。」

「だからどこか痛いのなら保健室に行ってくれと非常にありがたいわ」
「いや、怪我をしたからじゃないと思うけど……」

泣いてるから何だとばかりに、特にイリナが来るんじゃないやねえオーラを撒き散らして辛辣な言葉を吐き、ソーナも割りどめんどくさそうに帰れと言う。

けれど朱乃は泣くばかりでその場からまったく動こうとはしない。

「くすん……くすん……」

「……………え、何すか？ 『どうしたの？』とでも聞いて欲しいのかこの人？」

「また始まった。」

「今度は何を持ってきたのよこのメンヘラ女は」

「はあ……勉強どころじゃないわねこれでは」

まっつったく動く気配がない朱乃に、イツセーもいよいよめんどくさい人だなど思い始めてると、何も聞いていないのに突然嗚咽混じりの声で朱乃が語りだした。

「い、今私の父と遭遇してしまいました。」

「それで嫌になって飛び出してしまつて……」

「また勝手に語りだしたんだけどこの人……」

「構つてちゃんなら他所でやれよ……」。

「ホント何から何まで鬱陶しいわねこの女」

「どうしましょう？ 一応聞いてる体だけは示してみる？ 勝手に話して満足したら帰りそうだし」

「それしかないかあ……ホントめんどくせつ」

「何で自分達が他人の相談話を聞かなければならないのかをと思しながら、取り敢えず」

朱乃を椅子に座らせ、話だけを聞いてみる事になる。

「前にもお話しましたが、父は墮天使で母が人間だったんです。

だから私はハーフ墮天使でして……」

「ふーん？」

「大変ねー？」

「ハーフは偏見の目で見られがちですからね」

（ほ、本当に面倒そうな顔だな三人は）

そんな話は誠八にでもして適当に慰めて貰えば良いだろうに、何で外様の自分達にそんな話をするんだ。

今は居ない小猫共々、わざわざやって来ては勝手に話す朱乃にうんざりする。

これもまた不運だというならマイナス故に受け入れるが、これは少し違う気がするのだ。

「そのお父さんが今居て、憎い気分が爆発してしまつたつてのは何となく聞いててわかりましたけど、ここに來たつて何の解決にはなりませんよ？」

「そうよ、アンタのお仲間とやらに慰めて貰えば良いのよ」

「リアス達の方が話してて安心する筈ですよ？」

「……………」

適当に相手して適当言つて煙に巻こうとする気全開の三人の心なき言葉を受けるが、それでも朱乃は帰ろうとはしない。

「こういう話は貴方達にすると安心出来る気がするので——いえ、現に今安心してます」「いやいや、俺達をどこぞのアロマテラピーみたいに言わんでくださいよ」

何時にも増して構ってちゃん化が凄まじい朱乃に、イツセー達は引き続きうんざりしている、今度はアザゼルが『やっぱりな』みたいな顔をしながら入場してきた。

「思った通り、ここに居たか」

「……………」

「あー先生？ この人早く連れてつてくれますかね？ 何か親父さんと出会したとかで

……………」

「バラキエルの事だろ？　顔を見るなり憎悪全開で拒絶して飛び出しちまったんだよ」

「それで何でここに来るのよ？」

「さあな、お前達みたいなマイナスの傍が心地良いからじゃねーの？　そうだろ？」

「……………」

アザゼルに言われ、無言で頷く朱乃。

「俺達を体の良い精神安定剤にしてほしくないんすけどね。」

第一、何度も言うけどうちの兄貴にでも慰めて貰えよって話なんすよね。

あの人なら満足する言葉でもくれそうですし？」

「なにかを言つて欲しいとかじゃないの…………」

小猫に誘われる形で生物として最低なイツセー達について少し深く知ってしまった朱乃は、その複雑な過去すらグチャグチャにかき混ぜて台無しにして忘れさせてくれる気がしてならないという安心感を知ってしまった。

「第一誰だしバラキエルって？」

「アザゼルと同じ堕天使なのよ。で、その女の父親みたい」

「へー？」

「まあ、そんなリアクションしかできないよな。私も正直よくわからんし」

「いつそ匙達に押し付けてしましましょうか……」

それはリアスや仲間達からでは決して獲られない劇薬の様なものだった。

差が無く、種族の隔たりもない。

サイラオーグの様な悪魔だろうと、アザゼルの様な堕天使だろうと関係ない奇妙な関係。

そこには勿論偏見の目は無い。

「要するにその父親との関係を綺麗さっぱりにすれば先輩は満足って事なんですか？」

生まれや育ちなんて関係ない。

夏休みの時に偶々彼等を見たが、それは朱乃にとつてまさに理想だった。

「おい待て、まさかお前、コイツの血縁関係を否定するつもりか？」

「だってこの人それが望みなんじやないですか？ それとも単純に構ってちゃんがその親父さんに発動してるってんならわざわざこんな場所に來る理由もないでしょうに」

「そりやあそうだが、一応バラキエルは墮天使としての同期だからよ……」

「じゃあ同期として彼女のメンタルケアをしてあげてくださいいよ？ なにかある度に駆け込み寺扱いされても困るだけです、第一ですよ？ こう他の事に時間を取られてはセンパイとの時間が削れるんですよねえ？」

「だらけた面しながら今まさにソーナに甘やかされてる奴がいう台詞じゃねーだろ」

落ちこぼれだろうが異端だろうが関係ない……後ろめたい過去など関係ない奇妙な繋がり。

その繋がりを持つイツセー達がとても羨ましく、その一端に触れてしまった安心感はず麻薬の様に朱乃を蝕む。

「ていうか、この人が飛び出して此処に來てるってお兄様は知らないでしょうね？」

「どこに行くとは言ってねーが、ある程度察してるんじゃないか？ まあ心配せずともここに乗り込んでくることはねーと思うぜ？」

「なら良いんですけどね、また変な言いがかりつけられて殴られでもしたら堪りませんよ」

「この前も顔を殴られましたからねイツセーは」

優しく、ゆっくり、確実に精神を腐らせていく。

それが彼等マイナス組の持つ一種のカリスマ性であり、朱乃も小猫も半分は魅入られてしまっているのだ。

「んまあ、帰る気がそんなに無いってんなら、取り敢えず腹減ったんでご飯食べようぜ？」

実は皆で材料持ち込んだてこ焼きパーティーをするつもりだったんで」

「面白そうだなそれ、俺にも食わせろよ？」

「言わなくても先生の場合勝手に食べるでしょう？　しょうがないから姫島さんにも食べさせてあげるわ。」

どうせ何言っても帰る気も無さそうですし」

「はあーあ、ホント役に立たないわねセーヤ君は」

この頭からっぽにして何にも考えずに居られる空気が……。

「あの、手伝います……」

「当たり前でしょうが、勝手に来てタダ飯まで食らう様だったらぶち壊してるわ。ほら、アンタは材料を切つてちょうだい」

「私は何をしたら良いんだ？」

「キミは匙君達でも呼んできてよ。」

キミに刃物を持たせたら何でもかんでもみじん切りにしそうだし」

「タコだけじゃなくてフルーツも揃えてみたわ」

「何でも良いからはよ食わせろ」

故に自ら堕ちていくのだ……。

「姫島先輩が居るけど、兵藤がまた来たりとかしないよな？」

「うーん、多分。」

勿論最初はおいかえそうとしたんだけどさ、何時にも増して構ってちゃん化がひどくて帰ろうとしないんだもんよ」

「何で会長やお前達の所にそもそも来るんだよあの人は？ グレモリー先輩とかお前の

兄貴は何してる訳？」

「それこそ俺が聞きたいぜ匙君」

より酷い構ってちゃんに。

終わる。

オマケ・もしかしての未来（パターンその1）

上司というか社長というか、とにかくそんな立ち位置の人に男の影が無いとわざわざ会合した悪魔や堕天使達の前で言われて執着を味わされた秘書のロスヴァイセは、その悪魔の女性達が仲間の男性悪魔と楽しく遊んでる姿を見えますます落ち込んでいた。

それは所謂僻みなのだが、彼氏いない歴と年齢がⅡになってしまってる彼女はわかつ

ていても自分の状況に嫌気が差してしまっていた。

何せ上司には常々からかわれるし、同僚からも笑われる。

挙げ句の果てには過去にちよろつとやらかしたせいで変なあだ名まで付けられる。

別に不幸な人生とは思わないけど、不運なのかもしれないと、一人トボトボと暇を貰って散歩をしながらロスヴァイセは思っていた。

だが、そんなロスヴァイセの身に後日更なる不運が降り注ぐ。

「り、リス……トラ……」

実は手違いでそんな流れになっただけなのだが、ロスヴァイセはこの日オーディンからまさかのリストラをされてしまい、完全に路頭に迷ってしまった。

それを見て哀れに思ったのか、リアスから良い条件をつけて転生悪魔にならないかと誘われたが、とにかくショックが大きすぎて領けなかった。

「ふ……ははは、私、何の為にこれまで生きてたんだろ……」

遠い故郷の祖母に顔向けすらできない体たらくに泣けば良いのか、それとも笑えば良

いのかもわからなくなったロスヴァイセはフラフラと宛もなく街をさまざつた。
だからなのだろう――

「あら、アナタは確かオーディンの秘書の方でしたね？」

「何で人生終わったみたいなの顔してるのよ？」

「前の私みたいだな……」

「買った卵でも割っちゃったのか？」

ロスヴァイセの不運はより強烈なものへと膨れ上がっていく。

「リストラされた？」

「はい……。これからどうしたら良いのかわからなくて

同じレベル？ いや、それ以下に最低な者達に話をしていく内にどんどん自分の中の何かが消えていく。

「最近こういう話をよく聞くよな？ あの姫島先輩も結局父親との縁を否定して壊し

ちやつたしきさ？」

「そうね、その後イツセイ君が理不尽に殺されかけたけど」

「兵藤君が手加減もせず本気だったし、バラキエルは精神が壊れるので大変だったわね」

「姫島朱乃が望んだから仕方なくって何度も説明したのに全然聞いてくれなかったしな……」

使命も。目的も。夢も。理想も。

何もかもが彼等を見ているとどうでも良くなっていく。

「サイラオーグさんの奢りですき焼きを食べに行くんだけど、キミも来るか？ 最近姫島先輩の件があつたせいで変に拒否すると却って大変な目に合うとわかつたし、お腹減ってるんだろ？」

「アナタを見てると清々しい程の『不運』だし、どことなく同じ匂いがアナタからするから特別よ特別」

「こう、私に近いものを感じるから微妙に放って置けない」

「嫌なことは飲んで食べて忘れるに限るわ」

全てをただ台無しにしてしまう彼等から感じる心地好さに……

だからロスヴァイセは踏み込んでしまった。そして開けてしまったのだ。

「お前らつてホントにエグいな。

ヴァルキリーにまでマイナスを覚醒させるとか……」

「別に何もしてませんけど俺達」

「私達ですら見てて哀れだったから、適当にご飯食べさせたり遊んでただけよ？」

「まあ確かに日に日にグータラにはなってますが」

「けど自分の不運を他人に押し付けるってスキルは相当やべえだろ。」

最近オーディンが事故で片目を潰して全盲になったり、北欧神話連中が不慮の事故で次々と消滅してるのって絶対にコイツのせいだろ？」

「それは知らないけど、何でか俺が疑われてるんすよねえお兄様に。」

「まあ、何時もの事ですがねー」

シンプルに酷いマイナスを。

「それくらいは大騒ぎなんだぜ？」

まあ、元々そういう素養をさせたのがオーディン達な訳で自業自得とも言えなくもねーがよ」

「でしよう？ 俺達は別にこの人にご飯食べさせたりしてただけですもん。ねえ？」

「そうね、変な生真面目さがあつたから、ちよつと怠ける方法を教えただけね」

「じゃが〇こが美味しい」

「その結果本人はこんなだし、北歐神話と手を切つてからのコイツのグータラっぷりはスゲーなオイ」

「苦労したんならその分今から好きにしたら良いんじゃないやね？ って言つてセンパイの家に住まわせて皆でこの子の身の回りの世話をしたらこうなつちまいました」

凄まじい勢いで墮落しまくる元・ヴァルキリー。

それを攻める者は誰も居ない。

「ロスヴァイセ、ねるねるね〇ねなるものを入手したぞ！」

「ありがたき幸せですぞノヴァイアさん」

だって下手に甘やかしたのがコイツ等なのだから。

「あー……もうどーでも良いやあ。

皆さんと居るだけで満たされるし」

「わかるぞロスヴァイセ。

なんだろうな、この毎日が家に居る感覚……」

嘘終了

メンヘラハーフ墮天使ちゃん

人は逆立ちしたって決して神様には勝てない。

誰かが言った台詞だ。

英雄の魂を持つ人間達で構成され、人ならざる存在を打倒せんとする派閥があるという話を聞いた事があるが、そういった手合いとはまるで別物——余りにも歪み過ぎているのだ。

「狂ってる……!」

「そ、それでも人間かよお前!!」

皮肉にもその歪さを生み出す元凶で、最初知ってしまったのは転生者という存在だ。

「言うに事欠いて狂ってるってのは酷いぜお兄ちゃん? 俺はただ本人がそう望んでるから仕方なく手を貸したただけだぜ? しかも最初は断ったし、俺よりキミの方が上手く

解決できるだろうぜとも言ったんだぜ？　なのにキミは全く動かないし、仲間の事よりも、新しく知り合う相手にばっかり気に掛けてたり、そんな連中と仲良くなる事ばかり考えてて気にも掛けやしない」

最初はほんの小さな綻びだった。

それが徐々に風船の様に膨れ上がり、やがて割れる事無く形を歪なものへと変質させていった。

その歪さは彼と深く関わる者達すらの心を歪め、引きずり込む毒沼の様だった。

「そもそも嫌な現実から目を逸らして逃げたくなくなるくらい、キミにだってあるだろう？

誰もが立ち向かえる強さプラスを持つてるだなんて思うのは烏滸がましいとは思わないか？

だから俺達は悪くない。」

「……………」

墮落させ、都合の良い真実に快楽を与える。

その所業はもしかしたら本当の意味での悪魔なのかもしれない。

「だからそうさせただけさ。そして今もそうなる。

さあ、皆さんご唱和お願いします——」

外からの侵入者が、そしてその侵入者を受け入れた世界が生み出した新たな怪物。マイナス

「——It's Reality Escape!!!」

夢と現実の境界線を壊す——それが兵藤イツセー

この日イツセーは珍しく……というか久々に一人だった。

「いらつしやいませ！ 何名様……ですか？」

「一人っす」

最近友達が出来てからやらなくなりつつあった一人〇〇シリーズが突然やりたくなったイツセーは、イリナとゼノヴィアをソーナに任せ、今日一日を独りで楽しむ事にした。

まずはそう——ソーナとはまだそんなに仲良くなかった時期には金があればやってた一人焼き肉だ。

「えーつと、特上霜降りロース一人前と、特上霜降りカルビを一人前——」

「は、はい……」

以前は一人と言うと大体微妙な顔をされていたが、久々となる今回は入って顔を見られたその瞬間に吐きそうな顔をされた。

それは彼の中の性質が完全に解放されてしまったからだろうが、そこはプロだったのか、死にそうな顔色になりながらも10人テーブルにわざわざ座って注文するイツセーに対応していた。

「ようよう……はいはい」

そんな店員さんの気持ちな考えてないイッセーはといえば、運ばれてきた赤く輝く寶石達を前にテンションが上がっており、紙の前掛けをわざわざ装着し、一枚一枚を丁寧に焼きながら一人肉を食べていた。

「んー……んふふふー！」

時刻はまだ昼前。

開店と同時に一番乗りで入店したという事もあるせいか、店内の客は今イッセー一人だけだ。

故に肉の焼かれる音と食べる度に、三高なのに、偏屈なせいか、つこんでいきなない男みたいに一人にやついてるイッセーの小さな声だけが虚しく響いていた。

「あ、ありがとうございますー……！」

「ふう」

そんな本人以外は重苦しい一人焼肉を久々に堪能して既に満足なイッセーは、今にもその場につつ倒れそうになってる店員さんにお辞儀をされながら退店する。

一応双子となつてゐる誠八と比べると明らかにヒヨロヒヨロな体格で、しかも脱いでみると括れすらある程に貧弱な体型で背まで五センチ程の差があるイツセーは、どうもいくら食べても体型がこのままで固定されてしまふらしい。

以前ソーナに『死ぬほど羨ましい体質ね』と言われた事があつたぐらいだ。

「次はジローのところにも行くのかな」

そんなヒヨロガリなイツセーの次なる一人シリーズは、ソーナ達よりも更に前にトモダチになつた猫達と戯れる事だった。

チワワにすら噛み殺されかけるくらいには殆どの生物から嫌われるイツセーだが、ジロー呼ぶその白猫母子達のみだけはこういう訳かまつたく嫌われない。

だからなのか、イツセーは最初にできた親友としてその猫達を大事にしている。

「お土産お土産と……」

しかもその猫達にのみ制御する気のないマイナスを駆使して意志疎通まで可能にしている程の筋金入り。

お土産を用意したイツセーの足取りはより軽く、トモダチの待つ場所へと向かおうとしたその時だった。

「失礼、兵藤一誠君だな？」

「？」

猫缶も買ったし、『猫を駄目にする』というキャッチフレーズに惹かれて買ったブラシも用意してイザ出発というタイミングでいきなり話し掛けられてしまうイツセー。

自分にわざわざ話し掛ける者なんて限られてるし、ましてや聞いたことのない声だと思つて振り向くと……。

「……………誰ですか？」

ごつついとしか感想が言えないおっさんがそこには居た。

背丈も体格も自分より一回り以上は大きいし、何よりこんなおっさんに知り合いは居なかつた。

ひよつとして通り魔か何か？　と思いつつもつい思った事をそのまま言つてし

まったイツセーに、そのゴツいおっさんは他の初対面の存在に比べたら大分マシな物腰で名を名乗った。

「突然ですまない、私は墮天使のバラキエルという者で朱乃の父親だ」

アザゼル並の『良い声』をしたゴツいおっさんはバラキエルという者らしい。久々にいきなり殴られない挨拶をされたイツセーは少しだけ抜けた声を出している。

「はあ、朱乃さんの……?」

「ああ、兵藤誠八君から聞いてな、彼の弟だというのも聞いている」

「……………」

なるほど、お兄ちゃまがねえ? と、どうせボロクソに言ったんだろなあとと思うイツセーだが、先程から凄まじく残る疑問があった。

(朱乃さんって誰だっけ?)

こんなゴツい人の娘だし、さぞかしゴツそう娘さんなんだろうが、生憎一誠は全く覚えがなかった。

いや、勿論朱乃というのは姫島朱乃の事なのだが、生憎一誠は呼んでも苗字か、最悪ただの先輩呼びわりだったので下の名前の記憶が抜け落ちていたのだ。

「えーっと、その……何か用でも？」

それなのにこのバラキエルというゴツいおっさんはその朱乃という人物と自分が関わりがあるみたいな事を誠八から聞かされてるらしい。

一体全体その朱乃さんというのは誰の事なんだと一誠は取り敢えず誤魔化して話を引つ張りながら記憶を辿る。

「取り敢えず場所を変えよう。」

少しついて来て貰えるか？」

（ええ？ ジローとコジローと遊ぶ予定があるんですけど……。てか墮天使のバラキエルって思い出したぞ？ 姫島先輩の事かこれ？）

その結果一応は思い出せたが、込み入った話があるらしいバラキエルによってジローとコジロー達との時間が潰されてしまった。

断る事はできなくもないが、このゴツイおっさんの気性がまだわからない内に断りもして半殺しにでもされたらジローとコジロー達と遊ぶどころじゃなくなる。

結局は弱者は強者に逆らえない運命だったと一誠はトボトボと連行される囚人みたいな気分でバラキエルについていき、人気の無い廃神社みたいな公園に連れていかれた。

「単刀直入に言う。朱乃に近付くのはやめて貰えるか？」

「……………ハア？」

結局ジローとコジロー達の時間を潰されてしまうはめになった一誠がバラキエルに連れられて、廃神社みたいな公園に到着すると、いきなり開口一番にそんな事を言われてしまう。

近付くのはやめとは何の事だと本気で訳がわからない一誠も思わずこんな声を出してしまうと、バラキエルは続けざまに言った。

「キミは兄と違つて転生悪魔でないことは聞いている。

にも拘わらず我々の事を知り、ソーナ・シトリーや追放された元悪魔祓い達と繋がりを持つている事もな……」

「……………」

「それでだ……その、あまりこういう事は言いたくないが、キミに良からぬ噂が立つているのでな、娘を心配する父親としてはあまり近づいて欲しくないのだ」

「……………」

申し訳無さそうにしつつも、割りとハッキリお前に変な噂が立つてるから朱乃に近づくなと言うバラキエルに、一誠は少し白けた気分になる。

「それって誰が言ったんですかね？ ひよつとしてお兄ちやますか？」

「……………」

どうせそんな事を言うのはあの誠八だろうと思つて試しに聞いてみるとバラキエルは無言になつた。

その時点で完全に凶星だと見抜いた一誠はハアアと大きなため息を吐く。

「当たり前って所ですか？ どうせ碌な事は聞いてないでしょうね？」

「……キミがソーナ・シトリー達をたぶらかしていると」

「あ、そうっすか」

相変わらず変な根回しだけは上手いなあの人は……と、もつと別の努力でもしたら良いのにと呆れる一誠。

バラキエルというゴツイおっさんに自分の悪評を振り撒く暇があるなら、その姫島朱乃をどうにかしてやれば良いのに……と。

それにそもそもバラキエルの認識は間違えているのだ。

「あのですね、あの人に何を言われたか知りませんが、俺はアナタの娘さんに近づいた事なんてありませんからね？」

「何だと？ しかし彼は娘がよく戦車と共にキミと話をしていると……」

「いえですからね？ 頼んでもないのにお宅の娘さんとその戦車って子が構ってちゃんオーラ振り撒きながら居座るだけなんですよ」

「構ってちゃん……？」

そもそも一誠達は朱乃や小猫を寧ろ、誠八から逆恨みされる原因のひとつとして近寄られるのを嫌がってすらいる。

それなのにその二人は何がしたいのか、勝手に聞いてもない過去を語ってネガティブになるは、帰れと言ってるのに構ってちゃんになって居座る。

いくら過負荷だろうが、迷惑なものは迷惑なのだ。

それをあたかも自分から朱乃に近づいて何かやってる様に言われるのは心外だった。

「第一そう思うならアナタが娘さんに注意でも何でもしたら良いでしょう？ 俺がセンパイ——ソーナさんをたぶらかしてる野郎だからやめとけどでも言ってるさ？」

「それは——」

「それをいきなり娘に近付くのはやめてくれ……って言われても知るかよって話ですわ」

「……………」

だからついつい口調が乱暴に——しかも天性の煽りスキルのせいで喧嘩腰に聞こえてしまう。

「ああ、言えないんですけどっけ？ おたく、相当娘さんに嫌われてるみたいだし？」
「っ!？」

その結果、ヘラヘラし始めた一誠の一言に大人としての理性が一瞬完全に消し飛び、バラキエルの腕が一誠の胸ぐらをつらえ、そのまま吊り上げるように持ち上げられてしまった。

「貴様……!」

心にある嫌な部分を的確に突つつく様な言い方に、ついカツとなってしまうたバラキエルは凄まじい形相で掴み上げた一誠を睨む。

だが一誠は恐怖におののくどころか、寧ろそのヘラヘラした態度をよりいっそう深めた。

「親子関係が上手くいってないからって俺に当たって解決するんですかね？ だったら好きだけ殴っても良いですよ？ 解決できるならね？」

「くっ……!」

ヘラヘラと何を考えてるのかまったくわからない、誠八よりも小柄で若干童顔の一誠の笑みにバラキエルは顔を歪めながらもその手を少し乱暴に放す。

「あーあ、シャツが伸びちまつたよ……」

だが確かな事はあった。

誠八の言う通り、この少年に朱乃を近づけさせたら何か取り返しのできない事になりそうだと。

何の力も持たなそうな少年だが、バラキエルにはその予感があった。

「……。事情はわかった、娘には俺が必ず言おう。だからキミは何があつても朱乃に近付かないでくれ」

「勿論ですよ！俺は約束を破らない事に定評があるので、安心して下さいね？」

「っ!!」

ニコリと人畜無害そうな笑顔を見せた一誠に、思わず嫌悪感で手が出そうになったバラキエルは必死に拳を握り締めて抑える。

「親としては俺みたいなの人間と関わりがあるだなんて心配ですものね？ ええ、ええ、わかりますよその気持ち」

だがどちらにせよ、後は朱乃を説得するだけ。

幸い話のわかる誠八と組めば芽はあると自分を納得させる事で落ち着きを取り戻そうとするバラキエルだが……。

「だからここで言います！

俺は、俺の大事な人以外がそこらへんで変な獣に食い殺されてしまおうが、助けられと泣き叫ぼうが、おたくの娘さんが強くて悪くて変態な男に拉致されてこれからエロい事されるとわかってようが、アナタに言われた通り、絶対に近づきませんよ！」

「！」

剥き出しにしたマイナスという存在はあまりにもバラキエルの心の弱い部分を嫌ら

しく突っついてくる。

「だから安心して説得でもなんでもしてください？」

あ、それとアナタも後になって『何で娘が目の前で危険な目にあってるのに助けないんだ！』とか変な言い掛かりをつけるのはやめてくださいよ？

だってアナタが近付くなって言ったんですから？ そうなつたとしても『俺はまったくもって悪くない。』」

無尽蔵の負の感情マイナスという未知なる存在はバラキエルの記憶に嫌になるくらいに残ってしまうのだ。

ほぼ台無しになってしまったバラキエルとの邂逅も平和に終わった一誠は少し遅れてジローとコジロー達に会いに行き、思う存分戯れた。

そして家に帰り、ソーナ、イリナ、ゼノヴィアの三人でのんびりしてその日は終わる予定だった。

「おかえりなさい、そしておじやましています」

「同じく」

「……………ええ？ 言った側からですか」

だがそうは問屋はマイナスだった。

家を完全に追い出され、そのままソーナの家に住む様になった一誠を待っていたのは、その構つてちゃん1号と2号……………つまり小猫と朱乃だった。

「おかえりなさいイツセー」

「ただいま……………あの、何であの二人が？」

「勝手に来て、勝手にあがりこんで、勝手に居座ってるのよ」

「TVまで占拠されて、おか〇さんといっしょが見られなかったんだ……………」

さも平然とリビングに居座り、夕方のニュースを見ながらお茶してる小猫と朱乃が何故居るのかを三人に聞いてみると、どうやらまたしても勝手に来て居座りしたらしい。

ゼノヴィアが子供向け番組が見られなかったとしょんぼりしているからに、凶々しさ

もどうやらパワーアップしてる模様。

「はあ……落ち着く」

「何にも考えなくて良いとはこんなに素晴らしい事だったなんて……」

「……………」

「ねえイツセー君？ そろそろこの二人ぶち壊しても良いわよね？」

「流石にリアスに一言言いたくなってきたわ」

「ひとりで○るもんまで見られない……」

この光景を先程のバラキエルに是非見せたいと一誠は思う。

「ねえ、さつきさアナタの父親と出くわしたんだけど」

「え？」

いや、もう言つてしまえ。

これを言えはいくら朱乃でも配慮くらいはするだろうと一誠は思いきつて先程バラキエルにあれこれ言われた事を話してしまう。

「ち、父と会った？」

一誠が父親と会ったと聞いた朱乃は途端に動揺し始める。
無論、ソーナやイリナ達も少し驚いていた。

「な、何か言われたの？」

「言われましたね、アナタに近づくなとかなんとか……俺が近付いた覚えなんか
ないけど」

「な……!?!」

当然父と一誠が会ってたその内容を気にする朱乃に一誠は全部話してやった。

これで少しは迷惑だと理解してくれるだろう……と、最初は戸惑いを見せていた朱乃に思いながら。

しかし聞いてる内に朱乃の表情は冷たくなっていく……。

「だから言ったんです、『言われなくてもおたくの娘さんが困ってようが近付かないし、

ド変態などこそその男に拉致られてエロいことをされようが、アナタに言われた通り絶対に近付きません!』ってね」

「……………」

「まったく、お兄ちやまがどんな説明をしたかは知らないけど、変な誤解をされちゃ堪らないぜ」

「大変だったのねイツセーくん……」

「ご苦労様……」

ほら、ぎゅってしてあげるからおいで？」

「わーい」

「あつ、コラ!? 然り気無くイツセー君と密着するな!!」

「それにしても兵藤誠八はどんな説明をしたんだ? それではまるでイツセーが姫島朱乃に近付いてるように取られてるじゃないか」

「確かに勝手に押し掛けてるのは私たちですからね……。変な説明はやめてほしいですよ」

ちよつとはスッキリしたと言わんばかりに言い終えた一誠がソーナに抱き締められて癒され始める中、朱乃の身体がかすかに震え始めた。

「? 副部長?」

それに最初に気付いたのは小猫であり、ゆっくり震えていた朱乃が静かに立ち上がると……。

「……」

まるで某負完全が安心院なじみによつて蘇ったヒトキチ君を前に浮かべた凄まじい負の表情とほぼ同じ——いや、なまじ顔が整つてるだけにそれ以上かもしれない迫力の形相に思わず全員が声を殺してしまった。

「私の生き方まで縛るつもりなの、あの男は……!」

「あ、あれ? そういう意味じゃないんだけどな」

「どうやら変な解釈をしたらしく、完全に実の親父に向かつて憎悪しかない感情を示す朱乃に、一誠は困った様に首を傾げながら、然り気無くソーナの胸に顔を埋めた。」

「父——いえ、あの男のせいだとんだ迷惑をかけました」

「いやだから、イツセー君が言ってるのはアンタが来るなって事で——」

「すぐにでもあの男に話をつけに行きます」

「聞いてます？ ……リアスもよくこんな爆弾みたいな子を女王にしてたわね」

「大丈夫ですわ、即座に縁を切りますから。そうすれば何の問題もありませんわ」

「だからそういう問題じゃないと思うのだが——駄目だ、聞いちやいない」

「ふ、ふふ……私と母から勝手に逃げた癖に今更偉そうに……！」

完全にメンヘラスイッチが入ってしまった朱乃は、ただ一人くつくつと嗤っている。

「副部長の気持ちかわかるので、私は寧ろ賛成の気分です」

「だからそれはキミ達の中での話だろ？ 何で俺達を巻き込もうとするかなあ。」

見ての通りさ、俺もうセンパイ達とこうしてのんびり生きれたらそれで良いのよ？

「こうやってセンパイに優しくされてればそれで満足なんですよ」

「最近妙に多いわよね……はあ、三ヶ月程前が懐かしいわ……。」

誰の目も気にしないでいられたし……はあ、早くイツセーの子供を身籠って実家から

勘当されたいわ」

「ふざけるな、それは私だこのやろー」

「……。ふっ、どうせ私は友人止まりさ……。ぐすん」

ひたすら怠い。

ナチュラルにソーナといちやつきながらイツセーはメンハラみたいに笑い始める朱乃を見て思うのだった。

嘘みたいな出会い

姫島朱乃が激怒した後、バラキエルに何を言ったのかも、どうなったのかもイツセー達は知らないし、知ろうとも思わない。

ただ頼むから変に拗らせて此方に飛び火だけはさせないでくれと願うだけ。

まあ、マイナスである彼等に飛び火が無い訳はないのだが、それでも願いたいものは願いたかったのだ。

「修学旅行？」

そんなマイナス達は本日も学級崩壊により空き教室となった教室に集い、自主学習だったり遊んだりする訳だが、唐突にアザゼルから二学期の中盤辺りに行われる修学旅行についての話をされた。

「そうだ、一応二学年であるイツセー、ゼノヴィア、イリナの三人は京都への修学旅行がある」

「京都すか」

「ああ、しかしクラスそのものが崩壊してるから、班分けをする際、他クラスに混ぜたって貫うという話で、凄まじく嫌がる教師達を説得したんだが……」

「いや行かぬーっす」

「……………うん、まあそう言うと思ったよ」

アザゼルが色々と駆け回ってたらしいが、そんな苦勞を台無しにするかの如くイツセーは軽い調子で行かないと宣言した。

無論、イツセーが行かないならイリナもゼノヴィアも行く気なれない様だ。

「俺たちが他クラスの班に混ぜたらどうなるかくらいは、自分でもわかりますよ。」

第一、別に行きたいとは思わないし」

「人がごちゃごちゃと居そうだし、何か疲れそうだわ」

「うむ、二人が行かない時点で私も行く気にはならないな」

自堕落な連中だ……。

アザゼルは呆れるも、半ば予想していた展開だった。

「じゃあ修学旅行は行かないって言つとくぞ？ 多分言つた瞬間教師や生徒達は万歳三唱で大喜びだろうぜ」

「うーっす」

こうして呆気なく修学旅行の不参加を決めたイツセー達。

古い日本の文化を見に行くよりも、トモダチとそこら辺で遊んでた方が楽しい。そんな連中なのだ彼等は。

「どうせ積立金とかも払ってないでしょうしね、さてと……」

「? どこに行くんだ？」

修学旅行に行く気は無いという方向になり、この話は此処で終わると、イツセーが徐に立ち上がって教室の出口へと向かおうとするのをアザゼルが聞く。

「ジローとコジロー達の所に。」

この前はあの姫島先輩の親父さんだかと話をする事になっちゃって少ししか遊ばま

せんでしたからね」

そんなアザゼルにイツセーは答えると、独りで出て行ってしまおう。
今度こそ猫達と思う存分戯れてモフモフするために……。

「アイツが一人で何かしようとする、決まって巻き込まれる気がするんだが……」
「それは分かっているけど、たまには一人にさせてあげないといけないの。」

「私やゼノヴィアやソーナに気を割かせてばかりじゃあね……」

「……………」 お前、イツセーに激しく迫る癖にそういう事も考えられたのか」

「失礼ね！」

自分を不運だと思ったことはない——いや、思ったら負けだと思っただけから自分なりにポジティブに考える様に努めた。

それがとある少女の生き方であり、その思想だからこそヴァルキリーとして割りと凄めぬの地位にまで立てた。

しかし時々彼女は思う……。

「はあ……疲れる」

自分を隠し続けながら生きてても幸せになれるのか——と。

それは自身の所属する組織の長の護衛兼秘書として遠い異国たる日本まで来て、その街の管理をする悪魔達や墮天使との顔合わせてを経て漸く暫しの暇を貰う事でやつと重りを外せる解放感によつて考えてしまうネガティブな思考——いや、きつと本質なのかもしれない。

「オーデイン様にはからかわれるし、あの転生悪魔の女性は仲間の男性ととても楽しそうだし、それを見たオーデイン様に彼氏居ない歴をばらされるし……はあ、笑つて誤魔化してるのにもそろそろ限界があるわよ……」

自分を隠して生きる。

自分を心配する者を悲しませない為に笑い続ける。

並大抵の精神力がなければ続ける事など不可能な所業を彼女はやってきた。

だがその精神的負荷もまた凄まじい。怒りたい時に怒れない、泣きたい時に泣けな

い、笑いたい時に笑えない。

不慮の事故に遭遇しても逃げ出せない。

素敵な男性と過ごしたくても相手が居ない。

……まあ、最後のものに関しては単なる願望でしかないのだが、お笑いヴァルキリー扱いされつつある少女・ロスヴァイセはせめてこの暇を使って蓄積させたストレスをどこかに捨てようと、街をぶらつく。

「……………」

日本で売られる製品は割りと良質な為、買わないにせよ見てるだけでも面白いと、色々なお店を歩き回っていたロスヴァイセは、少し休憩しようとたまたま通りかかった公園で一休みをしていた。

ベンチに腰掛けた時に見えたカップルイチャつきだらけの光景で即座に来るんじゃないかと後悔したのは秘密だ。

「こやー」

「?」

やばい、アイツ等全員自分の寿命を犠牲にしても良いから早死にしないかなと、どこぞの隈がひどいボサボサ頭の女子高生みたいな感情になりかけそうになっていたロスヴァイセの耳に可愛らしい鳴き声が入る。

なんだ? と思つて足下を見てみると、白くてフワフワしてそうな毛並みの猫が自分を見上げる様な形でジーっと見ていた。

「にゃー」

「野良猫……?」

片方が碧、片方が金という所謂オッドアイな白猫と目が合ったロスヴァイセはその猫に首輪がついてないと知り、どこかの野良猫だと判断する。

しかしどこかが妙だ。試しに手を差し出してみても逃げようとしないうし、意を決して触れてみても嫌がる素振りがまったくない。

「わっ……!」

それどころかロスヴァイセの膝に飛び乗って来た。

不思議な事に動物からほほ懐かれないロスヴァイセにとっては新鮮味溢れるものであり、またこの猫の可愛らしさに、少し癒されていた。

「不思議な子ね、私って昔から動物に吠えられるか逃げられてばかりだったのに。

日本の猫って人に慣れてるのかしら？」

「ふにゃー……」

ゴロゴロと喉まで鳴らしながら膝の上で丸くなる白猫にロスヴァイセは久し振りに素で嬉しかったのと同時に、久々に感じる幸運だった。

「はあ、でもアナタとお別れした後また介護ヴァルキリーをしなければならぬのかと
思うと気が重くなるわ……」

「にゃ？」

「あ、いえ、こつちの話よ……ふふふ」

しかしこの一時の後は自分を殺して生真面目ヴァルキリーに戻らなければならない。そう思うと少し憂鬱であり、その感情を察知したのかどうかまではわからないが、白い猫のオッドアイが真つ直ぐロスヴァイセに向けられる。

「あ……い……」

辺りを見渡せば楽しそうにしてるカツプルの中で自分は猫相手に愚痴りそうになる。

なんとも虚しい……とため息を吐いたその時、突然膝の上の白猫がロスヴァイセから離れて地面に着地すると、クルクルとその場で回転しながらロスヴァイセから離れていく。

「？」

単に走り去るのではなく、一定の距離を走るとこちらに振り向き、また回転する。

まるで自分に何かを伝えたがっているようにその時何故か感じたロスヴァイセはふと声に出した。

「ついていていい……って事？」

「にゃ」

猫に言ってもわからないし返事も猫にしかわからないが、何となくその不思議な白猫の挙動にそう感じたロスヴァイセは、その白猫についていく形で公園を出て、時には狭い路地裏、時には家の塀を伝い、時には猫にしか潜れそうもない壁の穴を抜けていく。

「ちよ、ちよつと待って猫ちゃん！ ど、どこまで私を連れていくの？」

「にゃー！」

一体全体この猫は自分をどこに連れていくつもりなのか……。

少々不安になってきたロスヴァイセだが、辿り着いたのはかなり昔に放棄されただろう、古い工場の様な建物だった。

「な、なにこゝろ？」

「にゃー」

「え？ え!?! は、入るの!?!」

ちよつと怖そうな雰囲気漂う建物を前に怖じ気づいてしまうロスヴァイセだが、白猫が平然と扉を飛び越えて中へと入つてくので、ここまで来たからにはとロスヴァイセもその身体能力を駆使して扉を飛び越えて中へと入る。

「にゃー」

「一体……」

中へと入つたロスヴァイセは、埃っぽい建物内を白猫を先頭に歩く。

一体こんな場所に何があるのか……素敵な男性は絶対に居ないだろうし——と、思いながら奥へと進んでいくと、白猫が突然ダッシュし始め、奥の部屋へと入つていった。

「？」

今度は何だ？　と思いつつも気になつてしょうがないロスヴァイセも遅れてその奥の部屋へと入る。

するとそこに居たのは……

「にゃー♪」

「お前どこ行つてたんだよ？ 一人欠けてたから心配したぜコジロー？」

「え……」

人間の男性がそこに居た。

さも当たり前のように数匹の白猫達に囲まれながら、自分をここまで連れてきた白猫の頭を撫でていた。

まさかこんな所で人と出会すとは思つてなかつたロスヴァイセは思わず目を丸くして立ち尽くしてしまう。

「え？ 俺の友達が居たから連れてきた？ おかしいな、センパイもイリナちゃんもゼノヴァイアさんも家に居る筈なんだけど……」

「あ……」

不思議なことに、その男性は猫と会話をしてる様に見える、その男性と目が合った。

どこかで見たような気がしたが、微妙に思い出せないその男性と目が合ったロスヴァ

イセはそのドス黒く濁った目に何かを感じた。

「……………。ごめん、誰だよこの人？」

「にや？」

「いや全然知らない人だぞコジロー？」

「にやーん」

「『でも同じ匂いがした？』……………この人にか？」

不思議だ。今初めて会ったこの男性から酷く懐かしい気持ちになる何かを感じてしまふ。

だからロスヴァイセはその華奢な男性から目が離せない。

「同じ匂いが……………ねえ？」

「……………」

何故なのか？ どうしてなのかわからない。けど懐かしくて酷く安心する。

ゆつくりとその場から立ち上がった男性がゆつくりとロスヴァイセの前まで近づく。

「……………」

「あ……………」

そしてグイツと無遠慮に鼻先が触れそうになるまでの距離で顔を寄せてきた。

黒く、汚く、負を思わせる両目にじーっと見詰められるロスヴァイセは自分の持つ全てを見透かされてる様な気持ちになって目を逸らしたかった。

「確かにコジローの言うとおりだけど、初対面だぜこの人？」

「にやー……………」

けど逸らせなかった……………。

ロスヴァイセはその理由がわからないまま、自分を見てなにかを理解したかの様な顔で離れていくその男性から目が離せなかった。

マイナスを受け入れる猫に誘われる形で邂逅してしまったロスヴァイセは、小柄な少年に言われるがままにちよつと汚れた椅子に座り、今更ながら慌てて挨拶をした。

「え、えつとその、その白い猫ちゃんに付いてこいって言われた気がしたので……」

「それはこの子から聞いたよ。」

何でも同じ匂いがキミからしたから、俺の友達だと勘違いしたみたいだけどね」

「同じ匂い……?」

大分懐かれてるのか、白い猫達にひつつかれていた小柄な少年の言葉に首を傾げるロスヴァイセ。

「そうか、自覚はまだしてないんだな? だったらそのまま知らない方が良いと思うし、今日ここで俺と会った事も忘れた方が良いよ」

ロスヴァイセの反応を見て、まだ自覚をしてないと理解した少年——てかイツセーは親猫のジローの喉元を撫でながら忘れろと言う。

「見た所キミは外国の子だろ？ 流暢に日本語を喋るからビックリしたけど、忘れてそのまま国に帰った方が良い、キミにも家族が居るだろうしね」

「は、はあ……」

まるでどこぞの金髪サマソ使いみたいな台詞を吐くイツセーは妙につっけんどだ。

しかしロスヴァイセはどうも目の前の彼の忠告に対して後ろ髪を引っ張られる様な躊躇を覚えてしまう。

「どうか何となくだが、少年に対して思うことをつい言ってしまった。」

「あの、何の事かはわかりませんが、何となくアナタを見た時から妙に同じものを感じるのですが、これの事を言ってるのでしょうか？」

「……………」

同じというか、安心してしまおうというか、何となくこの人にだっいたら素であっても問題ない気がするという予感というか。

初対面相手に何を思ってるのか自分でも戸惑ってしまおうが、そう思ってしまうと言うロスヴァイセにイツセーは思わず閉口してしまい、それが彼女に確信を与えてしまっ

た。

「キミが何者かを知るつもりは無いし、逆にキミが俺を知ったら後戻りができなくなる。だから忘れてしまえ——いや、忘れさせる」

「!」

まずいと思ったイツセーがその手におどましい程に巨大な杭と釘を持ち、即座にロスヴァイセへと投げつけた。

幻実逃否により、今あった事を彼女の記憶の中から消し去るつもりで。
しかし……。

「い、いきなり何をするんですか!」

「!」

ロスヴァイセはヴァルキリーとしての身体能力の高さにより、その釘と杭をキャッチする。

「こ、こんなものが刺さったら危ないですよ！」

「……チツ」

憤慨してるロスヴァイセにイツセーは舌打ち混じりでもう一度正面から投げつける。
当然またしてもキャッチされるが、これは単なる陽動で、投げつけた瞬間にイツセーはロスヴァイセの死角に回り込んでいた。

「幻実逃——」

そして両手でキャッチしたと同時に死角回り込んだイツセーは直接釘と杭を彼女に刺し込もうとしたのだが……。

「だから危ないって言ってるでしょう!？」

「うが!？」

運悪く回り込んだイツセーの腹に思いきりロスヴァイセの肘が突き刺さってしまった。

「(イ)え………！ (イ)ほっ！」

イツセーは当然知らないが、ヴァルキリーというある意味戦闘民族みたいな環境で育ったロスヴァイセに、ヒヨロヒヨロでダックスフンドにすら殺されるかもしれないくらい弱いイツセーが敵う訳もない。

今回の場合は運が悪かったただけだが、それでも普通にイツセーが勝てる相手ではないし、現にあつという間に組伏せられてしまった。

「こ、こんなもので私を刺そうとは何のつもりですか!？」

「えほ！ お、重い………」

「んなつ！ そ、そんなに太ってません!!」

組伏せられ、しかも全体重を掛けられて拘束までされてしまったイツセーに打つ手が無い。

いや、別に別の手も無くは無いが、異様に強いこの女性を出し抜ける気がまったくしなくなっていたイツセーは既にやる気が消えていた。

「まったく、私だからこれくらいで許すけど、他の人ならまず正当防衛で殺されても文句言えませんか？」

「わ、わかつたら降りてくれないか？ 重くてつぶれそう……」

「だ、か、ら！ 私はそんなに重くない！」

重いを連呼するイツセーにムカツとするロスヴァイセが怒りながら更に体重を掛ける。

このままだと本気で骨がへし折れるかもしれない……と、どういう訳か並んでお座りしながら見ているジローとコジロー達を横目に思ったイツセーは奇策を講じる事にした……。

「あ、ブラが透けて見える」

「っ!？」

不意打ちの台詞としてはどうかと思うが、どうやら成功したらしく、ヘラヘラとした言い方で指摘されたロスヴァイセは顔を赤くしながら胸をかばう。

その瞬間、押さえ付けられたイツセーの両手は解放され、これでもかとニヤリと嗤ったイツセーは今度こそだぜとばかりに手にあつた釘と杭をロスヴァイセの脇腹目掛けて刺そうと――

「わ、私の下着を見たからには責任を取りなさい!!」

「グボエ!」

したけど、真つ赤な顔をしたロスヴァイセの拳がイツセーの腹に突き刺さる方が早かった。

その突き刺さる様な一撃にイツセーは持っていた釘と杭を落としてしまい、激しく咳き込みまくる。

「げほっ! げほっ! ……い、イリナちゃん並のパワー……」

「異性に下着を見られたら結婚相手にしろと祖母が言つてたましたからね! きつちり責任を取つて頂きます!」

「ま……まつて……! み、見てないつす……じよ、ジョーク——うえあ!」

「ジョークだなんて言つて逃げられると思わないで! ぜつつつつつたいに逃がしま

せん！」

やばい、別の意味でこの女はヤバイと思って逃げようとするが既に遅すぎた。

逃げようにも鳩尾のダメージは深刻だし、仮にそのダメージを否定して逃げても、今何故かロスヴァイセに馬乗りにされてるので地力の差でどうにもならない。

「ちよ、と……ま……ま……お、おれ、好きな人が……」

「いきなり浮気!? 私の下着見といて浮気!?!」

「ちよ……ま……ま……おえ……!?!」

結局見ていたジローとコジロー達が見かねてロスヴァイセに飛び掛かって止めるまでこのやり取りは続いたらしい。

そして……。

「ご、ごめんなさい……!?! そ、その……」

「もう良いよ。」

「どうせ俺は弱いし、勝てないし……フツ」

落ち着いたロスヴァイセに慌てて謝られても、イツセーの気持ちは凄まじくよくはなかつた。

「あてて……肋骨折れたなこりや」

「い、今病院に——」

「あ、良いよ良いよ。……否定できるし」

「へ？」

「こつちの話。それでキミって誰なの？ 何か互いに名乗りもせず訳のわからない事になつちやつたけど」

「あ、はい！ 私はロスヴァイセと——」

「ノン」

「——え？」

「敢えて言うけど、その『取り繕った』感じで話すのやめて貰えるかな？ ……………無理してる様に見えてしょうがないし」

「!!!? な、何でわかるの……?」

「この子がキミから俺と同じ匂いがするって言つたら？ ……………そういう事だよ、何か

似てるんだよキミ、俺の大好きなセンパイに」

「センパイ……? そ、それって女?」

「? そうだけど……」

「浮気ですか!? 早速不倫か!?」

「……。あ、ごめん、イリナちゃんにも似て——」

「また他の女ですか!? 私の裸まで見といて!」

「見てねーよ、話を捏造しないでくれないか? ……なんだろ、めんどくさそうなのに不思議と疲れないな……」

結局またイツセーは負けたのだ。

「取り敢えずオーデイン様に報告して……」

「オーデイン……? ……やばい、嫌な予感がしてきたぞ俺」

「取り敢えずこの猫ちゃんには感謝しないと……!」

終わり

的中してしまおう予感

変な女に引つ掛かった気にしかかなれなかったイツセーは、謎のロスヴァイセなる女性を落ち着かせ、ある事無いこと硬軟取り混ぜた言葉で誤魔化す事で、取り敢えずその場からの逃走に成功はした。

「どうしてこうなるかなあ！」

成功はしたが、嫌な予感だけはずっと残ってしまふ。

故に珍しく自宅へと帰る道の中、一人毒づいている。

あの女性が間違いなく一般の方ではないという事もそうだけど、何より彼女は間違いなく厄介な立場な人だということを。

「オーディンって名前は確かアザゼル先生が言ってた様な……」

あーもう、どうしても嫌な予感がするぜ……」

その予感は果たして的中してしまうのか……？ 嫌な予感だけなら間違いなく当たってしまうイツセーは久し振りに頭を抱える。

「オーデイン？ あのjeeさんなら今この街で遊んでるが、オーデインがどうかしたのか？」

「いえ別に。たまたまゲームのキャラにそんな名前が出てきたので、どこかで聞いたなあと思っただけです」

試しに次の日になってアザゼルに然り気無くオーデインについて聞いてみたが、やはりどう考えてもロスヴァイセが口走ったオーデイン様なる存在と同一人物にしか終えない。

(まつずいぞ、またしてもお兄ちやまに買わなくて良いめんどくさい敵意を……)

上手く誤魔化しながらオーデインの事を聞き出せたイツセーは、そのオーデインとの打ち合わせがあると、今はどうなってるのかも知らない兵藤家へと行ってしまったアザゼルを見送りつつ内心盛大なため息を吐いた。

只でさえ最近は姫島朱乃だの塔城小猫だののせいで買わなくとも良い誠八の恨みを
買い漁つてる状況なのに、これではまたしても変な恨みを持たれてしまうかもしれな
い。

「オーデインがどうしたの？ 何か気になる事でもあるの？」

「へ？ いや、別になんでもないですよセンパイ。あ、それより俺ジュース買ってきます
わ！」

「あ、ちよつと……！」

この件は取り敢えず自分で何とかしなければいけないと、ソーナ達に飲み物を買って
くると言つて家を飛び出したイツセーは、対策案を講じる事になった。

見えても見てもない下着を見たと言つたら相手を取つ捕まりました。ただなんて、
流石のイツセーも情けなくて言えないのだ。

「………………。イツセーが何かを隠しているわ」

「アンタもそう思うの？ 奇遇ね、私もよ」

「隠してゐるって何をだ？」

「それはこれから解る事よ。

そうね……昨日イツセーから全く知らない女の匂いがしたから、もしかしてそれとも何か関係があるんじゃないかと私は思ってる訳だけど、イリナはどう思う?」

「アンタと同じ意見なんて気に入らないけど、私もそう思うわ。

もつとも、イツセー君の事だから何かに巻き込まれたんでしようけどね」

「に、匂い? 普通にイツセーの匂いしかなかったぞ……」

もつとも、割りとこの三人に隠し事は通用してないのだが。

所変わってこちらは兵藤家。

リアスの実家のパワーによって魔改装された結果、町内でもとりわけ浮いた豪邸と化しているこの家には、今北欧神話の主神であるオーディンや墮天使の重鎮のバラキエルが来客していた。

「……………」

「あ、朱乃……」

「おー……空気が最悪じゃのー」

だがその空気は誰が見てもわかる通りに悪く、その原因は墮天使の重鎮の一人たるバラキエルに対してリアス眷属の女王であり、バラキエルの娘である姫島朱乃が完全に殺意の入った拒絶オーラを撒き散らしているからだ。

「副部長……その、オーティンさんも来てるのですし」

「ええそうね」

無論周りというか、仲間達はそんな二人を見かねて様々なフォローをしようとした。

しかし何を言っても淡白な返事でバラキエルを視界に入れようともしないし、誠八からの話しかけに対しても冷たいものがあつた。

「よーつす、遅れてすまん——んあ？ 何だこの空気？」

そんな空気の中を台無しにするダウンナー調子でやって来たのはアザゼルであり、変な空気を感じてキョトンとした顔をしており、それを見たリアスがあきれる。

「空気を読んでちょうだいアザゼル……」

「は？ ……ああ、バラキエルと朱乃の事か。」

「何だお前等、まだそんな調子なのか？」

「……………」

「……………」

ほぼ他人事みたいな調子のアザゼルの言葉に父娘は沈黙で答える。

結局、こんな空気のまま改善もなくオーデイン達との互いの自己紹介はスタートした。

「えーっと、改めてワシの名はオーデイン、北欧神話の主神じゃ。今回は日本神話との会話のために来日したのじゃ、よろしく」

描写はないが、既にこのオーデインの性格を何と無く理解していたリアス達女性陣は、彼から向けられる舐め回す様な視線に軽く嫌悪感を持っていた。

とはいえ、相手は北欧神話のトップなので態度には出さず、淡々と自己紹介を済ませ

る。

その間、なんとか娘との関係修復を少しでもしたいというバラキエルのすぎる様な視線を朱乃に向けていたのだが、本人は全て一瞥すらくれる事なくガン無視している。

そしてここまで全く触れられてなかったが、椅子に座るオーデインの後ろに銀髪の女性が立っており、出掛けから戻ってきてから妙に様子がおかしい事に気付いていたオーデインが紹介する。

「で、こやつはワシの秘書でヴァルキリーのロスヴァイセという娘じゃ」

「……………」

「おいロスヴァイセ?」

「ふえ?」

「いや今お主を紹介したから挨拶を……………」

「あ、は、はい! ロスヴァイセと申します! 以後お見知りおきを……………」

慌てて頭を下げるロスヴァイセ。

やはりどこかおかしいと、オーデインは彼女の調子を引つ張り出す為にこんな事をリアス達に話し始める。

「ちなみに彼氏いない歴史Ⅱ年齢の生娘ヴァルキリーじゃ」

彼女を知る者なら、これを言えば面白いくらいの反応をして怒る筈だとオーデインはわざとにやつきながら言うが、驚くべきことにロスヴァイセは怒ることは無かった。

「（あ、ありや？） ふむ、どうじゃその赤龍帝よ、こやつを貰ってくれぬか？」

「え……」

「！」

ならばこれならどうだと、ちょうど年も近い赤龍帝の青年を巻き込んだのからかい言葉を放つが……。

「えへー……」

ロスヴァイセは某嵐を呼ぶ五歳児が、きれいなお姉さんを前にした時の様な笑みを浮かべてポーズとしていた。

つまり反応がゼロだった。

「おい、アンタの秘書変なもんでも食ったんじゃねーのか？」

「そ、そのようじゃのう？ 何時もなら笑えるくらい怒るのだが……おいロスヴァアイセ？」

何時ものロスヴァアイセじゃない事に、流石のオーデインもちよつと心配になって彼女に話し掛ける。

「男に相手にされなさすぎて壊れたのかの？」

「アンタが虐め過ぎたんじゃねーのかよ？ 今の世の中にはセクハラやパワハラで自殺する人間も少なくねーんだぞ」

「ロスヴァアイセはそんなタマじゃない筈だがのう……」

終始ニヤニヤと一人で笑ってるロスヴァアイセにオーデインはアザゼルに言われて少し戸惑う。

一体何が彼女に起こったのか……。昔から他の者と比べておかしな所があるとは

思っていたが……。

「くふくふ、もう私は彼氏の居ないヴァルキリーじゃない……」

「は？」

ニヤニヤしながら口走るロスヴァイセのその一言がどうやら原因だったとオーディン達は知ることになる。

「お、おお？　のうロスヴァイセ？　ワシの聞き間違いでなければ今お主……」

「えー？　何でしょうかオーディン様ー？　そうですよー？　もうオーディン様に彼氏居ない歴〓年齢とかからかわれる事も無くなりました〜」

「いやいやいや、お主大丈夫か？　誰かに騙されてやしないか？」

「騙されてませんよー　だって私、その人に裸を見られてしまいましたからあ？　これはもうその人と結婚するのが確定したって事ですし〜？」

「な、なんじゃと!?!　お、お主昨日はどこに行ってたんじゃ!?!」

にへらにへらと、完全に捏造の入ってる様にしか思えない事を話すロスヴァイセに、

オーデインは勿論、特に接点も無いリアス達も異性に裸を見られたという話しに、驚きも混じえながらも少し興味津々だった。

そんな時だっただろう、ニヘラニヘラとしていたロスヴァイセが困惑してる誠八を見てこう言い出したのは？

「そういえばアナタのお名前は確か兵藤誠八さんでしたよね？」

「え、ええ……」

何だ突然？ と何故か彼女の顔を見た瞬間名前がわかった誠八はニヤニヤした顔のロスヴァイセに引きながらも頷く。

すると、その頷きを見たロスヴァイセから――

「体格や顔付きは彼の方が幼い様ですが、彼——イツセーさんはアナタの肉親なのでしょうか？」

「……………は？」

「！」

「!？」

『！』

聞く筈もない名前が出てきた。

その瞬間オーデインを抜かした全員の時間が一瞬だけ停止した。

「な、何故アナタがアイツの事を……？」

努めて冷静を装おうとする誠八が何かを堪える様な震える声で問うと、アザゼル等も同じように質問する。

それは他の者達も同じであり、特にそれまで無言・無表情・無関心を貫いていた朱乃と小猫は、まさかの名に、少し必死が入った顔でロスヴァイセを見ていた。

「昨日お暇をオーデイン様から頂いた際に、偶々出会いました。

ふふ、その時私の裸を彼は見ましてね」

「バカな、何でそんな——」

「嘘だ!!!」

「っ!?! ふ、副部長？ 小猫ちゃん……？」

どす黒い感情が沸き上がるのを必死に抑えながら、ロスヴァイセの荒唐無稽なエピソードを否定しようとした誠八だったが、突然同じように聞いていた小猫と朱乃が見たこともない様な憤怒の形相と共にロスヴァイセへと突つ掛かり始めた。

「彼がその日会った様なアナタの様な方に対してそんな親切にする訳がありません！」

「ええそうですね、第一裸を見られたって話も嘘にしか思えません」

「ふ、二人ともどうしたのよ？」

「ひよ、兵藤一誠の話しになった瞬間朱乃が……」

納得できねえとばかりに詰め寄る二人に圧倒されてしまったりアス達。

特にバラキエルは一誠と先日会ったので、彼の話になった途端感情を剥き出しにする朱乃に酷くショックを受けていた。

「へえ……？ 彼を知っているのですか」

「ええ、大切な友人ですわ」

「尊敬する先輩です」

本人が聞いたらさぞ嫌そうな顔をするだろう二人の一誠への関係性の吐露に、ロスヴァイセは珍しく鼻で笑った。

「なるほど、どうやら彼の言う先輩さんとイリナさんという方では無さそうですね」

「……………」

「それはつまり……………ふっ、アナタ方は彼から相手にされてないという事ですよねえ？」

「な……………」

「彼の人となりは何と無くわかりますからねえ？」

「ろ、ロスヴァイセがグレた……………」

「アイツ、まさか今朝オーデインの事を聞いてきたのはこういう事だったのか？」

……………ちよつと面白くなってきたんじゃないかね？」

「アイツ……………どこまで俺を……………」

つまり私の敵じゃないと言外に言われてしまう二人。

誠八が尋常ではないレベルの殺意を蓄積させてるのだが、誰も相手にされてないのがまた悲しい。

「ロスヴァイセだったか？ 今言った事が本当かどうか本人に確かめるが……」

「アザゼル殿は彼の連絡先をご存じなのですか!？」

「ああ……一応携帯の番号の交換くらいは——」

「今すぐ連絡を！ そしてできればその連絡先を私に!!!」

「お、おう……」

獲物を喰らうハンターみたいな目でアザゼルの手首の骨をへし折らんパワーで掴んで懇願するロスヴァイセに引いてしまうアザゼルは、取り敢えず携帯を使ってイツセーに連絡を試してみる。

「ロスヴァイセをそこまでにさせるそのイツセーなる男は何者なんじゃ？ お主の肉親みたいじゃが……」

「家を勝手に出ていって他人に迷惑ばかりかける弟です……もう縁は殆ど切れてます」

「………………。その話が本当だとすると、割りと変な男に引っ掛かっているのではないかな……?」

流石に鵜呑みにするつもりはないが、まともとは思えない予感がしたオーディンは、珍しくロスヴァイセが心配になった。

「イツセーか？ お前にひとつ質問が——」イツセーさん！ 私ですよ!!!」——

——おう、そういう事だ。

てことはお前、本当にこのヴァルキリーの裸体を……え、見てないし捏造されてる？
あ、やつぱり？ だがコイツからお前達に近い空気を感じるのには捏造じゃあねーよな
？」

受話器の外から大声でイツセーの名を叫ぶロスヴァイセの目が怖く、そしてアザゼルとの会話からロスヴァイセと知り合いになってしまったのだけは本当なのだと言った朱乃と小猫はシヨックを受けている。

「嘘よ……こんな人が……」

「何でこんな後から出てきた人があの人に受け入れて貰えてるの……?」

「取り敢えず今から連れてきて話を聞いてみるが……」

「!? あ、アイツをこの家に入れる気ですか!? そんなの——」

「!! 来るんですか彼が!! アナタは私たちのキューピットなんですね!!」

「ちげーし、そもそもアイツはソーナ・シトリーっつー悪魔とだな……」

「大丈夫です。昨日の夜一人で考えた結果、不倫しようが浮気をしようがちゃんと帰って来てくれさえすれば割りと許せる事に気付きましたので!」

こうして一誠の抱いた嫌な予感は一瞬に的中してしまった。

アザゼルに呼びつけられ、そして関わりたくもなかった事にまで巻き込まれる。

その全てが……。

「じ、ごめんなさい!! じ、実は昨日——」

「「……………」」

だが一誠とてただされるがままという訳では無い。

このまま一人で行ったらまず普通にまずいと観念し、殺される覚悟で三人に事情を話す事で同行をして貰う事にした。

なので——

「うちのイツセーがお世話になったようなのでご挨拶しに同行しました」

「で、私のイツセー君に迫るふざけた女はどれ？」

「お茶が飲みたいんだが……」

負の性質全開のソーナとイリナがニコニコしながら兵藤家へと踏み入る事で、ある意味もつとエグい状況になったのは云うまでもない。

「うっ……！」

「な、何だこの三人は……！ ひ、一人は普通に思えるがこの三人は……！」

「これは……まずいの」

そして初めて負の三人を前に初見の者や馴れてない者達は言い様のない吐き気に襲われ……。

「私がロスヴァイセです。」

センパイさんとイリナさんって方はアナタ達ですか。

残念ながら、イツセーさんとはもう結婚する予定で決まりました」

「……………」

「よし、ぶっ壊す……!!」

ロスヴァイセだけは言い様のない歓喜に包まれていた。

終わり。

急激に墮落し始めていくロスヴァイセ。

無論初めてマイナスという概念を抱える者達を見たオーデインはそれを止めようとするが……。

「たったひとつのこの幸運だけは死んでも手離しません。

邪魔をするなら誰だろうと許さない……!」

最早三人のマイナス達により急退化してしまった彼女は止まらない。

自身の抱える不運を他人に押し付け……。

「ぐう!?!」

「私が触れる全ての持つ運は奪い取る」

時には触れた相手の幸運を根こそぎ奪い去る。

故に彼女に触れられる者は最早だれも存在しない。

他人に不運を押し付け、他人の幸運を奪い取り、時には不慮の事故で命に関わる不幸を撒き散らす。

「というわけでめでたくクビにされちゃいました!」

「だろうね。神系統にとって俺達は天敵らしいし」

ただ唯一の例外は自分と同じ者達だけ。

「でもお祖母さんが心配するんじゃないのか?」

「そ、それは……………どうしよう?」

「はあ……………最悪はアナタのお祖母さんを連れてきてあげるしかないわね」

「まったく世話の焼ける女だわ」

「私に家族は居ないが、大切にしないと」

なんだかんだ甘やかす友人達だけは自分の傍に居ても死なないから……。

「しかしキミのお祖母さんが今のキミのそのぐーたらっぷりを見たらショック死するんじゃないか？」

「大丈夫ですよ。イツセイさんに養って貰ってるから問題ないって手紙に書いときましたし」

「また勝手に……」

不幸を撒き散らし、幸福を吸い尽くす――

神をも嫌悪させるマイナス

最初に見た時、オーデインはハッキリとした嫌悪を抱いた。

人間三人に悪魔ひとりという不可思議な組み合わせ。

しかしそんな不可思議な組み合わせだろうとも、共通して彼等から感じたものは、潜在的な恐怖だった。

(震えているのか……ワシが……?)

非力にしかみえない人間。

その気になれば瞬きすら許さぬ一瞬でこの世から消し飛ばせる筈の人間に対して、オーデインは自身の手先が僅かに震えている事に動揺した。

「あのさ、ホントの本気で勘弁して貰えないかな? 見てお分かりの通りさ、俺達は友人同士の馴れ合いをしながら平和に、静かに、道端の雑草の様に楽しくその日を必死に生きてる訳なのよ。」

確かにキミがコジローに導かれた結果、あんな出会い方をしたっただけは認めるけど、ほら、キミにはキミの立場と人生がある訳だろう？　だから恋人だの結婚だの言われても非常に困るんだよね………さつきから向こうからの視線や、そこのおじいさんの視線が痛いし」

特にこの、今殺意を放つ赤龍帝の青年をそのまま少し幼く、華奢にしたような少年は一体何があったからこんな腐っているのか、オーデインの『眼』をもつても解読不能だった。

「いえいえ、アナタのその言動でますますその気になりますよイツセーさん。

こういうのを『ふるえるぞハート！　燃え尽きるほどヒート！　刻むぞ恋のビート！！』と言うのでしょうか？」

「そもそもキミが何で俺にそういう認識をしているのかが理解不能なんだよね。

下着を見られたから結婚ってキミは言ってたけどさ、俺はキミから逃げる為の出任せでそう言っただけで見た訳じゃないし」

放つ言葉の全てが信用ならない。

一人ハシヤイデるロスヴァイセ相手にうんざりしながら説明するその仕草に嫌悪が止まらない。

「聞いてたでしょ？　そういう訳だからアンタが入り込む余地なんて最初からないの」「そもそも住む場所すら違うのですし、さっさと忘れて明るい未来を生きた方がアナタの為になりますよ？」

「このクツキー美味しいな」

そして彼の友人と自称するこの三人もまたおかしい。

クツキーを空気も読まずに食べてる青髪の少女はまだマシにしても、この残りの悪魔の少女とツインテールの少女は少年とほぼ同じ嫌悪感を感じてしまう。

「どうも聞いてみれば互いに意見の食い違いがあるみてーだ。

どうだ？　この場は一旦収める事にして、後日改めて話の場をもうけるってのは？」

正体がわからない。

何故これ程の感情を彼等に抱いてしまうのか、そして何故よりもよつてこの秘書は

彼に対してそんなことを言い出してるのか……。

長い間君臨してきたオーデインですら、初めて明確に出ない答えに頭を悩ませる事になるのだった。

「悪いねお兄ちゃん。お邪魔しました」

「……………」

「おーおー、そんなに睨まなくても小市民はさっさと退散しますっつての。」

にしても、普通の家がこうもデカくなるとは驚きだよ、お父さんとお母さんに祝福の挨拶したらぶっ倒れちゃっただけど、後で言っついてくれない?」

「さっさと消えろ!!」

「わかってるつて。そんなピリピリしなくてもお望み通り消えてあげるさ。」

ほらゼノヴィアさん、食べてないで早く帰るよ」

「ま、待て! せめて後一枚はお持ち帰りで……」

「そんなの、欲しければ帰りに買っただけあげるわよ」

「じゃありアス……また明日とか」

「え、ええ……」

明らかに嫌悪する兄に対して飄々としながら去っていく弟。

恐らくもつとも波長が食い違った兄弟とは彼等の事なのかもしれない……と、オーデインは思った。

「くふふっ！ 挨拶もしちゃったし、連絡先も手に入れちゃった〜！」

「あんまりウザメールとかするなよ？ 渡した俺が文句言われるんだからよ」

「わかってますっ〜！」

来て数分で空気を台無しにするだけして帰っていったイツセイ達。

兵藤家のリビングでは、実に重苦しい空気が流れていたが、ロスヴァイセとアザゼルだけはお気楽なものだった。

「な、何なんですかあの人達は!?! ま、前に見た時よりもつとき、気持ち悪く……!」

普段人の悪口なんて言わないアジアが、青白い顔をしながら全身を震わせ、イツ

セー達の放つていた吐き気を催すなにかに恐怖していた。

それは誠八も、木場も、オーデインも、バラキエルも、リアスも同意した。

「アザゼル、あの者達は何者なんじゃ？ 姿形は確かに人間や悪魔かもしれぬが、明らか

に中身が別種に思えてならんぞ」

「俺が知るわけないだろ。（知ってるけど）」

「でも貴方は彼等と平然と接する事ができるでしょう？」

「あ？ 普通に接するからって俺がアイツ等の味方だとか、理解できてるって思ってるのか？ 悪いが俺は奴等の味方じゃなくて担任だよ」

悪平等の中でも変人氣質なアザゼルが、疑惑の眼を向ける者達に対して馬鹿馬鹿しいと一蹴すると、イツセーの連絡先を手に入れられて舞い上がったいたロスヴァイセが早速とばかりにイツセーにメールを打っていた。

「連絡先のメモリーには『私の旦那様（はあと）』とでも付けちやつたりして！ きゃく

!!

「ろ、ロスヴァイセ……」

そんな秘書の見たことの無い舞い上がりっぷりに、普段はしよっちゆう弄りまくるオーデインもドン引きしていた。

「^{キャツ}奴等の云う通り、ワシ等と奴等とでは立場も住む場所も違う。

何をどう思ってしまったからあの少年に対してそう思ってしまったのかは聞かぬが、すぐにでも忘れた方が良い」

「同感です。アイツに深く関われば貴女が不幸になる」

このままではマズイという勘が働き、オーデインはとにかくロスヴァイセにイツセーの存在は全部忘れた方が良いと言い、それに誠八も同意しながら忠告する。

どちらにせよ、あのイツセーと関わって良いことがあるとは到底思えないのだ。

「何故ですかオーデイン様？ 私がこのまま寿退社したらからかえなくなるからでしょうか？ 一生独身の方がネタとして扱えるだけのヴァルキリーだからでしょうか？」

「い、いや別にお主にそんな事を思ってるからではないぞ……」

今さっきまで頬を染めながらクネクネしていたロスヴァイセが急に真顔になって言い返すものなので、思わず狼狽えてしまうオーディン。

その目はかつて彼女が、ほんの一瞬だけ見て気のせいだと思った、暗く、濁ったものだった。

「ふむふむ、潜在的に抱えても自覚をしなければ発現はしない。

そして既に発現している者と接触さえしてしまえば……いや、イツセーの持つ気質もまた理由のひとつか？ どちらにせよ上手く行けばもつと手頃にアイツが昔諦めたフランスコ計画が……」

「何をメモしてるのよ?」

「いや別に?」

そんなロスヴァイセの様子を視ていたアザゼルが手帳に何かを記している。

何のメモなのかはリアスにはわからないが、何と無く嫌な予感はした。

そしてそんなマイナス達をもつと近くで見ってしまったバラキエルは更に朱乃を心配していた。

「頼むから彼と親しくなりたいだなんて思わないでくれ！ 彼とソーナ・シトリーという友人達を見てわかった！ あ、あれはまともじゃない!!」

「まともじゃないのはお互い様でしょう？ 普通の人達にしてみれば我々もまともじゃない」

「そ、そうじゃない！ 根本的に違い過ぎるのだ！

我々とは絶対に相容れないのだ！ 俺にはわかる！」

「相容れてますわよ、ソーナ様は」

「彼女は最初からそうだったのだろう！ そうでなければあんな……！ あんな！」

イツセーが誰と恋愛しようが朱乃にとってどうでも良いし、別に朱乃も小猫も彼に対してそういう感情は零だ。

だが、彼等が形成するコミュニティはどんな生まれだろうと、どんな生き方をしてきたのだろうと、一切の差別が無く、偏見も無ければ、互いに同等の立場として自然に振る舞える。

それは二人にとってまさに理想とする関係なのだ。

だからこそ、イツセー達とロスヴァイセを見比べて初めて彼等は同じ存在だと気付かされた二人は、こんな簡単にグイグイと行けるロスヴァイセが羨ましい反面、恨めし

かったのだ。

「バラキエルさんの言う通りです。

二人は少し冷静に考えるべきだ、アイツは——アイツに関わる人達はまともじゃない。
い。

このままだと本当に取り返しをつかないことになりかねないんだ」

「そ、そうだ朱乃！ よ、よく考えてくれ……こればかりは本当にお前の事を思っているんだ！」

「……………」

「小猫も、私にはそこまで毛嫌いする相手とは思えないにしても、最近少し変よ？」

「……………」

友人達が止めてくる。

それはきつと正しいのかもしれないと、朱乃と小猫も理解はする。

しかしそれ以上に、あの自然体な彼等の関係が羨ましいのだ。

彼等の中の誰かが危ない目にあつたらきつと、どんな手を使つてだろうが全力で味方になってくれるだろう彼等の関係が。

いや、勿論この仲間達だって同じなのはわかってるけど、それでも……魅力的なのだ。

「そういえば、さつきお二人はわーわーと騒いでましたが——あーなるほど？ さつきイツセーさん達を見て大体感じ方を理解し始めてきましたが、お二人には皆無なんですねえ？ そりやあ確かに相手にもされませんよ」

「……」

「ろ、ロスヴァイセ？」

「！ マイナス成長だと？ おいおい、本当に黒神めだかの対極だなイツは。意図せずとも墮落させる事に関しては天才的だぜ」

だから決定的に欠けている何かかがわからない。

『自分を不幸だと呪ってるだけ、キミ達は間違いなく^{プラス}幸せ者だよ』

以前イツセーから言われた言葉が二人の心を刺す。

「どんな経緯があつて、彼等に目を付けたのかは存じませんが、ひとつだけ分かる事は

あります。

自分だけが周りと違って不幸だと思い込むのは勝手ですけど、誰かに救いを求めるのは間違ってますよ。

どんな理不尽な不幸があろうと、どれだけ笑われ様と、どれだけ心が折れてしまおうとも表に出さずに笑い続けるべきです」

「！」

それは奇しくもロスヴァイセの持論にとても似ており、彼女が抱え続けた様々な不運を前にしても人に助けは求めずに笑って誤魔化し続けていたという告白にオーデインの表情が僅かに歪んだ。

「だから良かったと思ってますよ今は。

彼等という存在は私の生き方に間違いが無かったという証明になりましたから。

確かに何度も挫けそうになりましたし、何度も死んでやろうかと思いましたが。

けれど、これからはもつと前向きマイナスに生きていける……イツセーさん達の存在が私に自信を持たせてくれたのですからね」

身に降り掛かる、常人ならとつくにへしおれていたろうレベルの不運に苦悩し続けた女性は、遠い日本という国で出会った負の塊を体現した過負荷達によって、逆という意味での生きる自信を持つてしまった。

「これからは、愛しき人と同じ様に私は不幸を抱き締めながら生きようと思います。

くふふ、素敵な恋人もできた今、私はかつてない程に充実した人生と遅れ、気合いの入ったお仕事にも打ち込める気がしてなりませんよ！　ね、オーディン様！　今の私は凄まじい気合いが入っているでしょう!？」

「あ……ああ……そう、じゃのう……」

（同類を得た事で一気に凶悪化したから、本人に自覚は無い様だが……。

なるほどな、そこで絶望した顔をする兵藤誠八が憎悪する理由がこういう訳だ）

最初に覚醒してしまつたマイナスは、同じ者を惹き付ける波動を放ち、それを感知してしまつた者は同様の退行をしてしまう。

夢と現実をねじ曲げ、手を取り合つた者と共に退行し続けていく事こそが一誠の持つ真骨頂だったのだと、ロスヴァイセの姿に戦慄するオーディン達の横で密かに『笑つて』いた。

「あ、しまった。日本に居る間はちゃんとしたデートをしなければいけませんよね。」

早速メールで——いえ、こういう時はお互いの声を聞くことで親密度を上げないと……！」

「あー、盛り上がってる所悪いが、さつきも見た通り、アイツをデートに誘うには並大抵の障害を乗り越えないと無理だぜ？」

何時しか神という概念とは真逆に位置する新たな集団が形成されるかもしれないという、未知への喜びにアザゼルは研究者気質の血が騒いだのだ。

「だから言ったでしょう？ アイツとアナタ達は違うから、関わった所で不幸になるだけなんだ。」

「お願いだから目を覚ましてくれ……！」

「そうだ、この目で見て確信したが、二人と彼等は根本的に違うんだ」

終わり

負完成・マイナス組

根が生真面目な者程、その楔が切れてしまえば墮ちるのも早い。

ましてや他人を墮落させるといふ天性の素質に目覚めてしまった存在を前にしてしまえばより強く墮ちていく。

その出会いは果たして幸か不幸か。

それは出会う本人にしか理解できない。

町を出て一歩目にバグが発生してラスボスとエンカウントしてしまった――

そんな出会う必要の無かった出会いを経て、挙げ句の果てにそのラスボスに気に入られてしまったイツセーは、兎に角問題の何もかもを無責任に投げ捨てて逃げ去った。

別に相手はラスボスでは無いのだが、チワワにすら噛み殺されかねないシヨボさを誇るイツセーにしてみれば、ヴァルキリーだなんて仕事をしてる存在はラスボスレベルにどうにもならないのだ。

故に問題の全てをアザゼル先生に押し付け、自分はソーナ達と共にとにかくそのヴァルキリーと鉢合わせせず国に帰るまで、ひよんなことから仲良くなつた昆虫採取や釣り趣味持ちのサイラオーグ達やソーナの眷属達とプチキャンプをして時間を潰していた。家を特定されたら嫌だからという策故のプチキャンプなのだが、どうやら成功したらしく、あれ以降ヴァルキリーのロスヴァイセと鉢合わせする事は無かつた。

「良かつたな兵藤、どうやらオーデインさん達は国に帰るみたいだぜ?」

「なんだって、それは本当かい!」

イツセーは知らないが、どうやら鉢合わせしなかつた理由は、オーデインがどこかの神とその眷属っぽい犬的生物に襲撃され、それを護衛する為にロスヴァイセがリアス達と協力して出張つてたらしい。

何度かソーナ達やプチキャンプに付き合つてくれる為にわざわざ人間界に来てくれたサイラオーグ達が呼び出されてたので、普通にイツセー達の性質に慣れ始めていた元士郎からの話は信じるにたる情報だった。

「という事は今日でキャンプもおしまいかあ」

「そうなるな。」

サイラオーグさん達に感謝しろよな？ わざわざ俺達に付き合っつて人間界に来て食料まで差し入れてくれたんだからよ」

「勿論だぜ匙君、新しいルアーをプレゼントしてみるぜ」

「……………」

オーデイン達が居なくなると聞いた途端、ルンルンとした顔でのベ竿を振るうイッセーを横に、元士郎は先日起こった大騒動で見た光景を思い返していた。

どこぞの神が犬的生物を連れてオーデインを襲撃し、戦闘に突入。

その際見た誠八の強さに元士郎は少し嫉妬したり、サイラオーグの纏う黒ずんだ狼の鎧に圧倒されたり……正直かなり大変だった。

サイラオーグは今回の働きが冥界での名を更に上げる事になるだろうが、誠八も恐らくは同じようになるだろう。

そう思うと、何もできない自分が少しだけ情けなかったのだ。

「全然釣れないなあ」

「……………はあ」

もつとも、このイツセーを見てると気負いするだけ疲れるから、あまり焦つてもしょうがないと思つてしまう訳だが。

餌だけに食われて常にボウズなイツセーを横に、元士郎は浮きが沈んだ自身の竿をゆつくりと上げるのだった。

こうして二度とロスヴァイセと鉢合わせする事は無いだろうと、ルンルンした気分で見られる日は学園へと登校したイツセー達。

誠八に言われた通り『大人しくしてた』から何を言われる訳でもない。

——と、思つてたのがそもそも間違いだつた。

「二から説明プリーズですアザゼル先生」

イリナ、ゼノヴィア、そしてソーナ。

今日は四人で楽しく勉強しようという真面目な気分になりかけていたイツセーを待ち受けていたのは、アザゼルと、帰った筈のロスヴァイセだつた。

顔を見るなり待つてたぜとばかりにニコニコし始めたロスヴァイセを前に、別に誰も裏切つてないのだが、何かに裏切られた気分になったイツセーは、素知らぬ顔してるアザゼルに説明を求めた。

「お前等が遊んでた間に、此方は色々とあつてな」

「遊んでたですつて？ その色々に私達は関係ないでしょう？」

「そうだぞ。ソーナは仕方ないにしても私達三人は一般人のくくりの筈だからな」

「まあな、別に責めてるつもりじゃねーから安心しろ。」

「そうじゃなくて、その色々の結果、このロスヴァイセは——」

遊んでると言われてムツとなるゼノヴィアとイリナをアザゼルは受け流しつつ何で帰った筈のロスヴァイセが居るのかを話そうとすると、そこから先は自分で言うとはばかりに、明るめの銀髪の女性ことロスヴァイセはとても良い笑顔で言った。

「ヴァルキリーをリストラされました！」

「リストラ……？ クビつて事……？」

「そうです！ だから国に戻る理由がなくなりました！」

こんな嬉しそうにクビにされた事を話すのを見るのは初めてだったイツセーは、ゼノヴィアとイリナと共にちよつと困惑してしまう。

「お前がコイツが帰るまで逃げ回ってただろ？　それがどうも仇になったみたいだぜ？」

「は？」

「もう、メールや電話をしても出してくれないし、探してもどこにも居ない。

お陰で寂しくて寂しくて……ネガティブになりすぎたせいかな皆大ケガしちやっただすよねー？」

「……はい？」

何の事だよ？　とアザゼルに視線で問い掛ける。

「お前がコイツから逃げたのをコイツは『捨てられた』と解釈した結果、爆発的に退化しちまっつな。

無差別に周囲の全ての持つ『運』って概念を奪い取って大惨事になったんだよ」

「ええ……………」

「それってつまり私達みたいになっただって訳？」

「そうなるな。コイツ自身元からそんな爆弾を常に抱えてたのを隠して生きてたつてもあるが、イツセーの特性によって隠さなくなり始めてたし」

放置プレイされた結果、完全にマイナス化してしまったと話すアザゼルに、イツセーは若干疑っていた。

「大惨事って割りにはセンパイ達やサイラオーグさん達は無事みたいでしたが」

「それは当然ですよ。だってあの方々はイツセーさんのオトモたちなんでしょう？
いくら何でもその方々までは巻き込めませんよ」

「……………完全にコントロールできるタイプね」

「……………私だけなにも無いのに」

事もなく完全に制御コントロールしてると言うロスヴァイセに、余計厄介だと微妙な顔をするイツセーとイリナと、自分には何もないと不貞腐れて涙目のゼノヴィア。

「ソーナとサイラオーグは敢えて言わなかったんだろう。

というか、まさか残るとも思っていないだろうしな」

「じゃあまさかクビにされた元凶つてのは……」

「まー……物凄く平たく言えばお前がコイツの素養を引き出してしまったからつてことになるな。」

コイツが完全に覚醒したマイナスは神だろうと無差別にその運を奪い取ったり、不運を押し付けられちまうらしくて、オーデインも襲撃してきたフェンリルだのロキだのは転んで運悪く針が目刺さつて失明しちまつてたし」

「えぐい……」

無差別に幸運を奪い取るのがまた酷い。しかもロスヴァイセ本人に罪悪感が全く見られないのが、どれほど墮落しきつてしまったのがよく分かってしまうし、まるで自分の様にイツセーとイリナは思ってしまう。

「うつかり置いてかれたとかじゃなく、正式にオーデインから解雇されたつてのに本人はこんな調子だ。」

「だから取り敢えずお前に会わせようと連れてきた」

「アザゼルさんは本当に良い方ですよねっ！ 差別しないし、手の平返したみたいに変
け物扱いしませんし！ 何よりこうして私の旦那様と再会までさせて頂けるし！」

「……………」

「待ちなさいよ、誰が誰の旦那様ですって？」

「私はもう要らなくなってしまうのか？ 何も持つてない私はもう……………」

彼女の中では既にイツセーは旦那様らしく、平然と言つてのけたせいでイリナ表情
がかなり険しくなっているし、イツセーは珍しく頭を抱えてしまっていた。

「故郷に家族だつて居るだろうに……………」

「大丈夫ですよ、時期を見て説得して日本に連れてきます。」

「そうなたら是非旦那様として紹介しますから！」

「いや、やめてくれないかな？ 俺はセンパイが好きであつてキミは……………」

「安心してください、ある程度の不倫は許しますから。」

「私は決してアナタを縛つたりはしません、ただ私を捨てさえしなければ何でも許せま
す」

ある意味一番厄介過ぎる考え方をしてるロスヴァイセにイツセーはソーナになんて言えば良いのかわからなくて困りに困ってしまう。

素の戦闘力がイリナとゼノヴィア以上に強くて、尚且つ無差別に撒き散らす系統のマイナスまで持っている。

下手に刺激したらそのマイナスを使ってこの街に生きる生物全てを不幸な事故で殺ってしまうかもしれないと思うと……流石にイツセーでも笑えないのだ。

「頭は良いからこのクラスの副担任的な仕事に就かせる事にするから後はお前等で仲良くやってくれ」

「あの、この人のマイナスをくらっちゃった人達は？」

「ああ、オーディンとロキは運悪く転んで失明。フェンリルは空から落ちてきた隕石に潰れて再起不能。」

リアス達も運悪く足元が突然発火して大火傷を負って、無事なのは俺とかサイラオーグ達とかソーナ達ぐらいだろうな。

それと何故か野次馬根性で来たヴァーリも無事みたいだけど」

つまり結構笑えない惨事だったと言いなながら教室から出ていったアザゼルに、だから

妙に匙君のテンションが低かったのかと、イツセーは思った。

「と、いう事でこのクラスの副担任となりましたロスヴァイセです。

ふふ、そしてイツセーさんのお嫁さんで——」

「もういい、ちよつとぶち壊してあげるから表に出てくれない？」

そらテンションも低くなるよなあと思ってる間に、イリナが使っているテーブルをスキルで破壊しながらロスヴァイセに殺意向ける。

これぞ所謂修羅場なのだが、その元凶にされてしまってるイツセーはちつとも嬉しくない。

「センパイはまだ来ないのかなあ」

「な、なあ……私には何も無いけど、私は捨てられるのか？」

「そんな事しないから心配しなくて良いよ。それよりあの二人をほつたらかしくしてたらこの教室どころか校舎ごと壊れちゃうから止めないと……」

身体能力の高い二人が本気で取っ組み合いになったら大変だからと、二人の足元にそ

れぞれ巨大な釘と杭を投げ込む。

「ここで喧嘩はやめてくれ、ロスヴァイセさんだっけ？　キミにもこの場でハッキリ言うけど、俺はソーナ・シトリーさんが大好きなの」

「？　知ってますよ？　この前聞きましたし」

「いや、だから諦めて欲しいって話を——」

「別に彼女から略奪する気なんてありませんよ？　言ったでしょう？　私から逃げたり、捨てさえしないで傍に居てくれるのなら不倫してようが許しますって」

「……………。全然話に通じてないわ」

イリナちゃんもだけどね。

と、何を言っても通用しないロスヴァイセの主張に対してボソツと言ったイリナに内心思いながらイツセーもまた大きなため息を吐く。

「世間的には許されないでしょうけど、私には何の関係もない。

私にとってアナタとはそれ程の方なんです」

早く来てくれセンパイ……。

何気に目の前まで近寄って手首を掴まれたイツセーはニコニコと笑うロスヴァイセを前にソーナを恋しがるのだった。

全てを見られたから旦那様確定。

それが当初の理由であったロスヴァイセだが、実情は彼と彼の友人達がまさに己と同じが故だった。

自分は他の人と違ってまともじゃない、だからバレてはいけない、さらけ出してはいけない、どんなことがあっても笑って乗り越えろ。

幼少の頃からそう自分に言い聞かせ、降りかかる不運すらも受け入れ続け、それでも笑ってみせたロスヴァイセはイツセーやその友人達という同類と、彼等の制御する気のない生き方を知り、自分を抑え込む事を辞めた。

それにより彼女が長年どこにも放出できずに抱え込み続けた不運という名のダムは濁流の様に解放され、遂に周囲へと撒き散らしてしまった。

それはどんな生物だろうと無関係に——神であろうとロスヴァイセの撒き散らす不

幸は致命的なダメージを与えられる。

神にしてみればロスヴァイセはまさに神へ反逆すら可能な危険な存在だ。

故にオーデインは彼女を放棄した。

彼女が常に笑って受け流し続けたと思っていたストレスという名の不幸は、神ですらどうにもならない程に大きくなり過ぎた。

そしてなによりそんな存在がロスヴァイセの他にも存在してる——ならばその者達に押し付けてしまえ。

既にヴァルキリーとして見られなくなったオーデインはリストラと称してイツセー達にロスヴァイセを押し付けたのだ。

それが単なる問題の先延ばしでしかないのと、余計ロスヴァイセの抱える不幸が爆発的に増加してしまうこととは知らず。

だがロスヴァイセ本人はそれこそが幸福だった。

何があろうとも笑って誤魔化す必要がない存在。

素をさらけ出しても何も言わない存在。

何よりそれを教えてくれた彼……。

「ふふん、もう裸を見られても怒りませんよ？ 寧ろ私の全てを見て欲しい……」

「わかったので離れて——わぷっ!？」

「ああっ!？ 何してんのよ!？ イッセーくんを抱き着いてばかりか胸なんて押し付けて

!？」

「? お嫁さんなんですから当然でしょう?」

「いや、イッセーは一言もキミを嫁だなんて言っていないだろ……」

「そうですね、私がそうなるって言ってるだけですもの。

けど、それがなにか?」

これからも己を押し殺し続けるか?

それとも自分自身であり続けるか?

その二択を前にした時、またそれを完全に受け入れてくれるだろう存在を前にした時、ロスヴァイセは自らの道を決めた。

「ふふん、どうです? 少しは自信あるんですよ……ア・ナ・タ?」

「……………」

「窒息してるぞイッセーは……」

「壊す、やっぱり今すぐアンタをぶち壊すわ!!」

「あら、あの時もそうだったけど、やっぱり華奢ねえ。

でも、そこが可愛らしいですよ……ふふ」

ロスヴァイセ

マジでリストラされた元ヴァルキリー

スニール・オール・ラック

運 否 天 負

周囲の全てから無差別に運を奪い取り、己の不幸を押し付けるスキル

「はあ、暫く逢えなかった私の旦那様……」。

私の初めてを全部見た旦那様……♪ うふふふ、やっぱり優しい匂いがして大好き

……!」

「うぐ……急に意識が——うぐえええつつ!」

「ばっ!?! アンタ何やってんのよ!?!」

「い、イツセーの身体から聞いてはいけない碎ける音が!?!」

マイナス組・負完成

マイナス組の日常

泣き虫ゼノヴィアちゃんとの違い

彼等から『安心』を常に貰うという事とは、彼等から『仲間』と認めて貰う条件というものはそういう事なのか。

ロスヴァイセというヴァルキリーを見て小猫と朱乃は思い知ってしまった。

『会えない、声が聞けない、姿が見えない、話せない、手も繋げない、温もりも感じられない……』

『何を一人でブツブツと——っ?!?!?』

『ロ、ロスヴァイセ！ どうしたと云うのじゃ!?!?』

北欧神話内の小競り合いに巻き込まれる形で護衛に出たりアス達悪魔が目にしたのは、同じ悪魔であるソーナの様なナニかを放ちながら虚ろな瞳で親指の爪を噛む、明らかに様子がおかしくなっていたロスヴァイセ。

彼女はオーデインの秘書であり、どういう訳か全く無関係の筈のイツセーとどこかで

邂逅していた女性だった。

オーディン曰く、ただの人間とは思えない嫌悪感をどうしても抱いてしまうイツセーとの出会いからロスヴァイセは何かのタガが外れてしまったの如く彼との接触が無い事で精神の均衡を崩しているとの事。

それは襲撃者との戦いの最中もずっとそうであり、途中で応援に現れたサイラオーグやソーナ達と共に戦っていてもロスヴァイセはブツブツと陰鬱なオーラを撒き散らしながら佇んでいた。

が、恐らくはその時からだっただろう。

何かがおかしくなり始めたのは。

『うわっ!?!』

戦っている最中、空から大粒の電が降り注ぎ、運悪く戦っていた者や獣の脳天に直撃してしまったり。

『ぬ、何故電が——うぐう!?!』

空を見上げたオーデインに運悪く先端の尖った電が落ちて右目を貫いてしまったり。

『ハハハハ!! これは傑作だぞ、オーデインの右目が電で使い物にならな——ギヤアツ!?!?』

それを見て襲撃者が嗤えば、今度はその襲撃者に向かって隕石が降り注いで押し潰してしまったり……。

『きやあつ!? い、いきなり火がつ!?』

『うぐわっ!?』

『せ、誠八くん!?』

何も無い箇所から突然発火し、全身大火傷を負ってしまったり……。

『これは……!』

『……』

それを見ていた無事な者達は、突如訪れた各々の不運による被害を前に驚愕してしま
う。

そしてその不運の地獄絵図と化した戦場のど真ん中には、ただ一人外から見えていた者
以外で無傷のロスヴァイセが笑っていた。

『もう良いわ。』

私だけ不幸ばかりなんてもう沢山。

だから皆も一緒に不幸になりましょう？ そうすれば世界は平和になります』

これまで不連続きで、それでも笑って誤魔化し続けたロスヴァイセの精神の中にある
最後のスイッチが壊れた。

それは自分ばかりではなく、周囲の全てにすらその不幸を撒き散らし、天災クラスの
破壊力となって襲い掛かった。

それはロスヴァイセの持つナニかが完全に解放されたと同じであり、それを見ていた
ソーナはすぐに『自分達と同じ』だと理解した。

『あの人に逢えないなら、皆不幸になってしまえば良い……！』

同じだ、イツセー達と。

嗤いながら不幸を撒き散らすロスヴァイセを前に小猫と朱乃は戦慄しつつも羨んでしまった。

『そんなに逢いたいなら私が会わせてあげても良いですよ』

『！ アナタは噂のソーナ・シトリーさん!? 本当ですか!?!』

『ええ、今彼は仲間達とキャンプに出掛けるだけですの』

『キャンプ? あ、だから探しても見つからなかったのね! それなら是非!』

彼等の輪に無条件で入り込めるものを持つロスヴァイセが……。

「え、修学旅行には行かないの? 京都ですよ京都?」

「積立金とか払ってないからね。それに向こう行ってる間はセンパイと会えないでしょう? だから余計に行く意欲なんてないよ」

「ええ? 折角の新婚旅行の場所としてはうってつけなのに……」

「新婚旅行って何だよ。マジで助けてよセンパイ……」

そしてすんなりと彼等に受け入れられてるのが……。

イツセーという例を前にすっかり自分を覆い隠して誤魔化すのを辞めてしまった口スヴァイセは、実は才女ではあったので駒王学園の教師として赴任する事になった。

とはいえ、隠すのを辞めた彼女は到底普通の人間にしてみれば悪夢でしか無く、当たり前のようにイツセー達特別クラスの副担任に抜擢されたのは云うまでもない、

「ロスヴァイセさんのマイナスによって、お兄ちゃん達が割りと大ケガを負ったらしいけど、修学旅行までには復帰できるらしいよ」

「へえ、それは良かったじゃない。お互いにとつても」

「まーね、要らない恨みを買いたくはないもんね」

他人の幸運を奪い取り、不幸を押し付ける。

まさに人の形をした天災であり、とてつもない危険性を孕んだマイナスではあるが、

ロスヴァイセ自身がそのマイナスを既に完全な制御下に置いていたので暴発の危険はないらしい。

寧ろ今の彼女は旦那様と決めてる相手のイツセー傍に常に居られるということだけで皮肉じやなしに幸せの真つ最中だった。

「はいアナタ？ あーん」

「自分で食えるんで……」

「そんなに照れなくても良いのに。」

うふふ、シャイなんだかつ！ キャー！」

「……………」

「ソーナ、アンタよく黙って見てられるわね？ 腹立たないの？」

「アナタと違ってイツセーが誰を本当に好きなのかが分かっているからね」

旦那様の為にご飯を作り、旦那様に食べさせてあげたり等々、本人が普通に拒否してものにも関わらず、すっかり新妻気取りのロスヴァイセに当然イリナはムカムカしっぱなしなのけど、反対にソーナは余裕綽々な態度だった。

というのもイツセー自身、貧弱過ぎて身体能力に勝るロスヴァイセにされるがままな

のだが、結局彼の気持ちはあの日の『誓い』から変わってないのだ。

「……………」

そんなソーナの余裕とは逆に、ゼノヴィアはロスヴァイセという新たなイツセー達と同類の出現に内心不安になっていた。

（私だけなにもない…………）

聖剣という概念をイツセーにより否定されてしまった事でゼノヴィアは文字通り何も持たぬ者だった。

この四人が共通して持つものは自分にはない。だからその内見捨てられてしまうのではないかとゼノヴィアはずっと不安なのだ。

「…………。ちよつと飲み物を買ってくるよ」

「？」

こうやって自分だけ教室を出ても誰も気にしてくれない……とネガティブな事ばかり思いながら教室を出ていくゼノヴィアは既に半泣き顔だった。

「なんで私には……なんで、なんでだ」

自分だけ何も無い。

力もない、かといって弱さにしても中途半端。

これで本当に友達だと言えるのか？ イッセー達は友達と言っているけど、ゼノヴィアは何も持たない自分にそんな資格があるのかと、ただただ一人泣きながら人の来なさそうな場所を探して走り続けるのだった。

「はぁ……」

暫く泣きながら走り続けた結果、旧校舎裏へとたどり着いたゼノヴィアは、小さくため息を吐きながらその場に座り込むと、ぼーっと空を見上げていた。

(皆みたいなのがあれば私も……)

見捨てられるだとされないので不安に駆られる事なんて無いのに……。
一人小さく膝を抱えながら座るゼノヴィアはまた涙を流していると……。

「そこで何をしてるのですか？」

「！」

自分に話し掛ける声が聞こえた。

その声にしびつくりして顔を上げると、リアスの仲間である塔城小猫と姫島朱乃が自分を見ていた。

「……何だキミ達か」

「……………」

しよつちゆうイツセー達に絡んでくるしつこい奴等……という認識を二人に持ったゼノヴィアの対応は実に素っ気なく、偶々旧校舎の窓からゼノヴィアが一人で歩いているのを見て気になった二人も少しムツとなるが、イツセーの友達の一人ということだ

そこは抑えて、変な笑顔を浮かべて接してくる。

「何かあったのでしょうか？ とても辛そうですけど」

「キミ達には関係ない」

「そういう訳にもいきませんでしょう？ 泣いているご様子ですし」

「癖みたいなものだから気にしなくていい」

あの不思議な輪の中で唯一何も感じられないゼノヴィアの事は勿論知ってるし、ここで親切にしておけば彼等への心証も良くなる。

そんな打算を抱きながら警戒心を抱いているゼノヴィアの隣に其々座ろうとした二人だった……。

「ぜえ、ぜえ……み、みつけた……」

「！」

疲労と酸欠で顔色が悪いイツセーが肩で息を切らせながらやって来たせいで失敗に終わる。

「イツセー!? な、なんでお前がここに……?」

「……」

取り入るタイミングを他ならぬイツセーに図らずとも阻止されてしまった小猫と朱乃は少しだけ残念に思いながら驚いてるゼノヴィアの近くまで、今にも倒れそうな足取りで近寄るイツセーを見つめている。

「も、戻って……ひいひい、来ない……と思つて、心配になつて……えほえほー!」

「し、心配つて……私をか? というか大丈夫か?」

2000年代に入る前の某広島球団の地獄練習後の選手みたいな疲労全開のイツセーの絶え絶えな口調の『心配』という言葉に、ゼノヴィアは更に驚きながらもそのまま倒れそうになる彼のヒョロヒョロな身体を支えてあげる。

「い、色々探し回つて、走り回ったからね。自分の貧弱さがこうも仇になるとは思わな

かったよ……」

「何でそこまでして……」

てつきりソーナ達と自分の事なんて気にもせず楽しく遊んでるのだろうと思ってただけに、こんな満身創痍状態になってまで探してくれた事にちよつと困惑が隠せない。

「皆も手分けして探してるよ。」

キミ、教室を出ていく時また泣いてたろ？ だから気になったんだよ」

「それは……。だって、私だけ皆と同じじゃないから、友達だなんて思われてないって……」

小猫と朱乃がこつちをガン見してくるその視線に変なものを感じながらも、自分の不安を吐露していくゼノヴィアに、イツセーは息を整えながらヘラヘラと笑う。

「最初は確かに鬱陶しいと思ってたかも」

「う……」

「そうやってすぐ泣くし。キミみたいな普通の人は俺達と一緒に居るよりお兄ちゃん辺

りと一緒に居れば幸せになれるのにも思ってたよ」

鬱陶しいと思われてたとドストレートに言われ、またしても涙目になるゼノヴィア。

「でもキミは石を投げつけたり、蹴り飛ばしたり、殴ったり、罵倒したりしなつたからね。だから今は友達だと思ってるよ、真剣にね」

「！」

しかしイツセーから向けられた正直な言葉は、ネガティブな彼女の心にある意味の救いが与えられた。

「マイナスじゃないからって差別なんかしないよ。」

キミはいい人だから、俺もイリナちゃんもセンパイも——あー、多分ロスヴァイセさん辺りも好きなんじゃないかな?」

それはまるで仕事から帰ってきた飼い主を家の前で待つ犬の様であり、ゼノヴィアに犬のと耳と尻尾があつたらピコピコと動いているだろうというくらいには、とても喜ん

だ表情だった。

「……………」

「皆に見つかったって連絡して、早いとこ教室に戻ろうぜ？ 疲れちゃったよ」

「あ、ああ………なんというか、すまない」

悪く言えば凄まじくチョロいゼノヴィアは、言われた通り戻る事にした。

不安が完全に消えた訳じゃないし、スキルを持たない事に対してのコンプレックスもある。

だがわざわざ自分を探してくれた事は嬉しいし、少なくとも今自分を嫉妬めいた目で見てくる二人よりは確実に勝っている。

「てか、その人達はなんなの？」

「ここでもぼーつとしてたら現れただけだ」

「あ、そう。よくはわからないけど、さようならお二人さん」

「……………」

ゼノヴィアに肩を借りつつ、さつきから見ただけで突っ立ってるだけの小猫と朱乃に向けて素っ気ない感じで挨拶をするイツセー。

「ま、真面目に疲れたよ。自分の体力の無さをこんな呪ったのは初めてだもの」

「ぐ、ごめん……」

「ふー……別に謝らなくてもいいよ、ちよつと肩貸して貰うけど……」

「も、勿論だ！ いくらでも貸すぞ！」

自分達を案じる仲間達が居るのに、何故か自分達に対して拘ってくるこの二人の事は前々から本気で鬱陶しいと思っただけに、関わりたくはないというのが本音なのだ。

「うわっ!？」

「ぐえっ!？」

だからさつきと去るに限ると、肩を借りながら去ろうとしたイツセーは、ゼノヴィアがバランスを崩してイツセーを巻き込む形で盛大にスツ転んだ拍子にそのまま下敷き

にされてしまう形でひっくり返った。

「ご、ごめんイツセー!? だ、大丈夫か!」

「だ、大丈夫っぽいけど、早く退いてくれ。

き、キミの胸のせいで呼吸ができな——もがもが!」

「あわわわ! す、すまない!」

その際、ゼノヴィアの胸がイツセーの顔を覆って軽く窒息寸前という、ロスヴァイセにされた時みたいな事が起きたが、どつちもそれどころじゃなくてそんな空気にもならず、ゼノヴィアはちよつと恥ずかしくてドキドキしたものの、即座にイツセーを助け起こしていた。

「いてて、イリナちゃんといい、ロスヴァイセさんといい……これで三度目だよ、女の子の胸で死にかけるのは」

「こ、こっちは少し恥ずかしかったのに、そんなリアクションをされるとちよつと悲しいぞ……」

「センパイの胸に抱かれる安心感に勝るものが無いからね。」

センパイつてき、実はキミやイリナちゃんやロスヴァイセさんより小さい事を気にしてて、そこがまた可愛いと思うんだよね」

「………………。羨ましいくらいにソーナは愛されてるな」

「俺は別に小さくないと思うし、センパイつて存在そのものが好きだから——」

「わ、わかつたわかつた！　そ、そこまでハッキリさせられると泣きたくなるからやめてくれ！」

既に小猫と朱乃の事は完全に無視しており、ゼノヴィアも今初めて異性に胸をどうこうされてしまったのに、その異性が別の女にのろけてるので実に微妙な気持ち似させられていて、二人の事は意識に入らなかった。

「待つてください。実は私と副部長は授業をサボって暇をしています」

「………………。だから？　まさかとは思うけど、このまま付いてくるだなんて言わないよな？」

「我々に近いゼノヴィアさんが良くて私たちがダメという理由はございませんでしょう？」

だがこの二人はそんなやり取りを見てからイツセーを呼び止め、授業をサボって暇だからこのまま教室に押し入ると言い出したのだ。

「それに、お二人のしてたやり取りをシトリ先輩にうっかり話してしまったら、とても悲しむではありませんか？」

ゼノヴィアが良くて自分達がダメなのは差別だと言い張って。

しかも軽く脅迫気味に。

「ゼノヴィアさんは俺達のクラスメートでもあるんだから良いもダメもないでしょう？」

「あの、脅しをしたつもりだが、多分無駄だぞ。仮にお前達が話した所でソーナは気にも止めないだろうからな」

しかしイツセーはそれでも嫌がった。

別に誠八の仲間だからとかじゃなく、この二人こそ根本的に気が合わないだろうと既に判断したから。

「それにゼノヴィアさんとキミ達が同じだつて？　おいおい、それは違うだろ？」

だから言うのだ。何度でもハッキリと。

「キミ達は結局、自分の都合の悪い状況を俺達を使つて誤魔化したいだけだろう？」

「……………」

「キミは確かお姉さんとの、先輩さんの方は墮天使のおつつあんとの柵を誤魔化したいから、俺達という都合の良い奴等を利用したいってのが見え見えなんだよ。

本当にやめてくれよ、そういうの——心底うざったいぜ？」

俺達はお前達の都合の良いリラックスアイテムなんかじゃない。

ましてや解決できるかもしれない仲間達に恵まれるというのに……。

と、周りに自分達しか居なかつたゼノヴィアとの違いを言つてやったイツセーは、顔を僅かに歪ませた二人から背を向け、肩を貸して貰っているゼノヴィアと共に歩き出した。

「ましてや、二人の其々の身内さんは俺達との関わりに

反対してるんだからさ。

それはきつと正しいんだぜ？」

「それって私は間違えてるのか？」

「当たり前だろ？ 正気じゃないぜ、俺達に見捨てられるってわざわざ心配してメソメソするなんてさ？ 言つとくけど、今後キミが『やっぱり嫌になった』って言って離れて行こうとしても、俺達は死ぬまで追いかけて回すぜ？」

「え……!? そ、そうなのか!? そ、そんな風に思ってたのか私を……」

「そうさ。俺達は無責任で、無価値で、無関係だとしてもトモダチは大事だからな」

少なくともトモダチとはあの二人に対して思った試しは無いけどゼノヴィアは違々とハッキリ言ったイツセーにこれでもかと素直に喜ぶ訳だが、ハッキリ拒否された方は何故そこまですると思うレベルで取り乱し、二人の前へと回り込んできた。

「ま、待つてくさいよ……！ 何で私達はダメなんですか！ 別に利用するだなんて考えだつてないのに！」

「羨ましく思うことがそんなにいけないのですか!？」

「お、おいキミ達、いい加減しつこくないか？ イッセーの言うとおり、キミ達にはキミ達を案じる肉親が——」

「あんなのは肉親なんかじゃない!!」

「認められてるアナタにはわからないでしょうね!!」

「う……」

そのしつこさにゼノヴィアが注意しようとするも、地雷を踏まれた二人は激昂をして食って掛かってきた。

そのあまりの剣幕に、メンタルが凄まじく弱くなって泣き虫になっていたゼノヴィアは涙目にまたしてもなってしまう。

「今度はゼノヴィアさんに八つ当たりかよ。はあ……まったく……」

だがそれを前にイッセーはゼノヴィアから離れて彼女を庇うように二人の前に立つと……。

「……………マジでウザいよ」

その精神性を一気に剥き出しにした。

「うっ!？」

胃の中を引きずり出されたかのような嫌悪感。

吐き気すら催す強烈なナニか。

久しく前にしなかつたイツセーの全開状態の過負荷を前に、小猫と朱乃は口許を押さえながら後退りしてしまう。

「そんなに救われたいならウチの兄でも頼りなさいって何度言わせるのかなあ? 俺達はボランティア団体なんかじゃないんだしさ」

「お、おいイツセー……? 急に二人が具合悪そうにしてるけど、大丈夫なのか?」

その両手に巨大な釘と杭を持ち、ゆっくりと後退りする二人へと近づくとイツセーに、ゼノヴィアは特に怖がる事なく、逆に気分を悪そうにして二人を心配している。

これこそが二人とゼノヴィアの差であり、イツセーも思わず笑ってしまう。

「ふふ、ほらね。この子とキミ達の差だよこれが。」

確かに自分の不幸を泣く事は多いけど、キミ達は不幸を不幸のまま単に嘆いてるだけじゃないか。

そんなんじゃないや永遠に俺達の事なんか理解できやしない」

不幸を嘆いて誰かに励まして欲しいなら、他所で好きなだけしたら良い。

自分達は不幸を前にヘラヘラと笑ってやるだけなのだから……。

「でもある意味レアだよキミ達も。」

こんなな気が合う気がしない相手はお兄ちゃん以来だもの」

「そ、そんな……」

「どうして私達がダメなんですか……」

「そんなの永久にキミ達にはわからないよ。言つたら、住む世界が違うし、踏み込まれても迷惑しか持ってこないだろキミ達は？ そんなのはごめんなんだよ。」

俺達はその日をバカみたいにダラダラしながら生きていければそれでいいんだから」

だから否定する。

それが幻実逃否。それが彼の螺子曲げられた精神。

「行こうぜゼノヴィアさん、トツポが食いたいぜ」

「あの二人は良いのか……？ 全身がお前の投げた釘と杭で針ネズミみたいになつてしまつてるけど……」

「大丈夫だよ、勝手に消えるからその内」

存在せし現実を否定し、ねじ曲げるマイナス。

忘れられぬ安堵をどうしても求めて

イツセーという『終わつてる』人間がソーナを始めとした多くの者達を『終わらせた』のを見てきた誠八は、あのヴァルキリーのロスヴァイセが『終わってしまった』という所まで墜ちてしまったのは理解してしまった。

敵も味方も関係なく、無差別に台無しにしてしまう様はまさにイツセーそのものであり、誠八自身もオーデインを襲撃してきたロキとフェンリルとの戦闘中に大火傷を負わされたのだから嫌でも理解させられてしまう。

その傷も今は癒えたし、修学旅行にも間に合う訳だが、相変わらずその気持ち悪さを日増しに増幅させながら仲間を作り上げていくイツセーには一種の恐怖があった。

「それで、アナタ達はまだセーヤの弟君達に拘っているの？」

「……………」

リアスもその傷を癒し、何とか束の間の平和を過ごせる事にはなったが、そのリアスも遂にはイツセー達の持つ異様さがまともじゃないと思いはじめてきたらしい。

一足早く動いていた朱乃と小猫が未だ彼等に対して何かを求めている事について、とうとう直接咎め始めたのだ。

「彼には嫌がられてるのでしよう？ ならばソツとしてあげなさい。

私達と彼等は立場が違うし、生き方も違うのよ」

「……」

「そうだ。」

救われると言っているけど、それは幻想でしかない」

漸くまともな感性を持つてくれたと、誠八はリアスに対して一種の好意を抱きながらリアスに同意しつつ無言の二人に対しての説得をする。

それは勿論、同じ様にイツセー達が異様だと解ってるアーシアや祐斗も頷いている。ただ、まだギヤスパードだけはイツセー達と直接相対していないのでイマイチわかってないが、その内理解してくれるだろう。

「確かに弟君と深く関わったソーナは変わったわ。

それも決して良くはない方向にね。それがセーヤの言うとおり、弟君の影響によるも

のだとするなら、私はアナタ達に彼に対して関わる事を反対するわ。

あまりにも危険だから」

「……………」

後はこの二人を止めれば安心する。

最早あそこまでどうしようも無くなつた弟とは関わらなければ良い。

余計な真似さえさせなければ、家を出ていった今関わる頻度も多くは無くなりつつあるのだ。

「……………」

何かに対するショックなのか、虚な目で聞いているのか聞いてないのかもわからない無表情で下を向く二人さえ止められれば……。

誠八の決意はまだ強かつた。

「……………」

二人の精神が、求める相手からの完全なる拒絶により、その均衡を崩してしまっていることを知らず……。

「何が足りないのかしら私達は……」

「……………」

リアスや誠八達の『慈愛』ある説得から解放された朱乃と小猫の心はまるで晴れやしないまま、最近すっかり二人で行動する事が多くなり、今も旧校舎からこつそり抜け出し、人気のない裏道を徘徊しながら、イツセーに言われた『足りなさ』を考えていた。

お察しの通り、この二人はリアスと誠八の説得に対して理解はしているけど諦められてない面が強かった。

故にイツセーに言われた足りない部分をこうして二人で考える訳だが、朱乃も小猫もそろそろ時間がなくなりつつあった。

「誰かが余計な事を言ったせいで、あの男が接触しようとする頻度が多くなってしまったわ……」

「私も同じです、姉が頻繁に……」

「このままだと周りに流されてあんな男と和解させられてしまう……」

「私もあの姉と周りに言われて和解しないといけない流れにされてしまうかも……」

朱乃は父であるバラキエルの接触……つまり話し合いがしたいという話が多くなり、小猫はテロ組織の構成員化している姉の黒歌から何度も拉致られそうになったりと、其々に時間がなくなりつつあったのだ。

「いくぜ！ 落○ぼりの振子打法——あぎゃ!? か、肩の骨が外れちまった！ いてててて!!!?」

「ああつ!? 大丈夫ですかアナタ!? 今入れてあげますよ!」

「アンタの投球が無駄に強すぎるのよ！ 手加減しないとイツセーくんが打てないでしようが!」

「私達と違つて身体が弱いし、そこは少し勉強すべきね」

「い、イツセーの腕がまさに振り子みたいになつてるぞ……」

「マジで貧弱すぎだろ……」

だからこそ彼等の仲間になって安心したい。

けれど彼等はそんな自分達に対して『無理』と言い放ち、仲間にはしてくれないし、先んじて知り合ってる自分よりもオーディンから解雇された元ヴァルキリーのロスヴァイセを受け入れていて、今も校庭で野球して肩を脱臼してのたうち回ってるという、とても『楽しそうな』マイナス組のやり取りを影からジーっと見ていた。

「あのヴァルキリーの人はあんなにすんなり仲間になってるのに……」

「あの人には足りてるんでしょう。」

先輩のいうなにかが

「でも、それならば明らかに普通にしか見えないゼノヴィアさんがどうして……？」
「それがわからないんですよね。」

余計に納得できないし……」

外れた肩を無理矢理ロスヴァイセに入れてもらってるイツセーを見てオロオロしているゼノヴィアに対して小猫が嫉妬めいた顔をする。

どうやら彼等の組内の二年は修学旅行に行かないらしく、二年の大半の生徒達は歓喜している。

「千代の○土さんばりに鍛えないとダメかなあ……俺」

「大丈夫よ、どんなに弱くてもイツセーが大好きだから、そんな疲れる事なんてしなくて良いわ」

「寧ろその弱さが興奮しますし？」

「チツ、アンタ達と意見が一致するのが悔しいわね」

「無理しても身体を壊してしまいかもしれないから、適度くらいが良いんじゃないか？」
「マイナスの時点で結果的に負けるからな。それに一般人が鍛えたところでたかが知れてるぞ」

なのに本人達はとても楽しそうだった。

あの輪に自分達も加われたらどれだけ良いのか。

過去の何もかもを忘れて、今を楽しく生きられたらどれだけ安心できるのか。

彼等にはそれがある。過去にどんな事があるうとも、彼等の間にはそんな隔たりは塵に等しきものなかもしれない。

「取り敢えず体育の授業はここまでにして教室に戻るぞ。お前達に話があるからな」

故に二人にとって彼等の輪はとても魅力的だった。

故に二人はマイナスを前にしても、どうしても諦められない面があった。

「教室に戻るみたいだわ」

「……教室の前までこつそり付いて行きませんか？」

「……中には入らないから文句も無いはずだし、やってみましょう」

だから二人はそれでも彼等の周りをうろろうろするのだ。

さて、肩を脱臼する騒動もあつたマイナス組式体育授業も終わって教室に戻るイッ
セー達。

最早当然の様にソーナもその一員ですとばかりに元のクラスには戻らずにマイナス
組の教室に居るのは……まあ、突っ込む必要はないだろう。

「なんだろうね、アザゼル先生の話って？」

「授業の変更とかかしら？」

そして椅子を横に並べ、その上に横になるイツセーを膝枕する。

後ろでじゃんけんにも負けたイリナがとても悔しそうにしているのはご愛敬だ。

「全員居るな? ……つて、お前らすぐそうやってイチャイチャするな。ちゃんと座れ」

「うー……」

「後で私もしてあげますかねっ?」

「いやそれは別に……」

そして教師役のアザゼルとロスヴァイセがやって来て、当たり前のようにイチャコラやつてる二人を注意しつつ、ロスヴァイセは身体を起こしたイツセーに対して返答無しに一回ハグをしながら耳打ちをする。

イリナに似てるようで変な所でちやつかりしてるのもだから、イリナも悔し混じりに後ろからイツセーに飛び付いたりする………的なり取りが挟みつつ、漸く全員が落ち着いて席に座った所で教壇に立つアザゼルが前置きもなく言った。

「二学年の修学旅行には出席しないという事になった訳だが、それじゃあ俺がつまらん

ので、このクラスだけで修学旅行をする事にした」

「「は？」」

「唐突ね……」

京都の修学旅行に出席しない代わりに、アザゼルがプレゼンしたオリジナル修学旅行をしようじゃないかという、最早決まってる話だ的な口ぶりの彼に対してイツセー達はてと首を傾げた。

「ロスヴァイセ、こいつ等にしおりを配れ」

「了解です」

指示をうけた副担任のロスヴァイセがソーナを含めたイツセー達全員に自作したらしいしおりを配る。

そこには『特別クラスが行く楽しすぎる修学旅行』——と書かれていた。

「お前達に行く気が無いというのには賛成したが、それじゃ俺が面白く無い。

従って俺達だけの、のんびり楽しくした修学旅行でもしようじゃねーかって事だ」

「えー？ 遠出とか嫌だ——」

「金は俺が全額負担するし、ソーナも三年の学年主任を説得してこの修学旅行に出席することを許可させてるが？」

「行く！ センパイが行くなら行く!!」

勿論、別に遠出の趣味は無いが、学年が違うソーナも行けると分かった途端、手の平を返したの如く隣に座ってたソーナに抱きつきながら行く気になるイツセー。

彼はソーナさえ居れば地獄にだろうが平然と行ける質らしい。

「話はわかったけど、どこに行く気なのよ？」

「本来の修学旅行は京都つてのは聞いてるだろ？ だからまず京都以外だな。」

日本神話の連中になんでも書状を届けるらしいし、悪魔側は」

「匙がその特使に選ばれ掛けたけど、兵藤君に押し付けてやったわね、この前そういはえ」

「そういう面倒な事がありそうだから京都以外……例えば沖縄とかあえての鹿児島。

もしくは王道に熱海辺りでのんびりつても悪くねえ」

「……それ、アナタが単に遊びたいだけじゃないの？」

酒が美味そうだぜ……と呟きながら行き先の例を出すアザゼルにイリナが突っ込むが、まさにその通りだった。

単純に立場も何も忘れて羽目を外したいのがアザゼルの目的なのだから。

「俺はどこでも良いツスけどねー」

センパイと一緒に時点でどこでも同じですから」

そしてイツセーはソーナも行くこと決まってる時点で行き先なんてどこでも良く、ソーナを膝に座らせて後ろからこれでもかと抱き締めながら楽しそうだった。

そんな状況に、ソーナはちよつと恥ずかしそうしながらも、時折ピクツと擦ったそうに身を動かしながら小さく嬌声が出てしまう。

「イツセー……流石に恥ずかしいから『そこ』に触れないで？　擦りたい——あつん♪」

「あ、ごめんセンパイ」

絶対的な自負があるのはこういう事があるからであり、別にロスヴァイセやイリナに

揉みくちやにイツセーがされてしまおうとも怒る事はしない。

「新婚旅行ですねアナタ♪」

こんな風に言うロスヴァイセの何時も通りつづりを耳にしても、イリナが負けじと襲つて来ようとも……。

「……………」

ただ、この仲間以外の誰かがイツセーにちよつかいを出してくる時は例外であり、教室の外で盗み聞きしてる、足りない二人組だったら本気で消してやるつもりではあるが。

クレーマー一誠

少なくとも、妙にしつこい姫島朱乃やら塔城小猫よりは受け入れられている。

すっかり涙腺が緩くなりやすくなってしまうていたゼノヴィアは安堵する訳だけど、それとは別にあの二人は少ししつこすぎやしないかとも思っていた。

相手にするのが心底めんどくさくて、ハッキリいつて鬱陶しいにも程があるとすら本人から言われているにも拘わらず、彼女達は何をトチ狂ってるのか、一誠達マイナスとカテゴライズされる者達に『救い』を見出だしている。

ゼノヴィア自身もデュランダールという存在そのものを一誠によって『否定』され、己の中に宿していた確かな自信を消し飛ばされてしまったがゆえに一時は救いを求めた事もあったが、彼女達との最大の違いは、救いを無意味に求めてはいけないものなのだと気付いた事だ。

だからゼノヴィアはマイナスのスキルを持ってないものの一誠達に受け入れられているのだ。

……まあ、ちよつとでも見捨てられると思ったりしたらメソメソと泣いてしまうのは変わらないが。

まあつまり何が言いたいのかと云うとだ……。

「正直言つて、本当に貴女方と関わるのだけはご勘弁願いたいと言いますか、お互いにとつてもその方が良いと思うんですよ？　ですけど、おたくの眷属さん二人があんまりにもしつこすぎて、今度は俺達の友達にまで絡み始めたとなれば一言くらい文句言つても悪くないと思うんです？」

「……………」

姫島朱乃と塔城小猫は本当にしつこすぎる。

その一言に尽きるのだ。

「兄が居たら話もできなさそうなんで、留守を見て訪ねさせて頂いた訳ですけど、本当になんとかありませんかね？　ゼノヴィアさんにまで絡まれて困ってるんですよ」

「それは私も何度も注意はしているつもりなのだけど……」

「注意されてるのにじゃあ何で来るんですかね？　いつそ縛り付けてしまつて欲しいですわね？」

「流石にそれはできないわ。けど必ず二人には止めさせる——」

「そう言った人が本当に止めさせた試しなんて俺無いと思うんですよね？」

塔城小猫と姫島朱乃の飽くなき過負荷達への執着は、そろそろ本人達もうんざりし始めていた。

それこそ無視していればどうにでもなっていたのだが、ここ最近では過負荷じゃないのに過負荷達から認められているという理由による嫉妬だかなんだかで、ゼノヴィアが絡まれ始めた。

他人に対しては結構泣かないどころか強気でもあるゼノヴィアだが、偶々それを見ていた一誠が友人が絡まれてると知れば一言文句を言いたくもなる訳で。

二人の主的位置に居るリアスに、誠八が留守の隙を見て直接物言いをしに来たのだ。

「勝手に来られて、その都度兄に変な誤解をされて勝手に逆恨みされても嫌なんですよそろそろ。」

関わるべきじゃないって本人も五月蠅いくらい言ってるのなら、貴女からも強制させてくれませんか？ 勝手に居座られて迷惑なんですよマジに」

「よく言っておくわ……」

だらけた日常。

無力な世渡り。

生ぬるい友情。

そんなスローガンを掲げてダラダラ生きてる一誠達にとつては朱乃と小猫の存在はまさに厄介なものしか寄越してこない存在そのものであり、己の不幸を許可もしてないのに他人と共有させて来ようとする姿勢が氣にくわないのと、誠八が日々神経質にキレて鬱陶しいというのもあるので、そろそろリアスに本気で制止させて貰いたい………と
いうのを、偶々居たゼノヴィアと一緒にオカルト研究部の部室に居たりアスを訪ねて直談判した一誠。

「じゃないとイリナちゃんかロスヴァイセさんがそろそろプッチンしちゃうんですよ」

心の枷をぶったぎる事で、凶悪な過負荷を完全覚醒させたロスヴァイセによつて大ケガまでさせられたリアスとしても、言われなくても二人には一誠達に近寄る事を禁止させているつもりではある。

「いくら言っても聞いてくれないのよ、あの二人が……」

「そこを聞かせるのが王様である貴女の役目ですよね？　ゼノヴィアさんがあの二人に色々と言われてるんですよ。さっさとやめさせてくれないと俺も黙ってる訳にはいかなくなりませよ？」

「わ、わかつているわ。」

必ず止めさせるから今日の所は……」

一誠達からの印象が凄く悪いらしい二人に、リアスは内心、『何をしてくれちゃったのよ……』と胃がキリキリと痛くなる。

そもそもあの二人を見ると、自分達の暗い過去を一誠達という存在を使って誤魔化そうとしているのはリアスも何となく感じていた事だった。

「本当に頼みますよ？　あの人たちが一々来る度に兄から嫌味をネチネチ言われるんですから」

「え、ええ……」

それは『逃げ』である事はわかっていたけど、指摘するのがリアスは怖いのだ。それまで形成してきた信頼関係が一気に崩壊してしまうかもしれないからと。

「行こうぜゼノヴィアさん」

「うん、わかった」

だから実の所リアスはそれ程強く二人に言えていない。

言うとは一誠に言ったものの、言える自信は無いのだ。

一誠が話している最中、売店で一誠に買って貰ったんだと、別に聞いても無いのに、子供みたいに自慢気な顔してもきゅもきゅと食べていたゼノヴィアの手を引きながら部屋から去っていくのを見送ったりリアスは、他に誰も居ない部屋に一人残り、大きいため息を吐くのだった。

「言いはしたけど、経験上すんなり要求が通るとは思えないんだよなあ……」

「じゃあ姫島朱乃と塔城小猫は絡んでくるのをやめないうことなのか？」

「俺を嫌ってるお兄さまの説得すらほぼ聞いてない感じからしても、そう思ってた方が
良いね。」

「いつそ二人を丸ごと否定——は、難しいかなまだ……」

旧校舎からの帰り道。

そろそろしつこいと本気で台無しにするかもしれないと言う一誠の堪忍袋が破裂するかしないかは、リアスに掛かっているのだ。

灰色な景色しか見ることができなかつたロスヴァイセの視界は、今も確かに見えるものの殆どが灰色のままだ。

だけど彼という存在だけは灰色ではない。

とてもひ弱で、とても最低で、とても終わっている。

なんて素敵な男性なのだろう。

これ以上に運命を感じた男性は他に居ないし、この先だつて無いのは間違いない。

だからこそロスヴァイセは彼を——一誠を旦那様とする事に決定した訳だが、どうやら自分よりも先に最低に最高な一誠に惹かれた女性は少なくないらしい。

イリナしかり——そして、一誠自身が大好きだと公言しているソーナ。

ゼノヴィアに関しては、寂しがり屋なだけなので問題は無いにしても、この二人に関してはロスヴァイセにも無視はできない存在だ。

が、正直ロスヴァイセは喧嘩して一誠の取り合いをするくらいなら、上手くその二人とも仲良くなって、まさに仲良く共有できれば良いという珍しい考えも持っていた。

「子供は二人欲しいかな？ うふふ、アナタの子供……うふふっ♪」

「あのねロスヴァイセさん？ 何度も言うけど、俺はもうセンパイと……」

「？ 知ってますよ？ だって昨日の夜だってソーナさんとお部屋で裸になって抱き合ってたのも知ってますし。」

ふふ、羨ましいくらい幸せそうな声までソーナさんは出していましたからね〜？」

「ならどうして……」

「決まってるじゃないですか。」

ソーナさんがアナタを大好きな様に、私だってアナタがとても大好きだからです。

アナタという男性を知った今、最早他の男性なんて幸せ者過ぎて近寄るだけで焼かれそうですもの。

だから私は余り物にされても全然構いません。アナタのお側にずっと居られるだけで不幸です……♪」

別に結婚の経験なんてないのに、変な人妻的な色気を醸し出しながら微笑むロスヴァ

イセに、一誠も微妙に言葉に困った。

旦那様にならなくても、不倫相手の都合の良い女にされても構わないからずつと傍に居るといふ、破滅にしかならない道を至極当たり前のように歩むと言われてしまえば、その爆発的に退化した性質の事もあり、それだけ本気なのがわかってしまうのだ。

「とういか、覗くのはよくないと思うけど」

「ふふん、今後の参考という奴ですよ」

「その今後つてのは来ないと思いたいんだけどな……」

ソーナ・シトリーは今が人生で最高に最低で、最低なる幸福の連続だ。

最初の出会いでは、自分の本質とまだ向き合えずに卑屈なだけだった一誠が少しずつ受け入れ、遂にはどこに出しても恥ずかしくない程に退化してみせた。

そして自分もまた、一誠と惹かれ合っていくにつれてその性質を退化させていき、互いが互いに、どんな姿でも本気好きなのかを確かめる為に顔面の皮を剥がしたり、ただの肉片だけになってみたりと、考えうるだけの本気の確かめ合いをし、本当の本気にお互いが大好きなんだと解り合えた。

こうなれば最早離れたりはしない。

例えば誰かが引き剥がそうとするなら、考えられるだけの手札を全て切つてソイツの全てを台無しにしてやる。

永遠に真実に到達させないという、真実を改竄してしまう一誠のスキルに似てるようで真逆で、運命の糸で結ばれたかの様な対となる性質を持つソーナは誰も止められないだろう。

『アナタはもう、どこにも向かうことは出来ない。』

特に——『真実』に到達することは決して無い。

でも考えようによつては、永遠に真実へと到達出来ない方が幸せなのよ？ まあ、仮に誰かに殺されたとしても、その殺された真実に到達できずに永久に殺され続ける現実となるかもしれないけど、ある意味不死身になれるのだから悪くないとは思うけどね？』

己からイツセーを引き剥がすという『真実』には決して到達させない。

一誠とこの先も永久に共にあり続けたいという想いによつて発現した彼女の過負荷は、悪魔でありながら過負荷という『勝てるマイナス』であるが故に発現してしまった

スキルなのかもしれない。

そして何よりも、彼女こそが一誠という過負荷を覚醒させた元凶なのかもしれない。燻らせていた本当の精神を少しずつ教え、共有する事で少しずつ腐らせていく。

周囲はソーナが変わり始めたのは一誠のせいだと思っているのかもしれないが、『真実』は逆。

彼女という存在が一誠を退化させていったのだ。

「まあ、聞かないでしようね。

あの二人が言つて聞くだけなら、こんなに苦勞なんてしなかつたもの」

お互いに最も近い過負荷。

同じく過負荷へと退化してしまったイリナやロスヴァイセも確かに近い者ではある。

だがここまでスキルの性質が酷似している者は血縁者ではないにも拘わらずあり得ないレベルであり、まさに『相性が良すぎて、小指が赤い糸で結ばれているペア』と言えるのはこの一誠とソーナだけだ。

「いい加減面倒なんだよね。」

お兄さんが一々目くじら立てて来るし、俺としてもあの二人に対してはなんも思っ
ちやいないし」

「ある意味であの二人も不幸よね。」

イツセーや私達に救いを感じてるだなんて」

「単なる自殺願望者なのかもしれないね」

イリナもロスヴァイセも一誠に惹かれている。

その気持ちはソーナ自身も持っている事なので一定の理解は示しているつもりだ。

だから普段一誠が二人に迫られてもムキになつたりはしないし、敢えて黙っている。

それは一誠自身が二人に常に言っている通り、どんな事があるうとも結局はソーナの
もとへと戻つてくるという自信と自負があるからだ。

そして何も言わない代わりに、二人となる時間の邪魔を決してさせないという取り決
めをしている。

それがまさに今この時であり、人間界で使つてる家のソーナの部屋で一誠と他愛の無
い話をしながら二人きりの時間を過ごしている。

「まあ、あの二人の事は正直本当にどうでも良いとして……。

ロスヴァイセさんが言ってたんだけど、めっちゃ声とか聞かれてたみたいだね俺達」
「防音にしてる筈だから覗いたりしてたのかしら？ 没頭し過ぎて周りが見えなくなるから気付かなかったわ」

「うん、俺もだよセンパイ。

それでどうしよう？ 多分また見られるかもしれないし、今日はお話するだけにします？」

邪魔さえしなければ、別に聞き耳を立ててようが見られていようがソーナにしてみれば知ったことではない。

一誠は気を使ってくれているようだけど、ソーナはといえばベッドに腰かけていたまま、手を伸ばし、目の前の床に直に座っていた一誠の手を取って立たせる。

「イツセーは嫌？」

少し、わざと不安そうな眼差しで見上げながらソーナが弱々しく訊ねる。

断る事はないとわかりきってる上でだが、ソーナとて甘えられるなら甘えたいのだ。

それほどに一誠の気質は自分にとってあまりにも心地よくて、安心できて、身を委ねられるのだから。

案の定、その表情と声色を前に一誠はソーナの眼鏡を外してあげながら、繋いでいた手を絡ませ、地味なパジャマ姿のソーナの身体を優しく押し倒し、額をくつつける。

「嫌じゃない。

ふふ、センパイにそんな顔と声で言われたら嫌だなんて、舌が捻じ切られても無理だぜ？」

最初に夜を共にした時から、もうソーナは自身が紛いなりにも純血悪魔であるからなんて冥界での風評なんて塵の様に投げ捨てている。

彼女が求めている異性に少なくとも悪魔やその他は存在しない。

その全てを兼ね備えてるのは、負ける事が運命付けられたこの人間の男の子ただ一人。

双子の兄に比べたら華奢な身体の全てに抱かれない。

絡ませた指をしっかりと握り合いながら、優しく何度も互いにキスをし、衣服のボタンを外すソーナ。

「……イリナとロスヴァイセさんに比べたらやっぱり足りないと思う?」

そして露になる胸元を見せながら、ソーナは一誠に自分より大きいイリナやロスヴァイセと比べてどうなのかと訊ねると、一誠は笑う。

「ただの物言わない肉片になったセンパイでも大好きなんだから、大きさとかどうでも良いよ」

ソーナという人格そのものに惹かれている時点で、他者との差異なんか無意味だとハッキリ断言する一誠は、優しく胸元に触れる。

ぴくんと冷たい指に触れられてくすぐったそうに身体が動くソーナがとても一誠には可愛く見え、優しく、もっと強く彼女の身体を抱き締めていく。

「もし子供ができちゃったら……ふふ、実家は太騒ぎになりそうだけど、別に良いわよね? 一誠が大好きなんだから、私は悪くない。」

自分の全てをさらけ出せる相手が居る。

真実に到達させないスキルを持つソーナにとって、誰にも邪魔させてなるものかという唯一ともいえる信念。

「真実から出た真の行動は、決して滅びはしない。

ふふ……好きよイツセー……何度でも、何時までも」

どんな残酷な現実になろうとも、生き残るのはこの世の真実。

未来永劫一誠と共に在り続けるという真実だけを見続けるソーナという少女は、真実をねじ曲げる少年と今日も繋がるのだ。

こそこそと部屋の入り口からこつちを見ては、たまに一人で慰めてるだろうお友だち達だろうとも、この時間だけは譲れない。

決して、何時までも……永久に。

「あ……も、もう、胸の事を聞いたからって、そんな赤ちゃんみたいにちゅーちゅーしないですよ……♪」

「あ、いやなんとなく……？俺は少なくともセンパイの胸も大好きだから」
「ふふ……ああ、もう本当に大好き♪」